

Alessandra Lukinovich
Madeleine Rousset

古典ギリシア語文法

水崎 博明 監訳
福岡西洋古典愛好会(主宰 水崎 博明)訳

ジュネーヴ大学文学部の支援による出版物

alle nostre due mamme
私たちの二人の母に捧げる (伊語)

Couverture: François Meyer, Grafix fondrie, Carouge
Composition et mise en page: AFH Micro-Edition, Genève
Adaptation et corrections des 2^e et 3^e éditions: atelier weidmann, Versoix

© 1989, 1994, 2002 Copyright by GEORG EDITEUR, Genève
Tous droits de reproduction, y compris par la photocopie, de traduction et d'adaptation réservés pour tous les pays.
ISBN 2-8257-0775-9

初版の緒言（1989）

一冊の古典ギリシア語文法書の作成を企てたのは1980年である。我々の目的は出来るだけ簡明な学習書を学生および初学者向けに作ることであった。我々の考えではギリシア語原典を直接に読むことが言語の機能の習得の導入的かつ漸進的学習の最善の基礎である（A. Hurst ユルスト, A. Lukinovich リュキノヴィク『古典ギリシア語：語学ラボのための演習』Grec ancien. Travaux pour le laboratoire de langues, Genève, SMAV, 3^e ed. 1988 参照）としても、しかしながら文法の本質的事項を体系化する副読本を用いることは有益であろう。

内容の取扱と配列とにおいて、本書は多くの点で今日フランス語圏の学生達によって用いられている類書と相違している。しかし本書では何が何でも新機軸を出そうと望んだわけではない。我々の主たる関心は文法上の諸概念の明晰と最新化との要求を充たすことだった。また繰り返し起こるある種の困難—それらは教育の場において教師がしばしば出会い、なにより、ラテン語文法に過度にとらわれた言語の解釈法をギリシア語にあてはめることに由来すると思われる—を直そうとした。それゆえ我々はギリシア語特有の構造に出来るだけ近いところにとどまろうと試みた。このようにして例えば、動詞の扱いにおいて、時制に対する語幹の優位を明らかにし、あるいは、統辞論の各章では、それに与えられる役割を節—補語節従属関係だけに限った。

我々は以下のおなじみの参考書に依拠した。すなわち主として Kühner-Blass キューナー＝ブラス、Kühner-Gerth キューナー＝ゲルトおよび Schwyzer シュヴィツェールらの今や古典的となった文法書、Liddell-Scott-Jones リッデル・スコット・ジョーンズおよび Bailly バイイの諸辞典、Jean Humbert ジャン・アンベールの『ギリシア語統辞論』*La Syntaxe grecque*、Pierre Chantraine ピエール・シャントレーヌと Albert Debrunner アルバート・ドブランネルとの歴史的形態論と諸々の語形成に関する諸研究、Michel Lejeune ミシェル・ルジュースの音声学およびアクセント法に関する研究である。最後に Eduard Bornemann エドゥアルト・ボルネマンと Ernst Risch エルンスト・リッシュの『ギリシア語文法』*Griechenische Grammatik* (Frankfurt, 1978) は我々にとっては貴重な道標であった。

文法書の初版は部分的に授業用プリントの形で1983年にスイス共和国およびジュネーヴ州国民教育省視聴覚担当部局の配慮によって出版された。それは1986年に改訂増補第二版に引き継がれた。これら二つの版のおかげで、数年間にわたり我々の教材を古典ギリシア語の中等学校教育および大学の古典ギリシア語入門の授業において、実地に経験することが出来たのだった。今回の版は完全な改訂であり統辞法に関して重要な数章を付け加えたものである。

Robert Godel ロベール・ゴデル教授に負う全てを語るのは困難である。彼についてはここにその思い出を感慨とともに呼び起こす。彼はこの仕事をその最初からよく見守り続けてくれたのであり、そして常に助言してくれたのだった。そのたびに彼の好意と細心の批評を見出したのだった。

Olivier Reverdin オリビエ・ルヴェルダン教授と André Hurst アンドレ・ユルスト教授は我々の企画を支持し支援してくれた。あらためてここに厚く御礼申し上げる。またアンドレ・ユルスト教授には常に草稿の様々な段階を注意深く閲読してくれたことで感謝の意を表明したい。我々が古典ギリシア語入門指導の諸問題に取り組んだのは教授のおかげである。というのも、言語ラボラトリーを用いた教授の教育法の仕上げに際して、私たちは協力者となる幸運に恵まれたからである。エルンスト・リッシュ教授は、最近に亡くなられたが、私たちのために語形成に関する貴重な指摘と批評を与えてくださった。我々は Alex Leukart アレックス・ルカールの比較文法学の講義を学生として聴講した。

彼はまたこの領域におけるその学識を我々に役立たせてくれたし、図書館での討論において、我々のためにしばしば展望を切り開いてくれた。Jean Rudhardt ジャン・リュダール教授と Ilse Leyvraz イルス・レヴラーズ女史は統辞論に関する数章を快く閲読し批評してくれた。最後に、統辞論的用語を決定しギリシア語の文章に関するまとめの章を仕上げることができたのは René Amacker ルネ・アマケールの数々の助言のおかげである。この仕事の多くの長所はこれらすべての支援に負っているとしても、なお依然として残っているかもしれない不正確さあるいは誤った概念は偏に我々に帰せられるところである。

ゲオルク Georg 社出版社長 Henri Weissenbach アンリ・ヴァイセンバッハ氏はきわめて早くから我々を信頼し、未だ現実のものではなかった教科書の出版計画を思い切って受け入れてくれた。このことは我々に大きな励ましであった。

ジュネーヴ大学文学部およびギリシア研究財団は本書出版にあたり快く助成金を拠出してくれた。

Evelyne Ramjoué エヴリーヌ・ラミジュエ嬢は草稿の大部分のワードプロセッサーへの打ち込みの殆どを引受けてくれた：彼女はこの細かく厄介な仕事を優れた能力でやり遂げてくれた。ふさわしいコンピュータ探しが解決したのは友人のギリシア学者、ギリシア人あるいはギリシア愛好家である Terpsi テルプシおよび Urs Birchler-Argyrou ウルス・ビルシュレール＝アルジルー、Hermina エルミナおよび André-Haefliger アンドレ＝エフリジュール諸氏のお陰である。彼らはその機器を自由に使用してくれ、また私たちを温かくもてなしてくれた。更に Gustave Moeckli ギュスターヴ・メックリ氏の支援によりジュネーヴ大学情報センターおよび情報部のコンピューターを利用することができた。これらの研究所の各責任者に厚く感謝する。また、技術者 Jean-François L'Haire ジャン＝フランソワ・レール氏の親切な援助に感謝する。

本組の美しいページ組みに関しては AFH Micro Edition (secteur professionnel de l'Association Foyer-Handicap employant des personnes handicapées physiques 身体障害者雇用協会職業部門) 責任者 Hans Weidmann ハンス・ヴェドマン氏ならびに職員 Jean Zeender ジャン・ゼンデル氏のおかげである。友である芸術家の Stéphane Brunner ステファーン・ブルンネールは表紙装丁を快く引き受けてくれた。また、イルス・レヴラーズ女史、Anne-France Morand アンヌ＝フランス・モラン女史にも感謝する。彼女らは親切に忍耐強く校正刷を読み直してくれた。

ここで意見や批評をよせてくれた同僚、大学生、中学校および高等学校の生徒のこと、そして同僚の中でも、まだ暫定的な形しかもなたなかったこの教科書を採用してくれた人々を忘れることは出来ない。

最後に、我々を支えてくれた身近な人々の支援なしにはこの仕事はよい結果にならなかったであろう、長期間にわたる集中的作業を支持してくれたことに感謝しきれないほどである。

Alessandra Lukinovich アレッサンドラ・リュキノヴィク、Madeleine Rousset マドレーヌ・ルーセ
ジュネーヴにて、1988 年秋

第二版によせて

この版は全体的に読み返され、改定された。基本的な重要な改定が特に音声論と語形成の章においてなされた。他は、提示の明快さおよび使い勝手にかかわる推敲である。

Franco Montanari フランコ・モンタナリ教授、友なる Annna Santoni アンナ・サントーニ、同じく Luca Carmignani リュカ・カルミナーニに感謝したい。彼らは我々の文法書のイタリア語版に尽力してくれた。イタリア語版は1990-1992年に準備され、1993年トリノのLoescher レスカー社より公になった。この翻案を機会に、我々は見直しの仕事を行い、彼らの提案したきわめて適切で有益な改善を参考にすることが出来た。我々はその一部をこのフランス語版の主として冒頭の数章において取り入れた。改訂のガイドラインに関しては、それは Wolfgang Kastner ヴォルフガング・カストネール教授の『ギリシア語文法への言語歴史学的解釈』*Sprachgeschichtliche Erläuterungen zur griechischen Grammatik*（フランクフルト、1988年）ならびにカストネール氏が『スイス古典文献学会紀要』*Bulletin de l'Association Suisse des philologues classiques*、第34号、1989年、pp. 27-30中に公表した本書批評によって与えられた。教授に厚く感謝する。

またルネ・アマケールにも感謝する。彼はすべてを忍耐強く読み直した貴重な指摘を与えてくれた。我々は同様に Claude Calame クロード・カラム教授および1990年ローザンヌ大学主催の古典語教授法に関する言語学会参加者のさまざまな示唆と、さらに友なるアレックス・ルカール、Daniele Gambarara ダニエル・ガンバララの鋭い指摘と提案とを利用することが出来た。教職にある同僚たちの、そしてまた学生たちの批評はこの版でもまたきわめて有用で不可欠でさえあった。

最後に、ページ組みに当たり、ハンス・ヴェドマン氏の献身的な仕事はこの第二版でもまた本書の教育的質に非常に寄与し、彼のことを共著者のように考えたいほどである。

A.L., M.R.

ジュネーヴにて、1994年夏

第三版によせて

この第三版は第二版に若干の些細な改訂を加えた。我々はその一部を Antje Kolde アンティエ・コルドの精力的講義とジュネーヴ大学文学部のギリシア語の学生たちの注意ぶかい読みに負っているのである。新しい版はアレッサンドラ・リュキノヴィクにより起草された新約聖書ギリシア語の主な特徴を記載する補足で満たされている。

1995年、本書『古典ギリシア語文法』*la Grammaire de grec ancien* はジュネーヴ大学のシャルル・バリー Charles Bally 賞の榮譽を得た。

A.L., M.R.

ジュネーヴにて、2001-2002年冬

(訳注：人名についてはフランス語でならこのような発音であろうという記載を行ったが、ジュネーヴ辺りが民族の十字路であり、一種の雑居文化（あるいはコスモポリット）の地であることから、あるいは訂正が必要かもしれない。)

訳者端書き

この度、私ども「福岡西洋古典愛好会」一同でジュネーヴ大学で新約聖書の講義を講じておられるアレクサンドラ・ルキノヴィク女史の手になるジュネーヴ大学文学部の支援によって出版された『古典ギリシア語文法』(Grammaire de GREC ANCIENNE)の翻訳を試みました。それによって広く我が国において古代ギリシア古典を直に元の言葉で読んで見たいという志を持っている方々の古典ギリシア語の学習の便宜に供したかったからです。それと言うのも、今日我が国における古典ギリシア語学習の一般的な趨勢は恐らく彼の『ギリシア語入門』(田中美知太郎・松平千秋、岩波全書)によって一応古典ギリシア語を読むことが出来るところまで導かれ、何かより本格的な文法的理解が必要と思われるような時には例えばH・W・スマイスの『GREEK GRAMMAR』によってそれを得るところかとも思われますが、両書間の開きは大で、私どもは両書の何か中間にあって前者によって一応ギリシア原典を読めるようにはなったが原典の含蓄を深く読みこなしたいというそんな所謂 advanced grammar の要求を求め始めた若い古典学徒の要求に適切に応ずるものの必要を、長い間思っていたからです。煩を厭わず後者の文法書を紐解きさえすれば古典ギリシア文法の正確で深い知見はなるほど得られは致しますが、それは簡便というよりはむしろ何か文法の百科全書的な大部の全体であり、原典をより深く味読すべき文章法的な知見を簡便かつ集中的に practical に提供してはくれない憾みはあるとされることでしょう。私どもの本書の訳出の試みはまさにこうした意味合いにおいて試みられました。本文法書を現にお使い下さった方々には、きっと成程と合点して戴けることでしょう。

文章法的記述の実践的な知見の提供という右に述べた一大メリットになおもう一つその長所を加えれば「新約聖書」のギリシア語文法への簡潔な案内でしょうか。コイナーがアッティカ方言に由来するところなどから殊更特殊で別種の文法が提供されているわけではありませんが、それでもそれらとして教えられることはそれなりに有益でしょうか。

付記すれば、著者の引用文献はアッティカの文献のみに限られ叙事詩・抒情詩作家たちは特徴的に省かれています。

なお本書を作るに当たっては

- 一、訳出された原書の版組・レイアウトその他原書の持っているあり方を殆んどそのままに踏襲して、原書の持つ、例えば動詞の活用表等が見開きで一望の下に見て取ることの出来るようにレイアウトされている著者の巧みな工夫などを、そのままに生かすことを尊重しました。
- 二、言うまでもないことですが、それ故、翻訳書として止むなく具備すべき訳者端書き・訳者後書き・邦文索引などを除き不要なものは一切付加せず、ただ原書だけが最大に光彩を放つよう私どもは努力致しました。
- 三、しかしながら、原著にはなかったものですが、原著の記述に対応するスマイスの上記文法書のセクション番号を参考までに付けておきました。
- 四、引用文の訳出にあたっては原著者の仏訳もさることながら、むしろギリシア語原文の直接の訳を心がけました。
- 五、原著のセクション5において、我々の判断するところ原著者のミスかと思われるところがあったので、そこを訂正しました。すなわち、§ 5 → § 30、またその一行下 § 5 → § 100

目 次

序文

序論 1

文字法と音声学 3

文字法と読み 3

アルファベット 3

音の分類：母音、子音、半母音、二重母音 4

アクセントと氣息記号 7

句読法 7

音韻現象 8

$\bar{\alpha}$ の η への変形 8

母音の約音 8

縮音 9

エリジオン（母音字省略） 10

頭音節省略 10

定量的音位転換 10

子音の会合：同化、異化、子音の脱落および補充的延長 10

閉鎖音の他の子音との会合を形として示す諸現象の要点 12

digamma および yod の消滅 12

歯擦音 13

帯気化；帯気音の異化（グラスマンの法則） 14

アクセント付与のいくつかの一般原則 14

屈曲におけるアクセントの変異 15

重アクセント 16

前倚 16

後倚 16

エリジオン（母音字省略）によるアクセント付与の諸特徴 17

語根、語基、語幹、屈曲語尾 18

母音交替 19

名詞的諸要素 21

名詞的屈曲または曲用：一般的事項 21

冠詞 22

冠詞の用法 22

名詞および形容詞 24

-ο に終る名詞の曲用 24

約音名詞 25

アッティカ曲用 25

-α に終る名詞の曲用	26
女性名詞	26
男性名詞	28
約音名詞	29
-ο/-ᾱ に終わる形容詞	29
約音形容詞	30
アッティカ曲用	31
形容詞 μέγας および πολύς	31
第三曲用	32
第三曲用活用語尾表	32
閉鎖音語幹：喉音、唇音、単純歯音および -ντ 語幹	33
流音語幹：πατήρ, μήτηρ, θυγάτηρ, γαστήρ, ἀνήρ の曲用	37
鼻音語幹	39
-σ 語幹	40
母音交替を伴う -ι 語幹	42
-ευ および -υ 語幹。特殊例：βούς, ναῦς, Ζεὺς	43
その他の -υ 語幹	46
-οι および -ω 語幹	46
第三曲用形容詞の要約	47
副詞	48
-ως に終わる仕方の副詞	48
その他の副詞形成	48
副詞的語句	49
形容詞および副詞の比較の度合い	50
形容詞の比較級および最上級：-τερος, -τέρα, -τερον/-τατος, -τάτη, -τατον および	
-ίων[ι], -ίων/-ιστος, -ίστη, -ιστον	50
副詞の比較級と最上級	52
比較級の 2 番目の語	53
比較級使用に関する注意	53
代名詞	54
指示代名詞	54
οὗτος, αὐτή, τοῦτο	54
ὅδε, ἦδε, τόδε	54
ἐκεῖνος, ἐκεῖνη, ἐκεῖνο	55
限定詞 αὐτός, αὐτή, αὐτό	55
人稱代名詞	56
再帰代名詞	57
所有表現における代名詞要素の用法：所有限定辞、人稱代名詞の属格	58
相互代名詞：ἀλλήλους, ἀλλήλας, ἄλληλα	59
関係代名詞、疑問代名詞および不定代名詞	59
関係代名詞	59
τίς/τις: 疑問 / 不定	60
ὅστις, ἧτις, ὅτι: 不定関係代名詞または間接疑問代名詞	60
質・量・択一の疑問・不定・関係および指示詞対応表	61
場所・仕方および時間の疑問・不定・関係および指示副詞の対応表	63

関係節に関する統辞論的注意	64
直接および間接疑問文節の統辞論的注意	66
数詞	68
曲用における双数	70

動詞 73

動詞活用および非活用形：一般論	73
曲折語尾：人称、数、相；一次曲折語尾および二次曲折語尾	73
語幹	75
時制	76
法	77
不定法	77
動詞の形容詞形：分詞、動詞的形容詞	77
行為者の補語	79
人称曲折語尾表：曲折語尾および語尾	79
現在	81
現在幹：その展開における動作	81
現在の動詞活用：-ωに終わる動詞活用および-μιに終わる動詞活用	81
現在の動詞活用に関する注記。接続法・希求法・不定法および分詞の語尾	85
未完了過去	86
加音	87
未完了過去の動詞活用	88
約音動詞	88
-έωに終わる動詞	89
-άωに終わる動詞	90
-όωに終わる動詞	91
動詞 δίδωμι, τίθημι, ἵημι, ἴστημι の現在	92
他の特別な動詞	95
φημί, 言う	95
εἶμι, ~である (être 動詞)、現在および未来；-χρή, ~しなければならない	96
εἶμι, 行く	97
κάθημαι, 座る, κείμαι, 横たわる	98
未来	99
シグマを介在させた未来	99
接尾辞 -σ と語基最後との会合	99
シグマを介在させた未来の動詞活用	101
約音未来	101
未来の意味の現在	103
完了幹の上に形成された未来	103
アオリスト	104
アオリスト幹：限定のない動作	104
アオリスト I またはシグマを介在させるアオリスト	105
シグマを介在しないアオリスト I	105
アオリスト I またはシグマを介在させるアオリストの動詞活用	106

アオリストⅡまたは幹アオリスト	107
アオリストⅡのリスト	109
語基アオリスト	110
語基アオリストのリスト	112
動詞 δίδωμι, τίθημι, ἵημι, ἴσθημι のアオリスト	112
受動相, アオリストおよび未来	115
受動相, アオリストⅠおよび未来Ⅰ	116
受動相, アオリストⅡおよび未来Ⅱ	118
受動相, アオリストⅡのリスト	118
完了	119
完了幹: 動作の結果	119
畳音	119
能動相の完了Ⅰおよび過去完了Ⅰ	120
能動相の完了Ⅱおよび過去完了Ⅱ	122
能動相完了Ⅱリスト	123
混合完了	124
完了 οἶδα, 知っている	125
中・受動相の完了および過去完了	125
動詞活用における双数	129
動詞の諸クラス	130
現在語幹から語基へ	130
1. 語基現在	130
2. 交替語基の現在語基	131
3. 鼻音接尾辞の現在幹	132
4. -(i)σκω に終わる現在幹	133
5. 畳音の現在幹	133
現在幹形成に従って分類された動詞リスト	134
1. 現在語基動詞	134
2. 語基交替によって特徴づけられる現在幹動詞	138
3. 鼻音接尾辞によって特徴づけられる現在幹動詞	141
4. -(i)σκω 動詞現在幹	143
5. 畳音によって特徴づけられる現在幹動詞	143
6. その語幹が異なる語基上に形成される動詞	144
παιδεύω 動詞活用復習要約表	146
分詞曲用の復習要約表	149
語形成における派生と複合	153
派生語の主な範疇	153
名詞	154
行為者と機能の名詞、道具の名詞	154
行動、抽象的実在、行動の結果を示す名詞	156
性質によって、あるいは付属の関係によって特徴付けられる人や事柄を示す名詞	157
縮小辞	158

形容詞	158
動詞	159
複合語の主な範疇	160
二語基の複合語	160
接頭辞または動詞接頭辞を伴う複合語	161
文	163
言表、主語と述語	163
状況補語的言表、超時制的言表	164
主語と補語	165
名詞限定辞。形容語の位置	165
同格限定辞、同格	166
補語節および関係節	167
並置法	167
名詞化	168
文に関する諸注	168
動詞の主語との一致	168
属詞：属詞機能の形容詞あるいは分詞の一致；属詞機能の名詞	170
名詞の限定辞：位置；名詞を限定する形容詞および分詞の一致	171
語順	173
並置法：小辞と接続詞	175
省略	175
格の統辞法	177
格の主な用法の一覧表	179
格の主な用法例	180
主格	180
1. 主語；主語の属性；同格化された限定辞と主語の同格	180
2. 文外の主格	180
3. 感嘆と呼びかけの主格	181
対格	181
1. 直接目的補語；同格化された限定辞と対格に置かれた同格；対格におかれた属詞	181
2. 内的目的語の対格	182
3. 特別化の対格（ギリシア対格）	183
4. 対格におかれた二つの補語を持つ動詞	183
5. 不定法構文における対格に置かれた主語	184
6. ὡς と続く対格に置かれた分詞の言い回し	184
7. 対格におかれた感嘆の言い回し	184
8. 方向の対格	185

9. 拡がりと持続の対格	185
10. 副詞的対格	185
属格	186
1. 連体詞的属格	186
2. 材料の属格	187
3. 中身の属格	187
4. 評価の属格：単位、価格	187
5. 心情評価の動詞を伴う原因の属格	188
6. 違反と罰の表現	188
7. そこから部分を分離する全体を示す部分属格	189
8. 前置詞または場所の副詞を伴う非奪格的属格	190
9. 広義の部分型の属格を支配する動詞と形容詞の範疇：接触の動詞、願望と企図の動詞、 気遣いの動詞と形容詞、感覚的・知的知覚の動詞・形容詞、命令または優越性の動詞 および形容詞	191
10. 時間の属格	193
11. 絶対属格	193
12. 感嘆文中の属格	193
13. 奪格的属格：由来・分離	194
14. 行為者の補語の属格	195
15. 比較の属格	195
与格	195
1. 動詞の行動への関わり：宛人と関与する人；帰属（所有）	196
2. 随伴と関連の与格：類似性・同等性・同一性	197
3. 仕方の与格	198
4. 道具の与格	199
5. 処格的与格：空間、時間	199
呼格	200
前置詞および動詞接頭辞	201
動詞接頭辞の助けによる複合動詞	201
動詞接頭辞としても用いられる前置詞リスト	202
動詞接頭辞として用いられない主な前置詞のリスト	216
前置詞の要約復習表（主な用法）	217
時間の表現：要約復習	218
法の統辞法	221
法・語幹・時制	221
実現性の度合い。実現的・非実現的・可能的・蓋然的として与えられる	
言表小辞 $\check{\alpha}v$	222
否定	223
法の主な用法の一覧表	225
法の主な使用例	226
直説法	226
1. 実現性の陳述	226
2. 非実現性の陳述： $\check{\alpha}v$ を伴う直説法二次時制	226

3. 後悔の陳述：二次時制が後続する εἰ γάρ または εἶθε 227
4. 過去における事柄の繰り返し（特に主節の中で）：ἄν を伴う未完了過去（時にアオリスト） 227
5. 直説法時制用法の特別な場合：歴史的現在、格言のアオリスト、すぐの反応のアオリスト、目的-帰結の価値の未来 228

希求法 229

1. 願望の陳述 229
2. 可能性（可能法）の陳述：ἄν を伴う希求法 229
3. 斜希求法 229
4. 希求法の牽引 230

接続法 231

1. 熟慮の接続法 231
 2. 勸奨・禁止 231
 3. ἄν を伴う接続法におかれた補語節 231
 4. 目的：目的節 232
 5. 恐れ動詞に依存する節：接続法を伴う μή 233
- #### 命令法 233

不定法の統辞法 235

不定法の主な用法例 236

1. 不定法における語幹の意味 236
2. 不定法と名詞化された不定法構文 236
3. 動詞に依存する不定法または不定法構文：命令・意志・率先・願望を表現する動詞；能力または訓練を示す動詞；語りと見解の動詞 237
4. 不定法または不定法構文を支配する非人称の言回し 240
5. 目的の意味の不定法 241
6. 不定法を伴う形容詞 241
7. 結果の不定法 241
8. πρίν の後の不定法 242
9. 不定法用法の特別な場合 242

分詞の統辞法 243

分詞の主な用法例 243

1. 分詞における語幹の意味 243
2. 名詞を限定する分詞および名詞化された分詞 244
3. 属詞機能の分詞 245
4. 同格におかれた分詞および状況補語的意味：時間的意味、原因的意味、目的の意味、仮定的意味、譲歩または反意の意味；手段と仕方；ὡς または ὡσπερ が先行する同格分詞 245

- 5. 主語または補語に同格の分詞から伴われる動詞：存在様式・感情または状態の動詞；
 感覺的なあるいは知性的な知覚の動詞 247
- 6. 絶対属格 249
- 7. 必然・適合または可能性を示す中性単数の分詞 250

小辞および接続詞 252

- 主要な小辞および接続詞の—その用例をともなった—アルファベット順のリスト 252
- 独立節における諸々の法と諸々の否定の要約復習表 272
- 補語節・不定法および分詞構文とそれらの否定の要約復習表 273

アルファベット順に分類された主要動詞リスト 275

新約聖書のギリシア語 288

ギリシア語索引 300

邦用語索引 308

仏用語索引 322

引用された著者および作品の略号リスト 337

序 論

ヨーロッパ諸言語の大部分がそうであるように、ギリシア語はインド・ヨーロッパ語族に属している。人はヨーロッパ・近東・インドを包括する地域で話される言語グループをこのように名付けるのであるが、それらは（とりわけ、これら諸言語の古代の段階へ遡るとすれば）音声論的、形態的かつ語彙的親近性を有しているので、「インド・ヨーロッパ語」とも呼ばれる共通の核から派生するという仮説を立てることが可能である。

我々が知るギリシア語で書かれた最初の証拠は、紀元前第二ミレニウムの後半期へと遡る。それは主としてペロポネーソス半島とクレター島とで発見された諸々の粘土の板であって、それらは音節的な文字—線文字Bと呼ばれる—（即ち、音節文字、各々一つの音節を表記する記号から構成されたものである）で刻まれたテキストを持つものである。この文字の解読は1952年になされた。二人の英国人 M. Ventris ヴェントリスと J. Chadwick チャドウィックの業績であった。考古学上の術語の言語学の領域への拡張によって、これら粘土板のギリシア語はミュケーナイ語と呼ばれるにいたった。それはペロポネーソス半島の城砦でありこの時期（これまたミュケーナイ時代と呼ばれる）の文明の主要な中心地の一つであった都市の名前に由来する。

ギリシア人たちもとでアルファベット文字の使用が確認されるのは、紀元前8世紀以降になって過ぎない。これはフェニキアのアルファベットから派生し、ギリシア語の音声論的な様々の必要に順応させられた文字体系である。

ギリシア文明の発達には、様々の時期が区別される：

- アルカイック期 紀元前8世紀からペルシア戦役（紀元前5世紀初頭）まで
- 古典期 紀元前5 – 紀元前4世紀
- ヘレニズム期 アレクサンドロス大王の死（紀元前323年）からローマ（人）
のエジプト征服（紀元前30年）まで
- ローマ期または帝国期 ユスティニアヌス帝によるアテーナイの哲学学校の閉鎖（紀元
529年）まで
- ビザンチン期 コンスタンティノーブル陥落（紀元1453年）まで
- 近代期

古典ギリシア語の習得は古典期にアテーナイそしてアッティカ地方で用いられた文学的言語に基づく。それ故本質的にアッティカ方言が問題である。実際には、地方地方によって人々は様々な方言を話し書いていたのであるが、それらは五つのグループに分かれる。即ち、イオーニア方言（アッティカ方言はこれと緊密な関係にある）、ドーリス方言、アイオリス方言、北西方言、そしてアルカディア・キュプロス方言である。

ヘレニズム期になるとギリシア語は統一されながら「コイナー方言」、あるいは単に「コイナー」(共通語)と呼ばれるようになった。その基礎はアッティカ方言(あるいはイオーニア・アッティカ方言)であり、それは地中海の東方海域全体に広まったのだった。この言語は本質的に(多少の変容は伴うものの)、書記言語また文化言語として、ビザンチン帝国の公式言語として残ることとなった。しかし並行して、よりダイナミックでより深い変化の過程の中で、デーモティケー(通俗の、現代の発音でディモティキ)と呼ばれる日常に使用される言語が発展した。そしてそれは次第に近代ギリシアの国語として確立されていった。ミュケーナイ期と今日との間に過ぎていった世紀の数を考慮してみるならば、ギリシア語は最も長期に渡って確認されたインド・ヨーロッパ語なのだということが認められるはずである。

古代のギリシア語は古代において書かれた様々の記録によって知られる、それらは石碑、様々の物品、巻物や古写本(パピルスや羊皮紙の)の断片上の記載を通して、またビザンチン期の写本類によって我々に伝わっている。一般に、我々の有する欠けるところのない大部分の文献類はむしろ伝承によって、ビザンチン期の写本類を通して伝わったのである。

文字法と音声論

文字法と読み

1 アルファベット

[1]

ギリシア語のアルファベットは24文字からなる：

小文字	大文字	音価	名	
α	A	a	alpha	アルファ、アルパ
β	B	b	bêta	ベータ
γ	Γ	g	gamma	ガムマ
δ	Δ	d	delta	デルタ
ε	E	e	epsilon	エ プシロン
ζ	Z	z	zêta	ゼータ
η	H	e (長)	êta	エータ
θ	Θ	th	thêta	テータ
ι	I	i	iota	イオータ
κ	K	k	kappa	カッパ
λ	Λ	l	lambda	ラムダ
μ	M	m	mu	ミュー
ν	N	n	nu	ニュー
ξ	Ξ	x	xi	クシー
ο	O	o	omicron	オ ミクロン
π	Π	p	pi	ピー
ρ	P	r, rh	rhô	ロー
σ, ς	Σ	s	sigma	シグマ
τ	T	t	tau	タウ
υ	Υ	u	upsilon	ユー プシロン
φ	Φ	ph	phi	フィー、フェー
χ	X	ch, kh	khi	キー、クヒー
ψ	Ψ	ps	psi	プシー
ω	Ω	o (長)	omega	オー メガ

シグマは語の中ではσと書かれ、語末ではςと書かれる。同様にcと書かれる事もあるが、この記号は、月形のシグマと呼ばれ、語末でも語中に等しく使用される。

例：σεισμός または ςεισμός

ギリシア語のアルファベットは前8世紀以降その使用が確認されるのだが、それはフェニキアの子音文字体系の採用から生じたものなのである。それは諸地域と諸時代において数多くの変異体を見ている。現行の文字法は、エウクレイデースの執政官在任下、紀元前403 - 402年の布告によって、アテーナイにおいて公式に認められたイオーニアのアルファベットから派生したものである。そしてこの形が少しずつ次々に全ギリシアに広まったのである。

そのことは実は大文字に関するものであるが、最初は始めに碑文の刻字において使用されたものであり、またそれらは長きに渡って文字の諸々のタイプの中で使用されるほとんど唯一のものであった。ヘレニズム期より以後、ついで特にローマ期に、能書文字と草書文字の様々なタイプが発展し、それらは紀元後3-4世紀に始まった進化過程の最後にビザンチン小文字に帰着した。それがギリシア語の現在の文字のモデルを構成するのである。

「発音」に関しては、我々が行っているそれは慣習的なものである。その諸原則はルネサンス期のヒューマニスト（人文主義者）らによって練り上げられた。それは、ロッテルダムのエラスムス（1446年-1536年）によって1528年の論文によって体系化されたため、土台としてエラスムス式と呼ばれる発音を持っている。それが提出する諸々の音価は、我々に考えられる限りでは、古典期（前5-4世紀）の発音のそれに近似するのである。しかし、実際には、ギリシア語の発音は、地域により方言のために異なっていたし、あらゆる時代に進化していた。ヘレニズム期からして最初の諸変化が生まれ始め、それが、今日ギリシアで話されているような言語の発音へと次第に導いていった。今日の発音は古典期のそれとも、古代ギリシア語の学習のためにここで提案される発音ともひどく異なっているのである。 [1]

2 音の分類

[4ff]

母音

慣習的発音

- α 短音または長音の **a** : 仏語 *patte, pâte* 参照。
- ι 短音または長音の **i** : 仏語 *il, île* 参照。
- υ 短音または長音の **u** : 仏語 *tube, mûre* 参照。
- ε 閉鎖短音 **é** : 仏語 *nez* 参照。
- η 開放長音 **è** : 仏語 *frère* 参照。
- ει **éi** と発音される偽二重母音（古典期には閉鎖長音 **é**） : 仏語 *obéissant* 参照（真の二重母音 **ei** も存在する、§5 参照）。
- ο 開放短音 **o** : 仏語 *pomme* 参照（古典期には、実際はこの母音は閉鎖音で発音されていたと思われる）。
- ω 閉鎖長音 **o** : 仏語 *drôle* 参照（古典期には、実際はこの母音は閉鎖音で発音されていたと思われる）。
- ου **ou** と発音される偽二重母音（元来は閉鎖長音 **o**） : 仏語 *doux* 参照（真の二重母音 **ou** も存在する、§5 参照）。

母音の長短の性質を量 (*quantité*) と呼ぶ。文法では短母音量を $\acute{}$ 、長母音量を $\grave{}$ で示す。これらの印は問題となる母音、二重母音の上に置かれる。(訳注：本書において使用した Palatino Linotype がない活字は [] 内に示した)

長母音は長く発音してははっきりと区別されなければならない。

3 子音

[15ff]

いくつかの種類の子音を区別する。それらは二つの大きな範疇に分かれる。即ち、閉鎖音および非閉鎖音である。

閉鎖音は次のように分かれる：

	唇音	歯音	喉音
無声音	π	τ	κ
有声音	β	δ	γ
帯気音	φ	θ	χ

閉鎖音は次のように発音される：

- π, τ, κ **p, t, k** : 仏語 *port, tort, corps* 参照。
- β, δ, γ **b, d, g** : 仏語 *bar, dard, gare* 参照。
- φ **f** : 仏語 *feu* 参照。(本来は帯気音の **p** であるが、通常は摩擦音として発音される)
- θ 英語の *thing* (本来は帯気音の **t**) のように発音される。
- χ スペイン語の *rojo*、あるいはドイツ語の *doch* (本来は帯気音の **k**) のように発音される。

非閉鎖音の中では、鼻音、流音、歯擦音、半母音を区別する。

鼻音 μ および ν は **m** および **n** のように発音される。

喉音の前の鼻音は γ によって次の諸グループに帰せられる：

- γκ 発音： ドイツ語 *Bank* 参照
- γγ ドイツ語 *Dinge* 参照
- γχ スペイン語 *monja* 参照
- γξ 英語 *thanks* 参照

流音に関しては、λ は **l** のように発音され、ρ は巻き舌の **r** (イタリア語 *rosso* 参照) である。

語頭の ρ は常に帯気音 (§6 参照) である。これはその無声音の性質を示している (ここでは無声の息によって続けられてある : **rh** と転記されることを参照)。ρ で始まる語が接頭辞または他の母音要素が先行するかあるいは複合語を作る最後の母音に接する時語頭の ρ は重畳される。

例： ῥίπτω しかし ἔρριπτον である。

歯擦音 σ は常に硬い **s** である : 仏語 *poisson* 参照。

p と **k** の音は **s** の音と結合し ψ と ξ となる：

- ψ **ps** : 仏語 *psychologie* 参照
- ξ **ks** : 仏語 *xylophone* 参照

ζ の文字は慣習的に伊語の *zero* における様に **dz** と発音されるが、また **zd** と発音されることもある。

[15-19, 7-10]

4 半母音

[20]

インド・ヨーロッパ語は二つの半母音 **yod** (*y) および **wau** (*w) を認める。

子音としてのあるいは母音としての役割を果たす鳴音 (sonantes) が重要である。ギリシア語では二重母音の二番目の要素として見られる。それらはそれぞれ **ι** および **υ** と書かれる (§5 参照)。

ι で終わる二重母音が **yod** が後ミュケーナイ期に現われる唯一の場合である。

そうでない時、**yod** は—ミュケーナイ期には既に消滅しつつあったが—時にその痕跡を残しつつ消滅した (§16 参照)。

wau はギリシア語に固有のアルファベット、即ち **Ϝ** を持っていた。この文字の形は**ディガンマ** (double gamma) の名をもたらしした。イオーニア=アッティカ方言では、ディガンマは発音や表記から二重母音—**υ** と書かれる—を除いて非常に早期から消滅した。**Ϝ** の子音としての消滅は音韻的痕跡を残していることがある (§16 参照)。

他の方言では、古典期またヘレニズム期までも発音の中に維持され、**Ϝ** (二重母音の二番目の要素としての **υ**) と表記された。

5 二重母音

[5]

ギリシア語の二重母音は **ι** または **υ** で終わる (§4 参照)。

短母音をもつ二重母音：

αι	ει	οι	υι (稀)
αυ	ευ	ου	

長母音をもつ二重母音：

ᾱι	ῆι	ωι	
ᾱυ	ῆυ	ωυ	(ᾱυ および ωυ は稀である)

二重母音の **υ** は仏語の **ou** のように発音される。

ヘレニズム期以降、長母音の後のイオータの発音は消えるほどに弱められている。それゆえ、もはや発音されなくなったイオータを表記する場合、ビザンチン期に**下書のイオータ**という方法が導入された：

α[ᾱ]	η	ω
------	---	---

しかしながら、大文字の後ではイオータは**並記**される：Αι, Ηι, Ωι。

慣例的な発音では、下書・並記のイオータは極めて軽く発音することが許される。

全ての二重母音は、偽二重母音 (§2 参照) を含めて、**長音節**を構成する。

例外：名詞的曲折 (§30 参照) において、絶対語末に現われる **αι** および **οι** はアクセント法では短として考える (§19 参照)。

例：	ἄνθρωποις	しかし	ἄνθρωποι
	μελίτταις	しかし	μέλιτται

希求法の諸形を除いて、動詞活用において (§100 参照) も同様である。

例：παιδεύεταῖ (直説法)、しかし、παιδεύουσι, παιδεύουσι (希求法)

6 アクセントと氣息記号

[149ff, 46ff]

ギリシア語単語のほとんどはアクセントが置かれる。アクセントは声を高くすることからなる。それゆえ、独、伊、現代ギリシア語などの現代語におけるような強勢アクセントは問題ではない。

表記上声を高くすることは鋭アクセント (´) で示され、あるいはアクセントが長母音または二重母音の最初に影響する時は曲アクセント (˘) で示される。

例：	τυραννίς	声はιの上で高くなる。
	Δήλου	声はηの最後に高くなる。
	Δῆλος	声はηの最初に高くなる。

重アクセント (˝) は語句の中でその位置によって発音されなくなる鋭アクセントの跡を示す (§21 参照)。

すべての語頭の母音あるいは二重母音は氣息符号が付される。

帯氣息記号 (ˊ) は帯氣息を示す。

例： ἦρως フランス正書法：héros 参照

語頭のυには常に帯氣息記号がある；語頭のοについても同様である (§3 参照)。

無氣息記号 (ˋ) は単語が帯氣息でない母音あるいは二重母音で始まることを示す。

例： ἔρως フランス正書法：érotique 参照

アクセントと氣息記号が同じ母音上にあるとき、氣息記号は鋭アクセントまたは重アクセントの前に置くが、曲アクセントがある場合は曲アクセントの下に置く。氣息記号はアクセントと同様に常に慣例的に二重母音の二番目の母音の上に置かれる。例外はhiatus（母音重複）によって正当化される。

大文字の場合、これらの記号は大文字の前に置かれる。

例： αἴνιγμα, ἦν, ῥεῦμα, Αἴγινα, ἀἴδιος（母音重複！）, Ἀθηνᾶ, Ἑλλήν

もし単語が長母音と並記のイオータとを伴った二重母音によって始まるなら、氣息記号および時にアクセントは大文字の前に置かれる。

例： Ἄιδης

アクセント法規則は §19-24 で扱われる。

7 句読法

[188]

古典期においては語を分けることなくそして句読点もアクセントもなく記載していた。各単語の分離、句読法は、ビザンチン期に至るまでアクセント法・氣息記号のように系統だっていなかった。

コンマ (,)、読点 (.) は現在の表記法における使い方と同様である。

高位点 (˙) はセミコロン (;) あるいはコロンの (:) に対応する。

セミコロン (;) は疑問符に対応する。

感嘆符は用いない。

音韻現象

多くの音韻現象は言語の歴史的進化の結果である。その他はその使用の中で絶え間なく現れているものである。

8 $\bar{\alpha}$ の η への変形

[27ff]

イオーニア=アッティカ方言においては、長音の $\alpha(\bar{\alpha})$ は一般的に η へと変形する。

しかしながら、アッティカ方言では、長音の α は ϵ, ι あるいは ρ が先行する時は保たれる。この場合、長音の α を純粋なまたは保護された α という。

例： $\lambda\upsilon\pi\eta, \gamma\nu\acute{\omega}\mu\eta$, しかし $\acute{\alpha}\mu\alpha\rho\tau\acute{\iota}\bar{\alpha}, \text{ }^{\circ}\text{H}\rho\bar{\alpha}$

保護されない長音の α は $\bar{\alpha}$ から η へ過程の後期の音韻的変形の結果として説明される。

例： $\tau\iota\mu\bar{\alpha}\tau\epsilon$ < $\tau\iota\mu\acute{\alpha}\tau\epsilon\tau\epsilon$ (約音、§9 参照)
 $\pi\bar{\alpha}\sigma\iota$ < $\pi\bar{\alpha}\nu\sigma\iota$ (代償的延長、§14 参照)

9 諸母音の約音

[48ff]

ある母音と他の母音または二重母音が一語の中で会合し長音ができる現象を約音という。約音の規則は次のようである：

一二つの同音色（長あるいは短）の母音は対応する長音を与える：

$\alpha\alpha$	→	$\bar{\alpha}$	
$\epsilon\eta, \eta\epsilon, \eta\eta$	→	η	
$\omicron\omega, \omega\omicron, \omega\omega$	→	ω	
$\epsilon\epsilon$	→	$\epsilon\iota$	(= $\bar{\epsilon}$) (§2 参照)
$\omicron\omicron$	→	$\omicron\upsilon$	(= $\bar{\omicron}$) (§2 参照)
$\epsilon\epsilon\iota$	→	$\epsilon\iota$	
$\omicron\omicron\upsilon$	→	$\omicron\upsilon$	

— \omicron 音調 (\omicron, ω) は α の音調 (α) と ϵ の音調 (ϵ, η) に勝り、長音の ω を与える。ただし $\epsilon\omicron$ あるいは $\omicron\epsilon$ においては、 $\epsilon\omicron$ あるいは $\omicron\epsilon$ は $\omicron\upsilon$ を与える。：

	$\omicron\alpha, \alpha\omicron, \omega\alpha, \alpha\omega$	}	→	ω
	$\epsilon\omega, \omega\epsilon$	}		
	$\omicron\eta, \eta\omicron, \omega\eta, \eta\omega$	}		
しかし	$\epsilon\omicron, \omicron\epsilon$	→		$\omicron\upsilon$

— ϵ 音調 (ϵ, η) と α 音調 ($\bar{\alpha}, \bar{\alpha}$) の間では、勝るのは最初の位置にあるものである：

$\alpha\epsilon, \alpha\eta$	→	$\bar{\alpha}$
$\epsilon\alpha, \eta\alpha$	→	η

—ある母音が二重母音あるいは偽二重母音に対して同じ母音によってあるいは似た音調の母音によって始まりながら先立つときにはそれは吸収される：

οοι	→	οι
ααυ	→	αυ
ωοι	→	ω
ειη	→	η

—ある母音が異なる母音で始まる ι を伴う二重母音に先行する時、次の約音が結果する：

εαι	→	η
αει	→	α[ā]
οει, οη	→	οι

しばしば、動詞活用と曲用の語尾に影響する約音は曲折の類比¹に影響され、その結果、一般の規則に従わない。

例：	χρυσέα	→	χρυσᾶ (中性複数)
	ίστάης	→	ίστῆς (接続法 2 人称単数)

10 縮音

[46, 42, 62ff]

ある語の最後の母音と続く語の語頭の母音（あるいは二重母音）との間に作られる約音を縮音 e と言う。二語はこのようにして一語にしかならない。このように形成された語の内部で、縮音を無氣息記号と同一のコロニス (´) と呼ばれる表記記号によって表わす。

例：	τὸ ὄνομα	→	τοῦνομα
	ἐγὼ οἶμαι	→	ἐγῶμαι

帯気があるとき、有氣息記号がコロニスに勝り、時に語の内部でさえ見られる：καὶ ὄ > χῶ。

縮音では母音約音規則は組織的に適用されない：明瞭さのゆえに最も重要な語の母音または二重母音はしばしば他に勝る。

例：	ὁ ἀνήρ	→	ἀνήρ
	οἱ ἄνδρες	→	ἄνδρες

縮音はしばしば定冠詞、関係代名詞および接続詞 καὶ とともに作られる。

例：	τὰ ἄλλα	→	τᾶλλα (アクセントについては、σωτήρα 王、§20 参照)
	ἃ ἐγώ	→	ἀγῶ (ā)
	καὶ ἐν	→	κᾶν (ā)

¹ 類比はそれに従って一つの言語学的な形が一つあるいはそれ以上の他の形の上で自らを合わせる現象であって、その際決定された規則性を勝らしめるのである。引用された例の中では母音の約音の規則性を凌ぐ動詞活用と曲用の組織である。

11 エリジオン (母音字省略)

[46, 70ff]

語の最後の短母音は他の母音または二重母音の前でエリジオンすることがある。その時それをアポストロフィ (') で示す。

例： τούτο αίτιον → τούτ' αίτιον

エリジオンによるアクセントの特殊性については、§24 参照。

また、複合語内でも最後の母音のエリジオンすることがある：この場合、エリジオンを記号では表わさない。

例： παρρα-έχω → παρέχω

12 頭音節省略 Aphérèse

[46, 76]

頭音節省略とは語の語頭の短母音の脱落である。頭音節省略は先行する語が長母音または二重母音に終わる時形成される。

例： ἐπεὶ ἐδάκρυσα → ἐπεὶ δάκρυσα
 εἰ μὴ ἔφερες → εἰ μὴ φερες (アクセントに注意)

13 定量的音位転換 Métathèse quantitative

[34]

定量的音位転換とは、長母音とそれに続く短母音で形成される群における、短音が長くなり長音が短くなる音の長さ (§2 参照) の交換を言う。

例： ηα → εᾱ
 ηο → εω

14 子音の会合 Rencontre de consonnes

語形成および曲折の中で子音の会合が接尾辞が語基または語幹に付く時作られる (§25 参照)。この会合はギリシア語進展の過程で音韻変化を起した。

—同化 l' assimilation

[77]

二子音の会合が同一範疇 (無声音、有声音あるいは帯気音) に属しない時、最初の子音は二番目の子音あるいはその範疇の子音に同化される。

例： γραφ-μα¹ → γράμμα
 γεγραφ-ται → γέγραπται
 ἐταγ-θην → ἐτάχθην

¹一般的な仕方では、音韻変形に関連する説明においては、変形に先立つ語形は、アッティカ文献では非常にしばしば認められないのだが、アクセントなしで与えられる。語形に先行するアスタリスクは語形が言語学者によって再構成されたことを示す。

σの前では、唇音と喉音は無声音となる：

βσ, φσ	→	ψ
γσ, χσ	→	ξ

μの前の喉音は有声音となる：

κμ, χμ	→	γμ
--------	---	----

鼻音のνは流音(λ, ρ)およびμの前で同化する：

νλ	→	λλ
νρ	→	ρρ
νμ	→	μμ

唇音の前では、νはμとなる：

νπ	→	μπ
νβ	→	μβ
νφ	→	μφ

—異化 la dissimilation

[83]

歯音が他の歯音あるいはμの前でσに変形することを異化という。

例：	ήλπιδ-ται	→	ήλπισταί
	ήλπιδ-μαι	→	ήλπισμαι

—子音の脱落および補充的延長

ある種の子音の会合の際、その間の一つまたは二つの子音の脱落がある。この脱落は先行する母音の補充的延長を起すことがある。

特に：

歯音、鼻音そしてντ群はσの前で脱落する：

[37, 38]

例：	ήλπιδ-σαι	→	ήλπίσαι	
	λογον-ς	→	λόγους	(補充的延長)
	πάντ-γα	→	πάνσα	→ πᾶσα (補充的延長)
	γεροντ-σι	→	γέρουσι	(補充的延長)
	παντ-ς	→	πᾶς	(補充的延長)

以下にも注意：

συν-σκευάζω	→	συσκευάζω
σύν-στασις	→	σύστασις

二つの子音の間に置かれたσは脱落する：

[103]

例：	γεγραῖφ-σθαι	→	γεγράφθαι
----	--------------	---	-----------

鼻音あるいは流音の前後では、先行する母音の代償的延長を引き起こしながら σ は脱落する。
[105]

例： ἐκρίν-σα → ἐκρίνα
 ἐφάν-σα → ἔφηνα
 ἡγγελ-σα → ἡγγεῖλα
 ἐσ-μι → εἰμί

15 閉鎖音の他の子音との会合を形として示す諸現象の要点 [82-108]

	τ の前	θ の前	σ の前	μ の前
π, β, φ	πτ	φθ	ψ	μμ
κ, γ, χ	κτ	χθ	ξ	γμ
τ, δ, θ	στ	σθ	σ	σμ

16 digamma および yod の消滅

半母音 digamma と yod (§4 参照) の除去は種々の音韻的変化をきたした。

digamma ディガンマ [122]

二重母音の場合には、ディガンマは υ と書かれる (§4, 5 参照) が、それ以外はディガンマ (Ϝ) は非常に早くからアッティカ方言の記載および発音から消えていた。

母音間と流音または鼻音の後にある時、ディガンマは時に痕跡を残しながら消失する。

例： πνεϜω → πνέω 息する しかし、未来形は πνεύσομαι
 βοϜι → βοῖ 牛に (与格) hiatus に注意、また、ラテン語 *bovi* 参照
 κορϜᾶ → κόρη 少女 ρ の後の η に注意、§8 参照

母音の前の語頭においては、ディガンマは一般には痕跡を残さずに消失する。時にしかしながら帯氣息記号を見ることがある。同様に ρ の前の最初において消失する。

例： Ϝεργον → ἔργον 労働 ドイツ語 *Werk* 参照
 Ϝεσπερα → ἑσπέρα 夕方 ラテン語 *vesper* 参照
 Ϝρημα → ῥῆμα 語句 ラテン語 *verbum* 参照

ディガンマは同様に变形された子音群 (σϜ, τϜ) においても見られる。

例： σϜᾶδυς → ἡδύς 甘い ラテン語 *suavis*
 τϜος → σός 君の ラテン語 *tuus*

yod

[20]

二重母音では、yod は ι と書かれる (§4-5 参照) が、それ以外はインド・ヨーロッパの yod はミュケーナイ時代以来ギリシア語から消失した、これは時に音韻的变化を起した。

例：	ζυγόν	輓	ラテン語の <i>iugum</i> 参照
	ἥπαρ	肝臓	ラテン語の <i>iecur</i> 参照
	Ζεύς	ゼウス	語根 dy-ēu- から
	πεζός	歩兵	πεδ- および *yos から
	ἥττων	下位の	ήκ- および *yōn から、§61 参照 (ἥκιστα)

古代の女性接尾辞 -*ya に注意：

ἀλήθεια	真実	ἀληθεσ- および *ya (シグマ脱落后) から
μυῖα	蠅	μυσ- および *ya (シグマ脱落后) から
πᾶσα	全ての	παντ- および *ya (補充的延長で、§14 参照)
から		
θεῖσα	置きながら	女性分詞、θεντ- および *ya (補充的延長で、§14 参照)

動詞系において、インドヨーロッパ語の古い現在接尾辞 -*ye/*yo は多くの現在幹形成の原因となる。(§166-167 参照)

17 齒擦音

[118-123]

母音の前の語頭では齒擦音 (σ) の発音は弛緩しまた極めて早期に消失し、しばしば帯気音に変形する。

例： σερπῶ → ἔρπῶ 這う、serpent 参照

母音間において、齒擦音は痕跡なしに脱落する。言語の極めて古い時期にあった現象である。曲折の中で σ の脱落はしばしば母音の約音が結果として起こる。

例： γενεσος → γενεος → γένους 種の (属格)
 παιδευσαι → παιδευεαι → παιδεύη 君は教育される。

歴史時代では、語頭あるいは母音間のシグマが多くの単語において見られる：それはしばしば子音群の変化から結果し、あるいはそのときのそれは機能の故に曲折の語尾の印によって保持される。

例： τφε → σε 君を (対格)
 παιδευοντι → παιδευονσι → παιδεύουσι 彼らは教育する
 (補充的延長で、§14 参照)
 παιδεύ-σω 私は教育するだろう。(シグマ未来、§124 参照)
 τρι-σί 三 (複数与格)

最後に、語頭あるいは母音間のシグマは語が非インドヨーロッパ由来であることによって説明されうる。

例： σίδηρος 鉄 起源の明らかでない語
 χρυσός 金 セム起源の語

18 帯気化

[124-127]

帯気した母音あるいは二重母音の前で無声閉鎖音は帯気音に変化する（同化）。

例：	οὐκ οὔτοι	→	οὐχ οὔτοι	
	ἐπὶ ᾧν	→	ἐπ' ᾧν	→ ἐφ' ᾧν
	μετα-όδος	→	μετ-όδος	→ μέθοδος

帯気音の異化（グラスマン Grassmann の法則）

帯気音の異化はギリシア語の進化のある時期に起こった現象である。原則として、二つの連続する音節で始まる二つの帯気音（母音あるいは子音）を有する語において帯気音の一方（通常二番目）のみが残ったのである。他方はその帯気を失った、もし母音が問題であれば、あるいは無声音へと変化する、もし閉鎖音が問題であれば。

例：	έχω	→	έχω	持つ
	θιθημι	→	τίθημι	置く

もし、曲折あるいは語形成の中で二番目の帯気が消失するなら、その時最初の帯気音は保持される。

例：	θριχος	→	τριχός	髪（属格）
しかし	θριχς	→	θρίξ	髪（主格）
	θαφος	→	τάφος	墓
しかし	θαπτω	→	θάπτω	埋葬する

19 アクセント付与のいくつかの一般原則

[149-170]

ギリシア語単語のほとんどはアクセントを持つ（§6 参照）。アクセントは語の最後の三つの音節の何れかに置かれる：

一語の最後の母音が短い時、鋭アクセントは最後の三つの音節の何れかに置かれる。あるいは後ろから二番目の上に曲アクセントが置かれる；

一語の最後の母音が長いまたは二重母音である時、鋭アクセントは後ろから二つ目の音節の何れかに置かれ、曲アクセントは最後の音節に置かれる（例外については §5 参照）。

アクセントが語上に占める位置によって、これらは五つの範疇に分類される。

[157]

鋭調語、最後の音節に鋭アクセントを持つもの：

例： καλός, ἀληθής

パロクシトノン paroxytonons、後ろから二番目の音節に鋭アクセントを持つもの：

例： δόμος, ἐλευθερία

プロパロクシトノン **proparoxytonons**、後ろから三番目の音節（アンテパエヌルティマ *antépénultième*）に鋭アクセントを持つもの：

例： ἄνθρωπος, θάλαττα

ペリスポーメノン **périspomènes**、最後の音節に曲アクセントを持つもの

例： Ἀθηνᾶ

プロペリスポーメノン **propérispomènes**、後ろから二番目の音節（パエヌルティマ *pénultième*）に曲アクセントを持つもの

例： μᾶλλον, πολῖται (-αῖ については、§5 参照)

20 曲折におけるアクセントの変異

[176-178]

曲折の途中で、語の最後の音節は量の変化を受けやすく（§2 参照）、あるいは語は補充的な一つ以上の音節を得ることがある。これらの変化はアクセントの多様性をもたらすことがある。

名詞的曲折において、語のアクセントは原則として決定された音節（最も多いのは主格で見られる）にある。但し、語曲折の変化がアクセント規則によって決められた限界の中に留まるように要求する（§19 参照）場合を除く。 [205-209]

例： πατήρ, πατέρᾱ
καλός, καλούς
ἄνθρωπος, ἄνθρωπε, ἀνθρώπου
δώρον, δῶρᾱ, δώρου
ἐλέφας, ἐλεφάντων

動詞活用においては、アクセントは原則として可能な限り後退する（この現象をアナクリーズ *anacrise* と呼ぶ）；それ故、最後の音節が短い時、アクセントはアンテパエヌルティマにあり、そして、最後の音節が長い時、パエヌルティマにある。 [159]

例： παιδεύει, παιδευόμεθα, παιδεύω, ἐπαιδεύου

しかしながら、**複合動詞**（§197 参照）においてはアクセントは語基の前の1音節を越えて、また加音（§108 参照）あるいは量音（§148 参照）を越えては後退しない。

例： εἰς-ἦγον, εἰς-ἦχα, ἀπό-δος, συν-έκ-δος

不定法と分詞の——それらは動詞活用形ではないが——アクセントについては、§105, 106 参照

その他の曲用・動詞活用に固有のアクセント法の特徴は随時記載される。

アクセントのおかれた長音パエヌルティマ *pénultième* の法則（σωτήρα の法則）

[167]

パエヌルティマが長音でかつアクセントを持つ時、そして最後の音節が短い時、語は必ずプロペリスポーメノンである。唯一の例外は後倚辞によるものである（§23 参照）。

例： σωτήρα（主格は σωτήρ）
τᾶλλα（τᾶ ἄλλα から）

しかし、ἦδε（定冠詞の語幹に後倚辞 -δε が続いたもの、§23 参照）

21 重アクセント

[149, 154, 155]

全ての鋭調語のアクセントはその（鋭調語の）最後が文章内にある時弱まる。その時、鋭アクセントは表記の中では重アクセントに置き換えられる (§6 参照)。

鋭調語がそのアクセントを保持するのは後倚辞 (§23 参照) の前あるいは句読点の前でしかない。

例： ἀλλά, παι, λαβὲ τὸ βιβλίον καὶ λέγε.
さあ、子供よ、本を取りそして読め。

22 前倚 Proclise

[179, 180]

いくつかの語は文の発音の中で、続く語に密接に結びつき、そして、このことからそれらは固有のアクセントを持たない。これらの語のあるものは純粹に表記上であるアクセントを持つ。即ち、前置詞の大部分、否定辞 μή の場合、あるいはさらに καὶ または ἀλλά のような接続詞がそうである。

続いていく単音節語を特に前倚辞 (proclitique: 前で寄りかかる) (訳注: 後接語の訳語もある) と呼ぶ、それらはアクセントなしに記載される:

冠詞の4形 ὁ, ἡ, οἱ, αἱ : (§28 参照);
三つの前置詞 εἰς (ἐς), ἐν, ἐξ (ἐκ) (§272 参照);
接続詞 εἰ および接続詞 / 前置詞 ὡς (§348 参照);
否定辞 οὐ (οὐκ, οὐχ) (§282-283 参照)。

前倚辞はしかしながらそれらが後倚辞に先行する時は鋭アクセントを持つ (§23 参照)。

例： ὁ γὰρ ἄνθρωπος

否定辞 οὐ は句読点の前でアクセントを持つ。

例： πῶς γὰρ οὐ;

23 後倚 Enclise

[181-187]

ある種の語は、発音において、先行する語と密接に結びつけられる。これらの語の中で、アクセントを持った語の上のアクセントの位置によってアクセントを持ったり持たなかったりする語を特に後倚辞 enclitiques (後ろで寄りかかる) (訳注: 前接語の訳語もある) と言う。それらはこの語とともに後倚辞群とよばれるものを形成する。これはアクセント法の観点から一体として考えられるものである。後倚辞は以下の語である。

人称代名詞 με, μου, μοι, σε, σου, σοι, ἐ, οὐ, οἱ (§68 参照);
不定代名詞 τις の全ての形 (§74 参照);
不定副詞 που, ποι, ποθέν, πω(ς), πη, ποτέ (§77 参照);
2 人称単数を除く動詞 φημί, εἰμί の直説法現在 (§117,118 参照);
小辞 γε, τε, τοι, νυν, περ (§348 参照);
接尾辞 -δε (ὄδε, τοσόσδε: §65, 76 参照)

慣例的記載法により二音節後倚辞は単独で記載される時はアクセントを二番目の音節に置く。それ故、φημί や τινές などと記載される。

後倚辞群はアクセント法の一般規則に従って、アクセントのない2音節を越えては終わらない (§19 参照)。

アクセント法はそれ故以下の規則に従う：

—もし先行する語が鋭調語またはペリスポーメノンであるなら、そのアクセントで十分である；

例： καλός τις καλῶν τις
 καλοί τινες καλῶν τινες
 καί τινων καλῶν τινων

—もし先行する語がパロクシトノンまたはプロペリスポーメノンなら、鋭アクセントがこの語の最後に加えられる；

例： μέλιττά τις δῶρόν τι
 μέλιτταί τινες δῶρά τινα

—もし先行する語がパロクシトノンなら、アクセントは後倚辞の二番目の音節上に加えられる。(もしそれが短い時は鋭アクセント、長い時は曲アクセント)；

例： λόγος τις
 λόγοι τινές
 λόγων τινῶν

もし先行する語が前倚辞なら、後倚辞群のアクセントを持つのは前倚辞である (§22 参照)。

εἰ, οὐκ, ὡς, ἀλλά, καί, μὴ の後と τοῦτο の後では、ἔστι (通常は後倚辞であるが) とアクセントを置く。

複数の後倚辞が続く時、最後を除いて、全て鋭アクセントを持つ。

例： ὅτε πού τις τινα ἴσοι (...)

文の頭初で、あるいは後倚辞群のアクセントのある音節がエリジオンされている時、後倚辞はアクセントが置かれる。

例： φημί τοίνυν (...)
 σοφός δ' ἐστίν (< σοφός δέ ἐστιν)
 しかし： ἔστι (...) (文の初めでは)

24 エリジオン (母音字省略) によるアクセント付与の諸特徴

[174]

エリジオンが鋭調語の最後に触れる時、直前の音節が鋭アクセントを受け取る。しかしながら、このアクセントの移動は前倚辞または後倚辞型の語に対しては起こらない。

例： πολλά ἐμόγησα → πόλλ' ἐμόγησα
 παρὰ αὐτούς → παρ' αὐτούς
 ἀλλὰ ἐγώ → ἀλλ' ἐγώ
 νέον τινὰ ἄνδρα → νέον τιν' ἄνδρα

後倚のアクセントは後倚辞がエリジオンしても消えない。後倚群のアクセントの置かれた音節のエリジオンについては §23 参照。

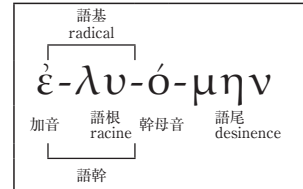
例： ἐνδοξός γε ὦν → ἐνδοξός γ' ὦν

25 語根 RACINE、語基 RADICAL、語幹 THÈME、曲折語尾 DÉSIGNENCE

[193, 367, 380, 822]

それぞれの語ファミリーの基礎に諸々の特徴的な音と意味の担い手の群とが見られる。それと見分けられるようにありながら、この音の群は同じ語ファミリーのある語から他の語へ音韻変化を受ける。もろもろの音のこの群は語根 **racine** と呼ばれる。それは語の語源を示すことを人が欲するときである。また語基 **radical** と呼ばれる。それはギリシア語においてのその実際化を人が示すときである。

例：	λείπω	残す
	λοιπός (形容詞)	残っている
	έλλιπής (形容詞)	不十分な
	印欧語根：	*leik ^w -
	語基：	λειπ-, λοιπ-, λιπ-
	γράφω	書く
	γράμμα	記号 (γράφ-μα から、子音の同化による、§14 参照)
	印欧語根：	*gerbh-
	語基：	γραφ-



訳注：語根、語基、語幹、幹母音、曲折語尾の関係 (有田による)

語形成の中で他の要素 (接尾辞、動詞接頭辞など) が加わる；語基とともに、それらは語の不変化部分を構成する：語基と全ての接尾辞およびその他の不変化付加の全体が語幹と呼ばれる。

語基に付加がない場合、語幹は語基と一致する。

動詞系において、語基と派生接尾辞 (§194 参照) とだけで作られるより限定的総体は、必要に応じて、派生語基と呼ばれる。

最後に、ほとんどのギリシア語単語 (動詞、名詞、形容詞および代名詞) の語幹に種々の曲折語尾が加えられる。曲折語尾の変化は曲折と呼ばれる系を作る：名詞的曲折または曲用において、それは名詞・形容詞および代名詞を変化させるが、曲折語尾は数・格、そして時に性を示す (§27 参照)；動詞的曲折または動詞活用においては、それらは人称・数・法を指し示し、そして時制の違いを表すのに寄与する (§87 参照)。

例：	曲用：	πράγματος	πραγμα 「事柄」の属格
	曲折語尾：	-ος (単数属格)	
	語幹：	πραγματ-	
	語基：	πραγ- または πρακ-	
	動詞活用：	πράξετε	君たちは為すだろう (πράττω 「する」の未来)
	曲折語尾：	-τε (2人称複数能動相)	
	語幹：	πραξε-	(未来幹)
	語基：	πραγ- または πρακ-	

しかし、曲折語尾は語基との会合において変化をしばしば受け、そして曲折語尾はしばしば分離されうる様式ではもはや現われない；その機能はその時曲折において引きずられて変化する語末の全ての部分によって引受けられる。そしてそれを terminason 語尾と呼ぶ (§27, 97 参照)。

26 母音交替

[35, 36]

語基（時には接尾辞でさえも）の異なる形は一般にそれらの母音の変化によって姿をあらわす。母音 **e**（基礎母音）の場所に、**o** が現れることがある。母音がまた消えることもある。そこで **e**（イー）階梯 (*degré e*)、**o**（オー）階梯 (*degré o*)、および **∅**（ゼロ）階梯 (*degré ∅*) が云々される。∅階梯に対してイー階梯およびオー階梯は**盈階梯** (*degré plein*) と呼ばれる。

この現象を**母音交替**と呼ぶ。

例：	e （イー）階梯	o （オー）階梯	∅ （ゼロ）階梯
	ἐγενόμην	γέγωνα	γίγνομαι
	φέρω	φόρος	δίφρος
	πατέρες	προπάτορες	πατρός
	φίλε	φίλος	

鼻音を含む語基が **∅** 階梯を示す時、もし発音の理由がそれを要求するなら、鼻音は $\tilde{\alpha}$ に母音化される。

例：	e （イー）階梯	o （オー）階梯	∅ （ゼロ）階梯
	δέμω	δόμος	δάπεδον (< *dm-)
	τενώ	τόνος	τατός (< *tn-)
しかし	ἐγενόμην	γέγωνα	γίγνομαι

流音を含む語基（あるいは接尾辞）が **∅** 階梯を示す時、もし、発音の理由がそれを要求するなら、流音は**倚母音** (*voyelle d'appui*) ($\tilde{\alpha}$) に展開する。

倚母音は流音に先行ないし後続する。

例：	e （イー）階梯	o （オー）階梯	∅ （ゼロ）階梯
	στέλλω	στολή	ἔσταλμαι (< *stl-)
	πατέρες	προπάτορες	πατράσι (< *tr-)
			しかし πατρός

語基（あるいは接尾辞の）母音もまた**量**を変化させることがある（**量的交替**）。

例：	盈階梯（短）		長階梯	
音調 e :	ἔθος	習慣	ἦθος	性格
	πατέρα		πατήρ	
音調 o :	φόρος	貢物、φέρω から	φώρ	泥棒
	ρήτορα		ρήτωρ	

ある場合、語基の **∅** 階梯はしかりながら**短母音** (ϵ, α, o) を示す：これはインドヨーロッパ古代喉音の発声に由来する。派生母音の **e, a** または **o** 音調に従って喉音 «1», «2» または «3» (H_1, H_2, H_3) という。

対応する盈階梯において、喉音の本来的存在は母音の延長（喉音脱落后補充的延長）によって表現される。

例：	Ø 階梯	盈階梯（長母音の）
	δίδοτε	δίδομι
	τίθετε	τίθημι
	φᾶτός	φημί（φᾶμι から、§8 参照）

語基の最初の全ての母音（音調 **a, e, o**）はその音調に影響する喉音が元来先行していた。

例：	*H ₁ esti	→	ἐστί	（彼、彼女は）～である
	*H ₂ ent-	→	ἀντ-ί	～の代りに
	*H ₃ eq ^w -	→	ὄπ-	「見る」を意味する語基

名詞的諸要素

27 名詞的曲折または曲用：一般的事項

[189-191]

名詞、形容詞、冠詞および代名詞はギリシア語では**曲用語 mots déclinables**である。曲用語は変化しない部分すなわち**語幹 thème**と変化する部分すなわち**曲折語尾 désinence**からなる (§25 参照)。曲折語尾が語幹末と約音あるいは他の音韻的变化によって一緒になっている時、曲折語尾をしばしば分離できないことがある。このことが、**語尾 terminaison**という言葉が曲用の間に変化することへと導かれるところの語の末尾のすべての部分を指示するために云々される、その理由である。

例：	εὐγενής, -ές	高貴な	(形容詞、第三曲用)			
	語幹 εὐγενεσ-	単数属格	εὐγενεσ-ος	⇒	εὐγενοῦς	曲折語尾 -ος
						語尾 -ους
		単数与格	εὐγενεσ-ι	⇒	εὐγενεῖ	曲折語尾 -ι
						語尾 -ει

曲折語尾 désinences flexionnelles は以下を示す。

[194-203]

数：

- 単数
- 双数
- 複数

双数 (§86 参照) は二つの存在を示す；アッティカで用いられるが、その使用は一定ではない。

格：

- 主格 **nominatif** (N)
- 対格 **accusatif** (A)
- 属格 **génitif** (G)
- 与格 **datif** (D)
- 呼格 **vocatif** (V)

それ自身によってあるいは**前置詞**によって明確にされ、格は語の統辞的機能を明示する。

格の意味については、§200 および 218-269 参照、また前置詞については、§270-274 参照。

数と格に加えて、曲折語尾は時に**性**を示すのに寄与する：

- 男性 **masculin**
- 女性 **féminin**
- 中性 **neutre**

ギリシア語は三つの曲用を持っている： [204]

- 曲用 (○ に終る語幹末尾)；
- α 曲用 (α に終る語幹末尾)；
- 第三曲用 (この曲用の語は共通の語幹末を持たない)。

○ および α 曲用は語幹に同様の曲折語尾を付ける、それに対して第三曲用はそれに固有の曲折語尾によって特徴付けられる。

また不変化詞であっても、名詞的要素の中に副詞を置く。それは、副詞というものが非常にしばしば形容詞、名詞または代名詞の固定された格の形から由来するからである (§55-58, 77 参照)。

副詞の統辞的機能については §200 参照。

28 冠詞 [332]

ギリシア語の冠詞はフランス語の定冠詞に対応し以下のように変化する：

	男性	女性	中性
単数主格	ὁ	ἡ	τό
対格	τόν	τήν	τό
属格	τοῦ	τῆς	τοῦ
与格	τῷ	τῇ	τῷ
複数主格	οἱ	αἱ	τά
対格	τούς	τάς	τά
属格	τῶν	τῶν	τῶν
与格	τοῖς	ταῖς	τοῖς

語尾は男性、中性については○曲用の語尾であり、女性についてはα曲用の語尾 (§30, 34 参照) である。男性単数主格 ὁ (曲折語尾なしの形) と中性単数主格・対格 τό は例外をなす。それは代名詞曲用の特徴的語尾を示す (§64 以下参照)。

冠詞はτのない形において前倚辞である：ὁ, ἡ, οἱ, αἱ (§22 参照)。単数および複数属格および与格において曲アクセントを取る。

語彙学習においては、組織的に名詞に冠詞を伴わせる、その冠詞は性を示すのである。

29 冠詞の用法 [1099ff]

冠詞は強く明示し限定する。このことは起源に置いて指示代名詞であったという事実から説明される。それはホメーロスの言語においてなお見られるようにである。冠詞はあるいは個別化しながらあるいは明示概念なのだという価値 (明示をなされた一般化) を定義する。しかしながら、冠詞は実在が既に十分にそれ自体で定義されている時省略されることがある。

冠詞のないことは不定および一般化を示す。

[1126-1152]

Pl. Phd. 117e: οὕτω γὰρ ἐκέλευεν ὁ ἄνθρωπος.

このようにその人（問題であるその人）はそれを命じた。

Arist. Pol. 1253a: (ὁ) ἄνθρωπος φύσει πολιτικὸν ζῷον.

人間は本性によって政治的動物である（冠詞の有無に従って一写本に相違はあるが一人間の定義づけまたは一般的価値の確認）。

Pl. Phd. 87b: ὥσπερ ἄν τις περὶ ἀνθρώπου ὑφάντου λέγοι [...]

あたかも誰かが織工（ある織工）について話すように...

S. Ant. 332-33: πολλὰ τὰ δεινὰ κούδ' ἐν ἀνθρώπου δεινότερον πέλει.

驚くべきことは多い。しかし、何ものも人間（一般的に人間）以上には驚くべきものではない。

また、参照：	ὁ βουλόμενος	「望んでいるその人（特定の個人）」または「望んでいる人（全ての望んでいる人、即ち彼が望んでいるという事実によって定義される人）」
	ὁ Μῆδος	メディア人（特定の個人）またはメディアの者（メディア人、メディアの人々）
	ἥλιος または ὁ ἥλιος	太陽（それ自身で十分に定義された用語）
	θεοὶ または οἱ θεοί	神々
	βασιλεύς	大王
	など	

固有名詞（人名、神名、街など）とともに、冠詞がないことは、距離をおいたあるいは中立の公式の調子を示す；反対に、冠詞の存在はあるいは親近感と共感を、あるいは人または場所がよく知られていることというを示す。

[1137-1139]

Pl. Smp. 213b: ὑπολύετε, παῖδες, Ἀλκιβιάδην.

奴隷達よ、アルキビアデス（距離を置いた調子）からその靴を脱がせよ。

Pl. Smp. 213b: πάνυ γε, εἰπεῖν τὸν Ἀλκιβιάδην.

大いに結構、アルキビアデス（<<我らのアルキビアデス>>）は言った。

Th. 4.78: ὑπὸ τῷ Ὀλύμπῳ

そのオリュンポスの麓で、オリュンポスなる山の麓で

場所の名詞の多くは実のところ形容詞であり、場所の名詞が適用される地理的用語（山、川、海など）は、省略（§217 参照）される；それゆえそれらは冠詞を伴う。

[1142]

ἡ Ἀττικὴ（言外に γῆ） アッティカ

冠詞は形容詞、分詞、不定法などを名詞化する時必要である（§205 参照）。

[1153]

述語の機能を持つ名詞は、同一性を確立する時を除いて冠詞によっては先行されない（§208 参照）。

[1150]

慣用的表現においては、冠詞は指示代名詞の古い意味を保っている：

[1106-1107]

ὁ μὲν... ὁ δέ...	この者は... あの者は... 、ある者は... 他方ある者は...
πρὸ τοῦ	以前は、前もって（<<この時の前に>>）
など。	

固定的表現において、ὄς の形の下に冠詞がそれに由来する指示代名詞を認める：

[1113]

καὶ ὄς	そしてその者は
ἢ δ' ὄς（挿入節の中で）	彼は言った。

名詞および形容詞

30 -o に終る名詞の曲用

[228-234]

この曲用はその語幹が -o に終わる名詞の曲用である。

それは男性、いくつかの女性と中性名詞を含む。中性名詞は男性または女性名詞と、複数におけると同様単数において、主格・対格・呼格について同一曲折語尾を示すという点で異なる。

表の中で、選ばれた例は語上のアクセントの様々に可能な異なる位置を示す (§19-20 参照)。

例：男性名詞および女性名詞	ó λόγος, λόγου	話、議論	(パロクシトーン)
	ó ἄνθρωπος, ἀνθρώπου	人	(プロパロクシトーン)
	ó δήμος, δήμου	民衆	(プロペリスポーメノン)
	ἡ ὁδός, ὁδοῦ	道	(鋭調語)
中性名詞	τὸ δῶρον, δώρου	贈物	(プロペリスポーメノン)

語幹	λογο-	ἄνθρωπο-	δημο-	ὁδο-	δώρο-
主格	ὁ λόγος	ὁ ἄνθρωπος	ὁ δήμος	ἡ ὁδός	τὸ δῶρον
対格	λόγον	ἄνθρωπον	δήμον	ὁδόν	δῶρον
属格	λόγου	ἀνθρώπου	δήμου	ὁδοῦ	δώρου
与格	λόγῳ	ἀνθρώπῳ	δήμῳ	ὁδῶ	δώρῳ
呼格	λόγε	ἄνθρωπε	δήμε	ὁδέ	δῶρον
主・呼格	οἱ λόγοι	οἱ ἄνθρωποι	οἱ δήμοι	αἱ ὁδοί[ι]	τὰ δῶρα
対格	λόγους	ἀνθρώπους	δήμους	ὁδοὺς	δῶρα
属格	λόγων	ἀνθρώπων	δήμων	ὁδῶν	δώρων
与格	λόγοις	ἀνθρώποις	δήμοις	ὁδοῖς	δώροις

語幹 -o の最後は曲折語尾と一体になりそしてそれとともに語尾を作る (§25 参照)。それ故、この曲用の特徴的となったものは語尾であり曲折語尾 (時に分離することはできないが) だけでない。

o 語幹末は母音階梯 e (§26 参照) を男性・女性名詞単数呼格において表わす；中性複数主格・対格・呼格においては現れない。

ὁ θεός「神」および ὁ λαός「人々」のようないくつかの名詞は主格と異なる単数呼格を持たない。

アクセント

アクセントはできる限り主格に見られる音節上に残る。もしそうでない場合、アクセント法規則に応じて移動する (§20 参照)。

複数主格において、二重母音 -oi はアクセント法に関しては短の価値である (§5 参照)。

鋭調語は単数・複数の属格および与格においてペリスポーメノンになる。

-o 派生語語尾については、§189, 190 および 192 参照

31 約音名詞

[235-236]

語幹が -oo または εο で終る名詞は同じ約音曲用を示す。

例： ό νοῦς, νοῦ 理性
 τὸ ὀστοῦν, ὀστοῦ 骨

語幹	νοο-			ὀστεο-		
主・呼格	ό	νοῦς	[< νόος]	τὸ	ὀστοῦν	[< ὀστέον]
対格		νοῦν	[< νόον]		ὀστοῦν	[< ὀστέον]
属格		νοῦ	[< νόου]		ὀστοῦ	[< ὀστέου]
与格		νοῖ	[< νόω]		ὀστοῖ	[< ὀστέω]
主・呼格	οἱ	νοῖ	[< νόοι]	τὰ	ὀστᾶ	[< ὀστέα]
対格		νοῦς	[< νόους]		ὀστᾶ	[< ὀστέα]
属格		νων	[< νόων]		ὀστῶν	[< ὀστέων]
与格		νοῖς	[< νόοις]		ὀστοῖς	[< ὀστέοις]

複数中性、主・対・呼格は、約音規則に反して、曲折類比によって曲折語尾 -α を持つ (§9 参照)。

32 アッティカ曲用

[237-239]

いくつかの名詞について、量の音位転換 (§13 参照) が語幹末の -o と直前に先行する長母音との間に起こる。そこで結果する ω は全ての格において優勢である。；アクセントは常に鋭アクセントである。

例： ό λεώς, λέω 人々

語幹	λεω- (< ληο-)	
主・呼格	ό	λεώς
対格		λεών
属格		λεώ
与格		λεῶ
主・呼格	οἱ	λεῶ
対格		λεώς
属格		λεών
与格		λεώς

プロバロクシトーンのアクセントは音位転換の前にあった場所に保たれる。

例： Μενέληρος Μενέλεως Μενελεος

特例

[238d]

ή ἔως 曜、は -v のない対格を持つ： τήν ἔω.

同様に、ὁ λαγῶς または λαγῶς 野兎（起源は λαγῶς）は対格 λαγῶ または λαγῶ を λαγῶν または λαγῶν の代りに持つことがある。

33 -α に終る名詞の曲用

[211ff]

この曲用はその語幹が長または短母音 α に終わる名詞の曲用である。それは女性名詞ならびにいくつかの男性名詞も含む。

アッティカ方言では、長母音 α は一般に η に変形するというのを覚えよう；しかしながら、ε, ι, ρ が先行する時、それは保たれる（純粹の α または保護された α、§8 参照）。

この曲用のいくつかの語はしかしながら母音 η を保護された α の場所に、あるいは明らかに保護されていない長母音 α の場所に提供ことがある：これらの例は語源的に説明される。

例： ή κόρη, 属格 κόρης 少女 κορρη (§16 参照) から
ή στοά, 属格 στοᾶς 柱廊 στοιά から、属格 στοιάς

34 女性名詞

[216-221]

ε, ι, ρ が先行する α

例： ᾱ: ή χώρᾱ, χώρᾱς 国
ή στρατιά[ᾱ], στρατιάς 軍

ᾱ: ή Μοῖρᾱ, Μοίρᾱς 運命
ή ἀλήθειᾱ, ἀληθείας 真実

語幹	χώρᾱ-	στρατιά-	Μοῖρᾱ-	ἀληθειᾱ-
主・呼格	ή χώρᾱ	ή στρατιά	ή Μοῖρᾱ	ή ἀλήθειᾱ
対格	χώρᾱν	στρατιάν	Μοῖρᾱν	ἀλήθειᾱν
属格	χώρᾱς	στρατιάς	Μοίρας	ἀληθείας
与格	χώρα	στρατιάς	Μοίρα	ἀληθεία
主・呼格	αῖ χώραι	αῖ στρατιαί	αῖ Μοῖραι	αῖ ἀληθειας
対格	χώρᾱς	στρατιάς	Μοίρας	ἀληθείας
属格	χώρων	στρατιῶν	Μοιρῶν	ἀληθειῶν
与格	χώραις	στρατιαῖς	Μοίραις	ἀληθειαις

ε, ι, ρ が先行しない α

例： ᾱ: ή μάχη, μάχης 戦い
 ή τιμή, τιμῆς 名誉

 ᾱ: ή Μοῦσα, Μούσης ミューズ
 ή θάλαττα, θαλάττης 海

語幹	μαχᾱ-	τιμᾱ-	Μοῦσα-	θάλαττα-
主・呼格	ή μάχη	ή τιμή	ή Μοῦσα	ή θάλαττα
対格	μάχην	τιμήν	Μοῦσάν	θάλαττάν
属格	μάχης	τιμῆς	Μούσης	θαλάττης
与格	μάχη	τιμῆ	Μούση	θαλάττη
主・呼格	αί μάχαι	αί τιμαί	αί Μοῦσαι	αί θάλατται
対格	μάχᾱς	τιμᾱ́ς	Μούσᾱς	θαλάττᾱς
属格	μαχῶν	τιμῶν	Μουσῶν	θαλαττῶν
与格	μάχαις	τιμαῖς	Μούσαις	θαλάτταις

語幹末は曲折語尾と一体となり語尾を作る (§25 参照)。従ってこの曲用の特徴となるのは語尾であってそして曲折語尾単独（時に最早分離できないことがある）ではない。

単数属格および与格語尾は常に長い (-ᾱς/-ᾱ́), α が保護されていない時、このことは -ης/-η への組織的变化を説明する。複数では、長い α はそれが保護されていない時でも保たれる。

アクセント

曲折におけるアクセントの変種については、§20 参照。

複数属格は常にペリスポーメノンである。それは語幹末母音と曲折語尾 -ων の約音から結果するという事実からである (-ᾱων → *-ήων[イオーニア形] → -έων[イオーニア・アッティカ形] → -ῶν)。

複数主格の二重母音 -αι はアクセント法に関しては短とみなす (§5 参照)。

鋭調語は単数属格・与格でペリスポーメノンとなる。

-α に終わる派生語尾については、§189, 190 および 192 参照。

35 男性名詞

[222]

ε, ι, ρ が先行する $\bar{\alpha}$

例： ό νεανιάς, νεανίου 若者

ε, ι, ρ が先行しない $\bar{\alpha}$

例： ό πολίτης, πολίτου 市民
 ό Ατρείδης, Ατρείδου アトレイデース、アトレウスの息子

語幹	νεανιά-	πολίτᾱ-	Ατρείδᾱ-
主格	ό νεανιάς	ό πολίτης	ό Ατρείδης
対格	νεανιάν	πολίτην	Ατρείδην
属格	νεανίου	πολίτου	Ατρείδου
与格	νεανία	πολίτη	Ατρείδη
呼格	νεανιά	πολίτᾱ	Ατρείδη
主・呼格	οί νεανιάι	οί πολίται	οί Ατρείδαι
対格	νεανιάς	πολίτᾱς	Ατρείδᾱς
属格	νεανιών	πολιτών	Ατρείδων
与格	νεανίαις	πολίταις	Ατρείδαις

男性名詞の曲用は女性名詞のそれとは単数主格・属格においてしか異なる。そこでは類比によって -ο 曲用の語尾上に形成された語尾が見られる (§30 参照)。

πολίτᾱ (単数呼格)、πολίται (複数主格・呼格) および Ατρείδαι (複数主格・呼格) のアクセントについては、σωτήρα の法則、§20 参照。

特殊例

[225-226]

-της に終わる行為者の名詞 (ό πολίτης 参照) のように -ης に終わる人々の名詞、そして -ης に終わる他の名詞は、 $\bar{\alpha}$ に終る呼格を持つ。-της の名詞については、§189 も参照。 [226]

例： ό τοξότης 射手 呼格 τοξότᾱ
 ό δεπότης 主人 呼格 δέσποτᾱ (アクセントに注意！)
 ό Πέρσης ペルシャ人 呼格 Πέρσᾱ
 ό ιχθυοπώλης 魚商人 呼格 ιχθυοπώλᾱ

$\bar{\alpha}$ で終わる単数属格 (ドーリス属格) をドーリス固有名詞および外国起源の名詞は持つ。 [225]

例： ό Λεωνίδας 属格 Λεωνιδᾱ レオーニダース
 ό Αννίβᾱς 属格 Αννιβᾱ ハンニバル

女性語幹末は常に長い。

女性形容詞は - $\bar{\alpha}$ または - η に、名詞と同じ規則に従って、終わる (§33 参照)。

例：	δίκαιος	正しい	女性形 δικαία
	αἰσχρός	恥かしい	女性形 αἰσχρά[α]
	νέος	新しい	女性形 νέᾱ
	ἀγαθός	善い	女性形 ἀγαθή

女性形複数属格は類比によって男性形のようにアクセントが置かれる。それ故 - α 名詞属格の場合のように、系統的にペリスポーメノンなのではない。

例：	καλή	複数属格 καλῶν
	δικαία	複数属格 δικαίων

いくつかの形容詞、特に複合形容詞 (§195-197 参照) のほとんど全てについては、女性語尾は男性語尾と区別されない。

-τερος で終る比較級および -τατος で終る最上級はそれに反し常に三つの語尾を持つ (§60 参照)。

例：	βάρβαρος	蛮族の	女性形 βάρβαρος
	ἀθάνατος	不死の	女性形 ἀθάνατος
	φιλάργυρος	吝嗇の	女性形 φιλάργυρος
しかし	εὐκλεέστατος	最も高名な	女性形 εὐκλεεστάτη

- σ / - $\bar{\alpha}$ の形容詞派生語尾については、§193 参照。

38 約音形容詞

[290]

ある形容詞は約音語尾を持つ (§31 および 36 参照)。

例：	διπλοῦς, διπλή, διπλοῦν	二重の
----	-------------------------	-----

語幹	διπλοο-	διπλοᾶ-	διπλοο-
	男性	女性	中性
主・呼格	διπλοῦς	διπλή	διπλοῦν
対格	διπλοῦν	διπλήν	διπλοῦν
属格	διπλοῦ	διπλῆς	διπλοῦ
与格	διπλῶ	διπλή	διπλῶ
主・呼格	διπλοῖ	διπλαῖ	διπλά
対格	διπλοῦς	διπλάς	διπλά
属格	διπλῶν	διπλῶν	διπλῶν
与格	διπλοῖς	διπλαῖς	διπλοῖς

曲折の**類比**は時に母音約音の規則に勝る：女性形 διπλή, 複数中性形 διπλᾶ 参照。

ρ の後、ā への約音が起こる：

例： ἀργυροῦς 銀の 語幹 ἀργυροο-/-εᾶ- 女性形 ἀργυρᾶ
 しかし χρυσοῦς 金の 語幹 χρυσοο-/-εᾶ- 女性形 χρυσῆ

約音形容詞の意味論的意義については、§193 参照。

39 アッティカ曲用

[237, 239]

いくつかの形容詞はアッティカ式と呼ばれる曲用の語尾を持つ (§32 参照)。

例： ἰλεως, ἰλεων 好意的な

語幹	ἰλεω- < ἰληο-	
	男・女性	中性
主・呼格	ἰλεως	ἰλεων
対格	ἰλεων	ἰλεων
属格	ἰλεω	ἰλεω
与格	ἰλεω	ἰλεω
主・呼格	ἰλεω	ἰλεα
対格	ἰλεως	ἰλεα
属格	ἰλεων	ἰλεων
与格	ἰλεως	ἰλεως

アクセントは単数主格ではアクセントされた音節上に残り、そして常に鋭アクセントである。

40 形容詞 μέγας および πολὺς

[311]

形容詞 μέγας, μεγάλη, μέγα 「大きい」と、πολύς, πολλή, πολύ 「多い」は、男性・中性単数主・呼および対格において第三曲用の固有の形を持つ：

主・呼格	男性	μέγας	中性	μέγα
対格		μέγαν		μέγα
主・呼格	男性	πολύς	中性	πολύ
対格		πολύν		πολύ

他の形においては、それらは μεγαλο-/μεγαλᾶ- および πολλο-/πολλᾶ- 幹上で規則的な曲用を持つ：

属格 μεγάλου, μεγάλης, μεγάλου
 πολλοῦ, πολλῆς, πολλοῦ など。

41 第三曲用

[241-251]

第三曲用の名詞、形容詞は共通の語幹末によっては特徴付けられない；ただ**共通曲折語尾 désinences communes**がこの曲用の語を再編成する。

しかしながらこの曲折語尾は種々の変形を語幹の異なる語末と会合した時に受ける；これがこの曲用¹の語尾の多様性を説明する。

42 第三曲用曲折語尾表

[210]

	男・女性		中性
主格	ς	または母音延長	曲折語尾なし
対格	ν	子音の後では：ᾱ	曲折語尾なし
属格	ος		ος
与格	ι		ι
呼格		曲折語尾なし、または主格と同じ	曲折語尾なし
主・呼格	ες		ᾱ
対格	(ν)ς	子音の後では：ᾱς	ᾱ
属格	ων		ων
与格	σῖ(ν)		σῖ(ν)

男・女性形対格の曲折語尾の短かい ᾱ は ν の母音化である (§26 参照)。

いくつかの格は曲折語尾を持たない。語はその時語幹（純粹語幹 **thème pur**）のみから成る。しかしながら、語幹が -ν, -ο および -σ で終わる語幹(ギリシア語単語の中で語末に見ることができる唯一の子音)は変形せずに現れる。もしそうでなければ、最後の子音は消える。

例：	ὁ δαίμων	神	語幹：	δαίμων-	呼格	δαῖμον
	εὐγενής	高貴な (形容詞)		εὐγενεσ-	中性主・対格	εὐγενές
	τὸ σῶμα	体		σώματ-	主・対格	σῶμα
	χαρίεις	慈悲深い (形容詞)		χαριεντ-	中性主・対格	χαρίεν
	ὁ γέρον	老人		γεροντ-	呼格	γέρον

変形はまた語幹末の子音によって始まる曲折語尾との会合するその会合の中においても起こる：中性単数主格の -ς と複数与格の -σι である。子音の σ との会合に関する異なる音韻的現象については、§14-15 参照。

このように語幹は主格においてしばしば変形する；一語の語幹を得るためには、一般的には単数属格形を考え、そしてそれから曲折語尾 -ος を引くのが便利である。

例：	ὁ πούς	属格	ποδός	足	語幹：	ποδ-
----	--------	----	-------	---	-----	------

¹ 表では「-」は曲折語尾が変形を受けない時、曲折語尾を分離する。

アクセント

[252]

主格が単音節の語はアクセントを単数および複数属格および与格曲折語尾上に持つ。

例： ό θήρ 野獣
 属格 θηρός, θηρῶν
 与格 θηρί, θηροσί

例外を作る： παῖς, 全ての ό παις, 子供
複数属格 πάντων παίδων
複数与格 παῶσι (しかし παισί)

音便上の ν (ἐφελευστικόν, 移動性の) : [134-135]
ν が複数与格の曲折語尾 -σι に付け加わる、それは、文中で、続く語が母音であるいは句読点の前において始まる時である。また時に子音の前に見る。

閉鎖音語幹

43 1. 喉音 (κ, γ, χ) および唇音 (π, β, φ) 語幹

[256]

例： ό φύλαξ, φύλακος 警護
 ό ὄνουξ, ὄνουχος 爪
 ό Αἰθίοψ, Αἰθίοπος エチオピア人

語幹	φύλακ-	ὄνουχ-	Αἰθιοπ-
主・呼格	ό φύλαξ	ό ὄνουξ	ό Αἰθίοψ
対格	φύλακ-α	ὄνουχ-α	Αἰθίοπ-α
属格	φύλακ-ος	ὄνουχ-ος	Αἰθίοπ-ος
与格	φύλακ-ι	ὄνουχ-ι	Αἰθίοπ-ι
主・呼格	φύλακ-ες	ὄνουχ-ες	Αἰθίοπ-ες
対格	φύλακ-ας	ὄνουχ-ας	Αἰθίοπ-ας
属格	φύλακ-ων	ὄνουχ-ων	Αἰθίοπ-ων
与格	φύλαξι	ὄνουξι	Αἰθίοψι

特例

ή γυνή, γυναικός 「婦人」 は以下の曲用を示す：

[285-6]

単数 γυνή γυναῖκα γυναικός γυναικί 呼格 γύναι
複数 γυναῖκες γυναῖκας γυναικῶν γυναίξι 呼格 γυναῖκες

2. 歯音 (τ, δ, θ) 語幹

44 単純歯音語幹

[257]

名詞

例： ό ἔρωτς, ἔρωτς 愛
 ή τυραννίς, τυραννίδος 權力
 ή χάρις, χάριτος 優美さ、親切
 τὸ σῶμα, σῶτατος 体

語幹	ἔρωτ-	τυραννίδ-	χάριτ-	σῶματ-
主・呼格	ό ἔρωτς	ή τυραννίς	ή χάρις	τὸ σῶμα
対格	ἔρωτ-α	τυραννίδ-α	χάρι-ν	σῶμα
属格	ἔρωτ-ος	τυραννίδ-ος	χάριτ-ος	σώματ-ος
与格	ἔρωτ-ι	τυραννίδ-ι	χάριτ-ι	σώματ-ι
主・呼格	ἔρωτ-ες	τυραννίδ-ες	χάριτ-ες	σώματ-α
対格	ἔρωτ-ας	τυραννίδ-ας	χάριτ-ας	σώματ-α
属格	ἐρώτ-ων	τυραννίδ-ων	χαρίτ-ων	σώματ-ων
与格	ἔρωσι	τυραννίσι	χάρισι	σώμασι

形容詞

[292]

例： ἄχαρις, ἄχαρι 不愉快な
 πένης 貧しい

語幹	ἀχαρίτ-		πενητ-
	男性・女性	中性	男性・女性
主格	ἄχαρις	ἄχαρι	πένης
対格	ἄχαριν	ἄχαρι	πένητ-α
属格	ἀχάριτ-ος	ἀχάριτ-ος	πένητ-ος
与格	ἀχάριτ-ι	ἀχάριτ-ι	πένητ-ι
呼格	ἄχαρι	ἄχαρι	πένης
主・呼格	ἀχάριτ-ες	ἀχάριτ-α	πένητ-ες
対格	ἀχάριτ-ας	ἀχάριτ-α	πένητ-ας
属格	ἀχαρίτ-ων	ἀχαρίτ-ων	πενήτ-ων
与格	ἀχάρισι	ἀχάρισι	πένησι

語の最後およびσの前で、歯音は脱落する：σῶμα, ἔρωσι 参照。

[258]

-ι と -υ 語幹の単数対格 (πόλιν, ἰχθῦν, §50 および 53 参照) との類比によって、非鋭調語である -ις または -υς の主格に置かれた歯音語幹は各々 -ιν, -υν の単数対格を持つ。

[246, 247, 257]

例： ή χάρις, χάριτος 優美さ、親切 語幹 χάριτ- 単数対格 χάριν
 ή κόρυς, κόρυθος 兜 κορυθ- κόρυν
しかし ή ἐλπίς, ἐλπίδος 希望 ἐλπιδ- ἐλπίδα

齒音語幹形容詞については、女性形語尾は男性形と区別されない。

いくつかの形容詞は中性形を主に意味論的理由で持たない。

[312]

φυγᾶς	属格	φυγάδος	追放された (人)
πένης		πένητος	貧しい (人)
ἄπαις		ἄπαιδος	子供のない (人)
ἀγνώς		ἀγνώτος	無知な (人)

-ις (属格 -ιδος) , -της (属格 -τητος) , -μα (属格 -ματος) に終わる語については、§189-190 参照。

特殊例

[285]

以下の名詞は特別な主格を示す：

ὁ πούς, ποδός	足	
τὸ οὖς, ὠτός	耳	(複数属格 ὠτων)
τὸ φῶς, φωτός	光	(複数属格 φώτων)
τὸ γόνυ, γόνατος	膝	
τὸ δόρυ, δόρατος	槍	
τὸ ὕδωρ, ὕδατος	水	
τὸ ὄναρ, ὄνειρατος	夢	
τὸ κέρασ, κέρατος	角；陣翼 (γέρας に従っても曲用する、§49 参照)。	

ὁ χρώς, χρωτός「皮膚」は規則形の外に単数属格 χροός, 単数与格 χροῖ または χρωῶ を示す。

45 -ντ 語幹

[257]

名詞

例： ὁ ἐλέφας, ἐλέφαντος 象
 ὁ γέρον, γέροντος 老人

語幹	ἐλεφαντ-	γεροντ-
主格	ὁ ἐλέφᾱς	ὁ γέρων
対格	ἐλέφαντ-α	γέροντ-α
属格	ἐλέφαντ-ος	γέροντ-ος
与格	ἐλέφαντ-ι	γέροντ-ι
呼格		γέρον
主・呼格	ἐλέφαντ-ες	γέροντ-ες
対格	ἐλέφαντ-ας	γέροντ-ας
属格	ἐλεφάντ-ων	γερόντ-ων
与格	ἐλέφᾱσι	γέρουσι

特殊例

ὁ ὀδῶν, ὀδόντος 「歯」はまたシグマ単数主格を持つ。: ὀδοῦς (< ὀδοντ-ς) [243D]

形容詞

[299]

例: πᾶς, πᾶσα, πᾶν 全ての
 ἐκῶν, ἐκουῖσα, ἐκόν 自発的な、同意した
 χαρίεις, χαρίεσσα, χαρίεν 魅力的な

語幹	παντ-/ 女性 πᾶσᾶ-			έκοντ-/ 女性 έκουσᾶ-		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主・呼格	πᾶς	πᾶσα	πᾶν	έκῶν	έκουῖσα	έκόν
対格	πάντ-α	πᾶσαν	πᾶν	έκόντ-α	έκουῖσαν	έκόν
属格	παντ-ός	πάσης	παντ-ός	έκόντ-ος	έκούσης	έκόντ-ος
与格	παντ-ί	πάση	παντ-ί	έκόντ-ι	έκούση	έκόντ-ι
主・呼格	πάντ-ες	πᾶσαι	πάντ-α	έκόντ-ες	έκουῖσαι	έκόντ-α
対格	πάντ-ας	πάσας	πάντ-α	έκόντ-ας	έκούσας	έκόντ-α
属格	πάντ-ων	πασῶν	πάντ-ων	έκόντ-ων	έκουσῶν	έκόντ-ων
与格	πᾶσι	πάσαις	πᾶσι	έκουῖσι	έκούσαις	έκουῖσι

語幹	χαριεντ-/ 女性 χαριεσσᾶ-		
	男性	女性	中性
主格	χαρίεις	χαρίεσσα	χαρίεν
対格	χαριεντ-α	χαριεσσαν	χαρίεν
属格	χαριεντ-ος	χαριεσσης	χαριεντ-ος
与格	χαριεντ-ι	χαριεσση	χαριεντ-ι
呼格	χαρίεν	χαρίεσσα	χαρίεν
主・呼格	χαριεντ-ες	χαριεσσαι	χαριεντ-α
対格	χαριεντ-ας	χαριεσσας	χαριεντ-α
属格	χαριεντ-ων	χαριεσσῶν	χαριεντ-ων
与格	χαρίεσι	χαριεσαις	χαρίεσι

-ντ 語幹を持つ名詞は全て男性名詞である。

-ντ 群はσの前で、補充的延長を引き起こしながら、脱落する (§14 参照):

単数主格 ἐλέφᾶς ← ἐλεφᾶντ-ς
 複数与格 ἐλέφᾶσι ← ἐλεφᾶντ-σι
 γέρουσι ← γεροντ-σι

-αντ および -οντ に終る形容詞の女性形については、-σα に終る語尾に先行する母音は一般に長い (補充的延長)。

しかしながら延長がないことがある: χαρίεις の単数女性主格 χαρίεσσα。同様に、男・中性複数与格において χαρίεσι が補充的延長がないのである。

-εις (中性 -εν) に終わる形容詞の意味論的意義については、§193 参照。

分詞

[300-310]

動詞の**能動相分詞**は、完了形を除いた全ての動詞幹において、-ντ 幹を持ち第三曲用形容詞のように曲用する。アオリスト**受動分詞**についても同様である。

例： παιδεύων, παιδεύουσα, παιδεῦον 教育しながら
 παιδευθείς, παιδευθείσα, παιδευθέν 教育された

異なる分詞の曲用については、§182-186 参照。

流音語幹

46 - 流音 (ϱ/λ) 語幹

[259]

例： ὁ κρατήρ, κρατήρος 盃（容器）
 ὁ ῥήτωρ, ῥήτορος 演説者
 ὁ, ἡ ἄλς, ἄλός 塩（男性形）、海（女性形）

語幹	κρατηρ-	ῥητορ-	άλ-
主格	ὁ κρατήρ	ὁ ῥήτωρ	ὁ, ἡ ἄλς
対格	κρατήρ-α	ῥήτορ-α	ἄλ-α
属格	κρατήρ-ος	ῥήτορ-ος	άλ-ός
与格	κρατήρ-ι	ῥήτορ-ι	άλ-ί
呼格		ῥήτορ	
主・呼格	κρατήρ-ες	ῥήτορ-ες	ἄλ-ες
対格	κρατήρ-ας	ῥήτορ-ας	ἄλ-ας
属格	κρατήρ-ων	ῥητόρ-ων	άλ-ῶν
与格	κρατήρ-σι	ῥήτορ-σι	άλ-σί

ὁ, ἡ ἄλς は -λ 語幹を証拠立てる唯一の語である。

流音語幹の**形容詞**は稀である。

例： ἀπάτωρ 属格 ἀπάτορος 父なしの
 μάκαρ 属格 μάκαρος 至福の

アクセント

主格に置かれた鋭調語はプロペリスポーメノンになる。それはそれらのアクセントのある母音が長くそして短母音の曲折語尾が加わる時である（σωτήρα の法則、§20 参照）。

例： ὁ σωτήρ, 救世主、単数対格 σωτήρα, 単数属格 σωτήρος, など

単数呼格 σωτέρ に注意。

-ρ に終る**派生語尾**については、§189 参照。

特殊例

[285]

ὁ μάρτυς, μάρτυρος, 証人

この名詞は ρ なしの形をシグマ曲折語尾の前に提示する。

単数主格 μάρτυς
 複数与格 μάρτυσι

τὸ πῦρ, πῦρός, 火

この名詞は、中性であるが、単数主格語幹母音を延長する；複数では、-ο 曲用に従う：τὰ πυρρά, τῶν πυρῶν, τοῖς πυροῖς。

ἡ χεῖρ, χειρός, 手

χερσ- (ドーリア方言 χέρες 参照) という語幹を想定する。それはアッティカ方言では χειρ- (σ の脱落による延長によって) を全ての曲用で、複数与格 χερσίν を除いて与える。

47 πατήρ, μήτηρ, θυγάτηρ, γαστήρ, ἀνήρ の曲用

[262]

ὁ πατήρ, πατρός 父
 ἡ μήτηρ, μητρός 母
 ἡ θυγάτηρ, θυγατρός 娘
 ἡ γαστήρ, γαστρός 腹、胃
 ὁ ἀνήρ, ἀνρός 男、夫

語幹	πατερ-	μητερ-	θυγατερ-	γαστερ-	ἀνερ-
主格	ὁ πατήρ	ἡ μήτηρ	ἡ θυγάτηρ	ἡ γαστήρ	ὁ ἀνήρ
対格	πατέρ-α	μητέρ-α	θυγατέρ-α	γαστέρ-α	ἀνδρ-α
属格	πατρ-ός	μητρ-ός	θυγατρ-ός	γαστρ-ός	ἀνδρ-ός
与格	πατρ-ί	μητρ-ί	θυγατρ-ί	γαστρ-ί	ἀνδρ-ί
呼格	πάτερ	μήτερ	θύγατερ		ἀνερ
主・呼格	πατέρ-ες	μητέρ-ες	θυγατέρ-ες	γαστέρ-ες	ἀνδρ-ες
対格	πατέρ-ας	μητέρ-ας	θυγατέρ-ας	γαστέρ-ας	ἀνδρ-ας
属格	πατέρ-ων	μητέρ-ων	θυγατέρ-ων	γαστέρ-ων	ἀνδρ-ῶν
与格	πατρά-σι	μητρά-σι	θυγατρά-σι	γαστρά-σι	ἀνδρά-σι

これらの語の語基（語幹と一致する）は母音交替を示す (§26 参照)：

πατήρ, μήτηρ, θυγάτηρ, γαστήρ:

単数主格：延長した母音、単数属格与格：ゼロ階梯

複数与格：ゼロ階梯、ρ の支援母音 (voyelle d'appui) としての ᾱ の発展とともに (§26 参照)。

ἀνήρ：ゼロ階梯が全ての格において単数主・呼格においての場合を除いて現れる。δ が ν と ρ の間に発音を容易にするため挿入される（語中音挿入 épenthèse）。

特殊例

ὁ ἀστήρ, 「星」はその母音 ε を単数属格および単数与格において保つ：

ἀστέρος, ἀστέρι；しかし複数与格 ἀστράσι。

48 鼻音語幹

[259]

名詞

- 例： ό άγών, άγώνος 競争
 ό δαίμων, δαίμονος ダイモン
 ό ποιμήν, ποιμένος 羊飼い
 ό δελφίς, δελφίνος 海豚

語幹	άγων-	δαιμον-	ποιμεν-	δελφίν-
主格	ό άγών	ό δαίμων	ό ποιμήν	ό δελφίς
対格	άγών-α	δαίμον-α	ποιμέν-α	δελφίν-α
属格	άγών-ος	δαίμον-ος	ποιμέν-ος	δελφίν-ος
与格	άγών-ι	δαίμον-ι	ποιμέν-ι	δελφίν-ι
呼格	άγών	δαῖμον	ποιμήν	
主・呼格	άγών-ες	δαίμον-ες	ποιμέν-ες	δελφίν-ες
対格	άγών-ας	δαίμον-ας	ποιμέν-ας	δελφίν-ας
属格	άγών-ων	δαιμόν-ων	ποιμέν-ων	δελφίν-ων
与格	άγῶσι	δαίμοσι	ποιμέσι	δελφῖσι

形容詞

[293]

- 例： εὐδαίμων, εὐδαιμον 至福の
 κακίων, κάκιον より悪い（κακόςの比較級、§61 参照）

語幹	εὐδαιον-		κακίον-	
	男・女性	中性	男・女性	中性
主格	εὐδαίμων	εὐδαιμον	κακίων	κάκιον
対格	εὐδαίμον-α	εὐδαιμον	κακίον-α/κακίω	κάκιον
属格	εὐδαίμον-ος	εὐδαίμον-ος	κακίον-ος	κακίον-ος
与格	εὐδαίμον-ι	εὐδαίμον-ι	κακίον-ι	κακίον-ι
呼格	εὐδαιμον	εὐδαιμον		
主・呼格	εὐδαιομον-ες	εὐδαίμον-α	κακίον-ες/κακίους	κακίον-α/κακίω
対格	εὐδαίμον-ας	εὐδαίμον-ας	κακίον-ας/κακίους	κακίον-α/κακίω
属格	εὐδαιμόν-ων	εὐδαιμόν-ων	κακίόν-ων	κακίόν-ων
与格	εὐδαίμοσι	εὐδαίμοσι	κακίοσι	κακίοσι

シグマ主格は -ν 語幹を伴うことは少ない：例えば、ό δελφίς, δελφίνος, 海豚, ή Σαλαμίς, Σαλαμίνας, サラミス島, μέλας, μέλαινα, μέλᾱν (属格 μέλᾱνος, μελαίνης, μέλᾱνος), 黒, οὐδ' ἄλλᾱς, τάλαινα, τάλᾱν, (属格 τάλᾱνος, ταλαίνης, τάλᾱνος), 不幸な、参照。

-ων (属格 -ωνος) に終わる名詞の意味論的意義については、§191 参照。

語幹末上にアクセントのある -v に終る語は主格と同じ呼格を持つ。

例： ό ποιμήν, -ένος 羊飼いの呼格 ποιμήν
 ό ἡγεμών, -όνος 指揮官の呼格 ἡγεμών

もしそうでない場合、呼格は語幹に一致する。

例： ό δαίμων, -ονος 神性、 呼格 δαίμων

複数与格において、-v はシグマ曲折語尾の前で、先行する母音の延長なしに脱落する。

三つの語尾を持つ形容詞 (μέλας, μέλαινα, μέλαν, 黒、および τάλας, τάλαινα, τάλαν, 不幸な、参照) は -α 曲用にならって規則的に曲用する女性名詞を持つ (§34 参照)。

-ίων, -ίωνとなる比較級の曲用の -ω および -ους に約音した形は通常の用法である。

アクセント

ό ἀγών および ό δελφίς, δελφίνος は σωτήρα の法則に従う (§20 参照)。

特殊例

ό Ἀπόλλων, Ἀπόλλωνος および ό Ποσειδῶν, Ποσειδῶνος
これらの二つの名詞は約音した対格形を持つ： Ἀπόλλω, Ποσειδῶ.
呼格： Ἀπολλων および Πόσειδον。

ό, ἡ κύων, κυνός, 犬
この語のアクセントは単音節の規則に従う (§42 参照)。
単数呼格は κύων である。

49 -σ 語幹

[263-264]

名詞

例： τὸ γένος, γένους 種族
 τὸ γέρας, γέρας 贈物

語幹	γενεσ-	γερασ-
主・対・呼格	τὸ γένος	τὸ γέρας
属格	γένους [< γενεσ-ος]	γέρας [< γερασ-ος]
与格	γένει [< γενεσ-ι]	γέρα [< γερασ-ι]
主・対・呼格	γένη [< γενεσ-α]	γέρα [< γερασ-α]
属格	γενῶν [< γενεσ-ων]	γεράων [< γερασ-ων]
与格	γένεσι [< γενεσ-σι]	γέρασι [< γερασ-σι]

形容詞および固有名詞

[263b]

例： εὐγενής, εὐγενές 高貴な
 ó Σωκράτης, Σωκράτους ソークラテース
 ó Περικλῆς, Περικλέους ペリクレース

語幹	εὐγενεσ-			
	男・女性		中性	
主格	εὐγενής		εὐγενές	
対格	εὐγενῆ	[< εὐγενεσ-α]	εὐγενές	
属格	εὐγενοῦς	[< εὐγενεσ-ος]	εὐγενοῦς	[< εὐγενεσ-ος]
与格	εὐγενεῖ	[< εὐγενεσ-ι]	εὐγενεῖ	[< εὐγενεσ-ι]
呼格	εὐγενές			
主・呼格	εὐγενεῖς	[< εὐγενεσ-ες]	εὐγενῆ	[< εὐγενεσ-α]
対格	εὐγενεῖς	[< εὐγενεσ-ας]	εὐγενῆ	[< εὐγενεσ-α]
属格	εὐγενῶν	[< εὐγενεσ-ων]	εὐγενῶν	[< εὐγενεσ-ων]
与格	εὐγενέσι	[< εὐγενεσ-σι]	εὐγενέσι	[< εὐγενεσ-σι]

語幹	Σωκρατεσ-		Περικλεεσ-	
主格	ó Σωκράτης		ó Περικλῆς	[< Περικλέης]
対格	Σωκράτη	[< Σωκρατεσ-α]	Περικλέᾱ	[< Περικλεεσ-α]
属格	Σωκράτους	[< Σωκρατεσ-ος]	Περικλέους	[< Περικλεεσ-ος]
与格	Σωκράτει	[< Σωκρατεσ-ι]	Περικλεῖ	[< Περικλεεσ-ι]
呼格	Σώκρατες		Περικλείς	[< Περικλεες]

第三曲用の -ος で終わる名詞は多数ありそして全て**中性名詞**である（それらの語義的意義については、§190 参照）。

-ας で終わる中性名詞はやや少ない；アッティカ方言では τὸ γέρας の代りに、しばしば τὸ γῆρας, γήρωσ 「古い」および τὸ κρέας, κρέωσ 「肉」に出会う。

-ος で終わる単数主格は語幹母音交替として説明される（§26 参照）。

母音の約音は母音間シグマの脱落から結果する。

男性および女性形容詞複数対格は類比によって複数主格上に形成される。

-εσ で終わる語幹末の前で母音を示す形容詞は εα を ā に約音し η には約音しない、それは曲折的（§9 参照）かつ音韻的類比（保護された ā、§8 参照）によってである。

例： ἐνδεής, ἐνδεές ~を欠いた ἐνδεᾶ (< ἐνδεεα < ἐνδεεσ-α)
 ὑγιής, ὑγιές 健全な ὑγιᾶ (< ὑγίεα < ὑγίεσ-α)。

-ης で終わる固有名詞は、-η においての対格に平行して -ην に終わる**対格**を持つ、それは -α 曲用男性名詞 (πολίτην, §35 参照) との類比によってである。

例： τὸν Σωκράτη ὀβυ τὸν Σωκράτην
τὸν Διογένη ὀβυ τὸν Διογένην

この範疇の固有名詞は一般に複合形容詞である (§195 参照)。

特殊例

[266]

ή αἰδώς, αἰδοῦς 「恥、羞恥心」は αἰδοο- 語幹を持つ：単数対格 αἰδῶ, 単数与格 αἰδοῖ。
ή ἠώς, ἠοῦς, 曙 (単数対格 ἠῶ, 単数与格 ἠοῖ) はアッティカ方言 ἠ ἕως (§32 参照) に対応するイオーニア形である。

50 母音交替を伴う -ῖ 語幹

[268, 269-1a]

例： ή πόλις, πόλεως 都市

語幹	πολι-/πολε-	
	単数	複数
主格	ή πόλις	πόλεις
対格	πόλιν	πόλεις
属格	πόλεως	πόλεων
与格	πόλει	πόλε-σι
呼格	πόλι	πόλεις

このタイプの名詞はほとんど全て**女性名詞**である。その多くは、接尾辞 -σις によって終わるが、動作の抽象名詞である (§190 参照)。

例： ή κίνησις, κινήσεως 動き (κινέω, 動く、参照)
ή πράξις, πράξεως 動作 (πράττω, 行動する、参照)
ή κάθαρσις, καθάρσεως 浄化 (καθαίρω, 浄化する、参照)

単数属格 πόληρος のホメーロス型がある。これは πόλεως という形を母音の量的音位転換の結果として含む事を認める (§13 参照)。アクセントの位置は音位転換によっては変化しない。複数属格 πόλεων のアクセントは単数属格との類比によって説明される。

複数主格において、語尾 -εις は約音の結果である。複数対格 πόλεις は主格との類比によって説明される。

特殊例

[269-1b]

非常に稀な語が -ι 語幹を持つ。これは曲用の中で不変であり、なおその上規則的である。

例： ἴδις, ἴδι 詳しい、精通した 属格 ἴδιος など
ὁ κίς, κίος 木の虫 単数対格 κίην

ὁ, ἡ οἶς, οἶος 「羊、雌羊」は起源にディガンマを含む語幹 (ラテン語 ovis 参照) を持つ：
単数対格 οἶν 単数与格 οἶν 複数主格 οἶες など。

51 -ευ および -υ 語幹

[275]

名詞

例： ό βασιλεύς, βασιλέως 王
 ό πέλεκυς, πελέκεως 斧
 τὸ ἄστυ, ἄστεως 街

語幹	βασιλευ-/βασιλη(φ)-	πελεκυ-/πελεκε(φ)-	ἄστυ-/ἄστε(φ)-
主格	ό βασιλεύς-ς	ό πέλεκυς-ς	τὸ ἄστυ
対格	βασιλέᾱ	πέλεκυ-ν	ἄστυ
属格	βασιλέως	πελέκεως	ἄστεως
与格	βασιλεῖ	πελέκει	ἄστει
呼格	βασιλεῦ	πέλεκυ	ἄστυ
主・呼格	βασιλῆς ὅς τε βασιλεῖς	πελέκεις	ἄστη
対格	βασιλέᾱς ὅς τε βασιλεῖς	πελέκεις	ἄστη
属格	βασιλέων	πελέκεων	ἄστεων
与格	βασιλεῦ-σι	πελέκε-σι	ἄστει-σι

形容詞

[297]

例： ήδύς, ήδεία, ήδύ 快い

語幹	ήδύ-/ήδε(φ)-	ήδειᾱ-	
	男性	女性	中性
主格	ήδύς-ς	ήδειᾱ	ήδύ
対格	ήδύ-ν	ήδειᾱν	ήδύ
属格	ήδέ-ος	ήδειᾱς	ήδέ-ος
与格	ήδει	ήδειᾱ	ήδει
呼格	ήδύ	ήδειᾱ	ήδύ
主・呼格	ήδεις	ήδειαι	ήδέ-α
対格	ήδεις	ήδειᾱς	ήδέ-α
属格	ήδέ-ων	ήδειῶν	ήδέ-ων
与格	ήδέ-σι	ήδειᾱς	ήδέ-σι

-ευς 語幹の名詞は全て**男性名詞**で**鋭調語**である。

[275]

大抵の場合職業または民族名に関する（§189 参照）。

例： ό χαλκεύς, χαλκέως 鍛冶屋
 ό ἱερέυς, ἱερέως 聖職者
 ό Ἀχαρνεύς, Ἀχαρνέως アカルナイ行政区の住民

この群の名詞と形容詞はディガンマ語幹に由来する。ディガンマは子音の前に υ として現れる；それは母音間の位置に入る (§16 参照)。 [275]

βασιλεύς 型の名詞は起源的に $-\eta\Gamma$ に終る長母音の語幹を持つ。η は単数主格と呼格および複数与格において短縮した。単数・複数対格並びに単数属格は量的音位転換に従った；叙事詩言語は音位転換のない形を保っている： βασιλῆα, βασιλῆας, βασιλῆος。

複数属格において、η は他の長母音 ω の前では短縮した。

複数主格 βασιλείς の形は後期の型である；その形はまた、類比によって、複数対格の代わりに用いられる。

その他の $-\upsilon$ 語幹の名詞・形容詞語幹はゼロ階梯（単数主・対・呼格）と e（イー）階梯の間の交替を示す。それらの単数・複数属格は βασιλεύς 型のそれとの類比によって形成される。

πέλεκυς 型名詞曲用は正確に $-\iota\varsigma$ 語幹女性名詞曲用に対応する。アクセントについても同様である（πόλις, §50 参照）。ἄστυ 型中性名詞は、中性の特徴である主・対・呼格は別として、語尾およびアクセント法の同じ特殊性を提示する。

ῆδύς 型形容詞の大部分は鋭調語である。例外として以下に気づくだろう。

θηλυς, θήλεια, θῆλυ, 女性の

ἡμισυς, ἡμίσεια, ἡμισυ, 半分の

52 特殊例

[276]

語尾が母音に先行される $-\epsilon\upsilon\varsigma$ 語幹名詞は単数・複数属格において $\epsilon\omega$ を ω に、単数・複数対格において $\epsilon\alpha$ を α に約音する。

例： ὁ Πειραιεύς	ペイライエウス	属格	Πειραιῶς	対格 Πειραιᾶ
οἱ Εὐβοεῖς	エウボエイς	属格	Εὐβοῶν	対格 Εὐβοᾶς

ὁ υἱός, 息子

この語は混合曲用を持つ：

単数	主格	ὁ υἱός	複数	υἱεῖς
	対格	υἱόν		υἱεῖς
	属格	υἱέος		υἱέων
	与格	υἱεῖ		υἱέσι
	呼格	υἱέ		υἱεῖς

また ι のないこれらの全ての形を見る： υῖός, υῖέος など。

後期には、 $-o$ 曲用の形は一般化された：

単数属格	υἱοῦ	単数与格	υἱῶ	複数主格	υἱοί など
------	------	------	-----	------	---------

τὸ δόρυ, 槍； τὸ γόνυ, 膝

[285-5, 10]

これらの語は歯音語幹（δορατ-/γονατ-）に従って曲用する、§44 参照：

単数属格 δόρατος, γόνατος 単数与格 δόρατι, γόνατι, など。

しかしながら τὸ δόρυ はまた単数属格 δορός および単数与格 δορί を持つ。

βοῦς, ναῦς, Ζεὺς

[275]

ὁ, ἡ βοῦς, βοός 牛, 雌牛
 ἡ ναῦς, νεώς 船
 ὁ Ζεὺς, Διός ゼウス

語幹	βου-/βο(Ϝ)-	ναυ-/νη(Ϝ)-	Ζευ-/Δι(Ϝ)-
主格	ὁ, ἡ βοῦς	ἡ ναῦς	ὁ Ζεὺς
対格	βοῦν	ναῦν	Δία
属格	βοός	νεώς	Διός
与格	βοῖ	νηί	Διῖ
呼格	βοῦ		Ζεῦ
主・呼格	βόες	νηες	
対格	βοῦς	ναῦς	
属格	βοῶν	νεῶν	
与格	βουσί	ναυσί	

この三つの語の語幹はディガンマ語幹末を持っていた。それはυとして子音の前で現れ、そして母音間の位置で落ちた (§16 参照)。

ἡ ναῦς

子音曲折語尾の前で、用いられる語幹は ναυ- と発音される形の下に νᾶϜ- である。

その他の場合、用いられる語幹は νηϜ- である：単数属格 νεώς は量の音位転換 (< νηός) に従い、複数属格においては母音 η は ω の前で短縮される。

ἡ ναῦς のように ἡ γραῦς 「老婆」は曲用する：

[279]

単数	主格	ἡ γραῦς	複数	γραῖες
	対格	γραῦν		γραῦς
	属格	γραῖός		γραῶν
	与格	γραῖί		γραυσί
	呼格	γραῦ		γραῖες

Ζεὺς

この語の多数の変異型がホメーロス言語および種々の方言において存在する：それらは辞書の中で見られるだろう。

53 その他の -v 語幹

[268]

例： ό ἰχθῦς, ἰχθύος 魚

語幹	ἰχθῦ-
主格	ό ἰχθῦς
対格	ἰχθῦν
属格	ἰχθύος
与格	ἰχθύι
呼格	ἰχθύ
主・呼格	ἰχθύες
対格	ἰχθῦς
属格	ἰχθύων
与格	ἰχθύσι

この範疇に属する名詞は長 -v 語幹を持つのだが、それは長音 (ό ἰχθῦς 参照) であれあるいは短音 (ἡ πίτυς 松、参照) であれ、曲折語尾への影響なしにである。この v はここでは古い F ではない。

-v 語幹は補足的音節を構成する曲折語尾の前で短縮する。
単数主格 ἰχθῦς しかし、単数属格 ἰχθύος[v] など。

複数対格 ἰχθῦς は古い曲折語尾 -vς に由来する (v の脱落)。ἰχθύας の形も証明される。この形はコイナー (κοινή) において広がる傾向がある。

54 -oi および ω 語幹

[267, 279]

例： ό πειθώ, πειθοῦς 説得
 ό ἥρως, ἥρωος 英雄

語幹	πειθοι-	ἥρω-
主格	ἡ πειθώ	ό ἥρως
対格	πειθώ	ἥρωα
属格	πειθοῦς	ἥρωος
与格	πειθοῖ	ἥρωι
呼格	πειθοῖ	ἥρως
主・呼格		ἥρωες
対格		ἥρωας
属格		ἥρώων
与格		ἥρωσι

πειθώ 型の名詞は全て女性名詞で鋭調語である。問題となるのは複数形を欠いたいくつかの名詞、大部分は固有名詞である。語幹は -oi に終る：純粋な状態で呼格において見られる。その他の格において約音形が見られる。語尾の ι は yod (§16 参照) から由来し、それは母音間の位置で落ちる。

ἥρως 型の名詞は、非常に稀だが、原則として約音しない。しかしながら、アッティカ方言では、ἥρως の代りに、以下の様な約音がある：τὸν ἥρω, τῷ ἥρω, τοὺς ἥρωες。また呼格 ἥρω も存在する。残りに関しては、曲用は全く規則的である。

54a 第三曲用形容詞の要約

1. 単純歯音語幹の形容詞 (§44 参照)

例： ἄχαρις, ἄχαρι 不快な
 πένης, 属格 πένητος 貧しい

能動完了分詞もまた男性・中性形において歯音語幹を持つ、§185 参照。

2. -ντ 語幹の形容詞 (§45 参照)

例： πᾶς, πᾶσα, πᾶν 全ての
 ἐκών, ἐκούσα, ἐκόν 自発的な
 χαρίεις, χαρίεσσα, χαρίεν 魅力的な

動詞能動相分詞は、完了を除く全動詞幹において、-ντ 語幹を持ち、この型の形容詞のように曲用する。受動相アオリスト分詞についても同様となる、§182-184 参照。

3. 鼻音語幹の形容詞 (§48 参照)

例： εὐδαίμων, εὐδαμιον 至福の
 μέλας, μέλαινα, μέλαν 黒い
 τάλας, τάλαινα, τάλαν 不幸な

-ίων[ι], -ιον (§59, 60 参照) に終る比較級もまたこの曲用に従う、(§48 も参照)。

例： κακίων, κάκιον より悪い

4. -σ 語幹の形容詞 (§49 参照)

例： εὐγενής, εὐγενές 高貴な

5. -υ/ε(Ϝ) 語幹の形容詞 (§51 参照)

例： ἡδύς, ἡδεῖα, ἡδύ 快い

55 副詞

[341]

副詞は**曲用しない語**である。

多くの副詞は語尾として**固定した格形**を持つ；その他のものは特異的に**副詞的なる接尾辞**によって形成される。

56 -ως に終わる仕方の副詞

[343]

形容詞語幹から -ως 語尾を持つ仕方の副詞が形成される。古典期において、それは非常に生き生きとしたかつ非常に有力に行われた語形成である。

-ως 語尾は印欧語の古い具格語尾 (*-ō) に関係があるようである。ὥδε, οὕτω(ς) 「このように」も参照。

例：		語幹	副詞	
σοφός	賢い	σοφο-	σοφῶς	賢く
δίκαιος	正しい	δικαιο-	δικαίως	正しく
ἀπλοῦς	単純な	ἀπλοο-	ἀπλῶς	単純に
πᾶς	全ての	παντ-	πάντως	完全に
εὐδαιμόνων	至福の	εὐδαιμον-	εὐδαιμόνως	幸福にも
σαφής	明らかな	σαφεσ-	σαφῶς	明らかに
ἥδύς	快い	ἥδυ-/ἥδε-	ἥδέως	快く

57 その他の副詞形成

[341]

多くの副詞は**固定された格語尾**を示す

主格から：	εὐθύς	すぐに
	ἄλῆς	十分に
	など	
対格から (対格 10 参照)：	πάλιν	再び
	μάτην	空しく
	ἄγαν, λίαν	余りに
	など	
属格から： 前置詞を伴って：	δεξιᾶς	正しく
	ἐκποδῶν	遠くに
	ἐξαίφνης	突然に
	など	
与格から：	πολλῶ	遥かに、遠くから (比較級あるいは最上級と)
	εἰκῆ	偶然に
	など	

形容詞の単数中性形は副詞として用いられることがある（対格 10 参照）。

例：	μέγα, πολύ	非常に、沢山
	μικρόν, ὀλίγον	ほとんど～ない
	ταχύ	速く
	など	

場所の副詞は、副詞的接尾辞によってあるいは方向（latif（方向格）または奪格）の意味または処格に固定された格語尾によって、特徴付けられる（§77 および 218 参照）。

例：	ἐνθεν	そこから（ἐν と -θεν からなる。出所を示す接尾辞）
	θύραζε	扉の所で、外で（複数対格 θύρας と -δε から、副詞的 latif 接尾辞）
	οἴκοι	家で（*-οι：処格の古い語尾）

数副詞は特徴的接尾辞 -κις 「(たくさんの) 回数」を示す（§84-85 参照）。πολλάκις 「しばしば」もまた参照。

固定された動詞形は時に副詞的に用いられることがある。

例：	ἀμέλει (ἀμελέω 「心配しない」の命令法)、「もちろん、確かに (心配無用)」
----	-----------------------------------------------

仕方・場所および時間の代名詞的副詞については、§77 参照。

58 動詞付加辞 Les adverbiaux

[891, 1638]

前置詞－動詞接頭辞（§270-272 および 274 参照）は多くの場合古い副詞から派生する。ホメーロスの言語のようなものにおいてははまだそのように用いられる。古典期においては稀に副詞の機能にあるそれらに会う。

形容詞および副詞の比較の度合い

59 形容詞の比較級および最上級

[313ff]

形容詞の比較級と最上級は語幹に加わる接尾辞によって特徴付けられる語尾を用いて形成される。

比較級と最上級の二つの型がある：

— -τερος, -τέρᾱ, -τερον で終わる比較級 [313]

— -τατος, -τάτη, -τατον で終わる最上級

— -ίων[ι], -ίων で終わる比較級 [318]

— -ιστος, -ίστη, -ιστον で終わる最上級

60 -τερος, -τέρᾱ, -τερον で終わる比較級および -τατος, -τάτη, -τατον で終わる最上級

[313ff]

これらの語尾は形容詞の男・中性語幹に加わる。

例：		語幹	比較級	最上級
δίκαιος, -ᾱ, -ον	正しい	δικαιο-	δικαίό-τερος	δικαίό-τατος
μέλας, μέλαινα, μέλαν	黒い	μελαν-	μελάν-τερος	μελάν-τατος
ἀληθής, -ές	真実の	ἀληθηεσ-	ἀληθέσ-τερος	ἀληθέστατος
βραχύς, βραχεῖα, βραχύ	短い	βραχῦ-	βραχῦ́-τερος	βραχῦ́-τατος

このように形成された比較級と最上級は規則的に -α/ο の形容詞曲用に従う。それらは常に男性形容詞とは異なる女性形を持つ (§37 参照)。

例	εὐκλεής, -ές	高名な	語幹	εὐ-κλεεσ-
			比較級	εὐκλεέστερος, -τέρᾱ, -τερον
			最上級	εὐκλέστατος, -τάτη, -τατον

比較級形において単音節が三つ連続するのを避けるため、-ο 語幹は語幹末母音を先行する音節が短い時長くする。

例：		語幹	比較級	最上級
σοφός, -ή, -όν	賢い	σοφο-	σοφώ-τερος	σοφώ-τατος
νέος, -α, -ον	若い	νεο-	νεώ-τερος	νεώ-τατος

いくつかの -ο/-α に終る形容詞は -ο を接尾辞の前に保持しない。

[315]

例：		語幹	比較級	最上級
φίλος, -η, -ον	親愛なる	φιλο-	φίλ-τερος	φίλ-τατος
γεραῖός, -ά, -όν	老いた	γεραιο-	γεραί-τερος	γεραί-τατος

この最後の形容詞は、他の -αιος 形容詞と同様に、その比較級、最上級を副詞 πάλαι 「かつて」上に構成される παλαιότερος および παλαιάτατος (παλαιός, -ά, -όν 「古い」の比較級および最上級) との類比によって形成されると思われる。

ἀληθέσ-τερος 型との類比によって、いくつかの形容詞について、特に -ων, -ον の形容詞について、-έστερος, -έστατος の接尾辞の拡張が課せられる。

例：		語幹	比較級	最上級	
	εὐδαίμων, -ον	幸福な	εὐδαιμον-	εὐδαιμον-έστερος	εὐδαιμον-έστατος

-ο/-α の約音形容詞は接尾辞の同じ拡張を用いる。

例：		語幹	比較級	最上級	
	ἀπλοῦς, -ῆ, -οῦν	単純な	ἀπλοο-	ἀπλούστερος	ἀπλούστατος

同様にいくつかの形容詞は以下のようなものである

χαρίεις, χαρίεσσα, χαρίεν	魅力的な	語基	χαριεντο-
		比較級	χαριέστερος
		最上級	χαριέστατος
πένης, 属格 πένητος	貧しい	語基	πενητ-
		比較級	πενέστερος
		最上級	πενέστατος

61 -ίων[ι], -ιον で終わる比較級および -ιστος, -ίστη, -ιστον で終わる最上級

[318, 319]

この語尾は直接語基に結合するが、それは形容詞語幹と強くは一致しない。ある場合、比較級と最上級は固有語基さえ持つ。比較級の接尾辞は語基と結びつきながら、ときに重要な音韻的变化をもたらした。

-ίων[ι]/-ιστος 形成は稀である（-ίων に終る比較級の曲用については、§48 参照）。しかしながら、その形成はよく使われる形容詞に影響する。特に量または質の要素について表現する語のそれである：

	比較級	最上級
善い：	ἀμείνων, ἄμεινον より相応しい、より可能である βελτίων, βέλτιον (道徳的に) より良い、より好ましい κρείττων, κρεῖττον より強い λῶων, λῶον より好ましい	ἄριστος βέλτιστος κράτιστος λῶστος
悪い：	χείρων, χειρόν より悪い質の κακίων, κακίον より悪い (κακός 参照) ἥττων, ἥττον より弱い	χείριστος κάκιστος (副詞 ἥκιστα)

大きい：	μείζων, μειζον より大きい (μέγας 参照) πλείων, πλέον より数 (πολύς 参照) または量が多い	μέγιστος πλεῖστος
小さい：	ἐλάττων, ἑλαττων 数が少ない、より小さい μείων, μειῖον 数が少ない	ἐλάχιστος

また、以下を参照

		比較級	最上級
αἰσχροῦς, -ά, -όν	恥すべき	αἰσχίων, αἴσχιον	αἴσχιστος
ἐχθροῦς, -ά, -όν	憎らしい、敵意ある	ἐχθίων, ἔχθιον	ἐχθιστος
καλός, -ή, -όν	美しい	καλλίων, κάλλιον	κάλλιστος
ῥάδιος, -α, -ον	容易な	ῥάων, ῥᾶον	ῥᾶστος
ἡδύς, -εῖα, -ύ	快い、甘い	ἡδίων, ἡδιον	ἡδιστος
ταχύς, -εῖα, -ύ	速い	θάττων, θᾶττων	τάχιστος

副詞 μάλα「全く、非常に」は比較級 μάλλον「先ず、より一層」最上級 μάλιστα「最も、全く」を持つ。
形容詞の前に用いられる μάλα は形容詞に絶対最上級の意味を与える。

例： μάλα πολλά 非常に多い (物)

μάλλον および μάλιστα は時に比較級および最上級を強調する。 [1068]

例： μάλλον ἐχθίων より敵意のある
μάλιστα φίλτατος より愛されている、最愛の

最上級が続く ώς または ὅτι は「できる限り～」を意味する、§348, ώς 1 参照。 [1086]

62 副詞の比較級と最上級

[345]

形容詞の単数中性比較級と複数中性最上級はそれぞれ副詞の比較級および最上級として作用する。

例：		比較級	最上級
σοφῶς	賢く	σοφώτερον	σοφώτατα
ἀπλῶς	単純に	ἀπλούστερον	ἀπλούστατα
εὐδαιμόνως	幸福に	εὐδαιμονέστερον	εὐδαιμονέστατα
σαφῶς	明らかに	σαφέστερον	σαφέστατα
ἡδέως	快く	ἡδιον	ἡδιστα
ταχέως	速く	θᾶττων	τάχιστα
εὖ	よく	ἄμεινον	ἄριστα
ὀλίγον	ほとんど～ない	ἥττων	ἥκιστα

また、以下を参照：

ἄνω	高く	ἀνωτέρω	ἀνωτάτω
πόρρω	遠くに	πορρωτέρω	πορρωτάτω
μᾶλα	非常に	μᾶλλον	μάλιστα

63 比較級の二番目の語 [1069]

比較級の二番目の語はあるいは**属格**に（属格 15 参照）あるいは**最初の語に分離的接続詞 ἤ**が先行して**同格**に置かれる（§348, ἤ 2 参照）。

類比または同一性を示す表現とともに、比較の語は**接続詞 καί**（§348, καί 3 参照）によって導かれるか、あるいは**与格**に（与格 2 参照）置かれる。

相対最上級とともに、比較の語は**属格**に（部分属格、属格 7 参照）置かれる。 [1085, 1315, 1434]

63a 比較級使用に関する注意 [1066]

時に比較級は、その古い対比的意味に従って比較の度合いを示さず、単純に二つの本質を対比する。

Arist. Rh. 1402a 24 : τὸν ἥττω λόγον κρείττω ποιεῖν
 弱い議論を強くすること（ソフィスト プロタゴラスの命題）

比較の二番目の語がない時、比較級は強調された度合いまたは逆に弱められた度合いの質の所有を示すことがある。 [1082d]

Pl. Smp. 203a : μακρότερον μὲν, ἔφη, διηγήσασθαι· ὁμῶς δέ σοι ἐρῶ.
 それは話すにはかなり長い、と彼女は言った；しかしそれでも私はあなたにそれを話しましょう。

代名詞

指示代名詞

64 οὗτος, αὐτή, τοῦτο

[333, 1240ff]

この代名詞は話者からある距離に見られるまたはそれについては既知であると認めつつ語る人や物を示す。また、興味の圏内にまたは受取り手の視点に属するものに関連する。

例：	οὗτοι οὐκ αἰσχύνονται	「その（より近い他の人々に対して）人々は恥を持たない」、または、「この（我々が知っている）人々は恥を知らない」。
	ταῦτα εἰπών	それ（人が理解したばかりのこと）を言った後で。
	ὦ οὗτος	おお、君！（通常の呼びかけ）。

οὗτος は名詞によって再び続けられ限定され、あるいは名詞を続けることがある。名詞はその時一般に冠詞が先行する。 [1171]

例：	οὗτοι οἱ συκοφάνται	あるいは	οἱ συκοφάνται οὗτοι	（より稀）
	これらの人々、	密告者達；	これらの密告者達	

関係代名詞の相関語としての οὗτος の用法については、§76, 表、および §78 参照。

		男性	女性	中性			男性	女性	中性
単数	主・呼格	οὗτος	αὐτή	τοῦτο	複数	主・呼格	οὗτοι	αὐται	ταῦτα
	対格	τοῦτον	ταύτην	τοῦτο		対格	τούτους	ταύτας	τούτους
	属格	τούτου	ταύτης	τούτου		属格	τούτων	τούτων	τούτων
	与格	τούτῳ	ταύτῃ	τούτῳ		与格	τούτοις	ταύταις	τούτοις

この代名詞の形において、冠詞の形を含む事が分かる。それは冠詞が起源において指示代名詞であったという事である：したがって、男・女性形主格は帯気音（冠詞の形 ὁ, ἡ, οἱ, αἱ 参照）であり、そして του/ταυ の交替は冠詞の曲用における母音交替に対応する。

単数中性主・対・呼格の -ο 語尾は代名詞曲用の特徴である。語尾はまた冠詞（古い代名詞）中性において現れる (§28 および 29 参照)。

女性複数属格は類比によって男性形のように形成される。

65 ὅδε, ἥδε, τόδε

[333, 1240ff]

この代名詞はその場にある人または物を示す。これは指で指し示すもの、あるいはすぐに言おうとするものである。それはまた関心域に属するものまたは話者の視点に属するものに関係することがある。

例：	ἐν τῇδε τῇ οἰκίᾳ	「この家の中で」、	「ここにある家の中で」、	または、「私のものであるこの家の中で」
	τάδε γράφω	これ（以下のこと）を書く		

οὗτος のように、ὄδε は名詞によって限定されるが、その際名詞は一般にその冠詞に先行されている、あるいは ὄδε は名詞を繰り返す。

例： οἶδε οἱ συκοφάνται または οἱ συκοφάνται οἶδε (より稀)
 この人々、密告者；ここにいるこれらの密告者；これらの密告者

	男性	女性	中性		男性	女性	中性
単数 主・呼格	ὄδε	ἤδε	τόδε	複数 主・呼格	οἶδε	αἶδε	τάδε
対格	τόνδε	τήνδε	τόδε	対格	τούσδε	τάσδε	τάδε
属格	τοῦδε	τῆσδε	τοῦδε	属格	τῶνδε	τῶνδε	τῶνδε
与格	τῶδε	τῆδε	τῶδε	与格	τοῖσδε	ταῖσδε	τοῖσδε

この代名詞は指示小辞 -δε が加わる冠詞（古い指示代名詞）の形から成る。

66 ἐκεῖνος, ἐκεῖνη, ἐκεῖνο

[1257-1261]

この代名詞は空間的あるいは時間的に離れた人または物を示す。

例： ἐκεῖνοι あそこの（時間的にはなれた、距離が離れた、または、不在の）人々
 ἐκεῖνη τῆ ἡμέρᾳ あの（離れた）日

ἐκεῖνος はまた名詞によって限定される、その際一般に冠詞が先行する、あるいは名詞を繰り返すことがある。

例： ἐκεῖνοι οἱ συκοφάνται または οἱ συκοφάνται ἐκεῖνοι (より稀)
 あれらの人々、密告者達；あれらの密告者達

これは αὐτός のように曲用する、§67 参照。

67 限定詞 αὐτός, αὐτή, αὐτό

[327, 328, 1204-1206]

この代名詞は代名詞が関係する人あるいは物の同一性 *identité* を主張する。それは「自ら」、「それ自身」を意味する。

例： αὐτός ἔγωγε 私自身、私自ら、自ら

この意味では冠詞が先行する名詞を伴うことがある。

例： αὐτός ὁ βασιλεύς, ὁ βασιλεύς αὐτός 王自身、王自ら

人称代名詞に結合して、再帰代名詞を作る (§69 参照)。

[1218, 1219]

例： σεαυτὸν ἐπαινεῖς 君は君自身を賞賛する。
 ἡμῖν αὐτοῖς πιστεύομεν 我々は我々自身に信を持っている

それは冠詞に先行されて用いられる（形容語の位置で、名詞の限定詞として、§201 参照）、そしてその時「同一の」を意味する。 [1204]

この意味を伴い、ὁ αὐτός は属詞の機能においてさえ冠詞を保つ (§208 参照)。 [1210]

例： ὁ αὐτός βασιλεύς 同じ王
 ὁ αὐτός εἶμι 私は同じである。

もし比較語（～と同じ～）があるなら、これは与格に置かれる（与格 2 参照）

αὐτός はまた三人称人代名詞の役もする (§68 参照)。 [1204]

全ての格において、主格を除いて、その時非常にしばしば同一性についての主張の意味を失う。 [1212]

例： αὐτοὺς ὄρω 私は彼らを見る。
 αὐτῷ διαλέγομαι 私は彼に話す。
 しかし、αὐτὸς λέγει 話すのは彼自身だ。

	男性	女性	中性		男性	女性	中性
単数 主・呼格	αὐτός	αὐτή	αὐτό	複数 主・呼格	αὐτοί	αὐταί	αὐτά
対格	αὐτόν	αὐτήν	αὐτό	対格	αὐτούς	αὐτάς	αὐτά
属格	αὐτοῦ	αὐτῆς	αὐτοῦ	属格	αὐτῶν	αὐτῶν	αὐτῶν
与格	αὐτῷ	αὐτῇ	αὐτῷ	与格	αὐτοῖς	αὐταῖς	αὐτοῖς

中性単数主・対格の -ο 語尾については、οὔτος の曲用表注、§64 参照。

68 人称代名詞

[325]

一人称単数		二人称単数	
主格	ἐγώ	主・呼格	σύ
対格	ἐμέ	対格	σέ
属格	ἐμοῦ	属格	σοῦ
与格	ἐμοί	与格	σοί
一人称複数		二人称複数	
主格	ἡμεῖς	主・呼格	ὕμεῖς
対格	ἡμᾶς	対格	ὕμᾶς
属格	ἡμῶν	属格	ὕμῶν
与格	ἡμῖν	与格	ὕμῖν
三人称			
	単数		複数
対格	αὐτόν, -ήν, -ό	対格	αὐτούς, -άς, -ά
属格	αὐτοῦ, -ῆς, -οῦ	属格	αὐτῶν, -ῶν, -ῶν
与格	αὐτῷ, -ῇ, -ῷ	与格	αὐτοῖς, -αῖς, -οῖς

主格代名詞並びに単数一・二人称のアクセントを置かれた形は代名詞を強調する時用いられる。 [325a, 1192]

例： οὐκ ἐμοὶ ἀλλὰ σοὶ ἀρέσκει それを気に入っているのは私ではなく君だ。

しかし ζηλω̄ σε τοῦ νοῦ 私は君を理性ゆえに賞賛する。

前置詞の後、代名詞は一般にアクセントが置かれる。

例： πρὸς σέ, ἐπὶ ἐμοί

三人称人称代名詞として用いられると、代名詞 αὐτός は同一性を主張する意味を非常にしばしば失う (§67 参照)。

例： αὐτὸν βλέπω 彼を見る

アッティカ方言では三人称代名詞のより稀で古風な形が存在する：

単数	対格 ξ, ἐ	属格 οὔ, ού	与格 οἶ, οί
複数	主格 σφεῑς	対格 σφᾶς	属格 σφῶν
		与格 σφῶν	与格 σφίσι(ν)

アクセントの置かれた全ての形は一般に再帰的意味を持つ。最もよく用いられた形は与格のそれである。

69 再帰代名詞

[329]

再帰代名詞は人称代名詞を代名詞 αὐτός と結合している (§67 参照)。それは再帰関係を示すが、文の文法上の主語に強くは関係しない。

Ar. Nu. 385: ἀπὸ σαυτοῦ ἴγῳ σε διδάξω.

おまえ自身から (=おまえ自身のもっているもの、それを基にして) この私はお前を教えよう。

	一人称	二人称	三人称
単数	対格	ἐμαυτόν, -ήν	σεαυτόν, -ήν
	属格	ἐμαυτοῦ, -ῆς	σεαυτοῦ, -ῆς
	与格	ἐμαυτῶ, -ῇ	σεαυτῶ, -ῇ
複数	対格	ἡμᾶς αὐτούς, -άς	ὕμᾶς αὐτούς, -άς
	属格	ἡμῶν αὐτῶν	ὕμῶν αὐτῶν
	与格	ἡμῖν αὐτοῖς, -αῖς	ὕμῖν αὐτοῖς, -αῖς
			ἐαυτόν, -ήν, -ό
			ἐαυτοῦ, -ῆς, -οῦ
			ἐαυτῶ, -ῇ, -ῶ
			σφᾶς αὐτούς, -άς または ἐαυτούς, -άς
			σφῶν αὐτῶν または ἐαυτῶν
			σφίσιν αὐτοῖς, -αῖς または ἐαυτοῖς, -αῖς

また σαυτόν などそして αὐτόν などの形も σεαυτόν および ἐαυτόν の代りに見られる。

時に三人称の再帰は一人称または二人称の代わりに用いられる。

[1230]

所有表現における代名詞要素の用法

70 所有形容詞

[330]

所有形容詞は対応する人称代名詞語基上に形成される。

	一人称	二人称	三人称
単数	ἐμός, ἐμή, ἐμόν	σός, σή, σόν	
複数	ἡμέτερος, -τέρα, -τερον	ὑμέτερος, -τέρα, -τερον	σφέτερος, -τέρα, -τερον

所有形容詞の用法

冠詞によって限定された名詞とともに、所有形容詞は通常形容語の位置で用いられる (§201, 209 参照)。 [1182]

例: ὁ ἐμός φίλος 私の友

所有形容詞は目的語的属格 (属格 1 参照) に等価となることがある。 [1196]

例: αἱ ὑμέτεροι ἐλπίδες (Th.) 君達の希望

アッティカ方言は σφέτερος は稀にしか使わない。そして、常に再帰的意味とともに用いる。

[1198, 1202d, 1203b, 1203N]

例: οἱ τὰ σφέτερα σῶζειν βουλόμενοι (Lys.) 彼ら自身の幸福を保つことを願う人々

例外的に、σφέτερος は一または二人称に関連することがある：「我々自身の」、「君達自身の」

71 人称代名詞の属格

[1184, 1199a, b]

所有関係はまた非再帰あるいは再帰人称代名詞属格によって現されることがある：実際最もよく見られる言い回しである。

属格に置かれた人称代名詞は通常並置 (§209 参照) の位置で名詞に続く。即ちそれは再帰代名詞属格が大抵の場合形容語の位置にある時 (§201, 209 参照) である。

例: ὁ πατήρ μου 私の父
 ὁ φίλος αὐτοῦ または ὁ φίλος ἐκεῖνου 彼の友
 τὸν ἑμαυτοῦ πατέρα ὁρῶ 私自身の父を見る
 または τὸν πατέρα τὸν ἑμαυτοῦ ὁρῶ
 しかしまた ὁ ἐκεῖνου φίλος 彼にとっての彼の友

属格における所有の関係の表現については、属格 1 も参照

[1297-1305]

複数において、一人称、二人称再帰代名詞の代りに ἡμέτερος αὐτῶν および ὑμέτερος αὐτῶν の言い回しが用いられる。 [1200b]

例： τὸν ἡμέτερον αὐτῶν πατέρα ὁρῶμεν 我々は我々自身の父を見る。

与格もまた所有関係をあらわすことがある。(与格1参照) [1476-1480]

例： σοὶ μὲν ἔστι πόλις, ἐμοὶ δ' ὁ οὐ (E.) 君、君はポリスを持っているが私は持たない。

しばしば文脈が所有関係を十分に理解させる。

例： οἱ γονεῖς τὰ τέκνα στέργουσιν 両親はその子供を愛する。

72 相互代名詞： ἀλλήλους, ἀλλήλας, ἄλληλα [331]

この代名詞は「互いに」を意味する。主格では用いられない。

例： ἀλλήλοις ἐκέλευσαν 彼らは互いに激励した。

	男性	女性	中性
対格	ἀλλήλους	ἀλλήλας	ἄλληλα
属格	ἀλλήλων	ἀλλήλων	ἀλλήλων
与格	ἀλλήλοις	ἀλλήλαις	ἀλλήλοις

関係代名詞、疑問代名詞および不定代名詞

73 関係代名詞 [338]

単数		男性	女性	中性	複数		男性	女性	中性
		主格	ὅς	ἥ			ὅ	主格	οἷ
	対格	ὃν	ἣν	ὄ	対格	οὓς	ἄς	ἅ	
	属格	οὗ	ἣς	οὗ	属格	ῶν	ῶν	ῶν	
	与格	ὧ	ἣ	ὧ	与格	οῖς	αῖς	οῖς	

接尾辞 -περ は関係代名詞に加えられて (ὅσπερ, ἥπερ, ὅπερ)、それに強調と正確さ (§348, -περ 参照) のニュアンスを授ける。

例： τοῦτον λέγω ὅσπερ ἦκει 私はそこにいる人のことを話す。

関係代名詞の統辞については、§78-81 参照。

74 τίς/τις: 疑問 / 不定

[334, 1262, 1263]

アクセントの置かれた τίς は代名詞のもしくはは直接または間接疑問限定辞の意味を持つ。

文中では、常に鋭アクセントを保つ。

[1262, 1263]

後倚辞の時、それは代名詞または不特定限定詞である。

[1266-1270]

例： τίς ὁ ἀνήρ; この男は誰か？
 (ἀνήρ) τις ある男、誰かある男

		男・女性	中性	男・女性	中性
単数	主格	τίς	τί	τις	τι
	対格	τίνα	τί	τινά	τι
	属格	τίνος	τίνος	τινός	τινός
	与格	τίνι	τίνι	τινί	τινί
複数	主格	τίνες	τίνα	τινές	τινά
	対格	τίνας	τίνα	τινάς	τινά
	属格	τίνων	τίνων	τινῶν	τινῶν
	与格	τίσι(v)	τίσι(v)	τισί(v)	τισί(v)

単数属格および与格において τοῦ/του および τῶ/τω を τίνος/τινός および τίνι/τινί の代りに、ἄττα を中性複数主格において τινά の代りに見る。

75 ὅστις, ἥτις, ὅ τι: 不定関係代名詞または間接疑問代名詞

[339]

複合代名詞（または限定辞）ὅστις, ἥτις, ὅ τι は不定関係代名詞と間接疑問代名詞の意味を持つ。関係詞の時、一般化の観念を含む。

例： ὅστις ταῦτα λέγει σοφός ἐστι それらと言うものは誰でも賢い。
 τί θέλεις; λέγε ὅ τι θέλεις 君は何を望むのか？君が望むもの（全て）を言いたまえ。

		男性	女性	中性
単数	主格	ὅστις	ἥτις	ὅ τι
	対格	ὅτινα	ἥτινα	ὅ τι
	属格	οὗτινος, ὅτου	ἥστινος	οὗτινος, ὅτου
	与格	ὧτινι, ὅτω	ἥτινι	ὧτινι, ὅτω
複数	主格	οἵτινες	αἵτινες	ἅτινα
	対格	οὗστινας	ἅστινας	ἅτινα
	属格	ὧντινων	ἄντινων	ἄντινων
	与格	οἴσισι(v)	αἴσισι(v)	οἴσισι(v)

ὄτου（単数属格）および ὄτω（単数与格）の形がより多く現れる。

時に複数において ἅτινα の代りに ἄττα, ἄντινων の代りに ὄτων, そして οἴσισι(v) の代りに ὄτοις が見られる。

アクセントは後倚辞の規則 (§23 参照) に従う。

76 質・量・択一の疑問・不定・関係および指示詞対応表

[340]

ギリシア語は特別のニュアンスを示す諸々の異なる代名詞と限定詞（疑問、不定、関係、指示）とを持つ：
質・量あるいは数・択一。

例：質の代名詞： τοιοῦτοι ἄνθρωποι οἷους ἐπαινεῖς
君が賞賛するそのような人々

量の代名詞： τοσοῦτοι ἄνθρωποι ὅσους λέγεις
君がそれを話すそれぐらいの人数の人々

択一の代名詞： ἀγνοῶ ὁπότερον λέγεις
君が二人のうちどちらのことを話しているかを私は知らない

	疑問	不定	a. 不定関係 b. 間接疑問	関係	指示
	τίς;	τις	ὅστις	ὅς	οὗτος, ὅδε, ἐκεῖνος
質	ποῖος; どんな性質の?	ποιός ある性質の	ὁποῖος a. ~の性質の b. どのような性質の	οἷος ~であるそのような	τοιούτος, τοιόσδε, (τοιός) τοιούτος そのような種類の
量または 数	πόσος; どれぐらいの数・ 量・大きさの?	ποσός ある数・量・大きさ の	ὁπόσος a. ~と同じぐらいの 数・量・大きさの b. どれぐらいの数・ 量・大きさの	ὅσος ~と同じぐらいの 数・量・大きさの	τοσοῦτος, τοσόσδε (τόσος) そのような数・量・ 大きさの
択一	πότερος; (二つのうちの)ど ちら?		ὁπότερος a. ~である(二つの) どちら一つが b. (二つのうちの)ど ちらが		ἕτερος (二つのうちの)も う一つの

直接疑問代名詞は同様に間接疑問詞として用いられる。

[1263]

不定代名詞は常に後倚辞である。

[334]

全てのこれらの代名詞と限定詞は男・女・中性において規則的に曲用する：

τοιούτος, τοιαύτη, τοιούτο および τοσοῦτος, τοσαύτη, τοσοῦτο は、この指示代名詞の最初の τ が夫々 τοι-, τοσ- に置き換えられることを除いて、οὔτος, αὐτή, τοῦτο (§64 参照) の様に曲用する。

時に τοιούτο, τοσοῦτο の代りに τοιούτον, τοσοῦτον を見る。

τοιόσδε, τοιάδε[ᾶ], τοιόνδε および τοσόσδε, τοσήδε, τοσόνδε は、接尾辞 -δε を伴って、ο/ᾶ に終わる形容詞 (§37 参照) のように曲用する。

指示代名詞 τοῖος と τόσος は韻文で用いられる。

ἕτερος, ἑτέρα, ἕτερον 「(二つのうちの) 一つ」は ἄλλος, ἄλλη, ἄλλο 「他の」とは意味論的に区別される。ἄλλος の曲用については、αὐτός, §67 参照。ἄλλος から相互代名詞 ἀλλήλους が派生する (§72 参照)。

[1271-1276]

年齢あるいは地位を示す代名詞は同様に諸々の形を示す。

[340]

疑問形	πηλίκος, -η, -ον;	「何歳の？」あるいは「どんな地位の？」
関係形	ήλικος, -η, -ον	「～の年齢の」あるいは「～と同じぐらいの地位の」
指示形	τηλικόσδε, τηλικήδε, τηλικόν および ^δ τηλικούτος, τηλικαύτη, τηλικούτο(v)	「この年齢の」あるいは「この地位の」

指示代名詞はしばしば対応する関係詞(表の前の例、上記参照)との相関において用いられる。このように、関係詞 ὅς, ἣ, ὅ に一般に指示詞 οὗτος (あるいは ἐκεῖνος ; ὅδε の使用はこの場合余り多くない) が対応する。 [2503]

不定法を伴う οἷος τε の、「～できる」の意味 (§348, τε 2 参照) における、特別の用法に注意。 [2003, 2497]

例： οἷοί τε διαλέγεσθαι 議論できる。

77 場所・仕方および時間の疑問・不定・関係および指示副詞の対応表 [346]

ギリシア語は疑問・不定・関係・指示の型の場所・仕方および時間の異なる代名詞的副詞を持つ。

	疑問	不定	a. 不定関係 b. 間接疑問	関係	指示
場所 (所在)	πού; どこで?	που どこかで	όπου a. ~する全ての場所 b. どこで	ού ένθα ~するその場所で	αυτόου まさにそこで ένθάδε ここで ένταυθα そこで έκει あそこで
場所 (方向)	ποι; どこへ?	ποι どこかへ	όποι a. ~する全ての場所へ b. どこへ	οί ένθα ~する所へ	αυτόσε まさにそこへ ένθάδε ここへ ένταυθα そこへ έκεισε あそこへ
場所 (由来)	πόθεν; どこから?	ποθέν ある所から	όπόθεν a. ~であるところ を 通 つ て b. 何処を 通 つ て	όθεν ένθεν ~する所から	αυτόθεν まさにそこから ένθενδε ここから έντευθεν そこから έκειθεν あそこから
場所 (通過) または 仕方	πῆ; どこを 通 つ て? どんな 仕 方 で?	πῆ どこか を 通 つ て ある 仕 方 で	όπῆ a. ~である 所 を 通 つ て、 ~の 仕 方 で b. どこ を 通 つ て、 ど ん な 仕 方 で	ἤ, ἤπερ ~である 所 を 通 つ て、 ~の 仕 方 で	ταύτη そこを 通 つ て、 そ の 仕 方 で τῆδε ここを 通 つ て、 こ の 仕 方 で
仕方	πῶς; どの よ う に し て?	πῶ(ς) 何 ら か の 仕 方 で	όπως a. ~の 仕 方 で b. どの よ う に し て	ώς ώσπερ ~の よ う に	ούτως ώς ώδε この よ う に
時間	πότε; いつ?	ποτέ か つ て	όπότε a. ~する 度 b. いつ	ότε ~の時	τότε その 時

不定副詞は常に後倚辞である。 [181b]

関係副詞 ἐνθα と ἐνθεν は以下の様な表現においては指示副詞の意味を持つ。 [1662]

ἐνθα δὴ まさしくそこでは
ἐνθα καὶ ἐνθα ここそこで

指示副詞が対応する関係副詞との相関で用いられるのを見る： ὅτε... τότε, ὡς... οὕτως など。

78 関係節に関する統辞論的注意

関係代名詞はそれが関係するものの性・数を持つ。 [2501]

関係節は名詞の限定詞 (§201, 203 参照) として働くことがある。その時関係代名詞は一般に関係節においてそれが満たす機能によって望まれる格に置かれる。 [2539]

Heraclit. 22 B 93 DK: ὁ ἀναξ οὐ τὸ μαντεῖόν ἐστι τὸ ἐν Δελφοῖς οὔτε λέγει οὔτε κρύπτει ἀλλὰ σημαίνει.
その予言の座がデルフォイにある主 (アポローン) は語りもせず隠しもしない、否、徴を与えるのだ。

相關指示代名詞はそれへと関係節が関係する名詞を限定することがあるが、それはその際名詞を予告しあるいは続ける (§76, 注参照)。 [2522. 2531]

S. OT 449-51: τὸν ἄνδρα τοῦτον ὃν πάλαι
 ζητεῖς [...] οὗτός ἐστιν ἐνθάδε.
君が長い間探しているこの男、彼はここにいる。

しばしば関係代名詞は関係代名詞が関係する名詞と牽引によって同じ格に置かれる、特にこの名詞が属格または与格にある時、そして、関係代名詞が対格 (直接牽引) におかれるべき時そうである。

Hyp. Epit. 41: μεμνήσθαι τῆς ἀρετῆς ἧς καταλελοίπασιν
 彼らが残した徳を覚えていること
X. An. 1. 9. 14: τούτους καὶ ἄρχοντας ἐποίει ἧς κατεστράφετο χώρας.
 彼らを彼が従えていた国の諸々の支配者とさえ彼はしたのだ。

関係節が限定する名詞は同様にそのことから統辞論的に一部分をなすことがある、つまりその時には名詞は関係代名詞と同じ格にあるのであって、そして主節動詞によって望まれる格にあるのではない (逆牽引)。 [2533]

X. An. 4. 4. 2: εἰς δὲ ἦν ἀφίκοντο κώμην μεγάλην.
 彼らが着いた村は大きかった。
S. OT 449-51: τὸν ἄνδρα τοῦτον ὃν πάλαι
 ζητεῖς [...] οὗτός ἐστιν ἐνθάδε.
 君が長い間探しているこの男、彼はここにいる。

79

関係節はまたそれ自身で主語または補語の機能を文中において引受けることがある (§203 参照)。
[995, 2488ff]

この機能は関係代名詞が関係節において持つものと一致する。その時関係代名詞は、主節における
相関指示代名詞を持つことも持たないこともある。 [2509]

Pl. Ap. 21d: ἄ μὴ οἶδα οὐδὲ οἶομαι εἰδέναι.
私が知らないものを私はそれを知っているとは思えもしない。

これらの機能が一致しない時、関係代名詞は通常関係節においてその機能によって望まれる格に
置かれ、そして多くは主動詞によって望まれる指示（または人称）代名詞によって繰返される。

X. An. 6. 1. 29: νομίζω γὰρ ὅστις ἐν πολέμῳ ὦν στασιάζει πρὸς ἄρχοντα, (τοῦτον) πρὸς τὴν ἑαυτοῦ
σωτηρίαν στασιάζειν. (ある写本の中では指示代名詞は欠落している)
闘いの中にありながらその司令官に逆らうようなものはこれを私は見なすのである、彼は自らの
救いに対して逆らっていると。

関係代名詞はまた主動詞によって望まれる格に置かれる、そして関係節において引受ける機能によって望まれる格
にはない。

X. An. 3. 1. 45: νῦν δὲ καὶ ἐπαινῶ σε ἐφ' οἷς λέγεις.
だがしかし今は君を誉めもするよ、君が言ったことについてね。

80

関係節においては**独立節**（直説法、ἄν を伴う可能性の希求法、そして命令法および願望の希求
法などでさえ）において見られる**全ての法**が見ることができる。 [2183]

E. Hec. 225: οἷσθ' οὖν ὁ δραῶσον.
それ故何をしなければならないを君は知っている。(ギリシア語では命令法)
またそこに以下のことを見ることができる：

斜希求法、希求法 3 参照；
牽引による希求法、希求法 4 参照；
(ἄν のない) 可能性の希求法、希求法 2 参照；
ἄν を伴う接続法、接続法 3 参照。

X. An. 1. 3. 15: τῷ ἀνδρὶ ὃν ἂν ἐλησθε πείσομαι.
私は君らを選ぶであろう男に従うだろう。(ギリシア語では待望の接続法)

特に ἄν を伴う接続法は不定関係詞 ὅστις によって導かれる関係節において、この代名詞の一般化の意味に応じて
(§75 参照)、用いられる。

関係節において、**直説法未来**はしばしば**目的**を現す（直説法 5 参照）。

要約復習表 §350 もまた参照。

関係節において、否定辞 οὐ と μή はそれぞれの意味 (§282-289 参照) に従って用いられる。特に、否定辞 μή はある種の関係節の一般化または仮定を意味する；それはまた目的の意味の直説法未来 (直説法 5 参照) を伴う。

Pl. Ap. 21d: ἄ μή οἶδα οὐδὲ οἶομαι εἰδέναι.
私が知らないものを私はそれを知っているとは思ひさえもしない。

81

文頭においては、関係詞は先行する文 (あるいはその要素の一つ) を繰返す、語頭反復である限りは。 [2167c, 3010]

Th. 2. 43.4: οὗς νῦν ὑμεῖς ζηλώσαντες μή περιοράσθε τοὺς πολεμικοὺς κινδύνους.
そして今、諸君は彼らに習った上で、戦争の危険を気にはならない (代名詞はすでに問題となっていた死んだ兵士のことを指している)。

関係詞の特別の用法を次の表現において注意： [2513, 2515]

ἔστιν ὅστις (与格 ἔστιν ᾧ)	ある人 (<< ~している人がいる >>)
οὐὶ ἔστιν (あるいは εἰσὶν) οἳ	ある人々 (<< ~する人々がいる >>)
ἔστιν ὅτε	時々 (<< ~する時がある >>)
ἔστιν οὗ	そこここに (<< ~する場所がある >>)

いくつかの固定的表現において、関係-不定代名詞は節を導かず、単純な不定代名詞として用いられる： [2534, 2557]

ὅστισοῦν, ἡτισοῦν, ὅτιοῦν	誰であっても、何であっても
οὐδεὶς ὅστις οὐ (曲用する)	全ての人が夫々

量・質・択一の関係詞については、§76 参照；時間・場所・仕方の関係詞については、§77 参照。

主要な接続詞 (ὅτι, ὅτε ὡς, ὥστε, ὅπως, など) は特別な意味において固定された関係代名詞の格形に由来する (§203 および 347 参照)。 [2578]

直接および間接疑問文節の統辞上の注意

82 - 直接疑問

疑問が全ての言表 (期待される反応：「はい」または「いいえ」) にかかる時、それはあるいは句読点のみによってあるいは疑問小辞 ἤ または ἄρα (§348 参照) によって書かれた形式化の中で認識される。 [2650]

もし質問が、否定詞 οὐ によって、ἄρ' οὐ によって、あるいはなお οὐκοῦν (あるいは οὐκουν) によって導かれるなら、これは話者が同意をまたは懇願を期待しているを示している (§348 参照、οὐ, ἄρ' οὐ, οὐκοῦν, οὐκουν)。 [2651]

もし、質問が否定辞 $\mu\eta$ によって、 $\acute{\alpha}\rho\alpha$ $\mu\eta$ によってあるいは $\mu\acute{\omega}\nu$ によって導かれるなら、それは話者が否定的反応を期待して、または、それを促しているということである (§348 参照、 $\mu\eta$, $\acute{\alpha}\rho\alpha$ $\mu\eta$, $\mu\acute{\omega}\nu$)。

質問が言表の一つの要素に関わる時、それは**直接疑問**（代名詞、限定詞、副詞： $\tau\acute{\iota}\varsigma$, $\pi\omicron\iota\omicron\varsigma$, $\pi\omicron\upsilon$, $\pi\acute{o}\tau\epsilon$, など）であって、何に疑問が関わっているかを示すのである。 [340, 346, 2642]

質問が**択一**の形に置かれる時、質問を $\pi\acute{o}\tau\epsilon\rho\omicron\nu$ ($\pi\acute{o}\tau\epsilon\rho\alpha$)... η または ($\acute{\alpha}\rho\alpha$)... η (§348 参照) によって導く。 [2656]

接続法（熟慮）に置かれた疑問については、接続法 1 参照。

独立節の復習要約表についても、§349 参照。

83 - 間接疑問

疑問が**補語節全体**にかかる時、疑問は**接続詞** $\epsilon\iota$ によって導かれる。あるいはもし**択一**なら更に $\epsilon\iota$... η , $\epsilon\iota$... $\epsilon\acute{\iota}\tau\epsilon$, $\epsilon\acute{\iota}\tau\epsilon$... $\epsilon\acute{\iota}\tau\epsilon$, あるいは $\pi\acute{o}\tau\epsilon\rho\omicron\nu$ ($\pi\acute{o}\tau\epsilon\rho\alpha$)... η によって導かれる (§348 参照)。

[2671, 2675]

疑問は恐れニュアンスがあるなら $\mu\eta$ によって導かれることがある、§308 および 348、 $\mu\eta$ 参照。 [2674]

疑問が**補語節の唯一の要素**にかかる時、これはあるいは**直接疑問**（代名詞、限定詞、副詞： $\tau\acute{\iota}\varsigma$, $\pi\omicron\iota\omicron\varsigma$, $\pi\omicron\upsilon$, $\pi\acute{o}\tau\epsilon$, など）によってあるいは**間接疑問**（代名詞、限定詞、副詞： $\acute{o}\sigma\tau\iota\varsigma$, $\acute{o}\pi\omicron\iota\omicron\varsigma$, $\acute{o}\pi\omicron\upsilon$, $\acute{o}\pi\acute{o}\tau\epsilon$ など）によって導かれる。 [2663-2666]

間接疑問においては**直接疑問**におけるのと同じ法と否定辞をみる、しかしまた以下も参照：

斜希求法、希求法 3 参照；

牽引の希求法、希求法 4 参照；

より稀に、 $\acute{\alpha}\nu$ を伴う待望の接続法、接続法 3 参照。

補語節の要約復習表 §350 もまた参照。

84 数詞

[347]

字母		基数詞	序数詞	数副詞
α'	1	εἷς, μία, ἓν	πρῶτος, -η, -ον	ἅπαξ
β'	2	δύο	δεύτερος, -α, -ον	δίς
γ'	3	τρεις, τρία	τρίτος, -η, -ον	τρίς
δ'	4	τέτταρες, τέτταρα	τέταρτος	τετράκις
ε'	5	πέντε	πέμπτος	πεντάκις
ζ'	6	ἕξ	ἕκτος	ἑξάκις
ζ'	7	ἑπτὰ	ἕβδομος	ἑπτάκις
η'	8	ὀκτώ	ὀγδοος	ὀκτάκις
θ'	9	ἐννέα	ἐνατος	ἐνάκις
ι'	10	δέκα	δέκατος	δεκάκις
ια'	11	ἕνδεκα	ἐνδέκατος	ἐνδεκάκις
ιβ'	12	δώδεκα	δωδέκατος	δωδεκάκις
ιγ'	13	τρεις (τρία) καὶ δέκα	τρίτος καὶ δέκατος	τρισκαιδεκάκις
ιδ'	14	τέτταρες (-ρα) καὶ δέκα	τέταρτος καὶ δέκατος	τετρακαιδεκάκις
ιε'	15	πεντεκαίδεκα	πέμπτος καὶ δέκατος	πεντεκαιδεκάκις
ιζ'	16	ἑκκαίδεκα	ἕκτος καὶ δέκατος	ἑκκαιδεκάκις
ιζ'	17	ἑπτακαίδεκα	ἕβδομος καὶ δέκατος	ἑπτακαιδεκάκις
ιη'	18	ὀκτωκαίδεκα	ὀγδοος καὶ δέκατος	ὀκτωκαιδεκάκις
ιθ'	19	ἐννεακαίδεκα	ἐνατος καὶ δέκατος	ἐννεακαιδεκάκις
κ'	20	εἴκοσι(ν)	εἰκοστός	εἰκοσάκις
λ'	30	τριακόντα	τριακοστός	τριακοντάκις
μ'	40	τετταράκοντα	τετταρακοστός	な ど
ν'	50	πεντήκοντα	πεντηκοστός	
ξ'	60	ἑξήκοντα	ἑξηκοστός	
ο'	70	ἑβδομήκοντα	ἑβδομηκοστός	
π'	80	ὀγδοήκοντα	ὀγδοηκοστός	
ρ'	90	ἐνενήκοντα	ἐνενηκοστός	ἐνενηκοντάκις
ρ'	100	ἑκατόν	ἑκατοστός	ἑκατοντάκις
σ'	200	διακόσιοι, -αι, -α	διακοσιοστός	διακοσιάκις
τ'	300	τριακόσιοι, -αι, -α	τριακοσιοστός	な ど
υ'	400	τετρακόσιοι	τετρακοσιοστός	
φ'	500	πεντακόσιοι	πεντακοσιοστός	
χ'	600	ἑξακόσιοι	ἑξακοσιοστός	
ψ'	700	ἑπτακόσιοι	ἑπτακοσιοστός	
ω'	800	ὀκτακόσιοι	ὀκτακοσιοστός	
ιδ'	900	ἐνακόσιοι	ἐνακοσιοστός	ἐνακοσιάκις
,α	1000	χίλιοι, -αι, -α	χιλιοστός	χιλιάκις
,β	2000	δισχίλιοι, -αι, -α	δισχιλιοστός	δισχιλιάκις
,ι	10000	μύριοι, -αι, -α	μυριοστός	μυριάκις
,κ	20000	δισμύριοι, -αι, -α	δισμυριοστός	δισμυριάκις

85 最初の四つの基数詞は曲用する：

[349b]

εἷς, μία, ἓν

	男性	女性	中性
主格	εἷς	μία	ἓν
対格	ἓνα	μίαν	ἓν
属格	ἑνός	μιᾶς	ἑνός
与格	ἐνί	μιᾶ	ἐνί

εἷς, μία, ἓν のように複合語 οὐδεῖς, οὐδεμία, οὐδέν (μηδεῖς, μηδεμία, μηδέν) 「一人（一つ）も～ない」は曲用する：

	男性	女性	中性	複数男・女性
主格	οὐδεῖς	οὐδεμία	οὐδέν	οὐδένες
対格	οὐδένα	οὐδεμίαν	οὐδέν	οὐδένας
属格	οὐδενός	οὐδεμιᾶς	οὐδενός	οὐδένων
与格	οὐδενί	οὐδεμιᾶ	οὐδενί	οὐδέσι(v)

δύο

主格・対格	δύο
属格・与格	δυοῖν

ἄμφω, ἀμφοῖν は「二人とも、二つとも」を意味する。

[349e]

語尾については、§86 参照。

τρεις, τρία

	男・女性	中性
主・対格	τρεις	τρία
属格	τριῶν	τριῶν
与格	τρισι(v)	τρισι(v)

τέτταρες, τέτταρα

	男・女性	中性
主格	τέτταρες	τέτταρα
対格	τέτταρας	τέτταρα
属格	τεττάρων	τεττάρων
与格	τέτταρσι(v)	τέτταρσι(v)

全ての序数詞並びに διακόσιοι, -αι, -α (200) 以降の基数詞は -ο/-ᾶ 形容詞である。

[350]

1 の位、10 の位、100 の位は以下のモデルにしたがって結合する：

187 ἑπτὰ καὶ ὀγδοήκοντα καὶ ἑκατόν
 あるいは ἑκατόν καὶ ὀγδοήκοντα καὶ ἑπτα
 あるいは ἑκατόν ὀγδοήκοντα ἑπτὰ と 言 わ れ る 。

序数詞は同じやり方で複合する。

μύριοι, μύριαι, μύρια 「一万」と μυρίοι, μυρίαί, μυρία 「無数の」とはアクセントによって区別する。 [352]

καθ' ἕνα 「一人ずつ」、κατὰ δύο 「二人ずつ」など、そして ἀνὰ πέντε 「五人ずつ」といった型の配分的表現に注意の事 (§274、分配 参照) [354a]

数副詞は回数 (πεντάκις, 5回) を示す；それらは不曲用 (§57 参照) である。 [347]

ギリシア人はアルファベット文字を数字として用いる。

6、9、900の数字には、古い文字 Ϛ (スティグマ)、ϙ (コッパ)、Ϟ (サンピ) を持っていた。

1の位、10の位、100の位に対して、右上方へダッシュを加える。そして、1000以降は左下にダッシュの文字を伴いながらアルファベットを続ける。

例： ϙνζ' = 157
 ,α = 1000

アッティカ方言では、前6世紀から前3世紀中頃まで<<アッティカ attique>>あるいは<<アクロフォニック acrophonique>>と呼ばれる数の表記法組織が優勢であった。後者の名づけはこの組織が一般に数を示すため数の名称のイニシャルを用いるという事実による。

この系の基本の印は以下の様である： [348a]

I = 1
 Γ (Πの古い形) = 5
 Δ = 10
 Η = 100
 Χ = 1000
 Μ = 10000
 例： ΗΗΔΔΓΙΙΙΙ = 229
 ΦΔΔ = 70 (Φ = 50)

86 曲用における双数 [202]

双数 (§27 参照) は二つの異なる語尾しか示さない。一つは主格・対格および呼格について、他は属格および与格についてである。

これは以下の語尾である：

	-ο 曲用	-α 曲用	第三曲用
主・対・呼格	-ω	-ᾶ	-ε
属・与格	-οιϚ	-αιϚ	-οιϚ

例： -ο 曲用： ὁ θεός, -οῦ 双数： τῶ θεώ, τοῖν θεοῖν

-α 曲用： ἡ χώρα, -ας 双数： τῶ χώρᾳ, τοῖν χώραι

第三曲用：	ὁ ἀνὴρ, ἀνδρός	双数：	τῶ ἀνδρε, τοῖν ἀνδροῖν
	ὁ ἐλέφας, -αντος		τῶ ἐλέφαντε, τοῖν ἐλεφάντοιν
	ἡ πόλις, πόλεως		τῶ πόλει (約音によって), τοῖν πολέοιν
	τὸ γένος, γένους		τῶ γένει (約音によって), τοῖν γενοῖν (約音によって)

冠詞および代名詞は一般的に男性・女性名詞に同じ形を示す：τῶ, τοῖν, τούτῳ, τούτοις など。

一人称および二人称について双数人称代名詞が存在する。

ἐγώ, ἐγῶν	我々二人
σφῶ, σφῶν	君達二人

動詞

[355ff]

動詞活用および非活用形：一般論

ギリシア語動詞においては、二つの主要要素、即ち、**語幹**と**曲折語尾** (§25 参照)¹を区別しなければならない。

87 曲折語尾

[364]

曲折語尾は**人称・数**（単数、双数あるいは複数）と**相**を示す。

人称と数

ギリシア語動詞活用は**単数**と**複数**において**三つの人称**を区別する。

例： 単数	一人称	δείκνυ-μι	私は示す	複数	一人称	δείκνυ-μεν	我々は示す
	二人称	δείκνυ-ς	君は示す		二人称	δείκνυ-τε	君達は示す
	三人称	δείκνυ-σι	彼、彼女は示す		三人称	δεικνύ-ασι	彼ら、彼女らは示す。

単数と複数に加えて、ギリシア語動詞はその主語が二つからなる単位で構成される時特別な曲折語尾を持つ事がある：これが**双数形**である。双数は二人称と三人称についてしか存在しない。アッティカ方言で用いられるが、その用法は一定ではない。それは複数によって置き換えられる傾向がある；それ故それは別に扱われる (§162 参照)。

例：	ὁ πατήρ	δείκνυ-σι	父は示す
	οἱ πατέρες	δεικνύ-ασι	父達は示す
	τῶ πατέρε	δείκνυ-των	二人の父達は示す

能動相・中動相および受動相

[356]

動詞形は以下のように主語を示すことができる：

— 動作または状態の主語（**能動相**）；

[1703]

例：	ἵππους	τρέφο-μεν	我々は馬を育てる。
	τρέχο-	μεν	我々は走る。
	μεμήνα-	μεν	我々は愚かである。

¹ 語尾について同様に話すべく導かれるだろう。動詞の活用における曲折語尾と語尾の間の区別については、§97 参照。

—一つの行為を生み出す主語で、その行為が主語とかかわりあるいは主語に個人的に影響するのである（中動相）； [1713]

例：	τρέφό-μεθα ἵππους	我々は馬を育てる（我々自身の使用のため）
	ἐγκαλυπτό-μεθα τὰς κεφαλὰς	我々は我々自身の頭をベールで覆う
	λουό-μεθα	我々は入浴する。
	γεύο-μεθα	我々は味わう（γεύο-μεν, 能動相, 我々は味あわせる）

—一つの行為によって影響される主語であるが、主語はそれを引き起こしたものではないのである（受動相）。 [1735]

例：	ὁ ἵππος τρέφε-ται ὑπὸ τοῦ ἱππέως	馬は騎兵によって育てられる
	πιστεύο-μαι ὑφ' ὑμῶν	私は君達によって信じられる、私は君達の信頼の対象である（能動形：πιστεύετε μοι（与格）、君達は信頼を私に与える）

一般に、中動相と受動相のための異なる動詞形はない。同じ曲折語尾が主語の動作への二つの関係を表現する。その時に人は中・受動相を云々するのである。しかしながら、二つの語幹（未来とアオリスト）が特別な形を受動相に区別する、しかし、受動相は接尾辞によって印付けられるのであり、曲折語尾の型によってでない。（§142-143 参照）。 [356b]

中動相と受動相の区別は必ずしもギリシア語でははっきりしない、すなわち受動相は歴史的には中動相から発展してきたという事実から、そして必ずしも能動相の単純な裏返しから成ってはいないという事実からである（上記、二番目の例参照）。

幾つかの動詞は能動相語尾を持たず、ただ中・受動相語尾（デポーネントといわれる動詞）のみを持つもろもろの形の中で現れる。

例：	μαχό-μαι	私は戦う
	ἔρχο-μαι	私は行く、来る

他動詞と自動詞の間の形の区別はない。しばしば、その上、同じ動詞の同じ形はあるいは他動詞あるいは自動詞の意味を持つ。

例	μένω	私は～を待つ；残る
	ἄγω	私は導く；前進する、赴く

一次曲折語尾および二次曲折語尾 [463, 464]

能動相および中・受動相曲折語尾は二つのグループに区別される：一次曲折語尾と二次曲折語尾である。一般に、二次曲折語尾は過去時制の意味を持つ形である（§90 参照）。

ずっと後で人称曲折語尾表が見られる、§96 参照。

88 語幹

[367]

語基（または派生語基）とそれに加わる異なる不変要素（特に接尾辞）からなる複合動詞形の部分を語幹という（§25 参照）。

夫々の動詞について、原則として四つの語幹（直説法の主要4時制に対応する）がある：現在・未来・アオリストおよび完了である。更に、未来受動相とアオリスト受動相は特別な語幹を持つ。完了語幹については、能動相と中・受動相の間に違いを示す。

語幹は大抵は同じ語基から派生する；時に、異なる語幹が異なる語基上に形成される。

ギリシア語動詞に言及する時、直説法現在能動相単数1人称が与えられる。しかしながら語幹形成の種々の可能性を与えられながら、現在幹は必ずしも他の語幹を演繹するのを許さない。それぞれの動詞についてはそれゆえ能動相および受動相の主要4語幹の直説法1人称を知る必要がある（§163-178, 351 参照）。

[369]

受動相現在は示される必要はない、何故ならその語幹は現在能動相のそれと決して異なるからである。

例：

	未来	アオリスト	完了
παιδεύω (能動相)	παιδεύσω	ἐπαιδεύσα	πεπαιδευκα
教育する (受動相)	παιδευθήσομαι	ἐπαιδεύθην	πεπαιδευμαι
φέρω (能動相)	οἴσω	ἤνεγκον, ἤνεγκα	ἐνήνοχα
運ぶ (受動相)	ἐνεχθήσομαι	ἤνέχθην	ἐνήνεγμαι

89 語幹の意味

四つの語幹—現在・未来・アオリスト・完了—は異なる見方に従って動詞の動作を定義する：

—現在幹はその展開および持続において考えられる動作を示す；

[1852a]

例： μάχομαι (直説法現在) 私は戦う、戦っているところである

—アオリスト幹はその展開あるいはその持続を考慮せず動作そのものを示す：それは単純に動作が起こったことを意味する。しかしながら現在幹に対立して、アオリスト幹は点括的意味 *valeur ponctuelle* (時に起動的 *inchoative*、または完了的) の意味を持つ。そしてそのことを文脈または動詞の語義的意味の助けを借りて突き止めるのである。

[1852c]

例： ἐβασίλευσεν (直説法アオリスト) 彼は支配した、または、彼は王位に就いた
 νῦν ἔλθετε (命令法アオリスト) 今、来い！
 εἴπωμεν (接続法アオリスト) ἢ σιγῶμεν (接続法現在) ; 我々は話すべきか、それとも、黙っているべきか？

動作を展開している途中として示すか、あるいは単純に点括的に起こったとして示すかの話者の選択をアスペクトという。この違いは現在幹とアオリスト幹の対立に対応する。

例： ἀνέωγε τὴν θύραν (未完了過去、現在幹上に形成される)

彼は戸を開けていた。彼は戸を開ける所だった。

ἀνέωξε τὴν θύραν (アオリスト)

彼は戸を開けた

—完了幹は持続的状态またはなされた動作の持続的結果を示す； [1852b]

例： μέμνηα (直説法完了)

私は気が狂っている

πλούσιοι γεγόναμεν (直説法完了)

我々は富裕になった、我々は富裕である。

—未来幹は動作の実現の潜在的性質を示す：将来における動作の実現性を投影する。未来幹は人がそれを法の意味 (§91 参照) に近づけることができる意味を持ち、そして、それは同時に時間的視点から不可分である (§90, 280 参照)。 [1852c]

例： ταῦτα ὄψεισθε (直説法未来)

君達はそれを見るだろう。

90 時制

[359, 360, 1859, 1875ff]

ギリシア語動詞組織が真に時間的視点を考慮に入れ、そして動作または状態が現在・過去または未来であるかどうかを示すのは直説法、即ち事実確定の法でしかない。この時間的視点に従って、直説法は時制の二つのグループに分かれる：

一次時制：現在、完了、未来；

二次時制：未完了過去、アオリスト、過去完了。

一次時制は、現在において動作を（現在）あるいは状態（完了）を位置付ける；未来は将来において動作を投影する。

二次時制は、動作を過去において位置付け、そしてそれを語幹に先行する加音 (§108 参照) と呼ばれる形態的なマークによって、そして二次的と呼ばれる曲折語尾 (§87, 96 参照) の使用によって示す。 [428-438]

語幹の意味に従って、未完了過去は現在幹上に形成されてその展開と持続において見られる過去の動作を表し、アオリストはその展開を考慮せずに過去の動作を表し、過去完了は完了幹の上に形成されて過去における持続的状态またはそれより前に完了した動作の過去における持続的結果を示す。

91 法

[357, 1759, 1760]

直説法、事実の確立の法の他にギリシア語は三つの別の法を配列している：希求法、接続法および命令法。

希求法は願望または可能性を表す。

接続法は期待と意志の法である。

命令法は命令を表す。

法のより完全な定義とその用法の記載については、§279-309 参照。

希求法と接続法は特異的語尾で (§103-104 参照)、命令法は特別な曲折語尾で再認される (§96, 279 参照)。それぞれの法は現在・アオリスト・完了において活用する；直説法と希求法のみが未来で活用する (§280 参照)。

直説法のみが時制的意味の担い手である (§90 参照)。他の法においては、万一の場合、動作を時制に中に位置づけるのは文脈なのであるが。 [1850, 1851]

かくして、例えば、命令法アオリストは現在の点括の意味 (§309 参照) を持つ命令を表し、接続法アオリストは将来に投影された動作を表すことがある (§306 参照)。

92 不定法

[1966]

不定法は動作または状態それ自身を表す、その際人称または数の限定はない。それは動詞の活用されていない形である。しかし、語幹と相に従って異なる形を持つ。

不定法のより完全な定義とその用法の記載については、§310-328 参照。

動詞の形容詞形

93 分詞

[2039, 2042]

分詞は動作を主語に帰しながら主語を限定する動詞の形容詞形である。それは完全な曲用を示し語幹と相に従って異なる形を持つ (§182-186 参照)。

分詞のより完全な定義とその用法の記載については、§329-346 参照。

94 動詞的形容詞

動詞的形容詞というものは動詞の語基（または派生語基、§25 参照）の上に形成される曲用する二つの形容詞形のことであって、それは以下の語尾の仕方で行なわれるのである：

-τός, (-τή), -τόν 受動的可能性を示すために。 [472]

このように形成された形容詞は特に複合動詞について受動完了分詞（得られた結果または持続的狀態）の意味に対応することがある。

例： διδάσκω	διδακτός, (-τή), -τόν
私は教える	教育されうる
παρασκευάζω	παρασκευαστός, -τή, -τόν
私は準備する、手に入れさせる	準備されうる、手に入れられた；準備された
πορεύομαι	ὁδός πορευτή
私は行く、歩き回る	歩き回ることの出来る道

-τόςに終る動詞的形容詞のいくつかはまた能動的意味を持つ事がある。

例： δύναμαι	δυνατός, (-τή), -τόν
私は～出来る	可能な
	ἀδύνατος, -τον
	不可能な

-τέος, (-τέα), -τέον 義務または受動的必然を示すために。 [473]

例： διδάσκω	διδακτέος, -τέα, -τέον
教える	教えられるべき
παρασκευάζω	παρασκευαστέος, -τέα, -τέον
準備する	準備されるべき
πορεύομαι	S. Ph. 993: ἡ δ' ὁδός πορευτέα
行く、歩き回る	この道を行かねばならない <<この道は行くべき道である>>。

義務の動詞的形容詞を伴って非人称構文が非常に多い（時に中性複数に置かれる）。この場合、動詞的形容詞は補語を支配する。 [2149-2152]

Pl. Cri. 51b: οὐχὶ ὑπεικτέον οὐδὲ ἀναχωρητέον.

場所を譲ることも退く必要もない。

E. Ion 1260: οἰστέον δὲ τὴν τύχην.

運命に耐えなければならない。

Th. 1. 88: ἐψήφισαντο δὲ οἱ Λακεδαιμόνιοι πολεμητέα εἶναι.

スパルタ人達は戦に入らなければならないと投票した。

また、πειστέον 参照

説得しなければならない（πειθω「説得する」から）

信じなければならない、従わねばならない（πείθομαι「信ずる、従う」から）

義務に関わる人は**与格**に置かれる（与格 1 参照）。

Pl. Grg. 527b: ἀνδρὶ μελετητέον οὐ τὸ δοκεῖν εἶναι ἀγαθὸν ἀλλὰ τὸ εἶναι.

人によくあると思われることではなくて、良くあることにこそ気遣うのでなくてはならない。

義務の動詞的形容詞は付加的形容詞の機能 (§201 参照) では用いられない。

95 行為者の補語

[1491, 1493, 1678]

動詞によって示される動作の行為者は、動作の行為者が文法的主語でない時には、**属格**に置かれた補語である、それは前置詞 **ὑπό**、またはより稀には、**ἀπό**, **διά**, **ἐξ**, **παρά**, **πρός** によって明確にされる（属格 14 ; §272, 274, 行為者、参照）。

行為者の補語は受動相動詞のみを伴うものではない：

Th. 1. 9: Εὐρυσθέως μὲν ἐν τῇ Ἀττικῇ ὑπὸ Ἡρακλειδῶν ἀποθανόντος [...]. (アオリスト能動相)

エウリュステウスはアッティカにおいてヘラクレイデスらによって殺されて...

X. HG 4. 8. 20: οἱ ἐκπεπτακότες Ροδίων ὑπὸ τοῦ δήμου (完了能動相)

民主主義者達によって追放されていたロドス人達の中の彼ら

Isoc. 4. 77: κακῶς ὑπὸ τῶν πολιτῶν ἀκούειν (不定法能動相)

彼の同郷人によって非難されること

もし行為者が**無生物**である時一般に**道具**の概念が勝り補語は与格のみに置かれる（**道具の与格**、与格 4 参照）。 [1494, 1698-2b]

義務の動詞的形容詞とともにそして**受動完了**とともにある時、行為者の観念に夫々義務と動作の結果によって**関与する人の観念**が勝る。補語はそれ故**与格**に置かれる（与格 1 参照）。 [1459, 1474]

96 人称語尾表

[462, 465]

我々はこの曲折語尾の一般表を与えるがそれは原形を明らかにさせるのである。これらの語尾は**全ての語幹と全ての活用された法**（命令法を除く、そこでは特別の語尾が見られる、§279 参照）について同じ物である。これが既に示されていたよう (§87, 90 参照) に、二次語尾は直説法過去時制（未完了過去・アオリスト・過去完了）において用いられる。希求法は動詞活用学習の中で見られるように、一次曲折語尾と二次曲折語尾の混合を提示する。歴史的には、その上、起源においてギリシア語の曲折語尾の組織となっているのは二次の曲折語尾である。

この表は**理論的再構成の結果**である。それは動詞活用において必ずしもことごとく実現されたものではない。ここでは借用語・類似形・音韻的变化に富むのであって、それについては必要な時に話されるであろう。アステリスク (*) で記された曲折語尾は説明的仮定を意味する。

		一次曲折語尾		二次曲折語尾	
		能動相	中・受動相	能動相	中・受動相
単数	1	-μι, -ω	-μαῖ	-ν	-μην
	2	*-σῖ, -ς, -θα	-σαῖ	-ς	-σο
	3	-τῖ > -σῖ	-ταῖ	-(*τ)	-το
複数	1	-μεν	-μεθᾶ	-μεν	-μεθᾶ
	2	-τε	-σθε	-τε	-σθε
	3	*-ντῖ > -(ᾶ)σῖ	-νταῖ	*-ντ > -ν	-ντο

97 曲折語尾と語尾

約音によってあるいは他の音韻的变化に従って語幹の最後の部分と一体となる時、曲折語尾を分離することはしばしば不可能である。このことは語幹接尾辞を曲折語尾とともに塊りを作っているとして考えさせる。法接尾辞についても同様である。それ故活用した動詞形を特徴付ける変化する全ての最後の部分を示すために語尾ということが云々される (§25 参照)。

例：	παιδεύομεν	直説法能動相現在	我々は教育する
		現在幹	παιδευο-
		複数能動相一人称曲折語尾	-μεν
		語尾	-ομεν
	παιδεύσομεν	直説法能動相未来	我々は教育するだろう
		未来語幹	παιδευσο-
		能動相一人称複数曲折語尾	-μεν
		語尾	-σομεν
	παιδεύσαιμεν	希求法能動相アオリスト	我々は教育できますように！
		アオリスト幹	παιδευσα-
		希求法接尾辞	-ι-
		能動相一人称複数曲折語尾	-μεν
		語尾	-σαιμεν

接続法と希求法語尾（並びに分詞と不定法語尾）については、§103-106 参照；

命令法の曲折語尾については、語幹に従った動詞活用表参照。

語尾は時に曲折語尾と一致することがある。

表中で、ハイフンは、語尾の変化が語基に影響する格における場合を除いて、語尾を分離する。

現在

[1875ff, 1889]

98 現在幹：その展開における動作

現在幹は動作がその展開や持続において考えられているということを示す。現在幹上に未完了過去もまた形成されるが、それは二次時制で同じ仕方の動作を表す、しかし過去におけるそれである (§107-109 参照)。

現在幹は語基（あるいは派生語基、§25, 194 参照）の形から成るのだが、語基にこの語幹（現在幹の異なる形成上で、§164-170 参照）をしばしば特徴付ける接尾辞群が加わる。 [496ff]

99 現在の動詞活用

ギリシア語では二つのタイプの現在動詞活用が見られる、それらは直説法一人称の曲折語尾によって、 $-\omega$ に終わる動詞活用、 $-\mu$ に終わる動詞活用と名付けられる。古典期においては、 $-\omega$ に終わる動詞活用はより多くそして一般化する傾向がある。

$-\omega$ に終わる動詞活用

[376-378, 602ff]

$-\omega$ に終わる動詞の現在幹は曲折語尾の直前への語幹のと呼ばれる母音の追加によって特徴付けられる。鼻子音の前では母音 \omicron 、その他の場合は母音 ϵ となる。

語幹母音は語幹の部分を作る接尾辞である；しかし動詞活用の中で、母音は曲折語尾と一体となって語尾と成る。

$-\mu$ に終わる動詞活用

[379, 717ff]

$-\mu$ に終わる動詞の動詞活用は曲折語尾に先行する語幹母音のないことによって $-\omega$ に終わる動詞のそれから区別される。語尾はその時曲折語尾と一致する。しかしながら、接続法および希求法の特徴的な法語尾においては、 $-\omega$ に終わる動詞活用から借りられた語幹母音を持つ諸々の形を見る。

$-\mu$ に終わる動詞活用は比較的多くの $-\nu\mu$ に終わる動詞のクラス、いくつかの $-\eta\mu$ に終わる動詞、そして個別に検証されるであろう特別の動詞から成る。

100 -ω に終わる動詞

[382, 383]

παιδεύω, 教育する

能動相

		現在幹 : παιδευε-/παιδευο-		語基 : παιδευ-	
単 数	1	直說法 παιδευ-ω	接續法 παιδευ-ω	希求法 παιδευ-οιμι	
	2	παιδευ-εις	παιδευ-ης	παιδευ-οις	
	3	παιδευ-ει	παιδευ-η	παιδευ-οι	
複 数	1	παιδευ-ομεν	παιδευ-ωμεν	παιδευ-οιμεν	
	2	παιδευ-ετε	παιδευ-ητε	παιδευ-οιτε	
	3	παιδευ-ουσι(ν)	παιδευ-ωσι(ν)	παιδευ-οιεν	
単 数	2	命令法 παιδευ-ε	不定法 παιδευ-ειν		
	3	παιδευ-έτω	分詞 παιδευ-ων, 属格 -οντος		
	2	παιδευ-ετε	παιδευ-ουσα, 属格 -ούσης		
複 数	3	παιδευ-όντων	παιδευ-ον, 属格 -οντος		

中・受動相

単 数	1	直說法 παιδευ-ομαῖ	接續法 παιδευ-ωμαι	希求法 παιδευ-οίμην
	2	παιδευ-η, -ει	παιδευ-η	παιδευ-οιο
	3	παιδευ-εταῖ	παιδευ-ηται	παιδευ-οιτο
複 数	1	παιδευ-όμεθα, -όμεσθα	παιδευ-ώμεθα	παιδευ-οίμεθα
	2	παιδευ-εσθε	παιδευ-ησθε	παιδευ-οισθε
	3	παιδευ-ονταῖ	παιδευ-ωνται	παιδευ-οιντο
単 数	2	命令法 παιδευ-ου	不定法 παιδευ-εσθαῖ	
	3	παιδευ-εσθω	分詞 παιδευ-όμενος, 属格 -ομένου	
	2	παιδευ-εσθε	παιδευ-ομένη, 属格 -ομένης	
複 数	3	παιδευ-έσθων	παιδευ-όμενον, 属格 -ομένου	

101 -μῖ に終わる動詞

[412ff]

δείκνυμι, 示す
 πίμπλημι, 満たす

能動相

現在幹：δείκνυ-/δεικνυ-			語基：δεικ-	
単 数	1	δείκνυ-μι	接続法 δεικνύ-ω	希求法 δεικνύ-οιμι
	2	δείκνυ-ς	δεικνύ-ης	δεικνύ-οις
	3	δείκνυ-σι(ν)	δεικνύ-η	δεικνύ-οι
複 数	1	δείκνυ-μεν	δεικνύ-ωμεν	δεικνύ-οιμεν
	2	δείκνυ-τε	δεικνύ-ητε	δεικνύ-οιτε
	3	δεικνύ-ᾶσι(ν)	δεικνύ-ωσι(ν)	δεικνύ-οιεν
単 数	2	命令法 δείκνυ	不定法 δεικνύ-ναϊ	
	3	δεικνύ-τω	分詞 δεικνύς, 属格 δεικνύ-ντος	
	2	δείκνυ-τε		δεικνύσα, 属格 δεικνύσης
複 数	3	δεικνύ-ντων	δεικνύ-ν, 属格 δεικνύ-ντος	

現在幹：πιπλά-/πιμπλη-			語基：πλά-/πλη-	
単 数	1	πίμπλη-μι	接続法 πιμπλῶ	希求法 πιμπλαίην
	2	πίμπλη-ς	πιμπλής	πιμπλαίης
	3	πίμπλη-σι(ν)	πιμπλή	πιμπλαίη
複 数	1	πίμπλα-μεν	πιμπλῶμεν	πιμπλαίημεν, πιμπλαῖμεν
	2	πίμπλα-τε	πιμπλήτε	πιμπλαίητε, πιμπλαῖτε
	3	πιμπλάσι(ν)	πιμπλῶσι(ν)	πιμπλαίησαν, πιμπλαῖεν
単 数	2	命令法 πίμπλη	不定法 πιμπλά-ναϊ	
	3	πιμπλά-τω	分詞 πιμπλάς, 属格 πιμπλά-ντος	
	2	πίμπλα-τε		πιμπλάσα, 属格 πιμπλάσης
複 数	3	πιμπλά-ντων	πιμπλά-ν, 属格 πιμπλά-ντος	

中・受動相

単 数	1	直說法 δείκνυ-μαι	接續法 δεικνύ-ωμαι	希求法 δεικνυ-οίμην
	2	δείκνυ-σαι	δεικνύ-η	δεικνύ-οιο
	3	δείκνυ-ται	δεικνύ-ηται	δεικνύ-οιτο
複 数	1	δεικνύ-μεθα	δεικνυ-ώμεθα	δεικνυ-οίμεθα
	2	δείκνυ-σθε	δεικνύ-ησθε	δεικνύ-οισθε
	3	δείκνυ-νται	δεικνύ-ωνται	δεικνύ-οιντο
単 数	2	命令法 δείκνυ-σο	不定法 δείκνυ-σθαι	
	3	δεικνύ-σθω	分詞 δεικνύ-μενος, 属格 -μένου	
	複 数	2	δείκνυ-σθε	δεικνυ-μένη, 属格 -μένης
3	δεικνύ-σθων	δεικνύ-μενον, 属格 -μένου		

単 数	1	直說法 πίμπλα-μαι	接續法 πιμπλώμαι	希求法 πιμπλαίμην
	2	πίμπλα-σαι	πιμπλή	πιμπλαῖο
	3	πίμπλα-ται	πιμπλήται	πιμπλαῖτο
複 数	1	πιμπλά-μεθα	πιμπλώμεθα	πιμπλαίμεθα
	2	πίμπλα-σθε	πιμπλήσθε	πιμπλαῖσθε
	3	πίμπλα-νται	πιμπλῶνται	πιμπλαῖντο
単 数	2	命令法 πίμπλα-σο	不定法 πίμπλα-σθαι	
	3	πιμπλά-σθω	分詞 πιμπλά-μενος, 属格 -μένου	
	複 数	2	πίμπλα-σθε	πιμπλα-μένη, 属格 -μένης
3	πιμπλά-σθω	πιμπλά-μενος, 属格 -μένου		

現在の動詞活用に関する注記。接続法・希求法・不定法および分詞の語尾

102 直説法能動相

-ω に終わる動詞

一人称単数：曲折語尾 -ω を語幹母音 o の延長したものと説明する。 [463a]

二人称単数：一般には古い語尾 *-εσι (S96 参照) から派生し、母音間の σ が脱落しそして二人称単数二次時制曲折語尾 -ς を、三人称単数語尾と区別するため、加えたものとして説明する。 [463b]

三人称単数：語尾 -ει は語幹母音 ε に指示的意味の接尾辞 -ι が続いたものとして説明される。 [342]

三人称複数：曲折語尾 *-ντι はアッティカ方言では *-vσι に変形する。v の脱落は o の ou への延長を引き起こしたのである (S96, 14 参照)。 [463d]

この語尾に対して音便上の v の存在に気づくだろう (S42 参照)。動詞活用の中で音便上の v は -ε, -σι に終わる三人称語尾に付く。

-μι に終わる動詞

現在幹末母音は直説法単数および命令法二人称単数において長い。

二人称単数： 同じ人称の二次時制と対応することに注意 (S96 参照)。

三人称単数： 曲折語尾 -σι は古い形 -τι に由来する。(S96 参照)。

直説法中・受動相

[465]

-ω に終わる動詞

二人称単数： *-εσαι の形から母音間 σ の脱落は約音によって -η を与えた： *-εσαι > -εσαι > -η。

前 4 世紀以降、-ει の形を見る (三人称単数能動相と混同しないこと！)

103 接続法

[629]

全ての語幹について、接続法は同じ語尾によって特徴付けられる。これらは一次曲折語尾が続く延長した語幹母音からなる。

-ημι に終わる動詞は -α に終る語幹末を語尾と約音する。しかしながら、通常の語尾との類比は母音約音の法則に勝る： πικπλά-ης > πικπλης, など (S9, 注参照)

104 希求法

[630]

全ての語幹について、希求法は人称曲折語尾の直前に先行する法接尾辞 $-t-$ (ゼロ階梯) または $-\eta-$ (盈階梯、この最後は能動相のみ) によって特徴付けられる。

希求法は二次曲折語尾を示す、但しその際 1 人称単数能動相には一次曲折語尾 $-\mu$ が別に置かれる。

三人称複数能動相: $-v$ の代りに $-ev$ に終る曲折語尾が用いられることに注意。

二人称単数中・受動相曲折語尾 $-\sigma$ の σ は母音間の位置にあるので脱落する。

$-\omega$ および $v\bar{u}\mu$ に終わる動詞は語幹母音 o の接尾辞 $-oi-$ によって特徴付けられる希求法を持つ。この二重母音は長い。

$-v\bar{u}\mu$ に終わる動詞は $-\omega$ に終わる動詞の希求法との類比によって希求法を作る。

その他の $-\mu$ に終わる動詞については希求法は能動相においては接尾辞 $-\eta$ の付加によって、中・受動相においては $-\iota$ の付加によってなされ、二次曲折語尾が続く。

能動相複数においては、平行して $-\eta-$ の形または $-\iota-$ の形が見られる。

三人称複数能動相曲折語尾 $-\sigma\alpha v$ はシグマアオリストの対応形の類比した借用である (§134 参照)。

105 不定法

[469]

異なる語尾が不定法能動相をギリシア語では特徴付ける。現在幹については、 $-\omega$ で終わる動詞現在については $-\epsilon\iota v$, $-\mu$ で終わる動詞現在については $-v\alpha\iota$ を見る。その他の語尾がアオリスト幹および現在完了幹において現れる。不定法能動相語尾 $-\epsilon\iota v$ の起源についての説明は仮定的に留まる。その原形は $*-\epsilon\sigma\epsilon v$ であったと思われる。母音間シグマ脱落ということが偽二重母音 $\epsilon\iota$ の形成を引き起こしていたのであろう。

全ての語幹について、アオリスト II を除いて、能動相不定法は後ろから二番目の音節にアクセントが置かれる。曲折しない形であるので、不定法は動詞曲折の後退 (アナクリーズ) の規則に従わない (§20 参照)。

106 分詞

[470]

全ての語幹について、能動相完了を除いて、分詞はそれぞれ能動相においては接尾辞 $-v\tau-$ を、中・受動相においては $-\mu\epsilon\nu o-$ / $-\mu\epsilon\nu\bar{\alpha}-$ を語幹に付加して形成される。受動相アオリスト (能動相曲折語尾を持つ) は $-v\tau-$ の分詞を持つ。分詞の曲用については、§182-186 参照。

分詞は夫々の語幹に固有のアクセントをもつ; 動詞の形容詞形であるので、動詞的曲折のアナクリーズの規則には従わない (§20 参照)。

107 未完了過去

[627]

未完了過去は現在幹上に形成されるがその際二次曲折語尾がそれに加わる。形はまた語幹に先立つ加音の付加によっても特徴付けられる。過去時制 (二次時制) に関することであるが、それは時制現在幹の意味に従って動作をその展開と持続あるいはその繰返し (反復) において考えるのである。

108 加音

[428, 438]

加音は過去の形態的な特徴である。加音はただ直説法の形だけに影響するのだが、直説法というのは事実を時間的視点に従って見る唯一の法なのである (§90, 91 参照)。

加音はそれ故未完了過去・過去完了と直説法アオリストしか特徴付けない。

加音は動詞幹の前の接頭辞 ε- に存する。

いくつかの動詞は加音 η- の長い形を示す。

動詞接頭辞による複合動詞 (§197 参照) において、加音はその位置を語幹の直前つまり動詞接頭辞の後に取る。

動詞接頭辞が語幹との会合において変化した時、動詞接頭辞は加音の前では通常の形を見出すことができる。

περί と πρό を例外として、母音によって終わる動詞接頭辞は、加音の前で母音を省略する。

例：	παιδεύω	教育する	未完了過去：	ἐ-παιδεύον
	προσπίπτω	襲う		προσ-ἐ-πιπτον
	ἐμβαίνω	入る		ἐν-ἐ-βαίνον
	συγκαλέω	召集する		συν-ε-κάλουν
	συλλέγω	集める		συν-ἐ-λεγον
	συστρατεύω	(遠征に) 参加する		συν-ε-στράτευον
	ἐπιβάλλω	投げかける		ἐπ-ἐ-βάλλον
	ἀποθνήσκω	死ぬ		ἀπ-ἐ-θνήσκον
	περιστρέφω	回す		περι-ἐ-στρεφον
	προβάλλω	前に投げる		προ-ἐ-βάλλον (または約音によって: προύβαλλον)

母音または二重母音によって始まる動詞については、加音は通常の音韻規則に従って最初の母音の延長によって特徴付けられる。

例：	ἄγω	導く	未完了過去：	ἤγον
	ἐλπίζω	希望する		ἤλπιζον
	ἐάω	許す		εἶων
	ἔπομαι	従う		εἰπόμην
	ἦκω	来る		ἦκον
	ὀρύττω	掘る		ὠρυττον
	οἰκτίρω	憐れむ		ὠκτιρον
	ἰδρύω	建てる		ἴδρουν
	ὕβριζω	侮辱する		ὔβριζον[υ]

ὄραω「見る」の未完了過去 ἐώραν は起源において長い形の加音を持つ: ἦ(φ)ορα->ἐωρα- (量的音位転換による)。
ὠθέω「引っ張る」の未完了過去 ἐώθουν は古い最初のディガンマ (ἐφωθουν) によって説明される。

ὀによって始まる動詞は加音の後にこの子音を重ねる (§3 参照)。

例：	ὀίπτω	投げる	未完了過去：	ἔριπτον
----	-------	-----	--------	---------

複合動詞の加音を伴う形におけるアクセントの位置については、§20 参照。

109 未完了過去の動詞活用

[383, 416]

-ω におわる動詞

-μι に終わる動詞

能動相

単	1	ἐ-παίδευ-ον
	2	ἐ-παίδευ-εζ
数	3	ἐ-παίδευ-ε(ν)
複	1	ἐ-παιδεύ-ομεν
	2	ἐ-παιδεύ-ετε
数	3	ἐ-παίδευ-ον

単	1	ἐ-δείκνυ-ν
	2	ἐ-δείκνυ-ζ
数	3	ἐ-δείκνυ
複	1	ἐ-δείκνυ-μεν
	2	ἐ-δείκνυ-τε
数	3	ἐ-δείκνυ-σαν

中・受動相

単	1	ἐ-παίδευ-όμεν
	2	ἐ-παιδεύ-ου
数	3	ἐ-παιδεύ-ετο
複	1	ἐ-παιδευ-όμεθα
	2	ἐ-παιδεύ-εσθε
数	3	ἐ-παιδεύ-οντο

単	1	ἐ-δεικνύ-μην
	2	ἐ-δείκνυ-σο
数	3	ἐ-δείκνυ-το
複	1	ἐ-δεικνύ-μεθα
	2	ἐ-δείκνυ-σθε
数	3	ἐ-δείκνυ-ντο

-μι に終る動詞三人称複数能動相曲折語尾 -σαν はシグマアオリストの対応する形への類比借用である (§3 参照)。
 -ου に終る中・受動相二人称単数は母音間のシグマの脱落后語尾 -εσο の約音の結果である。

110 約音動詞

[385]

-έω, -άω[ᾶ] および -όω 動詞は母音 ε, α, ο の現在および未完了過去の語尾との会合において約音 (§9 参照) に従う。

かくして以下の音韻結合が見られる：

ε + ε	> ει
ε + ο	> ου
ε + 母音または二重母音	> 長母音または不変二重母音
α + ε, η, ει (偽二重母音)	> ᾶ
α + ει, η	> α[ᾶ]
α + ο, ου, ω	> ω
α + οι	> φ
ο + ε, ει (偽二重母音), ο, ου	> ου
ο + η, ω	> ω
ο + ει, οι, η	> οι

III -έω に終わる動詞

[385]

ποιέω, 「作る, する」

		現在幹 : ποιεε-/ποιεο-		語基 : ποιε-/ποιη-	
		能動相		中・受動相	
直 説 法	現	1	ποιῶ [<ποιέ-ω]	ποιούμαι [<ποιέ-ομαι]	
		2	ποιεῖς [<ποιέ-εις]	ποιῆ, ποιῆ [<ποιέ-η]	
		3	ποιεῖ [<ποιέ-ει]	ποιεῖται [<ποιέ-εται]	
	在	1	ποιούμεν [<ποιέ-ομεν]	ποιούμεθα [<ποιε-όμεθα]	
		2	ποιεῖτε [<ποιέ-ετε]	ποιεῖσθε [<ποιέ-εσθε]	
		3	ποιούσι(ν) [<ποιέ-ουσι]	ποιούνται [<ποιέ-ονται]	
	未 完 了 過 去	1	ἐποίουν [<ἐποίη-ον]	ἐποιούμην [<ἐποιε-όμην]	
			2	ἐποίεις [<ἐποίη-εις]	ἐποιού [<ἐποίη-ου]
			3	ἐποίει [<ἐποίη-ε]	ἐποιεῖτο [<ἐποίη-ετο]
2		ἐποιούμεν [<ἐποίη-ομεν]	ἐποιούμεθα [<ἐποιε-όμεθα]		
		2	ἐποιεῖτε [<ἐποίη-ετε]	ἐποιεῖσθε [<ἐποιέ-εσθε]	
		3	ἐποίουν [<ἐποίη-ον]	ἐποιούντο [<ἐποίη-οντο]	
接 続 法	1	ποιῶ [<ποιέ-ω]	ποιῶμαι [<ποιέ-ωμαι]		
		2	ποιῆς [<ποιέ-ης]	ποιῆ [<ποιέ-η]	
		3	ποιῆ [<ποιέ-η]	ποιῆται [<ποιέ-ηται]	
	2	ποιῶμεν [<ποιέ-ωμεν]	ποιῶμεθα [<ποιε-ώμεθα]		
		2	ποιῆτε [<ποιέ-ητε]	ποιῆσθε [<ποιέ-ησθε]	
		3	ποιῶσι(ν) [<ποιέ-ωσι]	ποιῶνται [<ποιέ-ωνται]	
希 求 法	1	ποιοῖην, ποιοῖην [<ποιέ-οιμι]	ποιοίμην [<ποιε-οίμην]		
		2	ποιοίης, ποιοίς [<ποιέ-οις]	ποιοῖο [<ποιέ-οιο]	
		3	ποιοίη, ποιοῖ [<ποιέ-οι]	ποιοῖτο [<ποιέ-οιτο]	
	2	ποιοίμεν, ποιοῖμεν [<ποιέ-οιμεν]	ποιοίμεθα [<ποιε-οίμεθα]		
		2	ποιοίητε, ποιοῖτε [<ποιέ-οιτε]	ποιοῖσθε [<ποιέ-οισθε]	
		3	ποιοῖεν [<ποιέ-οιεν]	ποιοῖντο [<ποιέ-οιντο]	
命 令 法	2	ποίει [<ποίη-ε]	ποιού [<ποιέ-ου]		
	3	ποιείτω [<ποιε-έτω]	ποιείσθω [<ποιε-έσθω]		
	2	ποιεῖτε [<ποιέ-ετε]	ποιεῖσθε [<ποιέ-εσθε]		
不 定 法	3	ποιούντων [<ποιε-όντων]	ποιεῖσθων [<ποιε-έσθων]		
	3	ποιεῖν [<ποιε-ειν]	ποιεῖσθαι [<ποιέ-εσθαι]		
分 詞	ποιῶν [<ποιέ-ων]	属格 -οὔντος	ποιούμενος [<ποιε-όμενος]		
	ποιούσα [<ποιέ-ουσα]	属格 -ούσης	ποιουμένη [<ποιε-ομένη]		
	ποιούν [<ποιέ-ον]	属格 -οὔντος	ποιούμενον [<ποιε-όμενον]		

112 -άω に終わる動詞

[385]

τιμάω, 「誉める」

		現在幹 : τιμάε-/τιμάο-		語基 : τιμά-/τιμη-	
		能動相		中・受動相	
直	現	1	τιμῶ [<τιμά-ω]	τιμῶμαι [<τιμά-ομαι]	
		2	τιμᾶς [<τιμά-εις]	τιμᾶ [<τιμά-η]	
		3	τιμᾶ [<τιμά-ει]	τιμᾶται [<τιμά-εται]	
	在	1	τιμῶμεν [<τιμά-ομεν]	τιμώμεθα [<τιμα-όμεθα]	
		2	τιμᾶτε [<τιμά-ετε]	τιμᾶσθε [<τιμά-εσθε]	
		3	τιμῶσι(v) [<τιμά-ουσι]	τιμῶνται [<τιμά-ονται]	
説 法	未 完 了 過 去	1	ἐτίμων [<ἐτίμα-ον]	ἐτιμώνην [<ἐτιμα-όμην]	
		2	ἐτίμας [<ἐτίμα-ες]	ἐτιμῶ [<ἐτιμά-ου]	
		3	ἐτίμα [<ἐτίμα-ε]	ἐτιμάτο [<ἐτιμά-ετο]	
	法	1	ἐτιμῶμεν [<ἐτιμά-ομεν]	ἐτιμώμεθα [<ἐτιμα-όμεθα]	
		2	ἐτιμᾶτε [<ἐτιμά-ετε]	ἐτιμᾶσθε [<ἐτιμά-εσθε]	
		3	ἐτίμων [<ἐτίμα-ον]	ἐτιμώντο [<ἐτιμά-οντο]	
接 続 法	接 続	1	τιμῶ [<τιμά-ω]	τιμῶμαι [<τιμά-ωμαι]	
		2	τιμᾶς [<τιμά-ης]	τιμᾶ [<τιμά-η]	
		3	τιμᾶ [<τιμά-η]	τιμᾶται [<τιμά-ηται]	
	法	1	τιμῶμεν [<τιμά-ωμεν]	τιμώμεθα [<τιμα-ώμεθα]	
		2	τιμᾶτε [<τιμά-ητε]	τιμᾶσθε [<τιμά-ησθε]	
		3	τιμῶσι(v) [<τιμά-ωσι]	τιμῶνται [<τιμά-ώνται]	
希 求 法	希 求	1	τιμῶην, τιμῶμι [<τιμά-οιμι]	τιμώμην [<τιμα-οίμην]	
		2	τιμῶης, τιμῶς [<τιμά-οις]	τιμῶο [<τιμά-οιο]	
		3	τιμῶη, τιμῶ [<τιμά-οι]	τιμῶτο [<τιμά-οιτο]	
	法	1	τιμώημεν, τιμῶμεν [<τιμά-οιμεν]	τιμώμεθα [<τιμα-οίμεθα]	
		2	τιμώητε, τιμῶτε [<τιμά-οιτε]	τιμῶσθε [<τιμά-οισθε]	
		3	τιμῶεν [<τιμά-οιεν]	τιμῶντο [<τιμά-οιντο]	
命 令 法	命 令 法	2	τίμα [<τίμα-ε]	τιμῶ [<τιμά-ου]	
		3	τιμάτω [<τιμα-έτω]	τιμάσθω [<τιμα-έσθω]	
	法	2	τιμᾶτε [<τιμά-ετε]	τιμᾶσθε [<τιμά-εσθε]	
		3	τιμώντων [<τιμα-όντων]	τιμάσθων [<τιμα-έσθων]	
不定法		τιμᾶν [<τιμα-ειν]	τιμᾶσθαι [<τιμά-εσθαι]		
分 詞		τιμῶν [<τιμά-ων]	属格 -ώντος	τιμώμενος [<τιμα-όμενος]	
		τιμῶσα [<τιμά-ουσα]	属格 -ώσης	τιμωμένη [<τιμα-ομένη]	
		τιμῶν [<τιμά-ον]	属格 -ώντος	τιμώμενον [<τιμα-όμενον]	

113 -όω に終わる動詞

[385]

δηλόω, 「顕わす」

現在幹 : δηλοε-/δηλοο-			語基 : δηλο-/δηλω-			
			能動相	中・受動相		
直	現	1	δηλῶ	[<δηλό-ω]	δηλοῦμαι	[<δηλό-ομαι]
		2	δηλοῖς	[<δηλό-εις]	δηλοῖ	[<δηλό-η]
		3	δηλοῖ	[<δηλό-ει]	δηλοῦται	[<δηλό-εται]
	在	1	δηλοῦμεν	[<δηλό-ομεν]	δηλούμεθα	[<δηλο-όμεθα]
		2	δηλοῦτε	[<δηλό-ετε]	δηλοῦσθε	[<δηλό-εσθε]
		3	δηλοῦσι(ν)	[<δηλό-ουσι]	δηλοῦνται	[<δηλό-ονται]
説 法	未 完 了	1	ἐδήλουν	[<ἐδήλο-ον]	ἐδηλούμην	[<ἐδηλο-όμην]
		2	ἐδήλους	[<ἐδήλο-ες]	ἐδηλοῦ	[<ἐδηλό-ου]
		3	ἐδήλου	[<ἐδήλο-ε]	ἐδηλοῦτο	[<ἐδηλό-ετο]
	過 去	1	ἐδηλοῦμεν	[<ἐδηλό-ομεν]	ἐδηλούμεθα	[<ἐδηλο-όμεθα]
		2	ἐδηλοῦτε	[<ἐδηλό-ετε]	ἐδηλοῦσθε	[<ἐδηλό-εσθε]
		3	ἐδήλουν	[<ἐδήλο-ον]	ἐδηλοῦντο	[<ἐδηλό-οντο]
接 続 法	接 続	1	δηλῶ	[<δηλό-ω]	δηλῶμαι	[<δηλό-ωμαι]
		2	δηλοῖς	[<δηλό-ης]	δηλοῖ	[<δηλό-η]
		3	δηλοῖ	[<δηλό-η]	δηλῶται	[<δηλό-ηται]
	法	1	δηλῶμεν	[<δηλό-ωμεν]	δηλῶμεθα	[<δηλο-ώμεθα]
		2	δηλῶτε	[<δηλό-ητε]	δηλῶσθε	[<δηλό-ησθε]
		3	δηλῶσι(ν)	[<δηλό-ωσι]	δηλῶνται	[<δηλό-ωνται]
希 求 法	希 求	1	δηλοῖην, δηλοῖμι	[<δηλό-οιμι]	δηλοίμην	[<δηλο-οίμην]
		2	δηλοῖς, δηλοῖς	[<δηλό-οις]	δηλοῖο	[<δηλό-οιο]
		3	δηλοῖη, δηλοῖ	[<δηλό-οι]	δηλοῖτο	[<δηλό-οιτο]
	法	1	δηλοίημεν, δηλοίμεν	[<δηλό-οιμεν]	δηλοίμεθα	[<δηλο-οίμεθα]
		2	δηλοῖητε, δηλοῖτε	[<δηλό-οιτε]	δηλοῖσθε	[<δηλό-οισθε]
		3	δηλοῖεν	[<δηλό-οιεν]	δηλοῖντο	[<δηλό-οιντο]
命 令 法	命 令	2	δήλου	[<δήλο-ε]	δηλοῦ	[<δηλό-ου]
		3	δηλούτω	[<δηλο-έτω]	δηλούσθω	[<δηλο-έσθω]
	2	δηλοῦτε	[<δηλό-ετε]	δηλοῦσθε	[<δηλό-εσθε]	
3	δηλούντων	[<δηλο-όντων]	δηλούσθων	[<δηλο-έσθων]		
不定法			δηλοῦν	[<δηλο-ειν]	δηλοῦσθαι	[<δηλό-εσθαι]
分 詞			δηλῶν [<δηλό-ων]	属格 -οὔντος	δηλούμενος	[<δηλο-όμενος]
			δηλοῦσα [<δηλό-ουσα]	属格 -ούσης	δηλουμένη	[<δηλο-ομένη]
			δηλοῦν [<δηλό-ον]	属格 -οὔντος	δηλούμενον	[<δηλο-όμενον]

114 約音動詞に関する注記

直説法能動相三人称単数 ποιεῖ を直説法中・受動相二人称単数に置かれた同音語形、ποιῆ の二重語（前4世紀以降アッティカ方言で一般化する）と混同してはならない。

希求法能動相単数において、アッティカ方言は -ίην, -ίης, -ίη 形を好む。

-ᾱν および -οῦν の不定法能動相は不定法語尾の εἰ が実の所長い ε に対応する偽二重母音であることを示す (§105 参照)。

単音節の -έω におわる動詞は約音の結果が εἰ である時、約音を示さない。

例： πλέω, 「航海する」

直説法 πλέ-ω, πλεῖς, πλεῖ, πλέ-ομεν, πλεῖτε, πλέ-ουσι(ν)

接続法 πλέ-ω, πλέ-ῃς, πλέ-ῃ など。

ζῆν 「生きる」、χρησθαι 「用いる」、διψῆν 「のどが渴く」、πεινῆν 「空腹である」は -ήω, -ήομαι で終る現在幹を持つ。それらは、-άω で終る動詞が ᾱ を持つところで η を持つことを除いて、-άω で終る動詞のように活用する。

115 動詞 δίδωμι, τίθημι, ἵημι, ἴσθημι の現在

これら四つの動詞の現在の動詞活用はまた動詞接頭辞としばしば複合しているが、-μι におわる動詞について先に与えられた範列に規則的に従う (§101 参照)：動詞 ἴσθημι は πίμπλημι のように活用する、他の三つは語基 (ο/ω, ε/η) の最後の母音によってしか区別されない。

δίδωμι 与える	現在幹	διδο/διδω-	語基	δο-/δω-
τίθημι 置く		τιθε-/τιθη-		θε-/θη-
ἵημι 送る、放つ		ίε-/ιη-		έ-/ή-
ἴσθημι 立てる		ίστᾱ-/ίστη-		στᾱ-/στη-

畳音のこれらの現在幹については、§170 参照。

これら四つの動詞の語基の母音の量的変化については、§26 参照。

116 能動相

[416, 777]

		δίδωμι	τίθημι	ἵημι	ἵστημι
直説法現在	1	δίδω-μι	τίθη-μι	ἵη-μι	ἵστη-μι
	2	δίδω-ς	τίθη-ς	ἵη-ς	ἵστη-ς
	3	δίδω-σι(ν)	τίθη-σι(ν)	ἵη-σι(ν)	ἵστη-σι(ν)
	1	δίδο-μεν	τίθε-μεν	ἴε-μεν	ἵστα-μεν
	2	δίδο-τε	τίθε-τε	ἴε-τε	ἵστα-τε
	3	διδό-ασι(ν)	τιθέ-ασι(ν)	ἰᾶσι(ν)	ἵστα-ασι(ν)
未完了過去	1	ἐ-δίδου-ν	ἐ-τίθη-ν	ἴει-ν	ἵστη-ν
	2	ἐ-δίδου-ς	ἐ-τίθει-ς	ἴει-ς	ἵστη-ς
	3	ἐ-δίδου	ἐ-τίθει	ἴει	ἵστη
	1	ἐ-δίδο-μεν	ἐ-τίθε-μεν	ἴε-μεν	ἵστα-μεν
	2	ἐ-δίδο-τε	ἐ-τίθε-τε	ἴε-τε	ἵστα-τε
	3	ἐ-δίδο-σαν	ἐ-τίθε-σαν	ἴε-σαν	ἵστα-σαν
接續法	1	διδῶ	τιθῶ	ἰῶ	ἵστῶ
	2	διδῶς	τιθῆς	ἰῆς	ἵστῆς
	3	διδῶ	τιθῆ	ἰῆ	ἵστῆ
	1	διδῶμεν	τιθῶμεν	ἰῶμεν	ἵστῶμεν
	2	διδῶτε	τιθῆτε	ἰῆτε	ἵστῆτε
	3	διδῶσι(ν)	τιθῶσι(ν)	ἰῶσι(ν)	ἵστῶσι(ν)
希求法	1	διδοίην	τιθείην	ἰείην	ἵσταίην
	2	διδοίης	τιθείης	ἰείης	ἵσταίης
	3	διδοίη	τιθείη	ἰείη	ἵσταίη
	1	διδοίμεν, διδοίημεν	τιθειίμεν, τιθείημεν	ἰείμεν, ἰείημεν	ἵσταίμεν, ἵσταίημεν
	2	διδοίτε, διδοίητε	τιθειίτε, τιθείητε	ἰείτε, ἰείητε	ἵσταίτε, ἵσταίητε
	3	διδοίεν, διδοίησαν	τιθειεν, τιθείησαν	ἰείεν, ἰείησαν	ἵσταταίεν, ἵσταίησαν
命令法	2	δίδου	τίθει	ἴει	ἵστη
	3	διδό-τω	τιθέ-τω	ἴε-τω	ἵστά-τω
	2	δίδο-τε	τίθε-τε	ἴε-τε	ἵστα-τε
	3	διδό-ντων	τιθέ-ντων	ἴε-ντων	ἵστά-ντων
	不定法	διδό-ναι	τιθέ-ναι	ἴε-ναι	ἵστά-ναι
	分詞	διδούς, 屬 διδό-ντος	τιθείς, 屬 τιθέ-ντος	ἰείς, 屬 ἴε-ντος	ἵστάς, 屬 ἵστά-ντος
διδούσα, διδούσης		τιθείσα, τιθείσης	ἰείσα, ἰείσης	ἵστασα, ἵστάσης	
διδόν, διδό-ντος		τιθέ-ν, τιθέ-ντος	ἴε-ν, ἴε-ντος	ἵστά-ν, ἵστά-ντος	

中・受動相

		δίδομαι	τίθεμαι	ίεμαι	ίσταμαι
直說法現在	1	δίδο-μαι	τίθε-μαι	ίε-μαι	ίστα-μαι
	2	δίδο-σαι	τίθε-σαι	ίε-σαι	ίστα-σαι
	3	δίδο-ται	τίθε-ται	ίε-ται	ίστα-ται
	1	διδό-μεθα	τιθέ-μεθα	ίε-μεθα	ιστά-μεθα
	2	δίδο-σθε	τίθε-σθε	ίε-σθε	ίστα-σθε
	3	δίδο-νται	τίθε-νται	ίε-νται	ίστα-νται
未完了過去	1	ἐ-διδό-μην	ἐ-τιθέ-μην	ίε-μην	ιστά-μην
	2	ἐ-δίδο-σο	ἐ-τίθε-σο	ίε-σο	ίστα-σο
	3	ἐ-δίδο-το	ἐ-τίθε-το	ίε-το	ίστα-το
	1	ἐ-διδό-μεθα	ἐ-τιθέ-μεθα	ίε-μεθα	ιστά-μεθα
	2	ἐ-δίδο-σθε	ἐ-τίθε-σθε	ίε-σθε	ίστα-σθε
	3	ἐ-δίδο-ντο	ἐ-τίθε-ντο	ίε-ντο	ίστα-ντο
接續法	1	διδῶμαι	τιθῶμαι	ίῶμαι	ιστῶμαι
	2	διδῶ	τιθῆ	ίῆ	ιστῆ
	3	διδῶται	τιθῆται	ίῆται	ιστῆται
	1	διδῶμεθα	τιθῶμεθα	ίῶμεθα	ιστῶμεθα
	2	διδῶσθε	τιθῆσθε	ίῆσθε	ιστῆσθε
	3	διδῶνται	τιθῶνται	ίῶνται	ιστῶνται
希求法	1	διδοίμην	τιθειίμην	ίειίμην	ισταίμην
	2	διδοίο	τιθειο	ίειο	ισταίο
	3	διδοῖτο	τιθειτο	ίειτο	ισταίτο
	1	διδοίμεθα	τιθειίμεθα	ίειίμεθα	ισταίμεθα
	2	διδοῖσθε	τιθειῖσθε	ίεισθε	ισταῖσθε
	3	διδοῖντο	τιθειντο	ίειντο	ισταῖντο
命令法	2	δίδο-σο	τίθε-σο	ίε-σο	ίστα-σο
	3	διδόσθω	τιθέ-σθω	ίέσθω	ιστά-σθω
	2	δίδοσθε	τίθε-σθε	ίε-σθε	ίστα-σθε
3	διδόσθων	τιθέ-σθων	ίέσθων	ιστά-σθων	
不定法		δίδοσθαι	τίθε-σθαι	ίε-σθαι	ίσθα-σθαι
分詞		διδό-μενος	τιθέ-μενος	ίε-μενος	ιστά-μενος
		διδο-μένη	τιθε-μένη	ίε-μένη	ίστα-μένη
		διδό-μενον	τιθέ-μενον	ίε-μενον	ιστά-μενον

未完了過去能動相単数において、語幹末母音は一般に現在能動相単数の長い形と異なる長い形の下に現れる：
 ἐδίδουν と δίδωμι, ἴειν と ἴημι など参照。この現象はおそらく約音動詞未完了過去 (§111-113 参照) との類比に
 よって説明される。命令法能動相二人称単数に置かれた語幹末の長い形は同じ仕方で説明される。

接続法においては、これらの動詞は語尾の語幹末母音 (-ο, -ε または -α) との会合による規則的な約音を示す。し
 かしながらいくつかの形については、接続法の通常の語尾との類比は、母音約音の法則に勝る：ἰσταίης>ἰσταῖης な
 ど。(§9、注参照)。

異なる法においては、用法はしばしば表中に示されるいくつかの形に関連して変種を提供する。この最後の形は最
 も多いのであるが、我々はその他は示さない。それらは容易に知られる。そしてそれらについて辞書が必要な指示を
 与えている。

他の特別な動詞

117 φημί 言う

[783ff]

現在幹および		語基：φᾶ-/φη-			
直説法		接続法	希求法	命令法	不定法
現在	未完了過去				
φη-μί	ἔ-φη-ν	φῶ	φαίην		
φή-ς, φή-ς	ἔ-φη-σθα	φής	φαίης	φά-θι	
φη-σί(ν)	ἔ-φη	φή	φαίη	φά-τω	φά-ναι
					分詞
φα-μέν	ἔ-φα-μεν	φῶμεν	φαῖμεν		φᾶς, 属格 φά-ντος
φα-τέ	ἔ-φα-τε	φήτε	φαῖτε	φά-τε	φᾶσα, φάσης
φᾶσί(ν)	ἔ-φα-σαν	φῶσι(ν)	φαίεν	φά-ντων	φάν, φά-ντος

直説法現在は 2 人称単数を除いて後倚辞である (§23 参照)。

[784]

未完了過去と命令法との二人称単数は特別な形に注意。この二つの形のほかは、この動詞は πῖμπλημι 型の動詞
 活用に規則的に従う (§101 参照)。

派生語 φάσκω が存在するが、それは分詞において一般的に用いられる：φάσκων, φάσκουσα, φάσκον。

118 εἰμί, ~である (être 動詞)

[768]

現在幹および語基 : ἐσ-		接続法	希求法	命令法	不定法
直説法					
現在	未完了過去				
εἰ-μί	ἦν, ἦ	ᾶ [<ἐσ-ω]	εἶην [<ἐσ-ιην]		
εἶ	ἦσθα	ἦς	εἶης	ἴσθι	
ἐσ-τί(ν)	ἦν	ἦ	εἶη	ἔσ-τω	εἶ-ναι
					分詞
ἐσ-μέν	ἦμεν	ᾶμεν	εἶμεν, εἶημεν		ᾶν, 属格 ὄντος
ἐσ-τε	ἦτε	ἦτε	εἶτε, εἶητε	ἔσ-τε	οὔσα, οὔσης
εἰ-σι(ν)	ἦσαν	ᾶσι(ν)	εἶεν, εἶησαν	ἔσ-των	ὄν, ὄντος

この動詞の語基は ἐσ- である。シグマは母音間では落ち、そしていくつかの形においてシグマは子音の前で落ちるのであるが、その際代償的延長を引き起こすのである：かくして、ἐσ-μι は εἰμί を与える。

直説法現在 は εἶ を除いて後倚辞である (§23 参照)。

しかしながら、動詞が「存在すること」あるいは「現前すること、現在すること」を意味する時アクセントが置かれる；同様に ἔσθι にアクセントが置かれるが、それはその動詞が非人称的に用いられて「許されている」「可能である」という意味においてある場合であって、時にそれはそれが語句の始めにあるときでありまた或る語どもの後、何よりも前倚辞の後にある時である (§23 参照)。

直説法現在 と命令法において εἰμί の複合動詞はアクセントを出るだけ遡及させる (§20 参照)。その他はアクセントは単純な動詞上に見られる所に残る。

例： πάρεμι, ἔξισθι, ἄπεσμεν

しかし παρειμέν, ἐξῆς, ἐξόντος, ἀπέσται (未来, §119 参照)

調音上の ν が直説法 3 人称単数の ἐστί(ν) において見出されるが、それは丁度 -σι で終る曲折語尾とともにこそである如くである (§102 参照)。

未完了過去 2 人称単数 ἦσθα と命令法 2 人称単数 ἴσθι の形、同様に分詞 ᾶν, οὔσα, ὄν に注意。

119 εἰμί の未来

[768]

εἰμί の未来はここで与えられるが、それはこの動詞が現在のそれ未来のそれより以外の他の幹を持たないからである。εἰμί の未来は中・受動相曲折語尾を示し、かつそれは規則的である (§126 参照)。但し、直説法 3 人称の単数 ἔσται をのぞくが、これは語幹母音を持たないのである。

アオリストと完了については、動詞 γίγνομαι 「生ずる、成る」と φύομαι 「生ずる」の対応する形が用いられる。

直説法	希求法	不定法
ἔσομαι	ἔσοίμην	ἔσεσθαι
ἔση	ἔσοιο	
ἔσται	ἔσοιτο	分詞
ἔσόμεθα	ἔσοίμεθα	
ἔσεσθε	ἔσοισθε	ἔσομένη
ἔσονται	ἔσονται	ἔσόμενον

この動詞の語基は ἐσ- であるので、未来に ἔσ-σομαι, ἔσοίμην などが期待される：これらの形はホメロス言語において証明される。

120 -χρή, ~しなければならない [793]

εἰμί の複合形へと χρή 「~しなければならない」の活用形を加えなければならない。χρή は起源において -α に終る曲用の女性名詞で「必要、必然性」を意味する。非人称動詞として用いられる。

活用形は χρή と εἰμί の形の結合の結果である。

直説法	現在	χρή	
	未完了過去	χρήν, ἐχρήν	[χρή ἦν から]
	未来	χρήσται	[< χρή ἔσται]
接続法		χρή	[< χρή ἦ]
希求法		χρεΐη	[< χρή εὔ]
不定法		χρήναι	[< χρή εἶναι]

分詞として、χρέων を用いる（固定した言回し、分詞 7 参照）。

121 εἶμι, 行く [773-776]

現在幹および語基 : εἶ-/ ἰ-		接続法	希求法	命令法	不定法
直説法					
現在	未完了過去	ἶω	ἶοιμι	ἶθι	ἰ-έναι
εἶ-μι	ἦα, ἦειν				
εἶ	ἦεις, ἦεισθα	ἶης	ἶοις	ἶτω	分詞
εἶ-σι(ν)	ἦει, ἦειν	ἶη	ἶοι		
ἶ-μεν	ἦμεν	ἶωμεν	ἶοιμεν	ἶ-τε	ἰ-ών, 属格 ἰ-όντος
ἶ-τε	ἦτε	ἶητε	ἶοιτε		ἰ-ούσα, ἰ-ούσης
ἶ-ᾶσι(ν)	ἦσαν, ἦεσαν	ἶωσι(ν)	ἶοιεν		ἰ-όντων

直説法現在はしばしば未来の意味（「行こう」）を持つ。「行く、来る」というためには動詞 ἔρχομαι を好んで用いる。

[774]

語基 εἶ-/ ἰ- 上に構成されるアオリスト、完了はない：これらの語幹については他の語基が見られる。 [1880]

未完了過去の語尾 *-ειν, -εις, -ει* は類比によって過去完了 (§150 参照) のそれの上に形成される。

直説法以外の法については、*-ω* におわる動詞活用 (希求法、命令法 3 人称複数、分詞) から借りた語尾がしばしばであることに注意。

複合動詞のアクセントについては、*εἰμί* 「～である」の複合動詞、§118 参照。

122 **κάθημαι, 座る**
κεῑμαι, 横たわる

[790]

[791]

現在幹および語基 : <i>καθη-</i>			
直説法		命令法	不定法
現在	未完了過去		
κάθη-μαι	ἐ-καθή-μην	κάθη-σο καθή-σθω	καθή-σθαι
κάθη-σαι	ἐ-κάθη-σο		
κάθη-ται	ἐ-κάθη-το		
καθή-μεθα	ἐ-καθή-μεθα	κάθη-σθε καθή-σθων	分詞
κάθη-σθε	ἐ-κάθη-σθε		καθή-μενος
κάθη-νται	ἐ-κάθη-ντο		καθη-μένη καθή-μενον

現在幹および語基 : <i>κει-</i>			
直説法		命令法	不定法
現在	未完了過去		
κεῑ-μαι	ἐ-κεῑ-μην	κεῑ-σο κεῑ-σθω	κεῑ-σθαι
κεῑ-σαι	ἐ-κεῑ-σο		
κεῑ-ται	ἐ-κεῑ-το		
κεῑ-μεθα	ἐ-κεῑ-μεθα	κεῑ-σθε κεῑ-σθων	分詞
κεῑσθε	ἐ-κεῑ-σθε		κεῑ-μενος
κεῑ-νται	ε[-kei-nto]ἐ-κεῑ-ντο		κεῑ-μένη κεῑ-μενον

これらの動詞は規則的・受動曲折語尾を直接的に語基へと加える。

κάθημαι は事実 *κατά* と *ἦμαι* の複合動詞である。しかし最早その様な名残は留めない (未完了過去 *ἐ-καθή-μην* 参照)。単純な動詞 *ἦμαι* 「すわる」は韻文でしか見られない。

接続法と希求法については、κάθημαι の未来についてと同様、動詞 *καθέζομαι* 「着席する」(約音未来 *καθεδοῦμαι*, §127 参照) の対応形が用いられる。

κεῑμαι の未来は規則的である : *κεῑσομαι* (§126 参照)。

123 未来

[532]

未来幹はその実現が未来に投影された動作を示す：それゆえ未来は時間的視点を持ち、同時に法の意味に似て来る（§280 参照）。

未来幹には能動または中受動相（中動相に対してのみ）一次曲折語尾が付加される；受動相は接尾辞 -θη- または -η- によって特徴付けられる独立形によって中動相から区別される。

この接尾辞がアオリスト受動相において見られるという時、未来とアオリスト受動相はまとめて扱われる（§142-146 参照）。

未来は直説法・希求法（斜希求法未来の用法においてのみ、§301-302 参照）・不定法・分詞にしか存在しない。

多くの動詞は中動相形の未来のみを持つ。特に知覚と動きの動詞が重要である。

例：	ὄράω	見る	未来 ὄψομαι
	μανθάνω	学ぶ	未来 μαθήσομαι
	πλέω	航海する	未来 πλεύσομαι
	εἰμί	～である	未来 ἔσομαι

124 シグマを介在させた未来

[533]

シグマによる未来は語基（あるいは派生語基、§25, 194 参照）から形成された語幹によって特徴付けられるが、そのものに対して語幹母音が伴った接尾辞 -σ- が付加されるのである。それはその語基が母音または二重母音によって、あるいは閉鎖子音によって終わる動詞に固有である（§3 参照）。

現在幹と語基の間関係については、§164-170 参照。

125 接尾辞 -σ- と語基最後との会合

[534]

母音によって終る語基

-σ- の前では二重母音は不変のままであるが、然るに母音が一般に長い形の下に現れる。

例：	τιμάω	誉める	未来 τιμήσω
	δράω	する、作る	δράσω[ā]
	ποιέω	する、作る	ποιήσω
	δηλόω	顕わす	δηλώσω
	τίω	支払う	τίσω[ī]
	φύω	生ませる	φύσω[ū]

いくつかの動詞は、しかしながら -σ- の前では短母音を持つ。

例：	αἰδέομαι (語基 αἰδε(σ)-)	恥かしい	αἰδέσομαι
	ἀρκέω (語基 ἀρκε(σ)-)	満足である	ἀρκέσω

閉鎖音語末で終る語基

-σ- の語基の閉鎖音語末との会合は以下のような音韻的結合を起す：

一 歯音語末 (τ, δ, θ) は -σ- の前に落ちる；

例：	γυμνάζω	鍛える	語基	γυμναδ-	未来	γυμνάσω
	ἀρμόττω	整える		ἀρμοτ-		ἀρόσω
	πείθω	説得する		πειθ-		πείσω

v+ 歯音群は -σ- の前で先行する母音の代償的延長を引き起こしながら脱落する (§14 参照)。

例：	σπένδω	灌奠を行う	語基	σπενδ-	未来	σπείσω
----	--------	-------	----	--------	----	--------

一 喉音語末 (κ, γ, χ) は -σ- と結びつき、ξ を与える；

例：	διώκω	追う	語基	διωκ-	未来	διώξω
	ἄγω	導く		ἄγ-		ἄξω
	ταράττω	混乱させる		ταραχ-		ταράξω

一 唇音語末 (π, β, φ) は -σ- と結びつき、ψ を与える；

例：	τύπτω	叩く	語基	τυπ-	未来	τύψω
	βλάπτω	害する		βλαβ-		βλάψω
	κρύπτω	隠す		κρυφ-		κρύψω

126 シグマを介在させた未来の動詞活用

-σ- と語幹母音はシグマを介在させた未来語尾を特徴付ける。

παιδεύω, 教育する

未来語幹： παιδευσε-/παιδευσο-		語基： παιδευ-	
	直説法	希求法	不定法
能 動	παιδεύ-σω	παιδεύ-σοιμι	παιδεύ-σειν
	παιδεύ-σεις	παιδεύ-σοις	
	παιδεύ-σει	παιδεύ-σοι	分詞
相	παιδεύ-σομεν	παιδεύ-σοιμεν	παιδεύ-σων, -σοντος
	παιδεύ-σετε	παιδεύ-σοιτε	παιδεύ-σουσα, -σούσης
	παιδεύ-σουσι(ν)	παιδεύ-σοιεν	παιδεύ-σον, -σοντος
中 動	παιδεύ-σομαι	παιδευ-σοίμην	不定法
	παιδεύ-ση	παιδεύ-σοιο	παιδεύ-σεσθαι
	παιδεύ-σεται	παιδεύ-σοιτο	
相	παιδευ-σόμεθα	παιδευ-σοίμεθα	分詞
	παιδεύ-σεσθε	παιδεύ-σοισθε	παιδευ-σόμενος
	παιδεύ-σονται	παιδεύ-σοιντο	παιδευ-σομένη
			παιδευ-σόμενον

動詞 εἶμι の未来については、§119 参照。

[768]

127 約音未来

その語基が鼻音 (μ, ν) あるいは流音 (λ, ρ) によって終わる動詞はシグマを介在させた未来を持たない、しかしそれらは語基に対して -έω に終る動詞現在の約音語尾と同じ語尾を加えるのであり、かくてそれら語尾が未来形の特徴となるのである。

[535]

例：	βάλλω	投げる	語基	βαλ-	未来	βαλῶ
	φθείρω	壊す		φθερ-		φθερῶ
	μένω	残る		μεν-		μενῶ
	νέμω	分配する		νεμ-		νεμῶ
	ὄλλυμι	破壊する		ὀλ-		ὀλῶ
	ὀμνυμι	誓う		ὀμ-		ὀμοῦμαι

2音節以上の -ίζω に終る動詞に対して -έω に終る約音未来（アッティカ未来）を同様に見出す。

[538]

例：	κομίζω	運ぶ	語基	κομιδ-	未来	κομιῶ
	νομίζω	見なす		νομιδ-		νομιῶ

120 約音未来の動詞活用

約音未来の語尾は **-έω** に終る動詞の現在 (§111 参照) のそれに対応する。

ἀγγέλλω, 知らせる

語基: ἀγγελ-			
	直説法	希求法	不定法
能 動 相	ἀγγελ-ῶ ἀγγελ-εῖς ἀγγελ-εῖ	ἀγγελ-οῖμι, -οίην ἀγγελ-οῖς, -οίης ἀγγελ-οῖ, -οίη	ἀγγελ-εῖν
	ἀγγελ-οὔμεν ἀγγελ-εῖτε ἀγγελ-οὔσι(v)	ἀγγελ-οῖμεν ἀγγελ-οῖτε ἀγγελ-οῖεν	分詞 ἀγγε-λῶν, -οὔντος ἀγγελ-οὔσα, -ούσης ἀγγελ-οὔν, -οὔντος
	中 動 相	ἀγγελ-οὔμαι ἀγγελ-ῆ, ἀγγελ-εῖ ἀγγελ-εῖται	ἀγγελ-οίμην ἀγγελ-οῖο ἀγγελ-οῖτο
	ἀγγελ-ούμεθα ἀγγελ-εῖσθε ἀγγελ-οὔνται	ἀγγελ-οίμεθα ἀγγελ-οῖσθε ἀγγελ-οῖντο	分詞 ἀγγελ-ούμενος ἀγγελ-ουμένη ἀγγελ-ούμενον

いくつかの動詞の未来は **-άω** に終る動詞の約音動詞活用 (§112 参照) を現す。

例: βιβάζω 経営する 未来 βιβῶ, βιβᾶς, など
 σκεδάννυμι 散り散りにする σκεδῶ, σκεδᾶς, など
 ἐλαύνω 押す、前進する ἐλῶ, ἐλᾶς, など
 (輸送手段によって)

129 未来の意味の現在

[1879]

いくつかの動詞の現在は、もしもの時には文脈から演繹される未来の意味を持つ事がある（実際、短母音の接続法の古い形は未来の意味がある）。

例： χέω, χέομαι	注ぐ、注ぐだろう
τελέω	なし終える、なし終えるだろう
καλέω	呼ぶ、呼ぶだろう

動きの動詞 εἶμι (§121 参照) はその意味によって未来の意味を引受けていた：「行こう」「来よう」

[1880, 1881]

他の動詞は未来について、短母音の接続法の古い形を用いる。

例： ἐσθίω	食べる	未来	ἐδομαι
πίνω	飲む		πίομαι

130 完了幹の上に形成された未来

時に、完了幹 (§147-148 参照) 上に形成された未来に出会うことがある。これは**未来に投影された常態**（または以前の動作の結果）を示す。

[1910]

Ar. Pl. 1027: φράζω καὶ πεπράξεται.
 話せ、さすればこれはなされたことであろう。

アオリスト

131 アオリスト幹：限定のない動作

アオリスト幹は、その名前 (ἀ-όριστος, 限定されざる) がそれを示しているように、動詞の動作をその展開への顧慮も時間の中での位置づけの顧慮もすることなく表現する。しかしながら、現在幹との対比によって、点括的意味を持つことがある (§89 参照)。 [1923-1944]

直説法において、アオリストは過去の事実を述べるために用いられる。この唯一の法においてそれは時間的な視点を含むのである。それは加音 (§108 参照) と、二次時制曲折語尾 (§87, 96 参照) によって表現される。未完了過去 (それは現在幹上に形成されるが) すなわちそれは過去の動作の展開あるいは反復に強調を置くものだが、との対比の中で、直説法アオリストは動作が起こったことのみを示すのである。 [1923]

他の法においては、たとえばそれは不定法においてそして分詞においてであるが、時制 (現在、過去あるいは未来) においての動作の状況への関連の欠如、また動作の展開に関する無関心は、この語幹がギリシア語において幅広い使用を持つということを生み出している。 [1865, 1866, 1872c]

形態的にはアオリスト幹は形成の三つの型を持つのだが、それらは後で別々に学ばれるであろう：

アオリスト I またはシグマを介在させるアオリスト、これは接尾辞 -σ- によって特徴付けられるが、多くの場合 -σα- に拡大されてである； [542]

アオリスト II または語幹アオリスト、これは語基に対して幹母音を曲折語尾の前で加える； [546, 547]

語基アオリスト、これは直接に語基に対して能動曲折語尾だけを加えるものであるが、またそれは一般に自動詞の意味を持つ。 [550]

アオリスト I・II は能動相・中動相について異なる曲折語尾を持つ。受動相については、アオリストは特別な形を配置するが、未来受動相と同様に、接尾辞 -θη- または -η- によって特徴付けられる。

アオリスト受動相動詞活用は後に扱われるであろう (§142-146 参照)。

各々の動詞は原則としてアオリスト形成の一つの型しか示さないことに注意。一つの動詞について異なるアオリストの型があるならば、これは大抵の場合それらアオリスト間での意味の相違に起因している。

132 アオリスト I またはシグマを介在させるアオリスト

アオリスト I またはシグマを介在させるアオリストはアオリストの中で最も多用される語形成である。それは接尾辞 **-σ-** によって特徴づけられるのだが、**語基**（または派生語基、§25, 194 参照）と曲折語尾の間に挿入され、**多くは -σα-** に拡大される。直説法は**加音**と**二次時制曲折語尾**を示し、そして、不定法・分詞などその他の法はこの形の特徴的語尾を示す (§103-106 参照)。

語末の接尾辞 **-σ-** との結合はシグマを介在させる未来 (§125 参照) で作られる音韻変化と同様の变化をもたらす。

歴史的にはシグマを介在させる未来の起源であるのは、更にはシグマを介在させるアオリスト（より正確には短母音の接続法）である。

例：	παιδεύω	教育する	語基	παιδευ-	アオリスト	ἐπαίδευσα
	τιμάω	尊重する		τιμη-		ἐτίμησα
	δείκνυμι	示す		δεικ-		ἔδειξα
	σπένδω	灌奠を行う		σπενδ-		ἔσπεισα

133 シグマを介在しないアオリスト I

その語基が**流音** (λ, ρ) または**鼻音** (μ, ν) によって終わる動詞はアオリストの**シグマを介在しない形**を示す。これは流音または鼻音に直接続く **-σ-** の脱落の結果である。この脱落は通常の音韻規則 (§14 参照) に従って先行する母音の**長音化**によって代償される。

-σ- の脱落以外はシグマを介在しないアオリストはシグマを介在させるアオリスト I の規則的語尾をもつ。

例：	ἀγγέλλω	知らせる	語基	ἀγγελ-	アオリスト	ἠγγειλα
	μένω	留まる		μεν-		ἔμεινα
	σφάλλω	躓かせる		σφᾶλ-		ἔσφηλα
	φαίνω	現す		φᾶν-		ἔφηνα
	καθαίρω	純化する		καθᾶρ-		ἐκάθηρα
	περαίνω	実行する		περᾶν-		ἔπερᾶνα
	κρίνω	判断する		κίν-		ἔκρινα
	ἀμύνω	守る		ἀμῦν-		ἤμῦνα

134 アオリスト I またはシグマを介在させるアオリストの動詞活用

[383]

接尾辞 **-σα-** (または、時に **-σ-**) はアオリスト I またはシグマを介在させるアオリストの語尾を特徴付ける。

παιδεύω, 教育する

		アオリスト幹: παιδευσ(α)-	語基: παιδευ-
		能動相	中動相
直 説 法	1	ἐ-παιδευ-σα	ἐ-παιδευ-σάμην
	2	ἐ-παιδευ-σας	ἐ-παιδευ-σω
	3	ἐ-παιδευ-σε(ν)	ἐ-παιδευ-σατο
接 続 法	1	ἐ-παιδευ-σαμεν	ἐ-παιδευ-σάμεθα
	2	ἐ-παιδευ-σατε	ἐ-παιδευ-σασθε
	3	ἐ-παιδευ-σαν	ἐ-παιδευ-σαντο
希 求 法	1	παιδευ-σω	παιδευ-σωμαι
	2	παιδευ-σης	παιδευ-ση
	3	παιδευ-ση	παιδευ-σηται
命 令 法	1	παιδευ-σωμεν	παιδευ-σώμεθα
	2	παιδευ-σητε	παιδευ-σησθε
	3	παιδευ-σωσι(ν)	παιδευ-σωνται
希 求 法	1	παιδευ-σαιμι	παιδευ-σαίμην
	2	παιδευ-σειας, -σαις	παιδευ-σαιο
	3	παιδευ-σειε(ν), -σαῖ	παιδευ-σαιτο
命 令 法		παιδευ-σαιμεν	παιδευ-σαίμεθα
		παιδευ-σαιτε	παιδευ-σαισθε
		παιδευ-σειαν, -σαιεν	παιδευ-σαιντο
命 令 法	2	παιδευ-σον	παιδευ-σαῖ
	3	παιδευ-σάτω	παιδευ-σάσθω
不定法	2	παιδευ-σατε	παιδευ-σασθε
	3	παιδευ-σάντων	παιδευ-σάσθων
分 詞		παιδευ-σαῖ	παιδευ-σασθαι
		παιδευ-σᾶς, -σαντος	παιδευ-σάμενος
		παιδευ-σασα, -σάσης	παιδευ-σαμένη
	παιδευ-σαν, -σαντος	παιδευ-σάμενον	

直説法

一人称単数能動相において、曲折語尾 -v (§96 参照) は直接に -σ- に続きながら -α- に母音化される。α が接尾辞 -σ- に系統的に加えられ、そして -σα- がアオリストの特徴となるのはこの音韻変化以後である。

二人称単数能動相の -ε は、未完了過去語幹母音 (§109 参照) に置かれた語尾との類比によって説明される。

二人称単数中動相 ἐ-παιδεύ-σω は ἐ-παιδευ-σασο から来る。語尾の二つの母音は母音間シグマの脱後に約音したものである。

接続法

接続法において、この法の特徴的語尾（長い幹母音）を見る。

希求法

アッティカ方言では三人称複数能動相と同様二人称・三人称単数において、しばしば παιδεύ-σειας, παιδεύ-σειε(v) および παιδεύ-σειαν の型の形を用いる。

命令法

命令法二人称単数語尾 -σον および -σαι はアオリストに固有である。

三人称単数能動相については παιδευ-σάτωσαν は後期のもので多くはない。

混同しないよう注意：

παιδεύ-σαι	希求法能動相 3 人称単数	(ほとんど使われない形)
παιδεῦ-σαι	不定法能動相	(アクセントについては、§105 参照)
παίδευ-σαι	命令法中動相 2 人称単数	

135 アオリスト II または幹アオリスト

[546-553]

アオリスト II の語幹は語基（盈階梯あるいはゼロ階梯、§26 参照）から形成されるが、その語基には幹母音 ε/o が曲折語尾に先行しつつ加わるのである。語幹母音の存在は幹アオリストの名称を正当化する。

直説法において、加音と二次時制曲折語尾を見出し、そして不定法と分詞の他の法ではこれらの形 (§103-106 参照) の夫々に固有な語尾が見られる。

直説法においてはアオリスト II は -ω に終る動詞の未完了過去のように活用し、他の法では現在と同様の語尾を持つ。しかしながらアオリスト II を持つ動詞は例外なしに**現在幹から区別されるアオリスト幹**をもつが、従って未完了過去と現在の形はアオリスト II のそれから常に区別される。それは語尾の一致に関わりはない。現在幹およびアオリスト幹との相違はかく示される、すなわち—

—あるいは、他の母音階梯 (§26 参照) によって：

例： λείπω	残す	語基	λείπ-/λιπ-	未完了過去	ἔλειπον	アオリスト	ἔλιπον
τρέπω	回す (他動詞)		τρέπ-/τράπ-		ἔτρεπον		ἔτραπον

—あるいは、現在幹において、接尾辞の、あるいは語基の他の変化の畳音 (§164-170 参照) の存在によって；

例： μανθάνω	学ぶ	語基	μάθ-	未完了過去	ἐμάνθανον	アオリスト	ἔμαθον
βάλλω	投げる		βαλ-		ἔβαλλον		ἔβαλον
τίκτω	生む		τικ-/τεκ-		ἔτικτον		ἔτεκον
γίγνομαι	生まれる		γεν-/γεν-		ἐγίγνομην		ἐγενόμην

—あるいは、異なる語基の使用によって。

例： ὁράω	見る	語基	όρα-	未完了過去	ἑώρων
			ιδ-	アオリスト	εἶδον
φέρω	運ぶ	語基	φερ-	未完了過去	ἔφερον
			ἐγεγκ-	アオリスト	ἤνεγκον
τρέχω	駆ける	語基	τρεχ-	未完了過去	ἔτρεχον
			δραμ-	アオリスト	ἔδραμον

136 アオリスト II または幹アオリストの動詞活用

語幹母音はアオリスト II または幹アオリスト語尾を特徴付ける。

βάλλω, 投げる

		アオリスト幹：βαλε-/βαλο-		語基：βαλ-			
		直説法	接続法	希求法	命令法	不定法	
能 動	1	ἔ-βαλ-ον	βάλ-ω	βάλ-οιμι	βάλ-ε βαλ-έτω	βαλ-εῖν	
	2	ἔ-βαλ-εσ	βάλ-ης	βάλ-οις		分詞	βαλ-ών, -όντος
	3	ἔ-βαλ-ε	βάλ-η	βάλ-οι			βαλ-ούσα, -ούσης
相	1	ἐ-βάλ-ομεν	βάλ-ωμεν	βάλ-οιμεν	βαλ-όντων	βαλ-όν, -όντος	
	2	ἐ-βάλ-ετε	βάλ-ητε	βάλ-οιτε		分詞	βαλ-όμενος
	3	ἔ-βαλ-ον	βάλ-ωσι(ν)	βάλ-οιεν			βαλ-ομένη
中 動	1	ἐ-βαλ-όμεθα	βάλ-ωμαι	βαλ-οίμην	βαλ-οῦ βαλ-έσθω	不定法 βαλ-έσθαι	
	2	ἐ-βάλ-ου	βάλ-η	βάλ-οιο		分詞	βαλ-όμενος
	3	ἐ-βάλ-ετο	βάλ-ηται	βάλ-οιτο			βαλ-ομένη
相	1	ἐ-βαλ-όμεθα	βαλ-ώμεθα	βαλ-οίμεθα	βαλ-έσθων	βαλ-όμενον	
	2	ἐ-βάλ-εσθε	βάλ-ησθε	βάλ-οισθε		分詞	βαλ-ομένη
	3	ἐ-βάλ-οντο	βάλ-ωνται	βάλ-οιντο			βαλ-όμενον

活用形のアクセントの一般規則 (§20 参照) に対して、二人称単数命令法中動相は後退的ではない：βαλοῦ。

同様に能動相不定法と中動相不定法：βαλεῖν, βαλέσθαι (§105 参照) のアクセント、能動相分詞：βαλῶν, βαλοῦσα, βαλόν のアクセントに注意 (§106 参照)。

能動相命令法二人称単数は五つの動詞については、語尾にアクセントがある：

εἰπέ, 「言え」；ἐλθέ, 「行け、来い」；εὗρέ, 「見つけろ」；ἰδέ, 「見よ」；λαβέ, 「取れ」。

複合動詞では、形は通常に後退的 (§20 参照) である：ἄπ-ελθε, κατά-λαβε, など。

命令法能動相 2 人称単数に注意：

σχές (ἔχω, 「持つ」) のアオリスト ἔσχον から) および πίθι (πίνω, 「飲む」) のアオリスト ἔπιον から)

137 よく用いられるアオリスト II のリスト

ここに与えられた語基形はアオリストに現れる語基形である。

アオリスト II	語基			
ἦγαγον	ἄγαγ-	(豊音された語基)	ἄγω	導く
εἶλον	έλ-		αἰρέω	取る
ἦσθόμην	αἰσθ-		αἰσθάνομαι	知覚する
ἦμαρτον	ἄμαρτ-		ἄμαρτάνω	誤る
ἔαδον	άδ-		άνδάνω	気に入る
ἄπηχθόμην	έχθ-		ἄπ-εχθάνομαι	嫌われる
ἄφικόμην	ίκ-		ἄφ-ικνέομαι	着く
ἔλαβον	βαλ-		βάλλω	投げる
ἔβλαστον	βαλστ-		βλαστάνω	芽を出す
έγενόμην	γεν-		γίγνομαι	成る
ἔδακον	δακ-		δάκνω	噛む
ἔδαρθον	δαρθ-		δαρθάνω	眠らせる
ἠγρόμην	έγρ-		έγειρομαι	起きる
έσπόμη ¹	σπ-		έπομαι	従う、続く
ἦλθον	έλθ-		έρχομαι	行く、来る
ἔφαγον	φαγ-		έσθίω	食べる
ἠύρρον, εὔρρον	εύρ-		εύρίσκω	探す、見出す
ἔσχον	σχ-		έχω	持つ
ἔθαλον	θαλ-		θάλλω	開花する
ἔθιγον	θιγ-		θιγγάνω	触る
ἔθανον	θαν-		θνήσκω	死ぬ
ἔθορον	θορ-		θρώσκω	飛ぶ
ἔκαμον	καμ-		κάμνω	疲れる
ἔκραγον	κραγ-		κράζω	泣く
ἔκτανον (詩語)	κταν-		κτείνω	殺す
ἔλαχον	λαχ-		λαγχάνω	手に入れる
ἔλαβον	λαβ-		λαμβάνω	取る
ἔλαθον	λαθ-		λανθάνω	免れる
εἶπον	εἰπ-		λέγω	話す
ἔλιπον	λιπ-		λείπω	残す

¹ 加音の有気音は現在のそれとの類比として説明される。

ἔμαθον	μαθ-	μανθάνω	学ぶ
εἶδον	ἰδ-	ὄρώω	見る
ὠφελον	ὀφελ-	ὀφείλω	債務者である、負っている
ὠφλον	ὀφλ-	ὀφλισκάνω	債務者である、負っている
ἔπαθον	παθ-	πάσχω	蒙る
ἐπτόμην	πτ-	πέτομαι	飛ぶ、飛び立つ
ἔπιον	πι-	πίνω	飲む
ἔπεσον	πεσ- ¹	πίπτω	落とす
ἐπυθόμην	πυθ-	πυνθάνομαι	聞き知る
ἔτεμον	τεμ-	τέμνω	切る
ἔτεκον	τεκ-	τίκτω	子をなす
ἔτραπον (詩語)	τραπ-	τρέπω	曲がらせる
ἔδραμον	δραμ-	τρέχω	駆ける
ἔτραγον	τραγ-	τρώγω	食べる
ἔτυχον	τυχ-	τυγχάνω	手に入れる、出会う
ὑπεσχόμην	σχ-	ὑπ-ισχνέομαι	約束する
ἤνεγκον	ἐνεγκ-	φέρω	運ぶ
ἔφυγον	φυγ-	φεύγω	逃げる
ἔχανον	χαν-	χάσκω	口をぼかんと開けている

138 語基アオリスト

[550]

若干の動詞は語基において母音によって終りつつそれらのアオリストを形成するが、その際長母音あるいは長母音化された語基に直接的に直説法二次時制曲折語尾を現在形に対しては加え、通常の語尾をその他の法に不定法と分詞に対して加える (§103-106 参照)。

これらの語基的といわれるアオリストは能動形のみを持ち一般に自動詞的意味を持つ。

語基アオリストに加えてある動詞は平行しつつシグマを介在させるアオリストを持つが、これはそれとしては他動詞の意味を持つ。

	語基	語基アオリスト	シグマを介在させるアオリスト
βαίνω 歩く	βη-/βα-	ἔβην 歩いた	ἔβησα 歩かせた
φύω 生まれさせる	φῦ-/φῦ-	ἔφῦν 生まれた	ἔφῦσα 生まれさせた
δύω 沈める (他動詞)	δῦ-/δῦ-	ἔδῦν 沈んだ (自動詞)	ἔδῦσα 沈めた (他動詞)
ἵστημι 起す、立てる	στη-/στα-	ἔστην 起きた (ἔστην の動詞活用については、§141 参照)	ἔστησα 起した

¹ アッティカ以外の方言においては、アオリスト ἔπετον がみられるが、これは、変化されない語基変化 πετ- の上に形成されるのである。

139 語基アオリストの動詞活用

語基アオリストの語尾は唯一直説法における曲折語尾からなる。他の法では不定法においてまた分詞において通常の特徴的語尾を見る。

βαίνω	歩く	語基アオリスト	ἔβην	歩いた
σβέννυμι	消す		ἔσβην	消した
γινώσκω	知る		ἔγνων	知った
δύω	沈める（他動詞）		ἔδυν	沈んだ（自動詞）

アオリストの語幹と語基：					
		βη-/βᾶ-	σβη-/σβε-	γνω-/γνω-	δύ-/δύ-
直 説 法	1	ἔ-βη-ν	ἔ-σβη-ν	ἔ-γνω-ν	ἔ-δύ-ν
	2	ἔ-βη-ς	ἔ-σβη-ς	ἔ-γνω-ς	ἔ-δύ-ς
	3	ἔ-βη	ἔ-σβη	ἔ-γνω	ἔ-δύ
	1	ἔ-βη-μεν	ἔ-σβη-μεν	ἔ-γνω-μεν	ἔ-δύ-μεν
	2	ἔ-βη-τε	ἔ-σβη-τε	ἔ-γνω-τε	ἔ-δύ-τε
	3	ἔ-βη-σαν	ἔ-σβη-σαν	ἔ-γνω-σαν	ἔ-δύ-σαν
接 続 法	1	βῶ	σβῶ	γνωῶ	δύ-ω
	2	βῆς	σβῆς	γνωῶς	δύ-ης
	3	βῆ	σβῆ	γνωῶ	δύ-η
	1	βῶμεν	σβῶμεν	γνωῶμεν	δύ-ωμεν
	2	βῆτε	σβῆτε	γνωῶτε	δύ-ητε
	3	βῶσι(ν)	σβῶσι(ν)	γνωῶσι(ν)	δύ-ωσι(ν)
希 求 法	1	βαίην	σβείην	γνοίην	
	2	βαίης	σβείης	γνοίης	
	3	βαίη	σβείη	γνοίη	
	1	βαῖμεν	σβείμεν	γνοῖμεν	
	2	βαῖτε	σβείτε	γνοῖτε	
	3	βαῖεν	σβείεν	γνοῖεν	
命 令 法	2	βῆ-θι	σβῆ-θι	γνω-θι	δύ-θι
	3	βῆ-τω	σβῆ-τω	γνω-τω	δύ-τω
	2	βῆ-τε	σβῆ-τε	γνω-τε	δύ-τε
	3	βᾶ-ντων	σβέντων	γνό-ντων	δύ-ντων
不定法		βῆ-ναι	σβῆ-ναι	γνω-ναι	δύ-ναι
分 詞	男性	βᾶς, βᾶ-ντος	σβείς, σβέ-ντος	γνούς, γνό-ντος	δύ-ς, δύ-ντος
	女性	βᾶσα, βᾶσης	σβείσα, σβείσης	γνούσα, γνούσης	δύσα, δύσης
	中性	βᾶ-ν, βάντος	σβέ-ν, σβέ-ντος	γνό-ν, γνό-ντος	δύ-ν, δύ-ντος

語基母音は希求法と ντ（三人称複数命令法と分詞参照）の前では短い。

140 頻用される語基アオリストのリスト

-ᾱ, -η (-ᾱ の延長) に終る語基

ἀπέδρα̃ν	語基	δρα̃-/δρα̃-	←	ἀπο-διδράσκαω	逃げる
ἔβην		βη-/βᾱ-		βαίνω	歩く
ἔστην (§141 参照)		στη-/στα̃-		ἵστημι	立てる、起す
ἔφθην		φθη-/φθα̃-		φθαίνω	先行する

アオリスト ἐπριάμην「買った」は語基アオリスト中動相の分離形である（現在は ὠνέομαι「買う」が用いられる）。ἐπριάμην の動詞活用については、直説法については -μι におわる動詞 (§109 参照) の中・受動相未完了過去、その他の法については -ημι に終る動詞 (§101 参照) の中・受動相現在の表を参照。

接続法	πρίωμαι	希求法	πριάμην	命令法	πρίασο (および πρίω)
不定法	πρίασθαι	分詞	πριάμενος	など。	

-η (-ε の延長) に終る語基

ἐρύην	語基	ρύη-/ρύε-	←	ρέω	流れる
ἔσβην (自動詞)		σβη-/σβε-		σβέννυμι	消す

-ω に終る語基

ἔγνων	語基	γνω-/γνο-	←	γινώσκω	知る
ἔάλων		άλω-/άλο-		άλισκόμαι	投獄される
ἐβίω		βιω-/βιο-		ζῶ	生きる

-υ に終る語基

ἔδυν (自動詞)	語基	δυ-/δϋ-	←	δύω	沈む (他動詞)
ἔφυν (自動詞)		φυ-/φϋ-		φύω	生まれる

141 動詞 δίδωμι, τίθημι, ἵημι, ἵστημι のアオリスト

[416]

アオリスト ἔδωκα, ἔθηκα および ἦκα の動詞活用は共通の特徴を示す一方、アオリスト ἔστην「すっと立った (自動詞!)」は規則的語基アオリスト (§138-139 参照) でありながらそれから区別される。

δίδωμι	与える	アオリスト幹および語基	δο-/δω-
τίθημι	置く		θε-/θη-
ἵημι	送る、放つ		έ-/ή-
ἵστημι	立てる		στη-/στα̃-

この四つの動詞については、語基は現在幹において豊音される (§170 参照)。

能動相

		δίδωμι	τίθημι	ἵημι	ἵστημι
1	直 説	ἔ-δω-κα	ἔ-θη-κα	ἦ-κα	ἔ-στη-ν
2		ἔ-δω-κας	ἔ-θη-κας	ἦ-κας	ἔ-στη-ς
3		ἔ-δω-κε(ν)	ἔ-θη-κε(ν)	ἦ-κε(ν)	ἔ-στη
1	法	ἔ-δο-μεν	ἔ-θε-μεν	εἶ-μεν [<έ-έ-μεν]	ἔ-στη-μεν
2		ἔ-δο-τε	ἔ-θε-τε	εἶ-τε	ἔ-στη-τε
3		ἔ-δο-σαν	ἔ-θε-σαν	εἶ-σαν	ἔ-στη-σαν
1	接 続	δῶ	θῶ	ῶ	στῶ
2		δῶς	θῆς	ῆς	στής
3		δῶ	θῆ	ῆ	στή
1	法	δῶμεν	θῶμεν	ῶμεν	στῶμεν
2		δῶτε	θήτε	ῆτε	στήτε
3		δῶσι(ν)	θῶσι(ν)	ῶσι(ν)	στήσι(ν)
1	希 求	δοίην	θείην	εἶην	σταίην
2		δοίης	θείης	εἶης	σταίης
3		δοίη	θείη	εἶη	σταίη
1	法	δοῖμεν, δοίημεν	θειῖμεν, θείημεν	εἶμεν, εἶημεν	σταῖμεν, σταίημεν
2		δοῖτε, δοίητε	θειῖτε, θείητε	εἶτε, εἶητε	σταῖτε, σταίητε
3		δοῖεν, δοίησαν	θειῖεν, θείησαν	εἶεν, εἶησαν	σταῖεν, σταίησαν
2	命 令	δό-ς	θέ-ς	ἔ-ς	στή-θι
3		δό-τω	θέ-τω	ἔ-τω	στή-τω
2		δό-τε	θέ-τε	ἔ-τε	στή-τε
3	δό-ντων	θέ-ντων	ἔ-ντων	στά-ντων	
	不定法	δοῦναι	θεῖναι	εἶναι	στήναι
男性	文	δούς, δό-ντος	θείς, θέ-ντος	εἷς, ἔ-ντος	στάς, στά-ντος
女性		δοῦσα, δούσης	θείσα, θείσης	εἶσα, εἶσης	στάσα, στάσης
中性	詞	δό-ν, δό-ντος	θέ-ν, θέ-ντος	ἔ-ν, ἔ-ντος	στά-ν, στά-ντος

中動相

		δίδομαι	τίθεμαι	ἴεμαι
1	直 説	ἐ-δό-μην	ἐ-θέ-μην	εἶ-μην [<ἐ-έ-μην]
2		ἔ-δου	ἔ-θου	εἶ-σο
3		ἔ-δο-το	ἔ-θε-το	εἶ-το
1	法	ἐ-δό-μεθα	ἐ-θέ-μεθα	εἶ-μεθα
2		ἔ-δο-σθε	ἔ-θε-σθε	εἶ-σθε
3		ἔ-δο-ντο	ἔ-θε-ντο	εἶ-ντο
1	接 続	δῶμαι	θῶμαι	ῶμαι
2		δῶ	θῆ	ῆ
3		δῶται	θῆται	ῆται
1	法	δώμεθα	θώμεθα	ώμεθα
2		δώσθε	θήσθε	ῆσθε
3		δῶνται	θῶνται	ῶνται
1	希 求	δοίμην	θειίμην	εἶμην
2		δοῖο	θειῖο	εἶο
3		δοῖτο	θειῖτο	εἶτο
1	法	δοίμεθα	θειίμεθα	εἶμεθα
2		δοῖσθε	θειῖσθε	εἶσθε
3		δοῖντο	θειῖντο	εἶντο
2	命 令	δοῦ	θοῦ	οῦ
3		δό-σθω	θέ-σθω	ἔ-σθω
2		δό-σθε	θέ-σθε	ἔ-σθε
3	δό-σθων	θέ-σθων	ἔ-σθων	
	不定法	δό-σθαι	θέ-σθαι	ἔ-σθαι
男性	文	δό-μενος	θέ-μενος	ἔ-μενος
女性		δο-μένη	θε-μένη	έ-μένη
中性	詞	δό-μενον	θέ-μενον	ἔ-μενον

能動相直説法 ἔδωκα, ἔθηκα および ἤκα は単数において長音化した語基と接尾辞 -κ- を現わす。
時にこの形成が複数に拡張されている形がみられる：ἔδώκαμεν, ἔθηκαν。

能動相命令法は 2 人称単数に特別の曲折語尾 -ς を持つ：δός, θές, ἔς。

能動相不定法 δοῦναι, θεῖναι および εἶναι は -έναι の不定法語尾を前もって予想する約音形である。

動詞 ἴσθημι のアオリストは ἔσθην である。ἔβην のように活用するのは規則的語基アオリストである (§138-139 参照)。その他の語基アオリストのように自動詞の意味（立った）を持ち中動相動詞活用を持たない。他動詞の意味に関しては規則的シグマを介在させる形 ἔσθησα 「置いた」がある。

142 受動相, アオリストおよび未来

[585, 590, 673]

アオリストおよび未来は共通に接尾辞 -θη- (§87-88 参照) を受動相を表わすために持つ。この接尾辞は音韻的変化をもたらしながら動詞の語基（あるいは派生語基、§25 および 194 参照）に加わる。動詞の中で限られた数のものは接尾辞 -η- を示す：このように形成された語幹を受動相アオリスト II および受動相未来 II という。

いくつかの動詞は並行して受動相アオリスト I および受動相未来 I と受動相アオリスト II および受動相未来 II とを持つ。多くの場合それぞれは受動の意味と自動詞の意味である。

アオリストについて直説法においては加音と能動相二次曲折語尾が見られる。そして、他の法においては分詞と不定法は別として、通常の間接相語尾が見られる。

未来においては接尾辞 -(θη)- に接尾辞 -σ- と幹母音と一未来幹の特徴たるもの一を中動相曲折語尾と同様に加える。

ギリシア語の受動相の二次形成が中動相に関して与えられて (§87 参照)、また受動相のように用いられる中動相アオリストをまた見ることがある。

例： ἔσχόμην 私はしがみついた。(ἔχω 「持つ」のアオリスト中動相)

同様に、いくつかの能相欠如動詞（デポーネント）は未来かつ／あるいはアオリストを持つことがあるが、その際受動相接尾辞を持つもののそれは受動の意味を持つということなしになのである。

例： διελέχθην 私は議論した (διαλέγομαι 「議論する」のアオリスト)
ἐδυνήθην または ἐδυνάσθην 私は可能だった (δύναμαι 「可能である」のアオリスト)

143 受動相, アオリスト I および未来 I

[585]

受動相アオリスト I および受動相未来 I は受動相接尾辞 -θη- の存在によって特徴付けられる。

接尾辞 -θη- によって引き起こされる音韻的变化 :

a. 母音または二重母音によって終る語基

語基の語末母音は一般的に接尾辞の前にあつては長音形の下に現れるのだが、それは丁度それをシグマを介在する未来およびアオリストについて見たようにである (§125 参照)。二重母音は変化に従わない。

例: τιμάω	尊重する	語基	τιμη-	アオリスト受動相	ἐ-τιμή-θην
				未来受動相	τιμη-θήσομαι
δουλόω	隷属する	語基	δουλω-	アオリスト受動相	ἐ-δουλώ-θην
				未来受動相	δουλω-θήσομαι
καίω	焼く (他動詞)	語基	καυ-	アオリスト受動相	ἐ-καύ-θην
				未来受動相	καυ-θήσομαι

しかしながら、語基の語末母音はいくつかの場合においては短い。

例: ἐπ-αινέω	賞賛する	語基	αἰνη-/αἰνε-	アオリスト受動相	ἐπ-ηνέ-θην
				未来受動相	ἐπ-αινε-θήσομαι
αἰρέω	取る	語基	αἰρη-/αἰρε-	アオリスト受動相	ἤρέ-θην
				未来受動相	αἰρε-θήσομαι
λύω	解く	語基	λυ-/λύ-	アオリスト受動相	ἐ-λύ-θην[υ]
				未来受動相	λυ-θήσομαι

時に σ が接尾辞の前に現れるが、それは語源によって正当化されあるいは正当化されない。

例: γελάω	笑う	語基	γελα(σ)-	アオリスト受動相	ἐ-γελά-σ-θην
				未来受動相	γελα-σ-θήσομαι
μυμνήσκω	思い出す	語基	μνη-	アオリスト受動相	ἐ-μνή-σ-θην (自動詞的意味)
				未来受動相	μνη-σθήσομαι
κλείω	閉める	語基	κλει(δ)-	アオリスト受動相	ἐ-κλεί-σ-θην
				未来受動相	κλει-σ-θήσομαι
ἀκούω	聞く	語基	ἀκου-	アオリスト受動相	ἤκού-σ-θην
				未来受動相	ἀκου-σ-θήσομαι
πνέω	息する	語基	πνευ-	アオリスト受動相	ἐ-πνεύ-σ-θην
				未来受動相	πνευ-σ-θήσομαι

b. 閉鎖子音によって終る語基

閉鎖子音が語基を終るとき、それは帯気化する。もしもそれが喉音か唇音であるとすればである。そしてそれは σ に変化する、もしそれが歯音 (§14 参照) であるなら。

例: ἄγω	導く	語基	ἀγ-	アオリスト受動相	ἤχ-θην
				未来受動相	ἄχ-θήσομαι
λείπω	残す	語基	λειπ-	アオリスト受動相	ἐ-λείφ-θην
				未来受動相	λείφ-θήσομαι
πειθω	説得する	語基	πειθ-	アオリスト受動相	ἐ-πεῖς-θην (従う)
				未来受動相	πεισ-θήσομαι

144 受動相, アオリスト I および未来 I の動詞活用

[585, 589]

接尾辞 -θη- と能動相曲折語尾（直説法における二次曲折語尾）は受動相アオリスト I 語尾を特徴付ける。
 接尾辞 -θη- およびシグマを介在させる未来の語尾は受動相未来 I を特徴付ける。

παιδεύω 教育する

受動相アオリスト幹：παιδευθη-		語基：παιδευ-		
	直説法	接続法	希求法	命令法
1	ἐ-παιδευ-θην	παιδευ-θῶ	παιδευ-θείην	
2	ἐ-παιδευ-θης	παιδευ-θῆς	παιδευ-θείης	παιδευ-θητι
3	ἐ-παιδευ-θη	παιδευ-θῆ	παιδευ-θείη	παιδευ-θήτω
1	ἐ-παιδευ-θημεν	παιδευ-θῶμεν	παιδευ-θειῖμεν, -θείημεν	
2	ἐ-παιδευ-θητε	παιδευ-θήτε	παιδευ-θειῖτε, -θείητε	παιδευ-θητε
3	ἐ-παιδευ-θησαν	παιδευ-θῶσι(ν)	παιδευ-θειῖεν, -θείησαν	παιδευ-θέντων, -θήτωσαν
不定法			分詞	
παιδευ-θηῖναι			παιδευ-θείς, 属格 -θέντος παιδευ-θείσα, 属格 -θείσης παιδευ-θέν, 属格 -θέντος	

受動相未来幹：παιδευθησε-/παιδευθησο-		語基：παιδευ-	
	直説法	希求法	不定法
1	παιδευ-θήσομαι	παιδευ-θησοίμην	παιδευ-θήσεσθαι
2	παιδευ-θήση	παιδευ-θήσοιο	
3	παιδευ-θήσεται	παιδευ-θήσοιτο	
分詞			
1	παιδευ-θησόμεθα	παιδευ-θησοίμεθα	παιδευ-θησόμενος
2	παιδευ-θήσεσθε	παιδευ-θήσοισθε	παιδευ-θησομένη
3	παιδευ-θήσονται	παιδευ-θήσοιντο	παιδευ-θησόμενον

接尾辞 -θη- の母音は希求法アオリストの諸形においてそして子音群 ντ（アオリスト分詞とアオリスト命令法 3 人称複数）の前で短くなる。

アオリスト希求法複数においては παιδευθειῖμεν, παιδευθειῖτε, παιδευθειῖεν の型の諸形がより多く見られる。

2 人称単数命令法の曲折語尾 -θη- は Grassmann の法則に従って子音の帯気性を失う (§18 参照)。

アオリスト分詞のアクセントに注意 (§106 参照)。

145 受動相, アオリスト II および未来 II

[590]

受動相アオリストと未来の II は接尾辞において θ の不在で特徴付けられるが、その不在は結果として -η- に帰する接尾辞によって特徴付けられる。もしそうでない場合これらの二つの語幹は受動相アオリスト I、未来 I と同じ動詞活用を持つ。(§144 参照)

受動相アオリスト II、未来 II は自動詞の意味を持つ。

二人称単数アオリスト命令法の曲折語尾 -θη は他の帯気の欠如において、不変に保たれている。

例: στάληθη 送られよ στέλλω 「送る」のアオリスト受動相命令法 (アオリスト受動相 ἐστάλην)

146 頻出受動相アオリスト II のリスト

受動相アオリスト II を持つ動詞は同じく受動相未来 II を持つ。ここでは受動相アオリスト形しか与えられない。それをもとにして、受動相未来は容易に引き出すことが出来る。

ここに示された語基形は受動相アオリスト、未来に現れるそれである。

受動相アオリスト II	語基		
ἠλλάγην	ἄλλαγ-	ἄλλάττω	変える
ἐβλάβην	βλαβ-	βλάπτω	害する
ἐβλέπην	βλεπ-	βλέπω	見る
ἐγράφην	γραφ-	γράφω	書く
ἐτάφην (Grassman の法則)	θαφ-	θάπτω	埋葬する
ἐκλάπην	κλαπ-	κλέπτω	盗む
κατεκλίνην	κλιν-	κατα-κλίνω	広がる
ἐκόπην	κοπ-	κόπτω	切る
ἐκρύφην, ἐκρύβην (自動詞も)	κρυφ-/κρυβ-	κρύπτω	隠す
ἐλέγην	λεγ-	λέγω	集める
ἐμάνην	μαν-	μαίνομαι	妄想する
ἐπλάκην, ἐπλέκην	πλακ-/πλεκ-	πλέκω	編む
ἐπλήγην	πληγ-	πλήττω	叩く
ἐξεπλάγην (自動詞)	πλαγ-	ἐκ-πλήττω	吃驚する
ἐρράφην	ράφ-	ράπτω	縫う
ἐρούην (自動詞)	ρου-	ρέω	流れる
ἐροίφην	ροίφ-	ρίπτω	投げる
ἐσκάφην	σκαφ-	σκάπτω	掘る
ἐσπάρην	σπαρ-	σπείρω	種撒く
ἐστάλην	σταλ-	στέλλω	送る
ἐστράφην (自動詞も)	στραφ-	στρέφω	回す (他動詞)
ἐσφάλην (自動詞)	σφαλ-	σφάλλω	落ちる、誤りに陥る
ἐσφάγην	σφαγ-	σφάττω	喉を切って殺す
ἐτράπην	τραπ-	τρέπω	回す (他動詞)
ἐτράφην	τραφ-	τρέφω	養う
ἐτάκην (自動詞)	τακ-	τήκω	溶かす (他動詞)
ἐτριβήν	τριβ-	τριβώ	擦る
ἐτύπην (詩語)	τυπ-	τύπτω	打つ
ἐφάνην (自動詞)	φαν-	φαίνω	現れる
ἐφθάρην	φθαρ-	φθείρω	壊す
ἐχάρην (自動詞)	χαρ-	χαίρω	喜ぶ

147 完了

完了幹：動作の結果

完了幹は恒常的状态またはなされた行為の持続的结果を示す。 [1852b1]

直説法完了は一次時制である (§90 参照)。

完了幹の上に過去完了は形成されるが、過去完了は完了において未完了過去が現在に対するところのものである：それは過去における持続的状态または過去におけるそれ以前になされた動作の持続的结果を示す。過去完了は二次時制である (§90 参照)：それ故、加音と二次曲折語尾を持つ (§96, 108 参照)。

フランス語ではギリシア語における完了を複合過去あるいは現在として訳するがそれは完了した動作に力点を置くか、持続的状态または得られた結果に力点を置くかに従ってである。

完了幹は疊音によって特徴付けられる (§148 参照)。

完了は能動相と中・受動相とは異なる形を持つ。

能動相においては完了形形成の二つの型がある。語基のすぐ後に子音 **-κ-** が現れるか否かによってである。**-κ-** の無い形は完了 II と呼ばれる。

中・受動相においては完了幹は特異的接尾辞を持たない。それ故単純に疊音と語基からなる。それはしかしながら必ずしも母音の同じ階梯や能動完了語基と同じ形態を示さない。

中・受動相完了は別章で学ぶ (§155-161 参照)

148 疊音

[439, 440]

完了の疊音は語基の語頭の子音が母音 ε に伴われたもので形成された接頭辞である。

例： παιδεύω 教育する 能動相完了 πε-παιδεύκα

語頭の子音が帯気閉鎖音である時接頭辞は対応する無声音を用いる (Grassmann の法則、§18 参照)。

例： θηρέω 狩る τεθήρευκα

疊音は語頭のディガンマ (ϕ) またはその他の語頭の子音に影響し得たのだが、それらはその後で脱落したのである。以下は型形成を説明するものである：

ἔ-οικα	[<ϕε-ϕοικα]	似る
εἶ-ρηκα	[<ϕε-ϕρηκα]	言った
ἔ-στηκα	[<σε-στηκα]	立ったままである
εἶ-ωθα	[<σε-σφωθα]	習慣である

語基が**母音**または**二重母音**によって始まる時**延長**が疊音に代る。

例：	ἀγγέλλω	知らせる	能動相完了	ἤγγελα
	αἰρέω	捉える		ἤρηκα

疊音は語基が**二つの子音**によって、**二重子音** (ζ, ξ, ψ) または **ϝ** (これはその時二重になる) によって始まる時、ただ**母音 ε** だけで形成される。

例：	στέλλω	送る	能動相完了	ἔ-σταλκα
	κτίζω	溶かす		ἔ-κτικα
	ζητέω	探す		ἐ-ζήτηκα
	ρίπτω	投げる		ἔ-ρριφα

例外：

	πίπτω	落とす	能動相完了	πέ-πτωκα
	κτάομαι	得る		κέ-κτημαι
	μιμνήσκομαι	思い出す		μέ-μνημαι

しかしながら語基が**流音**または**鼻音**が続く**閉鎖音**によって始まる時、閉鎖音は規則的に疊音される。

例：	χρίω	聖油を注ぐ	能動相完了	κέ-χρικα
	πνέω	息する		πέ-πνευκα

例外：γν 群

例：	γινώσκω	知る	能動相完了	ἔ-γνωκα
----	---------	----	-------	---------

いくつかの語基の**語頭の母音**と**最初の子音**との疊音を**アッティカ疊音**と呼ぶ。この疊音の後では語基の母音は延長される。

例：	ἀκούω	聞く	語基 ἀκο-	能動相完了	ἀκ-ήκοα
	ἐλαύνω	駆る	ἐλα-		ἐλ-ήλακα
	ὄμνυμι	誓う	ὄμο-		ὄμ-ώμοκα

複合動詞の疊音に伴う形におけるアクセントの位置については、§20 参照。

149 能動相の完了 I および過去完了 I

能動相完了 I の語幹は**語基** (あるいは派生語基、§25, 194 参照) 上に成立するが、それは**疊音**から先行され**接尾辞 -κ-** (直説法完了においては **-κα-** に拡大される) に伴われるのである。

この形成は**母音**または**二重母音**、**流音**または**鼻音**、そして**歯音**に終る語基に影響する。接尾辞 **-κ-** の前では母音は一般的に長音形の下に現れ、歯音は系統的に脱落する。

150 能動相の完了 I および過去完了 I の動詞活用

能動相完了 I、過去完了 I 語尾は **-κ-** の存在によって特徴付けられる。

παιδεύω, 教育する

完了幹：πεπαιδευκ(α)		語基：παιδευ-	
直説法			
1	πε-παιδευ-κα	過	ἐ-πε-παιδευ-κειν
2	πε-παιδευ-κας		ἐ-πε-παιδευ-κεις
3	πε-παιδευ-κε(ν)	去	ἐ-πε-παιδευ-κει
1	πε-παιδευ-καμεν	完	ἐ-πε-παιδευ-κεμεν
2	πε-παιδευ-κατε		ἐ-πε-παιδευ-κετε
3	πε-παιδευ-κασι(ν)	了	ἐ-πε-παιδευ-κεσαν
接続法		希求法	
1	πε-παιδευ-κω, πε-παιδευ-κώς ᾧ		πε-παιδευ-κοιμι, πε-παιδευκώς εἶην
2	πε-παιδευ-κῆς, πε-παιδευκώς ἦς		πε-παιδευ-κοις, πε-παιδευκώς εἶης
3	πε-παιδευ-κη, πε-παιδευ-κώς ἦ		πε-παιδευ-κοι, πε-παιδευκώς εἶη
1	πε-παιδευ-κωμεν, πε-παιδευ-κότες ᾧμεν		πε-παιδευ-κοιμεν, πε-παιδευ-κότες εἶμεν
2	πε-παιδευ-κητε, πε-παιδευ-κότες ἦτε		πε-παιδευ-κοιτε, πε-παιδευ-κότες εἶτε
3	πε-παιδευ-κωσι(ν), πε-παιδευ-κότες ᾧσι(ν)		πε-παιδευ-κοιεν, πε-παιδευ-κότες εἶεν
不定法		分詞	
	πε-παιδευ-κέναι		πε-παιδευ-κός, 属格 -κότος πε-παιδευ-κυῖα, -κυίας πε-παιδευ-κός, -κότος

直説法においては、母音 α は起源に置いて完了に固有な一人称の曲折語尾であった。それは語幹接尾辞の統合部分となった。それは三人称単数を除いて全ての人称に現れる。

過去完了においては、加音が畳音に先立つ。

アッティカ方言は過去完了一人称・二人称単数については古い語尾を保っている：

ἐπεπαιδευ-κη, ἐπεπαιδευ-κης.

複数においても以下が見られる：

ἐπεπαιδευ-κειμεν, ἐπεπαιδευ-κειτε, ἐπεπαιδευ-κεισαν.

接続法、希求法においては、分詞と動詞 εἰμί の対応する法においての諸形から複合された迂言形が見られる。

古典ギリシア語では能動相完了命令法の散発的諸型しか証明されない；それ故表はこの法の動詞活用は与えていない。しかしながら、以下を参照：

Ar. Av. 206: μή νυν ἔσταθι.
そこに突っ立っているな！

完了分詞の特別な接尾辞とアクセントに注意 (§106 参照)。

151 能動相の完了 II および過去完了 II

能動相完了 II 幹は語基に続く **-κ-** の欠如によって能動相完了幹 I から区別される。動詞活用は同じである (§150 参照)。 [561]

完了 II はその語基が喉音または唇音に終る動詞に固有ではあるが、それはちょうど語基において流音・鼻音または歯音に終わっている一連の動詞に固有である様にてである。 [562]

完了 II は自動詞の意味を持つ。

完了 II においては、動詞語基は不変であるか、あるいは次の変化に従う：

— 喉音または唇音語末の帯気音：

例： πρᾶττω	する	語基	πραγ- または πρακ-	能動相完了	πέπραχα
κόπτω	切る		κοπ-		κέκοφα

— 母音 α の η への長音化、または e (イ一階梯) の ο (オ一階梯) による置換；

例： λανθάνω	免れる	語基	λαθ-/ληθ-	能動相完了	λέληθα
στρέφω	回す (他動詞)		στρεφ-/στροφ-		ἔστροφα

— これらの変形は結合することがある。

例： πέμπω	送る	語基	πεμπ-/πομπ-	能動相完了	πέπομφα
λαμβάνω	取る		λαβ-/ληβ-		εἴληφα

152 頻用される能動相完了Ⅱリスト

能動相完了Ⅱ

語基

喉音に終る語基

ἦρχα	ἀρχ-	ἄρχω	支配する
ὀρώρουχα	ὀρουχ-	ὀρούττω	掘る
πέπραχα または πέπραγα	πραγ- または πρακ-	πράττω	実行する
τέτηκα (自動詞)	τηκ-	τήκω	溶かす (他動詞)
πέφευγα	φευγ-	φεύγω	逃げる
ἦχα	ἄγ-	ἄγω	導く
τέταχα	ταγ-	τάττω	並べる
πεφύλαχα	φυλακ-	φυλάττω	監視する
συν-είλοχα	λεγ-/λογ-	συλλέγω	集める

唇音に終る語基

γέγραφα	γραφ-	γράφω	書く
βέβλαφα	βλαβ-	βλάπτω	害する
κέκυφα	κυφ-	κύπτω	かがむ
κέκοφα	κοπ-	κόπτω	切る
ἔριφα	ρίπ-	ρίπτω	投げる
λέλοιπα	λειπ-/λοιπ-	λείπω	残す
ἔστροφα	στρεφ-/στροφ-	στρέφω	曲げる (他動詞)
τέτροφα (Grassmann の法則)	θρεφ-/θροφ-	τρέφω	養う
κέκλοφα	κλεπ-/κλοπ-	κλέπτω	盗む
εἵληφα	λαβ-/ληβ-	λαμβάνω	取る
πέπομφα	πεμπ-/πομπ-	πέμπω	送る
τέτροφα	τρεπ-/τροπ-	τρέπω	曲げる (他動詞)
τέτριφα	τριβ-	τριβω	擦る

歯音に終る語基

εἴωθα	ἐθ-/ὀθ-	*ἔθω	習慣がある
λέληθα	λάθ-/ληθ-	λανθάνω	免れる
πέπονθα	παθ-/πενθ-/πονθ-	πάσχω	蒙る
πέποιθα (自信がある)	πειθ-/ποιθ-	πείθομαι	従う

流音または鼻音に終る語基

γέγονα	γεν-/γον-	γίγνομαι	成る
ἐγρήγορα	ἐγερ-/ἐγορ-	ἐγείρομαι	目を覚ます
ἀπέκτονα	κτεν-/κτον-	ἀπο-κτείνω	殺す
μέμνηνα	μᾶν-/μην-	μαίνομαι	錯乱する
πέφηνα	φᾶν-/φην-	φαίνομαι	現れる

153 混合完了

いくつかの動詞の能動相完了の動詞活用において、主に複数の諸人称形において、直接的に曲折語尾あるいは法語尾を疊音された語基に加える古い形が見られる。その他の人称においては、-κ-に終る規則的な形を見る。

これらの同様な動詞の不定法と分詞もまた -κ- なしで形成される。

ἴστημι	起きる	語基 στα̃-/στη-	能動相完了 ἕστηκα
直説法			
1 人称複数	ἔ-στα-μεν		
2 人称複数	ἔ-στα-τε		
3 人称複数	ἔ-στα̃σιν(v)	[<έ-στα̃-ᾱσι]	
過去完了			
1 人称複数	ἔ-στα-μεν		
2 人称複数	ἔ-στα-τε		
3 人称複数	ἔ-στα-σαν		
接続法			
1 人称複数	έ-στῶμεν		
3 人称複数	έ-στῶσι(v)		
希求法	έ-σταίην, など		
不定法	έ-στά-ναι		
分詞	έ-στώς, 属格 έ-στῶτος έ-στώσα, έ-στώσης έ-στός (または έ-στώς), έ-στώτος		
<hr/>			
βαίνω	歩く	語基 βα̃-/βη-	能動相完了 βέβηκα
直説法			
1 人称複数	βέ-βα-μεν		
3 人称複数	βε-βα̃σιν(v)	[<βε-βα̃-ᾱσι]	
不定法	βε-βά-ναι		
分詞	βε-βα-ώς (または βε-βώς) , βε-βα-υῖα, βε-βα-ός		
<hr/>			
ἀποθνήσκω	死ぬ	語基 θνα-	能動相完了 τέθνηκα
直説法			
1 人称複数	τέ-θνα-μεν		
2 人称複数	τέ-θνα-τε		
3 人称複数	τε-θνα̃σιν(v)	[<τε-θνά-ᾱσι]	
過去完了			
3 人称複数	έ-τέ-θνα-σαν		

希求法	τε-θναίην, など
不定法	τε-θνά-ναι
分詞	τε-θνεώς [< τε-θνη-ώς], τε-θνεῶσα, τε-θνεός

特例

「恐れる」を意味する語基 δει-/δοι-/δι- 上に規則的完了 I および II が形成される: δέδουκα および δέδεια 「恐れる」

154 完了 οἶδα, 「知っている」

[794-799]

この完了は現在の意味「知っている」を持つ。アオリスト II εἶδον 「見た」と同じ語基を持つ。動詞活用の中で現れる形の多様性は語基の異なる母音階梯 (εἶδ-/οἶδ-/ἰδ-) によって説明される。

直説法		その他の法	
	完了	過去完了	
1	οἶ-δα	ἤδ-η, ἤδ-ειν	接続法 εἶδ-ῶ, εἶδ-ῆς, など
2	οἶσθα	ἤδ-ησθα, ἤδ-εις	希求法 εἶδ-εῖην, εἶδ-εῖης, など
3	οἶδ-ε(v)	ἤδ-ει	命令法 ἴσθι, ἴστω, ἴστε, ἴστων
			不定法 εἶδ-έναι
1	ἴσμεν	ἤδ-εμεν	分詞 εἶδ-ώς, 属格 -ότος
2	ἴστε	ἤδ-ετε	εἶδ-υῖα, -υῖας
3	ἴσασι(v)	ἤδ-εσαν	εἶδ-ός, -ότος

(訳注: 過去完了 2 人称単数に ἤδεισθα, 1 人称複数に ἤσμεν, 2 人称複数に ἤστε, 3 人称複数に ἤσαν の形も与えられる, 「田中・松平 ギリシア語入門」, p250)

語基 εἶδ- 上に未来 εἴσομαι 「知るだろう」が形成される。

155 中・受動相の完了および過去完了

[574]

中・受動相完了および過去完了は特異的接尾辞なしに、直接的に畳音された語基に対して中・受動相曲折語尾（または分詞および不定法には語尾）を加えて形成される。

能動相完了と中・受動相完了は必ずしも同じ母音階梯と語基の同じ形態とをそれらの語幹の形成を示さないことに注意。そして、能動相完了 II を持つ動詞についても特にそうである。

例:	πέμπω	送る	能動相完了	πέπομφα	中・受動相完了	πέπεμμαι
	στρέφω	曲げる (他動詞)		ἔστροφα		ἔστρεμμαι

156 中・受動相完了および過去完了動詞活用

中・受動相完了および過去完了語幹は特別な接尾辞は持たない。直説法と命令法において、それ故語尾は曲折語尾と一致する (§96-97 参照)。

παιδεύω, 「教育する」

中・受動相完了語幹：πεπαιδευ-		語基：παιδευ-		
直説法				
1		πε-παιδευ-μαι	過	ἐ-πε-παιδευ-μην
2	現	πε-παιδευ-σαι	過	ἐ-πε-παιδευ-σο
3	在	πε-παιδευ-ται	去	ἐ-πε-παιδευ-το
1	完	πε-παιδευ-μεθα	完	ἐ-πε-παιδευ-μεθα
2	了	πε-παιδευ-σθε	了	ἐ-πε-παιδευ-σθε
3		πε-παιδευ-νται		ἐ-πε-παιδευ-ντο
接続法		希求法		
1		πε-παιδευ-μένος ᾧ		πε-παιδευ-μένος εἶην
2		πε-παιδευ-μένος ᾗς		πε-παιδευ-μένος εἶης
3		πε-παιδευ-μένος ᾗ		πε-παιδευ-μένος εἶη
1		πε-παιδευ-μένοι ᾧμεν		πε-παιδευ-μένοι εἶμεν
2		πε-παιδευ-μένοι ᾗτε		πε-παιδευ-μένοι εἶτε
3		πε-παιδευ-μένοι ᾧσι(ν)		πε-παιδευ-μένοι εἶεν
命令法		不定法		
2		πε-παιδευ-σο		πε-παιδευ-σθαι
3		πε-παιδευ-σθω		分詞
				πε-παιδευ-μένος
2		πε-παιδευ-σθε		πε-παιδευ-μένη
3		πε-παιδευ-σθων		πε-παιδευ-μένον

接続法および希求法においては、ただ迂言形 (périphrastique) しか見られない (§150 参照)。

不定法と分詞はバエヌルティマ上にアクセントを持つ (§105, 106 参照)。

子音によって終る語基動詞

[409]

その語基が子音によって終る動詞の中・受動相完了幹は、語幹末子音の曲折語尾の語頭とのあるいは不定法および分詞語尾の語頭と会合する時には、期待される音韻的变化に従う (§14-15 参照)。

157 a. 唇音に終る語基

[409a]

γράφω, 「書く」

中・受動相完了語幹：γεγραφ-			語基：γραφ-	
直説法			命令法	不定法
		過去完了		
1	γέγραμμαι	έγεγράμμην	γέγραψο γεγράφθω	γεγράφθαι
2	γέγραψαι	έγγραψο		
3	γέγραπται	έγγραπτο		
				分詞
1	γεγράμμεθα	έγεγράμμεθα	γέγραφθε γεγράφθων	γεγραμμένος
2	γέγραφθε	έγγραφθε		γεγραμμένη
3	γεγραμμένοι εισί(v)	γεγραμμένοι ήσαν		γεγραμμένον

158 b. 喉音に終る語基

[409c]

πράττω, 「行う」

中・受動相完了語幹：πεπραγ-			語基：πραγ- または πρακ-	
直説法			命令法	不定法
		過去完了		
1	πέπραγμαί	έπεπράγμην	πέπραξο πεπράχθω	πεπράχθαι
2	πέπραξαι	έπέπραξο		
3	πέπρακται	έπέπρακτο		
				分詞
1	πεπράγμεθα	έπεπράγμεθα	πέπραχθε πεπράχθων	πεπραγμένος
2	πέπραχθε	έπέπραχθε		πεπραγμένη
3	πεπραγμένοι εισί(v)	πεπραγμένοι ήσαν		πεπραγμένον

159 c. 歯音に終る語基

[409b]

ψεύδω, 「騙す」

中・受動相完了語幹 : ἐψευδ-			語基 : ψευδ-	
直説法			命令法	不定法
		過去完了		
1	ἐψεύσμαι	ἐψεύσμην	ἐψεύσο ἐψεύσθω	ἐψεῦσθαι
2	ἐψεύσαι	ἐψεύσο		
3	ἐψεύσται	ἐψεύστο		
				分詞
1	ἐψεύσμεθα	ἐψεύσμεθα	ἐψεύσθε ἐψεύσθων	ἐψεύσμενος
2	ἐψεύσθε	ἐψεύσθε		ἐψεύσμένη
3	ἐψεύσμένοι εισί(v)	ἐψεύσμένοι ἦσαν		ἐψεύσμενον

160 d. 流音に終る語基

[409d]

ἀγγέλλω, 「知らせる」

中・受動相完了語幹 : ἠγγελ-			語基 : ἀγγελ-	
直説法			命令法	不定法
		過去完了		
1	ἠγγέλμαι	ἠγγέλμην	ἠγγελο ἠγγέλθω	ἠγγέλθαι
2	ἠγγελομαι	ἠγγελο		
3	ἠγγελοται	ἠγγελο		
				分詞
1	ἠγγέλμεθα	ἠγγέλμεθα	ἠγγελο ἠγγέλθων	ἠγγελεμένος
2	ἠγγελοθε	ἠγγελοθε		ἠγγελεμένη
3	ἠγγελεμένοι εισί(v)	ἠγγελεμένοι ἦσαν		ἠγγελεμένον

161 e. 鼻音に終る語基

[409d]

φαίνω, 「現わす」

中・受動相完了語幹 : πεφαν-			語基 : φαν-	
直説法			命令法	不定法
		過去完了		
1	πέφασμαι	ἐπέφασμην	πέφανσο πεφάνθω	πεφάνθαι
2	πέφασσαι	ἐπέφανσο		
3	πέφασται	ἐπέφαντο		
				分詞
1	πεφάσμεθα	ἐπεφάσμεθα	πέφανθε πεφάνθων	πεφασμένος
2	πέφανθε	ἐπέφανθε		πεφασμένη
3	πεφασμένοι εισί(v)	πεφασμένοι ἦσαν		πεφασμένον

直説法三人称複数においては、曲折語尾 -νται および -ντο は語幹語末子音と結びつくことが出来ず、用いられない。それ故、ただ迂言形を見るのみである。

しかしながら曲折語尾 -νται および -ντο の ν の母音化を示す古い形が存在する：γεγράφαι, ἐτετάχατο。

三つの同一子音の重複を避ける。かくして例えば πέμπω「送る」、語基 πεμπ-, 中・受動相完了は πέπεμμαι であって πέπεμμ-μαι ではない。

鼻音語基においては、鼻音の μ 前での σ による置換に注意すべし。恐らく歯音語基との類比によるのである (§158 参照)。

162 動詞活用における双数

[462]

動詞活用において、二人称、三人称についてしか、双数 (§87 参照) の特別な曲折語尾はない。

		一次曲折語尾	二次曲折語尾	命令法
能動相 (および受動相アオリスト)	2	-τον	-τον, -την	-τον
	3	-τον	-την	-των
中・受動相	2	-σθον	-σθον, -σθην	-σθον
	3	-σθον	-σθην	-σθων

想い起こすこと

全ての語幹において、接続法語尾は一次曲折語尾によってそして希求法語尾は二次曲折語尾によって形成される (§103-104 参照)。

双数の例：

	二人称	三人称
直説法能動相現在	παιδεύετον	παιδεύετον
希求法能動相現在	παιδεύοιτον, παιδευοίτην	παιδευοίτην
接続法中動相アオリスト	παιδεύσθησθον	παιδεύσθησθον
命令法受動相アオリスト	παιδεύθητων	παιδευθήτων

163 動詞の諸クラス

動詞語幹形成に置いて、 $\pi\alpha\iota\delta\epsilon\acute{\upsilon}\omega$ 型（シグマを介在させる能動相および中動相未来およびアオリスト、接尾辞 $-\theta\eta-$ の受動相未来およびアオリスト、接尾辞 $-\kappa-$ の能動相完了）の規則的モデルが優勢である。

しかしながら、多くの動詞にとっては、現在幹のそれを離れては、その他の語幹の形成を導き出すことは不可能である。この不可能性は未来・アオリスト・完了の型の多様性だけに帰すべきではなく、同じく、かつ何よりも、同じ語基の異なった形の使用、あるいは異なった語基のもの一各々の語幹形成に対しての一に帰すべきである。これが動詞の直説法現在の 1 人称に加えて同様にその直説法未来・アオリスト・完了の能動・受動相を憶えるのが宜しい理由なのである (§88 参照)

164 現在幹から語基へ

ギリシア語の動詞学習に際しては、動詞の語基（または派生語基、§25, 194 参照）を知るのが善い。異なる語幹が事実、唯一で同じ語基は別として、多くの場合において形成されている。尤も、そのものが、一つの語幹から別の語幹へと、母音交替 (§26 参照) あるいはその他の音韻変化を呈しえるということはあるにしても。

しばしば、**現在幹形成において、語基は重要な変化に従っている**。このことは次の事実に帰するのである。即ち、非常に多くの動詞にとっては、現在幹は、**歴史的に言って、語基の特徴的接尾辞** (§166-169 参照) やその他の諸添加による**語基の拡張**の助けを借りて形成されているという事実にてである (**挿入辞** §168 参照、**現在の量音** §170 参照)。

これらの接尾辞の一つは古い印欧半母音 yod (§16 参照) を含むのだが、 yod は、語基語末との子音会合に際し、多様な変化を引き起こすのである。

現在幹形成において用いられる接尾辞に従って、限られた数の動詞のクラスを限定することが出来る。

現在幹の特徴的接尾辞と派生語基形成 (§194 参照) において用いられる**派生接尾辞**をよく区別しなければならない、派生接尾辞の機能は文法的であり、その語義的意味は現在幹によらない。

例において、 $-\omega$ におわる動詞現在幹には、語幹母音に o を持つ語幹形しか与えられないだろう。

165 1. 語基現在

語幹は語基（または派生語基）に語幹母音しか加えない。あるいは問題が $-\mu\iota$ に終る動詞であるとき、それは語基と一致する。このクラスは以下を含む：

— その語基が母音または二重母音で終る動詞；

例：	$\lambda\acute{\upsilon}\omega$	解く	現在幹	$\lambda\ddot{u}o-$	語基	$\lambda\ddot{u}-/\lambda\ddot{y}-$
	$\pi\alpha\iota\delta\epsilon\acute{\upsilon}\omega$	教育する		$\pi\alpha\iota\delta\epsilon\upsilon o-$		$\pi\alpha\iota\delta\epsilon\upsilon-$
	$\tau\iota\mu\acute{\alpha}\omega$	誉める		$\tau\iota\mu\acute{\alpha}o-$		$\tau\iota\mu\eta^{-1}$
	$\phi\eta\mu\acute{\iota}$	言う		$\phi\eta-/ \phi\acute{\alpha}-$		$\phi\acute{\alpha}-/\phi\eta-$

¹- $\acute{\alpha}\omega$ および $-\acute{\epsilon}\omega$ におわる動詞は、語基を長音語末母音において持つことがある。それは現在において短い形の下に現れる。

いくつかの動詞はディガンマによって終る語基を持っていた。そして、それは母音間で消滅したのだったが、なかなか現在幹の語幹母音の前でこそそうであったが、しかしそれは *υ* と母音化された形の下に他の語幹の中で現れるのである。

例：	πλέω	航海する	現在幹	πλεο-	語基	πλε(υ)-
	πνέω	息する		πνεο-		πνε(υ)-
	ρέω	流れる		ρέο-		ρέ-/ρύη-

—その語基が子音で終る動詞；

例：	λέγω	言う	現在幹	λεγο-	語基	λεγ-
	δέρω	皮を剥ぐ		δερο-		δερ-
	μένω	留まる		μενο-		μεν-

これらの動詞の一部については、語基はある語幹から別の語幹への母音交替を示すことがある。

例：	λείπω	残す	現在幹	λειπο-	語基	λειπ-/λιπ-/λοιπ-
			能動相アオリスト	ἔλιπτον		
			能動相完了	λέλοιπα		
	φεύγω	逃げる	現在幹	φευγο-	語基	φευγ-/φυγ-
			能動相アオリスト	ἔφυγον		(ὁ φυγάς 「追放された者」参照)

166 2. 交替語基の現在

ある種の動詞の語基は現在幹において交替形の下に現れるが、その交替形は古い印欧接尾辞 *-*ye-/*yo* (§16 参照) の付加によって説明される。*-ω* に終る動詞現在形しかない：

167 —唇音 (π, β, φ) 語基から派生した *-πτω* に終る現在

例	κόπτω	切る	現在幹	κοπτο-	語基	κοπ-
	βλάπτω	害する		βλαπτο-		βλαβ- (ή βλάβη, 「害」参照)
	κρύπτω	隠す		κρυπτο-		κρυφ- (κρύφιος, 「秘密の」参照)

—無声音または帯気音、喉音 (κ, χ) または歯音 (τ, θ) に終る語基由来の *-πτω (-σσω)* に終る現在

例：	φυλάττω	監視する	現在幹	φυλαπτο-	語基	φυλακ- (ή φυλακή, 「警護」参照)
	πράττω	実行する		πραπτο-		πραγ- または πρακ- (τὸ πρᾶγμα, 「事」参照)
	ταράττω	乱す		ταραπτο-		ταραχ- (ή ταραχή, 「混乱」参照)
	πλάττω	加工する		πλαπτο-		πλαθ- (ὁ κοροπλάθος, 「人形製作者」参照)
	ἐρέττω	漕ぐ		ἐρεπτο-		ἐρετ- (ὁ ἐρέτης, 「漕ぎ手」参照)

一 有声歯音 (δ) または有声喉音 (γ) に終る語基由来の -ζω に終る現在

例: ἐλπίζω	希望する	現在幹	ἐλπίζο-	語基	ἐλπιδ- (ή ἐλπίς, -ίδος, 「希望」参照)
οἰμώζω	呻く		οἰμώζο-		οἰμώζο- (οἰμωγή, 「悲嘆」参照)
σαλπίζω	ラッパを吹く		σαλπίζο-		σαλπιγ- (ή σάλπιγξ, -ιγγος, 「ラッパ」参照)

-άζω および -ίζω の語尾は偽切断 (fausse coupe) (§188 参照) によって分離され、そして、派生語尾として用いられる (§194 参照)。

一流音 (λ) 語基由来の -λλω に終る現在

例: ἀγγέλλω	知らせる	現在幹	ἀγγέλλο-	語基	ἀγγελ- (ὁ ἄγγελος, 「使者」参照)
βάλλω	投げる		βάλλο-		βαλ-
ἄλλομαι	飛ぶ		ἄλλο-		άλ-

一 -ᾶν, -εν, -ῖν, -ῦν, -ᾶρ, -ερ, -ῖρ, -ῦρ 語基由来の -αίνω, -είνω, -ίνω[ι], -ύνω[υ], -αίρω, -είρω, -ίρω[ι], -ύρω[υ] に終る現在

		現在幹	語基
例: φαίνω	示す	φαινο-	φᾶν- (φάνερός, 形容詞「明白な」参照)
τείνω	張る	τεινο-	τεν-
κρίνω	裁く	κρίνο-	κρίν- (ή κρίσις[ι], 「裁判」参照)
πλύνω	洗う	πλύνο-	πλύν-
καθαίρω	純化する	καθαίρο-	καθᾶρ- (καθᾶρός, 形容詞「純粋な」参照)
σπείρω	種を撒く	σπειρο-	σπερ- (τὸ σπέρμα, 「種」参照)
οἰκτίρω	憐れむ	οἰκτίρο-	οἰκτίρ- (ὁ οἰκτίρμός, 「憐憫」参照)
μαρτύρομαι	証人である	μαρτύρο-	μαρτύρ- (ὁ μάρτυς, -ύρος, 「証人」参照)

-αίνω および -ύνω[υ] の語尾は偽切断 (fausse coupe) (§188 参照) によって分離され、そして、派生語尾として用いられる (§194 参照)。

168 3. 鼻音 (-ν-, -νε-, -αν-, -νῦ-/ -νῦ-) 接尾辞の現在

若干の動詞の現在幹は時に -νε- あるいは -αν- に拡張されて接尾辞 -ν- を加える。語基に接尾辞 -αν- を加える現在幹は時にまた、語基の内部に鼻音を挿入する (挿入辞 infixe あるいは語中音添加 épenthèse)。

		現在幹	語基
例: τίνω	支払う	τινο-	τι-, (ή τίσις, 「支払い」参照)
τέμνω	切る	τεμνο-	τεμ-
ἰκνέομαι	着く	ἰκνεο-	ἰκ-
αἰσθάνομαι	分かる	αἰσθανο-	αἰσθα- (ή αἴσθησις, 「感覚」参照)
ἀμαρτάνω	間違ふ	ἀμαρτανο-	ἀμαρτ- (τὸ ἀμάρτημα, 「誤り」参照)

λανθάνω	免れる	λανθανο-	λαθ-
γυγχάνω	得る	τυγχανο-	τυχ- (ή τύχη, 「めぐり合わせ」参照)
λαμβάνω	取る	λαμβανο-	λαβ-

-νύ-/νύ- 接尾辞の現在幹を持つ -μι に終わる現在の比較的多い群が存在する、§99, 101 参照。

例： δεύκνυμι 示す δεικνυ- δεικν- (τὸ παράδειγμα, 「例」参照)

169 4. -(ι)σκω に終わる現在

接尾辞 -(ι)σκ- は次第に実現されつつある動作を順次表現する動詞を特徴付ける。

例：	γηράσκω	老ける	現在幹	γηρασκο-	語基	γηρασ- (τὸ γῆρας, 「老年」参照)
	εὐρίσκω	見つける		εὐρισκο-		εὐρ-

これらの動詞の一部は現在幹において母音 ι の豊音に影響される (§170 参照)。

例：	γινώσκω	知る	現在幹	γινωσκο-	語基	γνω- (ή γνώμη, 「意見」参照)
	τιτρώσκω	傷つける		τιτρωσκο-		τρω-

170 5. 豊音の現在

[448]

いくつかの動詞の現在は語基に豊音を加える。この豊音は語頭の子音を取り、それを ι に続けさせながら語基に先行する音節からなる。-ω に終わる現在形が重要である、その多くは -ισκω と -μι に終わる (§169 参照)。

例：	γίγνομαι	成る	現在幹	γιγνο-	語基	γν-
	γινώσκω	知る		γινώσκο-		γνω-
	πίμπλημι	満たす		πιμπλη-/πιμπλά-		πλα-/πλη-
				(挿入鼻音が続く豊音、§168 参照)		
	δίδωμι	与える		διδω-/διδο-		δο-/δω-
	τίθημι	置く		τιθη-/τιθε-		θε-/θη-
				(帯気音のない豊音、Grassmann の法則、§18 参照)		
	ἵημι	送る		ίη-/ίε- (<ίή-/ίέ-)		έ-/ή-
		投げずる		*ye から、ラテン語 iacio, フランス語 jeter		
	ἵστημι	立てる		ίστη-/ίστᾶ-		στᾶ-/στη-
				(豊音 : ί- < σι-)		

現在幹形成に従って分類された動詞リスト

それぞれの動詞について与えられた形については、§88 参照。
このリストは網羅したものではない。ここでは主要な動詞とそれらのよく用いられる形が与えられている。

これらの同じ動詞はアルファベット順に分類された主要動詞リストに再掲される。§351 参照。

1. 現在語基動詞

171 母音または二重母音に終わる語基

			未来	アオリスト	完了
1.	παιδεύω	教育する	能 受	παιδεύσω παιδευθήσομαι	ἐπαίδευσα ἐπαιδεύθην πεπαιδευκα πεπαιδευμαι
2.	μηνύω	明かす		μηνύσω μηνυθήσομαι	ἐμήνυσα ἐμηνύθην μεμήνυκα μεμήνυμαι
3.	παύω παύομαι 受動	止めさせる 止める		παύσω παύσομαι παυθήσομαι	ἔπαυσα ἐπασάμην ἐπαύθην πέπαυκα πέπαυμαι πέπαυμαι
4.	θηράω	狩る		θηράσω θηραθήσομαι	ἐθήρασα ἐθηράθην τεθήρακα τεθήραμαι
5.	τιμάω	誉める		τιμήσω τιμηθήσομαι	ἐτίμησα ἐτιμήθην τετίμηκα τετίμημαι
6.	ποιέω	作る、なす		ποιήσω ποιηθήσομαι	ἐποίησα ἐποιήθην πεποίηκα πεποίημαι
7.	δηλόω	示す		δηλώσω δηλωθήσομαι	ἔδηλωσα ἐδηλώθην δεδήλωκα δεδήλωμαι
8.	ἔάω	許す		ἔάσω ἐαθήσομαι	εἶασα εἶαθην εἶακα εἶαμαι
9.	δέω	縛る		δήσω δεθήσομαι	ἔδησα ἐδέθην δέδεκα δέδεμαι
10.	λύω	解く、破壊する		λύσω λυθήσομαι	ἔλυσα ἐλύθην λέλυκα λέλυμαι
11.	θύω	供犠する		θύσω τυθήσομαι	ἔθυσα ἐτύθην τέθυκα τέθυμαι
12.	δύω δύομαι 受動	沈める (他) 沈む (自)		δύσω δύσομαι δυθήσομαι	ἔδυσα ἔδυν ἐδύθην δέδυκα δέδυμαι

13.	φύω φύομαι	生み出す 生まれる	φύσω φύσομαι	ἔφουσα ἔφυν	πέφυκα πέφυκα
14.	ἐπ-αινέω	賞賛する	ἐπ-αινέσομαι ἐπ-αινέθησομαι	ἐπ-ήνεσα ἐπ-ηνήθην	ἐπ-ήνεκα ἐπ-ήνεμαι
15.	χρῶμαι (不定法 χρῆσθαι)	利用する	χρήσομαι	ἐχρησάμην ἐχρήσθην	κέχρημαι
16.	σπάω	引く	σπάσω σπασθήσομαι	ἔσπασα ἐπάσθην	ἔσπακα ἔσπασμαι
17.	γελάω	笑う	γελάσομαι γελασθήσομαι	ἐγέλασα ἐγελάσθην	γεγέλασμα
18.	τελέω	成就する	τελῶ, τελέσω τελεσθήσομαι	ἐτέλεσα ἐτελέσθην	τετέλεκα τετέλεσμαι
19.	αἰδέομαι	恥じる	αἰδέσομαι	ἠδέσθην	ἠδεσμαι
20.	ἀρκέω	十分である	ἀρκέσω	ἤρικεσα	
21.	καλέω	呼ぶ	καλῶ κληθήσομαι	ἐκάλεσα ἐκλήθην	κέκληκα κέκλημαι
22.	κελεύω	命令する	κελεύσω κελευσθήσομαι	ἐκέλευσα ἐκελεύσθην	κεκέλευκα κεκέλευσμαι
23.	κλείω	閉める	κλείσω κλεισθήσομαι	ἐκλείσα ἐκλείσθην	κέκλεικα κέκλειμαι
24.	χρίω	油を塗る	χρίσω χρισθήσομαι	ἔχρισα ἐχρίσθην	κέχρικα κέχριμαι
25.	ἀκούω	聞く	ἀκούσομαι ἀκουσθήσομαι	ἤκουσα ἠκούσθην	ἀκήκοα ἠκουσμαι
26.	καίω, κᾶω	焼く	καύσω καυθήσομαι	ἔκαυσα ἐκαύθην	κέκαυκα κέκαυμαι
27.	κλαίω, κλάω	泣く	κλαύσομαι κλαυ(σ)θήσομαι	ἐκλαυσα ἐκλαυ(σ)θην	κέκλαυκα κέκλαυμαι
28.	πλέω	航海する	πλεύσομαι	ἔπλευσα	πέπλευκα
29.	πνέω	息する	πνεύσομαι, -οῦμαι	ἔπνευσα	πέπνευκα
30.	ρέω	流れる	ρέυσομαι, ρέυσουμαι, ρύθσομαι	ἔρρευσα, ἐρύθην	ἐρρύηκα
31.	χέω	注ぐ	χέω χυθήσομαι	ἔχεα ἐχύθην	κέχυκα κέχυμαι

32.	φημί	言う ¹ 、述べる 肯定する	φήσω 肯定するだろう	ἔφησα 肯定した	
33.	ἐπίσταμαι	知る	ἐπιστήσομαι	ἠπιστήθην	
34.	δύναμαι	~できる	δυνήσομαι	ἔδυνήθην ἔδυνάσθην	δεδύνημαι
35.	ἄγαμαι	驚く	ἀγάσομαι	ἀγάσθην ἠγασάμην	
36.	κρέμαμαι (n.122 参照)	ぶら下がる	κρεμήσομαι		

172 閉鎖音に終わる語基

37.	πέμπω	送る	πέμψω πεμφθήσομαι	ἔπεμψα ἐπέμφθην	πέπομφα πέπεμμαι
38.	γράφω	書く	γράψω γραφήσομαι	ἔγραψα ἐγράφην	γέγραφα γέγραμμαι
39.	στρέφω	向ける (他)	στρέψω στραφήσομαι	ἔστρεψα ἔστράφην	ἔστροφα ἔστραμμαι
40.	τρέπω	向ける (他)	τρέψω	ἔτρεψα, ἔτραπον	τέτροφα
	τρέπομαι	向く (自)	τρέψομαι	ἐτραπόμην, ἐτρεψάμην, ἐτράπην	τέτροφα
	受動		τραπήσομαι, τρεφήσομαι	ἐτράπην, ἐτρέφθην	τέτραμμαι
41.	τρέφω	養う	θρέψω τραφήσομαι	ἔθρεψα ἐτράφην	τέτροφα τέθραμμαι
42.	τριβώ	擦る	τριψώ τριβήσομαι τριφθήσομαι	ἔτριψα ἐτριβήν[ι] およ ⁸ ἐτριφθην	τέτριφα τέτριμμαι
43.	λείπω	残す	λείψω λειφθήσομαι	ἔλιπον ἐλείφθην	λέλοιπα λέλειμμαι
44.	ἔπομαι	従う	ἔψομαι	ἔσπόμην	

¹n.160 参照

45.	διώκω 受動 δια-λέγομαι	追う 対話する	διώξομαι, διώξω διωχθήσομαι	ἐδίωξα ἐδιώχθην	δεδίωχα δεδιώγμαι
46.	λέγω 受動 δια-λέγομαι	言う ² 対話する	λέξω λεχθήσομαι δια-λέξομαι	ἔλεξα ἐλέχθην δι-ελέχθην	λέλεγμαι δι-είλεγμαι
47.	συλ-λέγω	集める	συλ-λέξω συλ-λεγήσομαι	συν-έλεξα συν-ελέγην	συν-είλοχα συν-είλεγμαι
48.	ἄρχω	支配する、始める	ἄρξω ἀρχθήσομαι	ἤρξα ἤρχθην	ἤρχα ἤργμαι
49.	ἄγω	導く	ἄξω ἀχθήσομαι	ἤγαγον ἤχθην	ἤχα ἤγμαι
50.	τήκω τήκομαι 受動	溶かす（他） 溶ける（自）	τήξω τακήσομαι ταικήσομαι	ἔτηξα ἐτάκην	τέτηκα τέτηγμαι
51.	φεύγω	逃げる	φεύξομαι, -οῦμαι	ἔφυγον	πέφευγα
52.	ἔλκω	引く	ἔλξω ἐλκυσθήσομαι	εἴλκυσα εἴλκύσθην	εἴλκυκα εἴλκυσμαι
53.	ἔχω 中動および受動	持つ	ἔξω, σχήσω ἔξομαι, σχήσομαι	ἔσχον ἐσχόμην	ἔσχηκα ἔσχημαι
54.	πείθω πείθομαι 受動	説得する 従う	πείσω πείσομαι πεισθήσομαι	ἔπεισα, ἐπίθον ἐπιθόμην ἐπέισθην ³	πέπεικα πέποιθα πέπεισμαι
55.	ψεύδω ψεύδομαι 受動	欺く 嘘をつく	ψεύσω ψεύσομαι ψευσθήσομαι	ἔψευσα ἐψευσάμην ἐψεύσθην	ἔψευκα ἔψευσμαι ἔψευσμαι
56.	σπένδω σπένδομαι 受動	灌奠の酒を注ぐ (灌奠を行って) 休戦する	σπείσω σπείσομαι σπεισθήσομαι	ἔσπεισα ἐσπεισάμην ἐσπείσθην	ἔσπεικα ἔσπεισμαι ἔσπεισμαι
57.	ἠδομαι	楽しむ	ἠσθήσομαι	ἠσθην	

²n.160 参照

³ἐπέισθην はまた、「従った（過去）」を意味する。

流音または鼻音子音により終わる語基				
58.	δέρω	皮を剥ぐ	δερω δαρήσομαι	ἔδειρα ἐδάρην δέδαρμαι
59.	μένω	留まる	μενω	ἔμεινα μεμένηκα

173 2. 語基交替によって特徴づけられる動詞の現在

-πτω 動詞現在

60.	ρίπτω	投げる	ρίψω ρίφθήσομαι, ρίφήσομαι	ἔρριψα ἐρρίφθην, ἐρρίφην	ἔρριφα ἔρριμμαι
61.	κόπτω	切る	κόψω κοπήσομαι	ἔκοψα ἐκόπην	κέκοφα κέκομμαι
62.	βλάπτω	害する	βλάψω βλαβήσομαι	ἔβλαψα ἐβλάβην	βέβλαφα βέβλαμμαι
63.	θάπτω	埋葬する	θάψω ταφήσομαι	ἔθαψα ἐτάφην	τέταφα τέθαμμαι
64.	κρύπτω	隠す	κρύψω κρυφθήσομαι	ἔκρυψα ἐκρύφθην	κέκρυφα κέκρυμμαι
65.	σκάπτω	掘る	σκάψω σκαφήσομαι	ἔσκαψα ἐσκάφην	ἔσκαφα ἔσκαμμαι

-ττω 動詞現在

66.	τάττω	並べる	τάξω ταχθήσομαι	ἔταξα ἐτάχθην	τέταχα τέταγμαι
67.	πράττω	行う、為す	πράξω πραχθήσομαι	ἔπραξα ἐπράχθην	πέπραχα, πέπραγα ¹ πέπραγμαι
68.	πλήττω	叩く	πλήξω πληγήσομαι	ἔπληξα ἐπλήγην	πέπληγα πέπληγμαι
	ἐκ-πλήττω	怯えさせる	ἐκ-πλήξω	ἐξ-ἐπληξα	
	ἐκ-πλήττομαι	怯える	ἐκ-πλαγήσομαι	ἐξ-επλάγην	ἐκ-πέπληγμαι

¹πέπραγα は自動詞の意味「そのような状況にある」においてのみ用いられる。

69.	πλάττω (ᾶ)	加工する	πλάσω πλασθήσομαι	ἔπλασα ἐπλάσθην	πέπλακα πέπλασμαι
70.	ἀρμόττω	適合させる	ἀρμόσω ἀρμοσθήσομαι	ἤρμοσα ἤρμόσθην	ἤρμοκα ἤρμοσμαι
-ζω 動詞現在					
71.	γυμνάζω	訓練する	γυμνάσω γυμνασθήσομαι	ἐγύμνασα ἐγυμνάσθην	γεγύμνακα γεγύμνασμαι
72.	βιβάζω	歩かせる	βιβῶ, -ᾶς	ἐβίβασα	
73.	κτίζω	建設する	κτίσω κτισθήσομαι	ἔκτισα ἐκτίσθην	ἔκτικα ἔκτισμαι
74.	νομίζω	見なす	νομιῶ νομισθήσομαι	ἐνόμισα ἐνομίσθην	νενόμικα νενόμισμαι
75.	σώζω	救う	σώσω σωθήσομαι	ἔσωσα ἐσώθην	σέσωκα σέσω(σ)μαι
76.	ἐθίζω	慣らせる	ἐθιῶ ἐθισθήσομαι	εἶθισα εἰθίσθην	εἶθικα ² εἶθισμαι
77.	καθίζω καθίζομαι καθέζομαι	座らせる 座る 座っている 座っている	καθιῶ καθεδοῦμαι	ἐκάθισα ἐκαθεζόμεν (未完了過去および アオリスト)	κάθημαι (§122 参照)
78.	κράζω	叫ぶ	κράξω	ἔκραγον	κέκραγα
79.	οἰμώζω	呻く	οἰμώξομαι	ᾠμῶξα	
80.	σαλπίζω	ラッパを吹く	σαλπῶ	ἔσάλπιγξα	
-λλω 動詞現在					
81.	ἀγγέλλω	能 知らせる 受	ἀγγελῶ ἀγγελθήσομαι	ἤγγειλα ἤγγέλθην	ἤγγελκα ἤγγελμαι
82.	στέλλω	送る	στελῶ σταλήσομαι	ἔστειλα ἐστάλην	ἔσταλκα ἔσταλμαι

² 自動詞の意味で完了形 εἴωθα（習慣がある）が存在する。

83.	βάλλω	投げる	βαλῶ βληθήσομαι	ἔβαλον ἐβλήθην	βέβληκα βέβλημαι
-αίνω, -είνω, -ίνω, -ύνω および -αίρω, -είρω, -ίρω, -ύρω 動詞現在					
84.	μιαίνω	汚す	μιανῶ μιανθήσομαι	ἐμίᾱνα ἐμίανθην	μεμίαγκα μεμίασμαι
85.	φαίνω φαίνομαι	示す 現れる	φανῶ φανοῦμαι, φανήσομαι	ἔφηνα ἔφάνην	πέφαγκα πέφηναι, πέφασμαι
	受動		φανθήσομαι	ἐφάνθην	πέφασμαι
86.	μαίνομαι	狂う	μανοῦμαι	ἐμάνην	μέμηνα
87.	ἀπο-κτείνω	殺す	ἀπο-κτενῶ	ἀπ-έκτεινα	ἀπ-έκτονα
88.	τείνω	張る	τενῶ ταθήσομαι	ἔτεινα ἐτάθην	τέτακα τέταμαι
89.	κρίνω	裁く	κρίνῶ κρίθήσομαι	ἔκρινα ἐκρίθην	κέκρικα κέκριμαι
90.	κλίνω	傾ける	κλίνῶ κλίθήσομαι	ἐκλίνα ἐκλίθην	κέκλικα κέκλιμαι
91.	αἰσχύνω αἰσχύνομαι	辱める 恥じる	αἰσχύνῶ αἰσχynoῦμαι	ἤσχυνα ἤσχύνθην	ἤσχυγκα ἤσχυμαι
92.	ἀμύνω	撃退する	ἀμύνῶ	ἤμυνα	
93.	αἴρω	持ち上げる	ἀρῶ ἀρθήσομαι	ἤρα ἤρθην	ἤρακα ἤρμαι
94.	καθαίρω	清める	καθαρῶ καθαρθήσομαι	ἐκάθηρα ἐκαθάρθην	κεκάθαγκα κεκάθαρμαι
95.	σπείρω	種をまく	σπερῶ σπαρήσομαι	ἔσπειρα ἐσπάρην	ἔσπαγκα ἔσπαρμαι
96.	ἐγείρω ἐγείρομαι	起こす 起きる	ἐγερῶ	ἤγειρα ἤγρόμην ἤγέρθην	ἐγόρηγορα ἐγήγερμαι
	受動		ἐγερθήσομαι	ἤγέρθην	ἐγήγερμαι
97.	οἰκτίρω	憐れむ	οἰκτιρῶ	ᾤκτ(ε)ῖρα	
98.	μαρτύρομαι	証人とする	μαρτυροῦμαι	ἐμαρτυράμην	

174 3. 鼻音接尾辞によって特徴づけられる動詞現在

99.	τίνω τίνομαι	償う 復讐する	τείσω τείσομαι	ἔτεισα ἐτεισάμην	τέτεικα τέτειμαι
100.	φθάνω	先んずる	φθήσομαι	ἔφθασα, ἐφθην	ἔφθακα
101.	κᾶμνω	疲れる	καμοῦμαι	ἔκαμον	κέκιμηκα
102.	τέμνω	切る	τεμῶ τμηθήσομαι	ἔτεμον ἐτμήθην	τέτμηκα τέτμημαι
103.	ἐλαύνω	驅る	ἐλῶ, -ᾶς	ἤλασα ἤλαθην	ἐλήλακα ἐλήλαμαι
104.	βαίνω	歩く 歩かせる	βήσομαι βήσω	ἔβην ἔβησα	βέβηκα (§153 参照)
105.	ἀφ-ικνέομαι	着く	ἀφ-ίξομαι	ἀφ-ἴκόμεν	ἀφ-ἴγμαι
106.	ἀμαρτάνω	誤りを犯す	ἀμαρτήσομαι ἀμαρτηθήσομαι	ἤμαρτον ἤμαρτήθην	ἤμαρτηκα ἤμαρτημαι
107.	αὐξάνω	増やす	αὐξήσω αὐξηθήσομαι	ἠύξησα ἠύξηθην	ἠύξηκα ἠύξημαι
108.	αἰσθάνομαι	知覚する、気づく	αἰσθήσομαι	ἤσθομην	ἤσθημαι
109.	μανθάνω	学ぶ	μαθήσομαι	ἔμαθον	μεμάθηκα
110.	λαμβάνω	取る	λήψομαι ληφθήσομαι	ἔλαβον ἐλήφθην	εἴληφα εἴλημαι, λέλημαι
111.	λανθάνω ἐπι-λανθάνομαι	人知れず ... する 忘れる	λήσω ἐπι-λήσομαι	ἔλαθον ἐπ-ελάθόμεν	λέληθα ἐπι-λέλημαι
112.	λαγχάνω	籤で手に入れる	λήξομαι	ἔλαχον	εἴληχα
113.	πυνθάνομαι	聞き知る	πεύσομαι	ἐπύθόμεν	πέπυσμαι
114.	τυγχάνω	遭遇する	τεύξομαι	ἔτϋχον	τετύχηκα
115.	πίνω	飲む	πίομαι ποθήσομαι	ἔπιον ἐπόθην	πέπωκα πέπομαι

175 -νύμι[ῶ] 動詞現在

116.	δείκνυμι	示す	δείξω δειχθήσομαι	ἔδειξα ἐδείχθην	δέδειχα δέδειγμαι
117.	ζεύγνυμι	軛をかける、結 びつける	ζεύξω ζευχθήσομαι	ἔζευξα ἐζύγην, ἔζεύχθην	ἔζευγμαι
118.	μ(ε)ίγνυμι	混ぜる	μ(ε)ίξω μ(ε)ιχθήσομαι	ἔμ(ε)ιξα ἐμίγην, ἐμ(ε)ίχθην	μέμ(ε)ιγμαι
119.	πήγνυμι πήγνυμαι (申・受動)	固定する、 突き刺す	πήξω παγήσομαι, πήξομαι	ἔπηξα ἐπάγην, ἐπήχθην	πέπηχα πέπηγα, πέπηγμαι
120.	ρήγνυμι ρήγνυμαι	壊す、 引き裂く 砕ける	ρήξω ράγήσομαι	ἔρρηξα ἐρράγην	ἔρρωγα
121.	κεράννυμι	混ぜる	κεράσω, κερῶ, -ᾶς κράθήσομαι	ἐκέρασα ἐκράθην	κέκρασα κέκράμαι
122.	κρεμάννυμι 申動、受動	ぶら下げる (他)	κρεμῶ, -ᾶς κρεμασθήσομαι	ἐκρέμασα ἐκρεμάσθην	κρέμαμαι (n.105 参照)
123.	πετάννυμι	広げる	πετάσω, πετῶ, -ᾶς πετασθήσομαι	ἐπέτασα ἐπετάσθην	πέπετακα πέπταμαι
124.	σκεδάννυμι	撒き散らす	σκεδάσω, σκεδῶ, -ᾶς σκεδασθήσομαι	ἐσκεδάσα ἐσκεδάσθην	ἐσκεδάμαι
125.	σβέννυμι σβέννυμαι 受動	消す 消える	σβέσω σβήσομαι σβεσθήσομαι	ἔσβεσα ἔσβην ἐσβέσθην	ἔσβηκα ἔσβεσμαι
126.	(ἀμφι)έννυμι (ἀμφι)έννυμαι	着せる 着る	ἀμφιῶ ἀμφιέσομαι	ἤμφιεσα ἤμφιεσάμην	ἤμφιεσμαι
127.	στρώννυμι	拡げる	στρώσω στρωθήσομαι	ἔστρωσα ἐστρώθην	ἔστρωμαι
128.	ῥώννυμι	強くする	ῥώσω ῥωσθήσομαι	ἔρρωσα ἐρρώσθην	ἔρρωμαι

129.	ὄμνυμι	誓う	ὄμοῦμαι	ᾠμοσα	ὄμώμοκα
130.	ἀπ-όλλυμι	殺す、滅ぼす	ἀπ-ολῶ	ἀπ-ώλεσα	ἀπ-ολώλεκα
	ἀπ-όλλυμαι	死ぬ	ἀπ-ολοῦμαι	ἀπ-ωλόμην	ἀπ-όλωλα

176 4. -(i)σκω 動詞現在

131.	γηράσκω	老いる	γηράσομαι	ἐγήρασα	γεγήρακα
132.	ἡβάσκω	成人する	ἡβήσω	ἡβησα	ἡβηκα
133.	ἀρέσκω	喜ばせる	ἀρέσω	ἤρεσα	
134.	άλίσκομαι	捕られる	άλώσομαι	έάλων, ἤλων	έάλωκα, ἤλωκα
135.	ἀν-αλίσκω	浪費する	ἀν-αλώσω ἀν-αλωθήσομαι	ἀν-ήλωσα ἀν-ηλώθην	ἀν-ήλωκα ἀν-ήλωμαι
136.	εὐρίσκω	見つける	εὐρήσω εὐρεθήσομαι	ἠύρον, εὐρον ἠύρέθην	ἠύρηκα ἠύρημαι
137.	ἀπο-θνήσκω	死ぬ	ἀπο-θανοῦμαι	ἀπ-έθανον	τέθνηκα (§153 参照)
138.	διδάσκω	教える	διδάξω	έδίδαξα	δεδίδαχα
	διδάσκομαι	学ぶ	διδάξομαι	έδίδαξάμην	
	受動		διδαχθήσομαι	έδιδάχθην	δεδίδαγμαί
139.	πάσχω	蒙る、苦しむ	πείσομαι	έπαθον	πέπονθα

177 5. 疊音によって特徴づけられる動詞現在

140.	γίγνομαι	成る	γενήσομαι	έγενόμην	γέγονα γεγένημαι
141.	πίπτω	落ちる、倒れる	πεσοῦμαι	έπεσον	πέπτωκα
142.	τίκτω	子をなす	τέξομαι	έτεκον	τέτοκα

143.	τιτρώσκω	傷つける	τρώσω τρωθήσομαι	ἔτρωσα ἔτρώθην	τέτρωκα τέτρωμαι
144.	γιννώσκω	知る	γνώσομαι γνωσθήσομαι	ἔγνων ἔγνώσθην	ἔγνωκα ἔγνωμαι
145.	ἀπο-διδράσκω	逃げる	ἀπο-δράσομαι	ἀπ-έδρᾱν	ἀπο-δέδρᾱκα
146.	ἀνα-μιμνήσκω μιμνήσομαι	思い出させる 思い出す	ἀνα-μνήσω μνησθήσομαι	ἀν-έμνησα ἐμνήσθην	μέμνημαι
147.	πίμπλημι	満たす	πλήσω πλησθήσομαι	ἔπλησα ἐπλήσθην	πέπληκα πέπλημαι
148.	πίμπρημι	焼く	πρήσω πρησθήσομαι	ἔπρησα ἐπρήσθην	πέπρηκα πέπρη(σ)μαι
149.	ὀνίημι ὀνίναμαι	役立つ 利益を得る	ὀνήσω ὀνήσομαι	ὠνήσα ὠνήθην	
150.	δίδωμι	与える	δώσω δοθήσομαι	ἔδωκα ἐδόθην	δέδωκα δέδομαι
151.	τίθημι	置く	θήσω τεθήσομαι	ἔθηκα ἐτέθην	τέθηκα
152.	ἵημι	送る、放つ	ἦσω ἐθήσομαι	ἦκα εἶθην	εἶκα εἶμαι
153.	ἴστημι ἴσταμαι 受動	立てる 立つ	στήσω στήσομαι σταθήσομαι	ἔστησα ἔστην ἐστάθην	ἔστηκα (§153 参照)

178 6. 異なる語基上に形成される幹の主要動詞

154.	τρέχω	走る	δραμοῦμαι	ἔδραμον	δεδράμηκα
155.	αἰρέω	擲む	αἰρήσω αἰρεθήσομαι	εἶλον ἤρέθην	ἤρηκα ἤρημαι
156.	ἐσθίω	食べる	ἔδομαι ἐδεσθήσομαι	ἔφαγον ἠδέσθην	ἐδήδοκα ἐδήδεσμαι ἐδήδεμαι

157.	ὄραω	見る	ὄψομαι ὀφθήσομαι	εἶδον ᾠφθην	ἑώρακα, ἑόρακα, ὄπωπα ἑώραμαι, ἑόραμαι, ᾠμμαί
158.	φέρω	運ぶ	οἴσω ἐνεχθήσομαι	ἤνεγκον, ἤνεγκα ἤνέχθην	ἐνήνοχα ἐνήνεγμαί
159.	ἔρχομαι	行く、 来る	ἐλεύσομαι (εἶμι §121 もまた 参照)	ἦλθον	ἐλήλυθα
160.	φημί, λέγω ¹	言う、述べる	ἔρω ῥηθήσομαι	εἶπον, εἶπα ἔρρηθην	εἶρηκα εἶρημαι

¹φη- および λεγ- 根上に形成される φημί および λέγω の未来、アオリストおよび完了幹については、n.32 および 46 参照。

παιδεύω 動詞活用復習要約表

[383]

179 能動相

	現在	未来	アオリスト	完了
直 説 法	一次時制			
	παιδεύ-ω	παιδεύ-σω		πε-παιδευ-κα
	παιδεύ-εις	παιδεύ-σεις		πε-παιδευ-κας
	παιδεύ-ει	παιδεύ-σει		πε-παιδευ-κει(v)
	παιδεύ-ομεν	παιδεύ-σομεν		πε-παιδευ-καμεν
	παιδεύ-ετε	παιδεύ-σετε		πε-παιδευ-κατ
	παιδεύ-ουσι(v)	παιδεύ-σουσι(v)		πε-παιδευ-κᾶσι(v)
接 続 法	二次時制			
	未完了過去			過去完了
	ἐ-παιδευ-ον		ἐ-παιδευ-σα	ἐ-πε-παιδευ-κειν
	ἐ-παιδευ-εις		ἐ-παιδευ-σας	ἐ-πε-παιδευ-κεις
	ἐ-παιδευ-ει		ἐ-παιδευ-σε(v)	ἐ-πε-παιδευ-κει
	ἐ-παιδευ-ομεν		ἐ-παιδευ-σαμεν	ἐ-πε-παιδευ-κεμεν
	ἐ-παιδευ-ετε		ἐ-παιδευ-σατε	ἐ-πε-παιδευ-κετε
ἐ-παιδευ-ον		ἐ-παιδευ-σαν	ἐ-πε-παιδευ-κεσαν	
希 求 法	παιδεύ-ω		παιδεύ-σω	πε-παιδευ-κω
	παιδεύ-ης		παιδεύ-σης	πε-παιδευ-κης など
	παιδεύ-η		παιδεύ-ση	また は πεπαιδευκώς
	παιδεύ-ωμεν		παιδεύ-σωμεν	ὦ, ἦς, ἦ
	παιδεύ-ητε		παιδεύ-σητε	πεπαιδευκότες
	παιδεύ-ουσι(v)		παιδεύ-σωσι(v)	ὦμεν, ἦτε, ὦσι(v)
命 令 法	παιδεύ-οιμι	παιδεύ-σοιμι	παιδεύ-σαιμι	πε-παιδευ-κοιμι
	παιδεύ-οις	παιδεύ-σοις	παιδεύ-σαις, -σειας	πε-παιδευ-κοις など
	παιδεύ-οι	παιδεύ-σοι	παιδεύ-σαι, -σειε(v)	また は πεπαιδευκώς
	παιδεύ-οιμεν	παιδεύ-σοιμεν	παιδεύ-σαιμεν	εἶην, εἶης, εἶη
	παιδεύ-οιτε	παιδεύ-σοιτε	παιδεύ-σαιτε	πεπαιδευκότες
παιδεύ-οιεν	παιδεύ-σοιεν	παιδεύ-σαιεν, -σειαν	εἶμεν, εἶτε, εἶεν	
不 定 法	παιδεύ-ε		παιδεύ-σον	
	παιδευ-έτω		παιδευ-σάτω	
	παιδεύετε		παιδεύ-σατε	
	παιδευ-όντων		παιδευ-σάντων	
分 詞	παιδεύ-ειν	παιδεύ-σειν	παιδεύ-σαι	πε-παιδευ-κέναι
	παιδεύ-ων, -οντος	παιδεύ-σων, -σοντος	παιδεύ-σας, -σαντος	πε-παιδευ-κός, -κότος
	παιδεύ-ουσα, -ούσης	παιδεύ-σουσα, -σουσης	παιδεύ-σασα, -σάσης	πε-παιδευ-κυίας
	παιδεύ-ον, -οντος	παιδεύ-σον, -σοντας	παιδεύ-σαν, -σαντος	πε-παιδευ-κός, -κότος

180 中動相

	現在	未来	アオリスト	完了
直説法	一次時制			
	παιδεύ-ομαι παιδεύ-η, -ει παιδεύ-εται παιδευ-όμεθα παιδεύ-εσθε παιδεύ-ονται	παιδεύ-σομαι παιδεύ-ση παιδεύ-σεται παιδευ-σόμεθα παιδεύ-σεσθε παιδεύ-σονται		πε-παιδευ-μαι πε-παιδευ-σαι πε-παιδευ-ται πε-παιδευ-μεθα πε-παιδευ-σθε πε-παιδευ-νται
接續法	二次時制			
	未完了過去 ἐ-παιδευ-όμην ἐ-παιδεύ-ου ἐ-παιδεύ-ετο ἐ-παιδευ-όμεθα ἐ-παιδεύ-εσθε ἐ-παιδεύ-οντο		ἐ-παιδευ-σάμην ἐ-παιδεύ-σω ἐ-παιδεύ-σατο ἐ-παιδευ-σάμεθα ἐ-παιδεύ-σασθε ἐ-παιδεύ-σαντο	過去完了 ἐ-πε-παιδευ-μην ἐ-πε-παιδευ-σο ἐ-πε-παιδευ-το ἐ-πε-παιδευ-μεθα ἐ-πε-παιδευ-σθε ἐ-πε-παιδευ-ντο
希求法	παιδευ-οίμην παιδεύ-οιο παιδεύ-οιτο παιδευ-οίμεθα παιδεύ-οισθε παιδεύ-οιντο	παιδευ-σοίμην παιδεύ-σοιο παιδεύ-σοιτο παιδευ-σοίμεθα παιδεύ-σοισθε παιδεύ-σοιντο	παιδευ-σaiμην παιδεύ-σaiο παιδεύ-σaiτο παιδευ-σaiμεθα παιδεύ-σaiσθε παιδεύ-σaiντο	πε-παιδευ-μένος εἶην εἶης εἶη πε-παιδευ-μένοι εἶμεν εἶτε εἶεν
	命令法 παιδεύ-ου παιδευ-έσθω παιδεύ-εσθε παιδευ-έσθων		παιδευ-σαι παιδευ-σάσθω παιδεύ-σασθω παιδευ-σάσθων	πε-παιδευ-σο πε-παιδευ-σθω πε-παιδευ-σθε πε-παιδευ-σθων
不定法	παιδεύ-εσθαι	παιδεύ-σεσθαι	παιδεύ-σασθαι	πε-παιδευ-σθαι
分詞	παιδευ-όμενος παιδευ-ομένη παιδευ-όμενον	παιδευ-σόμενος παιδευ-σομένη παιδευ-σόμενον	παιδευ-σάμενος παιδευ-σαμένη παιδευ-σάμενον	πε-παιδευ-μένος πε-παιδευ-μένη πε-παιδευ-μένον

181 受動相

			未来	アオリスト
直 説 法	単 数	1	παιδευ-θήσομαι	ἐ-παιδευ-θην
		2	παιδευ-θήση	ἐ-παιδευ-θης
		3	παιδευ-θήσεται	ἐ-παιδευ-θη
	複 数	1	παιδευ-θησόμεθα	ἐ-παιδευ-θημεν
		2	παιδευ-θήσεσθε	ἐ-παιδευ-θητε
		3	παιδευ-θήσονται	ἐ-παιδευ-θησαν
接 続 法	単 数	1		παιδευ-θῶ
		2		παιδευ-θῆς
		3		παιδευ-θῆ
	複 数	1		παιδευ-θωμεν
		2		παιδευ-θητε
		3		παιδευ-θῶσι(v)
希 求 法	単 数	1	παιδευ-θησοίμην	παιδευ-θειήν
		2	παιδευ-θήσοιο	παιδευ-θειής
		3	παιδευ-θήσοιτο	παιδευ-θειή
	複 数	1	παιδευ-θησοίμεθα	παιδευ-θειήμεν, -θειίμεν
		2	παιδευ-θήσοισθε	παιδευ-θειήτε, -θειίτε
		3	παιδευ-θήσοιντο	παιδευ-θειήσαν, -θειέν
命 令 法	単 数	2		παιδευ-θητι
		3		παιδευ-θήτω
	複 数	2		παιδευ-θητε
		3		παιδευ-θέντων
不定法			παιδευ-θήσεσθαι	παιδευ-θηῆναι
分 詞			παιδευ-θησόμενος	παιδευ-θείς, -θέντος
			παιδευ-θησομένη	παιδευ-θείσα, -θείσης
			παιδευ-θησόμενον	παιδευ-θέν, -θέντος

現在と完了は受動相においては中動相形と同じ形である。

分詞曲折の復習要約表

182 接尾辞 **-ντ-** の分詞

[383, 384]

-ων, -οντος の分詞

能動相 現在分詞 παιδεύων, παιδεύουσα, παιδεῦον
 未来分詞 παιδεύσων, παιδεύσουσα, παιδεῦσον
 第Ⅱアオリスト分詞 βαλῶν, βαλοῦσα, βαλόν (アクセントに注意)

παιδεύων, παιδεύουσα, παιδεῦον

		語幹 παιδευοντ-		
		男性	女性	中性
単数	主格	παιδεύ-ων	παιδεύ-ουσα	παιδεῦ-ον
	対格	παιδεύ-οντα	παιδεύ-ουσαν	παιδεῦ-ον
	属格	παιδεύ-οντος	παιδευ-ούσης	παιδεύ-οντος
	与格	παιδεύ-οντι	παιδευ-ούση	παιδεύ-οντι
複数	主格	παιδεύ-οντες	παιδεύ-ουσαι	παιδεύ-οντα
	対格	παιδεύ-οντας	παιδευ-ούσας	παιδεύ-οντα
	属格	παιδευ-όντων	παιδευ-ουσῶν	παιδευ-όντων
	与格	παιδεύ-ουσι(ν)	παιδευ-ούσαις	παιδεύ-ουσι(ν)

183 **-σα̅ς, -σαντος** に終わる分詞

[383]

能動相シグマを介する第Ⅰアオリスト分詞

παιδεύσας, παιδεύσασα, παιδεῦσαν

		語幹 παιδευσαντο-		
		男性	女性	中性
単数	主格	παιδεύ-σας	παιδεύ-σασα	παιδεῦ-σαν
	対格	παιδεύ-σαντα	παιδεύ-σασαν	παιδεῦ-σαν
	属格	παιδεύ-σαντος	παιδευ-σάσης	παιδεύ-σαντος
	与格	παιδεύ-σαντι	παιδευ-σάση	παιδεύ-σαντι
複数	主格	παιδεύ-σαντες	παιδεύ-σασαι	παιδεύ-σαντα
	対格	παιδεύ-σαντας	παιδευ-σάσας	παιδεύ-σαντα
	属格	παιδευ-σάντων	παιδευ-σασῶν	παιδευ-σάντων
	与格	παιδεύ-σασι(ν)	παιδευ-σάσαις	παιδεύ-σασι(ν)

能動相シグマを介さない第Ⅰアオリスト分詞 (§133 参照) は同じ語尾を持つが、σは持たない：μείνας, μείνασα, μείναν は μένω「留まる」の能動相アオリスト ἔμεινα からである。

104 -θείς, -θέντος に終わる分詞

[383]

受動相第 I アオリスト分詞

παιδευθείς, παιδευθείσα, παιδευθέν

		語幹 παιδευθεντ-		
		男性	女性	中性
単数	主格	παιδευ-θείς	παιδευ-θείσα	παιδευ-θέν
	対格	παιδευ-θέντα	παιδευ-θείσαν	παιδευ-θέν
	属格	παιδευ-θέντος	παιδευ-θείσης	παιδευ-θέντος
	与格	παιδευ-θέντι	παιδευ-θείση	παιδευ-θέντι
複数	主格	παιδευ-θέντες	παιδευ-θείσαι	παιδευ-θέντα
	対格	παιδευ-θέντας	παιδευ-θείσας	παιδευ-θέντα
	属格	παιδευ-θέντων	παιδευ-θεισῶν	παιδευ-θέντων
	与格	παιδευ-θείσι(ν)	παιδευ-θείσαις	παιδευ-θείσι(ν)

受動相第 II アオリスト分詞 (§145 参照) は同じ語尾であるが θ はない: σταλείς, σταλείσα, σταλέν は στέλλω「送る」の受動相アオリスト ἐστάλην からである。

105 接尾辞 -κώς, -κότος に終わる分詞

[383, 384]

能動相第一完了分詞

πεπαιδευκώς, πεπαιδευκυῖα, πεπαιδευκός

		語幹 πεπαιδευκοτ-		
		男性	女性	中性
単数	主格	πεπαιδευ-κώς	πεπαιδευ-κυῖα	πεπαιδευ-κός
	対格	πεπαιδευ-κότα	πεπαιδευ-κυῖαν	πεπαιδευ-κός
	属格	πεπαιδευ-κότος	πεπαιδευ-κυῖας	πεπαιδευ-κότος
	与格	πεπαιδευ-κότι	πεπαιδευ-κυῖα	πεπαιδευ-κότι
複数	主格	πεπαιδευ-κότες	πεπαιδευ-κυῖαι	πεπαιδευ-κότα
	対格	πεπαιδευ-κότας	πεπαιδευ-κυῖας	πεπαιδευ-κότα
	属格	πεπαιδευ-κότων	πεπαιδευ-κυῖων	πεπαιδευ-κότων
	与格	πεπαιδευ-κόσι(ν)	πεπαιδευ-κυῖαις	πεπαιδευ-κόσι(ν)

能動相第 II 完了分詞 (§151 参照) は同じ語尾を持つ、しかし、κ はない: λειπιώς, λειπιυῖα, λειπιός は λείπω「残す」のアオリスト完了分詞 λέλοιπα からである。

186 -μενος, -μένη, -μενον に終わる分詞

[383]

分詞	現在中・受動相	παιδευόμενος, παιδευομένη, παιδευόμενον
	未来中動相	παιδευσόμενος, παιδευσομένη, παιδευσόμενον
	未来受動相	παιδευθησόμενος, παιδευθησομένη, παιδευθησόμενον
	アオリスト中動相	παιδυσάμενος, παιδυσασαμένη, παιδυσάμενον
	完了中・受動相	πεπαιδευμένος, πεπαιδευμένη, πεπαιδευμένον (アクセントに注意)

παιδευόμενος, παιδευομένη, παιδευόμενον

		語幹 παιδευομενο- 女性 παιδευμενα-		
		男性	女性	中性
単数	主格	παιδευό-μενος	παιδευο-μένη	παιδευό-μενον
	対格	παιδευό-μενον	παιδευο-μένην	παιδευό-μενον
	属格	παιδευο-μένου	παιδευο-μένης	παιδευο-μένου
	与格	παιδευο-μένω	παιδευο-μένη	παιδευο-μένω
複数	主格	παιδευό-μενοι	παιδευό-μεναι	παιδευό-μενα
	対格	παιδευο-μένους	παιδευο-μένας	παιδευό-μενα
	属格	παιδευο-μένων	παιδευο-μένων	παιδευο-μένων
	与格	παιδευο-μένοις	παιδευο-μέναις	παιδευο-μένοις

187 語形成における派生と複合

[824, 833]

多くのギリシア語名詞と形容詞は、語基 (§25 参照) に結合しそして意味を補う接尾辞の助けによって形成される。同様に多くの動詞の語基は接尾辞 (§25 参照) によって拡大された語基である。

語基と結びつきながら、接尾辞はこのように形成された新しい語にある意味論的価値を与え、そして限定的語彙範疇 (例えば動主名詞、材料の形容詞、外来語など) に属させる。接尾辞はまた名詞と形容詞からの動詞の形成を認めるのである：これを名詞派生動詞という。

接尾辞は必ずしも特別な意味論的価値の担い手ではなく、互いに対立するある用法において専ら働きをなす。そしてその際、それへとそれらが結びつくその語基の意味が考慮されるのである。

接尾辞の助けで形成された語幹は彼らの番になって他の接尾辞または新しい語尾によって拡大され、新しい語を作ることがある。

接尾辞による形成の手順は派生と呼ばれる。

同じ語基から由来する語はファミリーを形成する。

他の語は二つの語基または集合語幹に由来する語幹を持ち、最後に、他の語は接頭辞あるいは動詞接頭辞の助けによる複合語幹を持つ：その時人は複合語を云々するのであり、この形成手順は複合と呼ばれる。

188 派生語の主な範疇

[839-841]

多くの名詞は動詞的動作に関する型を示す接尾辞が加わる動詞語基から派生する。この関係は行為者・行為自身そして行為の結果の三つの大きな範疇に最終的にまとめられる。

名詞はまた既に構成されている最初の名詞幹から派生した語幹を持つことがある：この派生名詞はその時、機能、抽象的本質あるいは身体的な性質を指示する。

他の接尾辞は付属のあるいは性質の一般的関係を表現する；名詞幹をしばしば影響するのは形容詞を形成するのに役立つ接尾辞の特別な場合である。

派生動詞語基に関して、それらは基礎の動詞語基、名詞語幹あるいは形容詞語幹に加えられる接尾辞を用いて形成される。

非常にしばしば派生語 (名詞、形容詞または動詞) は語基あるいは語幹に対して接尾辞を追加することによって形成されず、すっかり準備の出来た語尾のそれによって形成されるのである。すなわち、“すっかり準備の出来た語尾”とは一つの語の中であるいは一連の派生語へモデルとして役立つ言葉の範疇の中で偽切断 *fausse coupe*¹ によって切り離されるものである。この手続きは非常に多産的である。

¹ 偽切断 *fausse coupe* とは次の手続きの事を言う。すなわち、その歴史的な形成を考慮することなく、新たな派生語の形成において、意味の類比によって、使用するために、一つの語の語尾を切断することに存するその手続きである。例えば、βασιλεύω「王である」(ὁ βασιλεύς「王」から)において、-εύωという語尾は他の派生語を形成するため分離され用いられる：δουλεύω「奴隷である」、ὁ δούλος,「奴隷」から作られた。

次のリストはその語尾（接尾辞と曲折語尾を包括する）に従った派生語の主な型のいくつかの例である。

接尾辞の追加がもたらした主な音韻的变化については、§14 参照。

名詞

189 行為者と機能の名詞、道具の名詞

[839]

-της

-της に終る派生語は行為者・職業または機能の男性名詞である。

ὁ κριτής, -ου, 「審判」、κρίνω 「判断する」 参照

ὁ ποιητής, -ου, 「詩人、創造者」、ποιέω 「なす」 参照

ὁ αὐλητής, -ου, 「オーボエ奏者」、αὐλέω 「オーボエを吹く」 参照

ὁ τοξότης, -ου, 「射手」、τὸ τόξον 「弓」 参照

ὁ ναύτης, -ου, 「水夫」、ἡ ναῦς 「船」 参照

ὁ πολίτης, -ου, 「市民」、ἡ πόλις 「市」 参照

語尾 -της はまた、-ίτης, -ιάτης, -ιώτης に拡大された形の下で、特に人種・民族語を形成するために現れる。

ὁ Σταγυρίτης, -ου, 「スタギロス人」、ἡ Στάγιρος 「スタギロス」(カルキドスの都市) 参照

ὁ Κροτωνιάτης, -ου, 「クロトンの住民」、ἡ Κρότων 「クロトン」(大ギリシアの都市) 参照

ὁ στρατιώτης, -ου, 「兵士」、ἡ στρατία 「軍隊」 参照

ὁ Ἰταλιώτης, 「(古代中部) イタリア人」、ἡ Ἰταλία 「大ギリシア、南イタリア」 参照

-τωρ

-τωρ に終る派生語は男の行為者の名詞である。

ὁ ῥήτωρ, -ορος, 「演説者」、ῥηθῆναι (受動相不定法アオリスト) 「言われる」、τὸ ῥῆμα 「話」 参照

-τωρ に終る派生語の大部分は詩語においてしか使われない。

-τήρ

-τήρ に終る派生語は男の行為者の名詞である。

ὁ σωτήρ, -ῆρος, 「救世主」、σώζω 「救う」 参照

古典ギリシア語においては、-τηρ の派生語はしばしば道具を指示する。

ὁ κρατήρ, -ῆρος, 「クラテール (ワインを混ぜる器)」、κεράννυμι 「混ぜる」 参照

-τήριον

-τήριον の形の派生語は接尾辞 -τηρ と形容詞に固有の語尾 -ιος (§ 193 参照) の助けで形成された中性の名詞化された形容詞 (§ 205 参照) である。それらは諸々の道具を示すのであるのだが、特に容器を、あるいは建物と限定された機能に役立つ場所とを示すのである。

τὸ ποτήριον, -ου, 「盃」、τὸ ποτόν 「飲み物」 参照

τὸ δικαστήριον, -ου, 「裁判所」、δικάζω 「裁く」 参照

τὸ δεσμωτήριον, -ου, 「牢」、ὁ δεσμός 「紐、縛るもの」 参照

- τρον** -τρον の形の派生語は接尾辞は道具または特異的機能を持つ場所を示す。
 τὸ ἄροτρον, -ου, 「鋤」、ἀρώω 「耕す」 参照
 τὸ σκῆπτρον, -ου, 「杖」、σκῆπτομαι 「凭れ掛かる」 参照
 τὸ θέατρον, -ου, 「劇場」、θεάομαι 「見る」 参照
- τειρα**
-τρια この語尾は行為者、職業あるいは機能の女性名詞を特徴付ける¹。
 -τρια（接尾辞のゼロ階梯）形はアッティカ散文において一般化される。
 ἡ σώτειρα, -ας, 「解放者（女）」（宗教用語）、ὁ σωτήρ 「救世主」 参照
 ἡ δότηρα, -ας, 「与える人（女）」（宗教用語）、ὁ δοτήρ 「与える人（男）」 参照
 ἡ ψάλτρια, -ας, 「リラ奏者（女）」、ὁ ψάλτης 「リラ奏者（男）」 参照
 ἡ σοφίστρια, -ας, 「ソフィスト（女）」、ὁ σοφιστής 「ソフィスト」 参照
 ἡ βάπτρια, -ας, 「洗濯女」、βάπτω 「洗う」 参照
- εύς** 派生語 -εύς は職業、活動または特異的機能を実行する男を指す。
 ὁ χαλκεύς, -έως, 「鍛冶屋」、ὁ χαλκός 「青銅」 参照
 ὁ νεμέυς, -έως, 「羊飼ひ」、ἡ νομή 「放牧」 参照
 ὁ φονεύς, -έως, 「下手人、殺人者」、ὁ φόνος 「死」 参照
 ὁ βασιλεύς, -έως, 「王」（起源不詳）
- 語尾 -εύς はまた多くの人種・民族の語について用いられる。
 ὁ Ἀχαρνεύς, -έως, 「アカルナイ地区住民」、αἱ Ἀχαρναί 「アカルナイ」 参照
- εια**
-ισσα 派生語 -εια, -ισσα（-τειρα 派生語の注、参照）は職業、活動または特異的機能を実行する女を指す。
 ἡ βασίλεια, -ας, 「女王」、ὁ βασιλεύς 「王」 参照
 ἡ ἱέρεια, -ας, 「女聖職者」、ὁ ἱερεὺς 「聖職者」 参照
 ἡ Φοίνισσα, -ας, 「フェニキア女」、ὁ Φοῖνιξ 「フェニキア人」 参照
- 語尾 -ισσα は、起源において -ιξ（属格 -ικος）の人種・民族としての女性名詞であることを示しながら偽切断 *fausse coupe* (§ 188 参照) によって分離され、そして、前 4 世紀以来広がった。
 ἡ βασίλισσα, -ης, 「女王」、ὁ βασιλεύς 「王」 参照
 ἡ Μακεδόνισσα, -ης, 「マケドニア女」、ὁ Μακεδών 「マケドニア人」 参照
 ἡ βαλάνισσα, -ης, 「浴場係の女」、ὁ βαλανεύς 「浴場のボーイ」 参照

¹ 女性であることを示す語尾の起源において共通の接尾辞 *ya がみられる。それはあるいは他の派生的接尾辞（-τειρα, -τρια, -εια 参照）と結合し、あるいは特徴的語尾（-ισσα, -αινα 参照）を引き起こす。後者は偽切断 *fausse coupe* (§ 188 参照) によって一般化されているのである。*ya に平行して、接尾辞 -ιδ- は同様に女性的存在を示す：語尾 -ις（属格 -ιδος）および -ρις（属格 -ριδος）参照。

-ις (属 -ιδος) **-τρις (属 -τριδος)** -ις および -τρις に終る派生語 (-τεια に終る派生語注参照) は特異的機能、職業または活動を実行する女を示す。同様に女性の人種・民族をも示す。

ή ἀρτόπωλις, -ιδος, 「女パン商人」、ό ἀρτοπώλης, 「男パン商人」参照
 ή Ἑλληνίς, -ίδος 「ギリシア人 (女)」、ό Ἕλληνας, 「ギリシア人」
 ή αὐλητρίς, -ίδος, 「オーボエ奏者 (女)」、ό αὐλητής, 「オーボエ奏者」

-αινα この語尾 (-τεια に終る派生語注参照) は偽切断 *fausse coupe* (§ 188 参照) によって分離され、女性名詞を特徴付けるため広められる。

ή Λάκαινα, -ης, 「ラケダイモン女」、ό Λάκων, -ωνος, 「ラコニア人」参照
 ή λέαινα, -ης, 「雌獅子」、ό λέων, λέοντος, 「獅子」参照
 ή θεράπεινα, -ης, 「女召使」、ό θεράπων, -οντος 「召使」参照
 ή λύκαινα, -ης, 「雌狼」、ό λύκος, -ου, 「狼」参照

190 行動、抽象的実在、行動の結果を示す名詞

[840]

-σις この語尾は行動の抽象名詞を特徴付ける (全て女性名詞)。
 ή πράξις, -εως, 「動作」、πράττω, 「動く」参照
 ή ποιήσις, -εως, 「創造」、ποιέω, 「作る、なす」参照
 ή κάθαρσις, -εως, 「純化」、καθαίρω 「純化する」参照
 ή κίνησις, -εως, 「動き」、κινέω, 「動く」参照

-ια, -εια この語尾は抽象名詞を特徴付ける (全て女性名詞)。
 ή ἀδικία, -ας, 「不正」、ἄδικος, 「不正な」参照
 ή ἐλευθερία, -ας, 「自由」、ἐλεύθερος, 「自由な」参照
 ή αἰτία, -ας, 「原因」、αἴτιος 「～の原因である」参照
 ή εὖνοια, -ας, 「好意」、εὖνους, 「好意のある」参照
 ή βασιλεία, -ας, 「君主制」、ό βασιλεύς, 「王」参照
 ή παιδεία, -ας, 「教育」、ό παῖς, 属格 παιδός, 「子供」参照
 ή ἀλήθεια, -ας, 「真実」、ἀληθής 「真実の」参照
 ή εὐσέβεια, -ας, 「敬虔」、εὐσεβής, 「敬虔な」参照

-σύνη この語尾は特に形容詞から派生した性質を示す抽象名詞を特徴付ける。全て女性名詞である。
 ή δικαιοσύνη, -ης, 「正義 (道徳の性質として)」、δίκαιος, 「正しい」参照
 ή σωφροσύνη, -ης, 「節度」、σώφρον, 「賢い、穏やかな」参照
 ή μνημοσύνη, -ης, 「記憶 (才能として)」、μνήμων 「覚えている」参照

-της (属格 -τητος) この語尾は性質を示す抽象名詞を特徴付ける。全て女性名詞である。
 ή νέοτης, -τητος, 「若さ」、νέος, 「若い」参照
 ή φιλότης, -τητος, 「愛情」、φίλος, 「親愛なる」参照

-μα (属格 **-ματος**) この語尾は行動の結果または行動を始める目的（この最後の意味はより古いように思われる）を示す中性名詞を特徴付ける。

τὸ πρᾶγμα, -ματος, 「行為, 事柄」、πράττω, 「する、なす」参照
 τὸ ποίημα, -ματος, 「作品」、ποιέω, 「作る」参照
 τὸ μάθημα, -ματος, 「勉強、知識」、μανθάνω, 「学ぶ」参照
 τὸ κίνημα, -ματος, 「動き」、κινέω, 「動く」参照
 τὸ σπέρμα, -ματος, 「種」、σπείρω, 「種を撒く」参照
 τὸ μνήμα, -ματος, 「記念の印、墓」、μυμήσκω, 「思い出す」参照

-ος (属格 **-ους**) この語尾は物理的性質または行動の結果を示す中性名詞を特徴付ける。

τὸ βάθος, -ους, 「深み」、βαθύς, 「深い」参照
 τὸ βάρος, -ους, 「重さ」、βαρύς, 「重い」参照
 τὸ κράτος, -ους, 「力」、κρατερός, 「強い」参照
 τὸ ψεῦδος, -ους, 「嘘」、ψεύδομαι, 「嘘を言う」参照
 τὸ γένος, -ους, 「種族」、γίγνομαι, 「生まれる」参照

-μός

この語尾は、同様に拡張した **-σμός**, **-ισμός**, **-ασμός** 形の下にも現われるのであるが、行為とその成果を示す名詞を特徴付ける。**-σμός** と **-ασμός** の派生語は **-ίζω** と **-άζω** におわる動詞（§ 194 参照）に対応している。

ὁ ὀδυρμός, -ου, 「唸り声」、ὀδύρομαι, 「唸る」参照
 ὁ χυμός, -οῦ, 「汁、ジュース」、χέω, 「こぼす、(飲み物を)注ぐ」参照
 ὁ σεισμός, -οῦ, 「地震」、σειώ, 「揺さぶる」参照
 ὁ λογισμός, -οῦ, 「理由、打算」、λογίζομαι, 「理由がある、計算する」参照
 ὁ ἐνθουσιασμός, 「靈感、神的憑依」、ἐνθουσιάζω, 「神によって憑りかれる」参照

191 性質によって、あるいは付属の関係によって特徴付けられる人や事柄を示す名詞

[851]

-ων (属格 **-ωνος**) この語尾は、非常に幅広い使われ方で使用されるものではあるが、取分けて諸々の人と場所—特別の特徴やあるいは付属の関係に従って名付けられた—を示す語などの中で、また月々の名づけの中で、用いられるのである。

ὁ Σίμων, -ωνος, 「シモン << 獅子鼻の >>」、σιμός, 「獅子鼻の」参照
 ὁ γάστρων, -ωνος, 「太鼓腹、食いしん坊」、ή γαστήρ, γαστρός, 「腹」参照
 ὁ ἀνδρῶν, -ῶνος, 「男の部屋」、ὁ ἀνὴρ, ἀνδρός, 「男」参照
 ἡ Σικυῶν, -ῶνος, 「シキユオン (<< 胡瓜の場所 >>)」、ὁ σίκυος, 「胡瓜」参照
 ὁ Ληναίων, -ῶνος, 「レーナイオン月 (1-2月)」、τὰ Λήνια, 「レーナイアの祭り」参照
 ὁ Βοηδρομιῶν, -ῶνος, 「ボエードロミオン月 (9-10月)」、τὰ Βοηδρομία, 「ボエードロミアの祭り」参照

192 縮小辞

[852]

-ιον τὸ παιδίον, -ου, 「幼子」、ὁ παῖς, παιδός, 「子供」参照。
τὸ ὀμμάτιον, -ου, 「つぶらな瞳」、τὸ ὄμμα, 「眼」参照

縮小辞の意味を失った -ιον 派生語が多数ある：

例：τὸ θηρίον, 「動物」、τὸ χαλκίον, 「銅または青銅のもの、青銅貨」

偽切断 *fausse coupe* (§ 188 参照) によって、縮小辞の他の語尾は確立される：

-ίδιον τὸ οἰκίδιον, -ου, 「小屋」、ὁ οἶκος, 「家」参照
-άριον τὸ ὀψάριον, -ου, 「(小) 料理」、τὸ ὄψον, 「料理」参照
-ύλλιον τὸ μειρακύλλιον, -ου, 「幼い若者」、τὸ μειράκιον, 「若者」参照

-ίσκος ὁ νεανίσκος, -ου, 「若い若者」、ὁ νεανίας, 「若者」参照。
-ίσκη ὁ ὀβελίσκος, -ου, 「小さなプローチ」、ὁ ὀβελός, 「プローチ」参照。
ἡ κορίσκη, 「少女」、ἡ κόρη, 「娘」参照

193 形容詞

[857, 858]

-ιος πάτριος, (-ᾱ), -ον, 「祖先の」、ὁ πατήρ, πατρός, 「父」参照
χθόνιος, -ᾱ, -ον, 「大地からの」、ἡ χθών, χθονός, 「大地」参照
Σάμιος, -ᾱ, -ον, 「サモスの」、ἡ Σάμος, 「サモス島」参照
δίκαιος, -ᾱ, -ον, 「正しい」、ἡ δίκη, 「正義」参照
τέλειος, (-αᾱ), -ον, 「達成された、完全な」、τὸ τέλος, τέλους, 「終り」参照

語尾 -αιος および -ειος が、それは偽切断 *fausse coupe* (§ 188 参照) によって切断されるのだが、時として用いられる。

γυναικεῖος, -ᾱ, -ον, 「女性の」、ἡ γυνή, γυναικός, 「女」参照

-ικός ῥητορικός, -ή, -όν, 「修辭的」、ὁ ῥήτωρ, -ορος, 「演説者」参照
τυραννικός, -ή, -όν, 「僭主の」、ὁ τύραννος, 「僭主」参照
πολιτικός, -ή, -όν, 「政治の」、ὁ πολίτης, 「市民」参照

-της の行為者の名詞から由来する形容詞とは別に、語尾 -τικός は、偽切断 *fausse coupe* (§ 188 参照) によって分離されて、広がる。

διαλεκτικός, -ή, -όν, 「方言の」、διαλέγομαι, 「議論する」参照

-μιος ὠφέλιμος, -ον, 「有用な」、ὠφελέω, 「奉仕する、助ける」参照
νόμιμος, (-η), -ον, 「合法的」、ὁ νόμος, 「法」参照

-ινος この語尾はとりわけ材料の形容詞 (*proparoxytons*) と時間に関する形容詞 (*oxytons*) を特徴付ける。

λίθινος, -η, -ον, 「石でできた」、ὁ λίθος, 「石」参照
ξύλινος, -η, -ον, 「木でできた」、τὸ ξύλον, 「木」参照
θερινός, -ή, -όν, 「夏の」、τὸ θέρος, 「夏」参照
ἡμερινός, -ή, -όν, 「日中の」、ἡ ἡμέρα, 「日」参照
νυκτερινός, -ή, -όν, 「夜の」、ἡ νύξ, νυκτός, 「夜」参照

- εις**（属格 **-εντος**） この語尾はとりわけ一杯である概念を示す形容詞を特徴付ける。それは特に詩で用いられる。
- ύλήεις, -εσσα, -εν, 「木で一杯の」、ή ύλη, 「森」参照
 χαρίεις, -εσσα, -εν, 「魅力的な」、ή χάρις, 「魅力」参照
 ήνεμόεις, -εσσα, -εν（詩語）、「風のある」、ό άνεμος, 「風」参照
- οに終る派生形容詞 **-οεις** 語尾は偽切断 *fausse coupe* (§ 188 参照) によって分離されて、一般化され、そして多くの派生語を与えた。
- μητιόεις, -εσσα, -εν, 「策略に富む」、ή μητις, 「策略、ずる賢さ」参照
 άστερόεις, -εσσα, -εν, 「星空の」、ό άστήρ, -έρος, 「星」参照
- ούς** この語尾はとりわけ材料の形容詞を特徴付ける。
- χρυσούς, -ή, -ούν, 「金でできた」、ό χρυσός, 「金」参照
 χαλκούς, -ή, -ούν, 「青銅でできた」、ό χαλκός, 「青銅」参照
- λός** δειλός, -ή, -όν, 「臆病な」、έδεισα（アオリスト）、「恐れた」参照
 άπατηλός, -ή, -όν, 「裏切りの」、ή άπάτη, 「詐欺」参照
- νός** δεινός, -ή, -όν, 「恐ろしい」、έδεισα（アオリスト）、「恐れた」参照
 άγνός, -ή, -όν, 「無垢の、捧げられた」、άγιος, 「供物」参照
- ρός** λαμπρός, -ή, -όν, 「輝かしい」、λάμπω, 「輝く」参照
 μοχθηρός, -ή, -όν, 「辛い」、μοχθέω, 「耐える」参照
- ώδης** この語尾は何かが多くあることまたは類比を示す形容詞を特徴付ける。
- αίματώδης, -ες, 「血の、血まみれの」、τό αίμα, αίματος, 「血」参照
 σφηκώδης, -ες, 「雀蜂に似た」、όσφήξ, σφηκός, 「雀蜂」参照

194 動詞

[866]

現在の単独語幹の特徴的接尾辞 (§164-170 参照) と派生語基の形成において用いられる派生接尾辞とをよく区別することが必要である。派生語基 (§25 参照) の機能は語彙的であり、またその意味論的な価値は現在幹へとは結合されていないのであるが。

多くの動詞語基は派生語基である。派生はしばしば名詞語幹あるいは形容詞語幹をもとにして作られるが、それら語幹には動詞的な接尾辞が付け加わるのである。そしてその使用は偽切断 *fausse coupe* (§188 参照) をもとにしてしばしば打ち立てられるのである。名詞語幹あるいは形容詞語幹から派生した動詞は、**名詞派生動詞**と呼ばれる。

以下は名詞派生動詞を特徴付ける語尾である。

- άζω** θαυμάζω, 「驚く」、τό θαύμα, 「驚きの対象」参照
 δικάζω, 「裁く」、ή δίκη, 「正義、審判」参照
 άτιμάζω, 「面目を失わせる」、άτιμος, 「恥ずべき、市民の権利を奪われた」参照

-ίζω	οἰκίζω, 建てる、参照 ἡ οἰκία, 家 ἐλληνίζω, ギリシア人として生きる、参照 ὁ Ἕλληνας, ギリシア
-αίνω	κερδαίνω, 儲ける、参照 τὸ κέρδος, 儲け θερμαίνω, 熱くなる、参照 θερμός, 熱い
-ύνω[ῦ]	ἡδύνω, 飾る、参照 ἡδύς, 快い μεγαλύνω, 大きくなる、参照 μέγας, 大きい
-εύω	βασιλεύω, 支配する、参照 ὁ βασιλεύς, 王 δουλεύω, 奴隷となる、参照 ὁ δούλος, 奴隷
-έω	φοβέω, 恐れる、参照 ὁ φόβος, 恐れ πονέω, 疲れる、苦しむ、参照 ὁ πόνος, 疲れ、苦しさ

複合語の主な範疇

195 二語基または語幹の複合語

[869, 895-899]

語は二つの語基あるいは語幹から複合されることがある。インド・ヨーロッパ語の原理たる“限定するものは限定されるものに先立つ”というのに従って、**第二番目の意味を明確にするのは通常は第一のもの**である (§212)。

複合成分が全て名詞語幹または形容詞語幹¹からする二つである時は、そこで結果する複合語は一般に形容詞である。その時、多くの場合、「～を持っている、～を所有している」ということを意味する。この型の形容詞は多くの固有名詞を与える。

ρόδοδάκτυλος, -ον, パラ色の指を持った、参照 τὸ ῥόδον, パラ、ὁ δάκτυλος, 指
ὀλιγάνθρωπος, -ον 人が疎らな、参照 ὀλίγος, 少ない、ὁ ἄνθρωπος, 人
πολύμητις (属格 -ιος), 器用な、多才な、参照 πολύς, 多くの、ἡ μήτις, 器用さ
ὁ Λευκίππος, -ου, レウキッポス (白馬を持った)、参照 λευκός, 白い、ὁ ἵππος, 馬

μελιθής, -ές, 蜜のように甘い、参照 τὸ μέλι, 蜂蜜、ἡδύς, 甘い、τὸ ἥθος, (エオリア) 快樂
κακοήθης, -ες, 悪い性格の、参照 κακός, 悪い、τὸ ἥθος, 性格

ἡ ἀκρόπολις, -εως, アクロポリス、参照 ἄκρος, 最高の、ἡ πόλις, 市

多くの複合語は他の語を支配する動詞語基を持つ。一般に、動詞語基は二番目に位置する。よりまれに、(とりわけ詩語または古語由来の語において)、最初の位置にある。これらの複合語はしばしば形容詞¹である。

¹ 複合形容詞においては、男性語尾は女性名詞についてと同様に作用する。女性語尾の欠如は名詞または形容詞の2語幹の複合語から離れて説明される。即ち、二番目の要素はしばしばその様になお受け止められる名詞である。この曲折語尾の特殊性は全ての複合形容詞に一般化される。

προτοτόκος と πρωτότοκος の例が明らかに示すように、二番目の位置に動詞的要素を伴う -ος 複合形容詞は能動的意味を持つときは動詞語基にアクセントを持つが、受動的意味を持つ時、可能な限り遡る。

κανηφόρος, -ον, 籠を持っている、参照 τὸ κανοῦν, 籠、φέρω, 運ぶ
 προτοτόκος, -ον, 初めて子を持った、参照 πρῶτος, 最初の、τίκτω, 子を為す
 πρωτότοκος, -ον, 始めて生まれた、長子の、参照 πρῶτος, 最初の、τίκτω, 子を為す
 θεοφιλής, -ές, 神に親しい、参照 ὁ θεός, 神、φιλέω, 愛する
 ὁ σκυτοτόμος, -ου, 靴屋、参照 τὸ σκῦτος, 皮、τέμνω, 切る
 ὁ νομοθέτης, -ου, 立法者、参照 ὁ νόμος, 法、τίθημι, 制定する
 ὁ ἰχθυοπώλης, -ου, 魚屋、参照 ὁ ἰχθύς, 魚 πωλέω, 売る
 ὁ πρωταγωνιστής, -ου, 主役、張本人、参照 πρῶτος, 最初の、ὁ ἀγωνιστής, 役者（ἀγωνίζομαι「競う」から）

φερέοικος, -ον（稀）、流浪の；エスカルゴ、亀を指すこともある；参照 φέρω, 持つ、運ぶ、ὁ οἶκος, 家

φιλότιμος, -ον, 名誉を愛する、参照 φιλέω, 愛する、ή τιμή, 名誉
 μισοπόνηρος, -ον, 悪が嫌いな、参照 μισέω, 嫌う、πονηρός, 邪な

196 接頭辞または動詞接頭辞を伴う複合語

[885]

接頭辞は一般に形容詞である複合語の最初の要素であることがある。

主な接頭辞は：

ἀ- 欠落の意味の接頭辞

ἀν-（母音の前では）

ἀθάνατος, -ον, 不死の、参照 ὁ θάνατος, 死
 ἀνέλπιστος, -ον, 不意の、参照 ἐλπίζω, 期待する
 ἀφρων, 属格 -ονος, 無分別の、参照 φρονέω, 熟慮する

この接頭辞と接頭辞 ἀ-（または ἄ-）「一緒に、同時に」を混同しないように注意。

ἅπαντες, 全ての人、参照 πάντες, 全ての人

δυσ- 悪い

δύσχηστος, -ον, 役立たずの、参照 χρηστός, 役立つ
 δυστυχής, -ές, 不幸な、参照 ή τύχη, 運命

εὐ- 善い（副詞として、また、接頭辞として用いられる）

εὐδαίμων, 属格 -ονος, 至福の、参照 ὁ δαίμων, 運命の神、幸運
 εὐκλεής, -ές, 高名な、参照 τὸ κλέος, 榮譽

一つまたは複数の動詞接頭辞 (§270 参照) が一つの語の語基 (一般に動詞語基) に先行し、そしてその意味を明確にすることがある。複合のこの先行はとりわけ動詞について頻りである、§271-272 参照。

ἐκβάλλω, 外へ投げる、参照 ἐκ, 外へ、βάλλω, 投げる
καταλείπω, 捨てる、参照 κατά, 低きへ、λείπω, 残す
ἐγκαταλείπω, 即座に捨てる、参照 ἐν, 即座に、～の中で、κατά 下へ、λείπω, 残す

ὁ σύμμαχος, -ου, 同盟者、参照 σύν, ～とともに、μάχομαι, 戦う
ἡ ἀπόδοσις, -εως, 復原、参照 ἀπό, ～から離れて、ἡ δόσις, 与える行為

動詞接頭辞の助けて構成される形容詞においては、動詞接頭辞はその古い副詞の意味をしばしば保っている。ある場合、しかしながら、それは、その時常に名詞語幹である二番目の要素を導く前置詞の意味を持つ。

ἐνθεος, 靈感を受けた、神によって取り付かれた (「内側に神を持つ人」で、「神の中にある人」ではない!)、ἐν, 「～の中で」(副詞的意味)、ὁ θεός, 「神」参照。

ἐκδηλος, -ον, 白日の下に起こる、大衆の、参照 ἐκ, ～の外で (副詞的意味)、δηλος, 明白な
ἐλλιπής, -ές, ～を欠く、怠慢な、参照 ἐν, ～の中で、λείπω, 残す
παράνομος, -ον, 不法の (法の外にある)、参照 παρά, ～の傍に、～の外に (前置詞の意味)、ὁ νόμος, 法

ἐφιππος, 馬に乗った、参照 ἐπί, ～の上で (前置詞の意味)、ὁ ἵππος, 馬

動詞接頭辞の最後と語基の最初の文字の会合で音韻的变化が生まれる。

ἐμβάλλω, 投げ入れる, ἐν-βάλλω から
ἡ συγγνώμη, -ης, 容赦, 許し, συν-γνώμη から
ἀνορύττω, 掘り出す, ἀνα-ορύττω から
ὑπουργός, 助けになる, ὑπο-εργός から

文

198 言表、主語と述語

[901, 902, 921]

言表—活用した動詞形を伴うことも伴わないこともある—は**肯定の**（断定の）、**疑問の**または**命令を含む**（命令）の形で存在しうる。**感嘆的な**形は感情の込められた言表を特徴付ける。

[2636, 1835, 2681]

τὸ παιδίον καθεύδει.
ἀνάγκη.

赤ん坊は眠る。
それは必然である。

τίς καθεύδει;
πόθεν Μενέξενος;

誰が寝ているのか？
何処からメネクセノスは（来るか）？

σίγα.
μηδὲν ἄγαν.

黙れ！
度を越すな！

ὡς ἀστεῖος ὁ ἄνθρωπος.

何と魅力的なことか、その男は！

非常にしばしば言表は二つの主要部分に分解される。それは**主語**および**述語**の機能（主語について言われることを述語という）に対応してである。

主語は**統辞論的単位**¹によって表わされうるが、動詞形の曲折語尾の中にしか現れないこともある。

述語機能はしばしば**動詞**によって引受けられる。述語機能はまた**名詞的形**（名詞、形容詞、前置詞の連辞、副詞など）によるそれであることもある。それは主語に**繫辞**によって結び付けられることもあるが、そうでないこともある（動詞 être、§199 参照）。その時**属詞**について云々される。

[909, 910, 916, 917, 918]

τὸ παιδίον καθεύδει.
οὐκ ἐγείρεται.

赤ん坊は寝ている。
（彼は）眼が覚めない。

ὁ Πόντος οὐχ ὑγιεινόν ἐστι χωρίον. (Men.)
ἄδικον ὁ πλοῦτος. (E.)

ポントスは衛生的な地域ではない。
不正なことである、富は。

同様に**主語**または**目的語の属詞**（目的補語については、§200 参照）を**動詞を伴う名詞形**（名詞、形容詞など）と呼ぶ。その動詞が主語（または目的語）とこの名詞形の間**の属詞的型の関係**を定めるのである。 [919]

γίγνονται πλούσιοι.
οὐδείς σοι σοφός φαίνεται.
κόλακες καὶ θεοὶ ἐχθροὶ ἀκούσουσιν. (D.)

金持ちに彼らはなった。
誰も君には賢いようには見えない。
彼らは追従者にして神々にとって仇と呼ばれるのを聞いている。

πάντες τὸν ἄνδρα σοφώτατον νομίζουσιν.
φίλω σοι χρήσομαι καὶ ἀδελφῶ. (X.)

全ての人はその男を最も賢いと考えている。
友として君を私はみなそう、そして兄弟として。

¹「統辞論的単位」というこの用語によって我々は**同一の統辞機能**（主語、動詞、属詞、補語）を満たすものを理解する。すなわちこの機能が一語または語群によって引受けられるであろうことを。

109 状況補語的言表、超時制的言表

[1850ff, 1859ff]

話者はその言表を彼の言表行為の行為に関連付けながら、また時制の中にそれを位置付けながら、置くことが出来るし、あるいはそれを一般的な秩序のそして超時制的な性格の真実として提出できる。ただし後者は言表行為の全ての関連の外においてである。

多くの要素が言表を詳述するために寄与する。特に活用した動詞形は人称・法・時制・相などの印を導入しながら言表を詳述する。動詞の法は言表を**事実**（直説法）、**願望**（希求法）、**期待**または**意志**（接続法）、もしくは**命令**（命令法）として表現しながら言表を「叙法化」する。一動詞の法はさらに思い描かれている**実現性の度合い**を示す (§91, 279-281 参照)。 [900, 1759-1760]

πορεύομαι πρὸς περίπατον. (Pl.)	私は散歩に行くところだ。
ἐπορεύομην πρὸς περίπατον.	私は散歩に行くところだった。
εἶθε πορεύοιο πρὸς περίπατον.	君が散歩に行きますように！
πορευώμεθα πρὸς περίπατον;	我々は散歩に行かなければならないか？
πορεύου πρὸς περίπατον.	散歩に行け。

いくつかの場合には、活用した動詞形は超時制的価値を引受けうるが、その場合言表行為の行為への全ての関連から開放されるのである（例えば、格言における場合である）。

Men. Sent. 62:	ἀνὴρ δίκαιος πλοῦτον οὐκ ἔχει ποτέ.
	正しい人は決して金持ちではない。

その述語が名詞形（属詞）である言表は**繫辞**（動詞 être）の使用によって詳述される。繫辞は言表中に動詞的限定の全て（人称・法・時制・相など）を導く。 [917]

ὁ φίλος σου ἀληθής ἐστιν.	君の友は誠実である。
ὁ φίλος σου ἀληθής ἦν.	君の友は誠実であった。
ὁ φίλος σου ἀληθής εἶη.	君の友が誠実であるように！

繫辞がない時、**名詞文**が云々される。その活用した動詞形が担い手である諸限定が欠如している時、名詞文はしばしば**超時制的性格**または**一般的真実**の性格を持つ。 [944]

ἄδικον ὁ πλοῦτος. (E.)	不正なことである、富は。
οὐ καθευδιτέον ἐν τῇ μεσημβρίᾳ. (Pl.)	昼時に惰眠を貪るべきではない。

非動詞的言表はしかしながら必ずしも超時制的性格を持つわけではない：非動詞的要素または文脈がそれを詳述するのに十分でありうる。同様に活用した動詞形の**省略**も有り得る（省略については、§217 参照）

Ar. Ach. 154:	τοῦτο μὲν γ' ἤδη σαφές.	それはほらもう明らか（である）。
---------------	-------------------------	------------------

200 主語と補語

[909, 1451-1456, 1469-1473]

言表において、動詞は諸々の補語によって限定される — 目的補語・(動作の)宛人・状況補語(時間、場所、原因、仕方など)。

補語は、主語のように、名詞的形または補語節から成る (§203 参照)。

種々の補語の機能は主語の機能と同様にとりわけ格の曲折語尾によって示される (§218-269 参照)。状況補語は格によって示され、しばしば前置詞の助けによって明確にされる (§270-274 参照)。それらはまた副詞によって表現される (§55-58 参照)。

ὁ Προμηθεὺς κλέπτει τὸ πῦρ καὶ δωρεῖται ἀνθρώπῳ.

プロメテウスは火を盗み、そして人間への贈物にする。

ὁ Προμηθεὺς κλέπτει Ἡφαίστου καὶ Ἀθηνᾶς τὴν ἔντεχνον σοφίαν σὺν πυρὶ καὶ οὕτω δὴ δωρεῖται ἀνθρώπῳ. (Pl.)

プロメテウスはヘーパイストスとアテーナーから一緒に彼らの技術的知識を火とともに盗み、そして、こうして人間への贈物にする。

ἐν τῷ πνίγει ὑπὲρ κεφαλῆς ἡμῶν οἱ τέττιγες λιγυρῶς ἄδουσι.

うだるような暑さの中で我々の頭の上で蝉が鋭い声で歌っている。

201 名詞限定辞、形容語の位置

[923]

名詞—主語・属詞または補語の機能を持つ—は定冠詞・形容詞・分詞・前置詞連辞句・副詞・連体的属格・関係節などを伴うことができ、それらは名詞限定辞と呼ばれるのである。

限定辞のそれが限定する名詞への結びつきは曲折の一致(定冠詞・形容詞・分詞など)によって、形容語の位置(以下参照)によって、あるいはまた語順における単純な近接性(時に連体的属格など)によって示されうる。

οἱ ἄνθρωποι

人々

χρηστοὶ πολῖται

誠実な市民達

οἱ πέραν κατοικοῦντες ἄνθρωποι (Luc.)

対岸に住む人々

τὰ ἐν τοῖς ὕδασι εἶδωλα (Pl.)

水に映る影像

οἱ νῦν ἄνθρωποι

今の人々

ὁ πόλεμος τῶν Πελοποννησίων καὶ Ἀθηναίων (Th.)

ペロポネソス人とアテーナイ人との戦

κιττοῦ τε τις στέφανος δασὺς καὶ ἰων (Pl.)

キツタとスマレでできたふさふさとした冠

名詞と指示代名詞間の限定関係については、§64-66 参照。

名詞が冠詞によって限定される時に、形容語の位置ということが語られるが、それは定冠詞と名詞の間に置かれるか、もしくは名詞の後ではあるが反復される冠詞に先行されて置かれる他の限定辞に対して、である (§209 参照)。それは形容詞または形容語として機能する分詞の正常な位置である。副詞・前置詞連辞および曲折一致に与らない他の要素は、形容語の位置によって名詞限定辞の機能を示す。

οἱ χρηστοὶ πολῖται	誠実な市民達
οἱ πολῖται οἱ χρηστοί	誠実である人々
τὰ ἐν τοῖς ὕδασι εἶδωλα (Pl.)	水に映る影像
τὰ εἶδωλα τὰ ἐν τοῖς ὕδασι	水の中にある影像
αἱ σκιαὶ αἱ ὑπὸ τοῦ πυρὸς εἰς τὸ καταντικρὺ αὐτῶν τοῦ σπηλαίου προσπίπτουσαι (Pl.)	
火の光で自分たちの正面にある洞窟の一部に投影される影像	

202 同格限定辞、同格

[916, 976ff]

曲折の一致によって記される名詞限定辞（特に形容詞・分詞・そして名詞さえも）は、それらが限定する名詞に同格である。同格的限定辞について述べるが、それはこれが、状況補語の仕方、動詞的行動に関して詳細を限定する時である。ただし全てその際それが限定する主語または補語に（性・数・格の一致によって）結びつくのである。

ἡ Μιλησία ἐκφεύγει γυμνὴ πρὸς τῶν Ἑλλήνων. (X.)

ミーレートスの女は素っ裸でギリシア人たちの面前から逃げる。

ἀφικνοῦνται τριταῖα.

彼らは三日目に到着する（二日目の終わりに）

καθεύδομεν ὑπαίθριοι.

我々は野天で眠る。

οἱ Ἀθηναῖοι ἀκούσαντες ἀνεπέιθοντο. (Th.)

アテナイ人たちは聞いた上で従った。

ἀκούω σου λέγοντος.

君が話すのを私は聞く。

γέρων ὦν μαθήσομαι; (Ar.)

わしゃ年寄りじゃ、わしに分かるじゃろうか？

同格限定辞は状況的意味を明確にする接続詞（ἄτε, ὥς, καίπερ など）が先行することがある。

S. OT 1078: φρονεῖ γὰρ ὥς γυνὴ μέγα.

というのは、全ての女がそうであるように、彼女は気位が高いから。

同様にある名詞に他の名詞または名詞群（場合によっては動詞 être の分詞を伴って）が同格におかれることがある。これは状況補語の機能を持たずに名詞を限定しあるいは特徴付けるのである。それをより特別に同格と呼ぶ。

ὁ τε Πολέμαρχος ἦκε καὶ Ἀδείμαντος ὁ τοῦ Γλαύκωνος ἀδελφός. (Pl.)

ほどなくして、ボレマルコスがやってきた。アディマントスつまりグラウコンの兄もまた。

Θράσυλος τε τῶν πέντε στρατηγῶν εἰς ὧν καὶ Ἀλκίφρων πρόξενος Λακεδαιμονίων [...] (Th.)

トラスロス、すなわち五人の将軍の一人、そしてアルキフロン、すなわちラケダイモン人の外賓接待役...

203 補語節および関係節

[2191?]

言表の中では、目的補語のまたは状況補語の機能は**補語節**によって引受けられる。時に主語機能がそうであるのと同様にである (§350 参照)。 [2539]

この最後の場合、便宜的に状況補語節の名称を残す。たとえ「補語」という用語がその時正確な統辞の意味を失うとしてもである。

名詞の限定辞機能（形容語または同格）は、機能については**関係節**によって引受けられる (§78-81 および 350 参照)。また関係節はそれのみに主語のあるいは補語の機能を引受けることが出来る。

複数の節からなる文においては、**主節**は述語要素を含む。状況補語はそれに依存する。これらは一般に**接続詞**によって導かれる (§347-348 参照)。関係節は**関係代名詞**によって導かれる (§73 および 75-77 参照)。

状況補語を導く接続詞は大部分関係代名詞の固定された古い格の形に由来する (§347 参照)。このことは、起源において、従属関係は関係代名詞によってしかほとんど作られず、その従属的意味は弱い（むしろ**相関**の形が重要である）ということをもしろ表わす。この起源から補語節はギリシア語では主節と関係である種の自立性を保持することとなった。

Pl. Smp. 214e: **ἐάν τι μὴ ἀληθὲς λέγω, μεταξύ ἐπιλαβοῦ, ἂν βούλη, καὶ εἰπὲ ὅτι τοῦτο ψεύδομαι.**

もし私が真実を言っていないようなら、途中で中止させてくれたまえ、君が望むのなら。そして私が嘘を言っているとも言いたまえ。

Heraclit. 22 B 93DK: **ὁ ἄναξ, οὗ τὸ μαντεῖόν ἐστι τὸ ἐν Δελφοῖς, οὔτε λέγει οὔτε κρύπτει ἀλλὰ σημαίνει.**

その予言がデルフォイのそれである主（アポローン）は語りもせず隠もしない、否、徴を与えるのだ。

Pl. Grg. 511e: **ἄδηλόν ἐστιν οὐστίνας τε ὠφέληκεν καὶ οὐστίνας ἔβλαψεν.**

どういった人に益を彼が与えるかそしてまたどういった人を彼が害なすか明らかでない。

Isoc. 8. 82: **οὕτω γὰρ ἀκριβῶς εὕρισκον ἐξ ὧν ἄνθρωποι μάλιστ' ἂν μισηθεῖεν ὥστ' ἐψηφίσαντο τὸ περιγιγνόμενον τῶν πόρων ἀργύριον διελόντες κατὰ τάλαντον εἰς τὴν ὀρχήστραν τοῖς Διονυσίοις εἰσφέρειν ἐπειδὴν πλήρες ἡ τὸ θέατρον.**

というのもこのように人々がもっとも嫌う可能性のあるものから彼らは正確に発見し、その結果歳入の残りの金を分割した上で一タラントンずつディオニューソスへのオーケストラへ運び込むことを彼らは投票した、劇場は一杯である時に。

204 並置法

[2159]

一般に同じ統辞機能をもつ文あるいは文の要素（統辞単位または節）は並置接続詞あるいは小辞によって**並置**されることがある (§347-348 参照)。

205 名詞化

[1153]

名詞化とは定冠詞をある語あるいは通常定冠詞を欠いている語群（形容詞、分詞、不定法、不定構文、副詞、節）に与えることに存するが、それは名詞に似た本質を作り、そしてそれに名詞と同じ統辞機能（主語、補語、属詞）を引受けることを可能にするためである。

ὁ σοφός	賢人
ἡ λαλοῦσα	おしゃべりな女
τὸ ἀνθρώπινον	人間的本性、人類
τὰ γενόμενα	出来事
τὸ ὄν	存在するもの
τὸ εἶναι	あること
τὸ τὸν βασιλέα νικᾶν	王が征服者であること
τὸ λίκν	過剰
τὸ γνῶθι σεαυτόν	「汝自身を知れ」ということ

Ar. Pl. 146: ἅπαντα τῷ πλουτεῖν γὰρ ἐσθ' ὑπήκοα.
 全てのものは富裕であることに従属しているのだから。

単純な定冠詞（男性、女性、または中性）を用いて副詞または前置詞型もしくは属格の限定辞が伴われている或る本質を名づける時にも名詞化という。

οἱ νῦν	現代人、今日の人々
τὰ ἐν τῇ νήσῳ	島の中にあるもの
τὰ τοῦ βαρβάρου	蛮族の党

定冠詞の一般化または個別化の意味については、§29 参照。

ὁ βουλόμενος	「望んでいる（個別の）人」、または、「望む人（望む全ての人、即ち、望むという事実によって定義される）」
--------------	-----------------------------------------------------

文に関する諸注

206 動詞の主語との一致

[925, 949ff]

原則として動詞は数において主語と一致する。複数の主語があるとき、動詞は複数または単数（主語の一つに一致して）となる。それは意味によって、そして話者の選択によってである。

Ar. Av. 375:	πολλὰ μανθάνουσιν οἱ σοφοί. 多くのことを賢人たちは学ぶ。
X. An. 1. 4. 8:	ἀπολελοίπασιν ἡμᾶς Ξενίας καὶ Πασίων. クセニアスとパシオンは我々を捨てた。
Pl. Ly. 207e:	οὐκοῦν εἶ σε φιλεῖ ὁ πατήρ καὶ ἡ μήτηρ καὶ εὐδαίμονά σε ἐπιθυμοῦσι γενέσθαι [...] ところで、もし君をお父さんが愛しておられてそれがお母さんにもそうであり、そして君が幸いであることを願っているのなら...

Pl. Grg. 500d: ἐπειδὴ ὠμολογήκαμεν ἐγὼ τε καὶ σὺ [...]
 我々この私とかつまた君とが同意済みであるからには...

主語が複数中性である時、動詞は単数に置かれる。それは複数中性は集合名詞のように感じられるからである。

[958]

Pl. Tht. 182c: κινεῖται καὶ ῥεῖ, ὥς φατε, τὰ πάντα; ἢ γὰρ;
 万有は動きかつ流れるというふうには君は言うのか? どうかね?

しかしながら、非常に稀に、中性複数主語を伴う複数に置かれた動詞を見ることがあるが、それは個性（特に人について）を際立たせることが重要である時である。

[959]

Pl. La. 180e: τὰ γὰρ μειράκια τάδε θαμὰ ἐπιμέμνηται Σωκράτους καὶ σφόδρα ἐπαινοῦσιν.
 この少年達（それぞれ）はソクラテスのことをしばしば口に、非常に賞賛するのです。

動詞は時に意味によって（κατὰ σύνεσιν）一致し、文法的一致によっては一致しない。

[951-953]

X. HG 3. 3. 4: ἡ πόλις Ἀγησίλαον εἵλοντο βασιλέα.
 ポリスはアゲーシラーオスを王として選んだ。

Aeschin. 3. 133: Θῆβαι δέ, Θῆβαι, πόλις ἀστυγείτων, μεθ' ἡμέραν μίαν ἐκ μέσης τῆς Ἑλλάδος ἀνήρπασται.
 テーバイ、テーバイ、すなわち隣のポリスは一日のうちにまさにヘラーズの真中から掃蕩された。

動詞が複数型主語に先行するとき、それは単数に置かれることがある（ピンダロス型 σχῆμα Πινδαρικών と呼ばれる形態）。

[961]

Pl. R. 2. 363a: ἵνα γίγνηται ἀπὸ τῆς δόξης ἀρχαί τε καὶ γάμοι [...]
 この評判からして諸々の役職そして結婚が手に入るように...

双数におかれた主語を伴う複数形動詞、または論理的には双数でありながら複数で表現される主語と双数におかれた動詞を見ることがある。

[962]

S. Ant. 55-57: τρίτον δ' ἀδελφῶ δύο [...] μόνον
 κοινὸν κατειργάσαντ' ἐπαλλήλοιν χεροῖν.
 三番目に、二人の兄弟は互いの攻撃で共通の死を余儀なくされたのでございます。

Th. 5. 59: τῶν δὲ Ἀργείων δύο ἄνδρες Ἄγιδι διελεγέσθην μὴ ποιεῖν μάχην.
 二人のアルゴス人は戦いをしないようアギスに話した。

時に、動詞は主語の同格と一致し、主語とは一致しないことがある。それはこれが語順においてより近い時であり、そしてそのことが意味によりよく対応している時である（牽引現象）。同様に繫辞は属詞に一致し主語とは一致しないことがある。

[966, 918a]

Aeschin. 3. 133: Θῆβαι δέ, Θῆβαι, πόλις ἀστυγείτων, μεθ' ἡμέραν μίαν ἐκ μέσης τῆς Ἑλλάδος ἀνήρπασται.
 テーバイ、テーバイ、すなわち隣のポリスは一日のうちにまさにヘラーズの真中から掃蕩された。

Antiphon 2. 3. 8: αἶ δ' εἰσφοραὶ καὶ χορηγίαι εὐδαιμονίας μὲν ἱκανὸν σημεῖόν ἐστι.
 しかるに納税と合唱隊の負担は繁栄の十分なしるしである。

属詞

207 属詞機能の形容詞あるいは分詞の一致

[925, 1020, 1030-1039]

原則として、形容詞あるいは属詞機能の分詞は性・数においてそれが限定する名詞と一致する；同じ格に置かれる。

属詞が複数の名詞を限定しているその時に、生命ある男性および女性名詞があるなら、属詞は通常男性形である；それらが非生物であれば、属詞は中性に置かれる。

一般的な仕方では、性が混在するなら、一致は話者の意図によりよく対応する性によってなされる。

Pl. R. 8. 562a: ἡ καλλίστη δὴ, ἣν δ' ἐγώ, πολιτεία τε καὶ ὁ κάλλιστος ἀνὴρ λοιπὰ ἂν ἡμῖν εἶη
διελθεῖν, τυραννίς τε καὶ τύραννος.
「実にもって最善の」、と私は言った、「国制と最善の人のことを述べるということが我々には残
っているであろう：僭主制そしてまた僭主だ。」

属詞機能の形容詞はしばしば中性に置かれる。それは主語が抽象名詞または種族的名詞のときである。

S. Ant. 1195: ὀρθὸν ἀλήθει' αἰεί.
真実だけが、いつも正しいのです。

主語が指示代名詞であるとき、属詞の性・数に一致する指示代名詞であることがしばしばである。

Ar. Nu. 206-207: αὐτὴ δέ σοι γῆς περίοδος πάσης. ὄρας;
αἶδε μὲν Ἀθηναίαι.
それが大地全ての周囲（見取り図）だ、分かるかね？
これがアテーナイだ。

非人称言回しに依存する不定法構文においては（不定法 4 参照）、属詞はあるいは不定構文の内部で対格に、あるいはその外側に必要な格で、一致することがある。

Isoc. 2. 15: φιλόφρων εἶναι δεῖ καὶ φιλόπολιν.
人間好きでなければならない、そしてまたポリス好きでも。

D. 3. 23: ὑμῖν [...], ὧ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, εὐδαίμοσιν ἔξεστι γενέσθαι.
君達にとって、アテナイ人達よ、幸福になることは可能である。

208 属詞機能の名詞

[1150]

定冠詞が主語を限定する時またはある限定を名詞にもたらず時、一般に属詞機能の名詞は定冠詞に先行されない。

Arist. Pol. 1256b: ὁ δὲ πλοῦτος ὀργάνων πλήθος ἐστὶν οἰκονομικῶν καὶ πολιτικῶν.
富裕は家政的および国政的な働きの集大成である。

Men. frg. 614 Körte: ὁ μὲν Ἐπίχαρμος τοὺς θεοὺς εἶναι λέγει
ἀνέμους ὕδωρ γῆν ἥλιον πῦρ ἀστέρας.
エピカルモスは、神々は風・水・大地・太陽・火・星であると言った。

これに反して、属詞が同一性（とりわけ名詞化された分詞または ὁ αὐτός「同一の」の表現の場合）を強調する時、定冠詞が属詞に先行する。

- Pl. Grg. 483b: ἀλλ' οἶμαι οἱ τιθέμενοι τοὺς νόμους οἱ ἀσθενεῖς ἀνθρώποι εἰσιν καὶ οἱ πολλοί.
 しかし思うに、法を制定する人々というものは、弱い人々であり、そして多数の人間たちである。
- Pl. R. 7. 516b: οὗτος ὁ τὰς τε ὥρας παρέχων καὶ ἐνιαυτοῦς.
 それ（太陽）は季節と年々の移り行きをもたらすそれだ。
- Th. 2. 61: καὶ ἐγὼ μὲν ὁ αὐτός εἰμι καὶ οὐκ ἐξίσταμαι.
 そしてこの私は同じ者であり、また決して変わりはないのだ。

名詞の限定辞

209 位置

[912]

通常、限定辞はそれが限定する**名詞の前に**置かれる (§212 参照)。もし名詞が定冠詞によって限定されるなら他の限定辞（形容詞、分詞、副詞、前置詞句）は通常**定冠詞と名詞の間**である（**形容語の位置**、§201 参照）。しかしながら限定辞は後置されることがある。それらはその時繰返す定冠詞に先行されるのであるが、それはその名詞が定冠詞によって限定されるならである。

通常的位置では限定辞は名詞をそれ自身として特徴付ける。もしそれが後置されるなら、それは一般的に一層鮮明な意味を取り、あるいは明白にし、あるいは更に詳述的になる (§201-202 参照)。

[1154ff]

δίκαιος λόγος	正当な語り
λόγος δίκαιος	語りの正当なもの
ὁ δίκαιος λόγος	その正当な語り
ὁ λόγος ὁ δίκαιος	その語り、その正当であるもの（鮮明な意味）

定冠詞は後置される限定辞に先行しながらそのものに定義または正確さの意味を授ける (§29 参照)。

- Th. 2. 34: γυναῖκες πάρεσιν αἱ προσήκουσαι.
 女達がいる、家族たるべき女達が。

もし定冠詞の先行する名詞が**形容語の位置にない**限定辞を持つとすれば、そのことは限定辞が明確である、あるいは同格の限定辞の意味を持つからである (§202 参照)。

- Ar. Nu. 229-30: τὴν φροντίδα
 λεπτὴν καταμείξας εἰς τὸν ὅμοιον ἀέρα.
 思索を、それはわずかばかりのものであるが、(思索と) 似ている空気に混ぜた上で
- Pl. R. 7. 515e: διὰ τραχείας τῆς ἀναβάσεως καὶ ἀνάντους
 険しい登り道そして急な登り道を通して

連体的属格は単純にそれが限定する名詞の**傍に置かれる**（代名詞の場合、通常名詞の後、§71 参照）。**形容語の位置**にあるということは名詞とより強い統一性を形成する。 [1161]

τὰ τεμένη τῶν θεῶν	神々の聖なる境内
τῶν θεῶν τὰ τεμένη	
τὰ τῶν θεῶν τεμένη	

τὸ μέγεθος τοῦ κινδύνου	危険の大きさ
τοῦ κινδύνου τὸ μέγεθος	

παιδείας μέγιστον μέρος	教育の最重要な部分
-------------------------	-----------

ὁ φίλος μου	私の友
ἐν τῇ αὐτοῦ χώρᾳ	彼の、彼に属する領域で

Ar. Eq. 1330: δείξατε τὸν τῆς Ἑλλάδος ὑμῖν καὶ τῆς γῆς τῆσδε μόναρχον.
ヘラスとこの地の支配者を我々に示しなさい。

ある種の形容詞（特に地理的位置の形容詞）はそれらが形容語の位置にあるかまたは並置されるかによって、**意味のニュアンス**を表わす。**形容語の位置**では形容詞は名詞を全体として明示しながら、そして対照的仕方、限定する。**併置されたとき**、形容詞は名詞自身を明確にするが、それはもろもろの限定の一つによってであり、名詞を詳述するのである。

定冠詞がないとき、意味のニュアンスを示すのは文脈である。 [1172]

以下のような形容詞が重要である： [1175]

μέσος	中心の
ἔσχατος	極端な
ἄκρος	至高の
πᾶς, πᾶσα, πᾶν	全ての

ἡ μέση πόλις	中心のポリス
μέση ἡ πόλις	ポリスの中心、その中心にあるポリス
ἡ ἐσχάτη πόλις	最も離れたポリス
ἐσχάτη ἡ πόλις	ポリスのはずれ、はずれにあるポリス
ἄκρον τὸ ὄρος	山の頂上、頂上にある山
ἡ πᾶσα πόλις	ポリス全体
πᾶσα ἡ πόλις	全てのポリス、全ての部分にあるポリス
πᾶσα πόλις	夫々のポリス、ポリス全体

また、以下を参照：

αἱ πᾶσαι πόλεις	全てのポリス全体
πᾶσαι αἱ πόλεις	全てのポリス
πᾶσαι πόλεις	夫々のポリス、全てのポリス；ポリスの全て

210 名詞を限定する形容詞および分詞の一致

[925, 949-972, 976-995]

原則として、形容詞および分詞は性および数においてそれが限定する名詞と一致する。それらは名詞と同じ格に置かれる。

同じ形容詞または同じ分詞が複数の名詞を限定するとすれば、それはあるいは繰返されて名詞のそれぞれと一致するか、あるいは唯一つの名詞と一致するかである。

αἱ καλαὶ παρθένοι	美しい娘達
οἱ πέραν κατοικοῦντες ἄνθρωποι (Luc.)	向こう岸に住む人々
οὔτε πλοῦν οὔτε ὁδὸν πολλὴν ἀπέχειν (Th.)	海路によっても、陸路によっても、余り離れていない。

δύο（「二、二つ」の意）を伴う時、名詞は複数形に置かれることもしばしばである。δυοῖν（δύο 属格、与格）を伴う時、名詞は原則として双数に置かれる。

Pl. Phd. 71a: μεταξὺ ἀμφοτέρων πάντων τῶν ἐναντίων δυοῖν ὄντων δύο γενέσεις
 全ての反対の対の中間に、二つの存在にとって二つの生成がある。

211 語順

曲折がそれ自身によって文の語間の統辞的關係を明確にしているという事実から、語順は比較的自由である。しかし、語順はそれだけ多く表現機能をもつのである。ある種の定式を—それらは規範を示す—解放することが出来る。この規範への隔たりはしばしば格別の明確化に対応し、表現的意味を持つ。それらはまた文体基準（韻律、音調など）によって動機づけられる。

212

印欧語に遡る原則によって、限定するものは通常限定されるものに先行する。一般に名詞の限定辞は名詞に、補語および特に副詞は動詞に先行する。また否定辞は否定されるものに先行する。属詞は繫辞またはそれに伴う他の動詞に先行する。

Pl. Prt. 310e.	ἔτι γὰρ παῖς ἢ ὅτε τὸ πρότερον ἐπεδήμησε. ἀλλὰ γὰρ, ὦ Σώκρατες, πάντες τὸν ἄνδρα ἐπαινοῦσιν καὶ φασιν σοφώτατον εἶναι λέγειν· ἀλλὰ τί οὐ βαδίζομεν παρ' αὐτόν, ἵνα ἔνδον καταλάβωμεν; なぜなら私はまだ子供でしたから、以前にここに彼が滞在したときには。しかしともかく、ソクラテースよ、全ての人がこの人を賞賛し、そして語ることに最も賢明であると言うのです。しかし、どうして彼のところに我々は行かないのですか、中にいるのをつかまえるために。
Pl. Prt. 338e.	ἡγοῦμαι, ἔφη, ὦ Σώκρατες, ἐγὼ ἀνδρὶ παιδείας μέγιστον μέρος εἶναι περὶ ἐπῶν δεινὸν εἶναι. この私は思うのだ、と彼は言った、「ソクラテースよ、人間にとって教育の最も重要な部分は詩の言葉について熟達していることであると」

同じ原則は、語の複合においても見られる、§195 参照。

213

文においては、**二番目の位置は弱い**。それは小辞と他の後倚辞あるいは弱く強調されるその他の要素の場所である (Wackernagel の法則)。文における**最初の位置は予期**によって明確にされる語によって占められる場合しか重要ではない。**最後の位置は拒絶**によって明確にされる語をそこに置く場合重要となることがある、これは文に強い調子を与える。

- D. 18. 23: οὐ τοίνυν ἐποίησας οὐδαμοῦ τοῦτο, οὐδ' ἤκουσέ σου ταύτην τὴν φωνὴν οὐδεὶς· οὔτε γὰρ ἦν πρεσβεία πρὸς οὐδέν' ἀπεσταλμένη τότε τῶν Ἑλλήνων, ἀλλὰ πάλαι πάντες ἦσαν ἐξεληλεγμένοι, οὐθ' οὗτος ὑγιὲς περὶ τούτων εἶρηκεν οὐδέν.
 確かに決してそれを君はどこでもしなかったし、君から君の声を誰も聞かなかった。たしかに、ギリシア人の誰一人に対しても送られた大使は、そのとき、いなかった、否、長い間全ての人は混乱させられていて、またこの男もこれらのことについて健全なことを言わなかった、何もだ。

214

[2182, 3045]

しばしば見られる先行は、主節における、補語節の主語 (あるいは目的補語) の**予弁法**あるいは**予期**である。たいていの場合—しかし必ずではない—予期される語は通常主節の統辞法に統合される。

- D. 9. 50: καὶ σιωπῶ θέρος καὶ χειμῶνα ὡς οὐδέν διαφέρει.
 そして私は夏と冬が何の違いもないという事実を黙過した。
- Arist. Ath. 55. 3: ἐπερωτῶσιν δ' ὅταν δοκιμάζωσιν ἠρία εἰ ἔστιν καὶ ποῦ ταῦτα, ἔπειτα γονέας εἰ εὖ ποιεῖ.
 だがしかし、彼らが審査をする時、彼らは尋ねるのである、家族の墓があるかどうか、そしてそれはどこにあるか、そしてそれは何処にあるか、それから両親に孝行しているかどうか、と。
- X. Mem. 3. 5. 13: καὶ ὁ Περικλῆς, καὶ θαυμάζω γ', ἔφη, ὦ Σώκρατες, ἡ πόλις ὅπως ποτ' ἐπὶ τὸ χειρὸν ἔκλινεν.
 そしてペリクレスは言った：—そして私はともかくも驚くのだ、ソークラテースよ、ボリスはどのようにしていつこの悪い方に傾いたのかを。

215

[3028]

明確化は統辞的に固く結ばれている統辞要素の**転置**あるいは**分離**によってもなされる。この手法は韻文においても散文においても同様にしばしば見られる。

- S. OT. 614: χρόνος δίκαιον ἄνδρα δείκνυσιν ἄλλος,
 κακὸν δὲ κἂν ἐν ἡμέρᾳ γνοίης μᾶ.
 時間が、ただそれのみが正しい人間を現わす、しかるに、悪しき人間を一日のうちに、たった一日のうちに知るであろう。

216 並置法：小辞と接続詞

[2834ff]

ギリシア語は統辞的同一平面にある話の要素（文の要素あるいは文全体）を、思考を構成する小辞によってまたは並置法の接続詞によって、つなぐ傾向がある (§347-348 参照)。

Luc. VH 1. 16: ἐμάχοντο δὲ οὐ μόνον οἱ ἐπὶ αὐτῶν, ἀλλὰ καὶ αὐτοὶ μάλιστα τοῖς κέρασιν ἐλέγοντο δὲ οὗτοι εἶναι ἀμφὶ τὰς πέντε μυριάδας. ἐπὶ δὲ τοῦ δεξιοῦ αὐτῶν ἐτάχθησαν οἱ Αεροκώνωπες [...]
 しかるにそれらの上（馬）に乗っているものたちだけでなく自らもまた懸命に角で戦っていた；そして（他方）それらは約五万騎であったと言われていた。そして（他方）彼らの右手にアエロコーノプス（空の虻）部隊が戦列をなしていた。

連辞なしの並置の場合 (asyndète 連辞省略, ギリシア語 ἀσύνδετον, 結ばれていない) は一つの表現の意味を持つ。

E. Hipp. 353-357: οἴμοι, τί λέξεις, τέκνον; ὥς μ' ἀπώλεσας.
 γυναῖκες, οὐκ ἀνασχέτ', οὐκ ἀνέξομαι
 ζῶσ' ἐχθρὸν ἤμαρ, ἐχθρὸν εἰσορῶ φάος.
 ῥίψω μεθήσω σῶμ', ἀπαλλαχθήσομαι
 βίου θανοῦσα· χαίρετ', οὐκέτ' εἴμ' ἐγώ.
 ああ、悲しい哉、何ということをおなた様はおっしゃるのですか、姫様。私を殺したような心持で。ご婦人方、耐えられなかった、生きることにはわたしは耐えられそうにありません。呪われた日、呪われた光を私は見ているのです。身を投げよう、身を捨てよう、死んでしまえば、生きることから解放されるでしょう。さようなら、私は最早いないのです。

217 省略

[944ff, 2520, 1027-1029]

動詞または名詞の省略はとりわけ格言の中でしばしばである。

Pl. Mx. 234a: Ἐξ ἀγορᾶς ἢ πόθεν Μενέξενος; - Ἐξ ἀγορᾶς, ὦ Σώκρατες, καὶ ἀπὸ τοῦ βουλευτηρίου.
 - Τί μάλιστα σοὶ πρὸς βουλευτήριον;
 μενεξένοςはアゴラから来たのか、それとも何処からか？—アゴラからです、ソクラテース、審議院からです。—いったい君は審議院にどんな関わりをもっているのかね？

Ar. Ach. 407: ἀλλ' οὐ σχολή.
 しかし暇がない。

τῆ ὑστεραία (言外に ἡμέρα)	翌 (日)
ἡ Ἀττικὴ (言外に χώρα)	アッティカ (地方)
ὁ Κρής τὸν πόντον	クレータ人は海を (知らない) (格言の意味: 何も知らない振りをする)

繫辞がない時、名詞文と言う (§199 参照)。

210 格の統辞法

[1279-1282]

ギリシア語の**名詞的曲折**（または**曲用**）において、数および時には性の他に、**曲折語尾は格**を示す (§27 参照)。より稀には母音交替またはアクセントの変化は曲折語尾と結合して格を示す。

格（ギリシア語では πτώσεις）は文において名詞（主語、補語）の果たす主な統辞機能に対応する。一致によって格はまた属詞の機能を示すことができるし、また名詞の限定辞（冠詞、付加形容詞、同格の限定辞、同格）のそれらが限定する名詞への結びつきを示すことが出来る (§201, 202, 207 および 210 参照)。

主格は主語の格である。

対格、属格、与格（ギリシア語の πλάγια πτώσεις に倣って**斜格**と呼ばれる）は**補語**の格である。**前置詞**がこれらの格と結合して多くの補語を明確にする (§270-278 参照)。前置詞句は属格（名詞を修飾する属格）のように、**名詞の限定辞の機能においても** (§201 参照) または属詞の機能においても用いられる。

対格は**直接目的補語**の格である。

対格は、動詞の行為にとって最も直接的な対象の関係（**他動性**の関係）を、さらにまた思惟がその対象を構成するところの**客体化** [=対象化] の関係を表現する。

属格は**相互依存と分離**の密接な相関関係を表わす。

一般にそれは二つの用語間の**相互依存**関係を確立する。相互依存はまた分離という観念のうちに含まれる。

与格は**宛人**および**随伴**の格である。

与格は動詞の行為に関与する人（時に物）、特に宛人を示す。そしてより一般的には行為に伴うものあるいは、主語・目的語関係を除いてなんらかの仕方でそれに結びつくものを示す。与格はそれ故また**道具格**—（**随**）**伴格**それに**処格**の役割も果たす。

斜格の類は、それらの**一般的意味**に応じて様々の**時間的**および**空間的**関係をカバーする。しかしながら古典期の言語においては格のみでは、多様な空間関係を表わすには十分ではない：それらは常に**前置詞**の使用により明確化される (§270 および 274 参照)。前置詞は同様に時間関係を明確にすることが出来る (§275-278 参照)。

対格は空間および時間（**持続**）における**方向と拡がり**を示す。

属格は空間における**限界画定**（前置詞とともに、§247 参照）および時間における**限界画定**を、また由来（**奪格的属格**）を示す。

与格は空間および時間において**位置付け**（**処格的与格**）を示す。

いくつかの語は特別な語尾（接尾辞あるいは格を示す古い曲折語尾）を持ち、多様な空間関係を示す。かくして、以下の例のように、

οἶκαδε, Ἀθήναζε, θύραζε, ἄλλσε,	家へ、アテナイへ、戸外へ、他（の方向）へ
οἴκοθεν, Ἀθήνηθεν, θύραθεν, ἄλλοθεν,	家から、アテナイから、戸外から、他から（由来）
οἶκοι, Μαραθῶνι, Ἀθήνησι, θύρασι, ἄλλοθι,	家で、マラトンで、アテナイで、外で、他（の場所）で

呼格は言表行為の宛人に呼びかけながら直接に語りかけるのに用いられる。

一般に格は文の内部における名詞の様々の統辞上の機能を表すのに対して、呼格は文の統辞から独立してあり、言表行為において自律した機能を果す。確かに固有の格を示す曲折語尾を持たない：それは語の純粋な語幹（o- 曲用では特別の母音組織を伴う）と一致するか、あるいは主格と同じ形を持つ。その働きかけの機能は、言表の宛人へ向けたこの格を命令法へと近づける (§279 参照)。

219 格の主な用法の一覧表

主格	1. 主語	§	220
	主語の属詞		221
	同格化された限定辞および主語の同格		222
	2. 文外の主格		223
	3. 感嘆と訊問の主格		224
対格	1. 直接目的補語	§	226
	同格に置かれた限定辞および対格に置かれた同格		227
	対格に置かれた属詞		228
	2. 内的目的語の対格		229
	3. 限定の対格 ("ギリシア語対格")		230
	4. 対格に置かれた二つの補語を持つ動詞		231
	5. 不定法構文中の対格に置かれた主語		232
	6. ὤς が対格に置かれた分詞の言い回しに続いて		233
	7. 対格に置かれた感嘆的言い回し		234
	8. 方向の対格		235
	9. 拡がりと持続の対格		236
	10. 副詞的対格		237
属格	1. 連体詞的属格	§	239
	2. 材料の属格		240
	3. 中身の属格		241
	4. 評価の属格		242-243
	5. 感情評価の動詞を伴う原因の属格		244
	6. 違反と処罰の表現		245
	7. そこから一部が分離される全体を示す部分的属格		246
	8. 場所の節または副詞を伴う非奪格的属格		247
	9. 部分型の属格を大きな意味において支配する動詞と形容詞の範疇		248-252
	10. 時間の属格		253
	11. 絶対属格		254
	12. 感嘆文における属格		255
	13. 奪格的属格：由来、分離		256-257
	14. 行為者の補語の属格		258
	15. 比較の属格		259
与格	1. 動詞の行動への関与	§	261-262
	宛人と関与された人		261
	帰属関係（所有）		262
	2. 随伴と参与の与格		263-264
	随伴		263
	類似性、同等性、同一性		264
	3. 仕方の与格		265
	4. 道具の与格		266
	5. 処格的与格		267-268
	空間		267
	時間		268
呼格		§	269

格の主な用法例

ギリシア文における格の特別な用法をそれらの一般的意味からギリシア語の文において、つねに理解することができる。しかしながら、統辞的關係が、例えばフランス語におけると同様の分析に従って必ずしも理解されないという事実を考慮しなければならない。辞書にこれらの異なる場合の可能性については教える（動詞の被制格など）。

諸々の格の特有の諸用法は、ギリシア語の文においてはそれらの一般的な意味を基にして常に理解することは出来る。だがしかし、次の事実はこれを考慮しなければならない。すなわち、統辞論的な諸々の關係は常には、例えばフランス語におけると同様の分析にしたがっては理解されないのだという事実である。諸々の辞書が、これらの偶然的な相違に関しては、教えてくれる（動詞の目的語など）。

主格

220 1. 主語

[927, 938, 939]

- Ar. Av. 376: ἡ γὰρ εὐλάβεια σφάζει πάντα.
なぜなら慎重さはすべての事を救うのだから。
- E. frg. 55 Nauck: ἄδικον ὁ πλοῦτος.
不正なことである、富は。

221 主語の属性

- Hyp. Epit. 42: οἱ παρὰ τῶν Ἑλλήνων ἔπαινοι παῖδες αὐτῶν ἀθάνατοι ἔσσονται.
ギリシア人からの賞賛が彼らの不死なる子供たちとしてあることであろう。
- E. frg. 55 Nauck: ἄδικον ὁ πλοῦτος.
不正なことである、富は。
- D. 18. 46: νῦν κόλακες καὶ θεοὶς ἐχθροὶ καὶ τὰλλ' ἃ προσήκει πάντ' ἀκούουσιν.
今や、追従者たちや神々にとっての敵たちそしてそうした呼び名にふさわしい他のすべてのものとして呼ばれているのを彼らは耳にするのだ。
- S. OT 1068: ὦ δύσποτμ', εἴθε μήποτε γνούς ὅς εἶ.
不幸な方よ、願わくばあなた様が、あなた様が何者であるかを、決してお知りになりませんように！

属詞の統辞については、§198, §207-208 もまた参照

222 同格化された限定辞と主語の同格

[916]

- S. Ant. 1169: ζῆ τύραννον σχῆμ' ἔχων.
僭主の姿において生きよ。
- Pl. R. 1.327c: ὁ τε Πολέμαρχος ἦκε καὶ Ἀδείμαντος ὁ τοῦ Γλαύκωνος ἀδελφός.
ポレマルコスがやって来た。アデイマンτοςつまりグラウコンの兄もまた。

223 2. 文外の主格

主格は作品の見出しの中で περί と続く属格のような他の言い回しに平行して用いられる (§272 参照、 περί)。その用法は劇場作品の表題において一定である、そこではそれはしばしば登場人物またはコロスを指す。

[904c]

主格はまた固有名詞のみをあらわすために用いられる。例えば記念石碑上に、破片（陶片）などの上に刻まれる名。

Οιδίπους Τύραννος	オイディプス王（ソポクレスの悲劇の表題）
Πέρσαι	ペルシアの人々（アイスキュロスの悲劇の表題）
Ὅρνιθες	鳥（アリストパネスの喜劇の表題）
Περικλῆς Ξανθίππου	ペリクレス、クサンティッポスの（息子の）（陶片上）

224 3. 感嘆と呼びかけの主格 [1288]

主格は感嘆の言い回しにおいてまたは呼格に平行した呼びかけにおいて見る。後者は特に呼びかけが肯定であるときに、もっともしばしばには属詞的性格である時にそうである。

E. Hel. 1399:	ὦ καινὸς ἡμῖν πόσις [...]
	おお、私の新しい夫よ、...
E. Supp. 277:	ὦ φίλος, ὦ δοκιμώτατος Ἑλλάδι [...]
	おお友よ、ヘラスの地でもっとも名高き人よ、...

感嘆については対格 7、属格 12 もまた参照；呼びかけについては呼格、§ 269 参照。

225 対格 [1551-1562]

対格におかれた補語は、あるいは言表の動詞によって表わされる動作の対象であり、あるいは言表行為をもたらす思考の行為の対象である。前者では対格は直接目的補語の機能を印づける（対格 1 参照）。後者では特に考慮に入れられているものを明白にする。それで、言表領域を正確にする状況補語がより以上に重要である（対格 3 参照）。時に、しかしながら、この区別を維持することは困難である（対格 2, 4 および 5 参照）。

226 1. 直接目的補語 [919, 1553-1554]

Luc. VH 1. 6:	καθορῶμεν οὐ πόρρω νῆσον ὑψηλήν.
	我々は遠からぬところに高い島を見つける。
Th. 5. 26:	γέγραφε δὲ καὶ ταῦτα ὁ αὐτὸς Θεουκιδίδης Ἀθηναῖος.
	しかるに書くに至ったのである、それらのことどももまた、まさにアテーナイ人、トゥキューディデースその人が。
E. Heracl. 704-05:	τί πονεῖς ἄλλως ἢ σὲ μὲν βλάψει, σμικρὰ δ' ὀνήσει πόλιν ἡμετέραν;
	何故おまえは空しく骨折りするの？ 一方でおまえを害することを、他方ではほんの僅かしかわれわれのポリスを裨益せぬことどもを。
Pl. Men. 91e:	[...] Πρωταγόρας δὲ ἄρα ὅλην τὴν Ἑλλάδα ἐλάνθανεν διαφθειρῶν τοὺς συγγιγνομένους.
	プロタゴラスは、だがしかし、してみると、全ヘラスには気づかれなかったというわけだ、交わる人たちを墮落させながらにいて。

稀に、内的目的語の対格は形容詞または他の限定辞を伴わない。動詞観念を表現する名詞は時にそれにより具象的意味を持ち、外的目的語の機能に戻る。

- Ar. Pl. 517: **λήρον** ληρεῖς.
たわいのないことを君は言っている。
- Th. 6. 56: τοὺς **τὴν πομπήν** πέμψοντας
行列になって去っていく（死んでいく）だろう人々
(πέμπω: 送る、見送る； ἡ πομπή 送ること、見送る行為、行列)

時に動詞の代りに内的目的語を伴う形容詞的表現がある。その時これは特別化の対格に近い（対格3参照）。

- Pl. Ap. 22e: μήτε τι σοφὸς ὢν **τὴν ἐκείνων σοφίαν** μήτε ἀμαθὴς **τὴν ἀμαθίαν**
何か彼らの（持っている）知恵に関して賢明でもなく、また彼らの（持っている）無知に関して無知でもなくてありながら。

内的目的語の機能はまた形容詞または副詞的意味の中性の形容詞または指示代名詞によっても引受けられる（対格10および属格9, §252参照）。

- Aeschin. 3. 85: οὐ μὲν γὰρ, ὦ ἄδρες Ἀθηναῖοι, **πολλὰ καὶ μεγάλα** ἠδίκημένοι [...]
なぜなら、アテナイ人諸君よ、多くのかつ重大なことごとで不正を行ってしまったのであって...

230 3. 特別化の対格（ギリシア対格）

[1600-1605]

この対格は形容詞または動詞（あるいは同等の言い回し）の有効範囲を示す。ほとんどの場合、特別化の対格は身体のある部分、あるいは体力的または知的なある性質を示す。

- Ar. Av. 371: εἰ δὲ **τὴν φύσιν** μὲν ἐχθροὶ τὸν δὲ νοῦν εἰσιν φίλοι;
然るに生まれは敵であるとしても、心は彼らは友なのではありませんか？
- Pl. R. 7. 517a: διεφθαρμένος ἦκει **τὰ ὄμματα**.
目を彼は壊してしまった。
- Pl. R. 7. 515e: ἀλγεῖν **τὰ ὄμματα**
眼を悪くしている。
- Pl. R. 7. 514a: ἐν ταύτῃ ἐκ παίδων ὄντας ἐν δεσμοῖς καὶ **τὰ σκέλη** καὶ **τοὺς αὐχένας**
そこで子供のころから脚や首を鎖で繋がれて
- Pl. Phdr. 242c: οἱ **τὰ γράμματα** φαῦλοι
書字に関して下手な人たち

231 4. 対格におかれた二つの補語を持つ動詞

[1612-1633]

「依頼する・教える・隠す・着せるまたは脱がせる」の観念、あるいは派生したあるいは類比的観念を表現する動詞はギリシア語では二つの補語を対格において持つことがある。原則としてその補語は人と物とである。

- A. A. 1: Θεοὺς μὲν αἰτῶ τῶνδ' **ἀπαλλαγὴν** πόνων [...]
神々にまず私はお願いしよう、これらの労苦からの解放を。
- Pl. Smp. 201d: ἐμὲ **τὰ ἐρωτικά** ἐδίδαξεν.
この私に愛の事々を彼女は教えたのだ。
- Isoc. 4. 142: τοὺς **στρατιώτας** τὸν **μισθὸν** ἀπεστέρησεν.
兵達から給料を彼は奪った。

もし、受動的言い回しを用いるなら、人は動詞の主語となり二つ目の補語は対格に留まる：その時、それは特別化の対格に近づく（対格 3 参照）。

Pl. Mx. 236a: **μουσικὴν μὲν ὑπὸ Λάμπρου παιδευθεὶς, ῥητορικὴν δὲ ὑπ' Αντιφῶντος τοῦ Ῥαμνουσίου**

音楽はランプロスによって、修辞学はラムヌース区のアンティポーンによって教育されて

A. Pr. 761: **πρὸς τοῦ τύραννα σκῆπτρα** συληθήσεται;

誰によって、王の杖を彼は奪い取られたのか？

232 5. 不定法構文における対格に置かれた主語

[1972ff, 936]

不定法構文においては、主語と、もしもの場合には、その同格化された限定辞とその属詞とは対格に置かれる (§310 および不定法 3 参照、特に 3a および 3c、同様に 2, 4, 7, 8, 9)。

S. Aj. 1350: **τόν τοι τύραννον** εὐσεβεῖν οὐ ῥάδιον.

確かに僭主が敬虔であることは容易なことではない。

Pl. Grg. 467b: **οὐ φημι ποιεῖν αὐτοὺς ἄ βούλονται.**

私は肯定しないのだ、彼らが彼らの望んでいることをしているとは。

A. Eu. 837: **ἐμὲ παθεῖν** τάδε.

この私がそんな目に会うなんて。

Pl. Smp. 201a: **Εἶπον γάρ, φάναι τὸν Ἀγάθωνα.**

「確かにそういました」、とアガトーンは言った。(話者はここでは伝えられた会話を伝える)。

Isoc. 2. 15: **φιλόνηρον** εἶναι δεῖ καὶ φιλόπολιν.

人間好きでなければならない、そしてまたポリス好きでも。

発言のあるいは意見の動詞の主語がまた不定法の主語である時、主語は対格で繰り返されることはない。また、属詞があるとき、それは主格に置かれる（不定法 3c 参照）

233 6. ὥς と続く対格に置かれた分詞の言い回し

分詞 4g 参照

234 7. 対格におかれた感嘆の言い回し

[1596, 1599]

対格がしばしば省略的な感嘆の言い回しにおいて見られるが、それは特に神に祈願する時においてである。

Ar. Av. 274: **οὗτος ὦ σέ τοι.**

おお、ほう、てめえ！

Ar. Nu. 724: **νή τὸν Ποσειδῶ.**

ポセイドンにかけて！

Ar. Nu. 817: **οὐκ εὖ φρονεῖς, μὰ τὸν Δία τὸν Ὀλύμπιον.**

あなたは正気の沙汰じゃありませんぞ、オリュンポスのゼウスにかけて！

νή は肯定的強調の意味を持ち、μά は誓いの定式において用いられる。この二つの小辞は常に対格が続く。

感嘆については、また、主格 3 および属格 12 参照；呼びかけについては、呼格もまた参照。

235 8. 方向の対格

[1581, 1588]

対格は人の行くその場所を示すために用いられる。アッティカ散文においては、それはこの方向の観念を強調しかつ正確にする前置詞（εις, πρὸς, παρά など）によって義務的に先立たれる。方向の古い対格を前置詞なしに用いるのは、ただ詩の言語だけである。

- X. HG. 2. 2. 12: ἔπεμψαν αὐτοὺς εἰς Λακεδαίμονα.
彼らを彼らはラケダイモンへ派遣した。
- Pl. Prm. 126c: ἀλλ' εἰ δεῖ, ἴωμεν παρ' αὐτόν.
しかしそれが必要なら、彼のもとへ行こう。
- S. OT 151-53: ὦ Διὸς ἄδυεπές φάτι, τίς ποτε
τᾶς πολυχρόσου
Πυθῶνος ἀγλαὰς ἔβας
Θήβας;
おおゼウスのうまし言葉よ、誰とて黄金に富むピュトーからして輝かしきテーバイへと、
そなたはやって来たのか。

§218 および前置詞の要約復習表 §274 も参照

236 9. 拡がりと持続の対格

[1580-1587]

対格は、空間のあるいは時間のある部分をその拡がりにおいて示すために用いられる。

- Paus. 1. 1. 5: ἀπέχει δὲ σταδίου εἴκοσιν ἄκρα Κωλιάς.
然るに二十スタディオンの距離だけコーリアス岬は離れている。
- Luc. VH 1. 6: ἐχειμαζόμεθα ἡμέρας ἑννέα καὶ ἑβδομήκοντα.
七十九日間我々は嵐に翻弄された。
- Th. 6. 49: Μέγαρον ἀπέχοντα Συρακουσῶν οὔτε πλοῦν πολὺν οὔτε ὁδόν
メガラ、それはシュラクーサイから海路によっても陸路でも隔たつてはいなくて。

時間の表現も参照：要約表、§275。

237 10. 副詞的対格

[1606-1610]

明示の・外延のまたは他の意味を持ついくつかの対格は、副詞的表現に固定化している（しばしば中性）。

τί;	何故?
οὐδέν	何も～ない
πολύ	多く、非常に
τὸ κατ' ἐμέ	私としては
μακράν (言外に ὁδόν)	遠くに
τὸ λοιπόν	今後には
τοῦτον τὸν τρόπον	このやり方で
πρόφασιν	口実としては、表向きは
など	

中性の形容詞または指示代名詞を副詞的な意味で見出しうるが、それは内的な目的語の対格に対応してのことである。(対格 2 参照)。

238 属格

[1289]

属格は名詞限定辞の機能（連体詞的属格）においてあるいは補語機能において用いられる。

連体詞的属格は二つの実在間の関係を表わすが、それは動詞的なすべての動作の外においてである。

補語のように、属格は動作の観念を一それによって二つの語が関係の中に入る—予想する。それは特に全体に対する部分を、あるいは部分に対して全体を示すために用いられる（広義の部分属格）。属格の多くの用法において、関係のこの一般的観念は分離のそれと密接に関連する。分離はギリシア語においては属格によっても表わされる（奪格的属格）。そして、優勢な観念を見分けるのはしばしば困難である。いずれにせよ、属格は常に相互依存関係の表現である。

属格はしばしば意味を明確にする前置詞に関連する (§270-274 参照)。

239 1. 連体詞的属格

[1290-1296]

Th. 8. 43: αἱ τῶν Πελοποννησίων νῆες
ペロポネソスの船、ペロポネソス船

Th. 1. 50: ὁ κατὰ γῆν στρατός τῶν βαρβάρων
蛮族の陸上部隊

Th. 2. 34: Περικλῆς ὁ Ξανθίππου
ペリクレーズ、クサンチッポスの

それが限定する名詞に関する連体詞的属格の位置については、§209 参照

もし動作の観念を示す名詞を限定するならば、連体詞的属格は動作の主語（主語的属格）またはその目的語（目的語的属格）を示す。

Pl. R. 7. 517b: τὴν εἰς τὸν νοητὸν τόπον τῆς ψυχῆς ἀνοδὸν
叡智的な所への魂の上昇

S. El. 358: τοῖς φονεῦσι τοῦ πατρὸς ξύνει.
あなたは我々の父を殺した者どもと一緒にいる。

属格はしばしば所有関係を示す。

[1297]

Ar. Ach. 432: Τηλέφου ῥακάματα
テーレポスの襤褸（ぼろ）着

§71 も参照。

属格は属詞機能を引受けることがある。

[1303]

S. Ant. 737: πόλις γὰρ οὐκ ἔσθ' ἦτις ἀνδρός ἐσθ' ἑνός.
なぜならポリスは決してただ一人の人間のものではないのですから。

以下の型の表現に注意：

φίλου ἐστί (Arist.) それは友のものである。
ἀγαθῆς γυναικός ἐστί (Philem.) それは善き女のものである。

Arist. Rh. 1417a26: τὸ μὲν γὰρ φρονίμου, τὸ δὲ ἀγαθοῦ.
一方（の言葉）は賢明な人のものであるが、他方は優れた人が口にする事だから。

240 2. 材料の属格 [1323,1324]

Paus. 2. 2. 8: ἄγαλμα ὀρθὸν Παρίου λίθου
パロスの大理石でできた立像
Paus. 1. 3. 1: ἀγάλματα ὀπτῆς γῆς
焼いた土でできた諸々の像
Pl. Smp. 212e: κιττοῦ τέ τινα στεφάνῳ δασεῖ καὶ ἴων
キツタとスマレで出来たふさふさとした花冠をもって

材料の属格は原則として形容語の位置にはない。

材料はまたしばしば派生形容詞によって表わされる (§193 参照)。

241 3. 中身の属格 [1323, 1324]

以下のような動詞に依存した属格が見られる。

πληρῶω, (ἐμ)πίμπλημι 満たす
πλήθειν, γέμειν ～で満ちている

また以下の形容詞に依存した属格

πλήρης, ἀνάπλεως, μεστός ～で充ちた
など。

Pl. Criti. 117e: ὁ μέγιστος λιμὴν ἔγεμεν πλοίων καὶ ἐμπόρων ἀφικνουμένων πάντοθεν.
主な港は至る所から来る船と商人で一杯だった。

Ar. Nu. 383: νεφέλας ὕδατος μεστάς
水で充ちた雲

4. 評価の属格

242 単位の属格 [1325]

Th. 7. 43. 2: πέντε ἡμερῶν σιτία
五日分の糧食
X. An. 2. 6. 20: ἦν ἐτῶν ὡς τριάκοντα.
彼は凡そ三十歳であった。

243 価格の属格

[1336, 1372]

Alex. frg. 189 Kock: **τριωβόλου** κρεῖσκον ἀστεῖον πάνυ
ὔειον.

三オボロス分の豚肉の非常に結構な塊。

Ar. Pl. 883-84: φορῶ γὰρ πριάμενος

τὸν δακτύλιον τονδί παρ' Εὐδάμου **δραχμῆς**.

というのはエウダモスのところで一ドラクマで買ってこの指輪を私ははめているのだから。

S. Ant. 1170-71: **τᾶλλ' ἐγὼ καπνοῦ σκιᾶς**

οὐκ ἂν πριάμην ἀνδρὶ.

他の事々に関しては、この私は煙の影でさえもその男に対しては買うことはないだろう。

Pl. Ap. 20b: **πόσου** διδάσκει; -πέντε μνῶν.

いくらで彼は教えるのか?—五ムナだ。

価格の属格は原則として形容語の位置にはない。

περὶ πολλοῦ ποιῆσθαι の表現については、§272, περὶ 参照

244 5. 心情の評価の動詞を伴う原因の属格

[1405-1409]

属格が心情の動詞とともに、特に感情的評価とともに見出されるが、それは判断あるいは心情を動機づけるものを明示するためであり、それら判断や心情は或る人や或るものに関しているのである。以下のような動詞が重要である。

θαυμάζω, ἄγαμαι	驚く
ζηλόω	賞賛する、妬む
ἐλεέω, οἰκτίρω	憐れむ
ὀργίζομαι, χαλεπαίνω	怒っている
στυγέω	嫌う
εὐδαιμονίζω, μακαρίζω	幸いと思う

S. El. 1027: **ζηλῶ σε τοῦ νοῦ, τῆς δὲ δειλίας** στυγῶ.

私はあなたの理性が羨ましい、でもあなたの卑怯さは嫌いです。

Pl. R. 7. 516c: οὐκ ἂν οἶει αὐτὸν μὲν εὐδαιμονίζειν **τῆς μεταβολῆς**, τοὺς δὲ ἐλεεῖν;

彼自身がその変化を幸いとし、彼ら(地下の囚人たち)を憐れむだろうということを君は思わないかね?

245 6. 違反と罰の表現

[1375-1379]

属格を以下の名詞に依存して違反と罰の表現に用いる:

ἡ δίκη	(私的) 司法上の行為、罰
ἡ γραφή	(公的) 司法上の行為
ἡ αἰτία	告発簡条
など。	

以下の動詞とともに：

αἰτιάομαι, διώκω, γράφομαι	告発する、罪を負わせる
φεύγω	罪を負わされる
κρίνω	訴訟を裁く、有罪の宣告をする、訴える
など。	

同様に、以下の形容詞とともに：

αἷτιος	罪のある
ἀναίτιος	無実の
など。	

D. 21. 32: γραφὴν ὕβρεως καὶ δίκην κακῆγορίας ἰδίαν φεύξεται.
侮辱の公的訴訟を、そして、名誉毀損の私的訴訟を彼は加えられるだろう。

Ar. Eq. 368: διώξομαι σε δειλίας.
あんたを臆病の罪で訴えるぞ。

246 7. そこから部分を分離する全体を示す部分属格

[1306ff, 1341ff]

属格の多くの用法が全体に対する部分の関係の観念を示すが、そこから部分を分離する全体を示す属格に**部分詞**の名称を特に与える。当然のことに、この属格は分離の属格または奪格的属格から区別することはしばしば困難である（属格 13 参照）。

Pl. Phdr. 253d: τῶν δὲ δὴ ἵππων ὁ μὲν, φαμέν, ἀγαθός, ὁ δ' οὐ.
二頭の馬のうち一頭は、我々は言うのだが、良く、他の一頭はそうではない。

Ar. Pl. 490: τοὺς χρηστοὺς τῶν ἀνθρώπων εὖ πράττειν ἐστὶ δίκαιον.
人間のうちの有為の人々が幸せであるということは正しい。

部分属格は形容詞の位置に原則として決してない。

部分属格は特に**最上級**とともに見られる (§63 参照)。

D. 19. 136: ὁ μὲν δῆμος ἐστὶν ἀσταθμητότατον πρᾶγμα τῶν πάντων.
民衆は全ての中で最も不安定なものである。

Th. 1. 1: τὸν πόλεμον ἐλπίσας μέγαν τε ἔσεσθαι καὶ ἀξιολογώτατον τῶν προγεγενημένων
戦争が大きなものとして、そしてまた先立って生じたものの中でも最も語るに値するものであらんことを希望して

この最後の例については、比較の属格もまた参照（属格 15）。

関与の観念を表す動詞あるいは他の言い回しを伴う部分属格が以下のように見られる：

μετέχω, κοινωνέω, μέτεστί μοι	分け前を持つ
μεταλαμβάνω	分け前を取る
μεταδίδωμι	分配する
μέτοχος	分け前を持った
など。	

Th. 1. 39: ὑμεῖς τῆς δυνάμεως αὐτῶν τότε οὐ μεταλαβόντες τῆς ὠφελίας νῦν μεταδώσετε.
諸君は彼らからの助力をかつて受けなかったが、今、利益を分け与えようとしている。

属格においてそれを味わうものそして利益をそれから得るものを以下の動詞で示す。 [1353]

γεύομαι 味わう
ὀνίναμαι, ἀπολαύω 享受する、～から利益を得る

Pl. Grg. 492b: ἀπολαύειν τῶν ἀγαθῶν
諸々の善きこと (の一部) を享受する
(部分属格を含む奪格的観念は動詞 ἀπολαύω において動詞接頭辞 ἀπο- によって明示される)

同様に、飲食動作を示す動詞 (ἐσθίω, πίνω など) で、対格の代わりに属格を見る。食べ物または飲み物が全体の中の一部分であるという事を意味しようとする時にである。

Ar. Nu. 121: οὐκ ἄρα μὰ τὴν Δήμητρα τῶν γ' ἐμῶν ἔδει.
それなら、デーメーテルにかけて、お前はわしの財産 (の中の一部) は食えないぞ。

しかし :

Antiph. 68 Kock: ἰχθὺν τίν' ἠδέως φάγοις ἄν;
どの魚を好んで君は食べるのか?

247 8. 前置詞または場所の副詞を伴う非奪格的属格 [1437-1443]

場所の前置詞 (διά, ἐπί, κατά, περί, πρό, ὑπέρ, ὑπό: §272 参照) といくつかの副詞は属格の意味を持たない属格で成り立つ (属格 13 参照) が、その属格は部分と限定の両方の意味に近い。

Ar. Nu. 138: σύγγνωθί μοι τηλοῦ γὰρ οἰκῶν τῶν ἀγρῶν.
すいません。なにしろ私は田舎から遠くに住んでいるものですから。

E. HF 606: εἴμ' ἔσω δόμων.
家へ私は入ります。

δεξιᾶς 右手から、真っ直ぐに : もまた参照。

属格の前置詞 ἐν と εἰς とを「～の家で」を示すために伴った用法を示しうるのはこのようにしてである。また、言外の語 (δόμος, οἰκία など) に依存する所有の属格が重要であろう。

Hyp. Epit. 43: εἰ δ' ἔστιν αἴσθησις ἐν Αἴδου [...]
もし、ハデスの所に知覚能力があれば...

Ar. Nu. 964: βαδίζειν εἰς κιθαριστοῦ
音楽の先生のもとへ行くこと

9. 広義の部分型の属格を支配する動詞と形容詞の範疇

一般に接触または部分関係（関与）の観念を示す多くの動詞で属格に置かれる補語が見られる：

248 接触の動詞、以下のような [1345, 1416]

ἄπτομαι	触る、触れる
λαμβάνω, λαμβάνομαι	取る、つかむ
ἔχω, ἔχομαι	持つ
τυγχάνω	出会う、手に入れる
その反対 ἀμαρτάνω	～を手に入れそこなう
ἄρχω	～を初めて～する、指揮する (可能の動詞 § 252 も参照)
ἀρχομαι	始める

Luc. Tim. 30: καί μοι ἔπου ἐχόμενος τῆς χλαμύδος.

そして私に続け、マントを身につけながら。

Hyp. Epit. 43: πλείστης κηδεμονίας ὑπὸ τοῦ δαιμονίου τυγχάνειν

大きな世話を神性の側から受け入れること

Th. 1. 53: ἀδικεῖτε, ὦ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, πολέμου ἄρχοντες.

けしからん、諸君こそ不正をなしているのだ、アテーナイ人たちよ、戦争をはじめていて。

249 願望と狙いの動詞、以下のような [1349, 1416]

ἐπιθυμέω, ἐράω, ὀρέγομαι, ἐφίεμαι 望む

X. Cyr. 5. 1. 10: οὐκ ἐρᾷ ἀδελφὸς ἀδελφῆς.

兄は妹を恋しない。

Pl. Smp. 180a: Αἰσχύλος δὲ φλυαρεῖ φάσκων Ἀχιλλέα Πατρόκλου ἐρᾶν.

アイスキュロスは馬鹿げたことを言っている、アキレウスがパトロクロスを愛していると言いながら。

Arist. Metaph. 980a: πάντες ἄνθρωποι τοῦ εἰδέναι ὀρέγονται φύσει.

全ての人々は知りたいと本性によって憧れる。

250 気遣い（時にその反対語）の動詞と形容詞、以下のような [1356, 1420]

φροντίζω, ἐπιμέλομαι, μέλει μοι, κήδομαι	心配する、気遣う
ἐμελέω, ὀλιγορέω	無視する、軽んずる
ἐπιμελής	気遣っているところの
ἀμελής	無視するところの、無関心な

Ar. Nu. 125: ἀλλ' εἴσειμι, σοῦ δ' οὐ φροντιῶ.

では、僕は中へ入ります。あなたのことは気にかけないでしょう。

Arist. Rh. 1417a30: μάλλον τοῦ ἀδελφοῦ ἐκίδητο ἢ ἀνδρὸς ἢ τέκνων.

先ず兄のことを彼女（アンティゴネーのことである）は心にかけて、夫や子供のことよりも。

231 感覚的・知的知覚の動詞・形容詞、以下のような

[1361-1368, 1421]

αἰσθάνομαι	知覚する、理解する
πυνθάνομαι	問い合わせる
ἀναμνησκώ	思い出を思い出す
μέμνημαι, ἀναμνησκομαι	思い出す
ἐπιλανθάνομαι	忘れる
ἀκούω	聞く、分かる
ὀσφαινομαι	臭いを感じる
ἔμπειρος	経験あるところの
ἄπειρος	経験のない
ἐπιστήμων	知っているところの
μνήμων	思い出すところの
ἀμνήμων	忘れやすい

X. Mem. 4. 4. 11: ἤσθησαι οὖν πώποτε μου ἢ ψευδομαρτυροῦντος ἢ συκοφαντοῦντος;
 さればこれまでに君は見たことがあるのかね、私があるいは偽証をし、あるいは密告したりしているところを？

Pl. R. 7. 516c: ἀναμνησκομένον αὐτὸν τῆς πρώτης οἰκίσεως καὶ τῆς ἐκεῖ σοφίας καὶ τῶν τότε συνδεσμοτῶν
 彼は最初の住まいとそこでの知恵、そしてその時一緒に鎖でつながれていた人々を思い出しながら

Ar. Lys. 619: καὶ μάλιστ' ὀσφραίνομαι τῆς Ἰππίου τυραννίδος.
 そしてとりわけ、私はヒッピアスの僭主制の臭いを感じる。

ἀκούω と πυνθάνομαι の動詞とともに、属格は人が了解するものの源（この属格はこのように奪格的属格に極めて近い）を示す。同様に、それについて噂を聞くその人・物を示す。動詞 ἀκούω が「従う」の強い意味を持つ時、同様に属格が見られる。反対に聞かれることは対格に置かれる。

S. Ph. 595-96: καὶ ταῦτ' Ἀχαιοὶ πάντες ἤκουον σαφῶς
 Ὀδυσσέως λέγοντος.
 そして、全てのアカイア人はオデュッセウスがそれを言うのをはっきり聞いていた。

S. El. 1004: [...] εἴ τις τοῦσδ' ἀκούσεται λόγους.
 もし誰かがこの話しを聞くようなら、

視覚的知覚の動詞に関しては、それらは対格を支配する。

232 命令または優越性（およびその反義語）の動詞および形容詞、以下のような

[1370, 1423]

ἄρχω	支配する
κρατέω	優位である
βασιλεύω	王である
τυραννεύω, τυραννέω	権力を行使する、僭主である
ὑπερέχω, περίεμι	支配する、勝る
περιγίγνομαι	凌ぐ
διαφέρω	他と異なる
πλεονεκτέω	余計に持つ
ήττάομαι	下位にある、打ち負かされる
λείπομαι	後に残されている
ἐγκρατής, καρτερός	～の主人である

より特別に、優越性（または劣等性）観念を示す動詞は、実際、比較の属格を支配する（属格 15 参照）。動詞 διαφέρω に関しては、実際、奪格的属格を支配する（属格 13 参照）。

Th. 1. 4.: τῆς νῦν Ἑλληνικῆς θαλάσσης ἐπὶ πλεῖστον ἐκράτησε καὶ τῶν Κυκλάδων νήσων ἦρξε.

今ギリシアの海をほとんど彼は制覇した、そしてキュクラデス諸島を支配した。

Isoc. 9. 18: ἐν τούτοις τοῖς κινδύνοις Ἀχιλλεὺς μὲν ἀπάντων διήνεγκεν [...].

これらの危険の中でアキレウスは全ての人々を凌いだ。

Isoc. 3. 39: πρὸς δὲ τούτοις τῶν μὲν ἄλλων πράξεων ἑώρων ἐγκρατεῖς τοὺς πολλοὺς γιγνομένους, τῶν δ' ἐπιθυμιῶν τῶν περὶ τοὺς παῖδας καὶ τὰς γυναῖκας καὶ τοὺς βελτίστους ἠττωμένους.

然るにそれらに加えて、他の諸々の行為をば多くの人がよく克服しているのを見ながらも、他方、子供たちや女たちを巡っての諸々の欲望については最善の人でさえも打ち負かされるのを見た。

広義の部分属格を支配する動詞とともに、属格に代りに**対格**が見られる。補語が**中性代名詞**または**中性形容詞**である時である（対格 2 参照）。

οὐδὲν αἰσθάνονται.
πολλὰ αἰσθάνονται.

彼らは何も理解していない。
彼らは多くのことを理解している。

253 10. 時間の属格

[1444-1447]

属格はその内側で出来事が起こる期間を示す（与格との違いは、与格は正確な瞬間を示す；与格 5 参照）。

Ar. Nu. 8-9: Ἄλλ' οὐδ' ὁ χρηστὸς οὐτοσὶ νεανίας ἐγείρεται τῆς νυκτός.

いや、この有為の若者でさえ夜の間目覚めていない。

Th. 3. 1: τοῦ δ' ἐπιγιγνομένου θέρους Πελοποννήσιοι καὶ οἱ ξύμμαχοι ἅμα τῷ σίτῳ ἀκμάζοντι ἐστράτευσαν ἐς τὴν Ἀττικὴν.

続く夏、ペロポネーソス人とその同盟者たちは、小麦が熟してゆくとともに、アッティカに侵入した。

時間の表現：要約表 §276 もまた参照

254 11. 絶対属格

[2058, 2070-2075]

分詞 6 参照。

255 12. 感嘆文中の属格

[1405-1409]

感嘆・憤慨または驚きの表現は属格に置かれることがある（§244 参照）。冠詞または形容語によって定義される名詞が本質的に重要である。

Ar. Nu. 153: ὦ Ζεῦ βασιλεῦ, τῆς λεπτότητος τῶν φρενῶν.
おおゼウスよ、大王よ、その心の何たる精妙ぞ！

Pl. Euthd. 303a: πυππᾶξ ὦ Ἡράκλεις, ἔφη, καλοῦ λόγου.
驚いた、ヘーラクレスよ、彼は言った、何と素晴らしい演説であろうか！

256 13. 奪格的属格：由来・分離

[1391-1411, 1298, 1427]

属格は同様に由来または分離の観念を表わす。それは前置詞（ἀπό, ἐξ, παρά など）によって正確にされ、または対応する動詞接頭辞の助けで複合された動詞によって支配される。

時に前置詞なしに由来の属格を見るのは詩のなかでしかない、動きの動詞とともにである。

§218, 238 および前置詞の要約復習表 §274 もまた参照。

Luc. VH 1. 5: ὁμηθεὶς γὰρ ποτε ἀπὸ Ἡρακλείων στηλῶν [...]

まさしく、ある日ヘーラクレスの柱から出発して

Pl. Phdr. 227a: ὦ φίλε Φαῖδρε, ποῖ δὴ καὶ πόθεν; - παρὰ Λυσίου, ὦ Σώκρατες, τοῦ Κεφάλου.

親愛なるパイドロスよ、君はそれでどこへ行き、何処から来たのか？—ソークラテースよ、ケパロスの息子のリュシオスの所から（私は来ました）。

E. Med. 214: Κορίνθιαι γυναῖκες, ἐξῆλθον δόμων [...]

コリントスの女達よ、宮殿から私は出て来ました。

E. Med. 706: Κρέων μ' ἐλαύνει φυγάδα γῆς Κορινθίας.

クレオンは私をコリントスの地から追放された者として追い立てる。

257

[1391-1400]

また属格を分離または欠如の観念を表わす動詞（または形容詞）に従属して用いる。以下のように。

στερέω	奪う
χωρίζω	分ける
εἴργω, κωλύω	人を世間から遠ざける、妨げる
παύω	止めさせる
παύομαι, λήγω	止める
(ἀπ)αλλάττω	解放する
ἀπέχομαι	止める、差し控える
ἀπορέω	～がない
δέομαι, δεῖ μοι	～する必要がある
ολίγου, μικροῦ δεῖν (絶対不定法)	もう少しで～する所だった
κενός	空の
γυμνός	剥ぎ取られた
ἐνδεής	～を欠いた、必要とする

Ar. Nu. 1074: καίτοι τί σοι ζῆν ἄξιον, **τούτων** ἐὰν στερηθῆς;

とはいえ君には生きていることは何の価値があるのだろうか、それらのものを君が奪われたのなら？

Pl. Smp. 188e: **τῆς** λυγγὸς πέπαυσαι.

君のしゃっくりはもう止まっているんだ。

Hyp. Epit. 43: ἀπηλλαγμένοι εἰσὶ **νόσων** καὶ λύπης.

病と苦悩から彼らは解放されている。

Pl. R. 7. 516a: **συνηθείας** δὴ οἶμαι δέοιτ' ἄν, εἰ μέλλοι τὰ ἄνω ὄψεσθαι.
まさしく慣れが必要なのだ、私の思うに、もし彼が上方のものを見ようとするなら。

E. Hec. 229-30: **ἀγῶν** μέγας,
πλήρης στεναγμῶν οὐδὲ **δακρύων** κενός.
それは大きな試練であり、それは呻きに満ち、また涙も空ではない

動詞 δέομαι は「～に～を頼む」の意味においてはまた人物の属格（由来の属格）でもって構成される。

258 14. 行為者の補語の属格 [1491-1493]

行為者の補語の属格は奪格型である。そのことをちょうどそれを導くいくつかの前置詞がそれを表わしているようにである。ὕπὸ（最も多い）, ἀπὸ, διὰ, ἐξ, παρὰ, πρὸς (§272 および 274 参照)

§95 もまた参照。

259 15. 比較の属格 [1401-1404]

比較級とともに、比較の二番目の語は属格に置かれて表わされる（奪格型の属格）。

§63 もまた参照。

Ar. Nu. 1050: ἐγὼ μὲν οὐδέν' **Ἡρακλέους** βελτίον' ἄνδρα κρίνω.
この私はヘーラクレスよりすぐれた人間はいないと思量する。

Pl. Smp. 180b: θειότερον γὰρ ἐραστής **παιδικῶν** ἔνθεος γὰρ ἐστι.
恋する男はまことに稚児より神的である。何故なら、彼は神がかりだから。

260 与格 [1450-1452, 1459, 1503, 1521, 1530]

与格は動作に関与した人物（時として物）の格、とりわけ宛人の資格である。またより一般的には主語・目的語の関係以外に行為において巻き込まれるもののそれである。かくして、与格は動作の道具または同伴（**道具格**, **随伴格**）を示す。また、動詞動作が位置決定される場所または時間を示す（**処格**）。

与格はしばしば前置詞に関連付けられる。前置詞はその意味を正確にする。

261 1. 動詞動作への関わり

[1451-1452, 1474]

宛人と関与する人

- Ar. Ach. 414-15: Εὐριπίδη,
 δός μοι ῥάκιόν τι τοῦ παλαιῦ δράματος.
 エウリピデースよ、僕にくれよ、君の古い悲劇の何がしかの襤褸切れを。
- S. Aj. 293: γύναι, γυναιξὶ κόσμον ἢ σιγῇ φέρει.
 女よ、女たちに飾りを沈黙がもたらすのだ。(テクメーッサ)
- Ar. Nu. 889-90: χώρει δευρὶ, δεῖξον σαυτὸν
τοῖσι θεαταῖς.
 ここから進み出よ、お前自身を観衆に示すのだ! (正論)
- E. IA 79: χρὴ βοηθεῖν τοῖσιν ἡδικοημένοις.
 不正を蒙った人々には助けなければならない。
- Ar. Nu. 127: ἀλλ' εὐξάμενος τοῖσιν θεοῖς διδάξομαι.
 ところでしかし、神々に祈った上で私は学ぼう。
- E. Or. 108: ἐς ὄχλον ἔρπειν παρθένοισιν οὐ καλόν.
 群集の中へ入ってゆくのは乙女たちにとって好ましくありません。
- Hyp. Epit. 42: ἢ τῆς πατρίδος εὐνοία ἐπίτροπος αὐτοῖς τῶν παιδῶν καταστήσεται.
 祖国の好意が彼らにとっては子供の後見人のように確立されるだろう。
- Ar. Nu. 107: τούτων γενοῦ μοι σχασάμενος τὴν ἵππικὴν.
 そういった人々の一人に私のためになってくれ、馬術は放っておいて。

与格に置かれた1人称代名詞は言表に関して話者の感情的関り合いを示すことがある(倫理的与格)。

- Pl. Hp. Ma. 286c: πόθεν δέ μοι σύ, ἔφη, ὦ Σώκρατες, οἶσθα ὅποια καλὰ καὶ αἰσχροῦ;
 然るにどこからなのだ、私にとっては(気になるのだが)、彼は言った、ソークラテースよ、君は知っているのか、どのようなものが美であり醜であるかを?

義務の動詞的形容詞とともに、一般的にはその人に対して義務がかかっているその人を示す与格を見る。受動相完了とともに、動作の結果を手にした人を示す与格を見る。二つのケースにおいて、与格は同時に動作の行為者を示す (§95 参照)。

[1488-1494]

- X. An. 3. 1. 35: ἡμῖν δέ γε οἶμαι πάντα ποιητέα [...].
 だがとにかくこの我々にとっては、思うに、全てがなされるべきのだ。
- Hyp. Eux. 14: τὰ γὰρ πεπραγμένα αὐτῷ δεινὰ ἔστι.
 何故なら彼によってなされた事々は恐ろしい。
- Isoc. 8. 39: πολλὰι θεραπείαι καὶ παντοδαπαὶ τοῖς ἰατροῖς εὗρηται.
 多くのそしてあらゆる治療が医師たちによって発見された。

262 帰属(所有)

[1476-1480]

- X. An. 1. 2. 7: ἐνταῦθα Κύρω βασιλεία ἦν καὶ παράδεισος μέγας ἀγρίων θηρίων πλήρης.
 そこにはキューロスにとっての宮殿とそして野生の獣で満たされた大きな公園があった。
- Pl. Prt. 315e: ἔδοξα ἀκοῦσαι ὄνομα αὐτῷ εἶναι Ἀγάθωνα.
 聞いたと私は思った、彼にとって名前はアガトーンであると。
- S. OT 774: ἐμοὶ πατὴρ μὲν Πόλυβος ἦν Κορίνθιος [...].
 この私には父といえば、それはコリントスのポリュボスであった。

§70-71 も参照

詩において、あるいは呼格とともに、与格におかれた人称代名詞がしばしばみられる。すなわち、一般に**血族関係**を示す名詞にすぐに結び付けられてである。

- E. Hel. 340: τί μοι πόσις μέλεος ἔτλα;
 何を私にとっての不幸な婿はあえて堪えていたのか？
- E. Alc. 313: σὺ δ', ὦ τέκνον μοι [...].
 然るにそなたは、私にとっての子よ、....

2. 随伴と関連の与格

[1521-1529]

263 随伴

[1524]

一般に随伴の観念は**前置詞の助け**を借りて表現される。**σύν (ξύν)** と与格、或いは **μετά** と属格 (§272 参照)。

しかしながら、**与格のみ**が随伴の観念を示す動詞とともに見られる。随伴するまたは関連付けられた人（時に物）を示すためである。

ἀκολουθέω, ἔπομαι	伴う, 続く
ὀμιλέω	交際する
σπένδομαι	〜と休戦を結ぶ
κοινωνέω, μετέχω	分かち合う, 〜と共有する

- A. Pers. 753-54: ταυτά τοι κακοῖς ὀμιλῶν ἀνδράσιν διδάσκειται
 θούριος Ξέρξης.
 それらを悪しき者どもと交わりながら、怒れるクセルクセスが学ぶのです。

αὐτός によって**強調された与格**は一あるいは**与格単独**（軍領域において特別な表現中では）であっても一また随伴の観念を表わすことができる。実際しばしば道具の与格にそれを擬することができる（与格4参照）。

- X. Cyr. 3. 3. 40: τέλος εἶπεν ἀπιόντας ἀριστᾶν ἐστεφανωμένους καὶ σπονδὰς ποιησαμένους
 ἤκειν εἰς τὰς τάξεις αὐτοῖς στεφάνοις.
 最後に、彼は言った、冠とともに離れて行って食事をし、灌奠をして、戦列に戻ることを冠（の連中）に。
- Th. 1. 61: ἐπορεύοντο κατὰ γῆν πρὸς τὴν Ποτειδαίαν τρισχιλίους μὲν ὀπίταις ἑαυτῶν,
 ἵππευσι δὲ ἑξακοσίους Μακεδόνων.
 陸路でポテイダイアに向い、一方で彼ら自身の三千の重装歩兵と他方マケドニアの六百の騎士を伴い彼らは出発した。

264 類似性・同等性・同一性

[1523]

この与格の用法は随伴の与格として理解される。それが**関連の観念**を示すことにおいてである。それは以下の表現で用いられる。

ἔοικα	似ている
εἰκάζω	似せる
ὀμοιώω	同じものと見る, 例える
ὅμοιος	似ている
ἴσος	等しい
ὁ αὐτός	同じ者 (§ 67 参照)

- Ar. Nu. 185-86: τῷ σοι δοκοῦσιν εἰκέναι:
- τοῖς ἐκ Πύλου ληφθεῖσι, τοῖς Λακωνικοῖς.
 一何に彼らは似ているとあなたには思われますか?—ピュロスからの捕らわれたラコーニコス (スパル
 タ人) に。
- Pl. R. 7. 515a: ἄτοπον, ἔφη, λέγεις εἰκόνα καὶ δεσμώτας ἀτόπους. ὁμοίους ἡμῖν, ἦν δ' ἐγώ.
 奇妙なたとえをあなたは語っておられる, そして奇妙な囚人を, 彼は言った。我々に似た者たちを私は
 語っている。
- Pl. Prm. 140b: οὔτε ἴσον οὔτε ἄνισον ἔσται οὔτε **ἑαυτῷ** οὔτε **ἄλλῳ**.
 それは等しくもないし等しくなくもない, それ自身にとっても他のものにとっても。
- Luc. VH 1. 5: πεντήκοντα δὲ τῶν ἡλικιωτῶν προσεποιήσαμην τὴν αὐτὴν **ἐμοὶ** γνώμην ἔχοντας.
 同じ年頃の五十人—この私と同じ考えを持っている—を味方にした。

類似性または同一性を示す表現を伴う比較の二番目の語については, §63 および 348, καὶ 3 も参照。

265 3. 仕方の与格

[1513-1516, 1527]

この与格の用法は随伴の与格 (与格 2 参照) と道具の与格 (与格 4 参照) を同時に持つ。前置詞 σύν を用いて明確にされる。

- E. Hipp. 902-03: κραυγῆς ἀκούσας σῆς ἀφικόμην, πάτερ,
σπουδῆ.
 あなたの嘆きを聞いた上で, 父よ, 私は急いでやって来た。
- A. Pr. 14-15: ἐγὼ δ' ἄτολμός εἰμι συγγενῆ θεὸν
 δῆσαι **βία** φάραγγι πρὸς δυσχειμέρω.
 然るにこの私は身内の神を嵐で叩かれた鋭鋒に力づくで鎖につなぐ勇氣は持たない。
- E. Or.136-37: **ἡσύχω ποδὶ**
 χωρεῖτε, μὴ ψοφεῖτε, μηδ' ἔστω κτύπος.
 進みなさい, 物音を立てないで, 足音も立てないで。
- S. El. 1041: τί δ'; οὐ δοκῶ σοι ταῦτα **σὺν δίκη** λέγειν;
 だがどうなんだ? 私はお前にはそれらのことを正義とともに語っているとは思えないのか?

与格によって引受けられた**仕方**の意味は時に**原因**のそれに近づくことがある。

- S. Ph. 1322-23: [...]ἐάν τε νουθετῆ τις **εὐνοία** λέγων
 στυγεῖς [...]
 例え誰かが好意によって (または好意でもって) 語りながらあなたに忠告してもあなたは嫌がる。

それに従って言表が有効であるその**視点**を示すために与格を見ることがある。

- Th. 3. 10: ἡμεῖς δὲ αὐτόνομοι δὴ ὄντες καὶ ἐλεύθεροι **τῷ ὀνόματι** ξυνεστρατεύσαμεν.
 しかるに我々は自立した人間であり, 名前において自由人として, 戦った。
- S. El. 357-58: μισεῖς μὲν **λόγῳ**,
ἔργῳ δὲ τοῖς φονεῦσι τοῦ πατρὸς ξύνει.
 言葉の上ではあなたは嫌う一方で, 他方しかし, 事実においてはあなたは我々の父の下手人と交わっているのです。

以下の表現に注意:

- | | |
|-------------------|----------------|
| πολλῷ (比較級が続く) | はるかに |
| ὀλίγῳ (比較級が続く) | わずかに, ほとんど〜でない |
| τοσοῦτῳ... ὅσῳ... | 〜するだけですます〜 |

270 前置詞および動詞接頭辞

[1636-1638, 449-454]

三つの斜格（対格，属格，与格）体系—それらはいくつかの統辞関係を区別する—は**動詞付加辞の使用**¹によって多様化され，明確にされる。これらの動詞付加辞は（特に空間・時間的な，もしくは空間的像から派生した）それぞれの意味をそれぞれの格の一般的語義領域内部において特定化する。それらは，今度は部分型の属格によって詳述される（§247 参照）。それらの意味に従って，動詞付加辞は一つ，二つまたは三つの斜格とともに用いられる。

起源において，大部分の動詞付加辞は自律的な**副詞**（とりわけ場所の）であった。依然としてホメロスの言語が，またより小規模にはヘーロドトスのイオーニア方言や古典期の詩の言語がそれを証言している。しかし，**古典期の散文**においては動詞付加辞は，稀な例外を除けば，固定した位置を引受ける。それらは，名詞連辞を，時には副詞を**前置詞**の機能で導入し，あるいは複合して諸々の語の，特に動詞の形成に**動詞接頭辞**の機能で参与する（§197 参照）。反対に，**古典期の韻文**においては，前置詞の機能をもつ動詞付加辞は比較的自由な位置を持ち続ける。特にそれは**後置**されることが多い。

大部分の前置詞の最終音節に見られる**鋭アクセント**は前置詞が導く連辞とともに塊を作るという事実に対応する。実際，語末にアクセントが置かれることは**無強勢**や**前倚辞形**に事実上等しいのである（§21, 22 参照）。それらが後置される時にだけ（詩，および例外的に散文で），前置詞はそれらの固有のアクセントを大部分の二音節については第一音節上に取り戻すのである。

最後に，依然として副詞として使われているいくつかの副詞は，固定した名詞表現あるいは接続詞として用いられ，また前置詞としても機能する。しかしながら，動詞接頭辞としては用いられない（§273 参照）。それらの大部分は属格とともに構成される（属格 8 参照）。

271 動詞接頭辞の助けによる複合動詞

[891]

動詞は**一個もしくは数個の動詞接頭辞**（§197 参照）の助けを借りて複合化される（cf. §197）。

このように複合化された動詞は動詞接頭辞の意味に対応する補語をとることがあるが，それはとりわけ同じ意味の前置詞によって，あるいは，類似の意味をもつ他の前置詞によって導かれる。時には補語は動詞接頭辞などによって—これが要求する格の形で—直接的に支配される。

動詞接頭辞はまた，**動詞付加辞の価値をたもって**その微細な意味合いをもたらすこともある。

ἀπέρχομαι ἀπὸ τοῦ βουλευτηρίου	評議会から私は立ち去る。
ἀπέρχομαι ἐκ τῆς χώρας	国から私は立ち去る。
συμπάσχουσιν ἀλλήλοις	互いに彼らは意気投合し合う。
ἀναβαίνω	私は上る。
ἀναμνησκόμαι	私は思い出す。

いくつかの動詞接頭辞（κατά, διά, ἀπό, ἐξ）は動詞に完了のニュアンスを与え，普通には自動詞である動詞を他動詞に変える動詞接頭辞もある（対格 1 参照）。

[1648, 1680]

¹ ここでは，**動詞接頭辞**の機能と**前置詞**の機能とを同じく引受ける文のこれらの要素を示すためには広義の語を採用するのが適当である。

272 動詞接頭辞としても用いられる前置詞リスト

[1681-1700]

以下のリストにおいては、前置詞および動詞接頭辞の主な用法しか与えられない。著者の例は一般の場合を表す。

ἀμφί 副詞的意味：「両側の、周りに」(ἀμφω「二つの」参照) [1681]

対格とともに：～の周りに、～の領域において(状況および方向；また時間的)

ἀμφί βωμόν (E.)	祭壇の周りで、祭壇で
οἱ ἀμφὶ Πρωταγοράν (Pl.)	プロータゴラスの周りの者たち＝門下生たち
ἀμφὶ Δωδώνην (A.)	ドーデーネーの傍らに
ἀμφὶ χλωρὰν ψάμαθον (S.)	蒼白い砂上のあたりに
ἀμφὶ Πλειάδων δύσιν (A.)	プレシアデースの沈む頃
ὁ ἀμφὶ τὸν χειμῶνα χρόνος (X.)	冬の季節
ἀμφὶ τὰς δώδεκα μυριάδας (X.)	約十二万の数で
τὰ ἀμφὶ τὴν δίαιταν (X.)	食料に関するもの

属格および与格とともに：ほとんど詩においてのみ

動詞接頭辞：同義

ἀμφιβάλλω	周りに投げる。
-----------	---------

ἀνά 副詞的意味：低い所から高い所へ、高い所で [1682]

対格とともに：特に叙事詩的、抒情詩的またイオーニアの言語：～に沿って登りながら、～の広がりの上で、～を横切って(時間的にも)

配分的意味(アッティカ方言では数とともにしばしば用いられる)

ἀνά τὸν ποταμόν (Hdt.)	川をさかのぼりながら
ἀνά τὴν Ἑλλάδα (Hdt.)	ギリシアの至る所で
ἀνά τὸ σκοτεινόν (Th.)	闇の中で
ἀνά ἑκατόν (X.)	百人ずつ群をなして
ἀνά πᾶσαν ἡμέρην (Hdt.)	毎日

属格とともに：ホメーロスの言語：アッティカ方言では非常に稀

与格とともに：詩語

動詞接頭辞：高い所へ、後で、再び
分配的意味

ἀναβαίνω	登る、乗せる、地中へ赴く
ἀνορύττω	掘り出す
ὁ ἥλιος ἀνατέλλει	太陽は昇る。
ἀναχωρέω	退く
ἀνοικοδομέω	再建する
ἀναμιμνήσκομαι	思い出す
ἀναδίδωμι	分配する

ἀντί 副詞の意味：～の正面に [1683]

属格とともに：古典文学語において、この前置詞は比喩の意味にしか用いられない：～の代りに、～の代償として

ἀντί χρυσοῦ λίθος (Aesop.)	金の代わりの石
ἀντί πατρός (And.)	父の代りに
ἀντ' ἀργυρίου (Pl.)	銀の代りに

動詞接頭辞：～の面前で、～に対して、代りに
 名詞または形容詞との複合で：また、～に比較しうる、～に等しい

ἀνθισταμαι	立ち向かう
ἀντιλέγω	反対する
ἀντιδίδωμι	代りに与える、報いる
ἀντίθεος	神に似た

ἀπό 副詞の意味：遠くで、離れて [1684]

属格とともに：～から遠くに、～（起源）から出た、～以後は

ὄρμηθεις ἀπὸ Ἡρακλείων στηλῶν (Luc.)	ヘラクレスの石柱から出た
οἱ ἀπὸ Ἰονίας ξύμμαχοι (Th.)	イオニアからの同盟者たち
ὀμμάτων ἄπο (E.)	目から離れて（見えなくなる）
ἀπ' ἀρχῆς (A.)	最初から
παῖδες οἱ ἀπ' Οἰδίπου (S.)	オイディプースの後裔
ἡ ἀπὸ τοῦ τόπου ἀσφάλεια (D.)	土地が与える安全
ἐπάχθη ἀπ αὐτῶν οὐδέν. (Th.)	彼らからは何もなされなかった。

動詞接頭辞：分離、隔たり、除去、完成（完了の）、変形の観念

ἀποβαίνω	出てゆく、遠ざかる
ἀποστρέφομαι	引き返す
ἀποκόπτω	切り取る、切り離す
ἀποβάλλω	遠くに投げる、投げ棄てる
ἀποκτείνω	殺す
ἀπολούω	洗い落す（汚れを除きながら）
ἀπεργάζομαι	実現する、完遂する、達成する
ἀπολιθόω	石化する
ἀπάνθρωπος	人里離れた人気のない、見捨てられた
ἡ ἀποικία	植民地

διά 副詞的意味：二つの間で、その間に、横切って、あちこちに

[1685]

対格とともに：～を横切って（詩語）

散文においては、とりわけ原因的：～の故に、～の事実によって

δι' αἰθέρα (S.)	アイテール（空）を横切って
δι' ἔνδειαν (X.)	貧しさによって
διὰ τοῦτο	これの故に、このため
διὰ τί;	何故？
δι' ἀνδρᾱς ἀγαθοῦς (Lys.)	善い人々という事実によって

属格とともに：～を横切って、端から端まで（空間的および時間的）

～によって（仕方、方法、稀に行為者）

～を介して

～から遠くに、～の間を置いて

διὰ τοῦ θώρακος (X.)	鎧を貫いて
διὰ βίου (Pl.)	一生涯の間
διὰ τέλους (A., Pl.)	最後まで
διὰ μακροῦ (E.)	長い間
διὰ μέθης (Pl.)	酩酊状態で
διὰ τάχους (S.)	急いで
δι' αἰνιγμάτων γράφειν (Aeschin.)	あいまいな仕方（謎によって）書く
δι' ἔρμηνέως (X.)	通訳を介して
διὰ τούτων πάντα πράττεται. (D.)	それらを通じて全てはなされた。
διὰ πολλοῦ (Th.)	非常に離れた
διὰ μακρῶν χρόνων (Pl.)	（時間の）長い間の後に

動詞接頭辞：飛び越えるまたは際立たせる距離（隔たり）の観念

分散または分割の観念

「横切って、端から端まで」の意味は完了の意味を与え、いくつかの自動詞を他動詞にする（対格1参照）

διαβαίνω	横切る
διατρίβω	時間を過ごす
διαλέγομαι	会話する、議論する
διαφέρω	異なる、上位である、～に勝る
διαφέρομαι	人と意見が一致しない
διατίθημι	並べる、配分する、分ける
διαφθείρω	（完全に）破壊しつくす
διεργάζομαι	最後まで到る、達成する
διαπλέω (+ 対格)	横切って航海する

εἰς, ἐς 副詞的意味：～の内部へ，中へ（動きを伴い） [1686]
 ἐν 上に形成され，動きを示すシグマを伴う

対格とともに：～の方へ，中へ
 関与するものの中へ，～をめがけて
 数字とともに近似を示す，または配分的意味を持つ。

ἡ ἀναγωγή ἐς τὴν Σικελίαν (Th.)	シケリアへの出帆
ὑποζύγια ἐς τὴν Εὐβοίαν διεπέμψαντο. (Th.)	彼らは駄獣をエウボイアへ送り渡した。
εἰς τὸν θᾶκον καθίζεσθαι (Pl.)	席に座ること
ιέναι εἰς αὐτούς (X.)	彼らの方へ行くこと。
εἰς τότε (Pl.)	その時まで
κτῆμα ἐς αἰεὶ (Th.)	不断の所有物
εἰς ἑσπέραν ἤκειν (Ar.)	夕方に，夕方頃に来ること
εἰς τρίτην ἡμέραν (Pl.)	三日目に，二日のうちに
ἐς κέρδος τι δρᾶν (S.)	儲けを目指して～すること
εὐτυχεῖν ἐς τέκνα (E.)	幸運にも子供をなすこと
τριήρεις ἐς τὰς διακοσίας (Th.)	凡そ二百艘の三段櫂船
εἰς δύο (X.)	二人ずつ

属格とともに：～の所へ（動きを伴い），属格 8 参照。

εἰς καθαριστοῦ 音楽の匠の所へ

動詞接頭辞：同義

εἰσάγω	導き入れる
εἰσπίπτω	飛び込む，飛び掛る

ἐκ ἐξ 参照 [1688]

ἐν 副詞的意味：そこで，中で（動きを伴わない） [1687]

与格とともに：中で

ἐν ὕδατι	水中で
ἐν τῷ οὐρανῷ (Pl.)	天空において
τὰ ἐν τῇ Ασίᾳ ἔθνη (X.)	アジアにいる人々
ἐν τοῖς ἀνθρώποις (Ar.)	人々の間で，人々の所で
ἐν ὀκτῶ μηνσίν (X.)	八ヶ月で（与格 5 参照）
ἐν θανούσιν ὑβριστής (S.)	死者に関して傲慢な

属格とともに：～の所で（動きを伴わない），属格 8 参照。

ἐν Ἄιδου ハーデスの所で

動詞接頭辞：同義

(動きの動詞と複合しているのさえ見られる)

ἐνειμι	～の中にいる
ἐμβαίνω	歩み入る
ἐμβάλλω	投げ込む, 積み込む
ἐννομος	合法的な (法の中で)
ἐμψυχος	命のある (内部に魂を持つ)

ἐξ, ἐκ 副詞的意味：外に, 外で

[1688]

属格とともに：～から, ～以後

ἐκ Πύλου	ピロスから (来ながら)
ἐξ ὁδοῦ (S.)	道から外れて
ἐξ ἀγορᾶς ὠνεῖσθαι (Pl. Com.)	市場から買われた
ἐλεύθερος ἐκ δούλου γεγονώς (D.)	奴隷から自由人になった
ἐξ ἴσου	等しく
ἐκ πολλῶν μόνος (S.)	多数の中からの一つ
ὁ ἐξ ἐμῆς μητρὸς (S.)	私の母の息子
ἐξ ἀρχῆς	最初から
ἐκ παιδός (Pl.)	子供のころから
ἐξ ἀδάμαντος (Pl.)	鋼からできた
ἐκ δόλου (S.)	術策によって
ἐξ ἀνάγκης	必然によって
ἐκ χειρὸς	手近に, 近距離で
ἐκείνῳ ἢ χώρᾳ ἐκ βασιλείως ἐδόθη. (X.)	彼にこの国は大王から与えられた。

動詞接頭辞：同義, そして特に除去, 突然の開始または破裂の, 時として変形の観念。また, 完了の意味を与え, 幾つかの自動詞を他動詞にする (対格1参照)

ἐξέρχομαι	出てゆく
ἐξελαύνω	追い出す, 狩り出す
ὁ ἥλιος ἐκλάμπει	太陽が現れ輝く
ἐξαιρέω	取り去る, 亡ぼす; かたづける, 選ぶ
ἐξάδω	最後の歌を歌う
ἐκδρακοντωθεῖς (A.)	竜に変形した
ἐξεργάζομαι	成就する
ἐξέρχομαι (他動詞)	～を実現するに到る

ἐπί 副詞的意味：「～の上で」，そこから：「すぐ近くで，続いて，その上で」 [1689]

対格とともに：～の上へ，～の方へ（動きを伴って）
 ～に対して，「与格とともに」も参照
 （空間的・時間的）*広がりの上で*
 ～を目指して，（目的）*のために*，「与格とともに」も参照

ἐπὶ τὸν βωμόν (Arist.)	祭壇の上へ（動き）
ἀναβαίνειν ἐπὶ τὸν ἵππον (Pl.)	馬上へ昇る
πλεῖν ἐπὶ τοὺς Ἀθηναίους (Th.)	アテナイ人たちへ向かって遠征航海をする
ἐπὶ πολλὰ στάδια (X.)	多くのスタディオンの距離で
ἐπὶ πολὺν χρόνον (Pl.)	長い時間
ἰέναι ἐφ' ὕδωρ (X.)	水を探しに（目的）行くこと
ἐπὶ τοῦτο	これの故に，これを目指して

属格とともに：上で（動きを伴わずに），～に寄りかかって
 ～の途上で，～へ
 ～の時代に，～の治世下に
 ～に関して
 ～の先頭に立つ，～に任ぜられた，「与格とともに」参照
 数とともに：～列の縦列，横列で

ἐπὶ γῆς (Pl.)	地上で
ἐπὶ τοῦ ἵππου ὀχεῖσθαι (X.)	馬上で旅すること
ἐπὶ τούτων (Pl.)	これらの議論に基づきながら
ἐπ' οἴκου (Th.)	家へ（動きを伴って）
ἐπὶ Λέσβου πλεῖν (X.)	船首をレスボスへ向ける，レスボスへ向うこと
ἐπὶ Κέκροπος (Th.)	ケクロプスの治下に
ἐπὶ Εὐθυκλέους ἀρχοντος	エウテュクレースの執政期に
ἐφ' ἡμῶν (Aeschin.)	我々の時代に
ἐπὶ καλοῦ λέγειν παιδός (Pl.)	美しい少年について語ること
ὁ ἐπὶ τῶν ἱππέων (D.)	騎兵隊の司令官
ἐπὶ τεσσάρων τάξασθαι τὰς ναῦς (Th.)	船隊を4列に並べること

与格とともに：～の上で（動きを伴わずに），「属格とともに」もまた参照
 ～に従って，すぐ後で，～の上で
 ～の先頭で，～に任ぜられて，「属格とともに」もまた参照
 ～の手中で，～に従属した
 ～に基いて，～の条件で
 ～の視点で，（目的）*のために*，「対格とともに」もまた参照
 （関心，原因）*のために*
 ～に対して，「対格とともに」もまた参照

ἐπ' ὤμοις φέρειν (E.)	両肩に持つこと
ἐπὶ τῇ οἰκίᾳ τῇ Ἀγάθωνος (Pl.)	アガトーンの家の上で
ἐπὶ τούτοις	これに続いて，そうしている間に，その上，この条件で
τρίτη (ἡμέρα) ἐπὶ δέκα	十三日目に（字義，月の十日後の三日目に）
οἱ ἐπὶ τοῖς καμήλοις (X.)	ラクダに任ぜられた人，ラクダ乗り
τὸ ἐπ' ἐμοί (X.)	この私の及ぶ限り
ἐπὶ τοῖς νόμοις (D.)	法に従って

ἐφ' ᾧ (τε)	～の条件で (§348 参照)
ἐπ' ἀργυρίῳ (D.)	金のために
ἐπὶ τοῖς καλοῖς ἀγάλλεσθαι (X.)	立派な作品を自慢すること
ἀλλήλοισ ἐπι (E.)	互いに対立して

動詞接頭辞：同義

ἐπίκειμαι	上にある，のしかかる
ἐπιβαίνω	上を歩く，踏み入れる
ἐπαλείφω	膏薬を～の上に広げる
ἐπιτίθημι	付け加える
ἐπάδω	歌いながらあわせる
ἐπιγίγνομαι	生起する，あとに生まれる，後を継ぐ
ἐπικρατέω	支配する，～に対して力を振るう
ἐπιμελέω	～に気遣いする
ἐπιχειρέω	手をつける，襲う
ἐπιβουλεύω	～に対して陰謀を企む

ἐς εἰς 参照 [1685]

κατά 副詞的意味：高い所から低い所へ，低い所で [1690]

対格とともに：降りながら，～に沿って（空間的・時間的に）
 ～の表面で，横切って
 ～に従って，～によって，～に応じて，～の程に
 ～のことで
 配分的意味

κατὰ τὸ ὕδατιον (Pl.)	小川を下りながら
καθ' Ἑλλάδα (A.)	ギリシアの到る所で
κατὰ τὴν πορείαν (Aeschin.)	進路の途中で
κατὰ τὴν πόλιν (Aeschin.)	ポリスの到る所で
κατὰ τοὺς νόμους	法に従って
κατὰ Πίνδαρον (Pl.)	ピンダロスに従って
ἦλθες κατὰ τί; (Ar.)	君は何の理由で来たのか？
αὐτὸς καθ' αὐτόν (Pl.)	自らが自らに即して
καθ' ὅσον	～の及ぶ限り
κατ' οἶκον	家ごとに，それぞれの家で
καθ' ἡμέραν	日ごとに，毎日；しかしまた「昼の間」

属格とともに：（降りながら）**低い所へ**，（高い所から）**～の上へ**

～の下で

誓いの形式で：**～にかけて**

～に対して

～のことについて

κατὰ τῆς πέτρας ἄλλεσθαι (X.)

岩から飛び降りること

μύρον κατὰ τῆς κεφαλῆς καταχεῖν (Pl.)

頭の上に香水を注ぐこと

τὰ κατὰ γῆς (Ar.)

地下の世界

κατὰ τῶν παίδων ὀμνύναι (D.)

子供の頭に（手を置いて）誓う

κατὰ Φιλίππου

反ピリッポス（デーモステネースのピリッピコスの表題）

πολὺς ἔπαινος κατὰ τῆς

ἡμετέρας πόλεως (Aeschin.)

我々のポリスについての多くの賞賛

動詞接頭辞：同義

完遂、しばしば破壊の観念

καταβαίνω

降りる，（荷を）降ろす，海へ下る

καταπλέω

岸を占める，川を下る，船で帰りの航海をする

καταβάλλω

投げ降ろす，壊す

καθίστημι

据える，建てる

καταπίπτω

（高みから）～に落ちる

καταγιγνώσκω

心得ている，判断を下す

κατηγορέω

告発する

καταλείπω

捨てる，自らの後に残す

καθαίρω

取り去る，打ち倒す，壊す

μετά 副詞的意味：～の真中で，～の間で；～の後で，～に続いて（時間的にも）

[1691]

対格とともに：～の後で（また，意味の順序における連続を示す）

μετὰ ταῦτα

それらの後で

μεθ' ἡμέραν

昼の間に（日の出の後の）

πόλις ἡ πλουσιωτάτη μετὰ Βαβυλῶνα (X.)

バビュロンの次に最も富裕なポリス

属格とともに：～とともに，～を伴って（アッティカ方言では σύν より頻繁に）

～の真中で（詩語）

κατέβην χθές εἰς Πειραιᾶ μετὰ Γλαύκωνος. (Pl.)

昨日グラウコーンとともにバイライエウスへ私は下った。

μεθ' ὀπλων ἀνήρ ἀπών (E.)

武装して彼の家から離れた男

γῆρας μετὰ πενίας (Pl.)

貧しさを伴う老女

μετὰ παρρησίας λέγειν (D.)

率直に語ること

μετὰ ζώντων εἶναι (S.)

生きているものの間にあること

与格とともに：～の間で，～とともに（詩語でのみ，多くは叙事詩）

動詞接頭辞：同義

特に，関与，追跡の観念，そしてとりわけ変形の観念

μετέχω	分け持つ
μεταδίδωμι	分け与える
μεταδιώκω	追跡する
μετέρχομαι	追跡する，場所を変える
μεταβάλλω	変える，変る
μεταμέλει μοι	意見を変える，後悔する
ἡ μεταμόρφωσις	変身

ξύν σύν 参照 [1696]

παρά 副詞的意味：～の傍らで，近くで [1692]

対格とともに：～の近くで，～の所で，～の方へ（動きを伴い：アッティカ方言ではしばしば人を伴う）

～に沿って（空間的・時間的），～の傍らで

～の上に更に

～と比べて

～の傍らに（外に残しながら），～の外に

～に反して

～の結果，～を理由として，～によって

παρὰ Πρωταγόραν ἰέναι (Pl.)	プロタゴラスの所へ赴くこと
παρὰ τοῦτο τὸ τευχίον φέροντες ἄνθρωποι σκεύη (Pl.)	この小城壁に沿って荷物を運ぶ人々
παρὰ πάντα τὸν βίον (Pl.)	全生涯の間に
παρὰ (ἐκάστην) ἡμέραν	日々，毎日
ἦν παρὰ τὴν ὁδὸν κρήνη. (X.)	道の傍らに泉があった。
ἔτι δὲ τρίτον παρὰ ταῦτα. (Arist.)	しかるにさらに三番目の場合がある。
φαίνεται παρὰ τὸ ἀλγεινὸν ἠδὲ ἡ ἡσυχία. (Pl.)	苦痛との比較で心落ち着いていることは快として感じられる。
παρὰ μικρὸν ἀποθανεῖν (Isoc.)	すぐ死にそうである，もう少しで死ぬ
παρὰ τοὺς νόμους	法に反して
παρὰ τὴν αὐτοῦ ἀμαρτίαν (Antipho)	自身の誤りによって

属格とともに：～の所から（人を伴う）

～の所から

παρὰ Λυσίου. (Pl.)	リュシアスの所から（私は来た）
οἱ παρ' Ἑλλήνων ἐπαινοὶ (Hyp.)	ギリシア人たちからの賞賛
παρ' ἐκείνου μαθεῖν (Isoc.)	かの男から学ぶ
τὰ παρὰ τῆς τύχης δωρηθέντα (Isoc.)	籤によって与えられたもの

与格とともに：～の周りで (かなり稀), 「対格とともに」も参照
～について, ～について (特に感覚動詞とともに)

θώρακα περὶ τοῖς στέρνοις ἔχειν (X.) 胸の周りに鎧を着る
δεδιότες περὶ τῷ χωρίῳ (Th.) 要塞を恐れながら

動詞接頭辞：同義
同様にせり上げの観念および無関心の観念

περιάγω ぐるりと廻す
περιβλέπω 周りを見回す
περιγίγνομαι ～に勝っている
περιοράω 無関心に見る, 蔑視する

περικαλλής すばらしく美しい
ἢ περιεργία 干渉, 穿鑿

πρό 副詞的意味：前で, 前へ, 前もって

[1694]

属格とともに：～の前で
～のより前で
～よりも特に
～の弁護のために, ～のために

πρὸ τῶν ἀνθρώπων (Pl.) 観客の前で
πρὸ ὀμμάτων (Arist.) 眼下に
τὰ πρό τῶν Μηδικῶν Ἑλληνικά (Th.) ベルシア戦役前のギリシア史
πρὸ τοῦ 以前に
πρὸ τούτου τεθνάναι ἐλέσθαι (Pl.) それより死を選ぶこと
πρὸ τῆς πατρίδος ἀποθνήσκειν (Lycurg.) 祖国のために死ぬこと

動詞接頭辞：同義

πρόκειμαι 前にある
πρόειμι 前進する
προνοέω 予知する
προαιρέομαι あらかじめ選ぶ
προμάχομαι 先陣で戦う, ～のために戦う

πρός 副詞的意味：～の傍らに，横に，もっと遠くに

[1695]

対格とともに：～の方へ（時間的にも，頃）

～の方へ向いて

～宛の，～の為の，～に対して

～との関係で，～を考慮して，～に応じて

～のために，（目的を）目指して

πρὸς τὸ φῶς ἐλθεῖν (Pl.)

光の方へ行くこと

πρὸς τὸ φῶς ἀναβλέπειν (Pl.)

光の方を見ること

πρὸς ἑσπέραν (Pl.)

夕方頃

πρὸς βορέαν (Th.)

北の方へ向いて

ἢ φιλία πρὸς τὸν τελευτήσαντα (Hyp.)

死者に対しての友情

διαλέγεσθαι πρὸς ἀλλήλους (Pl.)

互いに議論すること

πολεμεῖν πρὸς Ἐρεχθέα (Th.)

エレクテウスに対して戦うこと

κιθαρίζειν πρὸς τὴν ᾠδὴν (Pl.)

唄の伴奏にギターを演奏すること

πρὸς ἀργύριον τὴν εὐδαιμονίαν κρίνειν (Isoc.)

銀を考慮して幸福を判定すること

πρὸς ὀλίγον ὕδωρ ἀναγκαζόμενος λέγειν (D.)

（水時計の水で測られる）僅かな時間で話す様に強いられて

πίνοντες πρὸς ἡδονήν (Pl.)

快樂のために飲みながら

属格とともに：～の所から，～の事実によって

～の傍に

μανθάνειν πρὸς ἀστῶν (S.)

市民から学ぶ

πρὸς σοῦ ἐστίν.

それは君の特徴だ（それは君から来る）

τὰ μὲν ὑποζύγια ἔχοντες πρὸς τοῦ ποταμοῦ, τὰ δὲ ὄπλα ἔχω (X.)

野獣を小川の傍らに置く一方，他方で，私は武器を持っている。

δίκαιόν ἐστι καὶ πρὸς θεῶν καὶ πρὸς ἀνθρώπων. (X.)

神の目にも人の目にもそれは正しい。

πρὸς (τῶν) θεῶν

神の御名において，神かけて

πρὸς σοῦ φράσω. (S.)

君のために（君の視点から）話そう

与格とともに：～の近くに，～に直面して

～の上に更に

πρὸς ἄλσεσιν θεῶν (S.)

神々の神域の近くに

πρὸς τοῖς κριταῖς (D.)

裁判官たちに面して

πρὸς τῷ εἰρημένῳ λόγῳ ἦν. (Pl.)

言われたことに集中していた。

πρὸς τούτοις

その上

動詞接頭辞：同義

προσέρχομαι

近づく

προσπίπτω

飛び掛る，～に投げ出される

πρόσειμι

傍らにある，加わる

προσέχω

寄せる，着ける

προσέχω τὸν νοῦν

心を～に傾注する

προστίθημι

付け加える

προσποιέομαι

装う，見せかける

σύν, 副詞的意味：一緒に、みんな一緒に；同時に [1696]
より古くは

ξύν 与格とともに：～とともに
(アッティカ方言では、古典期以後属格を伴う μετά に次第に置き換えられた；クセノポーンだけはお σύν を殆どに用いる)

ἐπαιδεύετο καὶ σύν τῶ ἀδελφῶ καὶ σύν τοῖς ἄλλοις παισί. (X.)
その弟と、他の子供とともに彼は教育された。
ξὺν τοῖς θεοῖς (Th.) 神の助けで以って
ξὺν τῶ δικαίῳ (S.) 正義で以って
ξὺν ὅπλοις (Th.) 武装して
προσπλεῖν σύν διακοσίαις ναυσί (X.) 二百艘の船を伴って航海に出る
σύν τάχει (S.) 急いで

動詞接頭辞：同義

σύνειμι ~とともにある、親しくする
συμφιλέω 愛をともしする、愛を分かち合う
συλλέγω 集める
συλλογίζομαι 結論を引き出す
συμμείγνυμι ~と混ぜる
συνεπάγω ~に対して一緒に導く

ὑπέρ 一般的意味：～の上で (副詞としては用いられないようである) [1697]

対格とともに：～の先 (向う) に、～以上に、～前に (空間的・時間的)
～の上に (上位の観念)

ὑπὲρ Ἡρακλείας στήλας (Pl.) ヘーラクレスの柱の上で
οἱ ὑπὲρ πενήκοντα ἔτη γεγονότες (Aeschin.) 五十歳以上の人々
ὑπὲρ πάντας ἀγάλλεσθαι (Th.) 全ての人々より自慢げであること

属格とともに：～の上に、上で
～の上で、～の上を、「対格とともに」もまた参照
～の弁護のため、～のためを因って、～を考慮して
～に関して (περί より新しい用法、取って代わる傾向である)

εἶθ' ὑπὲρ γῆς, εἶτ' ἐπὶ γῆς, εἶθ' ὑπὸ γῆς (Thphr.) 或いは地の上に、或いは地表に、或いは地下に
ὑπὲρ τῆς Ἑλλάδος μάχεσθαι (Lycurg.) ギリシア防衛のために戦う
προνοεῖσθαι ὑπὲρ τῶν μελλόντων (X.) 将来について予想する

動詞接頭辞：同義
また最上級の意味

ὑπερβαίνω 越えて過ぎる、飛び越える、命令に背く
ὑπεροράω 見下す、蔑む
ὑπερέχω より上位である、凌駕する
ὑπερεχθαίρω 全てを越えて嫌う

ὑπέροπλος (A., Pl.) 並外れて富んでいる
ὑπέροσος (Ar., Pl.) 並外れて賢い

ὑπό 副詞的意味：低い所で，下に（で） [1698]

対格とともに：～の下で，足元で（動きを伴い，或いは伴わずに）

～の支配下で，「与格とともに」も参照

～の面から

～の時代に，頃（時間的）

αί ὑπὸ τὸ ὄρος χῶμαι (X.)	山の麓にある村々
ὑφ' ἄρμα ἀγαγεῖν ἵππους (A.)	荷車に馬をつなぐ
οἱ ὑπὸ βασιλέα βάρβαροι (X.)	大王に服従させられた蛮族
ὑπὸ τὸ αὐτὸ εἶδος εἶναι (Arist.)	同じ形相の下にあること
ὑπό τι (副詞的)	ある観点のもとに
ὑπὸ τὸν σεισμόν (Th.)	地震の時代に
ὑπὸ τὴν κατάλυσιν τοῦ πολέμου (X.)	戦の終わりがち

属格とともに：～の下で，～の足元で（動きを伴わずに：叙事詩を除いて奪格の意味は稀）

～の結果の元で，～の故に

～の所から，～の代理として，～によって（行為者の補語）

ἡ πηγή ὑπὸ τῆς πλατάνου ῥεῖ. (Pl.)	泉がプラタナスの下で流れる。
τὰ ὑπὸ γῆς (Pl.)	地下にあるもの
χαλεπῶς ἔχειν ὑπὸ τραυμάτων (Pl.)	傷がもとで苦しむ
Εὐρυστεύς ὑπὸ Ἡρακλειδῶν ἀποθανών (Th.)	エウリュステウスはヘラクレイデスによって（切られて）死んだ上で
(ἡ πόλις) παρεδόθη ὑπὸ Θησέως τοῖς ἔπειτα. (Th.)	(ポリスは)テーセウスによって後世に伝えられた。

与格とともに：～の下に，足元に，下に（動きを伴わずに）

～の支配下に，～の権威の下に，「対格とともに」もまた参照

ἔστι βασιλεία ὑπὸ τῆ ἀκροπόλει. (X.)	城砦の麓に王宮がある。
ἔχειν τι ὑπὸ τῷ ἱματίῳ (Pl.)	外套の下に何かを持つこと
ὑπὸ βασιλεῖ (X.)	大王の支配下に
ὑπὸ τῷ σοφωτάτῳ Χείρωνι τεθραμμένος (Pl.)	最も賢明なケイローンのもとで育てられて

動詞接頭辞：同義

同様に，ざっとした動作あるいは勝手放題のやり遂げた動作の観念

ὑποβαίνω	下へ行く，降りる
ὑπακούω	耳を貸す
ὑποδέομαι	足元で結ぶ，靴をはく
ὑφοράω	下から見上げる，悪意のまなざしで見る
ὑπάγω	下へ連れて行く，計略によってまたは不意打ちによって連れて行く，慎重に退却する，少しずつ前進する
ὑπονίφει	少し雪が降る，雪がちらつく
τὸ ὑποζύγιον	(軛の下の) 駄獣

273 動詞接頭辞として用いられない主な前置詞のリスト

[1699-1702]

属格と：

[1700]

ἀνευ, ἄτερ (アッティカ散文では稀),	～なしに
δίχα (詩語)	～とは別に, ～なしに
ἐκᾶς (アッティカ散文では稀)	～とは別に, から離れて
νόσφι(v) (詩語)	～から離れて, ～を除いて
πλήν	～を除いて
χωρίς	別々に, ～なしに, 離れて
ἐντός	～の内部に, ～の手前に
ἔσω (εἴσω)	～の内部に
ἔσωθεν	内部から, 内部に
ἐκτός, ἔκτοσθεν	～の外から, 外で
ἔξω, ἔξωθεν	～の外から, 外で
πόρρω, πόρσω (詩語),	
πρόσω (詩語), πόρρωθεν	～から離れて
ὄπισθεν (詩においては ὀπισθε もまた用いられる)	～の後に
πρόσθεν (詩においては πρόσθε もまた用いられる),	
ἔμπροσθεν (時に ἔμπροσθε),	
πάρως (常に後置される；詩語),	～の前で
ἄχρι, μέχρι, ἕως (§348 参照)	～まで
πέραν, πέρα	～の先は, 前に
ἀντικρύ, ἐναντίον, ἔναντα (詩語)	～の正面に
ἐγγύς, πλησίον (与格とともに)	近くに
μεταξύ	その間, そうこうする間に, ～の真っ最中に
ἕνεκα (ほとんどは後置)	～の故に
χάριν (ほとんどは後置)	～のたをを因って
δίκην (時に後置)	～の仕方

与格と：

[1701]

ἄμα, ὁμοῦ ～と同時に

対格と：

[1702]

ὡς ～の方へ, ～の所で (動きを伴い；人についてののみ用いられる)

ἀφίκετο ὡς Περδίκαν. (Th.) 彼はベルディッカスの所へ着いた。

接続詞としての ὡς については, §348 参照。

274 前置詞の要約復習表（主な用法）

	対 格	属 格	与 格
方向 (対格 8 参照)	ἀμφί, ἀνά, εἰς, ἐπί, κατά, παρά, πρός, ὑπό, ὡς		
～宛の, ～に対して	πρός		ἐν (稀)
目的	εἰς, ἐπί, πρὸς	ἐνεκα (後置)	ἐπί
配分	ἀνά, εἰς, κατά		
拡がり (対格 9 参照)	ἀνά, διά (詩語), ἐπί, κατά	διά	
原因 (I)	διά, παρά		
～について, ～に関して	ἀμφί, εἰς, ἐπί, κατά, περί	κατά, περί, ὑπέρ	περί
由来 (属格 13 参照)		ἀπό, ἐξ, κατά, παρά, ὑπό (稀)	
起源 (属格 13 参照)		ἀπό, ἐξ, πρὸς	
行為者 (属格 14 参照)		ἀπό, διά, ἐξ, παρά, πρὸς, ὑπό	
材料 (属格 2 参照)		ἐξ	
原因 (II)		ἐξ, ὑπό, ἐνεκα (後置)	
場所 (与格 5, 属格 8 参照)	ἀμφί, παρά, περί, ὑπέρ, ὑπό	διά, εἰς, ἐν, ἐπί, κατά, περί (詩語, 稀), πρὸ, πρὸς, ὑπέρ, ὑπό	ἐν, ἐπί, παρά, περί (稀), πρὸς, ὑπό
方法 (与格 4, 2 参照)		διά	σύν
仕方 (与格 3 参照)		διά, μετά	σύν
随伴 (与格 2 参照)		μετά	σύν, ἅμα, ὁμοῦ
原因 (III)			ἐπί, περί

§273 も参照。

時間の表現：要約復習

275 持続

対格と（対格9参照）：

ὅλην τὴν ἡμέραν	一日中
πέντε ἡμέρας	五日間
ἀνὰ πᾶσαν ἡμέρην（イオーニア方言および詩語）	一日中
ἐφ' ἡμέραν	昼間に
παρὰ πάντα τὸν βίον	生涯の間
παρ'（ἐκάστην）ἡμέραν	日々

属格と用いられる διά：

δι' ἡμέρας	一日中
------------	-----

276 時間における境界（出来事が起こるその期間）

属格と（属格10参照）：

ἡμέρας	日中に
τῆς ἡμέρας	その日に、毎日のこととして
τῆς αὐτῆς ἡμέρας	同じ日に
ἄλλης ἡμέρας	先日
δέκα ἡμερῶν	十日後に、または十日前に
ἐπὶ Εὐθυκλέους ἄρκοντος	エウテュクレースの執政官のときに
ἐφ' ἡμῶν	我々の時代に
ἐντὸς δέκα ἡμερῶν	十日後に
ἐκ δέκα ἡμερῶν	十日前から
ἀπὸ δέκα ἡμερῶν	十日前から

与格と用いる ἐν：

ἐν ἐκείνῃ τῇ ἡμέρᾳ	その日のうちに
ἐν δέκα ἡμέραις	十日のうちに

以下も参照：

καθ' ἡμέραν	毎日、日中（配分的意味も参照）
μεθ' ἡμέραν	真昼間に（日の出後）
ἐξ ἡμέρας	日中、昼間（日の出後）

277 時間における位置決定（限定された瞬間）

与格と（与格 5 参照）：

τῆδε θῆμέρα
τῆ τότε ἡμέρα
(τῆ) τρίτη (ἡμέρα) ἐπὶ δέκα

今日この日に
その日に
月の十三日目の日に

ἄμα (τῆ) ἡμέρα
ἐν ἐκεῖνῃ τῇ ἡμέρα

日の出に
その日の間に

また、以下も参照：

ἄμφι τοῦτον τὸν χρόνον
περὶ τοῦτον τὸν χρόνον
πρὸς ἑσπέραν
ὑπὸ τοῦτον τὸν χρόνον

この時代の頃に
この時代の頃に
夕方頃に
この時代の頃、この時代に

ἄχρι τούτου τοῦ χρόνου
μέχρι τοῦτο τὸν χρόνου
ἕως τοῦτο τοῦ χρόνου（稀）
εἰς τότε

この時代まで
この時代まで
この時代まで
その時まで

(εἰς) τρίτην ἡμέραν ἦκων

三日目に着いた。

278 配分的意味

καθ' ἡμέραν
ἀνὰ πᾶσαν ἡμέρην (Hdt.)
παρ' (ἐκάστην) ἡμέραν

毎日
毎日
日々（持続の項も参照）

279 法の統辞法

[1759-1760]

一般に動詞の法はそれに従って話者が言表行為の行為を考えるその仕方（法 *modus* はラテン語の「仕方」「様式」「様態」などを意味する *modus* に由来する）を示す。

直説法、希求法および接続法は話者のその言表に対するある種の関係を前面に出す、一方命令法は話者の宛人へ関係を前面に出す。

希求法および接続法の固有の法語尾については、§96-97, §103-104 参照。命令法については、固有の法接尾辞を失っているが、いくつかの特有の曲折語尾を見せていて、これは他のあらゆる法の曲折語尾とは異なっている（§96 および活用表参照）。

直説法によって、言表は**実現性の確認**として与えられる。

希求法によって、言表は**願望**または**可能性**として与えられる。

接続法は**期待**があることを知らせる。それは諸々の補語節の中でもちいられるが、それはある事実が**まず間違いなく**起こると期待される状況を示す。接続法はまた**前望的一般化**のためにも用いられる。さらに、本来の意味に従って、接続法は**意志**を表現する法である。

補語節において接続法は期待を話者の視点からではなく主節の主語の視点から表現することがある（目的節、§307 参照）。

命令法は**命令**を表す。

280 法・語幹・時制

[1759, 1850]

法は話者がその**言表行為**を考える仕方を表現するのに対し、四通りの動詞**語幹**（現在・アオリスト・完了・未来それぞれの語幹）は、話者が**言表する動詞の行為**を考える展望を限定する。（その行為の展開、その展開を考慮しない動作、持続のもしくは点括のアスペクト、静的な状態もしくは既得の結果、将来における実現などの展望である、§89 参照）。

時間的展望（現在・過去・未来）については、それはギリシア語では**直説法**においてしか現れない（§90 参照）。他の法においては、それは関与しない。この時間的展望を明示するのは文脈である。

未来幹は直説法とおよび希求法においてしか活用しない（そして後者は斜希求法の用法においてのみはたらく）。実際、未来は時制であると同時に法であるとも考えられる。時制としては、実現が未来に投影されているその動作を表すからである。法としては、いまだ存在しないことを確認の形で肯定するからである。それは**確認**の法である直説法の性質をもつ。しかし、その**いまだ存在しないことの確認**という効力はそれを期待の法である接続法に近づける。未来は他方で、接続法と同じように**目的**（直説法で、分詞で、不定法で）を表現するのに役立つ。こうして、それは接続法の活用をしていないことが理解される。しかしながら、未来分詞と未来不定法が存在するのであるから、未来を法として考えることは出来ないだろう。

**231 実現性の度合い。実現的・非実現的・可能的・蓋然的として与えられる言表。
小辞 ἄν** [1761, 1768]

ギリシア語の法はとりわけ話者が自分の言表する事柄をどのようなものとして提示するのかが示す。つまり実現的なものとしてか、非実現的なものとしてか、可能的なものとしてか、予期されるものとしてかである。

言表が**実現の事実の確認**として提示される時、用いられる法は**直説法**である(直説法 1, 4, 5 参照)。 [1770]

話者がその言表を**仮定**あるいは**非実現的**なまたは**実現不可能な願望**に属するものとして提示するとき、この非実現性は**直説法過去時制**によって表される(直説法 2, 3 参照)。 [1774]

直説法過去時制を使用することによって明らかになるのは、話者が自分の言表する事柄を**決定的に起こってしまった**のではないと認めているという事実である。 [1814]

話者が言表を**願望**または**可能的**と考えられる**仮定**に属するものとして提示するとき、用いられる法は**希求法**である(希求法 1, 2 参照)。 [1824]

希求法は言表されたことが**実現可能**と想像される領域にありながら、その実現については**手がかりがない**ということを示す。

事柄がある**条件**に依存するということを表現するため、法は「**法の、様態の**」と呼ばれる小辞 ἄν と結び付く。この小辞は**一場合によっては**と訳され**一条件が関わってくる**ことを思い出させる。言表される事柄の実現性の度合いはこの条件に依存するのである。条件そのものについては、それは必要な法における**仮定節**によってまたは**仮定の意味をもつ他の言い回し**によって表現される。 [1762]

事柄が生起するために期待される状況または**条件を示す補語節**においては、その期待は小辞 ἄν を伴う**接続法**によって表現される。同様に、ἄν を伴う**接続法**は補語節において用いられ、**考えられる事柄**、それもきわめて**頻繁に一般的な妥当性**をもつ事柄を示す(接続法 3 参照)。 [1768]

接続法にある(仮定、時間、関係などをあらわす)補語節は主節で言表された事柄が**実現するために予期される事情**とか**条件**とかを、**一般的なケース**としてまたは**あれこれの個別的なケース**について示す。補語節の小辞 ἄν は言表全体の妥当性が条件の実現に依存するということを知らせる。ここでは ἄν は「それが**事実と分かる**(なら・時に・たびに)」と訳することができるだろう。

ある場合には、補語節は単純に**一般的な妥当性**において考えられる事柄にかかわる。ただしこれらの事柄が他を条件付けるということはない。

小辞 ἄν はまた**不定詞**または**分詞**にともなうことがあり、それらに**可能性**または**非実現性の意味**を与えているのである (§310, 329 参照)。 [1845-1849, 2270]

小辞 ἄν は一般にそれが関係する動詞、文の重要な語、あるいは節を導く**接続詞**や小辞にも続く (§213 参照)。それは**接続詞**と合成されて以下のようなこともある: ἐάν, ὅταν, ἐπάν, ἐπειδάν, κἄν など (§348 参照)。 [(1761ff), 2280]

232 否定

[2688]

ギリシア語は二つの否定を配置する。

- οὐ (母音の前では οὐκ ; 帯気音の前では οὐχ)。
- μή。

233

[2688]

否定 οὐ は否定的な確認において用いられる。話者は何らかの事柄が存在しないこと、あるいは実現性の秩序においてはそのようなあり方でないのだということ、あるいは非実現的なものないし可能的なものの秩序においてはそれでないのだということを主張するのである。否定 οὐ は同様に反駁の中で用いられる。話者は所与の言表が彼が事実として考えていることに対応することを否定する（～ということは事実ではない）。

- Ar. Nu. 56: ἔλαιον ἡμῖν οὐκ ἔνεστ' ἐν τῷ λύχνῳ.
油は我々にとって入っていません。ランプの中には。
- D. 4. 2.: εἰ πάνθ' οὕτως εἶχεν, οὐδ' ἂν ἐλπὶς ἦν [...]
もしすべてのことがこのようにあったとしたら、希望さえもなかったろう...
- Ar. Nu. 119: οὐκ ἂν πιθόμην.
私はどうしても従うことが出来ないのだ。
- D. 9. 27: καὶ οὐ γράφει μὲν ταῦτα, τοῖς δ' ἔργοις οὐ ποιεῖ.
そして一方でそれらを彼は書きはしない、他方で行為によって彼はしない

284

[2688, 2689]

所与の言表の中で客観的であるとして見られる確認の否定 οὐ に対して、否定 μή は意志・願望または期待を前面に出す言表の中で用いられる。それゆえ否定 μή は話題の範囲に依存するのである。その話題の範囲は望み・願い・起こりうることを予想し、そして（実現性の・非実現的なものまたは可能的なものの秩序における）もろもろの仮定を推し進めるのである。否定 μή はまた一般化の否定である、それは一般化が仮定を示す時である。

この区別にしたがって、μή が常に命令法・接続法。願望の希求法とともに用いられること、そして直説法と同様、希求法の他の諸々の意味が、οὐ 否定にせよ μή 否定にせよ許容するという事実を理解されるのである（要約復習表, §349, 350 参照）。

- Ar. V. 37: παῦε παῦε, μή λέγε.
止めろ、止めろ、話すのを止めろ。
- Ar. Av. 654: μηδὲν φοβηθῆς.
何も心配しないでください。
- E. IT 752: μήποτε κατ' Ἄργος ζῶσ' ἵχνος θείην ποδός.
決してありませぬように、アルゴスに生きていながら私が足跡を残すなど。
- S. OT 944: εἰ μή λέγω τ' ἀληθές, ἀξιῶ θανεῖν.
もし私が真実を話さないというのなら、私は死に値しましょう。
- Pl. Ap. 21d: ἄ μή οἶδα οὐδὲ οἶομαι εἰδέναί.
私が知らないようなことは、私は知っていると思うことさえない。

285

[2694]

二つの否定詞間のこの同様の区別は不定法・分詞・名詞・形容詞等が否定される時にも見られる。

Democr. 68 B 62 DK: ἀγαθὸν οὐ τὸ μὴ ἀδικεῖν, ἀλλὰ τὸ μὴδὲ ἐθέλειν.
善きことであるのは不正を働いてはいないといったことではなく、否、そう欲しさえないということだ。

Th. 1. 67: λέγοντες οὐκ εἶναι αὐτόνομοι κατὰ τὰς σπονδάς.
条約に即して自治的でないと彼らは言いながら

Th. 2. 40: τὸ πένεσθαι οὐχ ὁμολογεῖν τινὶ αἰσχροῦν, ἀλλὰ μὴ διαφεύγειν ἔργῳ αἴσχιον.
貧乏であることを人に肯うことは恥ずべきことではないのだ。否、実際に逃げおおそうとはしないことこそがそうなのだ。

Pl.: τὸ μὴ ὄν.
非実在。

Pl. Grg. 459b: ὁ δὲ μὴ ἰατρός γε δήπου ἀνεπιστήμων ὢν ὁ ἰατρός ἐπιστήμων.
だがしかし医者ではとにかくないといった者は、医者がその知者であることどもにおいては知なき者なのだ。

Th. 3. 95: διὰ τῆς Λευκάδος τὴν οὐ περιτείχισιν
レウカスの要塞化されていないことのゆえに（レウカスの非要塞化の故に）。

286

[2690]

否定詞は一般的にそれが否定する動詞またはその他の語に先行する。それはまた節全体にも先行することがある (§212 参照)。文頭に置かれ、否定詞 οὐ は言表全体の有効性を否定する（～ということとは本当ではない）。否定詞 οὐ は前倚辞である (§22 参照)。

287

複合否定詞（οὔτε/μήτε, οὐδέ/μηδέ, οὐδείς/μηδείς, οὔποτε/μήποτε, οὐκέτι/μηκέτι, など）は単純な否定詞と同じ仕方で用いられる。

288

[2760, 2761]

連続する複数の否定詞は最後が複合否定詞なら強調される。反対に最後が単純否定詞なら、複数否定詞は相殺される。

E. Andr. 986: οὐκ ἔστιν οὐδὲν κρείσσον οἰκείου φίλου.
何ものも親しい人に勝るものはない。

X. Smp. 1. 9: οὐδείς οὐκ ἔπασχέ τι τὴν ψυχὴν.
誰も何かを魂の点で感動しなかったものはなかった。（=全ての人は感動した）

289

疑問文中での μὴ および οὐ の使用については、§82 参照。

禁止または否定願望を表現する動詞については、不定法 3a 参照。

否定の意味を示す言葉の動詞のいくつかは、虚辞の否定詞の使用を引きずる、不定法 3c 参照。

οὐ φημι の意味については、不定法 3c 参照。

μή οὐ によって否定される不定法が続く否定的意味の言い回し（人称的、非人称的）については、不定法 3b および 4 参照。

恐れ表現の中の接続法が続く μή と μή οὐ については、接続法 5 参照。

直説法未来または接続法（諸写本はしばしば法に関して躊躇うのだが）に先行する οὐ μή は非常に確かな形の下に禁止を表わす。

Ar. Nu. 367: πῶϊός Ζεύς; οὐ μή ληρήσεις· οὐδ' ἔστι Ζεύς.
何奴なのだ、ゼウスとは？くどくど言いなさんな。そもそもおりさえしないのだ、ゼウスなんかは！

οὐ μή については、接続法 5 もまた参照。

289a 法の主な用法の一覧表

直説法	1.	実現性の言表行為	§	290-291
	2.	非実現性の言表行為：ἄν を伴う直説法の二次時制		292
	3.	後悔の言表行為：二次時制が後続する εἰ γάρ または εἶθε		293
	4.	過去における事柄の反復：ἄν を伴う未完了過去またはアオリスト		294
	5.	直説法時制の使用の特別な場合：歴史的現在、格言のアオリスト、すぐの反応を示すアオリスト、最終結果の未来		295-298
希求法	1.	願望の言表行為	§	299
	2.	可能性の言表行為：ἄν を伴う希求法		300
	3.	斜希求法（補語節）		301-302
	4.	希求法の牽引（補語節）		303
接続法	1.	熟慮の接続法	§	304
	2.	勸奨・禁止		305
	3.	ἄν を伴う接続法におかれた補語節：期待		306
	4.	目的：目的節		307
	5.	恐れ動詞に依存する節		308
命令法			§	309

法の主な使用例

直説法

290 1. 実現性の言表行為

[1770]

Pl. Prt. 317c: καίτοι πολλά γε ἔτη ἤδη εἰμὶ ἐν τῇ τέχνῃ.

とはいえ、もう既に多年にわたってこの技術の中に私はある (= 従事している)。

Isoc. 4. 92: οὐ γὰρ δὴ τοῦτό γε θέμις εἰπεῖν ὡς ἠττήθησαν.

何故なら彼らが打ち負かされたというようなことをいうことは確かに許されないことだ。

291 特別な場合：(仮定節とともに) 帰結のつながりの確認または主張

[2297]

D. 9. 4: εἰ μὲν οὖν καὶ νῦν οὕτω διάκεισθε, οὐκ ἔχω τί λέγω.

さればもし今もなおこのよう (な精神の状態) に君達があるなら、君達に言うことは私は持っていない。

仮定節については、§348, εἰ および §350 参照。

292 2. 非実現性の言表行為：ἄν を伴う直説法二次時制

[2297, 1784-1786]

非実現性 (または実現されないこと) は小辞 ἄν を伴う直説法二次時制 (未完了過去, 直説法アオリスト, 過去完了) によって表わされる。ἄν は賭けの条件 (非実現的なあるいは非実現的な) を想起させる。この条件は直説法二次時制の仮定節または例えば分詞によって表現される。

原則として、未完了過去は現在の非実現性 (現在幹の継続の意味に従って) を、そして、アオリスト直説法は過去の非実現性を表現するため用いられる。

D. 4. 2: εἰ πάνθ' οὕτως εἶχεν, οὐδ' ἄν ἐλπὶς ἦν [...]

もしすべてのことがこのようにあったとしたら、希望さえもなかったろう...

Pl. R. 2. 374d: πολλοῦ γὰρ ἄν, ἢ δ' ὅς, τὰ ὄργανα ἦν ἄξια.

何故なら多大の、と彼は言った、価値があることであろうよ、道具はね。

D. 4. 5: εἰ τοίνυν ὁ Φίλιππος τότε ταύτην ἔσχε τὴν γνώμην, οὐδὲν ἄν ὦν νυνὶ πεποιήκεν ἔπραξεν

それでもシリッポスがその時にその見解をもっていたとしたなら、この今に彼がしでかしてしまっていることの中の何一つも行うことはなかったのだった。

Antipho 4. 2. 6: οὐ γὰρ ἄν ἡμυνάμην μὴ τυπτόμενος ὑπ' αὐτοῦ.

何故なら、私はわが身を守ることをしなかったのだった、彼によって殴られなければ。

仮定節については、§348, εἰ および §350 参照：小辞 ἄν については、§281 参照。

義務・可能性または適合を示すいくつかの非人称表現においては、ἄν を伴わない未完了過去は次のことを表現することが出来る。すなわち、実現のことが成るべきであったかあるいは成ることが出来たところのものとは対応していないかあるいは対応していなかった、ということ。

ἔδει または (ἐ)χρήν

～しなければならなかったのだが、～してしまっていなければならなかったのだが

ἔξην, δυνατὸν ἦν, ἦν

可能だったのだが、可能であったのだが

295 5. 直説法時制用法の特別な場合

歴史的現在：過去の事実の叙述において、しばしばアオリストまたは未完了過去の代りに現在形を見る。 [1883, 1884]

Th. 7. 50: καὶ μελλόντων αὐτῶν, ἐπειδὴ ἐτοῖμα ἦν, ἀποπλεῖν ἢ σελήνην ἐκλείπει·
ἐτύγχανε γὰρ πασσέληνος οὔσα. καὶ οἱ Ἀθηναῖοι οἳ τε πλείους ἐπισχεῖν
ἐκέλευον τοὺς στρατηγούς ἐνθῦμιον ποιούμενοι [...]

そして彼らが航海し始めようとしていた時—すっかり準備が出来て一月が食になっている。何故ならたまたま満月だったのだ。そしてアテナイ人たちとまたより多くの人々は將軍たちに引き止めるようにと命ずるのであった、懸念をしながら。

296

格言のアオリスト：箴言や一般的真実 (γνώμαι) の言表行為においてギリシア語は好んでアオリストを用いる。 [1931, 2338, 2567a]

E. Tr. 95-97: μῶρος δὲ θνητῶν ὅστις ἐκπορθεῖ πόλεις
[...] αὐτὸς ὤλεθ' ὕστερον.

死すべき者どもの中でも愚か者、ポリスを略奪する限りの者は、・・・自分が後で滅んだのだ。

297

(会話の中で) **すぐの反応を示すアオリスト** [1937]

Ar. Eq. 696: ἦσθην ἀπειλαῖς.
おっと嬉しいねえ、脅しとやらは。

298

[2203, 2209-2214]

目的-帰結の価値の未来：直説法未来はしばしば目的の接続法のそれに近い目的-帰結の意味を持つ (接続法 4 参照)；未来はその時「法の」意味において現れる (§280 参照)。未来を主に関係節において、そしてまた努力または世話の動詞にしばしば依存する目的節において見る。それらは接続詞 ὅπως,あるいはより稀に ὡς によって導かれる。未来は主節が過去であっても用いられる (§348 参照)。否定詞は μή である。

D.19.43: ἔδει ψήφισμα νικῆσαι τοιοῦτο δι' οὗ Φωκεῖς ἀπολοῦνται.

そのような票決が勝利しなければならなかった。それを通じてフェニキア人たちが滅ぶような票決が。

S. Aj. 658-59: κρύψω τόδ' ἔγχος τοῦμόν, ἔχθιστον βελῶν,
γαίας ὀρύξας ἔνθα μή τις ὄψεται.

隠すことにしよう、この私の剣をば、武器の中で最も厭うべきものを、大地を掘った上で、そこに誰かが見ることのないようにと。

A. Ch. 265: σιγᾶθ', ὅπως μὴ πεύσεταιί τις, ὧ τέκνα.
お黙りなさい、誰かが聞きつけないように、子供たちよ。

希求法

299 1. 願望の言表行為（εἶθε, εἰ γάρ が、または特に韻文では ὥς が先行し、または先行することなしに） [1814-1819]

Pl. Phdr. 279c: πλούσιον δὲ νομίζοιμι τὸν σοφόν.

然るに、賢人をこそ富裕な人と私が思いますように！

S. OT 830-31: μὴ δῆτα, μὴ δῆτ', ὧ θεῶν ἄγνων σέβας,

ἴδοιμι ταύτην ἡμέραν.

決して決して、神々の清らかな尊厳よ、私が見ることなどがありませぬように、その日をば。

300 2. 可能性（可能法）の言表行為：ἄν を伴う希求法 [1824-1834]

可能性（可能法）は小辞 ἄν を伴う希求法によって表現される。ἄν は賭けの条件があることを想起させる。この条件は仮定節によって、または、例えば分詞によって表現されることが出来る。もし条件が可能であるとして与えられるなら、仮定節は希求法に置かれる。

Pl. Grg. 486b: ἀποθάνοις ἄν, εἰ βούλοιο θανάτου σοι τιμᾶσθαι.

君は死ぬことだろうよ、もしも君に対して死刑の宣告を彼が望むとすればね。

E. Med. 818: σὺ δ' ἄν γένοιό γ' ἀθλιωτάτη γυνή.

然るに、あなたこそがなることでしょう、最もみじめな女に。

仮定節については、§348, εἰ および §350 参照：小辞 ἄν については、§281 参照。

時に希求法に置かれた関係節は、可能であるとして与えられた条件を示すことが出来る。

S. Ant. 666: ἀλλ' ὄν πόλις στήσειε, τοῦδε χρὴ κλύειν.

いや、ポリスが彼を立てたからには、彼のことを聴き入れなければならぬのだ。

301 3. 斜希求法（補語節においてのみ）

斜希求法（ラテン語 obliquus, 「間接的」から）は過去の事実に関係し、また二次時制におかれた主節に依存する補語節において現れる。斜希求法を直説法（非実現の直説法を除く）または接続法の代わりに見ることがある。原則として話者はそれによって述べられた過去の事実に関しては可能性の法上にしか表現されないことを了解させる。

間接話法においては、斜希求法は報告された事柄が不確かさまたは実現の可能性のニュアンスを示唆するというを同様に合図することがある。間接疑問文において特にそうである。 [1823]

X. An. 5. 7. 18: πρὸς τοὺς Κερασούντιους ἔλεγον ὅτι θαυμάζοιεν τί ἡμῖν δόξειεν ἐλθεῖν ἐπ' αὐτούς.

ケラススの人々に向って彼らは語るのだった、彼らは驚いているのだ、何故に我々には彼らに立ち向かうことがよしと思われたか、と。

- X. An. 2. 1. 3: οὔτοι ἔλεγον ὅτι Κύρος μὲν τέθνηκεν, Ἀριαῖος δὲ πεφευγὼς ἐν τῷ σταθμῷ εἶη.
これらの人々は語るのであった、キューロスは一方で死んでしまったが、他方アリアイオスは逃亡して宿営地にあると。
- X. HG 3. 2. 18: πέμψας πρὸς Δερκυλίδαν εἶπεν ὅτι εἰς λόγους βούλοιο αὐτῷ ἀφικέσθαι.
デルキュリダースに（使者を）送った上で彼はこう言った、彼との議論へと彼は入りたく思っていると。
- Pl. Ap. 21a: ἤρετο γὰρ δὴ εἴ τις ἐμοῦ εἶη σοφώτερος.
何故なら、彼は尋ねたのだったから、誰かがこの私より賢くてあるかどうかと。

302

時間・仮定または関係節において、斜希求法は一般化の意味の ἄν を伴う接続法に代り得る（接続法3参照）。過去の事実が問題である時、希求法は過去の反復の意味を取る；ἄν は決して伴わない。

- Th. 2. 15: ὁπότε μὴ τι δείσειαν, οὐ ξυνῆσαν βουλευσόμενοι ὡς τὸν βασιλέα.
恐れるものが何もないとき、熟慮しようとして彼らは集まりはしなかった、王の方へとは。
- E. Tr. 376: οὐς δ' Ἄρης ἔλοι,
οὐ παῖδας εἶδον.
だが、アレースが捕らえた者たちは、子供たちを見ることはなかったのだ。
- X. An. 1. 8. 10: εἶχον δὲ τὰ δρέπανα ὡς διακόπτειν ὅτῳ ἐντυγχάνοιεν.
それら（戦車）は諸々の鎌を備えていた、ぶつかる限りのものを刈り取るために。

また、結果節において過去の反復の希求法を見ることがある（非常に稀）。

303 4. 希求法の牽引（一般に補語節において）

[2186-2187]

諸々の節が一そこで希求法が用いられている—諸々の文脈と論理的に結びつけられてあってはまた期待される法に代って、法の牽引によって、希求法に置かれる。

- Pl. R. 7.515d: τί ἂν οἶει αὐτὸν εἰπεῖν, εἴ τις αὐτῷ λέγοι ὅτι τότε μὲν ἑώρα φλυαρίας, νῦν δὲ [...] ὀρθότερον βλέπει [...];
彼が何を言うと君は思うかね、もし誰かが彼に、あの時諸々の愚にもつかぬものを彼は見たが、然るに今はよりまっとうなことを見ている、と言うとすれば。
- Th. 2. 72: ἀπεκρίναντο αὐτῷ ὅτι ἀδύνατα σφίσιν εἶη ποιεῖν ἅ προκαλεῖται ἄνευ Ἀθηναίων· παῖδες γὰρ σφῶν καὶ γυναῖκες παρ' ἐκείνοις εἶεν.
彼に彼らは答えた、申し出られていることどもはアテナイ人なしにするのは彼らには不可能なことなのだ、何故なら、彼らの子供たちは、そして女たちも彼らの下にあるのだから、と。

接続法

304 1. 熟慮の接続法

[1805-1808, 2639]

熟慮の接続法は疑問文の中で用いられる。それは話者または主語が為さねばならないことまたは為したいことについて躊躇いがあるときである。

E. Ion 758: εἴπωμεν ἢ σιγῶμεν;

我々は話すべきか、黙すべきか？

X. Mem. 2. 1. 23: ὄρω σε, ὦ Ἡράκλεις, ἀπορῶντα ποίαν ὁδὸν ἐπὶ τὸν βίον τραπήη.

君をだ、私は見ているのだよ、ヘーラクレス、その戸惑っている所をね、どのような道を君が人生へと向かったものかとねえ。

305 2. 勸奨・禁止

[1797-1800, 1840-1844, 2756b]

勸奨の接続法は1人称で、原則として複数で用いられる。

2人称または3人称へと差向けられた禁止を表わすため、接続法は専らアオリストに置かれて、μήに先行されて用いられる。点括的禁止が問題なのである（命令法、§309 参照）。

Pl. Ap. 19a: ἀναλάβωμεν οὖν ἐξ ἀρχῆς τίς ἢ κατηγορία ἐστίν.

されば始めから我々は取りあげてみようではありませんか、いかなるもので告訴状はあるかと。

X. An. 7. 1. 29: μὴ πρὸς θεῶν μαινώμεθα μηδ' αἰσχροῦς ἀπολώμεθα.

神々かけて我々は狂気の沙汰に及ぶことも恥ずべき仕方です死ぬなんてこともせぬことにしようではないか。

Pl. R. 7. 517c: καὶ τόδε συνοιήθητι καὶ μὴ θανμάσης ὅτι οἱ ἐνταῦθα ἐλθόντες οὐκ ἐθέλουσιν τὰ τῶν ἀνθρώπων πράττειν.

このことも君は同意し、驚かぬようにもしてくれたまえ、そこへと至り着いた者たちは世の人々のことどもを行う気には、最早ならぬのだということ。

306 3. ἄν を伴う接続法におかれた補語節

[1813, 1768]

重要なのは、主節において言表された諸々の事実が実現されるために期待される諸々の状況あるいは条件を示すところの、あるいは思い描かれた—ほとんどの場合—一般的価値についてであるが—諸々の事実へと関連するところの、諸々の節である。

この前途予見的—かつ、場合によっては、一般化の—価値を伴った接続法は、時間・関係および比較、仮定および譲歩的な諸々の節において見られる。そして稀に、間接疑問文および目的節において見られる（§350 参照）。

ἄν を伴う接続法における仮定は、あるいは将来において期待される特別の事実に—主節の動詞はその時未来に置かれる—あるいは全ての時制において有効な一般性に—主節の動詞はその時現在に置かれる—関連する。

接続詞 εἰ は, ἄν との約音によって, 多くの場合 ἐάν[ā], ἦν 或いは ἄν[ā] を与える。

ἄν を伴う接続法の全ての補語節において, 否定詞は μή である。

S. Ant. 580-81: φεύγουσι γάρ τοι χοῖ θρασεῖς, ὅταν πέλας
ἤδη τὸν Αἰδὼν εἰσορῶσι τοῦ βίου.
何故なら, 大胆不敵の者どもさえが逃げてゆくのですから, 身近に今や人生のハデスを彼らが見入るよ
うなその時にはだ。

Pl. Ly. 211b: ἀλλά τι ἄλλο αὐτῷ λέγε, ἵνα καὶ ἐγὼ ἀκούω, ἕως ἄν οἴκαδε ὦρα ἢ ἀπιέναι.
いや, 何か別のことを彼に語りたまえよ, この僕もまた聞こうがためにねえ, 家へと向かって立ち去る
時間まではだよ。

Pl. Smp. 196e: πᾶς γοῦν ποιητὴς γίγνεται, οὐ ἄν Ἔρως ἄψηται.
さればともかくもすべての者は詩人となるのだ, その者にエロースが触れるような人であればね。

Pl. Ly. 210d: ἐὰν μὲν ἄρα σοφὸς γένηι, ὃ παῖ, πάντες σοὶ φίλοι καὶ πάντες σοὶ οἰκεῖοι ἔσονται.
してみると, 一方で君が賢くなるとすれば, 子供よ, すべての人々が君に親しく, また全ての人々が君
に身内の者であることだろうよ。

Men. frg. 620 Körte: ἄν ἴδῃ τις ἐνύπνιον, σφόδρα
φοβούμεθ' ἄν γλαῦξ ἀνακράγη, δεδοίκαμεν.
もし誰かが夢を見るようなら, 我々はひどくおびえる。もし梟が鳴くようなら, 我々は怖れる。

仮定節については, §348, εἰ および §350 参照: 小辞 ἄν については, §281 参照。

期待が ἄν なしの接続法によって通常表現 τί πάθω; 「何を私は蒙るのか?」において表現される

307 4. 目的: 目的節

[2193-2206]

意図または目的は, ἵνα, ὅπως または ὥς (§348 参照) によって導かれる接続法 (それでなければ接続法は斜希求法によって置き換えられるかもしれないのだが: 希求法 3 参照) に置かれた節によって表現される。もし, 目的節が否定的であるとするれば, それは単純に μή によって導かれる。

X. Mem. 3. 2. 3: καὶ στρατεύονται δὲ πάντες, ἵνα ὁ βίος αὐτοῖς ὡς βέλτιστος ἦ.
そして然るにすべての者どもは戦っている, 最もよい人生が彼らにあるように。

E. Tr. 341-42: βασιλεία, βακχεύουσιν οὐ λήψη κόρη,
μή κοῦφον αἶρη βῆμ' ἐς Ἀργείων στρατόν;
女王よ, あなたはパッコスにとり憑かれた娘をとりおさえないのですか?, 軽ろやかな足取りがアルゴ
ス人たちの軍隊へとさらってゆかぬように。

308 5. 恐れ of 動詞に依存する節：接続法を伴う μή

[2221-2224]

恐れ of 観念を示す表現（時に言外の）の後、節は**接続法**が後に続く**μή**によって導かれる。それは人が何か起こることを恐れる時である。願望されることが起こらないのではと恐れるなら、**μή οὐ**が用いられる。

E. Med. 282-83: δέδοικά σε [...]

μή μοί τι δράσης παῖδ' ἀνήκεστον κακόν.

わしはそなたを案ずるのだ、そなたがわしの娘に取り返しのつかぬ悪事をしでかしはしないかと。

X. Mem 2. 3. 10: δέδοικα, ἔφη, ὦ Σώκρατες, **μή οὐκ ἔχω** ἐγὼ τοσαύτην σοφίαν [...]

私は怖れている、彼は言った、ソクラテースよ、この私はそれほどの大きな智恵を持たないのではないかと。

μήが直説法とともに見出されるが、それはもし恐れが過ぎ去った事実に関わるとすればである。

Th. 3. 53: νῦν δὲ φοβούμεθα **μή** ἀμφοτέρων ἅμα **ἡμαρτήκαμεν**.

しかるに今、我々は危惧するのだ、双方を同時に我々は失ってしまっているかと。

接続法（または直説法未来）が後に続く **οὐ μή** は考えられた事柄が生ずる何の機会を持たないという事実の強い肯定に対応する（直説法未来または接続法が続く **οὐ μή** はまた禁止を表現することもある：§289 参照）。

E. Tr. 698: **οὐ μή** δάκρυσιν **σώση** τὰ σά.

涙が彼を救うようなことはありはしないのだ、お前の涙が

309 命令法

[1835]

命令が**肯定的**に言い表される時、命令法現在あるいは命令法アオリストが見られる。一般に二つの語幹の間での通常の区別に従ってアオリストは明確で点括的の命令を示し、現在は持続的またはその実行が持続の中に広がる命令を示す。しかしながら、時として、一方の使用をこのように正当化するかそれとも他方の使用を正当化するかは、困難である。

Ar. Av. 80-81: τὸν δεσπότην

ἡμῖν **κάλεσον**.

ご主人様を我々に（君は）呼びたまえ。

Ar. Av. 172: **οἰκίσατε** μίαν πόλιν.

（君らは）建てたまえ、一つのポリスをだ！

Ar. Av. 208: **εἴσβαινε** **κάνέγειρε** τὴν ἀηδόνα.

中へ入りなさい、そして鶯を起しなさい！

Ar. Av. 175-176: **βλέψον** κάτω. -καὶ δὴ βλέπω.- **βλέπε** νῦν ἄνω.

βλέπω.

下をご覧！—むろん見るとも。—今度は上を御覧！—見るとよ。

命令が否定的に言いあらわされるとき、命令法現在であれ接続法アオリストであれ否定詞は μή を見る。二つの語幹の間の通常の区別に従ってである。特に命令が現在進行中の動作を妨げる意図があるとき命令法現在とともに μή がしばしば見られる、そして、管理下におくことが重要な時は接続法アオリストに μή が使われる。 [1840]

Ar. V. 37: παῦε παῦε, μή λέγε.
止める, 止める, 言わんでくれ。

Ar. V. 919: πρὸς τῶν θεῶν μή προκαταγίνωσκ' ὦ πάτερ.
神々にかけて, 先走って有罪宣告などしないで頂戴よ, お父さん。

Ar. Av. 654: μηδὲν φοβηθῆς.
何も気遣いなさるな。

Ar. V. 922: μή νυν ἀφήτέ γ' αὐτόν.
とにかく彼奴を逃しちゃあいけません!

アオリスト命令法は原則として決して μή とともに用いられることはない。このことは特に肯定的意味を持っていると感ぜられていたという事実によると思われる。

310 不定法の統辞法

[1966-2038]

不定法は動詞の活用されていない形である。それは行為または状態をそれ自体において、すなわち特定の主語へのいかなる参照もなしに示すのである。それは行動の抽象名詞の凝固した形から発展したのであって（不定法5参照）、それゆえそれは動詞の名詞形として考えられることもある、それは格変化をしないのではあるが。この形は様々の動詞の語幹にもとづいて形成され、特有の語尾によって能動、中動、受動の各相を示している。

動詞の形として、それは補語を支配することもあるし、それに規定されることもある、そして法の小辞 $\alpha\upsilon$ を伴うことができ、不定法には可能性のあるいは非実現性の価値が与えられる（§281参照）。 [1967]

それだけでは現実化されない行為の観念しか与えない不定法はまた**対格**を伴うことができる。この対格が動詞の示す行為の特定の主語を導入するのである。これこそいわゆる**不定法構文**である。場合によっては、主語の属性もまた対格に置かれる。 [936]

不定法が前面に出すのは発言される事件ないしは状態が直接には与えられず、**思惟または発話という行為によって媒介される**という事実である。それは動詞の示す行為のいわば概念化に対応する。それ故不定法の構文において、対格におかれた主語が見られるのは意外なことではないのである。それは、まずこの主語が思惟されもしくは話される対象として考えられているからである。

不定法構文における対格に置かれた主語については、対格5も参照。

E. Ba. 461: ῥάδιον δ' εἰπεῖν τόδε.
それを言うのは容易である。

S. Aj. 1350: τόν τοι τύραννον εὐσεβεῖν οὐ ῥάδιον.
いいかね、僭主が敬虔であるということは容易なことではないのだよ。

Isoc. 2. 15: φιλόπρωπον εἶναι δεῖ καὶ φιλόπολιν.
人間好きでなければならない、そしてまたポリス好きでも。

Pl. Smp. 201a: εἶπον γάρ, φάναι τὸν Ἀγάθωνα.
「確かにそういました」、とアガトーンは言った。
(語り手はここでは伝えられた会話を物語っている)。

不定法は不定法構文と同様に名詞化されることがある（§205参照）。

311 不定法を伴う否定

[1971]

不定法は、あるいは否定詞 $\text{o}\acute{\upsilon}$ あるいは否定詞 $\mu\eta$ によって、これら二つの否定詞のそれぞれの意味にしたがって、否定されることが出来る（§282-289 および §350 参照）。

不定法を伴う否定詞の用法の特殊な例については、不定法 3, 4 参照。

不定法の主な用法例

312 1. 不定法における語幹の意味

[1967a]

語幹の価値 (§89 参照) に応じて、**不定法現在**は行為をその展開と持続において想定し、**不定法アオリスト**は行為の完遂を動作の展開へを考慮せずに示すか、またはそれをその点括的な視点において想定し、そして**不定法完了**は持続状態または既に行われた行為の継続的結果を示す。**不定法未来**については、それは将来における動作の実現を投影する。目的の意味を持ちうる。

不定法の語幹はそれ自身によっては主動詞の行為との関連した先行性あるいは同時性があるかどうかを主動詞との関連によっては示さない。その推測を可能にするのは文脈である。

しかしながら、アオリスト幹は行為の実現（それが起こるといふ単純な事実）を示すが、**不定法アオリスト**はしばしば**行為が起こったこと**（前時性）を示すのに適する。同様に、現在幹は行為をその展開において示すので、**不定法現在**は**行為が進行中であること**（同時性）を示すのに適している。

- Pl. Grg. 462d: βούλει οὖν, ἐπειδὴ τιμᾶς τὸ χαρίζεσθαι, σμικρόν τί μοι χαρίσασθαι;
されば、(人)を喜ばせることを君が大切にすることからは、ほんの少しばかり何か僕を喜ばせることを欲してくれるかね。
- X. An. 1. 2. 14: καὶ λέγεται **δειθῆναι** ἢ Κίλισσα Κύρου ἐπιδειξάει τὸ στρατεύμα αὐτῆ.
そして語られているところでは、キリキア女はキュロスに頼んだということである、その軍を彼女に見せるようにと。
- Pl. Prt. 317b: ὁμολογῶ τε σοφιστῆς εἶναι καὶ παιδεύειν ἀνθρώπους.
私は同意するね、私がソフィストであるということ、そして人々を教育していることを。
- D. 18. 103: καίτοι πόσα χρήματα τοὺς ἡγεμόνας τῶν συμμοριῶν οἴεσθέ μοι δίδόναι;
とはいえ、どれほどの金銭をであるとあなた方はお思いであろうか、シュンモリア（課税者グループ）の指導者たちが私に与えようとしているのは。

313 2. 不定法と名詞化された不定法構文

[2025, 2031]

- Philem. frg. 27 Kock: χαλεπὸν τὸ ποιεῖν, τὸ δὲ κελεύσαι ῥάδιον.
実行することは難しく、しかるに要求することは容易だ。
- Ar. Pl. 146: ἅπαντα τῷ πλουτεῖν γὰρ ἐσθ' ὑπήκοα.
全てのものは富裕であることには耳を傾けるのだから。
- Epicur. Ep. 3. 126: ὁ δὲ παραγγέλλων τὸν μὲν νέον καλῶς ζῆν, τὸν δὲ γέροντα καλῶς καταστρέφειν, εὐήθης ἐστὶν διὰ τὸ τὴν αὐτὴν εἶναι μελέτην τοῦ καλῶς ζῆν καὶ τοῦ καλῶς ἀποθνήσκειν.
一方で若者に立派に生きることを、他方で老人に立派に死ぬことを勧める人、彼はお人好しである、同じ実践が立派に生きることのまた立派に死ぬことのだとしてあることのゆえに。
- Democr. 68. B 62 DK: ἀγαθὸν οὐ τὸ μὴ ἀδικεῖν, ἀλλὰ τὸ μηδὲ ἐθέλειν.
善きことであるのは不正を働いてはいないといったことではなく、否、そう欲しさえしないということだ。

名詞化された不定法の一般的に抽象化された価値という事実から、それを伴う否定は多くの場合 *μη* である (§284 参照)。

名詞化については、§205 参照。

314 3. 動詞に依存する不定法または不定法構文

[1991-2000]

多くの動詞は補語として不定法または不定法構文を取ることがある。もしも動詞が不定法単独から伴われるならば、これは一般に**目的の意味**を示す（不定法5参照）、しかしそれはまた、他動詞を伴って、**目的補語**の機能も引受ける。

動詞が不定法構文を支配するということ—これは目的補語の機能を引受ける—は、即ち思考または話の動作の内容である。

補語的不定法（または不定法構文）に平行して、いくつかの動詞は更に主語または動詞の補語とを**同格の分詞**とともに持つことが出来る（分詞4参照）。不定法または不定法構文に対して、同格の分詞を伴う構文は、考えられていることがまさに行われている最中の動作であることを示す。

例えば、μανθάνω という動詞を以って、我々は以下の文章を持つことが出来るであろう。

μανθάνω φιλοσοφείν	私は理解する、哲学を実践することを。
μανθάνω σε φιλοσοφείν	私は理解する、君が哲学を実践することを。
μανθάνω σε φιλοσοφούντα	私は理解する、君がまさに哲学を実践中であることを。
μανθάνω φιλοσοφῶν	私は理解する、私が哲学をまさに実践中であることを。 あるいは、私は理解する、哲学を実践しながら。

他の動詞を用いて：

- X. Cyr. 5. 1. 21: καὶ τοῦτο μὲν οὐκ αἰσχύνομαι λέγων· τὸ δ' ἂν μένητε παρ' ἐμοί, ἀποδώσω, τοῦτο, εὖ ἴστε, ἔφη, αἰσχυνοίμην ἂν εἶπειν.
そしてそのことを、一方、私は言いつつも恥じはしないのである。他方、「もしも君らが私のそばに止まってくれるならば私は支払うだろう」というこのことを、これは、よく知っていたきたいのだが、と彼は言った、私は言うことを恥じるのだと。
- X. Cry. 1. 3. 1: πάντων τῶν ἡλικίων διαφέρων ἐφαίνετο.
すべての同年輩の者らより明らかに彼は抜きん出ている。
- X. Smp. 1. 15: τῇ φωνῇ σαφῶς κλαίειν ἐφαίνετο.
その声でもって、彼は明らかに泣いていると見えた。

315 3a. 命令・意志・率先・願望を表現する動詞， 以下のような：

βούλομαι, ἐθέλω	欲する
δέομαι	尋ねる, 頼む
κελεύω, παραγγέλλω	命令する, 勧める
ἀναγκάζω	強制する
συμβουλεύω	忠告する
πείθω	説得する
ἔάω	許す
ἀπαγορεύω, κωλύω	妨げる, 禁ずる
τολμάω	敢えて~する
μέλλω	~する所である
ὀκνέω	~するのを躊躇う
ποθέω	熱烈に望む

Epicur. Ep. 3. 126: ὁ δὲ παραγγέλλων τὸν μὲν νέον καλῶς ζῆν, τὸν δὲ γέροντα καλῶς καταστρέφειν, εὐήθης ἐστίν.
一方、若者には立派に生きるよう、他方、老人には立派に死ぬよう勧める人は、お人よしである。

S. El. 256: ἄλλ' ἢ βία γὰρ ταῦτ' ἀναγκάζει με δρᾶν.
 しかし、何故なら力がそれらのことを私にそうさせたのである。

E. Tr. 1260-62: αὐδῶ λοχαγοῖς, οἱ τέταχθ' ἐμπιμπράναι
 Πριάμου τόδ' ἄστν, μηκέτ' ἀργοῦσαν φλόγα
 ἐν χειρὶ σφάζειν, ἀλλὰ πῦρ ἐνιέναι.
 私は司令官たちに言うのだ、お前たちはプリアモスのこの町を焼くべく配置されている者どもだが、もはや弱まった炎を手中に火を保っておくようなことはせずに、火を投げ込むようにと。

しばしば動詞 μέλλω には不定法未来が続く。

Pl. R. 7. 516a: συνηθείας δὴ οἶμαι δέοιτ' ἄν, εἰ μέλλοι τὰ ἄνω ὄψεσθαι.
 そこでだ慣れというもの、私は思うのだが、彼は必要とするだろう、もし、彼が上方のものを見ようとするなら。

316

以下のような否定的意味の動詞は、

ἀπαγορεύω	禁ずる
εἴργω	妨げる
φεύγω, φυλάττομαι	逃れる、警戒する
ἀπέχομαι	～することを控える

否定詞の μή (虚辞) あるいは μή οὐ (それら自身が否定される時) を伴う。

Pl. Prt. 334c: οἱ ἱατροὶ πάντες ἀπαγορεύουσιν τοῖς ἀσθενοῦσιν μὴ χρῆσθαι ἐλαίῳ.
 医者たちは皆、虚弱な人々に対してはオリヴ油を使用しないようにと禁ずるのである。

Pl. R. 1. 354b: οὐκ ἀπεσχόμεν τὸ μὴ οὐκ ἐπὶ τοῦτο ἐλθεῖν ἀπ' ἐκεῖνου.
 私は我慢することをしなかったのだ、そのことへとあのことから離れて移っては行かぬようになどは。

317 3b. 能力または訓練を示す動詞、以下のような：

δύναμαι, ἔχω	～することが出来る
ἐπίσταμαι, οἶδα	～を知っている
διδάσκω	教える
μανθάνω	学ぶ

Pl. R. 7. 530c: ἀλλὰ γὰρ τι ἔχεις ὑπομνήσαι τῶν προσηκόντων μαθημάτων;
 いや、というも、君はそれらふさわしい学科の中から何かを思い出すことが出来るのかしら。

Ar. Nu. 98-99: οὗτοι διδάσκουσ', ἀργύριον ἦν τις διδῶ,
 λέγοντα νικᾶν καὶ δίκαια κἀδίκαια.
 この人たちは教えるんですよ、もし人が金を支払うならば、正しいことどもも不正なことどももこれらを論じつつ勝利するようにとです。

318

対応する非人称的な言回し (不定法 4 参照) におけるように、否定型の言い回しが続く時、不定法は μή οὐ で否定される。

οὐ δύναμαι	～することが出来ない
οὐχ οἶος τε εἰμί	～することが出来ない
など	

319 3c. 語りと見解の動詞

語りの動詞（λέγω, ἀγγέλλω, など）と見解の動詞（νομίζω, ἡγοῦμαι, など）は不定法または不定法構文を支配する。

語りの動詞はまた ὅτι または ὡς によって導かれる肯定な節を支配する (§348 参照)。
φημί（肯定する）のような見解の動詞は不定法または不定法構文しか支配しない。

- Pl. Grg. 489e: ἀλλ' ἴθι εἰπέ, τίνας λέγεις τοὺς βελτίους εἶναι;
いや、さあ言いたまえ、どんな人たちが最も優れた人たちだと君は語るのかを。
- Pl. Prt. 320b: οὐχ ἡγοῦμαι διδασκτὸν εἶναι ἀρετήν.
私は思わない、徳が教えられるものであるとは。
- Pl. R. 7. 515d: τί ἂν οἶει αὐτὸν εἰπεῖν, εἴ τις αὐτῷ λέγοι ὅτι τότε μὲν ἑώρα φλυαρίας [...];
何を彼が言うかと君は思うかね、もし誰かが彼にかの時に彼は取るに足らぬものを見ておったのだと語るとすればだよ。
- X. An. 2. 1. 11: βασιλεὺς νικᾶν ἡγείται, ἐπεὶ Κύρον ἀπέκτεινε.
大王は勝利したと考える。キュロスを彼は殺したからには。

語りまたは見解の動詞の主語がまた不定法の主語でもあるとき、主語は**対格に置かれず**、もし、属詞があるときは、主語は**主格**に置かれる。

- Pl. Prt. 317b: ὁμολογῶ τε σοφιστῆς εἶναι καὶ παιδεύειν ἀνθρώπους.
私は同意する、私がソフィストであることにも人々を教育しているということにも。

語りまたは見解の動詞の受動的構文は非人称の仕方です時に一しかし何時もではない一用いられる。

- X. Mem. 1. 2. 30: λέγεται τὸν Σωκράτην εἰπεῖν ὅτι ὑικὸν αὐτῷ δοκοίη πάσχειν ὁ Κριτίας
こう語られている、すなわちソクラテースは言ったのだと、「豚の遇うようなそんな目にクリティアースは遇ったと彼には思われる」とこのように。
- Pl. Grg. 492e: οὐκ ἄρα ὀρθῶς λέγονται οἱ μηδενὸς δεόμενοι εὐδαιμόνες εἶναι.
してみるとまっとうな仕方では語られていないのである、何一つのものも必要とほしない者たちこそ幸福なのだ、とは。

320

以下のような、**否定**の意味を示す語りまたは見解の動詞は、

ἀρνοῦμαι	否定する
ἀντιλέγω, ἀμφισβητέω	反対する, 反駁する
ἀπιστέω	信じない

虚辞の否定詞の使用を伴う。

—**μή** 不定法構文の中で (**μή οὐ** 語りまたは見解の動詞が否定される時) ;
—**οὐ** 肯定的節の中で。

- S. Ant. 442: φῆς ἢ καταρνή μὴ δεδρακέναι τάδε;
お前は肯定するのか、それともそうしたことをやったことを否定するのか。
- D. 9.54: οὐδ' ἂν ἀρνηθεῖεν ἔνιοι ὡς οὐκ εἰσὶ τοιοῦτοι.
否定することさえもしないのだ、ある人々は、そのような人間ではないとでもいうように。

οὐ φημι という表現に不定法または不定法構文が続くものは、「否定する」または「～でないことを望む」ということを意味する。この表現はまた「～することを拒む」も意味する。

Pl. Grg. 467b: οὐ φημι ποιεῖν αὐτοὺς ἄβούλονται.

私は否定する、彼らの欲する所を彼らがなすのを。

X. An. 4. 5. 15: οὐκ ἔφασαν πορεύεσθαι.

彼らは拒んだ、前進することを。

321 4. 不定法または不定法構文を支配する非人称表現, 下記のような: [1985]

δεῖ, χρῆ	～しなければならない
πρέπει, προσήκει	～するのが相応しい
δοκεῖ	～と思われる
συμβαίνει	～という結果になる
ἔστι, ἔξεστι	～することができる, ～することが許される
εἰκός	もつともである, ありそうである
καλόν, δίκαιον, δυνατόν (など)	～は立派である, 正しい, 可能である
καιρός, ὥρα	～の時である

Hyp. Epit. 41: ὁμως δὲ χρῆ θαρρεῖν [...]

しかしながら勇気をもたねばならぬ。

Ar. Pl. 490: τοὺς χρηστοὺς τῶν ἀνθρώπων εὖ πράττειν ἔστι δίκαιον.

人間の中でも有用な人々が仕合せであることは正しい。

E. frg. 461 Nauck: αἰσχρόν τε μοχθεῖν μὴ θέλειν νεανίαν.

恥ずべきことだ、苦勞する気に若者がならぬことは。

D. 3. 23: ὑμῖν εὐδαίμοσιν ἔξεστι γενέσθαι.

君たちには幸福になることが許されているのだ。

この最後の例において、関与する人の与格を伴う不定法の属詞の（随意の）一致に注意 (§207 参照)。

不定法の否定は μὴ である、これらの言い回しに固有なあるいはそれらが示唆する意志の觀念に固有な一般化の意味にしたがってである (§284 参照)。

322 不定法は否定表現の後 μὴ οὐ によって、以下のように否定される [2739-2743]

οὐχ οἶον τε, οὐ δυνατόν	～は可能ではない
οὐ καλόν	～は立派ではない
など。	

Pl. R. 4. 427e: οὐχ ὀσιόν σοι ὄν μὴ οὐ βοηθεῖν δικαιοσύνη.

君にとって正義に救いの手を差し伸べないのは不敬虔である。

非人称（超時制的）言い回しについては、§199 もまた参照。

323 5. 目的の意味の不定法

[1969-2008]

多くの統辞的用法において不定法に固有の**目的**的（および**結果**の）意味は不定法の起源につながっている。それは動作の抽象名詞の格形（特に所格，与格）から発展したように思われる。

目的の意味の不定法はある種の動詞と規則的に用いられる（不定法 3a, 3b 参照）。他の多くの動詞もまた時に目的の不定法を伴うことがある，たとえば以下のような：

δίδωμι, ἐπιτρέπω	与える, 任せる
αἰροῦμαι, ἀποκρίνω	選ぶ
πέμπω	送る
ἀφικνοῦμαι, ἤκω	着く
ἔφυν, πέφυκα	生まれた

Luc. VH. 1. 6: ἀπεκρίναμεν ἡμῶν αὐτῶν τριάκοντα μὲν φύλακας τῆς νεῶς παραμένειν, εἴκοσι δὲ σὺν ἐμοὶ ἀνελεῖν ἐπὶ κατασκοπῇ τῶν ἐν τῇ νήσῳ.

我々は選んだのだった，我々自身のものから，一方，船の30人の守備隊を止まるべく，他方，20人を私と一緒に島のものの偵察へと乗り出すように。

S. Ant. 523: οὗτοι συνέχθην ἀλλὰ συμφιλεῖν ἔφυν.

憎しみをともにするためにではなく，愛をともにするために私は生まれたのです。

324 6. 不定法を伴う形容詞

[2001-2003]

形容詞は，形容詞の有効性の領域を明確にする不定法から伴われるが，その際，全くしばしば目的・結果の意味を持ちながらにそうするのである（不定法 5 参照）。

したがって例えば，以下のように言う：

δεινὸς λέγειν	話すことに有能である
ἄξιος ἐπαινεῖσαι (または ἐπαινέσθαι)	賞賛されるに値する
εὐπρεπῆς ἰδεῖν	見目麗しい
など。	

325 7. 結果の不定法

[2011]

結果の不定法あるいは**不定法構文**が接続詞 ὥστε によって，あるいはより稀に ὡς によって，導かれてあるのが見出すが，それはその結果が一つの目的あるいは期待として与えられている時である (§348, ὥστε もまた参照)。

οὗτος... οἷος および τοσοῦτος... ὅσος (§76 参照) の表現もまた不定法を支配することがある。

Pl. R. 7. 514a: ιδὲ γὰρ ἀνθρώπους [...] ὄντας ἐν δεσμοῖς καὶ τὰ σκέλη καὶ τοὺς αὐχένας, ὥστε μένειν τε αὐτούς εἰς τε τὸ πρόσθεν μόνον ὄραν.

見たまえ，人々が縛めの中にあるのを，その四肢も首も。その結果彼らがそこに止まり前を見るだけだというのを。

Pl. Ap. 31a: ἐγὼ τυγχάνω ὦν τοιοῦτος οἶος ὑπὸ τοῦ θεοῦ τῇ πόλει δεδόσθαι.
この私は偶然にもそうしたものである、神によってポリスに与えられてしまっているといったような。

期待されるように、否定詞は μή である。

不定法の結果の意味については、不定法 5 も参照。

326 8. πρίν の後の不定法 [2430-2431, 2453-2456]

不定法または不定法構文が、時間の接続詞 πρίν (～の前に) によって導かれるのを見るが、それは決まって肯定的な主節とともにであり、そして時としてまた否定的な主節とともにである (§348, πρίν 参照)。

Ar. Pl. 376: κατηγορεῖς γὰρ πρίν μαθεῖν τὸ πράγμα μου.
なぜなら、君は非難しているからだ、私の仕事を知る前に。

327 9. 不定法用法の特別な場合 [2012]

制限的意味 (時にまた目的-結果の意味、不定法 5 参照) の不定法は以下のようないくつかの固定的定式において用いられる。

(ὡς) ἐμοὶ δοκεῖν	私にはその様に思われることに
ὡς (ἔπος) εἰπεῖν	言わば
ὀλίγου, μικροῦ δεῖν	ほとんど～する必要はない
ἀκοῦσαι	それを聞いて
τὰ νῦν εἶναι	現在あるところでは、現状では

328 [2013-2015, 2036]

不定法は時に驚嘆または悔しさ (時に冠詞 τό が先行する) もしくはさらに願望を表わす感嘆文の中で用いられる。

また命令法 (特に詩の中で) の意味において用いられる。

A. Eu. 837: ἐμὲ παθεῖν τάδε.
この私がこれらの目に遭うなんて。

Ar. Nu. 268: τὸ δὲ μηδὲ κυνῆν οἴκοθεν ἐλθεῖν ἐμὲ τὸν κακοδαίμον' ἔχοντα.
しかるに帽子さえもかぶらず、この俺様つまり不幸を背負った俺が家からやってきたんだ。

Hdt. 5. 105: ὦ Ζεῦ, ἐκγενέσθαι μοι Αθηναίους τίσασθαι.
ゼウスよ、私がアテーナイ人たちに復讐することが許されますことを。

Simon. 92: ὦ ξεῖν', ἀγγέλειν Λακεδαιμονίοισ' ὅτι τῆδε κείμεθα τοῖς κείνων ῥήμασι πειθόμενοι.
客人よ、ラケダイモン人々に知らせること (知らせよ)、ここに我々は埋められていることを、彼らの言に従って。

A. Pr. 712: οἷς μὴ πελάζειν.
彼らに決して近づかぬこと。

329 分詞の統辞法

[358, 2039-2148]

分詞は動詞の形容詞形の一つである (§93 参照)。分詞は動詞の行動を主語に与えながら主語を修飾する。その名称（ラテン語 *participium*：ギリシア語 μετοχή「与る事」から翻訳された）が示すように、分詞は動詞体系と名詞体系とに与る：分詞は異なる動詞幹の上に成立ち、そして特有の語尾によって能動・中動または受動相を示す。それは形容詞のように性・数・格に従って曲用する (§182-186 参照)。動詞のようにそれは補語を支配し、あるいは限定される。そして、法小辞 *äv* を伴うことがある。それは分詞に可能性・非実現性の意味を与える (§281 参照)。

分詞は名詞の限定辞として用いられ (§201 参照)、または名詞化される (§205 参照)；分詞はまた、非常にしばしば言表の機能の一つ（主語または補語）に同格 (§202 参照) に置かれる。

同格におかれた分詞は状況補語的意味（時間・原因・譲歩など）の担い手である。それは文脈から推測されたり、あるいは分詞を導く接続詞によってまたは副詞によって明らかとなる（分詞 4, 参照）。

330 分詞を伴う否定

[2728-2734]

分詞は否定詞 *οὐ* あるいは否定詞 *μή* によって否定されるが、それはこの二つの否定詞の各々の意味にしたがってである (§282-289, 350 参照)。

分詞の主な用法例

331 1. 分詞における語幹の意味

[1872, 2043-2044]

語幹の意味に応じて (§89 参照)、現在分詞は行動をその展開と持続において想定し、アオリスト分詞は行動の展開を顧慮することなく行動の完遂を示し、あるいは点活的観点において行動を想定する。そして、完了分詞は持続的状態あるいは終えられた行動の持続的結果を示す。未来分詞に関しては、分詞は将来における行動の実現化を投影する。未来分詞はほとんどの場合目的の意味を持つ。

分詞語幹はそれ自身によっては主動詞の行動に関する前時性があるのかそれとも同時性があるのかということをも主動詞の行動に関しては示さない。それを推測することを許すのは文脈である。

しかしながら、アオリスト幹が行動の実現化（それが起こった単純な事実）を示しながら、アオリスト分詞は行動が既に起こったこと（前時性）を記すのに適する。同様に現在幹はその展開の中で、動作を示しながら、現在分詞は行動が行われている（同時性）ということに適している。

Pl. Phdr. 227b: πεύση, εἴ σοι σχολή προΐόντι ἀκούειν.

きっと君は聞くだろうよ、もし君に歩いて行きながらも聞く暇があるのなら。

- E. Or. 1523: πᾶς ἀνὴρ, κὰν δούλος ἦ τις, ἤδεται τὸ φῶς ὁρῶν.
 全ての男は、たとえ何か奴隷といった者で彼があっても、光を目にしながら喜びます。
- Lys. 19. 35: ἀλλὰ μὴν τοῦτο πάντες ἐπίστασθε Κόνωνα μὲν ἄρχοντα, Νικόφημον δὲ ποιοῦντα ὅτι ἐκεῖνος προστάττοι.
 いや実のところ、それを君たちすべては知っているのだ、コノーンが一方では支配をしているのであり、他方ニコペーモスはかの者が命じていることをしているということ。
- S. Ant. 1192: ἐγώ, φίλη δέσποινα, καὶ παρῶν ἐρῶ [...]
 この私が、愛しいお妃さま、居合わせながらお話ししましょう。
- Luc. Icar. 9: καὶ οἱ μὲν τοὺς ἄλλους ἅπαντας θεοὺς ἀπελάσαντες ἐνὶ μόνῳ τὴν τῶν ὅλων ἀρχὴν ἀπένεμον [...]
 そして一方で或る者たちは他のすべての神々を追い払った上でただ一人の神のみに宇宙の支配を分かち与えたのだった。
- D. 8. 4: πρῶην τινὸς ἤκουσ' εἰπόντος ἐν τῇ βουλῇ [...]
 つい先日、誰かが評議会において・・・と言ったのを私は聞いた。
- Hyp. Epit. 41: χρὴ μεμνήσθαι μὴ μόνον τοῦ θανάτου τῶν τετελευτηκότων, ἀλλὰ καὶ τῆς ἀρετῆς ἣς καταλελοίπασιν.
 死んでしまった人々の死のことだけでなく、またさらに彼らが残した勇気のことも思い出さなければならない
- S. Ant. 460: **θανουμένη** γὰρ ἐξήδη, τί δ' οὐ;
 何故なら死んでも同然であることを私はよくよく知っておりました。どうしてそうでないことなどありませんでしょうか。
- Th. 2. 15: οὐ ξυνησαν **βουλευσόμενοι**
 彼らは熟慮しようと集うことはしなかった。

332 2. 名詞を限定する分詞および名詞化された分詞

[2049-2050]

- Luc. VH. 1. 5: οἱ πέραν κατοικοῦντες ἄνθρωποι
 対岸に住む人々。
- Lycurg. Leocr. 81: καὶ τῶν ἱερῶν τῶν ἐμπρησθέντων καὶ καταβληθέντων ὑπὸ τῶν βαρβάρων οὐδὲν ἀνοικοδομήσω παντάπασιν, ἀλλ' ὑπόμνημα τοῖς ἐπιγιγνομένοις ἐάσω καταλείπεσθαι τῆς τῶν βαρβάρων ἀσεβείας.
 そして神殿が蛮族によって焼かれそして破壊されたとしても、一つも絶対に私は再建しないことだろう。否、後世に蛮族の不敬虔の記憶が残されるままにしておこう。
- Pl. Sph. 258b: καὶ δεῖ θαρροῦντα ἤδη λέγειν ὅτι τὸ μὴ ὄν βεβαίως ἐστὶ τὴν αὐτοῦ φύσιν ἔχον;
 そして意を強くしながら今やこう語らねばならない。「あらぬもの」というものが確固として自らの自然本性を持ちながらあるということ。

通常表現：	τὸ μέλλον	将来
	οἱ παρόντες	助手たち
	τὸ εἰκός	もつともなこと
	など。	

期待されるように、形容語の位置のまたは名詞化された分詞を伴う否定は μὴ である。それは一般化の観念があるときである。そして確かめられた事実についての問題の時は οὐ である。

名詞化された分詞を伴う冠詞の個別化または一般化の意味については、§29, 205 参照。

333 3. 属詞機能の分詞

[1961]

迂説的動詞形において属詞機能の分詞を見る。

X. An. 4. 7.2: **συνεληλυθότες δ' ἦσαν** αὐτόσε καὶ ἄνδρες καὶ γυναῖκες καὶ κτήνη πολλά.
しかるに集まってあったのだった、そこへと、男たちも女たちも沢山の家畜どもも。

属詞機能の名詞化された分詞は一分詞が同一性を強調する事実から—その冠詞を保つ (§208 参照)。

Pl. R. 7. 516b: οὗτος ὁ τὰς τε ὥρας **παρέχων** καὶ ἐνιαυτοῦς.
このものこそ（太陽）は諸々の季節と年を提供するそのものであるのです。

334 4. 同格および状況補語の意味の分詞

[2054]

主語または補語に添えられた分詞はギリシア語では非常によく用いられる。分詞は種々の**状況補語の意味**を取り—そしてしばしば同時に複数である—それは文脈から推測される。時に接続詞または副詞が分詞の状況補語の意味を明らかにする。

同格分詞を伴う否定については、§350 参照。

335 4 a. 時間的意味

[2061]

Pl. Ap. 40b: πολλαχοῦ δὴ **με** ἐπέσχε **λέγοντα** μεταξύ.
いたるところでまさに私が話している最中に彼は私を引き止めた。

336 4 b. 原因的意味

[2064]

分詞の原因的意味はしばしば **ἄτε** または **οἷα (οἷον)** によって示される、それはその原因が話者によって**客観的**であると与えられるならばである。またそれは **ὥς** によって与えられる、それはその原因が**一個の見解**にこそ属するものとして与えられるならばである (4g 参照)。

Pl. Phd. 102d: λέγω δὴ τοῦδ' ἔνεκα, **βουλόμενος** δόξαι σοὶ ὅπερ ἐμοί.
このことのためにまさに私は語っているのである、この私に思われるそのことこそが君に思われるようにね。

X. Cyr. 1. 3. 3: ὁ δὲ **Κῦρος ἄτε** παῖς ὢν καὶ φιλόκαλος καὶ φιλότιμος ἤδετο τῇ στολῇ.
然るにキュロスは、美しいもの好きでも名誉好きでもあった子供であったという事実から、その衣裳を喜んだのだった。

Pl. R. 1. 338e: καὶ τὸν τούτου **ἐκβαίνοντα** κολάζουσιν ὥς **παρανομοῦντά** τε καὶ **ἀδικοῦντα**.
そしてそれから逸脱する者を人々は法を踏み外し不正をなす者だと思って人々は懲らしめるのだ。

337 4 c. 目的の意味

[2065]

未来分詞はしばしば目的の意味を持つ。意志の主観的意味を強調する時 *ὥς* が先行する (4g 参照)。

- Th. 2. 15: *ὁπότε μή τι δείσειαν, οὐ ξυνήσαν βουλευσόμενοι.*
恐れるものが何もないような時、彼らは熟慮しようと集うことはしなかった。
- X. An. 1. 1. 3: *ὁ δὲ πείθεται καὶ συλλαμβάνει Κύρον ὡς ἀποκτενῶν.*
しかるに説得されて彼はそしてまた殺そうと思ってキューロスを捉える。

338 4 d. 仮定的意味

[2067]

- E. Ph. 504-05: *ἄστρον ἂν ἔλθοιμι ἠλίου πρὸς ἀντολάς*
καὶ γῆς ἔνερθεν, δυνατὸς ὦν δρᾶσαι τάδε
星々の、太陽の、それら諸々の上昇の方向へと、また大地のその中へと私が行くことが出来るならば、
もしそうしたこともを行うことが私は可能であったとして。

仮定的意味の分詞の否定は *μή* である (§284 参照)。

339 4 e. 譲歩または反意の意味

[2066]

分詞の譲歩の意味はしばしば *καί* または *καίπερ* (時に韻文では *περ*) で示される。

- Pl. La. 197c: *οὐδὲν ἐρῶ πρὸς ταῦτα ἔχων εἰπεῖν.*
何一つもそれらに対し私は言うまい、言うことは出来るのですが。
- A. Th. 712: *πιθοῦ γυναιξί, καίπερ οὐ στέργων ὁμως.*
私たちには従いなさい、たとえあなたが愛してはいないとしても。

340 4 f. 手段と仕方

[2062, 2063]

- X. Cyr. 3. 2. 25: *εἰσὶ δὲ τινες οἱ ληζόμενοι ζῶσι.*
しかるに略奪しながら生活している或る人々がいる。
- E. Tr. 1022-23: *κάπι τοῖοδε σὸν δέμας*
ἐξηλθες ἀσκήσασα.
そしてさらに着飾ったうえで、そなたは出発した。

341 4 g. 比較接続詞 *ὥς* または *ὥσπερ* が先行する同格分詞

[2087]

接続詞 *ὥς* および *ὥσπερ* (～のように、恰も～であるように) は比較を確立する (§348, *ὥς* および *ὥσπερ* 参照)。
それら *ὥς* および *ὥσπερ* といった比較接続詞が同格の分詞を原因のまたは目的の意味で先行する時 (分詞 4b および 4c 参照), それらは示すのである, その原因あるいは意図は客観的に確立したものとしては与えられていないのだ, 否, それは見解に属するのだ, ということ。

一般的な仕方からして, 分詞に先行する *ὥς* は分詞に対して見解の意味を与えるが, その意味はある比較に内々に基づくのである。

接続詞 *ὥς* は同様に以下のことを示す, すなわち, 分詞の主語が一つの態度 (あたかも～であるように) または提示を装っていることを。

- A. A. 672: λέγουσιν ἡμᾶς ὡς ὀλωλότας.
我々をまるで死んでしまったものように彼らは語っています。
- Plu. Adul. 72b: [...] ἵνα μὴ δοκῆ νουθετεῖν ἐκεῖνον ὡς αὐτὸς ἀπαθῆς ὢν ὑπ' ὀργῆς καὶ ἀναμάρτητος.
とは、[...] 彼自身が怒りによっては動じておらずかつ何ら過ちを犯してはいないのだというようにして彼が諫めているのだとは思われないうために。

接続詞 ὡς（または ὥσπερ）には対格の分詞が続くことがある。それは節の補語に結合せず、一種の暗に示される見解の動詞に依存する。この場合、ὡςは「～のつもりで、恰も～のように」と訳される。

- Pl. R. 1. 345e: μισθὸν αἰτοῦσιν, ὡς οὐχὶ αὐτοῖσιν ὠφελίαν ἐσομένην ἐκ τοῦ ἄρχεῖν.
報酬を彼らは要求するのであるが、それは彼らにとっては支配することからしては利益があることはな
いだろうというつもりのことである。

342 5. 主語または補語に同格の分詞から伴われる動詞 [2088ff]

多くの動詞は、ギリシア語においては、それらの主語あるいは補語と同格に置かれた分詞とともに構成される。このことは、注意が分詞によって示された動作の主語に優先的におかれ、動作そのものにおかれるのではないということである。

時に、主要動詞によって表現される動作は分詞によって示される動作の一種の叙法化である（分詞 5a 参照）。その時、分詞は主語の形容機能を持つ。

主語または補語に同格におかれた分詞で構成されたある種の動詞は、同様に、不定法または不定法構文あるいはさらに ὅτι または ὡς で導かれる節を支配する。これらの異なる構文は異なる意味を持つ（不定法 3 参照）

343

5 a. 主語に同格の分詞—存在様式・感情または状態の変化を示す動詞とともに、
以下のように：

τυγχάνω	たまたま～する	[2096, 1873]
διάγω, διατελέω	過ごす, やすまず～する	[2097]
δηλός εἰμι	～であることは明らかである	[2107]
φαίνομαι	現れる, ～であることは明らかである	[2106, 2143]
λανθάνω	こっそり～する	[2096]
φθάνω	先んずる, 先に～する	[2096]
νικάω, ὑπερέχω	凌ぐ, 勝つ	[2101]
ήττάομαι	劣る	[2101]
ἀδικέω	不正である, 誤っている	[2101]
δίκαιός εἰμι	～は正しい, 理がある	
εὖ ποιέω	うまくやる	

χαίρω, ἠδομαι	喜ぶ	[2100]
λυπέομαι, ἀλγέω	苦しむ	[2100]
ἄχθομαι, ἀγανακτέω	怒る	[2100]
αἰσχύνομαι	恥じる	[2100]
ὑπομένω	我慢する	[2127]

ἄρχομαι	始める	[2098, 2128]
παύομαι, λήγω など。	止める	[2098]

X. An. 1. 1. 2: ὁ μὲν οὖν πρεσβύτερος παρῶν ἐτύγχανε.

されば、先ず、年長者（兄）がたまたまそこに居合わせた。

X. Cyr. 1. 3. 1: πάντων τῶν ἡλικίων διαφέρων ἐφαίνετο.

同年輩の者のすべてよりも彼が優れていたことは明らかだった。

Ar. V. 517: ἀλλὰ δουλεύων λέληθας.

いや、君が奴隷仕事をしていながらそれにあなたは気がついていないのだ。

Epicur. frg 551 Usener: λάθε βιώσας.

隠れよ、生きた上で

Lycurg. Leocr. 128: ἔφθασε καταφυγῶν εἰς τὸ τῆς Χαλκιοίκου ἱερόν.

(捉えられる前に) 先んじて (アテーナイの) カルキオイコスの聖域の中へ彼は逃げた。

Th. 1. 53: ἀδικεῖτε, ὧ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, πολέμου ἄρχοντες καὶ σπονδὰς λύοντες.

けしからん、アテーナイ人諸君よ、戦争をはじめそして盟約を反故にしながら。

E. Or. 1523: πᾶς ἀνὴρ, κἂν δούλος ἦ τις, ἠδεται τὸ φῶς ὀρῶν.

全ての男は、たとえ何か奴隷といった者で彼があっても、光を目にしながら喜びます。

X. Cyr. 5. 1. 21: καὶ τοῦτο μὲν οὐκ αἰσχύνομαι λέγων [...]

そしてそれを言うのを私は恥じない。

Pl. Smp. 186b: ἄρξομαι δὲ ἀπὸ τῆς ἰατρικῆς λέγων.

医学のことから話すことを私は始めよう。

344

[2106-2111]

5 b. 補語に対しあるいは主語に対して同格に置かれた分詞—一つの実現性の感覚的なあるいは知性的な知覚を示す動詞とともに、あるいは他人に一つの実現性を知らしめる行為を示す動詞とともに—、以下のような

όράω	見る
ἀκούω	聞く, 理解する
αἰσθάνομαι	知覚する, 理解する
πυνθάνομαι	知る, 聞き知る
γιγνώσκω	知る, ~と気づく
οἶδα	知っている
μέμνημαι	覚えている
δείκνυμι	示す
ἐπιδείκνυμι	やってみせる
φαίνω, δηλώω	明らかにする
ἀγγέλλω	知らせる
(ἐξ)ἐλέγχω	論破する

これらの動詞の補語は**対格**または**属格**におかれる（属格9参照）。
もし、知覚される事実が**主語**に関するものなら、分詞は**主格**に置かれる。

- Th. 7. 47: τοῖς τε γὰρ ἐπιχειρήμασιν ἐώρων οὐ κατορθοῦντες καὶ τοὺς στρατιώτας ἀχθομένους τῇ μονῇ.
何故なら作戦において彼らは見て取っていた、彼らは成功をおさめてはおらずまた兵士たちは待機には苛立っていると。
- E. Hec. 342-43: ὀρώ σ', Ὀδυσσεῦ, δεξιάν ὑφ' εἵματος κρύπτοντα χεῖρα.
私は見てとっているのだ、あなたが、オディッセウスよ、右手をマントの下に隠しているのを。
- X. Mem. 2. 4. 1: ἤκουσα δὲ ποτε αὐτοῦ καὶ περὶ φίλων διαλεγόμενου.
しかるに私は聞いたのだ、かつて彼が親しい人々というものについてもまた問答しているところを。
- X. An. 1. 4. 5: ἤκουσε Κύρον ἐν Κιλικίᾳ ὄντα.
彼は耳にしたのだった、キューロスがキリキアにいます。
- Pl. Ap. 21b: ἐγὼ γὰρ δὴ οὔτε μέγα οὔτε σμικρὸν σύνοιδα ἐμαυτῷ σοφὸς ὢν.
何故ならこの私は本当に私が大にも小にもこの私自身とともに知者であることを知ることはないのだから。
- Ar. Pl. 1010: καὶ νῆ Δί' εἰ λυπούμενην γ' αἰσθοιτό με [...]
そして、ゼウスにかけて、私をとにかくも悲しんでいると、もしや彼が感じてくれるのであれば...
- X. An. 1. 10. 16: οὐ γὰρ ἤδεσαν αὐτὸν τεθνηκότα.
何故なら彼が死んだということを彼らは知らなかったのだから。
- X. Cyr. 1. 6. 8: μέμνημαι καὶ τοῦτό σου λέγοντος.
私は覚えているのだ、このこともまた君が語っていたのを
- Pl. Chrm. 156a: μέμνημαι δὲ ἔγωγε καὶ παῖς ὦν Κριτία τῷδε συνόντα σε.
だがしかし、この私は覚えているのだよ、子供ではあったのだが、このクリティアースと君が交わっていたことを。
- E. Tr. 970: καὶ τήνδε δείξω μὴ λέγουσαν ἔνδικα.
そして、この女を私は示すことでしょう、正義に適ったことどもを彼女は決して語ってはおらぬのだとね。
- S. El. 1452: ἦ καὶ θανόντ' ἤγγειλαν ὡς ἐτητύμως;
彼が死んだとも本当に彼らは知らせたのか？

345 6. 絶対属格

[2070-2075, 2058]

ギリシア語ではしばしば**属格**に置かれた**名詞**または**代名詞**（時に言外に）および**同格**の**分詞**を持つ構文によって主要な動作を伴う諸々の状況を表現する。この構文を**絶対**（切り離された）**属格**という。

絶対属格は同格分詞に対して示された全ての状況補語的意味を引受ける（分詞4参照）、ただし目的の意味を除いてである。

この属格の用法はおそらく関係付けられた一般的意味に結びつく（§238参照）。時間の属格、§253も参照。

- Luc. VH 1. 6: τῇ ὀγδοηκοστῇ δὲ ἄφνω ἐκλάμψαντος ἡλίου καθορώμεν οὐ πόρρω νῆσον ὑψηλὴν καὶ δασειάν.
然るに八十日目突然太陽が輝きだした時に、我々は見るのであった、遠からぬ所に島の山が高くまた森に覆われているのを。
- X. An. 4. 8. 27: ἄτε θεωμένων τῶν ἐταίρων πολλὴ φιλονικία ἐγίγνετο.
仲間たちが見ていたものだから、多大の功名心が生じていた。

346 7. 必然・適合または可能性を示す中性単数の分詞

[2076]

固定された決り文句においていくつかの分詞が**中性単数**（格は非決定なのだが，一応対格だと解釈されている）にあるのが見られる，それらはさまざまの状況的な意味を引受けるものなのである。

δέον, χρεών	～しなければならないので
πρέπον, προσήκον	するのが相応しいので
ὄν, ἐξόν, παρόν	～するのが可能である，許されるので
δόξαν, δεδογμένον	～と思われていたので
など。	

Pl. Mx. 246d: ἡμῖν δὲ ἐξόν ζῆν μὴ καλῶς, καλῶς αἰρούμεθα μᾶλλον τελευτᾶν.

然るに我々にとっては立派でなく生きることよりむしろ立派に死ぬことを我々が選ぶことが可能なのである。

347 小辞および接続詞

[2769-2774]

小辞と接続詞は変化しない語である。以下に一つのリストを掲げるが、そこで**小辞**と**接続詞**とは区別することにする。

—**小辞**は文または節の意味にニュアンス（肯定の、強調の、結論の、原因の、譲歩の、などのニュアンス）を与える。同時にしばしば言説を論理的に勝つ統辞論的に分節することに寄与する。それ故、それら小辞は思考の表現に様態を付与し、しかしまたそれを分節しそれを構造化するのにも寄与することが出来るのである。この場合、それらの機能は接続詞のそれに接近する。それらはしばしば節においては第二の位置に来（§213 参照）、もしくは動詞に近く、またはそれが特にかかる語の近くにおかれる。ある小辞は後倚辞である。多くの小辞は相互に結合したり、こうしてまたしばしば特定の慣用的な意味を引き受ける。

—**接続詞**の中には役割として同じ統辞機能を果す文または文の諸要素を**等位に置く**ものもある。それらは**繋合**や**離接**または**逆接**の意味を持つことが出来る。

その他の接続詞は役割としていわゆる**主節**にもしくはその**動詞に補語節**（目的補語または状況補語、時として主語の機能にある諸々の節でさえ）を**結びつける**。接続詞は、これら節の価値（肯定、時間、原因、帰結、目的など）を明確にする。補語節を導く大部分の接続詞は（「定」、「不定」、「性質」など）関係代名詞の古い固定した格の形である。それらは限定された意味をもって特殊化したのである（§203 参照）。補語節の動詞の法は、その動詞の意味が（当該の）法と相容れる限りにおいて、様々であり得る。（§350 参照）。

ギリシア語には非常に多くの小辞と接続詞がある。それらの用法には無数の微妙なニュアンスがあり得る。我々はここでは主な小辞・接続詞と、そして最も頻繁な用法のみを、用例とともに挙げる。

348 主要な小辞および接続詞との—その用例をともなった—アルファベット順のリスト

諸々の参照記号—諸々の接続詞とともに用いられる諸々の法・不定法そして分詞に対して与えられたもの—は法の各章 (§290-309 参照), 不定法の各章 (§312-328 参照), そして分詞の各章 (§331-346 参照) の下位区分に対応する。

ἀλλά **しかし** (字義的には, 他方の, 別な風に) [2775-2786]
反意接続詞。

1. 強い対立

(この意味では, ἀλλά はしばしば反論を導く)

S. Ant. 523: οὔτοι συνέχθειν, ἀλλά συμφιλεῖν ἔφυν.

憎みあうためにではありません, いいえ, ともに愛するためなのです。
私が生まれて来たのは。

2. 勧奨。

Ar. V. 1008 ἀλλ' εἰσίομεν.

さあ, 中へ入りましょう!

οὐ μὴν ἀλλά

しかしながら

Isoc. 12. 75: διὸ δέδοικα [...]. οὐ μὴν ἀλλ' αἰροῦμαι βοηθησαί [...]

それ故私は... を恐れるのである。しかしながら助力することを私は
選ぶのだ。

ἄν

法の小辞 (§281 参照)

[1761]

ἄν

εἰ ἄν の約音, εἰ 参照。

ἄρα

してみると, それ故

[2787-2799]

結論的および説明的小辞。

Pl. Chrm. 161a: ἔστιν ἄρα, ὡς ἔοικεν, αἰδῶς οὐκ ἀγαθὸν καὶ ἀγαθόν.

してみるとあり得るのだ, どうやら, 慎みは善からずまた善くある
のだということが。

ἄρα;

ἦ ἄρα の約音。

[2800]

疑問小辞 (§82 参照)。

ἄρα μή;

本当に~か?, 君は~と言おうとはしないのだね?

否定的返答を促す質問を導く (§82 参照)。

S. El. 446-48:

ἄρα μὴ δοκεῖς

λυτήρι' αὐτῆ ταῦτα τοῦ φόνου φέρειν;

οὐχ ἔστιν.

本当にあなたはお願いではありませんまいね, 人殺しの罪からの解き
放ちの供物としてそれらを彼女にもって行こうとなど。それはあり
ません。

ἀρ' οὐ;	<p>～ではないか、～ということは本当ではないのか？ 同意を促す質問を導く (§82 参照)。</p> <p>S. OC. 791: ἀρ' οὐκ ἄμεινον ἢ σὺ τὰν Θήβαις φρονῶ; 君よりはもっとよくテーバイのことどもを僕は承知しているのでは ないかな。</p>
ἀτάρ	<p>しかし、その上更に [2801] 反意または推論の進行を示す小辞。</p> <p>E. Med. 184-85: δράσω τάδ' ἀτάρ φόβος εἰ πείσω δέσποιναν ἐμήν. やってみましょう、それらのことを。でも心配だわ、女主人を私が 説きつけられるかどうか。</p>
ἄτε	<p>～の故に、～なので [2085] ἄと τε の複合、τε 2 参照。 分詞が続く、分詞 4b 参照。</p>
αὐ	<p>私の (君の、彼の...) 場合、～はというと、私 (君、彼) として [2802] 継続および反対説を示す小辞。</p> <p>Pl. Smp. 173d: καὶ ἴσως αὐ ὑμεῖς ἐμὲ ἡγγεῖσθε κακοδαίμονα εἶναι. そして、多分、諸君はというとこの私が不幸であると諸君は思っ ている。</p>
ἀφ' οὗ (χρόνου)	<p>～以来 時間的意味に関係した節を導く。</p> <p>法の用法については、§80 参照。</p>
ἄχρι	<p>～する時まで [1700, 2383] 時間節を導く接続詞 (時に前置詞、μέχρι もまた参照)。</p> <p>直説法とともに、直説法 1 参照。 接続法および ἄν とともに、接続法 3 参照。 希求法とともに、希求法 3, 4 参照。</p>
γάρ	<p>何故かと言えば、何故なら、 一体全体 (質問の中で) [2803, 2820] 説明的または肯定的小辞 (γε と ἄρα から)。</p> <p>Pl. Grg. 447b: οὐδὲν πρᾶγμα, ὦ Σώκρατες· ἐγὼ γὰρ καὶ ἰάσομαι. φίλος γὰρ μοι Γοργίας, ὥστ' ἐπιδείξεται ἡμῖν. いやなんでもないさ、ソクラテース、何故ならこの私が償いをき っとつけてやるだろうからね。 というも、友人なのだよ、僕にとってゴルギアスは。だからちゃ んと実演して見せてくれるだろうよ、我々のために。</p>

反論の中でしばしば：

πῶς γὰρ οὐ; もちろん！一体全体どうして、それはその様にならないことがあろうか？

τί γάρ;

それで何が？それで？

など。

γε

**まさしく、確かに
少なくとも**

[2821-2829]

後倚辞，節のあるいは γε の前の語の意味を強調または限定する。

Pl. R. 7. 515a: Πῶς γάρ, ἔφη, εἰ ἀκινήτους γε τὰς κεφαλὰς ἔχειν ἠναγκασμένοι εἶεν διὰ βίου;

何故なら、如何にしてそうしたことがあるだろうか、と彼は言った、もしもとにかくじっと動けぬものとしてその頭を持つよう強いられているのであればね、人生を通じてだ。

S. Ant. 770-771: ἄμφω γὰρ αὐτῶ καὶ κατακτεῖναι νοεῖς; -οὐ τὴν γε μὴ θιγοῦσαν.

というのは二人ともあの方々を死罪にしようと思っているのですか？いや、とにかく触れなかった女の方はそうはすまい。

ἔγωγε この私は、もまた参照。

γοῦν

少なくとも、確かに

[2830-2833]

結論的・肯定的あるいは限定的小辞 (γε と οὖν 「それ故」の約音)。

Pl. R. 10. 613b: κατὰ γοῦν ἐμήν δόξαν, ἔφη.

確かに、少なくともこのわたしの意見では、と彼は言った。

δέ

他方

[2834-2839]

**そして、そして更に
何故なら、まさしく**

軽い反意小辞，しばしば μέν と相関する (μέν 参照)。

また、単純に観念の続きを示しながら節をつなぐ (この意味では、δέ はしばしば訳されない)。

時に、弱い結論的意味。

X. Smp. 4.32: καὶ εἰμὶ νῦν μὲν τυράννω ἐοικώς, τότε δὲ σαφῶς δοῦλος ἦν

また私はこの今にはあることだ、僭主に似て。あの時には、しかし明らかに私は奴隷であった。

Pl. Phdr. 253d: τῶν δὲ δὴ ἵππων ὁ μὲν, φαμέν, ἀγαθός, ὁ δ' οὐ.

それで、二頭の馬のうち、一方の一頭は、我々は言おう、善く、他の一頭はそうでない。

(ὁ μὲν... ὁ δέ, 一方... 他方, §29 もまた参照.)

Luc. VH 1.16: ἐμάχοντο δὲ οὐ μόνον οἱ ἐπ' αὐτῶν, ἀλλὰ καὶ αὐτοὶ μάλιστα τοῖς κέρασιν· ἐλέγοντο δὲ οὗτοι εἶναι ἀμφὶ τὰς πέντε μυριάδας. ἐπὶ δὲ τοῦ δεξιοῦ αὐτῶν ἐτάχθησαν οἱ Ἀεροκῶνωπες.

しかるに、戦っていたのだった、ただ単に馬上の者たちだけでなく馬たちそのものがとりわけてその角でもって。そして彼らは語られていた、およそ五万であると、そして彼らの右手には配列されていた、アエロコーノーベス（大気の虜たち）が。

οὐδέ, μηδέ

小辞 δέ との複合否定

[2930-2941]

1. そして～でない、もはや～でない

しばしば関連して：οὐδέ... οὐδέ, ～でも～でもない。

X. An. 1. 5. 5: οὐ γὰρ ἦν χόρτος οὐδὲ ἄλλο οὐδὲν δένδρον, ἀλλὰ ψιλὴ ἦν ἅπασα ἡ χώρα.

牧場もなく他の何の樹木もなかった、否、丸裸だった、その国はすべてが。

2. しばしば強調的：～でさえない

S. OT 1303-04: φεῦ φεῦ, δύσταν' ἀλλ' οὐδ' ἐσιδεῖν δύναμαί σε.

ああ、ああ、不幸なお方よ、いいえ、私は見入ることさえ叶いません、あなた様へは。

δή, δῆτα

確かに、もちろん、それゆえ

[2840-2851]

肯定・命令または疑問、あるいは単純な語さえ強調する小辞。

また、結論的意味あるいは連結の意味も持ちうる。

余談の後、それは主題に回帰することを示す。

小辞 δῆτα は δή より強い肯定の意味を持つ。

E. Or. 1076: σοὶ μὲν γὰρ ἔστι πόλις, ἐμοὶ δ' οὐκ ἔστι δῆ.

君には先ずポリスはあるけれども、この僕にはしかしありなどせぬのだから。

Pl. Prt. 312c: λέγε δῆ, τί ἡγήῃ εἶναι τὸν σοφιστήν;

さあ、言いたまえよ、何としてソフィストはあるのだと君は考えているのかを。

Pl. Phdr. 227a: ὦ φίλε Φαίδρε, ποῖ δῆ καὶ πόθεν;

親愛なるパイドロスよ、君はいったい何処へ行き、そして、何処から来たのか？

διότι

διά と ὅτι の複合。

[2240, 2578b]

何故なら

ὅτι 2 と同じ使い方。

εἰάν

εἰ ἄν の約音、εἰ 参照。

εἰ [2281-2283]

1. **もし～なら** [2246, 2247, 2282, 2283, 2328, 2329, 2336-2340]
条件または仮定を導く接続詞, そこから主節の中で表現される帰結が出てくる。

仮定節においては, 動詞の法が何であれ, その通常の意味に従って否定は常に μὴ である (§284 参照)。

a) **直説法**と: 帰結の関係の単純な確認または肯定, 直説法 1 参照。

S. OT 944: εἰ μὴ λέγω τᾶληθές, ἀξιῶ θανεῖν.
もし私が真実を話さないなら, 私は死に値するだろう。

b) **希求法**と: 可能なる条件または仮定の言表行為, 希求法 2 参照。

例: εἰ μὴ λέγοιμι τᾶληθές, ἀξιοίην ἄν θανεῖν.
もし, 私が真実を言わないとするならば, 私は死に値するだろう。

c) **未完了過去** (または過去完了) または**アオリスト直説法**と: 実現しないまたは**不可能な条件**または仮定の言表行為, 直説法 2 参照。

例: εἰ μὴ ἔλεγον τᾶληθές, ἠξίουν ἄν θανεῖν.
もし, 私が真実を言わなかったとすると, 私は死に値しただろう。
εἰ μὴ εἶπον τᾶληθές, ἠξίωσα ἄν θανεῖν.
もし, 私が真実を言っていなかったとすると, 私は死に値しただろう。

d) ἄν を伴った**接続法**とともに (ほとんどの場合 εἰ と ἄν は ἑάν[ᾱ], ἦν または ἄν[ᾱ] となる) と: **その実現** (特別の場合または一般的である場合) を待つその条件の言表行為, 接続法 3 参照。

～の場合には, ～の全ての場合には

例: ἑάν μὴ εἶπω τᾶληθές, ἀξιῶσω θανεῖν.
私が真実を言わない場合は全て, 私は死に値するだろう。
ἑάν μὴ λέγω (接続法) τᾶληθές, ἀξιῶ (直説法) θανεῖν.
私が真実を言わないような場合は全て, 私は死に値する。

e) **直説法** (a 参照) または ἄν を伴う**接続法** (d 参照) に代る (斜) **希求法** とともに。これは主動詞が二次時制の時である, 希求法 3 参照。

例: εἰ μὴ λέγοιμι τᾶληθές, ἠξίουν θανεῖν.
私が真実を言わない度に, 私は死に値していただろう。

2. **～かどうか** [2675]
間接疑問節を導く接続詞。

択一の間接疑問節を導くには: εἰ... ἢ, εἰ... εἴτε, εἴτε... εἴτε。

法については, §83 参照。

Th. 1. 119: ψήφον ἐβούλοντο ἐπαγαγεῖν εἰ χορὴ πολεμεῖν.
 彼らは戦わなければならないかどうか知るために投票したいと思っ
 ていた。

Th. 2. 4: ὀρώντες δὲ αὐτοὺς οἱ Πλαταιῆς ἀπειλημμένους
 ἐβουλεύοντο εἴτε κατακαύσωσιν ὥσπερ ἔχουσιν,
 ἐμπρήσαντες τὸ οἶκημα, εἴτε τι ἄλλο χρήσονται.
 然るに、彼らがこうしてすっかり包囲されてしまっているのを見な
 がらプラタイア人たちは考えをめぐらすのだった、果たしてすっか
 り焼き尽くしたのか、彼らがちょうどそう出来るように、それと
 も何か他の仕方を取り扱ったものかと。

時に、疑問動詞は表現されない、そして、εἰ (ἐάν[ᾱ]) はその時、「～かどう
 か見るため」、「～かどうか知るため」と訳される。

S. OC 1769-72: Θήβας δ' ἡμᾶς
 τὰς ὠγυγίους πέμψον, ἐάν πως
 διακωλύσωμεν ἰόντα φόνον
 τοῖσιν ὀμαίμοις.
 然るに太古からの国テーバイへと我々をお送りください、もしやど
 うとかして私どもが兄弟たちにやって来ている死をば防ぎもすれば
 ということで。

ἐάν	εἰ ᾶν の約音。	
εἰ γάρ, εἴθε	願望（希求法 1 参照）あるいは後悔（直説法 3）の表現を導く小辞。	[1780, 1781, 1815, 1816]
εἰ δὲ μή	もしそうでないなら	[2346d]
εἰ καί, καὶ εἰ	例え～であつても 譲歩節を導く接続詞	[2369-2378]
	法の用法については、εἰ 1 参照。	
	Men. Sent. 165: γελαῖ δ' ὁ μῶρος, κᾶν τι μὴ γελοῖον ᾗ. 愚か者は笑うもんだ、たとえ面白いものがなくても。	
εἰ μή, εἰ μή ἄρα	～でなければ	[2346a]
εἴτε	εἰ と τε からなる接続詞、εἰ と τε 1 参照。	[2675, 2852-2855]
ἐξ οὗ (χρόνου)	～の時以来 時間的意味に関する節を導く。	[1688b]
	法の用法については、§83 参照。	
ἐπᾶν	ἐπεὶ ᾶν の約音、ἐπεὶ 1 参照。	[1768a, 2399a]

ἐπεί, ἐπειδή	以下を導く接続詞	[1943]
	1. 時間節 ～のとき, 一旦～するときに	[2383]
	直説法と, 直説法 1 参照。 接続法と ἄν (ほとんどの場合 ἐπᾶν[ᾶ], ἐπειδᾶν) とともに, 接続法 3 参照。 希求法とともに, 希求法 3, 4 参照。	
	2. 原因節 ～なので	[2240, 2244, 2380]
	直説法と, 直説法 1, 2, 4 参照 希求法と, 希求法 2, 3, 4 参照	
ἐπειδᾶν	ἐπειδή ἄν の約音。	[1768, 2399]
ἐπείπερ	ἐπεί と -περ の複合。	
ἔσπε	～する時まで, ～している限り (の間), ～する限り [2383A, N4] 前置詞 ἐς と一般化する意味の小辞 τε との複合した接続詞 (τε 2 参照)。 時間節を導く。	
	直説法と, 直説法 1 参照。 接続法と ἄν と, 接続法 3 参照。 希求法と, 希求法 3, 4 参照。	
ἐφ' ᾧ (τε)	～という条件で, ～さえすれば 条件を示す関係節を導く (τε の一般化する意味については, τε 2 参照)。	[2279]
	不定法と, 不定法 7 参照。 より稀に, 直説法未来と, 直説法 5 参照	
ἕως	～する時まで, ～している限り (の間), ～する限り [2383, 2428-2429] 時間節を導く接続詞	
	直説法と, 直説法 1 参照。 接続法と ἄν と, 接続法 3 参照。 希求法と, 希求法 3, 4 参照。	
ἦ	確かに, 本当に 断言的小辞, 疑問文においても用いられる。	[2650, 2864, 2865, 2866]
	Pl. Smp. 176b: ἦ καλῶς, φάναι, λέγετε. 本当に立派に, と彼は言った, 君たちは語っているよと。	
	Pl. Cri. 50c: ἦ καὶ ταῦτα ὠμολόγητο ἡμῖν τε καὶ σοί; 本当にそうしたこともまた同意されていたのだろうか, 我々にとつてそしてまた君にとつて。	

ἤ μὴν	強調断言の形式（μὴν 参照），特に誓いを証拠立てるために用いられる。 [2865, 2921]
ἤτοι	ἤ と τοι の複合小辞，ἤ の意味を強調する。
ἤ	分離的小辞 [2856-2863] 1. 二者択一または排他を示す あるいは, または Pythagoras ap. Stob. 3. 34. 8: ἤ σιγὴν καίριον ἢ λόγον ἀφέλιμον ἔχε. あるいは時宜に適した沈黙を, あるいは有用な話題を持って。 2. 比較の二番目の語を導く (§63 参照). ～より E. Or. 1155: οὐκ ἔστιν οὐδέν κρείσσον ἢ φίλος σαφής. 真の友より善いものは何もない。 Philonid. frg. 17 Kock: κρείττον σιωπᾶν ἔστιν ἢ λαλεῖν μάτην. 黙っているほうが空しく話すより善きものである。
ἤτοι	ἤ と τοι の複合小辞，ἤ の意味を強調する。 [2858]
ἤν	εἰ ἄν の約音，εἰ 参照。
ἤνικα	～の時, ～する時 [2283] 時間節を導く接続詞 直説法と，直説法 1 参照。 接続法と ἄν と，接続法 3 参照。 希求法と，希求法 3, 4 参照。
ἵνα	1. ～する所 [2498] 直説法（詩，稀にアッティカ散文）に関係した節を導く。 2. ～するために [2193, 2209] 目的節を導く接続詞。 接続法と，接続法 4 参照（時に ἄν とともに，接続法 3 参照）。 希求法と，希求法 3 参照。

καί

そして, また
並置接続詞。

[2868-2880]

1. 単純な並置または追加: 他の καί または τε と相関することがある (τε 1 参照)。

Ar. Lys. 484: ἄλλ' ἀνερώτα καὶ μὴ πείθου.
さあ, 取り調べろ, そして言いくめられるな。

Pl. R. 7. 515b: τί δ' εἰ καὶ ἤχῳ τὸ δεσμωτήριον ἐκ τοῦ καταντικροῦ
ἔχοι;
だがどうだろう, もしも木魂もまたその牢獄は正面からくるとい
った形で持っているのだとすれば。

D. 19. 227: παντὶ θυμῷ καὶ φιλεῖ τοὺς ἑαυτὸν εὖ
ποιούντας καὶ μισεῖ τοὺς τ' ἀναντία.
全霊でもって彼その人をよくする人々を彼は愛しもするし, またそ
の反対をなす者たちを彼は憎しみもする。

2. ~さえ, なおまだ
強調した要素を加える。

[2881]

X. Ages. 11. 2: ἀλλὰ μὴν καὶ ὅποτε εὐτυχοίη, οὐκ ἀνθρώπων
ὑπερεφρόνει, ἀλλὰ θεοῖς χάριν ἦδει.
しかしながら, 幸運の中に彼があるときでさえ, 人々を軽んじたり
はせず, 神々に対して感謝することを彼は知っていた。

3. ὅμοιος, ὁ αὐτός などの様に類似性または同一性を示す表現とともに比較
の語を導く。

Pl. Ion 531d: ναί, ἀλλ', ὦ Σώκρατες, οὐχ ὁμοίως πεποιήκασι
καὶ Ὀμηρος.
はい, しかし, 親愛なるソークラテースよ, ホメーロスと同じ仕方
では (彼らの詩を) 彼らは作らなかった。

4. とりわけ

οἱ τε ἄλλοι... καί, τὰ τε ἄλλα... καί, ἄλλως τε καί (その時, ἄλλος は
一般の場合を表現する) のような表現において。

Th. 2. 15: ἐπειδὴ δὲ Θησεὺς ἐβασίλευσε τὰ τε ἄλλα
διεκόσμησε τὴν χώραν καὶ ξυνώκισε πάντας.
テーセウスが王として支配するに至るや, 他のことどもにおいても
国を整えたが, とりわけて全ての人々を彼は一緒に住まわしめたの
だった。

5. ~であってさえも
καίπερ 参照。

καὶ δὴ καί

もちろん, そしてまた当然に

[2890]

Pl. Ion 530b: ἐν τε ἄλλοις ποιηταῖς διατρίβειν πολλοῖς καὶ
ἀγαθοῖς καὶ δὴ καὶ μάλιστα ἐν Ὀμήρῳ
他の多くのそして優れた詩人の中で時を過ごすこと, そしてとりわ
けて一層ホメーロスの中で (時を過ごすこと)

καὶ εἰ	εἰ καὶ 参照。	[2369, (2374-2381)]
καίπερ	〜に拘わらず, 〜であるとしても καὶ と -περ の複合。 分詞が続く, 分詞 4e 参照。	[2892]
καίτοι	確かに, そして実際, しかしながら καὶ と τοι の複合。 限定小辞 (しばしば γε によって強調される), あるいは演説の進行を示す。 Ar. Ra. 1304-05: ἐνεγκάτω τις τὸ λύριον. καίτοι τί δεῖ λύρας ἐπὶ τούτων; 誰か小リュラを持って来い。とはいえ, 何故, リュラがこんな人の ために必要なのか?	[2893]
κᾶν	καὶ ἄν またはしばしば, καὶ ἔάν の約音。時に εἰ が続く: κᾶν εἰ 例え〜と しても。εἰ καὶ 参照。	[2369, 2372-2374]
μέν	一方では... ; して, それで 釣合の小辞, ほとんどの場合 δέ と相関して。 しばしば話の開始を示すために用いられる。 Pl. Hp. Mi. 369a: οἶσθα ὅτι τὸν μὲν Ἀχιλλέα ἔφησθα ἀληθῆ εἶναι, τὸν δὲ Ὀδυσσεά ψευδῆ καὶ πολύτροπον; 君は知っているか, 一方でアキレウスは誠実だが, 他方オディッセ ウスは嘘つきでずるいと君が言っていたことを? D. 18. 1: πρῶτον μὲν, ὦ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, τοῖς θεοῖς εὐχομαι πᾶσιν καὶ πάσαις [...] 先ず初めに一方で, アテーナイ人達よ, 全ての神々に私は祈る, そ して全ての女神にも...	[2895-2916, 2920]
	(ὁ μὲν... ὁ δέ, 「一方で~, 他方~」については, δέ および §29 参照)	
μέντοι	μέν と τοι の複合。	[2917-2919]
	1. しかしながら, 確かに 強調小辞, ほとんどの場合反意的。 Pl. Ly. 203b: οὐ παραβάλλεις; ἄξιον μέντοι. お寄りになりませんか? きっとそれだけの価値がありますよ。 Pl. Prt. 309a: οὐ σὺ μέντοι Ὀμήρου ἐπαινέτης εἶ; 君こそは, しかしながら, ホメーロスの賞賛者ではないかね?	

μέχρι	～の時まで, ～する限り 時間節（時に前置詞）を導く接続詞, ἄχρι もまた参照。 直説法と, 直説法 1 参照。 接続法と ἄν と, 接続法 3 参照。 希求法と, 希求法 3, 4 参照。	[2383]
μή	否定 (§282-289 参照) 以下を導く： 1. 否定的目的節 [2193ff, 2209ff, 2705a] ～しないために 接続法と, 接続法 4 参照（時に ἄν とともに, 接続法 3 参照）。 希求法と, 希求法 3 参照。 2. 恐れ of 動詞に依存する節。 [2221ff] 接続法と, 接続法 5 参照。 直説法と, 接続法 5, 直説法 1 参照。 希求法と, 希求法 3, 4 参照。 3. 否定的返答を期待する質問文 (§82 参照), ἄρα μή および μῶν も参照。 [2651] 本当にそうか?, 君は～と言おうとしているのではないか?	
μήδε	小辞 δέ との複合否定辞, δέ の否定形 οὐδέ 参照。	[2163a, 2688]
μήν	確かに, 実際に, まさしく [2920-2921] 肯定・否定または疑問を強調する小辞。 S. Ant. 626-27: ὄδε μὴν Αἴμων, παιδῶν τῶν σῶν νέατον γέννημα. この方こそまさしくハイモーン様だ, あなたのお子様方の中で最も若く生まれた。 τί μὴν; も参照。 そしてそれで? (続きが待たれることを示す返答)	
οὐ μὴν ἀλλά	ἀλλά 参照。	[2767, 2921]
μήτε	τε と複合した否定, τε の否定形 οὐτε 参照。	[2942]
μῶν	μή οὖν の約音, οὖν 参照。	[2651]

νυν	<p>それ故, それだから [2924-2928] 後倚小辞, しばしば強調的, 推論の続きを示す (特に韻文で用いられる)。</p> <p>S. Aj. 87: σίγα νυν. それゆえ, お前はお黙り。</p>
οἷα, οἷον	<p>～なので [2085] 分詞が続いて, 分詞 4b 参照。</p>
όποτε	<p>時間の副詞</p> <p>1. 以下を導く不定関係詞 (§77 参照). [2481, 2486, 2383]</p> <p>a) 時間節 ～の時, ～する度に (主に ότεの代わりに用いられる, 状況が不定である時, または一般的である時)</p> <p>直説法と, 直説法 1 参照。 接続法と άν と, (しばしば όπόταν), 接続法 3 参照。 希求法と, 希求法 3, 4 参照。</p> <p>b) 原因的ニュアンスの節 [2240] ～なので</p> <p>直説法と, 直説法 1, 2, 4 参照 希求法と, 希求法 2, 3, 4 参照</p> <p>2. 間接疑問副詞, §77 および 83 参照。</p>
όπόταν	<p>όποτε άν の約音。 [1768, 2399]</p>
όπου	<p>～する所の [2498] 場所の副詞</p> <p>1. 不定関係副詞, §77 参照。 法の用法については, §80 参照。</p> <p>2. 間接疑問副詞, §77 および 83 参照。</p> <p>その場所的意味から, όπου は時間的意味 (～する時に, ～するにあたって) または原因的意味 (～する以上は) を取る。</p>

ὅπως	<p>1. 仕方の副詞 [2929]</p> <p>a) 不定関係副詞 (§77 参照), 比較節を導く。 [2668c] ~のように ὡς1 参照。 法の用法については, §80 参照。</p> <p>b) 間接疑問副詞, §77 および 83 参照。 [2929] どのように</p>
	<p>2. 接続詞 (手段の古い格形の中で固定された不定関係副詞から由来する) 以下を導く [2929]</p> <p>a) 目的節。 [2203, 2193ff] ~するために</p> <p>接続法と, 接続法 4 参照 (時に ἄν と, 接続法 3 参照) 希求法と, 希求法 3 参照</p> <p>b) 動詞にあるいは心遣いまたは努力を示す表現 (時に言外に) に依存する節。 [2207ff]</p> <p>直説法未来と, 直説法 5 参照 接続法と, 接続法 4 参照。 希求法と, 希求法 3 参照。</p>
ὅτε	<p>時間の関係副詞 (§77 参照) 以下を導く</p> <p>1. 時間節。 [2383A] ~の時</p> <p>直説法と, 直説法 1 参照。 接続法と ἄν (しばしば ὅταν) と, 接続法 3 参照。 希求法と, 希求法 3, 4 参照。</p> <p>2. 原因的ニュアンスの節 [2244] ~なので</p> <p>直説法と, 直説法 1, 2, 4 参照 希求法と, 希求法 2, 3, 4 参照</p>
ὅταν	<p>ὅτε ἄν の約音。 [2399a]</p>

ὅτι

接続詞（不定関係代名詞 ὅτι から由来する）、以下を導く

1. 客観的なものとして与えられた肯定的節（意見なのだという色合いをこそ肯定節だということよりも一層示すものとしての ὡς との対立によって）。

[2614ff]

直説法と、直説法 1, 2, 4, 5 参照

希求法と、希求法 2, 3, 4 参照

肯定的節においては、直接話法の時制はしばしば保たれる。

X. An. 1. 3. 21: τοῖς δὲ ὑποψία μὲν ἦν ὅτι ἄγει πρὸς βασιλέα, ὅμως δὲ ἐδόκει ἔπεσθαι.

彼らにとっては、一方で疑いがあった、大王のところへ彼が連れて行くのだということの、しかしながら他方では従うのがよいと思われた。

ὅτι の後、話者は、時に、彼がもたらす話の直接的表現を原文どおりに続ける。

Pl. Smp. 177a: εἰπεῖν οὖν τὸν Ἑρμύμαχον ὅτι ἢ μὲν μοι ἀρχὴ τοῦ λόγου ἐστὶ κατὰ τὴν Εὐριπίδου Μελανίπτην.

さればエリュクシマコスと言った、「先ずは私にとって話の始めはエウリピデースのメラニッペーに即してということです」と。

肯定的節を支配しうる動詞の型については、不定法 3c 参照。

2. 原因節

[2240]

というのは～であるから

直説法と、接続法 1, 2, 4 参照。

希求法と、希求法 2, 3, 4 参照。

3. ὅτι に最上級が続く時、ὡς の用法と同様、ὡς1 参照。

[1086]

οὐ

否定 (§282-289 参照)。

[2688]

同意を前提とする質問を導く (§82 参照)。

ἄρα οὐ および οὐκ οὖν, οὐκοῦν も参照。

οὐδέ

小辞 δέ と複合した否定, δέ 参照。

[2939ff]

οὐκ οὖν, οὐκοῦν

οὐκ および οὖν の複合, οὖν 参照。

[2951-2953]

οὐν

まさしく、されば、それ故

[2955ff]

思考の進行を示す肯定的または結論的小辞。

Pl. Phdr. 230a: ἄρ' οὐ τόδε ἦν τὸ δένδρον ἐφ' ὅπερ ἤγες ἡμᾶς;
-τοῦτο μὲν οὐν αὐτό.

そもそもこれが君がそれへと僕らを導いていた樹なのかい？それが
まさにたしかにその樹ですよ。

Pl. Prt. 316b: ἀκούσας δὲ οὐ ἔνεκα ἤλθομεν, αὐτὸς σκέψαι.
-τί οὐν δὴ ἐστίν, ἔφη, οὐ ἔνεκα ἤκετε;

しかるに何のために我々が来たのかをお聴きになった上で、ご自身
でお考えください。されば、一体何なのかね、と彼は言った、君た
ちが来た訳とは。

μῶν

否定 μή と οὐν の約音。

[2651]

本当に～であるのか？、君は～ということを私に言おうとしていないのか？

否定的返答を期待する質問を導く小辞 (§82 参照)。

A. A. 1202-03: μάντις μ' Ἀπόλλων τῶδ' ἐπέστησεν τέλει.
-μῶν καὶ θεὸς περ ἰμέρῳ πεπληγμένος;

預言者アポロンが私をこの仕事につけたのです。まさか神もまた
恋心に撃たれてしまったというのではありますまいね。

Ar. Nu. 315: μῶν ἡρῶνάι τινές εἰσιν;

まさかヘーローイネー（女の精霊）達ではないのだろうかね。

οὐκ οὐν

否定 οὐκ および οὐν からの複合小辞（アクセントは否定の上に置かれる）。[2953]

1. 如何なる場合も決して～ない、絶対に～ない

S. Ant. 993: οὐκ οὐν πάρος γε σῆς ἀπεστάτου φρενός.

決して以前よりしてわしはそなたの心から離れてはおらんのだ。

2. そうではないか

同意を期待する質問において (§82 参照)。

S. Ph. 628: οὐκ οὐν τάδ', ὦ παῖ, δεινά;

それらの事々は、我が子よ、恐ろしいことではないかね？

οὐκοῦν

否定 οὐκ および οὐν からの複合小辞（アクセントは οὐν の上に置かれる）。[2951]

1. 同意を期待する質問において (§82 参照): οὐκοῦν のように、しかし、より弱い。
～ではないかね？、それで～ではないかね？

Pl. Grg. 466e: οὐκοῦν τοῦτο ἐστίν τὸ μέγα δύνασθαι;

それで、これが大きな能力をもっていることなのではないかね。

2. 肯定において。

～ではないかね、まことに、確かに

Pl. R. 5. 462e: ὥρα ἂν εἶη, ἦν δ' ἐγώ, ἐπανιέναι ἡμῖν ἐπὶ τὴν
ἡμετέραν πόλιν. -οὐκοῦν χρή, ἔφη.

その時になっている、と、この私は言った、我々にとって我々のボ
リスへ戻る時に。—確かに、そうしなければならない、と彼は言った。

οὐτε	τεε と複合した否定, τεε 1 参照。	[2941-2950]
οὐτοι	τοι によって強調された否定。	[2986]
-περ	<p>正確に, まさしく</p> <p>多くの場合関係代名詞および関係副詞, 小辞または接続詞と複合して用いられる後倚小辞, それらが結合する語を強調するために用いられる。</p> <p>Pl. Euthphr. 7e: οὐκοῦν ἄπερ καλὰ ἡγοῦνται ἕκαστοι καὶ ἀγαθὰ καὶ δίκαια, ταῦτα καὶ φιλοῦσιν; 確かに美しいと考えられる, そして善い, 正しいとおのおのが考える限りのもの, それらを彼らもまた愛するのではないか?</p> <p>散文の中での καίπερ または καί のように, 小辞 περ は詩において分詞 (分詞 4e 参照) あるいは形容詞とともに譲歩の意味を引受ける。</p> <p>E. Andr. 763: τροπαῖον αὐτοῦ στήσομαι, πρέσβυς περ ὦν. 彼奴を打ち倒した記念碑をおれは建てるだろうさ, 年寄りではあっても。</p>	[2965]
πότερον (より稀に, πότερα) ... ἢ	<p>～か, (あるいは～か) ?</p> <p>間接疑問文の中で: 「～か否か, (あるいは～か)」</p> <p>択一の疑問代名詞, 多くの場合 ἢ と相関して用いられる。</p> <p>直接または間接疑問文の中で使われることがある (§82 および 83 参照)。</p> <p>法については, §82 および 83 参照</p>	[2656-2660, 2675]
πρίν	<p>～する前に</p> <p>時間節を導く接続詞。</p> <p>肯定的主節とともに: 多くの場合, πρίν と不定法, 不定法 8 参照: 時に, πρίν と直説法, 直説法 1 参照。</p> <p>否定的主節とともに: 直説法と, 直説法 1 参照。 接続法と ἄν と, 接続法 3 参照。 希求法と, 希求法 3, 4 参照。 不定法 (時に) と, 不定法 8 参照。</p>	[2430ff]

τε

1. そして

[2967ff]

小辞が並置する語に続く並置の後倚小辞。

ほとんどの場合 τε... καί の相関において、あるいは、より頻度は少ないが、 τε... τε の相関において。

τε... καί は単語をと同様、節を並置する、それに対して、 τε... τε は一般に節同士しか並置しない。τε 単独では、散文においては稀にしか用いられず、ほとんどの場合諸々の節を結びつける。

Pl. R. 7. 515c: σκόπει δὴ, ἦν δ' ἐγώ, αὐτῶν λύσιν τε καὶ ἴασιν τῶν τε δεσμῶν καὶ τῆς ἀφροσύνης.

では考えてくれたまえ、とこの私は言った、彼らの束縛と無知からの開放と癒しを。

Pl. R. 7. 515d: οὐκ οἶει αὐτὸν ἀπορεῖν τε ἂν καὶ ἠγεισθαι τὰ τότε ὀρώμενα ἀληθέστερα ἢ τὰ νῦν δεικνύμενα;

君は思わないだろうか、彼は途方に暮れてあの時に見られていたものの方が今示されているものよりずっと真実だと考えるだろうとは。

2. 小辞 τε はある固定された表現の中で姿をあらわす。そこでは小辞 τε は多分初めは一般的の意味をもっていた。

ὥστε	従って
ἐφ' ᾧ τε	～の条件で、～でありさえすれば
οἷος τε εἰμί	～することが出来る (そのような状態にある)
ἄτε	～ということなので、～なので

οἱ τε ἄλλοι... καί,	καί4 参照.
τά τε ἄλλα... καί,	
ἄλλως τε καί	

οὔτε... οὔτε,	～でも～でもない
μήτε... μήτε	相関的否定.

τοι

全く、確かに、まさしく

[2984ff]

後倚小辞、しばしば他の小辞とともに複合して用いられる。この小辞は言表または特別の語に注意を引く。この小辞は肯定的意味を持ち、そして、他の小辞あるいは接続詞を強調する。

S. El. 582-83: εἰ γὰρ κτενοῦμεν ἄλλον ἀντ' ἄλλου, σύ τοι πρώτη θάνοις ἂν, εἰ δίκης γε τυγχάνοις.

何となればもしも我々がある一人の代りにある一人を(復讐で)殺すなら、あなたこそがその最初の人として死ぬことでしょう、もしとにかくあなたという人が裁きに遭うのなら。

καίτοι	καί および τοι の複合、καί 参照。
--------	-------------------------

μέντοι	μέν および τοι の複合、μέν 参照。
--------	-------------------------

τοιγάρ (または τοίγαρ)	～というわけである、まさしく 肯定的および結論的小辞、γάρ 参照。	[2987]
------------------------	---------------------------------------	--------

τοιγάροι, τοιγαροῦν	τοιγάρο と同義, 強調形。	[2987]
		[2987]
τοίνυν	さて, それでは, それはそれとして 肯定的小辞, 推論の続きを示す, νυν 参照。 展開の始まりに再び議論を投げかけるのにも役立つ。	[2987]
ὡς [2988ff]	1. ~のように 仕方, 比較の関係副詞 (§77 参照), 比較節を導く。	[3002]
	直説法と, 直説法 1 参照。 希求法と, 希求法 2, 3, 4 参照。 接続法および ἄν と, 接続法 3 参照。	
	分詞と, 分詞 4g 参照。	
	比較は ὡς とそれに続く単純な名詞群によって省略的仕方で形式的に示される。	
	Luc. VH 1. 5: τὴν ναῦν ὡς πρὸς μέγαν καὶ βίαιον πλοῦν ἐκρατυνάμην. 船を長く荒々しい航海のために私は堅固にした。	
	ὡς とそれに続く最上級の省略的表現は出来るだけ〜と訳される。	
	例: ὡς τάχιστα 出来るだけ速く	
	数詞とともに, ὡς は約, 殆ど (本義的には, そうであるかのよう) を意味する。	
	例: σὺν ἀνθρώποις ὡς εἴκοσι およそ八十人の人間とともに	
	2. 具格の古い格形において固定された関係代名詞から由来する接続詞, 以下を導く。	[2989]
	a) 肯定的節 ὡς は肯定的節の意見という色合いを強調する (ὅτι とは反対に, ὅτι は客観的なものとしていっそうそれを与える)。	
	直説法と, 直説法 1, 2, 4, 5. 参照 希求法と, 希求法 2, 3, 4. 参照	
	肯定節においては, 直接話法の時制は保たれる (ὅτι 参照)。	
	肯定節を支配することの出来る動詞の型については, 不定法 3c 参照。	

b) 時間節 [3000]
～する時

直説法と、直説法 1. 参照
希求法と、希求法 3, 4 参照
稀に：期待の接続法と、 αv を伴わずに（接続法 3 と同じ意味）。
後期の用例：接続法と αv とともに、接続法 3 参照。

c) 原因節 [3000]
なぜなら～だから、～なので

直説法と、直説法 1, 2, 4. 参照
希求法と、希求法 2, 3, 4. 参照

$\omega\varsigma$ とそれに続く原因的意味の分詞については、分詞 4b および 4g 参照。

d) 結果節。 [3000]
 $\omega\sigma\tau\epsilon$ ほど多くは見られない、 $\omega\sigma\tau\epsilon$ 参照。

e) 目的節。 [3000]
～する為に

接続法と、接続法 4（時に αv を伴う、接続法 3 参照）
希求法と、希求法 3 参照。

$\omega\varsigma$ とそれに続く目的意味の未来分詞については、分詞 4c および 4g 参照。

f) 結果節。 [3000]
心遣いあるいは努力を示す動詞または表現に依存する節（ $\acute{o}\pi\omega\varsigma$ と同様に、しかしより稀）。

直説法未来と、直説法 5 参照。
接続法と、接続法 4 参照。
希求法と、希求法 3 参照。

g) 感嘆節。 [2998]
なんと～であることよ！

S. Ant. 572: $\tilde{\omega}$ φίλταθ' Αἴμιον, ὥς σ' ἀτιμάζει πατήρ.
最愛のハイモーンよ、何とあなたのお父上はあなたを辱めること
でしょうか！

$\omega\varsigma$ は特に韻文において、願望表現を導く、希求法 1 参照。

h) $\omega\varsigma$ とそれに続く固定的言回しの中の不定法については、不定法 9 参照。

前置詞としての $\omega\varsigma$ については、§273 参照。

ὡσπερ ～のように [2478-80]

ὡς および -περ の複合。比較の意味の ὡς を強く強調する比較節を導く、
ὡς 1 参照。

分詞が続く、分詞 4g 参照。

ὡσπερ ἄν εἰ, 恰も～のように、直説法または希求法とともに仮定的比較節
を導く：εἰ 1 (1d を除く) 参照

ὡστε 従って [2249ff]

ὡς と一般化する意味の小辞 τε の複合 (τε 2 参照)。
結果節を導く。

ほとんどの場合 ὡστε には不定法が続く。この構文は帰結が目的または期待
のように与えられることを示す、不定法 7 参照。

ὡστε とそれに続く活用した法は帰結が実現性の度合いに応じて予期される
ことを示す。

実現的な,	直説法と、直説法 1 参照；
可能な,	希求法および ἄν と、希求法 2 参照；
非実現的な	直説法二次時制および ἄν と、直説法 2 参照；
非常に稀：	斜希求法と、希求法 3 参照。

活用した法とともに、否定は、期待されるように、οὐ である。

349 独立節における諸々の法と諸々の否定の要約復習表

事実確認 (否定 οὐ)	
実現の言表行為	直説法 1, 4, 5
非実現の言表行為	直説法 (二次時制および ἄν) 2
可能性の言表行為	希求法 (および ἄν) 2
願望 (否定 μή)	
希望の言表行為	希求法 1
後悔の言表行為	直説法 3
期待／意志 (否定 μή)	
熟慮	接続法 1
勧奨	接続法 2
禁止	接続法 2, 命令法
命令 (否定 μή)	命令法

斜希求法 (希求法 3) および牽引の希求法 (希求法 4) は、接続法と ἄν (接続法 3)、目的の接続法 (接続法 4) および接続法 5 のように、独立節では用いられない。

疑問節については §82 参照。

350 補語節・不定法および分詞構文とそれらの否定の要約復習表

異なる用法の詳細については §348 および法 (§279-309)・不定法 (§310-326)・分詞 (§329-346) の各章参照。間接疑問文については §83, また関係詞については §78-81 参照。

表中では主要な接続詞と主に用いられる法とは太字で示されている。

節	接続詞	法	否定辞	対応する意味の不定法と分詞	否定辞
1. 肯定的, 目的補語節 (時に主語節)	ὅτι, ὡς	直説法 1,2,4,5 希求法 2,3,4	οὐ, μή	不定法 3,4	μή, οὐ
2. 時間的	ὅτε, ὁπότε, ἤνίκα, ἐπεὶ, ἐπειδή, ἐπεὶπερ, ὡς, ἕως, ἔστε, ἄχρι, μέχρι, ἀφ' οὗ, ἐξ οὗ πρίν	直説法 1 接続法と ἄν,3 希求法 3,4 直説法 1 接続法と ἄν,3 希求法 3,4	οὐ, μή	分詞 4a πρίν と不定法 8	οὐ, μή
3. 原因的	ὅτι, διότι, ὡς, ἐπεὶ, ἐπειδή, ἐπεὶπερ, ὅτε, ὁπότε	直説法 1,2,4 希求法 2,3,4	οὐ	(ἄτε, οἶα, ὡς) 分詞 4b	οὐ
4. 結果	ὥστε, ὡς ἐφ' ᾧ (τε)	直説法 1,2 希求法 2 (稀に, 希求法 3) 直説法未来 5	οὐ οὐ	不定法 7 ἐφ' ᾧ (τε) と 不定法 7	μή μή
5. 目的	ἵνα, ὅπως, ὡς, μή (否定目的)	接続法 4 希求法 3,4 (時に接続法と ἄν, 3)	μή	(ὡς) 未来分詞, 分詞 4c; 直説法 5	μή
6. 努力または気遣いの動詞に依存する節	ὅπως, ὡς	直説法未来 5 接続法 4 希求法 3	μή		

→

節	接続詞	法	否定辞	対応する意味の不定法と分詞	否定辞
7. 怖れの動詞に 従属する節	μή, μή οὐ	接続法 5 直説法 1 希求法 3,4			
8. 実現の仮定	εἰ	直説法 1 希求法 3	μή	分詞 4d	μή
可能性の仮定	εἰ	希求法 2	μή	分詞 4d	μή
非実現の仮定	εἰ	直説法 2	μή	分詞 4d	μή
期待および一般 化の仮定	εἰ ἄν, εἰάν, ἤν, ἄν	接続法と ἄν, 3 希求法 3	μή	分詞 4d	μή
9. 譲歩	εἰ καί, καὶ εἰ	「仮定」参照	μή	(καί, καίπερ) 分詞 4e	οὐ, μή
10. 疑問	εἰ, εἰ... ἢ, εἰ... εἴτε, εἴτε... εἴτε, πότερον (...ἢ) τις/ὅστις, ποῖος/ὅποῖος, ποῦ/ ὅπου, πότε/όποτε, など	独立節におけるよう に, しかしまた希求法 3,4 接続法と ἄν, 3 (より稀)	οὐ, μή		
11. 比較	ὡς, ὥσπερ, ὅπως ὥσπερ ἄν εἰ	直説法 1 希求法 2,3,4 接続法と ἄν, 3 「仮定」参照 (期待を除く)	οὐ, μή μή	ὡς, ὥσπερ と分 詞 4g	οὐ, μή
12. 関係	ὅς, οἷος, οὗ, ὅτε, など ὅστις, ὅποῖος, ὅπου, ὅποτε, など	独立節におけると同 様, しかしまた ἄν なしの希求法 2, 希求法 3,4 接続法と ἄν, 3 直説法未来 5	οὐ, μή		

351 アルファベット順に分類された主要動詞リスト

それぞれの動詞について与えられた形の主語については、§88 参照。

このリストは網羅したものではない。ここでは主要な動詞とよく用いられる形のみが与えられている。

括弧内の数字は現在幹形成に従って分類された動詞のリストを参照のこと。§171-178 参照。

			未来	アオリスト	完了
1.(35)	ἄγμαι	驚く	ἀγάσομαι	ἀγάσθην ἠγασάμην	
2.(81)	ἀγγέλλω	能 知らせる 受	ἀγγελῶ ἀγγελήσομαι	ἠγγείλα ἠγγέλθην	ἠγγέλκα ἠγγέλμαι
3.	ἄγνυμι	壊す	ἄξω	ἔαξα ἔαγην	κατ-ἔᾶγα
4.(49)	ἄγω	導く	ἄξω ἄχθήσομαι	ἠγαγον ἠχθην	ἦχα ἦγμαι
5.	ἄδω	歌う	ἄσομαι ἄσθήσομαι	ἦσα ἦσθην	ἦσμαι
6(19)	αἰδέομαι	恥じる	αἰδέσομαι	ἠδέσθην	ἠδεσμαι
7.(155)	αἰρέω	擲む	αἰρήσω αἰρεθήσομαι	εἶλον ἠρέθην	ἦρηκα ἦρημαι
8.(93)	αἶρω	持ち上げる	ἄρῶ ἄρθήσομαι	ἦρα ἦρθην	ἦρκα ἦρμαι
9.(108)	αἰσθάνομαι	知覚する、気づく	αἰσθήσομαι	ἦσθομην	ἦσθημαι
10.(91)	αἰσχύνω αἰσχύνομαι	辱める 恥じる	αἰσχύνῶ αἰσχύνομαι	ἠσχῦνα ἠσχύνθην	ἠσχυγκα ἠσχυμμαι
11.(25)	ἀκούω	聞く	ἀκούσομαι ἀκουσθήσομαι	ἠκουσα ἠκούσθην	ἀκήκοα ἠκουσμαι
12.	ἀλείφω	塗る	ἀλείψω ἀλειφθήσομαι	ἠλειψα ἠλείφθην	ἀλήλιφα ἀλήλιμμαι
13.(134)	ἀλίσκομαι	捕らわれる	ἀλώσομαι	ἔάλων, ἦλων	ἔάλωκα, ἦλωκα
14.	ἀλλάττω	(他) 変える	ἀλλάξω ἀλλαγήσομαι, ἀλλαχθήσομαι	ἠλλαξα ἠλλάγην ἠλλάχθην	ἠλλαχα ἠλλαγμαί

15.	ἄλλομαι	跳ぶ	ἀλοῦμαι	ήλάμην ήλόμην	
16.(106)	ἀμαρτάνω	誤りを犯す	ἀμαρτήσομαι ἀμαρτηθήσομαι	ήμαρτον ήμαρτήθην	ήμάρτηκα ήμάρτημαι
17.(92)	ἀμύνω	撃退する	ἀμύνω	ήμυνα	
18.(135)	ἀν-αλίσκω	浪費する	ἀν-αλώσω ἀν-αλωθήσομαι	ἀν-ήλωσα ἀν-ηλώθην	ἀν-ήλωκα ἀν-ήλωμαι
19.	ἀν-οίγνυμι と ἀν-οίγω	開く	ἀν-οίξω ἀν-οιχθήσομαι	ἀν-έωξα ἀν-εώχθην	ἀν-έωχα ἀν-εώγμαι
20.	ἀπ-εχθάνομαι	嫌われる	ἀπ-εχθήσομαι ἀπ-εχθανοῦμαι	ἀπ-ηχθόμην	ἀπ-ήχθημαι
21.(145)	ἀπο-διδράσκω	逃げる	ἀπο- δράσομαι[ā]	ἀπ-έδρᾶν	ἀπο-δέδρακα
22.(137)	ἀπο-θνήσκω	死ぬ	ἀπο-θανοῦμαι	ἀπ-έθανον	τέθνηκα (§153 参照)
23.(87)	ἀπο-κτείνω	殺す	ἀπο-κτενῶ	ἀπ-έκτεινα	ἀπ-έκτονα
24.(130)	ἀπ-όλλυμι ἀπ-όλλυμαι	殺す、滅ぼす 死ぬ	ἀπ-ολῶ ἀπ-ολοῦμαι	ἀπ-ώλεσα ἀπ-ωλόμην	ἀπ-ολώλεκα ἀπ-όλωλα
25.	ἀραρίσκω	適合させる		ήρσα, ήραρον ήρθην	ἄραῖσα, ἀρήρεμαι
26.(133)	ἀρέσκω	喜ばせる	ἀρέσω	ήρσα	
27.(20)	ἀρκέω	十分である	ἀρκέσω	ήρκεσα	
28.(70)	ἀρμόττω	適合させる	ἀρμόσω ἀρμοσθήσομαι	ήρμοσα ήρμόσθην	ήρμοκα ήρμοσμαι
29.	ἀρπάζω	略奪する	ἀρπάσομαι ἀρπασθήσομαι	ήρπασα ήρπάσθην	ήρπακα ήρπασμαι
30(48)	ἄρχω	支配する、始める	ἄρξω ἀρχθήσομαι	ήρξα ήρχθην	ήρχα ήργμαι
31.(107)	αὐξάνω	増やす	αὐξήσω αὐξηθήσομαι	ηὔξησα ηὔξηθην	ηὔξηκα ηὔξημαι
32.(105)	ἀφ-ικνέομαι	着く	ἀφ-ίξομαι	ἀφ-ἴκομην	ἀφ-ἴγμαι

33.	ἄχθομαι	怒る 悩む	ἀχθέσομαι	ἤχθέσθην	
34.(104)	βαίνω	歩く 歩かせる	βήσομαι βήσω	ἔβην ἔβησα	βέβηκα (§153 参照)
35.(83)	βάλλω	投げる	βαλῶ βληθήσομαι	ἔβαλον ἐβλήθην	βέβληκα βέβλημαι
36.(72)	βιβάζω	歩かせる	βιβῶ, -ᾶς	ἐβίβασα	
37.(62)	βλάπτω	害する	βλάψω βλαβήσομαι	ἔβλαψα ἐβλάβην	βέβλαφα βέβλαμμαι
38.	βλαστάνω	発芽する	βλαστήσω	ἐβλαστον	βεβλάστηκα ἐβλάστηκα
39.	βλώσκω (詩語)	歩く	μολοῦμαι	ἔμολον	μέμβλωκα
40.	βούλομαι	欲する	βουλήσομαι	ἐβουλήθην	βεβούλημαι
41.	γαμέω γαμέομαι	娶る 嫁ぐ (婦人につい て)	γαμῶ γαμοῦμαι	ἔγημα ἐγημάμην	γεγάμηκα γεγάμημαι
42.(17)	γελάω	笑う	γελάσομαι γελαστήσομαι	ἐγέλασα ἐγελάσθην	γεγέλασμα γεγέλασμαι
43.(131)	γηράσκω	老いる	γηράσομαι	ἐγήρασα	γεγήρακα
44(140)	γίγνομαι	成る	γενήσομαι	ἐγενόμην	γένονα γεγένημαι
45.(144)	γινώσκω	知る	γνώσομαι γνωσθήσομαι	ἔγνων ἐγνώσθην	ἔγνωκα ἔγνωσμαι
46.(38)	γράφω	書く	γράψω γραφήσομαι	ἔγραψα ἐγράφην	γέγραφα γέγραμμαι
47.(71)	γυμνάζω	訓練する	γυμνάσω γυμναστήσομαι	ἐγύμνασα ἐγυμνάσθην	γεγύμνακα γεγύμνασμαι
48.	δάκνω	噛む	δήξομαι δηχθήσομαι	ἔδακον ἐδήχθην	δέδηχα δέδηγμαι
49.	—	怖れる	δείσομαι	ἔδεισα	δέδοικα δέδια

50.(116)	δείκνυμι	示す	δείξω δειχθήσομαι	ἔδειξα ἐδείχθην	δέδειχα δέδειγμαί
51.(58)	δέρω	皮を剥ぐ	δερώ δαρήσομαι	ἔδειρα ἐδάρην	δέδαρα δέδαγμαί
52.(9)	δέω	縛る	δήσω δεθήσομαι	ἔδησα ἐδέθην	δέδεκα δέδεγμαί
53.	δέω	～を欠く ～が必要だ, 中動	δείσω δείσομαι	ἐδέησα ἐδεήθην	δέδεηκα δέδεηγμαί
54.(7)	δηλόω	示す	δηλώσω δηλωθήσομαι	ἐδήλωσα ἐδηλώθην	δεδήλωκα δεδήλωγμαί
55.(138)	διδάσκω διδάσκομαι 受動	教える 学ぶ	διδάξω διδάξομαι διδάχθήσομαι	ἐδίδαξα ἐδίδαξάμην ἐδίδαχθην	δεδίδαχα δεδίδαγμαί
56.(150)	δίδωμι	与える	δώσω δοθήσομαι	ἔδωκα ἐδόθην	δέδωκα δέδογμαί
57.(45)	διώκω	追う	διώξομαι, διώξω διωχθήσομαι	ἐδίωξα ἐδιώχθην	δεδίωχα δεδίωγμαί
58.	δοκέω	思われる, 思う	δόξω	ἔδοξα	δέδοκται ἐδόκτα
59.(34)	δύναμαι	～出来る	δυνήσομαι	ἐδυνήθην ἐδυνάσθην	δέδυνημαι
60.(12)	δύω δύομαι 受動	沈める (他) 沈む (自)	δύσω[ϋ] δύσομαι δύθήσομαι	ἔδυσα ἔδυν ἐδύθην[ϋ]	δέδυκα δέδυγμαί
61.(8)	έαώ	許す	έάσω έαθήσομαι	είασα είαθην	είακα είαμαι
62.(96)	ἐγείρω ἐγείρομαι 受動	起こす 起きる	ἐγερώ ἐγερθήσομαι	ἤγειρα ἤγρόμην ἤγέρθην	ἐγρήγορα ἐγήγεομαι
63.	ἐθέλω	欲する	ἐθελήσω	ἠθέλησα	ἠθέληκα

64.(76)	ἐθίζω	慣らせる	ἐθιῶ ἐθισθήσομαι	εἴθισα εἴθισθην	εἴθικα ¹ εἴθισμαι
65.	εἴρω	押し込める	εἴρω	εἴρωξα εἴρωχθην	εἴρωμαι
66.(103)	ἐλαύνω	駆る	ἐλώ, -ᾶς	ἤλασα ἤλάθην	ἐλήλακα ἐλήλαμαι
67.	ἐλέγχω	論駁する, 侮辱する	ἐλέγξω ἐλεγχθήσομαι	ἤλεγξα ἤλέγχθην	ἐλήλεγμαι
68.(52)	ἔλκω	引く	ἔλξω ἐλκυσθήσομαι	εἴλικυσα εἴλικύσθην	εἴλικυκα εἴλικυμαι
69.(126)	(ἀμφι)έννυμι (ἀμι)έννυμαι	着せる 着る	ἀμφιῶ ἀμφιέσομαι	ἤμφιεσα ἤμφιεσάμην	ἤμφιεσαι ἤμφιεσμαι
70.	ἐξ-ετάζω	吟味する	ἐξ-ετάσω ἐξ-ετασθήσομαι	ἐξ-ήτασα ἐξ-ητάσθην	ἐξ-ήτακα ἐξ-ήτασαι
71.(14)	ἐπ-αινέω	賞賛する	ἐπ-αινέσομαι ἐπ-αινεθήσομαι	ἐπ-ήνεσα ἐπ-ηνέθην	ἐπ-ήνεκα ἐπ-ήνεμαι
72.(33)	ἐπίσταμαι	知る	ἐπιστήσομαι	ἤπιστήθην	
73.(44)	ἔπομαι	従う	ἔψομαι	ἐσπόμην	
74.	ἐράω, ἔραμαι (詩語)	愛する	ἐρασθήσομαι	ἠράσθην	
75.	ἐργάζομαι 受動	働く	ἐργάσομαι ἐργασθήσομαι	εἰργασάμην εἰργάσθην	εἰργασμαι εἰργασμαι
76.(159)	ἔρχομαι	行く、 来る	ἐλεύσομαι (εἴμι §121 もまた 参照)	ἤλθον	ἐλήλυθα
77.(156)	ἐσθίω	食べる	ἔδομαι ἐδεσθήσομαι	ἔφαγον ἠδέσθην	ἐδήδοκα ἐδήδεσαι ἐδήδεμαι
78.(136)	εὐρίσκω	見つける	εὐρήσω εὐρεθήσομαι	ἠύρον, εὐρον ἠύρέθην	ἠύρηκα ἠύρημαι
79.	εὐφραίνω εὐφραίνομαι	喜ばせる 喜ぶ	εὐφρανῶ εὐφρανοῦμαι	εὐ-/ἠύφρανα εὐ-/ἠύφράνθην	

¹ 自動詞の意味で完了形 εἴωθα（習慣がある）が存在する。

80.(53)	ἔχω 中動および受動	持つ	ἔξω, σχήσω ἔξομαι, σχήσομαι	ἔσχον ἔσχόμεν	ἔσχηκα ἔσχημαι
81.(117)	ζεύγνυμι	軛をかける、結び つける	ζεύξω ζευχθήσομαι	ἔζευξα ἔζυγην, ἔζεύχθην	ἔζευγαί
82.	ζῶ (不定法 ζῆν)	生きる	ζήσω, βιώσομαι	ἐβίω	βεβίωκα
83.(132)	ἡβάσκω	成人する	ἡβήσω	ἡβησα	ἡβηκα
84.(57)	ἡδομαι	楽しむ	ἡσθήσομαι	ἡσθην	
85.	ἦκω	着く	ἦξω		ἦκα
86.(63)	θάπτω	埋葬する	θάψω ταφήσομαι	ἔθαψα ἐτάφη	τέταφα τέθαμμαι
87.	θέλω, ἐθέλω	(n. 63) 参照			
88.(4)	θηράω	狩る	θηράσω θηραθήσομαι	ἐθήρασα ἐθηράθη	τεθήρακα τεθήραμαι
89.(11)	θύω	供犠する	θύσω[ῶ] τύθήσομαι	ἔθυσα ἐτύθη	τέθυκα τέθυμαι
90.(152)	ἵημι	送る、放つ	ἵσω ἵθήσομαι	ἵκα εἶθη	εἶκα εἶμαι
91.(153)	ἴστημι ἴσταμαι 受動	立てる 立つ	στήσω στήσομαι σταθήσομαι	ἔστησα ἔστη ἐστάθη	ἔστηκα (§153 参照)
92.(94)	καθαίρω	清める	καθαρῶ καθαρθήσομαι	ἐκάθηρα ἐκαθάρθην	κεκάθαρα κεκάθαραι
93(77)	καθίζω καθίζομαι καθέζομαι	座らせる 座る 座っている 座っている	καθιῶ καθεδοῦμαι	ἐκάθισα ἐκαθεζόμεν (未完了過去およびアオリスト)	κάθημαι (§122 参照)
94.(26)	καίω, κάω	焼く	καύσω καυθήσομαι	ἔκαυσα ἐκαύθη	κέκαυκα κέκαυμαι
95.(21)	καλέω	呼ぶ	καλῶ κληθήσομαι	ἐκάλεσα ἐκλήθη	κέκληκα κέκλημαι

96.(101)	κάμνω	疲れる	καμοῦμαι	ἔκαμον	κέκμηκα
97.(22)	κελεύω	命令する	κελεύσω κελευσθήσομαι	ἐκέλευσα ἐκελεύσθην	κεκέλευκα κεκέλευσμαι
98.(121)	κεράννυμι	混ぜる	κεράσω, κερῶ, -ᾶς κράθήσομαι	ἐκέρασα ἐκράθην	κέκράμαι
99.(27)	κλαίω, κλάω	泣く	κλαύσομαι κλαυ(σ)θήσομαι	ἔκλαυσα ἐκλαύ(σ)θην	κέκλαυκα κέκλαυμαι
100.(23)	κλείω	閉める	κλείσω κλεισθήσομαι	ἔκλεισα ἐκλείσθην	κέκλεικα κέκλειμαι
101.	κλέπτω	盗む	κλέψω κλεφθήσομαι, κλαπήσομαι	ἔκλεψα ἐκλέφθην, ἐκλάπην	κέκλοφα κέκλεμμαι
102.(90)	κλίνω	傾ける	κλίνῶ κλίθήσομαι	ἔκλινα ἐκλίθην	κέκλικα κέκλιμαι
103.(61)	κόπτω	切る	κόψω κοπήσομαι	ἔκοψα ἐκόπην	κέκοφα κέκομμαι
104.(78)	κράζω	叫ぶ	κράξω	ἔκραγον	κέκραγα
105.(36)	κρέμαμαι	ぶら下がる	κρεμήσομαι		
106.(122)	κρεμάννυμι 中動、受動	ぶら下げる（他）	κρεμῶ, -ᾶς κρεμασθήσομαι	ἐκρέμασα ἐκρεμάσθην	κρέμαμαι (n.105 参照)
107.(89)	κρίνω	裁く	κρίνῶ κρίθήσομαι	ἔκρινα ἐκρίθην	κέκρικα κέκριμαι
108.(64)	κρύπτω	隠す	κρύψω κρυφθήσομαι	ἔκρυψα ἐκρύφθην	κέκρυφα κέκρυμμαι
109.(73)	κτίζω	建設する	κτίσω κτισθήσομαι	ἔκτισα ἐκτίσθην	ἔκτικα ἔκτισμαι
110.(112)	λαγχάνω	籤で手に入れる	λήξομαι	ἐλάχον	εἴληχα
111.(110)	λαμβάνω	取る	λήψομαι ληφθήσομαι	ἔλαβον ἐλήφθην	εἴληφα εἴλημμαι, λέλημμαι
112.(111)	λανθάνω ἐπι-λανθάνομαι	人知れず ... する 忘れる	λήσω ἐπι-λήσομαι	ἐλάθον ἐπ-ελάθομην	λέληθα ἐπι-λέλησμαι

113.(46)	λέγω 受動 δια-λέγομαι	言う ¹ 対話する	λέξω λεχθήσομαι δια-λέξομαι	ἔλεξα ἐλέχθην δι-ελέχθην	λέλεγμαι δι-είλεγμαι
114.(47)	συλ-λέγω	集める	συλ-λέξω συλ-λεγήσομαι	συν-έλεξα συν-ελέγην	συν-είλοχα συν-είλεγμαι
115.(43)	λείπω	残す	λείψω λειφθήσομαι	ἔλιπον ἐλείφθην	λέλοιπα λέλειμμα
116.(10)	λύω	解く、破壊する	λύσω λυθήσομαι	ἔλυσα ἐλύθην	λέλυκα λέλυμαι
117.(86)	μαίνομαι	狂う	μανοῦμαι	ἐμάνην	μέμνηνα
118.(109)	μανθάνω	学ぶ	μαθήσομαι	ἔμαθον	μεμάθηκα
119.(98)	μαρτύρομαι	証人とする	μαρτυροῦμαι	ἐμαρτυράμην	
120.	μάχομαι	戦う	μαχοῦμαι	ἐμαχεσάμην	μεμάχημαι
121.(118)	μ(ε)ίγνυμι	混ぜる	μ(ε)ίξω μ(ε)ιχθήσομαι	ἔμ(ε)ιξα ἐμίγην, ἐμ(ε)ίχθην	μέμ(ε)ιγμαι
122.	μέλει μοι ἐπι-μέλομαι	気がかりである 気遣う	μελήσει ἐπι-μελήσομαι	ἐμέλησε ἐπ-εμελήθην	μεμέληκε, μέμηλε ἐπι-μεμέλημαι
123.	μέλλω	~しようとする	μελλήσω	ἐμέλλησα	
124.(59)	μένω	留まる	μενώ	ἔμεινα	μεμένηκα
125.(84)	μιαίνω	汚す	μιανῶ μιανήσομαι	ἐμίᾳνα ἐμίανθην	μεμιάγκα μεμιάσμαι
126.(2)	μηνύω	明かす	μηνύσω μηνυθήσομαι	ἐμήνυσα ἐμηνύθην	μεμήνυκα μεμήνυμαι
127.(146)	ἀνα-μιμνήσκω μιμνήσκομαι	思い出させる 思い出す	ἀνα-μνήσω μνησθήσομαι	ἀν-έμνησα ἐμνήσθην	μέμνημαι
128.	νέμω	分配する	νεμῶ νεμηθήσομαι	ἔνειμα ἐνεμήθην	νενέμηκα νενέμημαι
129.(74)	νομίζω	見なす	νομιῶ νομισθήσομαι	ἐνόμισα ἐνομίσθην	νενόμικα νενόμισμαι

¹ 他の根上に形成される幹については、現在幹に従った動詞リストの n.160 参照

130.(97)	οἰκτίρω	憐れむ	οἰκτιρῶ	ᾠκτ(ε)ῖρα	
131.(79)	οἰμῶζω	呻く	οἰμῶξομαι	ᾠμῶξα	
132.	οἶομαι, οἶμαι	考える, 思う	οἰήσομαι	ᾠήθην	
133.	οἶχομαι	出発した, 遠方にいる	οἰχήσομαι		οἶχωκα, ᾠχημαι
134.(129)	ὀμνυμι	誓う	ὀμοῦμαι	ᾠμοσα	ὀμῶμοκα
135.(149)	ὀνίνημι	役立つ	ὀνήσω	ᾠνησα	
	ὀνίναμαι	利益を得る	ὀνήσομαι	ᾠνήθην	
136.(157)	ὄρᾶω	見る	ὄψομαι	εἶδον	ἑώρᾶκα, ἑόρᾶκα, ὄπωπα
			ὀφθήσομαι	ᾠφθην	ἑώρᾶμαι, ἑόρᾶμαι, ᾠμμαι
137.	ὀργίζομαι	怒る	ὀργισθήσομαι	ᾠργίσθην	ᾠργισμαι
138.	ὀρύττω	掘る	ὀρύξω	ᾠρυξα	ὀρῶρυχα
			ὀρυχθήσομαι	ᾠρύχθην	ὀρῶρυγμαί
139.(1)1.	παιδεύω	教育する 能 受	παιδεύσω	ἐπαιδευσα	πεπαιδευκα
			παιδευθήσομαι	ἐπαιδευθην	πεπαιδευμαι
140.(139)	πάσχω	蒙る、苦しむ	παίσομαι	ἔπαθον	πέπονθα
141.(3)	παύω	止めさせる	παύσω	ἔπαυσα	πέπαυκα
	παύομαι	止める	παύσομαι	ἐπαυσάμην	πέπαυμαι
	受動		παυθήσομαι	ἐπαύθην	πέπαυμαι
142.(54)	πείθω	説得する	πείσω	ἔπεισα, ἐπίθον	πέπεικα
	πείθομαι	従う	πείσομαι	ἐπιθόμην	πέποιθα
	受動		πεισθήσομαι	ἐπέισθην ¹	πέπεισμαι
143.(37)	πέμπω	送る	πέμψω	ἔπεμψα	πέπομφα
			πεμφθήσομαι	ἐπέμφθην	πέπεμμαι
144.(123)	πετάννυμι	広げる	πετάσω, πετῶ, -ᾶς	ἐπέτασα	πεπέτακα
			πετασθήσομαι	ἐπετάσθην	πέπταμαι
145.	πέτομαι	飛ぶ、飛び回る	πτήσομαι	ἐπτόμην, ἔπτην	

¹ἐπέισθην はまた、「従った（過去）」を意味する。

146.	πέττω	料理させる	πέψω πεφθήσομαι	ἔπειψα ἐπέφθην	πέπεμμαι
147.(119)	πήγνυμι πήγνυμαι (中・受動)	固定する、 突き刺す	πήξω παγήσομαι, πήξομαι	ἔπηξα ἐπάγην, ἐπήχθην	πέπηχα πέπηγα, πέπηγμαι
148.(147)	πίμπλημι	満たす	πλήσω πλησθήσομαι	ἔπλησα ἐπλήσθην	πέπληκα πέπλησμαι
149.(148)	πίμπρημι	焼く	πρήσω πρησθήσομαι	ἔπρησα ἐπρήσθην	πέπρηκα πέπρη(σ)μαι
150.(115)	πίνω	飲む	πίομαι ποθήσομαι	ἔπιον ἐπόθην	πέπωκα πέπομαι
151.(141)	πίπτω	落ちる、倒れる	πεσοῦμαι	ἔπεσον	πέπτωκα
152.(69)	πλάττω (ἄ)	加工する	πλάσω πλασθήσομαι	ἔπλασα ἐπλάσθην	πέπλακα πέπλασμαι
153.(28)	πλέω	航海する	πλεύσομαι	ἔπλευσα	πέπλευκα
154.(68)	πλήττω ἐκ-πλήττω ἐκ-πλήττομαι	叩く 怯えさせる 怯える	πλήξω πληγήσομαι ἐκ-πλήξω ἐκ-πλαγήσομαι	ἔπληξα ἐπλήγην ἐξ-ἐπληξα ἐξ-επλάγην	πέπληγα πέπληγμαι ἐκ-πέπληγμαι
155.(29)	πνέω	息する	πνεύσομαι, -οῦμαι	ἔπνευσα	πέπνευκα
156.(6)	ποιέω	作る、なす	ποιήσω ποιηθήσομαι	ἐποίησα ἐποιήθην	πεποίηκα πεποίημαι
157.(67)	πράττω	行う、為す	πράξω πραχθήσομαι	ἔπραξα ἐπράχθην	πέπραχα, πέπραγα ¹ πέπραγμαι
158.(113)	πυνθάνομαι	聞き知る	πεύσομαι	ἐπυθόμην	πέπυσμαι
159.(30)	ρέω	流れる	ρεύσομαι, ρεύσομαι, ρήσομαι	ἔρρευσα, ἐρρύνην	ἐρρύηκα
160.(120)	ρήγνυμι ρήγνυμαι	壊す、 引き裂く 砕ける	ρήξω ράγήσομαι	ἔρρηξα ἐρράγην	ἔρρηγα ἔρρωγα
161.(60)	ρίπτω	投げる	ρίψω ρίφθήσομαι, ρίφήσομαι	ἔρριψα ἐρρίφθην, ἐρρίφην	ἔρριφα ἔρριμμαι

¹πέπραγα は自動詞の意味「そのような状況にある」においてのみ用いられる。

162.(128)	ῥώννυμι	強くする	ῥώσω ῥωσθήσομαι	ἔρρωσα ἔρρωσθην	ἔρρωμαι
163.(80)	σαλπίζω	ラッパを吹く	σαλπῶ	ἔσάλπιγξα	
164.(125)	σβέννυμι σβέννυμαι 受動	消す 消える	σβέσω σβήσομαι σβεσθήσομαι	ἔσβεσα ἔσβην ἔσβέσθην	ἔσβηκα ἔσβεσμαι
165.	σειώ	揺り動かす	σειώσω	ἔσεισα ἔσεισθην	σέσεικα σέσεισμαι
166.	σημαίνω	合図する	σημανῶ σημανθήσομαι	ἔσήμηνα ἔσημάνθην	σεσήμαγκα σεσήμασμαι
167.(65)	σκάπτω	掘る	σκάψω σκαφήσομαι	ἔσκαψα ἔσκάφην	ἔσκαφα ἔσκαμμαι
168.(124)	σκεδάννυμι	撒き散らす	σκεδάσω, σκεδῶ, -ᾶς σκεδασθήσομαι	ἔσκεδάσα ἔσκεδάσθην	ἔσκεδάσμαι
169.(16)	σπάω	引く	σπάσω σπασθήσομαι	ἔσπασα ἔπάσθην	ἔσπακα ἔσπασμαι
170.(95)	σπείρω	種をまく	σπερῶ σπαρήσομαι	ἔσπειρα ἔσπάρην	ἔσπαρκα ἔσπαρμαι
171.(56)	σπένδω σπένδομαι 受動	灌奠の酒を注ぐ (灌奠を行って) 休戦する	σπέισω σπέισομαι σπεισθήσομαι	ἔσπεισα ἔσπεισάμην ἔσπείσθην	ἔσπεικα ἔσπεισμαι ἔσπεισμαι
172.(82)	στέλλω	送る	στελῶ σταλήσομαι	ἔστειλα ἔστάλην	ἔσταλκα ἔσταλμαι
173.	στενάζω	呻く	στενάξω	ἔστενάξα	
174.(39)	στρέφω	向ける (他)	στρέψω στραφήσομαι	ἔστρεψα ἔστράφην	ἔστροφα ἔστραμμαι
175.(127)	στρώννυμι	拵げる	στρώσω στρωθήσομαι	ἔστρωσα ἔστρώθην	ἔστρωμαι
176.	σφάλλω σφάλλομαι 受動	倒す 倒れる	σφαλῶ σφαλήσομαι, σφαλοῦμαι σφαλήσομαι	ἔσφηλα ἔσφάλην ἔσφάλην	ἔσφαλκα ἔσφαλμαι ἔσφαλμαι

177.	σφάττω	喉を切って殺す	σφάξω σφαγήσομαι	ἔσφαξα ἔσφάγην	ἔσφαγμαί
178.(75)	σώζω	救う	σώσω σωθήσομαι	ἔσωσα ἔσώθην	σέσωκα σέσω(σ)μαι
179.(66)	τάττω (ἄ)	並べる	τάξω ταχθήσομαι	ἔταξα ἐτάχθην	τέταχα τέταγμαί
180.(88)	τείνω	張る	τενῶ ταθήσομαι	ἔτεινα ἐτάθην	τέτακα τέταμαι
181.(18)	τελέω	成就する	τελῶ, τελέσω τελεσθήσομαι	ἔτέλεσα ἐτέλεσθην	τετέλεκα τετέλεσμαι
182.(102)	τέμνω	切る	τεμῶ τμηθήσομαι	ἔτεμον ἐτμήθην	τέτμηκα τέτμημαι
183.(50)	τήκω τήκομαι 受動	溶かす (他) 溶ける (自)	τήξω τακήσομαι τακήσομαι	ἔτηξα ἐτάκην	τέτηκα τέτηγμαί
184.(151)	τίθημι	置く	θήσω τεθήσομαι	ἔθηκα ἐτέθην	τέθηκα
185.(142)	τίκτω	子をなす	τέξομαι	ἔτεκον	τέτοκα
186.(5)	τιμάω	誉める	τιμήσω τιμηθήσομαι	ἐτίμησα ἐτιμήθην	τετίμηκα τετίμημαι
187.(99)	τίνω τίνομαι	償う 復讐する	τείσω τείσομαι	ἔτεισα ἐτεισάμην	τέτεικα τέτεισμαι
188.(143)	τιτρώσκω	傷つける	τρώσω τρωθήσομαι	ἔτρωσα ἐτρώθην	τέτρωκα τέτρωμαι
189.(40)	τρέπω τρέπομαι 受動	向ける (他) 向く (自)	τρέψω τρέψομαι τραπήσομαι, τρεφθήσομαι	ἔτρεψα, ἔτραπον ἐτραπόμην, ἐτρεψάμην, ἐτράπην ἐτράπην, ἐτρέφθην	τέτροφα τέτροφα τέτραμμαί
190.(41)	τρέφω	養う	θρέψω τραφήσομαι	ἔθρεψα ἐτρέφην	τέτροφα τέθραμμαί
191.(154)	τρέχω	走る	δραμοῦμαι	ἔδραμον	δεδράμηκα
192.(42)	τριβώ	擦る	τριψώ τριβήσομαι τριφθήσομαι	ἔτριψα ἐτρίβην 𐀀𐀃𐀆 ἐτρίφθην	τέτριφα τέτριμμαί

193.(114)	τυγχάνω	遭遇する	τεύξομαι	ετύχον	τετύχηκα
194.	ὑπ-ισχνέομαι	約束する	ὑπο-σχίσομαι	ὑπ-εσχόμεν	ὑπ-έσχημαι
195.(85)	φαίνω	示す	φανῶ	ἔφηνα	πέφαγκα
	φαίνομαι	現れる	φανοῦμαι, φανήσομαι	ἔφάνην	πέφηναι, πέφασμαι
	受動		φανθήσομαι	ἔφάνθην	πέφασμαι
196.(158)	φέρω	運ぶ	οἴσω	ἤνεγκον, ἤνεγκα	ἐνήνοχα
			ἐνεχθήσομαι	ἤνέχθην	ἐνήνεγμαί
197.(51)	φεύγω	逃げる	φεύξομαι, -οὔμαι	ἔφυγον	πέφευγα
198.(32)	φημί	言う ¹ 、述べる 肯定する	φήσω	ἔφησα	
			肯定するだろう	肯定した	
199.(100)	φθαίνω	先んずる	φθήσομαι	ἔφθασα, ἔφθην	ἔφθακα
200.	φθείρω	減らす	φθερῶ	ἔφθειρα	ἔφθαρκα
			φθαρήσομαι	ἔφθάρην	ἔφθαρμαι
201.(13)	φύω	生み出す	φύσω	ἔφυσα	
	φύομαι	生まれる	φύσομαι	ἔφυσν	πέφυκα
202.	χάσκω	口を開く	χανοῦμαι	ἔχᾶνον	κέχηνα
203.(31)	χέω	注ぐ	χέω	ἔχεα	κέχυκα
			χυθήσομαι	ἐχύθην	κέχυμαι
204.(15).	χρῶμαι	利用する	χρήσομαι	ἐχρησάμην	κέχημαι
	(不定法 χρῆσθαι)			ἐχρήσθην	
205.(24)	χρίω	油を塗る	χρίσω	ἔχρισα	κέχρικα
			χρισθήσομαι	ἐχρίσθην	κέχριμαι
206.(55)	ψεύδω	欺く	ψεύσω	ἔψευσα	ἔψευκα
	ψεύδομαι	嘘をつく	ψεύσομαι	ἔψευσάμην	ἔψευσμαι
	受動		ψευσθήσομαι	ἔψεύσθην	ἔψευσμαι
207.	ῶθέω	押す	ῶσω	ἔωσα	ἔωκα
			ῶσθήσομαι	ἔώσθην	ἔωσμαι
208.	ώνέομαι	買う	ώνήσομαι	ἐπριάμην	ἐώνημαι

¹ 他の根上に形成される幹については、現在幹に従った動詞リストの n.160 参照

『新約聖書』のギリシア語

予備的注記

時として人はそう信じているけれども、『新約聖書 (NT)』のギリシア語は、それ自体が一つの言語だというわけではない。キリスト教信仰の中心にある文献資料体の著者たちは、コイナーの一つの特殊な形を用いている。それは何よりもセム系の言語および文化の基層によって特徴付けられた形なのである。“コイナー”という用語によって指示されるのはアレクサンドロス (紀元前 323 年没) による征服の後に、東地中海盆地およびアジア・アフリカの後背地において共有の言語 (κοινή διάλεκτος 共通の方言) として押し付けられたギリシア語である。これらの地域は、今やマケドニアの将軍たちや彼らの建設した諸王朝との支配の下にあったのである。コイナーの基礎はアッティカ方言である。即ち、前 4 世紀にアテナイで話されていた言語である。依然アテナイはギリシア文化の依然として比類なき中心であった。コイナーも必然的に進化し、諸地域の言語・文化的基層からの影響のもとに、また一般に時代の政治や社会の、したがって文化の変動の影響を受けて多様化していった。全ての言語の進化と同様に、その進化は決して止むことはなかった。こうして何故にアッティカ方言の文法を知ることによって、コイナーで書かれたあらゆる種類の文献への道が開かれるのかが分かるのである。ただし、この言語の変化および新たに現れる地域的な特殊性を考慮に入れる必要はある。

コイナーの飛躍的發展に平行しつつギリシア文化の力強い流れのおかげで、過去のギリシア作家たち (οἱ παλαιοί いにしえの人々) の偉大な伝統への愛着が起り、人々は、散文においても詩においても言語と文体の模範としてそれらに着想を得続けた。ギリシア文化の支配していたローマ帝国時代の教育システムはこの同じ保守主義に特徴づけられていた。それゆえに古典期のギリシア文学とヘレニズム時代 (すなわちアレクサンドロスによる征服に続く時代) のそれ、そしてローマ帝国のそれとの間には、少なくとも言語や文体の観点からして、一般に真の断絶はないのである。キリスト教的ギリシア文学は、大部分はこの伝統の中に挿入される。かなりの数の教会のギリシア教父たちはギリシアの παιδεία (教養) に依存しているのである。

『新約聖書』のギリシア語の形態論上の顕著な特徴—それによってこの言語は古典期のギリシア語から区別される—は、ここでは非常に簡潔に説明する。それらは古典的言語の文法の対応する諸々のパラグラフを充たす仕方です式化されている。そこに動詞のリストを、出現頻度の順 (Friedrich Rehkopf, Griechisches Lernvokabular zum Neuen Testament, Göttingen 1987 に依拠する) にしたがって、三グループに分けて付け加える。統辞法は多様な文献の読みによって本質的に習得されるという考えにもとづいて、統辞論上の指摘は、いくつかの孤立した考察を別にすれば、補語節および不定法構文や分詞構文の働きを要約することにとどめる。この統辞論に関する最後の部分は、ピエール・レイモン氏の未完の草稿に着想を得ている。統辞に関する諸事象のもっと体系的な記述については専門的な文法書を参照されたい。

音声学, 発音

諸々の教育的な理由からして唯一で同じ発音を古典ギリシア語に対してもコイナーについても守ってよい。だが、以下を記憶すべきである。

ει	以後右のように発音する	i
η	〃	i
αι	〃	é
οι	〃	u
α, η, ω	次第に右のように発音する。	a, i, ô
αυ, ευ	〃	av, ev

- § 69 一般的原則として、新約聖書においては、三人称再帰代名詞（ἐαυτόν など）は一人称に対しても二人称に対しても同様に用いられる。約音形（αὐτόν など）は明瞭な隔たりにおいてある。
 複数三人称については ἐαυτούς などの型の形しか見られない。
 形容詞 ἴδιος 自身の（私自身の、君自身のなど）は所有表現においては再帰代名詞属格の代理をしばしばする。
- § 71 コイネーにおいては、φιλεῖ τὸν υἱὸν 彼は息子を愛するに加えて、同様に、φιλεῖ τὸν υἱὸν αὐτοῦ/ἐαυτοῦ または φιλεῖ τὸν ἴδιον υἱὸν さえも見出す。
 かくて、例えば、彼らの言葉においては τῆ ἰδία διαλέκτῳ αὐτῶν によって訳される。
- § 72 相互性を表現するために、新約聖書においては同様に εἰς τὸν ἕνα（セム風）の型の表現も見られる。
- § 73 コイネーにおいては、関係代名詞と疑問代名詞（§74）は互いに交換可能である。
 関係代名詞の代わりに、しばしば不定関係詞を用いる。
- § 74 不定代名詞は新約聖書においては時に εἷς, μία, ἓν によって、あるいは ἄνθρωπος または ἀνὴρ によって置き換えられる。
- § 76 表：ποσός は新約聖書には存在しない。また、πότερος は稀である。
 表注：ἄλλος は時に ἕτερος の代わりに用いられる。
- § 77 不定代名詞：新約聖書においては稀である。
 場所（方向）：ποῖ は ποῦ によって置き換えられる。
 場所または仕方の副詞 πῆ は最早存在しない。
- § 84 数詞： 四 τέσσαρες, τέσσερα（文学的コイネーでは τέσσαρα）
 十三-十九 δεκατρεῖς, δεκατέσσαρες, δεκαπέντε, δεκαέξι, など。
 序数詞： 一番目 時に εἷς, μία, ἓν（セム風）
 十三-十九番目 τρισκαίδέκατος, τεσσαρεσκαίδέκατος, πεντεκαίδέκατος など。
 数副詞： アラムの影響： ἓν τριάκοντα = τριακοντάκις
- § 85 οὐδεὶς 新約聖書においては：時に οὐ... πᾶς 誰も... ない。
 ἄμφω 新約聖書においては：ἀμφοτέροι
 τέτταρες, -α 新約聖書においては：τέσσαρες, τέσσερα（文学的コイネーでは τέσσαρα）
- § 94 可能性の動詞的形容詞の -τός への形成はコイネーにおいては最早用いられない。固定的場合にしかない。
 -τέος に終わる動詞的形容詞：新約聖書では βλητέον 置かなければならないのみである。（hapax: Lc5, 38）
- § 100 三人称複数命令法 能動相 παιδεύ-έτωσαν
 中・受動相 παιδεύ-έσθωσαν
曲折語尾 -τωσαν および -σθωσαν は動詞活用の全ての命令法について三人称複数の古典曲折語尾 -ντων および -σθων に置き換わる！
- § 101 -ω 活用は、-μι 活用に、特に -(v)νυμι に終る動詞について、置き換わる傾向がある。
- § 102 コイネーにおいては調音上の ν は通常存在する。
- § 108 母音または二重母音で始まる動詞に注意：εἰ- および εὖ- によって始まる動詞は一般的には加音を持たない。

- §109 -ω 変化動詞三人称複数能動相：新約聖書では -οσαν に終る稀な形を見出す。
- §114 (最後の注) 新約聖書においては, πεινάω および διψάω が約音動詞 -άω のように扱われるのを見出す。
例：不定法 πεινᾶν, διψᾶν, 直説法三人称単数 πεινᾷ, διψᾷ。
動詞 πεινάω は未来 (πεινάσω) およびアオリスト (ἐπεινάσα) においてさえ α を維持する。
- §117 新約聖書においては, 動詞 φημί のまだ用いられる唯一の形は：φημί 私は言う, φησίν 彼 (彼女) は言う, φασίν 彼 (彼女) らは言う, ἔφη 彼 (彼女) は言っていたである。
- §118 未完了過去： 一人称単数 ἤμην
二人称単数 ἦς (新約聖書においてはしばしば)
三人称複数 新約聖書においてはまた ἤμεθα
命令法： 三人称単数 新約聖書においてはまた ἦτω
二人称複数 ἔσεσθε (=直説法未来：セム風)
- §120 新約聖書では, χρῆ は唯一度見られるだけである：Jc 3, 10。
- §121 動詞 εἶμι は新約聖書においては複合動詞においてしか用いられない, また現在の意味である。
- §122 κάθουσαι (直説法二人称単数現在) の代わりに, 新約聖書においては κάθη, また κάθησο (命令法二人称単数現在) の代わりに κάθου を見出す。この動詞の未来形は以後 καθήσομαι である (そして καθεδοῦμαι ではない, 表の三番目の注参照)
動詞 κείμαι は時に新約聖書においては τίθημι の完了中・受動相 τέθειμαι によって置き換えられる。
- §126 新約聖書においては希求法未来は用いられない。
- §127 -άζω および -ίζω におわる動詞 (注参照) については, 新約聖書においてはシグマ未来を見出す (約音未来はほとんど旧約聖書の引用においてのみ現れる)。
- §128 新約聖書では希求法未来は用いられない。
- §129 新約聖書：τελέω の未来は τελέσω であり, また καλέω の未来は καλέσω である。
- §130 新約聖書においては未来完了は存在しない。
- §133 新約聖書の言葉においては, シグマなしアオリスト語基の最終音節の α は系統的に η ではなく α に延長される。
例：ποιμαίνω 家畜を飼うの ἐποίμανα。
- §134 シグマアオリストの希求法能動相では, 語尾 -σειας, -σειε(v) および -σειαν は最早用いられない。
- §136 直説法能動相三人称複数：新約聖書においては同様に語尾 -οσαν である (稀)。
コイネーにおいては, シグマアオリストは幹アオリストを犠牲にしても一般化する傾向がある。
例：ἤμαρτον の代わりに ἤμάρτησα, また κατέλιπον の代わりに κατέλειψα。
また, εἶπα, ἦλθα, εἶδα, ἤνεγκα など参照, これらはシグマなしのアオリストの形を示す。
例：εἶπα, εἶπας, εἶπαν (直説法)；εἶπόν (命令法)
表三番目の注：新約聖書では, εὔρε, ἶδε, λάβε (アクセントに注意)。
- §139 -βαίνω を伴う複合動詞について, 命令法アオリストにおいて同様に -βα, -βάτω, -βατε の形を見出す。
- §142 コイネーにおいては, 未来およびアオリスト受動相の形は中動相の形に代わる傾向がある。
- §144 希求法アオリスト受動相では, 語尾 -θειμέν, -θειτε, -θειεν は最早用いられない。

- §150 新約聖書においては、直説法三人称複数について語尾 *-καν* もまた見出す。
過去完了形に関しては、稀な場合を除いて、加音はない。
過去完了複数の語尾：*-κειμεν, -κειτε, -κεισαν*。
接続法および希求法は用いられない。
- §152 喉音の語基：完了 *ἔουκα* (語基 *εἰκ-/οἰκ-*, 対応する現在形なしに), 古典ギリシア語では「思われる」を意味するが、新約聖書ではむしろ「~のようである」を意味する。
- §153 この段落における動詞 *ἴστημι* および *ἀποθνήσκω* について示される完了形は新約聖書においては極めて稀である。
特殊性として特記される完了 *δέδοικα* および *δέδια* は新約聖書においては欠けている。
- §154 新約聖書における直説法完了：*οἶδα, οἶδας, οἶδεν, οἶδαμεν, οἶδατε, οἶδασιν*。
新約聖書において用いられる未来：*εἰδήσω*
- §156 加音は過去完了においては稀な用法である。接続法および希求法完了中・受動相は新約聖書においては無い。
- §161 新約聖書においては、*v + μ* の会合は *μμ* を与える：例. *μεμιάσμαι* の代わりに *μεμιάμμαι*。
- §167 *-ζω* の現在幹：新約聖書においては、*κράζω* および *ἀρπάζω* を除いて、これらの動詞は歯音語基のモデルに従って *-σω* に終る未来、*-σα* に終るアオリストを持つ。
- §185 能動相完了分詞女性形単数について、時に次の語尾が見出すことがある。
属格 *-υῆς*, 与格 *-υῆη*。
- §351 (§171-178 もまた参照)
- | | |
|------------------|---------------------------------------------|
| <i>ἀγγέλλω</i> | アオリスト受動相： <i>ἠγγέλην</i> |
| <i>γαμέω</i> | 新約聖書においては、女性についてもまた能動相に置かれる；受動相は中動相を置き換える。 |
| <i>ἔπομαι</i> | 新約聖書では用いられない； <i>ἀκολουθέω</i> によって置き換えられる。 |
| <i>καίω</i> | アオリスト受動相：また <i>ἐκάην</i> |
| <i>κεράννυμι</i> | 完了中・受動相： <i>κεκέρασμαι</i> |
| <i>μάχομαι</i> | 新約聖書においては稀 |
| <i>οἴομαι</i> | 新約聖書においては稀 |
| <i>οἶχομαι</i> | 新約聖書においては証明されない。 |
| <i>ῥέω</i> | 未来能動相： <i>ῥεύσω</i> |
| <i>σφάττω</i> | 新約聖書： <i>σφάζω</i> |
| <i>τίνω</i> | 未来能動相：また <i>τίσω</i> |
| <i>τυγχάνω</i> | 完了能動相： <i>τέτ(ε)υχα</i> |
| <i>χέω</i> | 未来能動相： <i>χεῶ</i> |
| <i>χρίω</i> | 完了中・受動相： <i>κέχρισμαι</i> |

新約聖書ギリシア語：動詞リスト（三群に分類，頻度順に）

ハイフンの先行する形は動詞接頭辞との複合においてのみ用いられる。

現在	未来能動相 未来受動相	アオリスト能動相 アオリスト受動相	完了能動相 完了受動相
ἀκούω	ἀκούσω, -σομαι	ἤκουσα ἤκούσθην	ἀκήκοα
ἀποκρίνομαι	ἀπεκρίθῃσομαι	ἀπεκρίθην, -εκρινάμην	
γίνομαι	γενήσομαι	ἐγενόμην, ἐγενήθην	γόγωνα, γεγένημαι
γινώσκω	γνώσομαι γνωσθήσομαι	ἔγνων ἐγνώσθην	ἔγνωκα ἔγνωσμαι
δίδωμι	δώσω δοθήσομαι	ἔδωκα ἐδόθην	δέδωκα δέδομαι
δύναμαι	δυνήσομαι	ἠδυνήθην, ἠδυνάθην	
ἔρχομαι	ἐλεύσομαι	ἦλθον, ἦλθα	ἐλήλυθα
ἔχω（未完了過去 εἶχον）	ἔξω	ἔσχον	ἔσχηκα
θέλω（未完了過去 ἤθελον）	θελήσω	ἠθέλησα	
λαμβάνω	λήψομαι ληφθήσομαι	ἔλαβον ἐλήμφθην	εἴληφα εἴλημμαι
λέγω	ἐρῶ ρήθήσομαι	εἶπον, εἶπα ἐρρέθην	εἶρηκα εἶρημαι

οἶδα, οἶδας, οἶδεν, οἶδαμεν, οἶδατε, οἶδασιν

未完了過去 ἤδειν, -εις, -ει, -ειμεν, -ειτε, -εισαν

不定法 εἰδέναι 分詞 εἰδώς, εἰδυῖα 接続法 εἰδῶ 未来 εἰδήσω など

αἶρω	ἀρῶ ἀρθήσομαι	ἤρα ἤρθην	ἤρκα ἤρμαι
ἀποθνήσκω	ἀποθανοῦμαι	ἀπέθανον	τέθνηκα
ἀποστέλλω	ἀποστελῶ	ἀπέστειλα ἀπεστάλην	ἀπέσταλκα ἀπέσταλμαι
ἀφήμι	ἀφήσω ἀφεθήσομαι	ἀφήκα ἀφέθην	ἀφέωμαι
βάλλω	βαλῶ βληθήσομαι	ἔβαλον, ἔβαλα ἐβλήθην	βέβληκα βέβλημαι
γράφω	γράψω γραφήσομαι	ἔγραψα ἐγράφην	γέγραφα γέγραμμαι

現在	未来能動相 未来受動相	アオリスト能動相 アオリスト受動相	完了能動相 完了受動相
ἐγείρω ἐγείρομαι	ἐγερῶ ἐγερθήσομαι	ἤγειρα ἤγέρθην	ἐγήγεραμαι
ἐσθίω, τρώγω	φάγομαι	ἔφαγον	βέβρωκα
εὐρίσκω	εὐρήσω εὐρεθήσομαι	εὕρον εὐρέθην	εὔρηκα
ζῶ	ζήσω, ζήσομαι	ἔζησα	
ἴσθημι, ἰστάνω	στήσω -σταθήσομαι	ἔστησα -εστάθην	ἔστακα
ἴσταμαι	στήσομαι, σταθήσομαι	ἔστην, ἐστάθην	ἔστηκα, στήκω
καλέω	καλέσω κληθήσομαι	ἐκάλεσα ἐκλήθην	κέκληκα κέκλημαι
ὄράω	ὄψομαι ὀφθήσομαι	εἶον, εἶδα ὠφθην	έώρακα έώραμαι, ὠμμαι
πορεύομαι	πορεύσομαι	ἐπορεύθην	
σώζω	σώσω σωθήσομαι	ἔσωσα ἐσώθην	σέσωκα σέσωσμαι, σέσω(σ)μαι
τίθημι	θήσω	ἔθηκα ἐτέθην	τέθεικα τέθειμαι
=====			
ἄγω	ἄξω ἀχθήσομαι	ἤγαγον, -ἤξα ἤχθην	-ἤγμαι
αἰρέω	αἰρήσω, -ελῶ	-ειλον, εἶλα -ηρέθεν	
ἀμαρτάνω	ἀμαρτήσω	ἤμαρτον, ἡμάρτησα	ἡμάρτηκα
ἀνοίγω	ἀνοίξω	ἀνέφξα(τήν-), ἤνοιξα ἀνεώχθην, (τήν-), ἠνοίχθην, ἠνοίγην	ἀνέφωγα 開かれる ἀνέωγμα(τήν)
ἀποκτείνω	ἀποκτενῶ	ἀπέκτεινα ἀπεκτάνθην	ἀπέκτονα 殺される
ἀπόλλυμι ἀπόλλυμαι	ἀπολέσω ἀπολοῦμαι	ἀπώλεσα ἀπωλόμην	ἀπόλωλα
αὐξάνω	αὐξήσω	ἠὔξῃσα ἠὔξηθην	
-βαίνω	-βήσομαι	ἔβην	-βέβηκα

現在	未来能動相 未来受動相	アオリスト能動相 アオリスト受動相	完了能動相 完了受動相
βούλομαι	βουλήσομαι	ἐβουλήθην	
δείκνυμι	δείξω	ἔδειξα ἐδείχθην	δέδειχα
δέομαι	δεηθήσομαι	ἐδεήθην	
δοκέω	δόξω	ἔδοξα	
καθίζω	καθίσω,καθιῶ	ἐκάθισα	κεκάθικα
κράζω	κράξω	ἔκραξα	κέκραγα
λείπω	λείψω λειφθήσομαι	ἔλιπον, ἔλειψα ἐλείφθην	λέλειμμαι
μανθάνω		ἔμαθον	μεμάθηκα
μιμνήσκομαι	μνησθήσομαι	ἐμνήσθην	μέμνημαι
ὄμνύω, ὄμνυμι		ᾠμοσα	
πάσχω		ἔπαθον	πέπονθα
πίμπλημι	πλησθήσομαι	ἔπλησα ἐπλήσθην	
πίνω	πίομαι	ἔπιον (不定法 πιεῖν, πεῖν)	πέπωκα
πίπτω	πεσοῦμαι	ἔπεσον, ἔπεσα	πέπτωκα
πράσσω	πράξω πραχθήσομαι	ἔπραξα ἐπράχθην	πέπραχα πέπραγμαι
στρέφω	στρέψω στραφήσομαι	ἔστρεψα ἐστράφην	ἔστροφα ἔστραμμαι
τάσσω	τάξω ταγήσομαι	ἔταξα ἐτάγην	τέταχα τέταγμαι
φαίνω 現れる φαίνομαι	φανῶ φανήσομαι	ἔφανα ἐφάνην	
φέρω	οἴσω	ἤνεγκον, ἤνεγκα ἤνέχθην	ἐνήνοχα ἐνήνεγμαι
φεύγομαι	φεύξομαι	ἔφυγον	
χαίρω	χαρήσομαι	ἐχάρην	

統辞法

§206 コイネーにおいては、複数中性主語を持つ動詞の単数一致の原則は古典ギリシア語における程には系統的には尊重されない。

§211 新約聖書のギリシア語においては、セム語的な統辞法の手本に基き、動詞は文の最初の主語の前に来る。

補語節・不定法構文および分詞構文、ならびにそれらの否定の統辞法 (古典ギリシア語の補語節の統辞法については §348-350 参照; 不定法構文については §312-328 参照; 分詞構文については §329-346 参照)

I. 目的の表現

目的は以下によって表現されることができる。

1) 接続法にある目的の補語節によって—接続詞 **ἵνα** または **ὅπως** ~するために (否定: **μή**) に導かれて。

例: ἵνα πᾶς ὁ πιστεύων ἐν αὐτῷ ἔχη ζωὴν αἰώνιον
すべて彼 (キリスト) の存在を信ずる全ての人が永遠の命を持つように (Jn 3, 15)
ὅπως γένησθε υἱοὶ τοῦ πατρὸς ὑμῶν
君たちが君たちの父の息子であるように (Mt 5, 45)

2) 未来分詞 (単独または分詞構文において) によって:

例: ὅς ἐληλύθει προσκυνήσων 崇拜するためにやって来た人 (Ac 8, 27)

3) 目的の不定法によって:

a) 冠詞なしで、主に動きの動詞とともに:

例: ἤλθομεν προσκυνῆσαι αὐτῷ 我々は彼を崇拜するためにやって来た。(Mt 2, 2)

b) 冠詞属格 **τοῦ** が先行して (主格化された不定法):

例: μέλλει γὰρ Ἡρώδης ζητεῖν τὸ παιδίον τοῦ ἀπολέσαι αὐτό
何故ならヘーローデスは子供を罰させるために子供を捜しに行くところだ。(Mt 2, 13)

c) 前置詞 **εἰς** または **πρός** ~のためにが先行して冠詞 **τό** が続く (名詞化された不定法):

例: ἐζήτησαν κατὰ τοῦ Ἰησοῦ μαρτυρίαν εἰς τὸ θανατῶσαι αὐτόν
イエスに対して彼を死に至らせるための証人を彼らは探していた。(Mc14, 55)

また不定法が続く **ἐνεκεν τοῦ** を見出す。

例: ἐνεκεν τοῦ φανερωθῆναι τὴν σπουδὴν ὑμῶν
君たちの熱心さを明らかにするために (2 Co 7, 12)

注: 構文 b) および c) は不定法単独あるいは不定法構文を使うことがある。

例: εἰς τὸ δύνασθαι ἡμᾶς παρακαλεῖν
我々が慰めることができるように (2 Co 1, 4)

ここで **ἡμᾶς** は不定法構文の対格に置かれた主語である。

4) 直説法未来または接続法 (否定は **μή**) に置かれた関係詞によって

例: ἀποστέλλω τὸν ἄγγελόν μου... ὅς κατασκευάσει
彼が準備するように私の使者を私は送る (Mt 11, 10)

II. 結果の表現

結果は以下のように表現される。

- 1) 直説法に置かれた結果の補語節—接続詞 **ὥστε** 従って（否定：οὐ）によって導かれる—を用いて；
 例： οὕτως γὰρ ἠγάπηεν ὁ θεὸς τὸν κόσμον ὥστε τὸν υἱὸν τὸν μονογενῆ ἔδωκεν
 なぜなら斯くも神はこの世を愛したので彼は唯一の息子を与えた。(Jn 3, 16)
- 2) 不定法または不定法構文— **ὥστε** によって導かれまたは導かれずに—を用いて；
 例： ὥστε τὸ πλοῖον καλύπτεσθαι ὑπὸ τῶν κυμάτων
 したがって小船は波によって覆われていた。(Mt 8, 24)
- 3) 直説法または接続法アオリストに置かれた結果の関係詞を用いて（否定 οὐ）。

III. 原因の表現

原因は以下のように表現される。

- 1) 直説法に置かれた原因の補語節—接続詞 **ὅτι** なぜなら, **ἐπεὶ** (ἐπειδὴ) なぜなら によって導かれ—を用いて（否定：οὐ）
 例： ἐπεὶ ἦν παρασκευὴ
 準備の日であったので (Mc 15,42)
- 2) 原因の意味の同格の分詞（または分詞構文）を用いて
 例： Ἰωσήφ... δίκαιος ὢν... ἐβουλήθη λάθρα ἀπολῦσαι αὐτήν
 ヨゼフは正しい人間であったので、こっそりと彼女を捨てることを彼は決心した (Mt 1, 19)。
- 3) 単純な不定法または名詞化された不定構文（冠詞 τό を伴う）を用い, **διὰ** ~という事実の故にが先行して
 例： διὰ τὸ εἶναι φίλον αὐτοῦ
 彼の友であるので (Lc 11, 8)
- 4) 直説法に置かれた原因の関係詞を用いて（否定：οὐ）

IV. 条件の表現

条件は以下のように表現される

- 1) 接続詞 **εἰ** (または **εἰάν**) によって導かれた仮定（条件）補語節を用いて。否定は μή。三つの場合が示される：
実現性・偶然性（未来についての一般性または期待）・**非実現性**。
 注記 可能性の仮定（希求法を伴う εἰ, および, 主節において一般には希求法を伴う ἄν）は新約聖書では非常に稀である。

範疇	補語節	主節
実現性	εἰ と直説法	直説法または命令法
偶然性・一般性	εἰάν と接続法	直説法または命令法
非実現性	現在の：εἰ と未完了過去 過去の：εἰ と直説法アオリスト	ἄν と未完了過去 ἄν と直説法アオリスト

備考：過去の非実現性と現在の非実現性を結びつけることがある。

例： εἰ τότε ἐπιστεύσατε, καὶ νῦν ἐπιτεύετε ἄν
もしその時君たちが信じてさえいたら、今も君たちはまた信じているはずだったのに。

2) 仮定の意味の分詞（または分詞構文）を用いて；

例： (...) ἑαυτὸν δὲ ἀπολέσας ἢ ζημιωθείς;
然るに自らを滅ぼしたりあるいは害ったりした上では（人は全世界を得る何の利益があろうか？）(Lc 9, 25)

3) 関係詞を用いて、一般的には ἄν または ἐάν と接続法を伴いながら、

例： ὁς γὰρ ἄν ἐπαισχυνθῆ με καὶ τοὺς ἐμοὺς λόγους...
もし誰かが私を、そして私の言葉を恥じるなら... (Lc 9, 26)

V. 譲歩の表現

譲歩は以下のように表現される

1) 以下によって導かれる譲歩の補語節を用いて

a) εἰ καὶ（～ではあるが、～とはいえ、～であっても、～の時でさえ）、直説法とともに（否定は οὐ）、確かな事実に基づく譲歩が問題である時。

または、以下によって

b) 接続法を伴う ἐὰν καὶ（καὶ ἐάν または κἄν）（否定は μή）、偶然性として表現される譲歩が問題である時。

2) 譲歩の意味の分詞（または分詞構文）を用いて、καίπερ～ではあるが、～とはいえによって先行され、または先行されずに。

VI. 時間性の表現

時間性は以下のように表現される

1) 時間の補語節を用いて

a) 直説法で、事実として示されることが重要である時（否定は οὐ）、以下の主な接続詞を用いて：

ὄτε, ὡς	～した後で、～する間、～する時
ἕως, ἕως οὗ, ἕως ὅπου, ὡς	～するまで
ἐν ᾧ	～するまで
ἄχρι(ς), μέχρι(ς), ἄχρι(ς) οὗ, μέχρι(ς) οὗ	～するまで
πρὶν	～する前に

b) ἄν を伴う接続法で、偶然または反復として示されることが重要である時（否定は μή）、上記接続詞とともに、
例えば：ὅταν～する時、～する度に、ἕως ἄν など。

2) 分詞（または分詞構文）を用いて；

3) 不定法（または不定法構文）を用いて：

a) 前置詞が先行する名詞化された不定法（または名詞化された不定法構文）：

μετὰ τό...	～した後	διὰ τό...	～する間
πρὸ τό...	～する前に	ἐν τῷ...	～する間

b) πρὶν～する前にが先行する不定法（または不定法構文）

Ⅶ. 事実のまたは意見の言表

以下を表現する動詞に依存して

- a) 認知, 問合せ: ἀκούω, γινώσκω など
- b) 信用, 意見: πιστεύω など
- c) 言明: λέγω など

事実のあるいは意見の言表が示す。

- 1) 直説法に置かれた肯定的補語節—接続詞 ὅτι ~ということ (時に ὡς) に導かれた—を用いて。否定: οὐ。
- 2) 不定法構文 (新約聖書では明瞭に退化しながら) を用いて。

例: τίνα με λέγετε εἶναι;
 私か誰だと君たちは言うのか? (Mt 16, 15)

ギリシア語索引

数字は各節を示す。

特殊性を示す動詞の範例については、アルファベット順に分類された主要動詞リスト §351 参照。

前置詞と動詞接頭辞については、前置詞および動詞接頭辞リスト §272, ならびに動詞接頭辞として用いられない主要前置詞リスト §273 参照

小辞および接続詞については、主要小辞および接続詞, その用法リスト §348 参照

α, ā > η	8	ἄμμοιρος (+ 属格)	246
ἀ 否定接頭辞	196	ἄμφω, ἀμφοῖν	85
ἀ- (ἀ-)	196	ἀν- 否定接頭辞	196
ἄγαμαι (+ 属格)	244	ἄν	281
ἀγανακτέω (+ 分詞)	343	(非実現性)	292
ἀγγέλλω (+ 分詞)	344	(過去における反復)	294
ἀγών	128	(+ 希求法)	300
ἀδικέω (+ 分詞)	343	(+ 接続法)	306
Ἀθηνᾶ	36	ἀναγκάζω (+ 不定法)	315
Ἀθήναζε	218	ἀναιτιος (+ 属格)	245
Ἀθήνηθεν	218	ἀναμμινήσκω (+ 属格)	251
Ἀθήνησι	218	ἀνάπλευς (+ 属格)	241
αι, āi (αι), αῖ	5	ἀνήρ	47
αἰ (前倚辞)	22	ἀνθρωπος	30
ἄιδης	6	ἀπαγορεύω (+ 不定法)	315, 316
αἰδώς	49	ἀπέδραν	140
Αἰθίοψ	43	ἄπειρος (+ 属格)	251
αἰσθάνομαι (+ 属格)	251	ἀπέκτονα	152
(+ 分詞)	344	ἀπηχθόμην	137
αἰσχύνομαι (+ 分詞)	343	ἀπέχομαι (+ 属格)	257
αἰτιάομαι (+ 属格)	245	(+ 不定法)	316
αἴτιος (+ 属格)	245	ἀποθνήσκω (完了)	153
ἀκούω (+ 属格)	251	ἀπολαύω (+ 属格)	246
(+ 对格)	251	Ἀπόλλων	48
(+ 分詞)	344	ἀπορέω (+ 属格)	257
ἄκρος (形容詞の位置)	209	ἄπτομαι (+ 属格)	248
ἀλγέω (+ 分詞)	343	ἄριστος	61
ἀλήθεια	34	ἄρχομαι (+ 分詞)	343
ἀλλάττω (+ 属格)	257	ἄρχω (+ 属格)	248, 252
ἀλλήλους, -ας, -α	72	ἀστήρ	47
ἄλλοθεν	218	ἄστν	51
ἄλλοθι	218	Ἄτρείδης	35
ἄλλος	76	ἄττα	74
ἄλλοσε	218	ἄττα	75
ἄλς	46	αυ, ἄν	5
ἀμαρτάνω (+ 属格)	248	αὐτόθεν	77
ἀμείνων	61		
ἀμέλει	57		
ἀμελέω (+ 属格)	250		
ἀμελής (+ 属格)	250		
ἀμνήμων (+ 属格)	251		

αὐτός, -ή, -ό	67	δέον	346
ὁ αὐτός	208	δηλός εἰμι (+分詞)	343
与格で (随伴)	263	δηλόω	113
αὐτόσε	77	δηλόω (+分詞)	344
αὐτοῦ (場所の指示詞)	77	δήμος	30
ἀφικόμην	137	διάγω (+分詞)	343
ἄχαρις	44	διατελέω (+分詞)	343
ἄχθομαι (+分詞)	343	διαφέρω (+属格)	252
β	3	διδάσκω (+不定法)	317
βαίνω (アオリスト)	138-140	δίδομι (現在)	115
(完了)	153	(アオリスト)	141
βασιλεύς	51	δίκαιος	37
βασιλεύω (+属格)	252	δίκαιός εἰμι (+分詞)	343
βέβλαφα	152	διπλοῦς	38
βέλτιστος	61	διψῆν	114
βελτίων	61	διώκω (+属格)	245
βούλομαι (+不定法)	315	δοκεῖ (+不定法)	321
βοῦς	52	δόξαν	346
γ	3	δόρυ	44, 52
γαστήρ	47	δός	141
γε (後倚辞)	23	δύναμαι (+不定法)	317
γέγονα	152	δύο, δυοῖν	85
γέγραμμαι	157	(一致)	210
γέγραφα	152	δυσ-	196
γέμειν (+属格)	241	δύω (アオリスト)	138-140
γένος	49	δῶρον	30
γέρας	49	ε	2
γέρων	45	εἰ (後倚辞)	23
γεύομαι (+属格)	246	έ, έ	68
γῆ	36	εἶδος	137
γιγνώσκω (+属格)	344	έάλων	140
(アオリスト)	139-140	έάω (+不定法)	315
γόνυ	44, 52	εἶβαλον	136, 137
γραῦς	52	εἶβην	138-140
γράφομαι (+属格)	245	εἶβησα	138
γυμνός (+属格)	257	εἰβίων	140
γυνή	43	εἰλάβην	146
δ	3	εἰλαστον	137
δαίμων	48	εἰλέπην	146
-δε (後倚辞)	23	εἰγενόμην	137
δέδια	153	εἰκρατής (+属格)	252
δεδογμένον	346	εἰγων	139-140
δέδοικα	153	εἰγράφην	146
δει (+不定法)	321	εἰρηγόρα	152
δει μοι (+属格)	257	εἰγώ	68
δείκνυμι (活用)	101	εἰδακον	137
(+分詞)	344	εἰδαρθον	137
δελφίς	48	εἰραμον	137
δέομαι (+属格)	257		
(+不定法)	315		

ἔδυν	138-140	ἐμάνην	146
ἔδυσσα	138	ἐμός, -ή, -όν	70
ἔθαλον	137	ἐμπειρος (+ 属格)	251
ἔθανον	137	ἐν (前倚辞)	22
ἐθέλω (+ 不定法)	315	ἐν (ἴημι から)	141
ἔθιγον	137	ἐνδεής (+ 属格)	257
ἔθορον	137	ἐνθα	77
εἰ	2, 5	ἐνθάδε	77
εἰ (前倚辞)	22	ἐνθεν	77
εἶ (εἶμι から)	118	ἐνθένδε	77
εἷ (εἶμι から)	121	ἐνταῦθα	77
εἶδον	137	ἐντεῦθεν	77
εἶθε	293, 299	ἐξ (前倚辞)	22
εἰκάζω (+ 与格)	264	ἐξεπλάγην	146
εἰκός (+ 不定法)	321	ἐξεσσι (+ 不定法)	321
εἵληφα	152	ἐξόν	346
εἶλον	137	ἔοικα	148
εἶμί (後倚辞)	23	(+ 与格)	264
εἶμί	118-119	ἐόρακα	148
εἶμι	121	ἔπαθον	137
εἰπέ	136	ἔπεσον	137
εἶπον	137	ἐπιθυμέω (+ 属格)	249
εἶργω (+ 属格)	257	ἐπιλανθάνομαι (+ 属格)	251
(+ 不定法)	316	ἐπιμελής (+ 属格)	250
εἶρηκα	148	ἐπιμέλομαι (+ 属格)	250
εἶς (前倚辞)	22	ἐπιον	137
εἶς, μία, ἓν	85	ἐπίσταμαι (+ 不定法)	317
εἶς (ἴημι から)	141	ἐπιστήμων (+ 属格)	251
εἰσὶν οἶ	81	ἐπλάκην	146
εἴσομαι (οἶδα の未来)	154	ἐπλέκην	146
εἶωθα	148, 152	ἐπλήγεν	146
ἐκεῖ	77	ἐπριάμην	140
ἐκεῖθεν	77	ἐπτόμην	137
ἐκεῖνος	66	ἐπυθόμην	137
ἐκεῖσε	77	ἐρώω (+ 属格)	249
ἔκαμον	137	Ἔρμης	36
ἐκλάπην	146	ἐροάφην	146
ἐκόπην	146	ἔρριφα	152
ἔκραγον	137	ἐροίφην	146
ἐκρύβην	146	ἐρούην	140, 146
ἐκρύφην	146	ἔρως	44
ἔκτατον	137	ἔς	141
ἐκών	45	ἔσβην	139-140
ἔλαβον	137	ἐσθίω (+ 属格)	246
ἔλαθον	137	ἐσκάφην	146
ἐλάττω	61	ἔσομαι	119
ἐλάχιστος	61	ἐσπάρην	146
ἔλαχον	137		
ἐλέγην	146		
ἐλέγχω (+ 分詞)	344		
ἐλέεω (+ 属格)	244		
ἐλέφας	45		
ἐλθέ	136		
ἔλιπον	137		
ἔμαθον	137		

ἐσπόμην	137	ἕως	32
ἐστάλην	146	ζ	3
ἔστηκα	148	Ζεύς	16, 52
ἔστην	138-141	ζηλόω (+ 属格)	244
ἔστησα	138	ζῆν	114
ἔστι (アクセント)	23	η, η < ā	2
ἔστι (+ 不定法)	321	ή (前倚辞)	22
ἔστιν οἱ	81	(曲用)	28
ἔστιν ὅστις	81	ἦ (εἶμι から)	118
ἔστιν ὅτε	81	ἦγαγον	137
ἔστιν οὗ	81	ἦγγελμαι	160
ἔστιν ᾧ	81	ἦγέομαι (+ 属格)	252
ἐστράφην	146	ἦγρόμην	137
ἔστροφα	152	ἦδομαι (+ 分詞)	343
ἐσφάγην	146	ἦ δ' ὅς	29
ἐσφάλην	146	ἦδύς	51
ἔσχατος (形容詞の位置で)	209	ηι(η)	5
ἔσχον	137	ἦ (場所の関係詞)	77
ἐτάκην	146	ἦα (εἶμι から)	121
ἐτάφην	146	ἦδη (οἶδα から)	154
ἔτεκον	137	ἦσθόμην	137
ἔτεμον	137	ἦκιστα	61
ἔτερος	76	ἦλθον	137
ἔτραγον	137	ἦλίκος	76
ἐτράπην	146	ἦλλάγην	146
ἔτραπον	137	ἦμαρτον	137
ἐτράφην	146	ἦμεῖς	68
ἐτρίβην	146	ἦμέτερος, -α, -ον	70
ἐτύπην	146	ἦν (εἶμι から)	118
ἔτυχον	137	ἦνεγκον	137
εὐ	5	ἦρχα	152
εὐ-	196	ἦρως	54
εὐγενής	49	ἦσθα (εἶμι から)	118
εὐδαιμονίζω (+ 属格)	244	ἦττάομαι (+ 属格)	252
εὐδαίμων	48	(+ 分詞)	343
εὐ ποιέω (+ 分詞)	343	ἦττων	61
εὐρέ	136	ηυ	5
εὐρον	137	ηῦρον	137
ἔφαγον	137	ἦχα	152
ἐφάνην	146	ἦώς	49
ἐφθάρην	146	θ	3
ἔφθην	140	θάλαττα	34
ἐφίεμαι (+ 属格)	249	θαυμάζω (+ 属格)	244
ἔφυγον	137	θεός	30
ἔφυν	138-140	θές	141
ἔφυσσα	138		
ἔχανον	137		
ἐχάρην	146		
ἔχω (+ 属格)	248		
(+ 不定法)	317		
ἔψευσμαι	159		
ἐώρων	108		

θυγάτηρ	47	λέλοιπα	152
θύραζε	218	λεώς	32
θύραθεν	218	λήγω (+ 属格)	257
θύρασι	218	(+ 分詞)	343
		λόγος	30
ι	2	λυπέομαι (+ 分詞)	343
ιδέ	136	λῶστος	61
ἴημι (現在)	115	λῶων	61
(アオリスト)	141		
ἴθι (εἴμι から)	121	μ	3
ἴλεως	39	μά	234
ἴσθι (εἰμί から)	118	μακαρίζω (+ 属格)	244
(οἶδα から)	154	μάλα	61
ἴσος (+ 与格)	264	μάλιστα	61
ἴστημι (現在)	115	μᾶλλον	61
(アオリスト)	138-141	μανθάνω (+ 不定法)	317
(完了)	153	Μαραθῶν	218
ἰχθῦς	53	μάρτυς	46
		μάχη	34
κ	3	με (後倚辞)	23
κάθημαι	122	μέγας, μεγάλη, μέγα	40
καὶ ὅς	29	μέγιστος	61
κάκιστος	61	μείζων	61
κακίων	48, 61	μείων	61
καλέω (未来の意味)	129	μέλει μοι (+ 属格)	250
καλός	37	μέλλω (+ 不定法)	315
κατεκλίνην	146	μέμνηνα	152
κεῖμαι	122	μέμνημαι (+ 属格)	251
κέκλοφα	152	(+ 分詞)	344
κέκοφα	152	μέσος (形容詞の位置)	209
κέκυφα	152	μεστός (+ 属格)	241
κελεύω (+ 不定法)	315	μεταδίδωμι (+ 属格)	246
κενός (+ 属格)	257	μεταλαμβάνω (+ 属格)	246
κέρας	44	μέτεστί μοι (+ 属格)	246
κήδομαι (+ 属格)	250	μετέχω (+ 属格)	246
κοινή, (序論参照)		μέτοχος (+ 属格)	246
κοινωνέω (+ 属格)	246	μή	282-289
κόρη (<κορηᾶ)	33	μή (禁止, 接続法と)	305, 309
κρατερός (+ 属格)	252	μή (μή οὐ) 恐れ of 動詞の後	308
κρατέω (+ 属格)	252	虚辞, 否定の意味 of 動詞の後	316, 320
κράτιστος	61	μή οὐ 否定的言ひ回しの後で不定法を否定しながら	316, 318, 320, 322
κρείττων	61	μηδεῖς	85
κρίνω (+ 属格)	245	μήτηρ	47
κύων	48	μνήμων (+ 属格)	251
κωλύω (+ 属格)	257	μοι (後倚辞)	23
(+ 不定法)	315		
λ	3		
λαβέ	136		
λαγώς, λαγῶς	32		
λαμβάνω (+ 属格)	248		
λανθάνω (+ 分詞)	343		
λαός	30		
λείπομαι (+ 属格)	252		
λέληθα	152		

Μοῖρα	34	ὀπόθεν	77
μου (後倚辞)	23	ὅποι	77
Μοῦσα	34	ὀποῖος	76
μύριοι, μυριοί	85	ὀπόσος	76
ν	3	ὀπότε	77
-ν 調音の	42, 102	ὀπότερος	76
ναῦς	52	ὀπου	77
νεανίας	35	ὀπως	77
νή	234	ὀράω (+ 分詞)	344
νικάω (+ 分詞)	343	ὀργίζομαι (+ 属格)	244
νοῦς	31	ὀρέγομαι (+ 属格)	249
νυν (後倚辞)	23	ὀρώρουχα	152
νώ, νῶν	86	ὄς, ἤ, ὄ	73
ξ	3	ὄς (καὶ ὄς, ἤ δ' ὄς)	29
ο	2	ὄσος	76
ό (前倚辞)	22	ὄστις, ἤτις, ὄ τι	75
ό, ἤ, τό	28	ὄστισοῦν	81
ό αὐτός (+ 与格)	264	ὄστοῦν	31
ὄδε, ἤδε, τόδε	65	ὄσφραίνομαι (+ 属格)	251
όδός	30	ὄτε	77
όδούς	45	ὄτοις	75
ὄθεν	77	ὄτου	75
οι, οἱ	5	ὄτω	75
οί (前倚辞)	22	ὄτων	75
οί (後倚辞)	23	ου	2, 5
οί, οἱ	68	οὐ (前倚辞)	22
οἷ (場所の關係詞)	77	οὐ	282-289
οἶδα	154	οὐ 虚辞	320
(+ 不定法)	317	οὐ (後倚辞)	23
(+ 分詞)	344	οὐ, οὔ	68
οἶκαδε	218	οὔ (場所の關係詞)	77
οἶκοθεν	218	οὔ (ἔμαι から)	141
οἶκοι (処格)	218	οὐδεῖς	85
οἶκτίρω (+ 属格)	244	οὐ μὴ (直説法未来または接続法と)	289, 308
οἶος	76	οὔς	44
οἶός τε + 不定法	76	οὔτος, αὐτή, τοὔτο	64
οἶς	50	οὔτως	77
ὀκνέω (+ 不定法)	315	οὐ φημι	320
ὀλίγου δεῖν	257	π	3
ὀλιγωρέω (+ 属格)	250	παιδευθεῖς, -θεισα, -θέν	184
Ὀλυμπίασι	218	παιδευόμενος, -μένη, -μενον	186
ὀ μὲν... ὀ δέ	29	παιδεύσας, -σασα, -σαν	183
ὀμοιος (+ 与格)	264	παιδεύων, -ουσα, -ον	182
ὀμοιώω (+ 与格)	264	παίδων (アクセント)	42
ὄν (εἰμί から)	118	πάντων (アクセント)	42
ὄν	346	παραγγέλλω (+ 不定法)	315
ὄναρ	44	παρόν	346
ὀνίναμαι (+ 属格)	246	πάς, πάσα, πᾶν	45
ὄνυξ	43		
ὄπη	77		

παῶς (形容詞の位置)	209	πόλις	50
παῶσι (アクセント)	42	πολίτης	35
πατήρ	47	πολύς, πολλή, πολύ	40
παύομαι (+ 属格)	257	Ποσειδών	48
(+ 分詞)	343	ποσός	76
παύω (+ 属格)	257	πόσος;	76
πειθῶ (+ 不定法)	315	ποτέ (後倚辭)	23
πειθῶ	54	ποτέ	77
πεινήν	114	πότε;	77
πέλεκυς	51	πότερος;	76
πένης	44	που (後倚辭)	23
πεπαιδευκός, -κυῖα, -κός	185	που	77
πέποιθα	152	ποῦ;	77
πέπομφα	152	πούς	44
πέπονθα	152	πρέπει (+ 不定法)	321
πέπραγα	152	πρέπον	346
πέπραγμα	158	προσῆκει (+ 不定法)	321
πέπραχα	152	προσῆκον	346
περ (後倚辭)	23	πρὸ τοῦ	29
περιγίγνομαι (+ 属格)	252	πυθάνομαι (+ 属格)	251
περίεμι (+ 属格)	252	(+ 分詞)	344
Περικλῆς	49	πῦρ	46
πέφασμαι	161	πω(ς)	77
πέφευγα	152	πως (後倚辭)	23
πέφηνα	152	πῶς;	77
πεφύλαχα	152		
πη (後倚辭)	23	Ϟ	3
πη	77	ῥέω (約音)	114
πη;	77	ῥέω (語基)	165
πηλίκος;	76	ῥήτωρ	46
πίθι	136		
πίμπλημι (活用)	114	Ϝ	3
(+ 属格)	241	σβέννυμι (アオリスト)	139-140
πίνω (+ 属格)	246	σε (後倚辭)	23
πλεῖστος	61	σοι (後倚辭)	23
πλείων	61	σός, σή, σόν	70
πλεονεκτέω (+ 属格)	252	σου (後倚辭)	23
πλέω (約音)	114	στερέω (+ 属格)	257
(語基)	165	στρατιά	34
πλήθειν (+ 属格)	241	στυγέω (+ 属格)	244
πλήρης (+ 属格)	241	σύ	68
πληρόω (+ 属格)	241	συμβαίνει (+ 不定法)	321
πνέω (約音)	114	συμβουλεύω (+ 不定法)	315
(語基)	165	συνείλοχα	152
ποθέν (後倚辭)	23	σφείς	68
ποθέν	77	σφέτερος, -α, -ον	70
πόθεν;	77		
ποθέω (+ 不定法)	315		
ποι (後倚辭)	23		
ποι	77		
ποι;	77		
ποιέω	111		
ποιμήν	48		
ποιός	76		
ποιός;	76		

σχές	136	ύπεσχύμην	137
σχῆμα Πινδαρικών	206	ύπομένω (+分詞)	343
Σωκράτης	49		
σῶμα	44	Φ	3
σωτήρ	46	φαίνομαι (+分詞)	343
		φαίνω (+分詞)	344
Τ	3	φάσκω	117
ταύτη	77	φεύγω (+属格)	245
τε (後倚辭)	23	(+不定法)	316
τελέω (未来の意味)	129	φημί (後倚辭)	23
-τέος, (-τέα), -τέον	94	(現在)	117
τέταχα	152	φθάνω (+分詞)	343
τέτηκα	152	φροντίζω (+属格)	250
τέτριφα	152	φύλαξ	43
τέτροφα	152	φυλάττομαι (+不定法)	316
τέτταρες, τέτταρα	85	φύω (アオリスト)	139-140
τῆδε	77	φῶς	44
τηλικόσδε	76		
τηλικούτος	76	Χ	3
τίθημι (現在)	115	χαίρω (+分詞)	343
(アオリスト)	141	χαλεπαίνω (+属格)	244
τιμάω	112	χαρίεις	45
τιμή	34	χάρις	44
τις (後倚辭)	23	χείρ	46
τίς, τις	74	χείριστος	61
τό (曲用)	28	χείρων	61
τοι (後倚辭)	23	χέω (約音)	114
τοῖος	76	(未来の意味)	129
τοιόσδε	76	χρεών	346
τοιούτος	76	χρή	120
τολμάω (+不定法)	315	(+不定法)	321
-τός, (-τή), -τόν	94	χρησθαι	114
τόσος	76	χρώς	44
τοσόσδε	76	χώρα	34
τοσοῦτος	76	χωρίζω (+属格)	257
τότε	77		
τοῦ, του (不定)	74	Ψ	3
τρεῖς, τρία	85		
τυγχάνω (+属格)	248	ω	2
(+分詞)	343	ῶ (ἴημι から)	141
τυραννέω (+属格)	252	ᾶδε	77
τυραννεύω (+属格)	252	ωι (ω)	5
τυραννίς	44	ῶς (仕方の關係詞)	77
τῶ, τω (不定)	74	ῶς	77
		ᾶσπερ	77
υ	2	ωυ	5
ὔδαρ	44	ᾶφελλον, ᾶφελον	137, 293
υι	5	ᾶφλον	137
υῖός	52		
ύμεις	68		
ύμέτερος, -α, -ον	70		
ύπερέχω (+属格)	252		
(+分詞)	343		

邦用語索引

数字は各節に対応する

あ

- アオリスト Aoriste 88-89, 131 (語幹 thème) ; 90, 280 (語根及び時制 thème et temps) ; 108 (加音 augment) ; 132, 134 (アオリスト I またはシグマアオリスト aoriste I ou sigmatique) ; 133 (シグマなしの asigmatique) ; 135-137 (アオリスト II または語幹性 aoriste II ou thématique) ; 138-140 (語基性アオリスト a. radical) ; 142-146 (受動相 passif) ; 145-146 (受動相 II passif II) ; 292 (非実現性 irrealité) ; 293 (後悔 regret) ; 296 (格言の gnomique) ; 297 (すぐの反応 réaction immédiate) ; 305, 309 (点括的禁止 défense ponctuelle) ; 312 (不定法におかれた語幹の意味 valeur du thème au participe) ; 331 (分詞におかれた語幹の意味 valeur du thème au participe)
- アクセント Accent 6; 21 (重アクセント a. grave) ; 19-24 (アクセント法規則 règles d'accentuation) ; 42 (単音節第三曲用 monosyllabes troisième déclinaison) ; 105 (不定法 infinitif) ; 106 (分詞 participe) ; 136 (アオリスト II aoriste II : 命令法 impératif, 不定法 infinitif, 分詞 participe) ; 195 (複合語 mots composés) ; 270 (前置詞 prépositions) ; 前倚 Enclise, 後倚 Proclise もまた参照。
- 宛人 Destinataire 218 ; 260-261 (与格 datif) ; 269 (呼格 vocatif)
- アポストロフィ Apostrophe 11
- アルファベット Alphabet 1

い

- イオタ, 下書き・横書きの Iota souscrit, adscrit 5
- 意志 Volonté 199 (意志の表現 Expression de la) ; 279 (接続法 subjonctif) ; 284 (否定 négation)
- 一致 Accord 201; 206; 207; 210; 321
- 一般化 Généralisation 29 (冠詞 article) ; 75 (ὄστις) ; 199 (名詞文 phrase nominale) ; 279 (接続法 subjonctif) ; 281, 306 (ἄν を伴う接続法 subjonctif avec ἄν) ; 284 (négation 否定) ; 仮定 Hypothèse もまた参照
- 違反の属格 Délit, génitif de 245
- インドヨーロッパの Indo-européen 序論 introduction を見よ ; 4, 16 (半母音 semi-voyelles) ; 26 (喉頭音 laryngales) ; 212 (語順 ordre des mots)

え

- 鋭調語 Oxyton 19, 30 (-o に終る曲用 déclinaison en -o) ; 34 (-α に終る曲用 déclinaison en -α) ; 46 (σωτήρα の法則 loisωτήρα) ; 270 (前置詞 prépositions)

お

- 起りうること Eventualité 期待 Attente 参照
 恐れ, 恐れ of 動詞に依存する節 Crainte, propositions dépendant d'un verbe de 308 ; 350 ; 状況補
 語節 Propositions-compléments もまた参照
 音韻論的現象 Phonétiques, phénomènes 8-18

か

- 外延 Etendue 拡がり Extension 参照
 加音 Augment 90 ; 108
 価格の属格 Prix, génitif de 243
 格 Cas 27 ; 200, 218 (統辞的機能 fonctions syntaxique) ; 219 (用法表 table des usages) ; 220-269 (用法 usages)
 過去完了 Plus-que-parfait 90, 147 (一般論 généralités) ; 108 (加音 augment) ; 149-150 (能動相 I actif I) ;
 151 (能動相 II actif II) ; 155-161 (中・受動相 médio-passif)
 過去における反復 Répétition dans le passé 294 ; 302
 仮定 Hypothèse 281 (実現性の度合い degrés de réalité) ; 284 (否定 négation) ; 291 (実現性
 réalité) ; 292 (非実現性 irréalité) ; 300 (可能性 possibilité) ; 301 (斜希求法
 optatif oblique) ; 306 (期待 attent, ἄν を伴う接続法 subjonctif avec ἄν) ; 348
 (εἰ) ; 350 (状況補語節表 tableau propositions-compléments)
 可能性 Possibilité 281 (実現性の度合い degrés de réalité) ; 300 (希求法および ἄν optatif et ἄν) ;
 348 (εἰ) ; 349-350 ; 94 (-τός に終る動詞的形容詞 adjectif verbal en -τός) ; 仮定
 Hypothèse もまた参照
 可能法 Potentiel 可能性参照
 幹 Thème 25 ; 27, 42 (名詞幹 t. nominale) ; 88-89, 280 (動詞幹 t. verbaux) ; 164-170 (現
 在幹の形成 formations du thème du présent) ; 312 (不定法に置かれた幹の意
 味 valeurs des t. à l'infinitif) ; 331 (分詞に置かれた幹の意味 valeurs des t. au
 participe) ; 語基 Radical, 現在 Présent, 未来 Futur, アオリスト Aoriste, 完了
 Parfait, 幹性母音 Voyelle thématique もまた参照
 関係詞 Relatifs 73, 75, 76 (代名詞 pronoms) ; 77 (副詞 adverbess) ; 78 (関係代名詞の牽引
 attraction du pronom r.)
 関係節 Relatives, propositions 78-81, 203 ; 300, 302 (希求法におかれた à l'optatif) ; 306 (ἄν
 を伴う接続法に置かれた au subjonctif avec ἄν) ; 350 (状況補語節表 tableau
 propositions-compléments) ; 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照
 冠詞 Article 28 (曲用 déclinaison) ; 29 (用法 emploi) ; 205 (名詞化 nominalisation) ; 208 (冠
 詞を伴う, または伴わない属詞 attribut avec ou sans l' a.) ; 209 (冠詞および形
 容語の位置 a. et position d' épithète)
 勸奨 Exhortation 305
 感嘆 Exclamation 224 (主格 nominatif) ; 234 (対格 accusatif) ; 255 (属格 génitif) ; 328 (不定法
 infinitif)
 願望 Souhait 199 ; 279 ; 299 (希求法 optatif) ; 328 (不定法 infinitif)
 完了 Parfait 88-89 (幹 thème) ; 90, 280 (幹および時制 thème et temps) ; 147 (一般論
 généralités) ; 148 (疊音

redoublement) ; 149-150 (能動相 I actif I) ; 151-152 (能動相 II actif II) ; 153 (混合完了 parfaits mixtes) ; 155-161 (中・受動相 médio-passif) ; 130 (未来完了 futur parfait) ; 261 (受動相および与格におかれた行為者 passif et agent au datif) ; 94 (-τός に終る動詞的形容詞の意味 valeur de l'adjectif verbal -τός)

き

希求法 Optatif	91, 279, 289a (統辞一般論 généralités syntaxe) ; 104 (形態論一般論 généralités morphologie) ; 281 (実現性の度合い degrés de réalité) ; 284 (否定 négation) ; 289a, 299-303, 349, 350 (用法 usages) ; 301-302 (斜希求法 oblique)
起源 Origine	由来 Provenance 参照
偽切斷 Fausse coupe	188
氣息記号 Esprits	6
期待 Attente	199;279 (接続法 subjonctif) ; 281 (ǎv を伴う接続法 subjonctif avec ǎv) ; 284 (否定 négation) ; 仮定 Hypothèse もまた参照.
詰問 Interpellation	218, 269 (呼格 vocatif) ; 224 (主格 nominatif)
疑問 Interrogation	74-76 (疑問代名詞 pronoms interrogatifs) ; 77 (疑問副詞 adverbess interrogatifs) ; 82-83, 350, 301 (疑問節 propositions interrogatives) ; 198 (統辞一般論 généralités syntaxe)
逆接の接続詞 Adversatives, conjonctions	347-348
曲折 Flexion	25 ; 20 (アクセントの変化 variations de l'accent) ; 曲用 Déclinaison, 動詞活用 Conjugaison もまた参照
曲折語尾 Désinences	25, 27 (一般論 généralité) ; 42 (第三曲用 troisième déclinaison) ; 87, 96-97 (動詞曲折語尾 d. verbales, 一般論 généralités) ; 87, 90, 96 (一次時制 d. primaires, 二次時制 d. secondaires) ; 27, 97 (曲折語尾および語尾 d. et terminaison) ; 86, 162 (双数 duel) ; 曲用 Déclinaison, 動詞活用 Conjugaison もまた参照
曲折の類比 Analogie flexionnelle	9
曲用 Déclinaison	25, 27, 218 (一般論 généralités) ; 20 (アクセントの変動 variations de l'accent) ; 30-32 (-o に終る名詞 noms en -o) ; 33-36 (-α に終る名詞 noms en -α) ; 37-40 (-o/-α に終る形容詞 adjectifs en -o/-α) ; 32, 39 (アッティカ式曲用 déclinaison attique) ; 41-54a (第三曲用 troisième déclinaison : 曲折語尾 désinences (42), 喉音および唇音におわる語幹 thèmes en gutturale et labiale (43), 歯音に終る語幹 thèmes en dentale (44), -vτ に終る語幹 thèmes en -vτ (45), 流音に終る語幹 thèmes en liquide (47), πατήρ, など (47), 鼻音に終る語幹 thèmes en nasale (48), -σ に終る語幹 thèmes en -σ (49), -ι に終る語幹 thèmes en -ι (50), -ευ および -υ に終る語幹 thèmes en -ευ et -υ (51-53), -οι および -ω に終る語幹 thèmes en -οι et -ω (54), 形容詞の要約復習表 récapit. des adjectifs (54a)) ; 86 (双数 duel) ; 冠詞 Article · 代名詞 Pronom · 数詞 Numéraux · 分詞 Participe もまた参照
拒否 Rejet	213
ギリシア方言 Dialectes grecs	序論 Introduction を見よ
禁止 Défense	305 ; 309 ; 289

く

空間 Espace	218 ; 場所 Lieu もまた参照
具格・随伴格 Instrumental-comitativ, cas	218 ; 260, 263-264 (随伴の与格および関係の与格 datif d'accompagnement et d'association) および 266 (道具の与格 datif instrumental) もまた参照
句読法, 記号 Punctuation, signe de	7
グラースマン (の法則) Grassmann, loi de	18

け

繫辞 Copule	198, 199
形容語 (の位置) Epithète, position d'	201 ; 209 ; 332 (分詞 pariticipé)
形容詞 Adjectif	37-40 (-o/-α 曲用 déclinaison en -o/-α) ; 37 (複合形容詞 a. composés) ; 44, 45, 48, 49, 51 (第三曲用 troisième déclinaison) ; 54a (第三曲用要約復習表 récapitulation troisième déclinaison) ; 59-61 (比較級および最上級 comparatifs et superlatifs) ; 70 (所有 possessifs) ; 94, 261 (動詞的形容詞 adjectifs verbaux) ; 193 (語の形成 formation des mots) ; 207 (属詞 attribut) ; 209 (名詞の限定辞 déterminant du nom) ; 210 (一致 accord) ; 230 (対格を伴って avec un accusatif) ; 241-257 (属格を伴って avec un génitif) ; 264 (与格を伴って avec un datif) ; 324 (不定法を伴って avec un infinitif)
結果の, 節 Consécutives, propositions	325 ; 350 ; 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照
牽引 Attraction	78 (格の, 関係代名詞 du cas, pronom relatif) ; 206 (牽引による動詞の一致 accord du verbe par a.) ; 293, 303 (法の牽引 a. modale)
原因 Cause	244 (原因の属格 génitif de) ; 265, 266 (原因の与格 datif de) ; 274 (前置詞表 tableau prépositions)
原因的, 節 Causales, propositions	350 ; 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照
現在 Présent	88-89, 98 (thème 幹) ; 90, 280 (幹および時制 thème et temps) ; 99-100, 102-106 (-ω に終る現在 présent en -ω) ; 107-109 (未完了過去の活用 conjugaison de l'imparfait) ; 110-114 (約音動詞 verbes contractes) ; 99, 101-105, 115-122 (-μυ に終る現在 présent en -μυ) ; 129 (未来の意味に置かれた à valeur de futur) ; 163-178 (現在幹に従った動詞の分類 classement des verbes selon le thème du p.) ; 295 (歴史的現在 présent historique) ; 312 (不定法に置かれた幹の意味 valeur du thème à l'infinitif) ; 331 (分詞に置かれた幹の意味 valeur du thème au participe)
限定辞 Déterminant	201, 209-210, 238 (名詞の du nom) ; 並置された限定辞 déterminant Apposé もまた参照
限定辞, 併置された Apposém déterminant	202 ; 222 (主格におかれた au nominatif) ; 227 (対格におかれた à l'accusatif) ; 329, 334-341 (分詞 pariticipé) ; 314, 342-344 (並置された分詞から伴われた動詞 verbes accompagnés d'un participe a.) ; 345 (絶対属格 génitif absolu)
限定的 Déterminatif (αὐτός)	67 ; 208 ; 263
言表 Enoncé	198 ; 199

こ

後倚 Enclise	23
------------	----

行為者 Agent	95, 258 (行為者の補語 complément de); 261 (与格におかれた au datif); 189 (行為者の名詞 noms de); 274 (前置詞表 tableau prépositions)
喉音 Gutturales	3; 14-15
後悔の陳述 Regret, énonciation d'un	293
後退 Anaclyse (アクセントの)	20
後置 Postposition	209 (限定辞 déterminant); 270 (前置詞 préposition)
喉頭音 Layngales	26
呼格 Vocatif	218; 269
語基 Radical	25, 26; 25, 188, 194 (派生語基 r. dérivé); 88 (および動詞幹 et thèmes verbaux); 163-170 (および現在幹 et thème du présent)
語形成	Formation des mots 187-197
語源的姿 Figure étymologique	229
語根 Racine	25
語順 Ordre des mots	201; 211-215
語中音挿入 Epenthèse	47; 168
語頭反復 Anaphorique	81 (語頭反復的關係詞 relatif anaphorique)
語尾 Terminaison	25; 27, 30 (曲用 déclinaison); 57 (固定された格語尾 t. casuelle figée); 97, 279 (動詞活用 conjugaison)
語ファミリー Famille de mots	25; 187
コロニス Coronis	10

さ

再帰代名詞 Réfléchi, pronom	67, 69
最上級 Superlatif	59-61 (形容詞 adjectifs); 62 (副詞 adverbes)
材料 Matière	193 (形容詞 adjectifs de); 240 (属格 génitif de); 274 (前置詞表 tableau prépositions)

し

子音 Consonnes	3; 14-15; 17 (音韻的な phonétique)
歯音 Dentales	3; 14 (歯音の異化 dissimilation des); 15
子音の同化 Assimilation des consonnes	14; 18
仕方 Manière	56, 77 (副詞 adverbes); 265 (与格 datif); 274 (前置詞表 tableau prépositions)
時間節 Temporelles, propositions	350; 302 (斜希求法 optatif oblique); 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照
シグマ Sigma	1 (月形の lunaire); 17 (語頭の initial, 母音間の intervocalique); 摩擦音 Sifflante もまた参照
指示詞 Démonstratifs	64-66, 76 (代名詞 pronoms); 29 (冠詞の古い意味 ancienne valeur de l'article); 77 (副詞 adverbes); 207 (代名詞 pronoms, 一致 accord)

時制 Temps	90（動詞の一次時制および二次時制 temps primaires et secondaire du verbe）； 280（法、幹および時制 modes, thèmes et t.）；77（副詞 adverbés）；218（格お よび時制の表現 cas et expression du temps）；253（時制の属格 génitif de）；268（与 格 datif）；275-278（時制の表現、要約復習表 expression du t., récapitulation）、 持続 Durée もまた参照
事実の確認 Constatation	199；279；290-297（直説法 indicatif）；283（否定 négation）
持続 Durée	218；236；275
質 Qualité	76（質の代名詞 pronoms de）
実現性、度合い Réalité, degré de	281；290-291；348（ei）；349-350；事実の確認 Constatation, 仮 定 Hypothèse もまた参照
実現性の度合い Degrés de réalité	281
自動詞 Intransitifs, verbes	87, 138（語基アオリスト aoristes radicaux）；226（動詞接頭辞を伴う avec préverbes）
主格 Nominatif	218；219-224（用法 usages）；232, 319（不定法と伴う属詞 attribut avec un infinitif）
縮音 Crase	10
縮小辞 Diminutifs	192
熟慮の、接続法 Délibération, subjonctif de	304
主語 Sujet	198, 200, 206（主語と動詞の一致 Accord du verbe avec le s.）；218-219（主格 nominatif）；232（対格におかれた à l'accusatif）
手段（道具）Moyen (instrument)	260, 266（与格 datif）；274（前置詞表 tableau prépositions）
述語 Prédicat	198-199
受動相 Passif (voix du verbe)	87；94（動詞的形容詞の意味 valeur des adjectifs verbaux）；受動 相未来およびアオリスト Futur et Aoriste passifs 参照
純粹なまたは保護された α Alpha pur ou protégé	8；33
畳音 Redoublement	147-148（完了の du parfait）；170, 177（現在幹の du thème du présent）
状況補語節 Propositions-compléments	200, 203（一般論 généralités）；281, 306（ αv を伴う接続法に置か れた au subjonctif avec αv ）；292（非実現性 irréalité）；300（可能性 possibilité）； 301-302（斜希求法に置かれた à l'optatif oblique）；303（希求法の牽引 attraction de l'optatif）；307（目的節 propositions finales）；308（恐れ動詞に依存した en dépendance d'un verbe de crainte）；319（肯定的な déclaratives）；347（接 続詞 conjonctions）；348（アルファベット順接続詞リスト liste alphabétique des conjonctions）；350（要約復習表 tableau récapitulatif）；状況補語の名詞下 sous le nom de la proposition-complément もまた参照
小辞 Particules	213（語順 ordre des mots）；216（並置法の de coordination）；281, 292, 294, 300, 306（ αv ）；347（一般論 généralités）；348（アルファベット順リスト liste alphabétique）
譲歩節 Concessives, propositions	350；状況補語節 Propositions-compléments もまた参照
省略 Ellipse	199；217
処格 Locatif	218（格 cas）；260, 267（与格 datif）；57（副詞 adverbés）

所有 Possession	70-71 (所有の表現 <i>expression de la</i>) ; 239 (所有の属格 <i>génitif de</i>) ; 262 (所有の与格 <i>datif de</i>)
唇音 Labiales	3 ; 14-15
人種 (語の形成) Ethniques (<i>formation des mots</i>)	189

す

随伴の Comitatif	218
数詞 Numéraux	84-85 ; 57 (副詞 <i>adverbes</i>)

せ

性 Genres	27
接続詞 Conjonctions	203 ; 204, 216 (並置の接続詞 <i>c. de coordination</i>) ; 334 (分詞を伴う <i>avec un participe</i>) ; 347 (小辞および接続詞 <i>particules et c.</i>) ; 348 (アルファベット順リスト <i>liste alphabétique</i>) ; 350 (状況補語節表 <i>tableau des propositions-compléments</i>)
接続法 Subjonctif	91, 279, 289a (統辞一般論 <i>généralités syntaxe</i>) ; 103 (形態一般論 <i>généralités morphologie</i>) ; 281 (実現性の度合い <i>degrés de réalité</i>) ; 281, 306 ($\acute{\alpha}\nu$ を伴う <i>avec $\acute{\alpha}\nu$</i>) ; 284 (否定 <i>négation</i>) ; 289 ($\omicron\upsilon$ $\mu\eta$ の後 <i>après $\omicron\upsilon$ $\mu\eta$</i>) ; 289a, 304-308, 349, 350 (用法 <i>usages</i>)
接頭語 Préfixes	187 ; 196
接尾辞 Suffixe	25 ; 104 (法接尾辞 <i>s. modal</i> , 希求法 <i>optatif</i>) ; 164-169, 173-176 (現在幹の接尾辞 <i>s. du thème du présent</i>) ; 187-188, 194 (派生語の接尾辞 <i>s. dérivationnels</i>) ; 218 (方向の接尾辞 <i>s. directionnels</i>)
説明的, 節 Déclaratives, propositions	348 ($\acute{\omicron}\tau\iota$, $\acute{\omega}\varsigma$) ; 350 ; 不定法構文 <i>Construction infinitive</i> , 状況補語節 <i>Propositions-compléments</i> もまた参照
前倚 Proclise	22 ; 270 (前置詞 <i>prépositions</i>)
前時性 Antériorité	312 ; 331
前置詞 Prépositions	200, 218, 270 (一般論 <i>généralités</i>) ; 272-273 (アルファベット順リスト <i>listes alphabétiques</i>) ; 274 (要約復習表 <i>tableau récapitulatif</i>) ; 247, 256 (属格を伴う <i>avec génitif</i>)
線文字 B Linéaire B	序論 <i>Introduction</i> を見よ

そ

相関詞 Corrélatifs (代名詞 <i>pronoms</i> , 副詞 <i>adverbes</i>)	76-77
相互代名詞 Réciproque, pronom	72
双数 Duel	27, 86 (曲用 <i>déclinaison</i>) ; 87, 162 (動詞活用 <i>conjugaison</i>) ; 206, 210 (一致 <i>accord</i>)
挿入辞 Infixe	168
属格 Génitif	35 (ドーリス属格 <i>g. dorien</i>) ; 71 (所有の属格 <i>g. de possession</i> , 人称代名詞 <i>pronoms personnels</i>) ; 209, 238-239 (連体詞的 <i>adnominal</i>) ; 218 (統辞 <i>syntaxe</i> , 一般論 <i>généralités</i>) ; 219, 238-259 (用法 <i>usages</i>) ; 272-274 (前置詞リストおよび表 <i>liste et tableau prépositions</i>) ; 239 (主語 <i>subjectif</i> , 目的語 <i>objectif</i>) ; 238, 246 (部分の <i>parititif</i>) ;

	238, 256 (奪格的 ablatif) ; 275-277 (時間の表現 expression du temps) ; 345 (絶対 absolu)
属詞 Attribut	198 ; 207 (一致 accord) ; 208 (属詞の機能にある名詞 nom en fonction d' a.) ; 221, 232, 319 (主格におかれた au nominatif) ; 228, 232, 310 (対格におかれた à l'accusatif) ; 239 (属格におかれた au génitif) ; 207, 333 (属詞機能にある分詞 participe en fonction d' a.)
σωτήρα の法則 σωτήρα, loi	20

た

対格 Accusatif	218; 219; 225-237 (用法 usages) ; 272, 274 (前置詞リスト・表 liste et tableau prépositions) ; 225, 230, 231 (ギリシア対格 «accusatif grec») ; 232, 310 (対格にある主語 sujet à l' a.) ; 275-278 (時間の表現 expression du temps) ; 341 (ὤς, ὄσπερ の先行する分詞 participe précédé de ὤς, ὄσπερ) ; 不定法構文 Construction infinitive もまた参照.
帯気および帯気子音 Aspiration et consonnes aspirées	3 ; 6 ; 14-15 ; 18
代償的延長 Allongement compensatoire	14
代名詞 Pronom	64-66, 76 (指示代名詞 démonstratifs) ; 67 (αὐτός) ; 67-69, 71, 86, 262 (人称代名詞 personnels) ; 67, 69 (再帰代名詞 réfléchi) ; 72 (相互代名詞 réciproque) ; 73, 75, 76 (関係代名詞 relatifs) ; 74-76 (疑問代名詞 interrogatifs) ; 74-76, 81 (不定代名詞 indéfinis) ; 76 (量・質・択一の代名詞の表 tableau des p. de quantité, qualité, alternative) ; 207 (指示代名詞 démonstratif, 一致 accord)
択一の Alternative	76 (代名詞 pronoms) ; 82-83 (疑問 interrogation)
奪格的属格 Ablatifs, génitif	218; 256.
他動詞 Transitifs, verbes	87 ; 226 (動詞接頭辞を伴う avec préverbes)
単位 Mesure	242 (属格 génitif de)

ち

中動相 Moyen (動詞の相 voix de verbe)	87
中・受動相 Médio-passif	87
中性 Neutre	27 ; 44, 190 (-μα に終る名詞 noms en -μα) ; 49, 190 (-ος に終る名詞 noms en -ος) ; 57, 62, 237 (副詞 adverbess) ; 64 (代名詞 pronom, 曲用 déclinaison) ; 189 (-τήριον, -τρον に終る名詞 nom en -τήριον, -τρον) ; 192 (縮小辞 diminutifs) ; 206 (動詞の一致 accord du verbe) ; 207 (属詞の一致 accord de l' attribut) ; 252 (動詞の補語として comme complément de verbe) ; 346 (中性に置かれた固定的分詞 participes figés au n.)
抽象名詞 Abstraites, noms	190
調音の v Euphonique, -v	42 ; 102
超時制的, 言表 Atemporel, énoncé	199
直説法 Indicatif	91, 279, 289a (一般論 généralités) ; 90, 280 (時間的意味 valeur temporelle) ; 108 (加音 augment) ; 281 (実現性の度合い degrés de réalité) ; 283 (否定 négation) ; 289 (οὐ μή を伴う未来 futur avec οὐ μή) ; 289a, 290-298,

349, 350 (用法 usages)

陳述 (法) Enonciation (modes) 279 ; 280

て

ディガンマ Digamma 4 ; 16 (ディガンマの消失 disparition du d.)

定量的音位転換 Métathèse quantitative 13

デポーネント動詞 Déponents, verbes 87

転置 Hyperbaton 215

と

頭音節省略 Aphérèse 12

同格 Apposition 202 ; 222 (主格におかれた au nominatif) ; 227 (対格におかれた à l'accusatif)

道具 Instrument 手段 Moyen, 具格・随伴格 Instrumental-comitativ 参照

動詞 Verbe 20 (アクセント accent) ; 87-97 (一般論 généralités) ; 93-94, 261 (形容詞形 formes adjectives) ; 110-114 (約音動詞 verbes contractes, 動詞活用 conjugaison) ; 163-178 (動詞の分類 classes de verbes) ; 171-178 (現在幹による分類リスト liste classées selon le thème du présent) ; 179-181 (παιδεύω の動詞活用表 tableau de conjugaison de παιδεύω) ; 194 (語形成 formation des mots) ; 198-199 (統辞一般論 généralités syntaxiques) ; 206 (主語との動詞の一致 accord du v. avec le sujet) ; 231 (二つの対格を伴う avec deux accusatifs) ; 244, 246, 248-252, 257 (属格を伴う avec le génitif) ; 263, 264 (与格を伴う avec le datif) ; 271 (動詞接頭辞と複合された composés avec des préverbes) ; 272 (動詞接頭辞のアルファベット順リスト liste alphabétique des préverbes) ; 308 (恐れ動詞 verbes de crainte) ; 315-321 (不定法または不定法構文が続く動詞 verbes suivi d'un infinitif ou d'une construction infinitive) ; 314, 342-344 (並置された分詞を伴う avec un participe apposé) ; 316, 320 (否定的意味の de sens négatif) ; 323 (目的の意味の不定法を伴う avec infinitif à valeur finale) ; 351 (動詞のアルファベット順リスト liste alphabétique des verbes) ; 法 Modes, 幹 Thèmes, 時制 Temps などとも参照

動詞活用 Conjugaison 25 ; 87-91, 96-97 (一般論 généralités) ; 20 (アクセントの変動 variations de l'accent) ; 179-181 (παιδεύω の動詞活用表 tableau de c. de παιδεύω) ; 現在・未来・アオリスト・完了・双数 Présent, Futur, Aoriste, Parfait, Duel も参照

同時性 Simultanéité 312 ; 331

動詞接頭辞 Préverbe 25, 270-271 (一般論 généralités) ; 108 (および加音 et augment) ; 187, 197 (語の形成 formation des mots) ; 272 (アルファベット順リスト liste alphabétique)

動詞的観点 Aspect verbal 89 ; 280

統辞的単位 Unité syntaxique 198

動詞の相 Voix du verbe 87

動詞付加辞 Adverbiaux 58 ; 270-272

同伴 Accompagnement 263 (与格 datif) ; 274 (前置詞表 tableau prépositons)

特別化の対格 Spécification, accusatif de	230, 231
独立節 Propositions indépendantes	349 (法の表および用いられる否定 tableau des modes et négations utilisés)

な

中身の, 属格 Contenu, génitif de	241
-----------------------------	-----

に

二重母音 Diphtongues	5 ; 2 (偽二重母音 fausse d.)
人称 (動詞の) Personnes du verbe	87
人称代名詞 Personnels, pronoms	67-69 ; 71 ; 86 (双数 duel) ; 262 (与格における用法 usage au datif)

の

能動相 (動詞の相) Actif (voix du verbe)	87
----------------------------------	----

は

場所 Lieu	57, 77, 247 (副詞 adverbess) ; 274 (前置詞表 tableau prépositions) ; 処格 Locatif, 位置 Localisation, 空間 Espace もまた参照
派生 (語の形成) Dérivation (formation des mots)	187-194
罰の属格 Puniton, génitif de	245
発音 Prononciation	1-6
パロクシュトノン Paroxyton	19
半母音 Semi-voyelles	4

ひ

鼻音 Nasales	3 ; 14-15 ; 26 (母音化 vocalisation)
比較 Comparaison	59-62 (比較の度合い degrés de) ; 63, 348 (καί, 3) (比較の二番目の語 deuxième terme de) ; 259 (比較の属格 génitif de) ; 264 (与格におかれた au datif)
比較, 節 Comparatives, propositions	350 ; 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照
比較級 Comparatifs	48 (-ίων に終る比較級の曲用 déclinaison des c. en -ίων) ; 59-61 (形容詞 adjectifs) ; 62 (副詞 adverbess) ; 63a (特有の用法 usage idiomatique)
非実現性 Irréalité	281 (実現性の度合い degrés de réalité) ; 292 ; 348 (ει) ; 349-350 ; 仮定 Hypothèse もまた参照
否定 Négation	282-289 ; 80 (関係詞において dans les relatives) ; 307 (μή によって導かれる目的の finale introduite par μή) ; 308 (恐れ of 動詞を伴う avec les verbes de crainte ; οὐ μή) ; 309 (否定命令 ordre négatif) ; 311 (不定法を伴う avec l'infinitif) ; 316, 320 (虚辞の否定 négations explétives) ; 318, 320, 322 (μή οὐ) ; 330 (分詞を伴う avec le

- participe) : 349-350 (復習要約表 récapitulation)
 非人称表現 Impersonnelles, tournures 94 (義務の動詞的形容詞 adjectif verbal d' obligation) : 120 (crhv) ;
 292 ; 321 ; 346
 評価 (の属格) Evaluation, génitif de 242-243
 拡がり Extension 218 ; 236 ; 274 (前置詞表 tableau prépositions)

ふ

- 複合 (語形成) Composition (formation des mots) 187 ; 195-197
 副詞 Adverbe 55-58 (形態論 morphologie) ; 57, 84-85 (数詞 numéraux) ; 62 (比較級および最上級 comparatifs et superlatifs) ; 77 (疑問・不定・関係・指示副詞の表 tableau des a. interrogatifs, indéfinis, relatifs, démonstratifs) ; 200, 270-271 (統辞的意味 valeur syntaxique) ; 237 (副詞的対格 accusatif adverbial) ; 247 (属格を伴う場所の副詞 a. de lieu avec le génitif)
 不定 Indéfinis 74-76, 81 (代名詞 pronoms) ; 77 (副詞 adverbies)
 不定法 Infinitif 92, 105, 310 (一般論 généralités) ; 105, 136 (アクセント accent) ; 281 (ǎv を伴う avec ǎv) ; 285, 311 (否定 négation) ; 318 (μη; οὐ によって否定された nié par μη; οὐ) ; 312 (幹の意味 valeur des thèmes) ; 313-328, 350 (用法 usages) ; 205, 313 (名詞化された nominalisé) ; 314, 323 (目的結果の意味におかれた à valeur finale-consécutive) ; 324 (形容詞を伴う avec adjectif) ; 不定法構文 Construction infinitive もまた参照
 不定法構文 Construction infinitive 310 ; 232 (不定法構文の主語 sujet de la c. i.) ; 205, 313 (名詞化された不定法構文 c. i. nominalisé) ; 314-320 (動詞に依存する en dépendance d' un verbe) ; 319, 232 (主格に置かれた属詞を伴う avec attribut au nominatif) ; 321 (非人称表現を伴う avec des tournures impersonnelles) ; 325 (結果の意味におかれた à valeur consécutive) ; 326 (πρίν の後の après πρίν)
 プロパロクシュトノン Proparoxyton 19
 プロベリスポメノン Propérispomène 19
 部分 (の属格) Partitif, génitif 246-247
 分詞 Participe 45, 182-186 (曲用 déclinaison) ; 93, 106 (形態一般論 généralités morphologie) ; 106, 136 (アクセント accent) ; 207, 210 (分詞の一致 accord du) ; 281 (ǎv を伴う avec ǎv) ; 285, 330 (否定 négation) ; 329 (統辞一般論 généralités syntaxe) ; 331 (幹の意味 valeur des thèmes) ; 314, 332-346, 350 (用法 usages) ; 334-341 (並置および状況的意味 apposé et valeurs circonstancielles) ; 345 (絶対属格 génitif absolu)
 分配 Distribution 274 (前置詞表 tableau prépositions) ; 278 (時間 temps)
 分離 Disjonction 215 (転置 hyperbaton) ; 347-348 (接続詞 conjunctions)
 分離の属格 Séparation, génitif de 256-257

へ

- 閉鎖音 Oclusives 3 ; 14-15 ; 18 (同化 assimilation)
 並置 Coordination 204 ; 216 ; 347-348

並列 Parataxe	216
ペリスポメノン Périspomène	19

ほ

法 Modes	80（関係詞における dans les relatives）；82-83（疑問文における dans les interrogatives）；91, 279-280, 289a（一般論 généralités）；281（実現性の度合い degrés de réalité）；282-289（否定 négation）；289a, 290-309, 349-350（用法 usages）；直説法 Indicatif, 接続法 Subjonctif, 希求法 Optatif, 命令法 Impératif もまた参照
法則 Loi de...	法則の名を参照
傍置 Juxtaposition	209
母音 Voyelles	2；26, 47（支援母音 voyelle d'appui）；99, 135（幹母音 voyelle thématique）
母音階梯（盈, ゼロ）Degré vocalique (plein, zéro)	26
母音交替 Alternance vocalique	26
母音字省略 Elision	11；24（およびアクセント法 et accentuation）
母音的量 Quantité vocalique	2；5（二重母音 diphtongues）；13（音位転換 métathèse）；26（母音交替 alternance）
方向（の対格）Direction, accusatif de	218；235；274（前置詞表 tableau prépositions）
補語 Compléments	200；補語（たとえば原因, 対象など）の名詞および状況補語節 le nom du complément (par ex. cause, objet, etc.) et Propositions-compléments また参照

ま

摩擦音 Sifflante	3；14-15；シグマ Sigma もまた参照
---------------	-------------------------

み

未完了過去 Imparfait	90, 98（一般論 généralités）；107-109（形態論 morphologie）；111-114（約音動詞の i. des verbes contractes）；116-118（δίδωμι などの i. de δίδωμι, etc.）；120-122（特別の動詞 verbes particuliers）；292（非実現性 irréalité）；293（後悔 regret）；294（過去における反復 répétition dans le passé）
ミュケーナイの Mycénien	序論 Introduction を見よ
未来 Futur	88-89；123, 280（幹 thème）；119（εἰμί の de εἰμί）；121（εἶμι の意味 valeur de εἶμι）；124-126（シグマを介在させた未来 f. sigmatique）；127-128（約音 contracte）；129（未来の意味におかれた現在 présents à valeur de）；130（未来完了 futur parfait）；142-146（受動相 passif）；145-146（受動相 II passif II）；298（目的・結果の意味 valeur finale-consécutive）；312（不定法におかれた幹の意味 valeur du thème à l'infinitive）；331, 337（分詞に置かれた幹の意味 valeur du thème au participe）

む

無声閉鎖子音 Sourdes, occlusives	3；14-15；18
----------------------------	------------

め

- 名詞 Nom 29 (固有名詞および冠詞 n. propre et article) ; 49 (-ης に終る固有名詞 nom propre en -ης) ; 189-192 (語形成 formation des mots : 行為者の名詞 noms d'agent (189), 抽象名詞 noms abstraits (190), 月の名 noms de mois (191), 縮小辞 diminutifs (192)) ; 201, 209-210 (名詞限定辞 déterminant du n.) ; 208 (属詞機能の en fonction d'attribut) ; 曲用 Déclinaison もまた参照
- 名詞化 Nominalisation 205 ; 313 (不定法および不定法構文 infinitif et constr. infin.) ; 332 (分詞 participe)
- 名詞派生, 動詞 Dénommatifs, verbes 194
- 名詞文 Phrase nominale 199 ; 217
- 命令 Injonction 命令 Ordre 参照
- 命令 Ordre 198-199 ; 328 (不定法 infinitif) ; 命令法 Impératif, 禁止 Défense もまた参照
- 命令法 Impératif 91, 279, 289a (一般論 généralités) ; 136 (アオリスト II アクセント accent aoriste II) ; 284 (否定 négation) ; 289a, 309, 349 (用法 usages) ; 命令 Ordre, 禁止 Défense もまた参照

も

- 目的 Finalité 280 ; 298 ; 337 (未来 futur) ; 307, 350 (目的節 propositions finales) ; 323 (不定法 Infinitif) ; 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照
- 目的 But 274 (前置詞表 tableau prépositions) ; 目的 Finalité もまた参照
- 目的語 (の補語) Objet, complément de 200 ; 225-226 (対格 accusatif) ; 229 (内的目的語 objet interne)

や

- 約音 Contraction 9 (母音の voyelles) ; 31 (-o に終る約音名詞 noms contractes en -o) ; 36 (-α に終る約音名詞 noms contractes en -α) ; 38 (約音形容詞 adjectifs contractes) ; 110-114 (約音動詞 verbes contractes) ; 128 (約音未来 futur contracte)

ゆ

- 有声閉鎖子音 Sonores, occlusives 3 ; 14-15
- 由来 Provenance 218 ; 256 (属格 génitif) ; 274 (前置詞表 tableau préposition)

よ

- 与格 Datif 71 (所有の与格 d. de possession) ; 218 ; 219, 260-268 (用法 usages) ; 272-274 (リストおよび前置詞表 liste et tableau préposition) ; 276-277 (時間の表現 expression du temps)
- 与格に置かれた位置 Localisation au datif 218, 267 ; 274 (前置詞表 tableau prépositions) ; 277 (時間における dans le temps)
- 予期 Anticipation (prolepse) 213 ; 214

予期 Prolepse (anticipation) 213 ; 214
yod (*y) 4 ; 16

り

流音 Liquides 3 ; 14 ; 26 (母音化 vocalisation)
量 Quantité 76 (量の代名詞 pronoms de)

れ

連辞省略 Asyndète 216

わ

Wackernagel の法則 loi de 213
Wau (*w) 4 ; デイガンマ Digamma も参照

仏用語索引

A

- Ablatifs, génitif 奪格的属格 218; 256.
Abstrait, noms 抽象名詞 190
Accent アクセント 6; 21 (重アクセント a. grave); 19-24 (アクセント法規則 règles d'accentuation); 42 (単音節第三曲用 monosyllabes troisième déclinaison); 105 (不定法 infinitif); 106 (分詞 participe); 136 (アオリスト II aoriste II: 命令法 impératif, 不定法 infinitif, 分詞 participe); 195 (複合語 mots composés); 270 (前置詞 prépositions); 前倚 Enclise, 後倚 Proclise もまた参照.
Accompagnement 同伴 263 (与格 datif); 274 (前置詞表 tableau prépositions)
Accord 一致 201; 206; 207; 210; 321
Accusatif 対格 218; 219; 225-237 (用法 usages); 272, 274 (前置詞リスト・表 liste et tableau prépositions); 225, 230, 231 (ギリシア対格 «accusatif grec»); 232, 310 (対格にある主語 sujet à l'a.); 275-278 (時間の表現 expression du temps); 341 (ὤς, ὄσπερ の先行する分詞 participe précédé de ὤς, ὄσπερ); 不定法構文 Construction infinitive もまた参照.
Actif (voix du verbe) 能動相 (動詞の相) 87
Adjectif 形容詞 37-40 (-o/-α 曲用 déclinaison en -o/-α); 37 (複合形容詞 a. composés); 44, 45, 48, 49, 51 (第三曲用 troisième déclinaison); 54a (第三曲用要約復習表 récapitulation troisième déclinaison); 59-61 (比較級および最上級 comparatifs et superlatifs); 70 (所有 possessifs); 94, 261 (動詞的形容詞 adjectifs verbaux); 193 (語の形成 formation des mots); 207 (属詞 attribut); 209 (名詞の限定辞 déterminant du nom); 210 (一致 accord); 230 (対格を伴って avec un accusatif); 241-257 (属格を伴って avec un génitif); 264 (与格を伴って avec un datif); 324 (不定法を伴って avec un infinitif)
Adverbe 副詞 55-58 (形態論 morphologie); 57, 84-85 (数詞 numéraux); 62 (比較級および最上級 comparatifs et superlatifs); 77 (疑問・不定・関係・指示副詞の表 tableau des a. interrogatifs, indéfinis, relatifs, démonstratifs); 200, 270-271 (統辞的意味 valeur syntaxique); 237 (副詞的対格 accusatif adverbial); 247 (属格を伴う場所の副詞 a. de lieu avec le génitif)
Adverbiaux 動詞付加辞 58; 270-272
Adversatives, conjonctions 逆接の接続詞 347-348
Agent 行為者 95, 258 (行為者の補語 complément de); 261 (与格におかれた au datif); 189 (行為者の名詞 noms de); 274 (前置詞表 tableau prépositions)
Allongement compensatoire 代償的延長 14
Alpha pur ou protégé 純粋なまたは保護された α 8; 33
Alphabet アルファベット 1
Alternance vocalique 母音交替 26
Alternative 択一の 76 (代名詞 pronoms); 82-83 (疑問 interrogation)

Anaclise 後退（アクセントの）	20
Analogie flexionnelle 曲折の類比	9
Anaphorique 語頭反復	81（語頭反復的關係詞 relatif anaphorique）
Antériorité 前時性	312；331
Anticipation (prolepse) 予期	213；214
Aoriste アオリスト	88-89, 131（語幹 thème）；90, 280（語根及び時制 thème et temps）；108（加音 augment）；132, 134（アオリスト I またはシグマアオリスト aoriste I ou sigmatique）；133（シグマなしの asigmatique）；135-137（アオリスト II または語幹性 aoriste II ou thématique）；138-140（語基性アオリスト a. radical）；142-146（受動相 passif）；145-146（受動相 II passif II）；292（非実現性 irréalité）；293（後悔 regret）；296（格言の gnomique）；297（すぐの反応 réaction immédiate）；305, 309（点括的禁止 défense ponctuelle）；312（不定法におかれた語幹の意味 valeur du thème au participe）；331（分詞におかれた語幹の意味 valeur du thème au participe）
Aphérèse 頭音節省略	12
Apostrophe アポストロフィ	11
Apposé, déterminant 限定辞, 併置された	202；222（主格におかれた au nominatif）；227（対格におかれた à l' accusatif）；329, 334-341（分詞 participe）；314, 342-344（並置された分詞から伴われた動詞 verbes accompagnés d' un participe a.）；345（絶対属格 génitif absolu）
Apposition 同格	202；222（主格におかれた au nominatif）；227（対格におかれた à l' accusatif）
Article 冠詞	28（曲用 déclinaison）；29（用法 emploi）；205（名詞化 nominalisation）；208（冠詞を伴う, または伴わない属詞 attribut avec ou sans l' a.）；209（冠詞および形容語の位置 a. et position d' épithète）
Aspect verbal 動詞的観点	89；280
Aspiration et consonnes aspirées 帯気および帯気子音	3；6；14-15；18
Assimilation des consonnes 子音の同化	14；18
Asyndète 連辞省略	216
Atemporel, énoncé 超時制的, 言表	199
Attente 期待	199;279（接続法 subjunctif）；281（ǎv を伴う接続法 subjunctif avec ǎv）；284（否定 négation）；仮定 Hypothèse もまた参照.
Attraction 牽引	78（格の, 関係代名詞 du cas, pronom relatif）；206（牽引による動詞の一致 accord du verbe par a.）；293, 303（法の牽引 a. modale）
Attribut 属詞	198；207（一致 accord）；208（属詞の機能にある名詞 nom en fonction d' a.）；221, 232, 319（主格におかれた au nominatif）；228, 232, 310（対格におかれた à l' accusatif）；239（属格におかれた au génitif）；207, 333（属詞機能にある分詞 participe en fonction d' a.）
Augment 加音	90；108

B

But 目的 274 (前置詞表 tableau prépositions) ; 目的 Finalité もまた参照

C

Cas 格 27 ; 200, 218 (統辞的機能 fonctions syntaxique) ; 219 (用法表 table des usages) ; 220-269 (用法 usages)

Causales, propositions 原因的, 節 350 ; 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照

Cause 原因 244 (原因の属格 génitif de) ; 265, 266 (原因の与格 datif de) ; 274 (前置詞表 tableau prépositions)

Comitatif 随伴の 218

Comparaison 比較 59-62 (比較の度合い degrés de) ; 63, 348 (καί, 3) (比較の二番目の語 deuxième terme de) ; 259 (比較の属格 génitif de) ; 264 (与格におかれた au datif)

Comparatifs 比較級 48 (-ίων に終る比較級の曲用 déclinaison des c. en -ίων) ; 59-61 (形容詞 adjectifs) ; 62 (副詞 adverbess) ; 63a (特有の用法 usage idiomatique)

Comparatives, propositions 比較, 節 350 ; 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照

Compléments 補語 200 ; 補語 (たとえば原因, 対象など) の名詞および状況補語節 le nom du complément (par ex. cause, objet, etc.) et Propositions-compléments また参照

Composition (formation des mots) 複合 (語形成) 187 ; 195-197

Concessives, propositions 譲歩節 350 ; 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照

Conjonctions 接続詞 203 ; 204, 216 (並置の接続詞 c. de coordination) ; 334 (分詞を伴う avec un participe) ; 347 (小辞および接続詞 particules et c.) ; 348 (アルファベット順リスト liste alphabétique) ; 350 (状況補語節表 tableau des propositions-compléments)

Conjugaison 動詞活用 25 ; 87-91, 96-97 (一般論 généralités) ; 20 (アクセントの変動 variations de l'accent) ; 179-181 (παίδεύω の動詞活用表 tableau de c. de παίδεύω) ; 現在・未来・アオリスト・完了・双数 Présent, Futur, Aoriste, Parfait, Duel もまた参照

Consécutives, propositions 結果の, 節 325 ; 350 ; 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照

Consonnes 子音 3 ; 14-15 ; 17 (音韻的な phonétique)

Constatation 事実の確認 199 ; 279 ; 290-297 (直説法 indicatif) ; 283 (否定 négation)

Construction infinitive 不定法構文 310 ; 232 (不定法構文の主語 sujet de la c. i.) ; 205, 313 (名詞化された不定法構文 c. i. nominalisé) ; 314-320 (動詞に依存する en dépendance d'un verbe) ; 319, 232 (主格に置かれた属詞を伴う avec attribut au nominatif) ; 321 (非人称表現を伴う avec des tournures impersonnelles) ; 325 (結果の意味におかれた à valeur consécutive) ; 326 (πρίν の後の après πρίν)

Contenu, génitif de 中身の, 属格 241

Contraction 約音 9 (母音の voyelles) ; 31 (-o に終る約音名詞 noms contractes en -o) ; 36 (-α に終る約音名詞 noms contractes en -α) ; 38 (約音形容詞 adjectifs contractes) ; 110-114 (約音動詞 verbes contractes) ; 128 (約音未来 futur contracte)

Coordination 並置 204 ; 216 ; 347-348

Copule 繫辞 198, 199

Coronis コロニス	10
Corrélatifs 相関詞 (pronoms 代名詞, adverbres 副詞)	76-77
Crainte, propositions dépendant d'un verbe de 恐れ, 恐れ of 動詞に依存する節	308 ; 350 ; 状況補語節
	Propositons-compléments もまた参照
Crases 縮音	10

D

Datif 与格	71 (所有の与格 d. de possession) ; 218 ; 219, 260-268 (用法 usages) ; 272-274 (リストおよび前置詞表 liste et tableau préposition) ; 276-277 (時間の表現 expression du temps)
Déclaratives, propositions 説明的, 節	348 (ὅτι, ὡς) ; 350 ; 不定法構文 Construction infinitive, 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照
Déclinaison 曲用	25, 27, 218 (一般論 généralités) ; 20 (アクセントの変動 variations de l'accent) ; 30-32 (-o に終る名詞 noms en -o) ; 33-36 (-α に終る名詞 noms en -α) ; 37-40 (-o/-α に終る形容詞 adjectifs en -o/-α) ; 32, 39 (アッティカ式曲用 déclinaison attique) ; 41-54a (第三曲用 troisième déclinaison : 曲折語尾 désinences (42), 喉音および唇音におわる語幹 thèmes en gutturale et labiale (43), 歯音に終る語幹 thèmes en dentale (44), -ντ に終る語幹 thèmes en -ντ (45), 流音に終る語幹 thèmes en liquide (47), πατήρ, など (47), 鼻音に終る語幹 thèmes en nasale (48), -σ に終る語幹 thèmes en -s (49), -ι に終る語幹 thèmes en -ι (50), -εϋ および -υ に終る語幹 thèmes en -εϋ et -υ (51-53), -οι および -ω に終る語幹 thèmes en -οι et -ω (54), 形容詞の要約復習表 récapit. des adjectifs (54a)) ; 86 (双数 duel) ; 冠詞 Article · 代名詞 Pronom · 数詞 Numéraux · 分詞 Participe もまた参照
Défense 禁止	305 ; 309 ; 289
Degrés de réalité 実現性の度合い	281
Degré vocalique (plein, zéro) 母音階梯 (盈, ゼロ)	26
Délibération, subjonctif de 熟慮の, 接続法	304
Délit, génitif de 違反の属格	245
Démonstratifs 指示詞	64-66, 76 (代名詞 pronoms) ; 29 (冠詞の古い意味 ancienne valeur de l'article) ; 77 (副詞 adverbres) ; 207 (代名詞 pronoms, 一致 accord)
Dénommatifs, verbes 名詞派生, 動詞	194
Dentales 歯音	3 ; 14 (歯音の異化 dissimilation des) ; 15
Déponents, verbes デポネント動詞	87
Dérivation (formation des mots) 派生 (語の形成)	187-194
Désinences 曲折語尾	25, 27 (一般論 généralité) ; 42 (第三曲用 troisième déclinaison) ; 87, 96-97 (動詞曲折語尾 d. verbales, 一般論 généralités) ; 87, 90, 96 (一次時制 d. primaires, 二次時制 d. secondaires) ; 27, 97 (曲折語尾および語尾 d. et terminaison) ; 86, 162 (双数 duel) ; 曲用 Déclinaison, 動詞活用 Conjugaison もまた参照
Destinataire 宛人	218 ; 260-261 (与格 datif) ; 269 (呼格 vocatif)

Déterminant 限定辞	201, 209-210, 238 (名詞の du nom) ; 並置された限定辞 déterminant Apposé も また参照
Déterminatif 限定的 (αὐτός)	67 ; 208 ; 263
Dialectes grecs ギリシア語方言	序論 Introduction を見よ
Digamma デイガンマ	4 ; 16 (デイガンマの消失 disparition du d.)
Diminutifs 縮小辞	192
Diphthongues 二重母音	5 ; 2 (偽二重母音 fausse d.)
Direction, accusatif de 方向 (の対格)	218 ; 235 ; 274 (前置詞表 tableau prépositions)
Disjonction 分離	215 (転置 hyperbaton) ; 347-348 (接続詞 conjonctions)
Distribution 分配	274 (前置詞表 tableau prépositions) ; 278 (時間 temps)
Duel 双数	27, 86 (曲用 déclinaison) ; 87, 162 (動詞活用 conjugaison) ; 206, 210 (一致 accord)
Durée 持続	218 ; 236 ; 275

E

Elision 母音字省略	11 ; 24 (およびアクセント法 et accentuation)
Ellipse 省略	199 ; 217
Enclise 後倚	23
Enoncé 言表	198 ; 199
Enonciation (modes) 陳述 (法)	279 ; 280
Epenthèse 語中音挿入	47 ; 168
Epithète, position d' 形容語 (の位置)	201 ; 209 ; 332 (分詞 pariticipie)
Espace 空間	218 ; 場所 Lieu もまた参照
Esprits 氣息記号	6
Etendue 外延	拡がり Extension 参照
Ethniques (formation des mots) 人種 (語の形成)	189
Euphonique, -v 調音の v	42 ; 102
Evaluation, génitif de 評価 (の属格)	242-243
Eventualité 起りうること	期待 Attente 参照
Exclamation 感嘆	224 (主格 nominatif) ; 234 (対格 accusatif) ; 255 (属格 génitif) ; 328 (不定法 infinitif)
Exhortation 勸奨	305
Extension 拡がり	218 ; 236 ; 274 (前置詞表 tableau prépositions)

F

Famille de mots 語ファミリー	25 ; 187
Fausse coupe 偽切断	188
Figure étymologique 語源的姿	229

Finalité 目的	280 ; 298 ; 337 (未来 futur) ; 307, 350 (目的節 propositions finales) ; 323 (不定法 Infinitif) ; 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照
Flexion 曲折	25 ; 20 (アクセントの変化 variations de l' accent) ; 曲用 Déclinaison, 動詞活用 Conjugaison もまた参照
Formation des mots 語形成	187-197
Futur 未来	88-89 ; 123, 280 (幹 thème) ; 119 (εἰμί の de εἰμί) ; 121 (εἰμί の 意味 valeur de εἰμί) ; 124-126 (シグマを介在させた未来 f. sigmatique) ; 127-128 (約音 contracte) ; 129 (未来の意味におかれた現在 présents à valeur de) ; 130 (未来完了 futur parfait) ; 142-146 (受動相 passif) ; 145-146 (受動相 II passif II) ; 298 (目的・結果の意味 valeur finale-consécutive) ; 312 (不定法におかれた幹の意味 valeur du thème à l'infinitive) ; 331, 337 (分詞に置かれた幹の意味 valeur du thème au participe)

G

Généralisation 一般化	29 (冠詞 article) ; 75 (ο{sti}) ; 199 (名詞文 phrase nominale) ; 279 (接続法 subjonctif) ; 281, 306 (ἄν を伴う接続法 subjonctif avec ἄν) ; 284 (négation 否定) ; 仮定 Hypothèse もまた参照
Génitif 属格	35 (ドーリス属格 g. dorien) ; 71 (所有の属格 g. de possession, 人称代名詞 pronoms personnels) ; 209, 238-239 (連体詞的 adnominal) ; 218 (統辞 syntaxe, 一般論 généralités) ; 219, 238-259 (用法 usages) ; 272-274 (前置詞リストおよび表 liste et tableau prépositions) ; 239 (主語 subjectif, 目的語 objectif) ; 238, 246 (部分の parititif) ; 238, 256 (奪格的 ablatif) ; 275-277 (時間の表現 expression du temps) ; 345 (絶対 absolu)
Genres 性	27
Grassmann, loi de グラースマン (の法則)	18
Gutturales 喉音	3 ; 14-15

H

Hyperbaton 転置	215
Hypothèse 仮定	281 (実現性の度合い degrés de réalité) ; 284 (否定 négation) ; 291 (実現性 réalité) ; 292 (非実現性 irréalité) ; 300 (可能性 possibilité) ; 301 (斜希求法 optitativ oblique) ; 306 (期待 attent, ἄν を伴う接続法 subjonctif avec ἄν) ; 348 (εἰ) ; 350 (状況補語節表 tableau propositions-compléments)

I

Imparfait 未完了過去	90, 98 (一般論 généralités) ; 107-109 (形態論 morphologie) ; 111-114 (約音動詞の i. des verbes contractes) ; 116-118 (δίδωμι などの i. de δίδωμι, etc.) ; 120-122 (特別の動詞 verbes particuliers) ; 292 (非実現性 irréalité) ; 293 (後悔 regret) ; 294 (過去における反復 répétition dans le passé)
Impératif 命令法	91, 279, 289a (一般論 généralités) ; 136 (アオリスト II アクセント accent aoriste II) ; 284 (否定 négation) ; 289a, 309, 349 (用法 usages) ; 命令 Ordre, 禁止 Défense もまた参照

- Impersonnelles, tournures 非人称表現 94 (義務の動詞的形容詞 *adjectif verbal d'obligation*) ; 120 (crhv) ; 292 ; 321 ; 346
- Indéfinis 不定 74-76, 81 (代名詞 *pronoms*) ; 77 (副詞 *adverbes*)
- Indicatif 直説法 91, 279, 289a (一般論 *généralités*) ; 90, 280 (時間的意味 *valeur temporelle*) ; 108 (加音 *augment*) ; 281 (実現性の度合い *degrés de réalité*) ; 283 (否定 *négation*) ; 289 (οὐ μὴ を伴う未来 *futur avec οὐ μὴ*) ; 289a, 290-298, 349, 350 (用法 *usages*)
- Indo-européen インドヨーロッパの 序論 *introduction* を見よ ; 4, 16 (半母音 *semi-voyelles*) ; 26 (喉頭音 *laryngales*) ; 212 (語順 *ordre des mots*)
- Infinitif 不定法 92, 105, 310 (一般論 *généralités*) ; 105, 136 (アクセント *accent*) ; 281 (ǎv を伴う *avec ǎv*) ; 285, 311 (否定 *négation*) ; 318 (μὴ; οὐ によって否定された *nié par μὴ; οὐ*) ; 312 (幹の意味 *valeur des thèmes*) ; 313-328, 350 (用法 *usages*) ; 205, 313 (名詞化された *nominalisé*) ; 314, 323 (目的結果の意味におかれた *à valeur finale-consécutive*) ; 324 (形容詞を伴う *avec adjectif*) ; 不定法構文 *Construction infinitive* もまた参照
- Infixe 挿入辞 168
- Injonction 命令 命令 *Ordre* 参照
- Instrument 道具 手段 *Moyen*, 具格・随伴格 *Instrumental-comitatif* 参照
- Instrumental-comitatif, cas 具格・随伴格 218 ; 260, 263-264 (随伴の与格および関係の与格 *datif d'accompagnement et d'association*) および 266 (道具の与格 *datif instrumental*) もまた参照
- Interpellation 詰問 218, 269 (呼格 *vocatif*) ; 224 (主格 *nominatif*)
- Interrogation 疑問 74-76 (疑問代名詞 *pronoms interrogatifs*) ; 77 (疑問副詞 *adverbes interrogatifs*) ; 82-83, 350, 301 (疑問節 *propositions interrogatives*) ; 198 (統辞一般論 *généralités syntaxe*)
- Intransitifs, verbes 自動詞 87, 138 (語基アオリスト *aoristes radicaux*) ; 226 (動詞接頭辞を伴う *avec préverbes*)
- Iota souscrit, adscrit イオタ, 下書き・横書きの 5
- Irréalité 非実現性 281 (実現性の度合い *degrés de réalité*) ; 292 ; 348 (εἰ) ; 349-350 ; 仮定 *Hypothèse* もまた参照

J

- Juxtaposition 傍置 209

L

- Labiales 唇音 3 ; 14-15
- Laryngales 喉頭音 26
- Lieu 場所 57, 77, 247 (副詞 *adverbes*) ; 274 (前置詞表 *tableau prépositions*) ; 処格 *Locatif*, 位置 *Localisation*, 空間 *Espace* もまた参照
- Linéaire B 線文字 B 序論 *Introduction* を見よ
- Liquides 流音 3 ; 14 ; 26 (母音化 *vocalisation*)
- Localisation au datif 与格に置かれた位置 218, 267 ; 274 (前置詞表 *tableau prépositions*) ; 277 (時間における *dans le temps*)

Locatif 処格	218（格 cas）；260, 267（与格 datif）；57（副詞 adverbés）
Loi de... 法則	法則の名を参照

M

Manière 仕方	56, 77（副詞 adverbés）；265（与格 datif）；274（前置詞表 tableau prépositions）
Matière 材料	193（形容詞 adjectifs de）；240（属格 génitif de）；274（前置詞表 tableau prépositions）
Médio-passif 中・受動相	87
Mesure 単位	242（属格 génitif de）
Métathèse quantitative 定量的音位転換	13
Modes 法	80（関係詞における dans les relatives）；82-83（疑問文における dans les interrogatives）；91, 279-280, 289a（一般論 généralités）；281（実現性の度合い degrés de réalité）；282-289（否定 négation）；289a, 290-309, 349-350（用法 usages）；直説法 Indicatif, 接続法 Subjonctif, 希求法 Optatif, 命令法 Impératif もまた参照
Moyen (instrument) 手段（道具）	260, 266（与格 datif）；274（前置詞表 tableau prépositions）
Moyen (voix de verbe) 中動相（動詞の相）	87
Mycénien ミュケーナイの序論 Introduction	を見よ

N

Nasales 鼻音	3；14-15；26（母音化 vocalisation）
Négation 否定	282-289；80（関係詞において dans les relatives）；307（μήによって導かれる目的の finale introduite par μή）；308（恐れ of 動詞を伴う avec les verbes de crainte；où μή）；309（否定命令 ordre négatif）；311（不定法を伴う avec l'infinitif）；316, 320（虚辞の否定 négations explétives）；318, 320, 322（μή où）；330（分詞を伴う avec le participe）；349-350（復習要約表 récapitulation）
Neutre 中性	27；44, 190（-μαに終る名詞 noms en -μα）；49, 190（-οςに終る名詞 noms en -ος）；57, 62, 237（副詞 adverbés）；64（代名詞 pronom, 曲用 déclinaison）；189（-τήριον, -τρονに終る名詞 nom en -τήριον, -τρον）；192（縮小辞 diminutifs）；206（動詞の一致 accord du verbe）；207（属詞の一致 accord de l'attribut）；252（動詞の補語として comme complément de verbe）；346（中性に置かれた固定的分詞 participes figés au n.）
Nom 名詞	29（固有名詞および冠詞 n. propre et article）；49（-ηςに終る固有名詞 nom propre en -ης）；189-192（語形成 formation des mots：行為者の名詞 noms d'agent（189）, 抽象名詞 noms abstraits（190）, 月の名 noms de mois（191）, 縮小辞 diminutifs（192））；201, 209-210（名詞限定辞 déterminant du n.）；208（属詞機能の en fonction d'attribut）；曲用 Déclinaison もまた参照
Nominalisation 名詞化	205；313（不定法および不定法構文 infinitif et constr. infin.）；332（分詞 participe）
Nominatif 主格	218；219-224（用法 usages）；232, 319（不定法と伴う属詞 attribut avec un infinitif）
Numéraux 数詞	84-85；57（副詞 adverbés）

O

Objet, complément de 目的語 (の補語)	200 ; 225-226 (対格 accusatif) ; 229 (内的目的語 objet interne)
Occlusives 閉鎖音	3 ; 14-15 ; 18 (同化 assimilation)
Optatif 希求法	91, 279, 289a (統辞一般論 généralités syntaxe) ; 104 (形態論一般論 généralités morphologie) ; 281 (実現性の度合い degrés de réalité) ; 284 (否定 négation) ; 289a, 299-303, 349, 350 (用法 usages) ; 301-302 (斜希求法 oblique)
Ordre 命令	198-199 ; 328 (不定法 infinitif) ; 命令法 Impératif, 禁止 Défense もまた参照
Ordre des mots 語順	201 ; 211-215
Origine 起源	由来 Provenance 参照
Oxyton 鋭調語	19, 30 (-o に終る 曲用 déclinaison en -o) ; 34 (-α に終る 曲用 déclinaison en -α) ; 46 (σωτήρα の法則 loi σωτήρα) ; 270 (前置詞 prépositions)

P

Parataxe 並列	216
Parfait 完了	88-89 (幹 thème) ; 90, 280 (幹および時制 thème et temps) ; 147 (一般論 généralités) ; 148 (畳音 redoublement) ; 149-150 (能動相 I actif I) ; 151-152 (能動相 II actif II) ; 153 (混合完了 parfaits mixtes) ; 155-161 (中・受動相 médio-passif) ; 130 (未来完了 futur parfait) ; 261 (受動相および与格におかれた行為者 passif et agent au datif) ; 94 (-τός に終る 動詞の形容詞の意味 valeur de l'adjectif verbal -τός)
Paroxyton パロクシュトノン	19
Participe 分詞	45, 182-186 (曲用 déclinaison) ; 93, 106 (形態一般論 généralités morphologie) ; 106, 136 (アクセント accent) ; 207, 210 (分詞の一致 accord du) ; 281 (äv を伴う avec äv) ; 285, 330 (否定 négation) ; 329 (統辞一般論 généralités syntaxe) ; 331 (幹の意味 valeur des thèmes) ; 314, 332-346, 350 (用法 usages) ; 334-341 (並置および状況的意味 apposé et valeurs circonstancielles) ; 345 (絶対属格 génitif absolu)
Particules 小辞	213 (語順 ordre des mots) ; 216 (並置法の de coordination) ; 281, 292, 294, 300, 306 (äv) ; 347 (一般論 généralités) ; 348 (アルファベット順リスト liste alphabétique)
Partitif, génitif 部分 (の属格)	246-247
Passif (voix du verbe) 受動相	87 ; 94 (動詞的形容詞の意味 valeur des adjectifs verbaux) ; 受動相未来およびアオリスト Futur et Aoriste passifs 参照
Périspomène ペリスポメノン	19
Personnes du verbe 人称 (動詞の)	87
Personnels, pronoms 人称代名詞	67-69 ; 71 ; 86 (双数 duel) ; 262 (与格における用法 usage au datif)
Phonétiques, phénomènes 音韻論的現象	8-18
Phrase nominale 名詞文	199 ; 217
Plus-que-parfait 過去完了	90, 147 (一般論 généralités) ; 108 (加音 augment) ; 149-150 (能動相 I actif I) ; 151 (能動相 II actif II) ; 155-161 (中・受動相 médio-passif)

Ponctuation, signe de 句読法, 記号	7
Possession 所有	70-71 (所有の表現 <i>expression de la</i>) ; 239 (所有の属格 <i>génitif de</i>) ; 262 (所有の与格 <i>datif de</i>)
Possibilité 可能性	281 (実現性の度合い <i>degrés de réalité</i>) ; 300 (希求法および <i>ǎv optatif et ǎv</i>) ; 348 ($\epsilon\iota$) ; 349-350 ; 94 (- $\tau\acute{o}\varsigma$ に終る動詞的形容詞 <i>adjectif verbal en -$\tau\acute{o}\varsigma$</i>) ; 仮定 Hypothèse もまた参照
Postposition 後置	209 (限定辞 <i>déterminant</i>) ; 270 (前置詞 <i>préposition</i>)
Potentiel 可能法	可能性参照
Prédictat 述語	198-199
Préfixes 接頭語	187 ; 196
Prépositions 前置詞	200, 218, 270 (一般論 <i>généralités</i>) ; 272-273 (アルファベット順リスト <i>listes alphabétiques</i>) ; 274 (要約復習表 <i>tableau récapitulatif</i>) ; 247, 256 (属格を伴う <i>avec génitif</i>)
Présent 現在	88-89, 98 (thème 幹) ; 90, 280 (幹および時制 <i>thème et temps</i>) ; 99-100, 102-106 (- ω に終る現在 <i>présent en -ω</i>) ; 107-109 (未完了過去の活用 <i>conjugaison de l'imparfait</i>) ; 110-114 (約音動詞 <i>verbes contractes</i>) ; 99, 101-105, 115-122 (- $\mu\iota$ に終る現在 <i>présent en -$\mu\iota$</i>) ; 129 (未来の意味に置かれた <i>à valeur de futur</i>) ; 163-178 (現在幹に従った動詞の分類 <i>classement des verbes selon le thème du p.</i>) ; 295 (歴史的現在 <i>présent historique</i>) ; 312 (不定法に置かれた幹の意味 <i>valeur du thème à l'infinitif</i>) ; 331 (分詞に置かれた幹の意味 <i>valeur du thème au participe</i>)
Préverbe 動詞接頭辞	25, 270-271 (一般論 <i>généralités</i>) ; 108 (および加音 <i>et augment</i>) ; 187, 197 (語の形成 <i>formation des mots</i>) ; 272 (アルファベット順リスト <i>liste alphabétique</i>)
Prix, génitif de 価格の属格	243
Proclise 前倚	22 ; 270 (前置詞 <i>prépositons</i>)
Prolepse (anticipation) 予期	213 ; 214
Pronom 代名詞	64-66, 76 (指示代名詞 <i>démonstratifs</i>) ; 67 ($\alpha\upsilon\tau\acute{o}\varsigma$) ; 67-69, 71, 86, 262 (人称代名詞 <i>personnels</i>) ; 67, 69 (再帰代名詞 <i>réfléchi</i>) ; 72 (相互代名詞 <i>réciproque</i>) ; 73, 75, 76 (関係代名詞 <i>relatifs</i>) ; 74-76 (疑問代名詞 <i>interrogatifs</i>) ; 74-76, 81 (不定代名詞 <i>indéfinis</i>) ; 76 (量・質・択一の代名詞の表 <i>tableau des p. de quantité, qualité, alternative</i>) ; 207 (指示代名詞 <i>démonstratif</i> , 一致 <i>accord</i>)
Prononciation 発音	1-6
Proparoxyton プロパロクシュトノン	19
Propérispomène プロベリスポメノン	19
Propositions-compléments 状況補語節	200, 203 (一般論 <i>généralités</i>) ; 281, 306 ($\alpha\upsilon\upsilon$ を伴う接続法に置かれた <i>au subjonctif avec ǎv</i>) ; 292 (非実現性 <i>irréalité</i>) ; 300 (可能性 <i>possibilité</i>) ; 301-302 (斜希求法に置かれた <i>à l'optatif oblique</i>) ; 303 (希求法の牽引 <i>attraction de l'optatif</i>) ; 307 (目的節 <i>propositions finales</i>) ; 308 (恐れ動詞に依存した <i>en dépendance d'un verbe de crainte</i>) ; 319 (肯定的な <i>déclaratives</i>) ; 347 (接続詞 <i>conjonctions</i>) ; 348 (アルファベット順接続詞リスト <i>liste alphabétique des conjonctions</i>) ; 350 (要約復習表 <i>tableau récapitulatif</i>) ; 状況補語の名詞下 <i>sous le nom de la proposition-complément</i> もまた参照

Propositions indépendantes 独立節	349 (法の表および用いられる否定 tableau des modes et négations utilisés)
Provenance 由来	218 ; 256 (属格 génitif) ; 274 (前置詞表 tableau préposition)
Punition, génitif de 罰の属格	245

Q

Qualité 質	76 (質の代名詞 pronoms de)
Quantité 量	76 (量の代名詞 pronoms de)
Quantité vocalique 母音的量	2 ; 5 (二重母音 diphtongues) ; 13 (音位転換 métathèse) ; 26 (母音交替 alternance)

R

Racine 語根	25
Radical 語基	25, 26 ; 25, 188, 194 (派生語基 r. dérivé) ; 88 (および動詞幹 et thèmes verbaux) ; 163-170 (および現在幹 et thème du présent)
Réalité, degré de 実現性, 度合い	281 ; 290-291 ; 348 (εi) ; 349-350 ; 事実の確認 Constatation, 仮定 Hypothèse もまた参照
Réciproque, pronom 相互代名詞	72
Redoublement 畳音	147-148 (完了の du parfait) ; 170, 177 (現在幹の du thème du présent)
Réfléchi, pronom 再帰代名詞	67, 69
Regret, énonciation d'un 後悔の陳述	293
Rejet 拒否	213
Relatifs 関係詞	73, 75, 76 (代名詞 pronoms) ; 77 (副詞 adverbess) ; 78 (関係代名詞の牽引 attraction du pronom r.)
Relatives, propositions 関係節	78-81, 203 ; 300, 302 (希求法におかれた à l'optatif) ; 306 (ǎv を伴う接続法に置かれた au subjonctif avec ǎv) ; 350 (状況補語節表 tableau propositions-compléments) ; 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照
Répétition dans le passé 過去における反復	294 ; 302

S

Semi-voyelles 半母音	4
Séparation, génitif de 分離の属格	256-257
Sifflante 摩擦音	3 ; 14-15 ; シグマ Sigma もまた参照
Sigma シグマ	1 (月形の lunaire) ; 17 (語頭の initial, 母音間の intervocalique) ; 摩擦音 Sifflante もまた参照
Simultanéité 同時性	312 ; 331
Sonores, occlusives 有声閉鎖子音	3 ; 14-15
Souhait 願望	199 ; 279 ; 299 (希求法 optatif) ; 328 (不定法 infinitif)
Sourdes, occlusives 無声閉鎖子音	3 ; 14-15 ; 18

Spécification, accusatif de 特別化の対格	230, 231
Subjonctif 接続法	91, 279, 289a (統辞一般論 généralités syntaxe); 103 (形態一般論 généralités morphologie); 281 (実現性の度合い degrés de réalité); 281, 306 (ἄν を伴う avec ἄν); 284 (否定 négation); 289 (οὐ μὴ の後 après οὐ μὴ); 289a, 304-308, 349, 350 (用法 usages)
Suffixe 接尾辞	25; 104 (法接尾辞 s. modal, 希求法 optatif); 164-169, 173-176 (現在幹の接尾辞 s. du thème du présent); 187-188, 194 (派生語の接尾辞 s. dérivationnels); 218 (方向の接尾辞 s. directionnels)
Sujet 主語	198, 200, 206 (主語と動詞の一致 Accord du verbe avec le s.); 218-219 (主格 nominatif); 232 (対格におかれた à l' accusatif)
Superlatif 最上級	59-61 (形容詞 adjectifs); 62 (副詞 adverbés)
σωτήρα, λοι σωτήρα の法則	20

T

Temporelles, propositions 時間節	350; 302 (斜希求法 optatif oblique); 状況補語節 Propositions-compléments もまた参照
Temps 時制	90 (動詞の一次時制および二次時制 temps primaires et secondaire du verbe); 280 (法, 幹および時制 modes, thèmes et t.); 77 (副詞 adverbés); 218 (格および時制の表現 cas et expression du temps); 253 (時制の属格 génitif de); 268 (与格 datif); 275-278 (時制の表現, 要約復習表 expression du t., récapitulation), 持続 Durée もまた参照
Terminaison 語尾	25; 27, 30 (曲用 déclinaison); 57 (固定された格語尾 t. casuelle figée); 97, 279 (動詞活用 conjugaison)
Thème 幹	25; 27, 42 (名詞幹 t. nominale); 88-89, 280 (動詞幹 t. verbaux); 164-170 (現在幹の形成 formations du thème du présent); 312 (不定法に置かれた幹の意味 valeurs des t. à l'infinitif); 331 (分詞に置かれた幹の意味 valeurs des t. au participe); 語基 Radical, 現在 Présent, 未来 Futur, アオリスト Aoriste, 完了 Parfait, 幹性母音 Voyelle thématique もまた参照
Transitifs, verbes 他動詞	87; 226 (動詞接頭辞を伴う avec préverbes)

U

Unité syntaxique 統辞的単位	198
------------------------	-----

V

Verbe 動詞	20 (アクセント accent); 87-97 (一般論 généralités); 93-94, 261 (形容詞形 formes adjectives); 110-114 (約音動詞 verbes contractes, 動詞活用 conjugaison); 163-178 (動詞の分類 classes de verbes); 171-178 (現在幹による分類リスト liste classée selon le thème du présent); 179-181 (παίδεω の動詞活用表 tableau de conjugaison de παίδεω); 194 (語形成 formation des mots); 198-199 (統辞一般論 généralités syntaxiques); 206 (主語との動詞の一致 accord du v. avec le sujet); 231 (二つの対格を伴う avec deux accusatifs); 244, 246, 248-252, 257 (属格を伴う)
----------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	avec le génitif) ; 263, 264 (与格を伴う avec le datif) ; 271 (動詞接頭辞と複合された composés avec des préverbes) ; 272 (動詞接頭辞のアルファベット順リスト liste alphabétique des préverbes) ; 308 (恐れ of 動詞 verbes de crainte) ; 315-321 (不定法または不定法構文が続く動詞 verbes suivi d'un infinitif ou d'une construction infinitive) ; 314, 342-344 (並置された分詞を伴う avec un participe apposé) ; 316, 320 (否定的意味の de sens négatif) ; 323 (目的の意味の不定法を伴う avec infinitif à valeur finale) ; 351 (動詞のアルファベット順リスト liste alphabétique des verbes) ; 法 Modes, 幹 Thèmes, 時制 Temps などとも参照
Vocatif 呼格	218 ; 269
Voix du verbe 動詞の相	87
Voyelles 母音	2 ; 26, 47 (支援母音 voyelle d'appui) ; 99, 135 (幹母音 voyelle thématique)
Volonté 意志	199 (意志の表現 Expression de la) ; 279 (接続法 subjonctif) ; 284 (否定 négation)

W

Wackernagel の法則 loi de	213
Wau (*w)	4 ; デイガンマ Digamma も参照

Y

yod (*y)	4 ; 16
----------	--------

引用された著者および作品の略号リスト

A.	アイスキュロス	悲劇作家	前五世紀
A.	アガメムノーン		
Ch.	供養する女たち		
Eu.	慈しみの女たち		
Pers.	ペルシア人		
Pr.	縛られたプロメテウス		
Th.	テーバイ攻めの七将		
Aeschin.	アイスキネース	雄弁家	前四世紀
3	クテシポーンに対して		
Aesop.	アイソポス	寓話作家	前六世紀
	(アイソポスの寓話はより後期の形の下で伝えられた)		
Alex.	アレクシス	喜劇詩人	前四世紀
And.	アンドキデース	雄弁家	前五 - 四世紀
Antiph.	アンティパネース	喜劇詩人	前四世紀
Antipho.	アンティポーン	雄弁家	前五世紀
2.3	第一の四部作, 第2 訴追弁論		
4.2	第三の四部作, 第一答弁		
Ar.	アリストパネース	喜劇詩人	前五 - 四世紀
Ach.	アカルナイの人々		
Av.	鳥		
Eq.	騎士		
Lys.	女の平和		
Pl.	福の神		
Ra.	蛙		
V.	蜂		

Arist.	アリストテレース	哲学者	前四世紀
Ath.	アテナイの国制		
Metaph.	形而上学		
Pol.	政治学		
Rh.	弁論術		
D.	デーモステネース	雄弁家	前四世紀
3	第三オリュントス弁論		
4	第一ピリッポス弁論		
8	ケルソネーソス情勢について		
9	第三ピリッポス弁論		
18	栄冠について		
19	偽りの使節について		
21	ミディアス論駁		
Democr.	デモクリトス	哲学者	前五 - 四世紀
D. H.	ディオニュシオス(ハリカルナッソスの)	歴史家および批評家	西暦一世紀
E.	エウリーピデース	悲劇詩人	前五世紀
Alc.	アルケステイス		
Andr.	アンドロマケ		
Ba.	バッコスの信女		
El.	エレクトラ		
Hec.	ヘカベ		
Hel.	ヘレネ		
Heracl.	ヘラクレスの子供たち		
HF	ヘラクレス		
Hipp.	ヒッポリュトス		
IA	アウリスのイピゲネイア		
Ion	イオン		
IT	タウリケのイピゲネイア		
Or.	オレステス		
Ph.	フェニキアの女たち		

	Supp.	救いを求める女たち		
	Tr.	トロイアの女		
Epicur.		エピクロス メノイケウスへの書簡	哲学者	前四－三世紀
Hdt.		ヘーロドトス	歴史家	前五世紀
Heraclit.		ヘーラクレイトス	哲学者	前六－五世紀
Hyp.		ヒュペリデース	雄弁家	前四世紀
	Epit.	追悼演説		
	Eux.	エウクセニッポス弁護		
Isoc.		イソクラテース	雄弁家	前五－四世紀
	2	ニコクレスに与う		
	3	ニコクレス		
	4	民族祭典演説		
	8	平和演説		
	9	エウアゴラス		
	12	パンアテナイア祭演説		
Luc.		サモサタのルーキアノス	サテュロス劇作家	西暦二世紀
	Icar.	イカロメニッポス		
	Tim.	ティモン		
	VH	ほんとうの話		
Lucurg.		リュクールゴス	雄弁家	前四世紀
	Leocr.	レオクラテース論駁		
Lys.		リュシアース	雄弁家	前五－四世紀
	1	エラトステネスの殺人について		
Men.		メナンドロス	喜劇詩人	前四－三世紀

Men. Sent.	メナンドロス の思想 (伝統的にメナンドロスのものとされている箴言一行詩集成)		
Paus.	パウサニアース	地理家	西暦二世紀
Philem.	ピレモン	喜劇詩人	前四 - 三世紀
Philonid.	ピロニデース	喜劇詩人	前五世紀
Pl.	プラトーン	哲学者	前五 - 四世紀
Ap.	ソクラテースの弁明		
Chrm.	カルミデース		
Cri.	クリトーン		
Criti.	クリティアース		
Euthd.	エウテュデーモス		
Euthphr.	エウテュプローン		
Grg.	ゴルギアース		
Hp. Ma.	大ヒッピアース		
Hp. Mi.	小ヒッピアース		
Ion	イオーン		
La.	ラケース		
Ly.	リュシス		
Mx.	メネクセネース		
Phd.	パイドーン		
Phdr.	パイドロス		
Prm.	パルミデース		
Prt.	プロータゴラス		
R.	国家		
Smp.	饗宴		
Sph.	ソピステース		
Tht.	テアイテートス		
Pl. Com.	プラトーン (喜劇詩人の)	喜劇詩人	前五 - 四世紀

Plu.	プルタルコス	伝記作家, モラリスト	西暦一—二世紀
Adul.	諂いを友から区別する仕方		
Pythagoras ap. Stob.	ピュタゴラス（前6世紀の哲学者） ストバイオス引用の		
S.	ソボクレーズ	悲劇詩人	前五世紀
Aj.	アイアース		
Ant.	アンティゴネー		
El.	エーレクトラー		
OC	コロノスのオイディプース		
OT	オイディプース王		
Ph.	ピロクテータース		
Simon.	シモニデース（ケオス島の）	抒情詩人	前六—五世紀
Stob.	ストバイオス	文筆家	西暦五世紀
Th.	トゥキューディデース	歴史家	前五世紀
Thphr.	テオプラテース	哲学者	前四—三世紀
X.	クセノポーン	歴史家	前五—四世紀
Ages.	アゲーシラーオス		
An.	アナバシス		
Cyr.	キューロスの教育		
HG	ヘレニカ		
Mem.	ソークラテースの思い出		

本邦における文法書

- 1) 田中 秀央、『希臘語文典』、岩波書店、東京、1927
- 2) 市河 三喜、『ラテン・ギリシア語初歩（英学生のため）』、研究社、東京、1930
- 3) 鳴瀬 恒太郎、『ギリシア語文法』、尚文堂、東京、1933
- 4) 高津 春繁、『基礎ギリシア語文法 文法篇・読本篇』、北星堂書店、東京、1951 (1992)
- 5) 田中 秀央、『初等ギリシア語文典』、研究社出版、東京、1955
- 6) 呉 茂一、泉 木吉、『ラテン語小文典、附ギリシア語要約およびラテン・ギリシア造語法』、岩波書店、東京、1957
- 7) 古川 晴風、『ギリシア語四週間』、大学書林、東京、1958
- 8) 高津 春繁、『ギリシア語文法』、岩波書店、東京、1960
- 9) 田中 美知太郎、松平 千秋、『ギリシア語文法』、岩波書店、東京、1968
- 10) 田中 美知太郎、松平 千秋、『ギリシア語入門』、岩波書店、東京、1951
- 11) 水谷 智洋、『古典ギリシア語初歩』、岩波書店、東京、1990
- 12) M. アモロス、『ギリシア語の学び方』、南窓社、東京、1985
- 13) 田中 利光、『新ギリシア語入門』、大修館書店、東京、1994
- 14) 河底 尚吾、『ギリシア語入門』、泰流社、東京、1997
- 15) 池田 黎太郎、『古典ギリシア語入門』、白水社、東京、1998
- 16) シャルル・ギロー（著）有田 潤（訳）、『ギリシア文法（改訳新版）』、文庫クセジュ、白水社、東京、2003

文法用語比較表

本書の翻訳に当たり、フランス語の文法用語は英語のそれとほぼ同じ綴りでありながら、意味が異なる場合があることに気づかされた。また、同じ欧語でも、著者により様々な訳語が当てられている。このことから、我々が見ることの出来る範囲ではあるが、欧語で記載された文法用語（ラテン語は(L)、ドイツ語は(G)、フランス語は(Fr)、英語については標記を省略した。）について最後に掲げた書籍のそれぞれの著者の訳語を比較した。対応する訳語がないものでも欧語が掲載されているものはその欧語を示した。

欧語	日本語
ablative absolute	独立的従格（田中・松平入門）
ablative genitive	奪格の用法の属格（池田）
ablative, ablativus, ablativus casus(L), ablatif(Fr)	奪格（マルティネ・神山）、奪格（ギロー・有田）、奪格（ロックウッド・永野）、奪格（高津・基礎）、奪格（池田）、奪格（風間）、奪格（高津印欧）、奪格（高津文法）、奪格、従格（田中・松平文法）(aufero, ab-fero「運び去る」という動詞の完了受動分詞 ab-latus の派生形で、この格のもつ多くの機能の中から、前置詞 a, ab「～から」とか、e, ex「～のなかから」を伴って分離を表す用法と特に考慮した名称）（風間）
ablativus comparationis(L.)	比較の従格（田中・松平文法）
ablativus originis(L.)	起源を示す従格（田中・松平文法）
ablativus separationis(L.)	引き離しの従格（田中・松平文法）
ablaut(G.), apophony	母音交替（ロックウッド・永野）
absolu(Fr.)	独立的（ギロー・有田）
absolute infinitive	（不定法の）別句的用法（田中秀）
absolute participle	分詞の独立的用法（田中・松平入門）、独立的用法の分詞（水谷）
Abtönung(G)	質的交替（高津文法）質的母音交替（高津印欧）
accentus acutus(L.), acute, acute accent, περισφδία ὀξεῖα	鋭アクセント（田中・松平文法）鋭アクセント（アモロス）鋭アクセント（池田）鋭アクセント（田中・松平入門）鋭（水谷）鋭（古川）
accentus circumflectus(L.)	曲アクセント（アモロス）、曲アクセント（田中・松平文法）
accentus gravis(L.)	重アクセント（アモロス）重アクセント（古川）重アクセント（田中・松平文法）
accentus(L.), περισφδία, τόνοσ	アクセント（高津文法）アクセント（高津・基礎）アクセント（古川）音調（田中秀）アクセント（河底）
accompli(Fr)	結果（マルティネ・神山）
accord(Fr)	一致（マルティネ・神山）一致（ギロー・有田）
accusative absolute	分詞の対格の独立用法（池田）対格別句（田中秀）対格を用いるもの（水谷）
accusative of respect	限定の対格（水谷）
accusative, accusativus casus(L)	対格（ロックウッド・永野）対格（高津・基礎）対格（水谷）対格（池田）対格（田中・松平入門）対格（田中秀）対格（田中利）対格（風間）対格（高津印欧）対格（アモロス）対格（古川）対格（高津文法）対格（田中・松平文法）
accusativus Graecus(L.)	ギリシア式対格（高津文法）（田中・松平文法）
accusativus limitationis(L.)	限定対格（高津文法）限定を示す対格（田中・松平文法）
accusativus relationis(L.)	関係を示す対格（田中・松平文法）
acteur(Fr)	行為者（マルティネ・神山）
activa tantum(L.)	意味の上から言って能動のみに用いられるもの（高津文法）
active, activum(L)	能動（ロックウッド・永野）能動態（高津・基礎）能動（高津文法）能動相（水谷）能動態（池田）能動相（田中・松平入門）能相（田中秀）能動相（田中利）能動態（高津印欧）能動態（古川）能動相（田中・松平文法）
acute または rising	揚音調（ロックウッド・永野）
additif(Fr.)	追加的（ギロー・有田）
adjective, adjectivum(L), adiectivum(L.)	形容詞（風間）形容詞（高津文法）形容詞（田中・松平文法）形容詞（古川）
adjoint(Fr)	補佐（マルティネ・神山）
adnominal	名詞と共に（田中・松平文法）
adnominal genitive	名詞にかかる属格（高津・基礎）
adverb, adverbium(L), adverbia(L.)	副詞（田中・松平文法）副詞（風間）副詞（古川）
adverbial numeralia(L)	数副詞（高津印欧）数副詞（田中・松平文法）
adverbial	動詞と共に（田中・松平文法）
adverbial comparison	副詞的比較法（田中秀）
adversative, adversatif(Fr.)	対立（高津文法）、反意的（ギロー・有田）

affirmative	肯定 (田中秀)
affolant(Fr)	衝撃的な (マルティネ・神山)
affolé(Fr)	衝撃を受けた (マルティネ・神山)
agent, agent(Fr)	行為を加える主体 (田中・松平入門) 行為者 (田中秀) 動作を引き起こす者 (田中・松平文法) 動作主 (マルティネ・神山)
Aktionsart(G)	動作態 (田中・松平入門)
allatif(Fr)	向格 (マルティネ・神山)
alliteration	頭韻 (風間)
alternance vocalique(Fr.)	母音交替 (ギロー・有田)
anacoluthie(Fr.)	逸脱構文、破格構文 (ギロー・有田)
analogie(Fr.)	類推 (ギロー・有田)
anaphoric, anaphorique(Fr.)	承前 (高津印欧) 先行語を受ける (ギロー・有田)
anaptyxis(Fr)	挿入母音 (マルティネ・神山)
anastrophe, ἀναστροφή	二音節の前置詞が先行する代わりに、後についたためにアクセントを取ること、前置詞が時に ἀνά や περί 等、名詞の後に τούτων περί の如くにおかれること (高津文法)
antecedent	先行詞 (田中秀)
antepenultima, antepenult, προπαραλύγουσα	前音節 (最後から三番目の音節) (河底)
anticipation(Fr)	先取り同化 (逆行同化の一種) (マルティネ・神山)
anticipatory assimilation	予期的同化 (古川)
anticiper(Fr)	先取り (マルティネ・神山)
aoorist, aooriste(Fr.), aooristus(L), ἀόριστος	アオリスト, 不限定過去 (高津文法) アオリスト, 不定過去, 非限定過去 (マルティネ・神山) 不限定過去 (ロックウッド・永野) 不限定 [過去] (高津・基礎) アオリスト (池田) アオリスト (田中・松平入門) 不定過去 (田中秀) アオリスト (田中利) アオリスト, 不限定過去 (風間) アオリスト (ギロー・有田) 不限定 (高津印欧) アオリスト (古川) アオリスト (田中・松平文法) 格言的アオリスト (ギロー・有田) 格言のアオリスト (古川)
aooriste gnomique(Fr.), aooristus gnomicus(L.)	
aooristus historicus(L.)	歴史的アオリスト (田中・松平文法)
aooristus primus(L.)	第一アオリスト (古川)
aooristus secundus(L.)	第二アオリスト (田中・松平文法) 第二アオリスト (古川)
aooristus sigmaticus(L.)	シグマのアオリスト (古川)
aphaeresis(L.), ἀφαίρεσις	除音 (田中・松平文法) 語頭の母音が、その前の語の語末に母音があるときに、脱落すること (高津文法)
apocope, apocope(Fr)	語末の短母音が、次の語頭の子音の前で脱落すること (高津文法)
apodosis	帰結 (文) (河底) 帰結 (田中・松平文法) 条件の帰結 (高津文法) 後文 (水谷) 後文 (田中・松平入門) 結句 (田中秀)
aposition emphatique(Fr.)	強調的付置詞 (ギロー・有田)
aposition, aposition(Fr.), appositio(L)	並置 (高津印欧) 同格的 (田中秀) 付置、併置 (ギロー・有田) 付置詞 (ギロー・有田)
appositive	対置的 (高津・基礎) 対置詞、対置的 (高津・基礎) 対置詞 (高津文法) 対置的 (高津文法)
article, articles, articuli, articulus(L), ἄρθρον	冠詞 (池田) 冠詞 (田中秀) 冠詞 (アモロス) 定冠詞 (田中・松平文法) 冠詞 (風間) 冠詞 (河底)
aspect, aspect(Fr.), aspectus(L)	相 (ギロー・有田) 相 (高津・基礎) 行なわれ方の様相, 相 (高津文法) 相 (池田) 動作態 (池田) 動作態 (アモロス) アスペクト (高津文法) 動作態 (田中・松平入門) 動作の行なわれ方の様相 (高津印欧)
aspiratae(L.)	帯気音 (アモロス) 帯気音 (田中・松平文法)
aspirated perfect	第二能動完了、気音完了 (高津・基礎) 気音完了 (高津文法)
aspiration(Fr)	気音化 (マルティネ・神山)

assimilatio inverse(L.)	逆の同化（田中・松平文法）
assimilatio(L.), assimilation, ἀφομοίωσις	同化作用（アモロス）音韻上の同化作用（田中・松平文法）同格になること（池田）類化作用（田中秀）同化（河底）
assimilatio(L.), attraction	関係代名詞の同化（田中・松平文法）
assimilation régressive(Fr.)	逆行同化（マルティネ・神山）
asyndesis(L.)	結合詞のない場合（高津文法）
asyndeton, asyndète(Fr.)	不結合（高津印欧）結合詞省略（ギロー・有田）
asyntaxique(Fr.)	非統語的（マルティネ・神山）
athematic conjugation	μi-活用（高津・基礎）
athematic, athématique(Fr.)	子音語基（マルティネ・神山）語幹形成母音のない（ロックウッド・永野）無幹母音式（ギロー・有田）
attic reduplication	アッティカ式畳音（古川）アッティカ風畳音（田中・松平文法）
tractio, attraction(Fr.), ἔλξις	アトラクション（河底）牽引（ギロー・有田）牽引作用（ロックウッド・永野）同化（水谷）関係代名詞の牽引（池田）関係代名詞の同化（田中・松平入門）法による牽引（ギロー・有田）
attraction modale(Fr.)	類音牽引（マルティネ・神山）
attraction paronymique(Fr.)	類音牽引（マルティネ・神山）
attribute, attribut(Fr.)	属詞（マルティネ・神山）属詞（ギロー・有田）発言の主題 = 主語 subject の、また主題の属性（高津・基礎）属性（高津文法）
attributio, attribution(Fr.)	対置的な限定（高津・基礎）限定（高津文法）帰属（ギロー・有田）
attributive	属性的（河底）附加語的（高津印欧）限定的（水谷）属性的な（池田）属性的（田中・松平入門）
attributive genitive	名詞にかかる属格（高津・基礎）
attributive participle	形容詞的分詞（田中秀）
attributive position	対置の限定位置（高津文法）対置の限定位置（高津・基礎）属性的位置（池田）
attributum(L.)	対置の限定語（高津・基礎）修飾語（高津文法）属性（田中・松平文法）
auctor(L.)	動作を引き起こす者（田中・松平文法）
augment temporel(Fr.)	時量的加音（ギロー・有田）
augment, augment(Fr.), augmentum(L.)	加音（ギロー・有田）加音（マルティネ・神山）加音（水谷）加音（池田）加音（田中・松平入門）加音（田中・松平文法）加音（田中利）加音（古川）接頭母音（ロックウッド・永野）オウグメント（河底）添加（田中秀）
augmentum syllabicum(L.)	音節的加音（田中・松平文法）音節的加音（古川）
augmentum temporale(L.)	時称的加音（田中・松平文法）
augmentum temporale(L.)	時量的加音（古川）
auteur(Fr.)	（ある結果を）生み出した人物、生みの親（マルティネ・神山）
barytone, barytonon	そこにかなるアクセントもない語（池田）
base, base(Fr.)	基底（形）（マルティネ・神山）母音交替の基（高津印欧）基（高津文法）
Bindevokale(G)	幹母音（河底）幹母音（田中・松平文法）語幹形成母音（水谷）
breathing	氣息（田中秀）
breathy voice	息漏れ声（マルティネ・神山）
cacuminales(Fr.)	頭頂音（マルティネ・神山）
caesura(L.), τομή	切点（河底）
cardinal, cardinalia(L.)	基数詞（高津・基礎）基数詞（高津文法）基数詞（高津印欧）基数詞（田中・松平文法）基数詞（水谷）基本数詞（田中秀）
case ending	格語尾（ロックウッド・永野）格語尾（高津印欧）
case, cas(Fr.), Fall(G), Kasus(G), πτώσις	格（ギロー・有田）格（高津印欧）格（高津・基礎）格（高津文法）格（池田）格（田中・松平入門）格（田中利）格（田中秀）格（アモロス）格（古川）格（田中・松平文法）
casus obliqui(L.), casus obliquus(L.), πτώσις πλαγία	斜格（田中・松平文法）斜格（高津文法）
casus rectus(L.), πτώσις εὐθεία	正格（高津文法）直立格（ギロー・有田）

catégorie grammaticale(Fr.)	文法範疇 (ギロー・有田)
causal	理由 (高津文法)
causal sentence	理由を表わす文 (池田)
causativa(L.)	「～させる」の意味に用いられる (高津文法)
cautious assertion	謙遜なる断定 (田中秀)
cautious negation	謙遜なる否定 (田中秀)
change of consonant	子音変化 (田中秀)
circumflex accent	曲アクセント (田中・松平入門)
circumflex or rising-falling	曲折 (アクセントの) または上下調 (ロックウッド・永野)
circumflex, circumflexus(L.), περισφῶδία ὀξύβαρεια または περισπωμένη	曲アクセント (池田) 曲 (水谷) 曲 (古川)
circumstantial	付随状況を示す (池田)
circumstantial participle	情况的分詞 (田中秀)
class	類 (ロックウッド・永野)
co-ordinate	列 (田中秀)
cognate	種 (田中秀) 同系 (高津印欧)
cognate accusative	(動詞が表している観念と類似の観念を表す語の対格の形を伴うことが出来る。この対格はすでにその動詞に含まれている観念を繰り返すものである。この動詞は自動詞でも他動詞でも差し支えない。このような対格) (田中秀)
collectiva(L)	集合数詞 (高津印欧)
comitativ(Fr.) (ギロー・有田)	伴格、従格 (ギロー・有田)
common gender, commune(L.)	共通性 (田中秀) 男女性共通に用いられるもの (高津文法)
common noun	普通名詞 (風間)
comparatio(L.)	比較 (古川)
comparative	比較級 (田中秀)
compensatory lengthening	代償延長 (高津印欧) 代償延長 (高津文法)
complexe(Fr.)	複合的 (マルティネ・神山)
complément(Fr.)	補語 (ギロー・有田)
compound verb	合成動詞 (水谷) 合成動詞 (田中秀)
compound, compositum(L)	合成語 (高津印欧)
concessive	譲歩 (高津文法)
conclusif(Fr.)	結論導入的 (ギロー・有田)
conclusion	結論 (田中秀)
concurrence(Fr.)	競合 (ギロー・有田)
condition	条件 (田中秀)
conditional relative clause	条件的関係句 (田中秀)
conditional sensece	条件文 (池田) 条件文 (田中秀)
conjugation, conjugaison(Fr.), conjugatio(L)	(動詞) 活用 (高津・基礎) 活用 (動詞の曲折) (ギロー・有田) 活用 (古川) 動詞変化 (田中・松平文法) 動詞変化 (田中・松平文法) 変化 (水谷) 動詞変化 (池田) 動詞変化 (田中・松平入門) 活用 (風間)
conjuguer(Fr)	活用する (マルティネ・神山)
conjunct form	連結形 (マルティネ・神山)
conjunctivus adhorlativus(L.)	勧告 (高津文法)
conjunctio(L), conjunction	接続詞 (風間)
conjunctivus(L)	接続法 (風間) 接続法 (古川)
consecutio temporum	相対的時間 (高津文法)
consecutive(L.)	結論 (高津文法)
consecutive sentence	結果文 (池田)
consonant declension	子音曲用または第三曲用 (高津・基礎) 子音曲用 (高津文法)
consonant shift	音韻推移 (高津印欧)
consonant, consonans(L), στοιχεῖον σύμφωνον	子音 (風間) 子音 (古川) 子音 (アモロス)

constitution, κρᾶσις	合音, ほかに縮合, 融合, 融音 (河底)
construction active(Fr)	行為【動詞】構文 (マルティネ・神山) (ここでの actif(Fr) は「行為の」、nom d' action(Fr) 行為名詞、verbe d' action(Fr) 行為動詞) (マルティネ・神山)
continuatif-consécutif(Fr.)	後続的・結果的
contract verb	母音融合動詞 (水谷)
contraction, contraction(Fr.), contractio(L), συναίρεσις	縮約 (ギロー・有田) 二つの短音を一つの長音に変換すること (河底) 母音の融合 (高津・基礎) 融合 (高津・基礎) 母音の融合 (高津文法) 融合 (水谷) 約音 (田中・松平入門) 約音 (田中・松平文法) 約音 (田中秀) 融音 (河底) 母音と母音の融合 (高津印欧) 融合 (古川)
contrary to fact condition, past	「過去の事実と反対」の条件 (池田)
contrary to fact condition, present	「現在の事実と反対」の条件 (池田)
copulative	結合 (高津文法) 繫辞的 (田中・松平入門)
copulative compound	並列合成語 (高津・基礎) 並列合成語 (高津文法)
copulative verb	繫辞的動詞 (水谷)
copule(Fr.), copula(L)	結辞 (高津印欧) 連辞 (高津・基礎) 連辞 (高津文法) 繫辞 (池田) 繫辞 (田中・松平文法) 連結辞 (田中秀) 連辞、繫辞 (ギロー・有田)
coronis(L), κορωνίς	合音記号
correlatio(L.)	相関 (古川)
correlative	相関代名詞 (高津・基礎)
crasis(L.), crase(Fr.), κρᾶσις	母音の融合 (水谷) 融合 (ギロー・有田) 異なる二つの語の間に生じた融合 (高津・基礎) 異なる二つの語の間に生じた融合 (高津文法) 融音 (田中・松平入門) 母音合約 (田中秀) 融音 (田中・松平文法)
cutting	除音 (河底)
datif explétif(Fr.)	虚辞的与格 (ギロー・有田)
dative of place	場所を表わす与格 (水谷)
dative of respect	限定の与格 (水谷)
dative, datif(Fr), dativus(L)	与格 (ロックウッド・永野) 与格 (マルティネ・神山) 与格 (高津・基礎) 与格 (水谷) 与格 (池田) 与格 (田中・松平入門) 与格 (田中秀) 与格 (田中利) 与格 (アモロス) 与格 (高津印欧) 与格 (古川) 与格 (高津文法) 与格 (田中・松平文法) 与格 (風間)
dativus autoris	動作者の与格 (田中・松平文法)
dativus causae	原因の与格 (田中・松平文法)
dativus comode et incommode(L.)	利害の与格 (田中・松平文法)
dativus instrumentalis(L.)	「～を以って」 (高津・基礎)
dativus instrumenti(L.)	手段用具を示す与格 (田中・松平文法)
dativus judicantis(L.)	見地を示す与格 (田中・松平文法)
dativus limitationis(L.)	限定を表わす与格 (田中・松平文法)
dativus locativus(L.)	於格的与格 (高津・基礎) 於格的与格 (高津文法)
dativus mensurae et differentiae(L.)	差異の度合いを示す与格 (田中・松平文法)
dativus modi(L.)	仕方の与格 (田中・松平文法)
dativus possessivus(L.)	所有を示す与格 (田中・松平文法)
dativus prosecutivus(L.)	時と場所を表わす与格 (高津文法)
dativus relationis(L.)	顧慮を表わす与格 (田中・松平文法)
dativus respectus(L.)	共同関係を示す与格 (田中・松平文法) 「...と共に」 (高津・基礎)
dativus sociativus(L.)	「～せんと試みているがその結果は不明」 (高津文法)
de conatu(L.)	非帯気音化 (ロックウッド・永野)
de-aspiration	非帯気音化 (ロックウッド・永野)
declension, déclinaison(Fr.), Deklination(G), declinatio(L)	曲用 (高津・基礎) 変化 (水谷) 名詞変化 (池田) 名詞変化 (田中・松平入門) 曲用 (風間) 転尾 (田中秀) (曲用, 格変化: 「変化」という語は言語の時間的・歴史的推移に即して用いるほうがよい) (ギロー・有田) 曲用 (古川) 名詞変化 (田中・松平文法) 曲用 (高津印欧)

A-declension	第一曲用, A- 曲用 (高津文法)
declinatio prima(L.)	第一曲用 (古川)
declinatio secunda(L.)	第二曲用 (古川)
declinatio tertia(L.)	第三曲用 (古川)
defective verb	欠如動詞 (ロックウッド・永野) 不完全動詞 (田中・松平入門)
definite	限定的 (池田)
degré bref(Fr.)	短階梯 (ギロー・有田) 弱階梯 (ギロー・有田)
degré plein(Fr.)	盈階梯 (マルティネ・神山) (母音が e あるいは o の形で見られる場合、今日ではこの用語はあまり用いない。下記のように本来的な母音は e であるから、この母音を持つ場合を「正常階梯」あるいは e 階梯、これと交替する母音 o を示す場合を o 階梯 (あるいはドイツ語だとしばしば <i>Abtönung</i> (G)「変色」と称する。)(マルティネ・神山)
degré réduit(Fr.)	低減階梯 (マルティネ・神山) 母音の痕跡が残っている場合 (マルティネ・神山)
degré zéro(Fr.)	ゼロ階梯 (マルティネ・神山) 母音が失われた場合
degré(Fr.)	母音交替の階梯 (高津印欧) 階梯 (ロックウッド・永野) 階梯、度 (ギロー・有田)
Dehnstufe(G)	延長階梯 (高津印欧)
Dehnung(G)	延長 (高津印欧)
deliberative	考慮を表す (高津・基礎) 慎重さ (田中・松平文法)
deliberative subjunctive	思案・熟慮を表わす (水谷)
demonstrative adjective	指示形容詞 (田中秀)
demonstrative noun	指示代名詞 (田中秀)
dental, dentales(L)	歯音 (田中秀) 歯音 (高津印欧) 歯音 (アモロス) 歯音 (田中・松平文法)
deponens medium(L.)	歯音 (古川) 歯音 (池田)
deponens passivum(L.)	中間型 (古川)
deponent verb	受動型 (古川)
determinative compounds, Determinative Komposita(G)	異相動詞, 形式所相動詞 (ロックウッド・永野) 欠如動詞 (河底) 形式所相動詞 (田中秀) 能相欠如動詞 (田中・松平入門) 能動態欠如動詞 (池田)
diachronique(Fr.)	限定合成語 (高津印欧) 限定合成語 (高津・基礎) 限定合成語 (高津文法)
diaeresis(L.), διαίρεσις	通時的 (ギロー・有田)
diathesis(L.)	複母音の分離 (田中・松平文法)
diminutiva(L.)	態 (高津印欧)
diphthong, diphtongus(L), δίφθογγος	縮小辞 (高津・基礎) 縮小形 (高津文法)
direct discourse	二重母音 (高津・基礎) 二重母音 (田中秀) 二重母音 (高津文法) 二重母音 (風間) 二重母音 (古川) 複母音 (田中・松平文法)
direct reflexive	直接説話 (田中秀)
disjonction(Fr.)	直接再帰 (高津文法)
disjunctive	分離 (ギロー・有田)
dissimilation, dissimilatio(L)	分離 (高津文法)
distributa(L)	異化作用 (ロックウッド・永野) 異化作用 (アモロス) 音韻上の異化作用 (田中・松平文法)
distributive	配分数詞 (高津印欧)
double accusative	配分 (高津文法)
double consonants	二重対格 (高津文法)
Dreisilbengesetz(G)	二重子音 (田中秀)
dual, duel(Fr.), dualis(L)	三音節の法則 (田中・松平文法)
	両数 (高津・基礎) 両数 (高津印欧) 両数 (高津文法) 両数 (水谷) 両数 (古川) 両数または双数 (風間) 双数 (ギロー・有田) 双数 (池田) 双数 (田中・松平入門) 双数 (田中・松平文法) 双数 (田中利) 双数 (アモロス) 雙数 (田中秀)

dubitative	自分ひとりでは決断のつかない迷い（田中・松平文法）
dynamic middle	その動作が動作者自身の能力にて行なわれるものであることを表わすもの（高津文法）
déictique(Fr)	対象指示語（マルティネ・神山）
démonstratif(Fr)	指示代名詞（マルティネ・神山）
déponent(Fr)	異相動詞（マルティネ・神山）
désactualiser(Fr.)	非現実化する（ギロー・有田）
désidératif(Fr), desiderativum(L)	願望形（マルティネ・神山）願望形（高津印欧）願望法（ギロー・有田）（願望を表し意味上「意志を表す接続法」に近い。ただしギリシア語に関する限り <i>désidératif</i> は希求法や接続法と並ぶ一つの法（形態）として存在するわけではない）（ギロー・有田）
désinence(Fr)	曲折語尾（高津印欧）
désinences casuelles(Fr)	格語尾（高津印欧）
e muet(Fr)	無音の e（マルティネ・神山）
élargissement(Fr)	拡張子（マルティネ・神山）
elision, elisio(L), ἐκθλιψις	省音（田中・松平入門）省音（田中・松平文法）母音省略（古川）省音（アモロス）省音（田中利）母音省略（水谷）省音（先行母音の省略）（河底）語末の短母音が次の母音で始まる語の前で脱落すること（高津・基礎）語末の母音が次の母音で始まる語の前で脱落すること（高津文法）
empiric perfect	一般的な事情を述べる（高津文法）
enclitic, enclitica(L)	後倚辞（田中・松平入門）後倚辞（田中・松平文法）後倚辞（池田）後倚辞（田中利）後倚辞（アモロス）前接辞（水谷）前接語（風間）前接辞（古川）アクセントのない形（高津印欧）前にある語に依存するもの（高津・基礎）
end rhyme	脚韻（風間）
énoncé(Fr)	陳述（マルティネ・神山）
entité(Fr)	存在（マルティネ・神山）
entreaty	歎願（田中秀）
epicoenum(L.)	一定の男性または女性の文法上の性がありながら、自然の性に従って他の性のものにも用いうるもの（高津文法）
épidéictique(Fr.)	指示的な（ギロー・有田）
epistolary aorist	書翰体アオリスト（高津文法）
ergatif(Fr)	能格（マルティネ・神山）
Ersatzdehnung(G)	代償延長（高津印欧）
état de fait(Fr)	終了した行為から生まれた状態（マルティネ・神山）
ethical dative, datif éthique(Fr.)	心情の与格（ギロー・有田）
dativus ethicus(L.)	
euphonie(Fr.)	音便（ギロー・有田）
eventualis(L.)	現実的予想を示す条件文（アモロス）
éventualité(Fr.)	実現可能性（ギロー・有田）不測の可能性、偶発性、事柄が起こりうる可能性（ギロー・有田）
évolution(Fr)	発達（マルティネ・神山）
exclamation	感歎的語句（田中秀）
exhortation	勸励（田中秀）
explicatif(Fr.)	説明的（ギロー・有田）
external accusative	外的対格（高津・基礎）外的対格（高津文法）他動詞の直接目的語（田中秀）
feminine, femininum(L)	女性（水谷）女性（田中・松平入門）女性（田中秀）女性（田中利）女性（アモロス）女性（古川）女性（田中・松平文法）
figura etymologica(L.)	動詞の語幹と同じ語幹から作られた名詞を繰り返す（高津文法）
figura paranomasia(L.)	動詞の語幹と同じ語幹から作られた名詞を繰り返す（高津文法）
final clause	副詞的目的句（田中秀）
final sentence	目的文（池田）
finite	定形（高津・基礎）

finite forms	定形 (高津文法)
first aorist	第一アオリスト (水谷)
flexion(Fr.), flexio(L)	活用 (田中・松平文法) 曲折または屈折 (ギロー・有田)
Flexionsendung(G)	曲折語尾 (高津印欧)
forme figée(Fr.)	凝結形 (ギロー・有田)
forme langagière(Fr)	まとまった言語表現 (マルティネ・神山)
forme nue(Fr)	裸形態 (マルティネ・神山)
formes non-personnelles(Fr.)	非・人称形 (ギロー・有田) (人称形 (= 定動詞) 以外の形態の総称)
fricative(Fr)	摩擦音 (マルティネ・神山)
fundamental grade	強または基礎階梯 (高津印欧)
fusion	母音融合 (河底)
future less vivid condition	未来の実現性が「低い」条件 (池田)
future more vivid condition	未来の実現性が「かなり高い」条件 (池田) 未来の実現性が「ごく高い」条件 (池田)
future perfect, futurum perfecti(L.)	未来完了 (高津・基礎) 未来完了 (高津文法) 未来完了 (池田) 未来完了 (田中・松平入門) 未来完了 (田中秀) 未来完了 (田中利) 未来完了 (古川)
future, futurum(L.)	未来 (ロックウッド・永野) 未来 (古川) 未来 (田中・松平文法) 未来 (高津・基礎) 未来 (高津文法) 未来 (池田) 未来 (田中・松平入門) 未来 (田中秀) 未来 (田中利)
futurum atticum(L.)	アッティカ式未来 (高津文法)
futurum contractum(L.)	融合未来 (高津文法)
futurum exactum(L.)	完了未来 (高津文法) 未来完了 (田中・松平文法)
futurum gnomicum(L.)	一般的な事柄を将来の確かな見込みとして語るのに用いられる (田中・松平文法)
gamma nasale(L.)	鼻音のガンマ (アモロス) 鼻音のガンマ (田中・松平文法) 鼻音の γ (池田)
gender, genera, Genus(G), genre(Fr)	文法的性 (ロックウッド・永野) 性 (水谷) 性 (池田) 性 (田中・松平入門) 性 (田中利) 性 (高津印欧) 性 (田中秀) 性 (アモロス) 性 (田中・松平文法) 性 (ギロー・有田) 性 (古川) 性 (高津文法)
genera verbi(L.)	相 (田中・松平文法)
general condition (present・past)	「現在・過去」に関する一般的な条件 (池田)
genetivus adnominalis, attributivus	名詞にかかる属格 (高津文法) 名詞にかかる属格 (高津印欧)
genetivus casus(L), genitive	属格 (風間)
genetivus comparationis(L.)	比較に用いられる (の属格) (高津・基礎) 比較の属格 (高津文法)
genetivus exclamativus(L.)	感嘆の属格 (田中・松平文法)
genetivus explicativus(L.)	説明の属格 (田中・松平文法)
genetivus objectivus(L.)	客語的属格 (田中・松平文法)
genetivus possessivus, possessionis(L.)	所有 (高津文法) 所有 (の属格) (高津・基礎) 所属を示す属格 (田中・松平文法)
genetivus pretii(L.)	値段を示す属格 (田中・松平文法)
genetivus qualitatis(L.)	性質を示す属格 (田中・松平文法)
genetivus subjectivus(L.)	主語的属格 (田中・松平文法)
génitif adnominal(Fr.)	名詞付加的属格 (ギロー・有田)
génitif partitif(Fr.), genetivus parititivus(L.)	部分属格 (ギロー・有田) 部分に分かたれる全体を示す属格 (田中・松平文法) 部分属格 (高津印欧) 部分を表す (の属格) (高津・基礎) 部分属格 (高津文法)
genitive abosolute, génitif absolu(Fr.), genetivus absolutus(L)	属格の分詞構文 (河底) 独立属格句 (ギロー・有田) 属格を用いるもの (水谷) 独立属格 (古川) 分詞の属格の独立用法 (池田) 分詞が属格で現われる場合 (田中・松平入門) 属格別句 (田中秀)
genitive of material or contents, genetivus materiae(L.)	材料または内容 (高津文法) 材料または内容 (の属格) (高津・基礎) 素材を示す属格 (田中・松平文法)
genitive of measure, genetivus mensurae(L.)	数量を表す (の属格) (高津・基礎) 数量を表わす (高津文法)

genitive of separation	分離の属格（水谷）
genitive, genitivus(L), genetivus(L)	属格（ロックウッド・永野）属格（高津・基礎）属格（水谷）属格（池田）属格（田中・松平入門）属格（田中秀）属格（田中利）属格（アモロス）属格（古川）属格（高津印欧）属格（高津文法）属格（田中・松平文法）通性（田中・松平文法）
genus commune(L.)	
gnomic aorist	箴言的アオリスト（高津文法）格言のアオリスト（水谷）
grade	母音交替の階梯（高津印欧）階梯（ロックウッド・永野）
gradus(L.)	（形容詞の）級（古川）
gradus comparativus(L.)	比較級（古川）
gradus positivus(L.)	原級（古川）
gradus superlativus(L.)	最上級（古川）
grammatical gender	文法的性（田中秀）
graphic construction	引用文の中の法と時制は普通直接話法と同じ（池田）
grave, grave accent, gravis(L.), προσφδιά βαρεῖα	重アクセント（池田）重アクセント（田中・松平入門）重（水谷）
Grundsprache(G)	共通基語, 祖語（高津印欧）
Grundstufe(G)	強または基礎階梯（高津印欧）
gutturals, gutturales(L)	中・後口蓋音（高津印欧）喉音（田中・松平文法）顎音（高津・基礎）顎音（高津文法）喉音（アモロス）
heteroclitica(L)	異語幹曲折（高津印欧）異語幹曲用（マルティネ・神山）異語幹曲折（高津・基礎）
hiatus(L.)	母音連続（アモロス）ヒアートゥス（母音衝突）（河底）母音連続（古川）母音連続（水谷）母音連続（田中・松平入門）母音連続（田中・松平文法）母音連続（田中秀）母音連続（ギロー・有田）
hors-syntaxe(Fr)	統語関係の枠外（マルティネ・神山）
hortatory subjunctive	提案・要請を表わす（水谷）
hypotaxis(L.)	従属（風間）一方が他方に従属関係にあつて結合される場合（高津・基礎）二つ以上の文が対等ではなしに、一方が他方の文の構成分子である場合（高津文法）従属（田中・松平文法）
hétéroclite(Fr.)	異系の（ギロー・有田）
Hochstufe(G)	強または基礎階梯（高津印欧）
idiome(Fr)	諸方言（マルティネ・神山）
imperative mood	命令法（田中秀）
imperative, impératif(Fr), imerativus(L), προστακτική	命令法（風間）命令法（マルティネ・神山）命令法（ロックウッド・永野）命令法（高津・基礎）命令法（水谷）命令法（池田）命令法（田中・松平入門）命令法（田中秀）命令法（田中利）命令法（高津文法）命令法（高津印欧）命令法（古川）命令法（田中・松平文法）
imperfect, imperfectum(L)	不完了（ロックウッド・永野）不完了〔過去〕（高津・基礎）不完了過去（高津文法）未完了過去（池田）未完了過去（田中・松平入門）不完了過去（田中秀）未完了過去（田中利）不完了（高津印欧）不完了、未完了（風間）未完了過去（田中・松平文法）
imperfectum de conatu(L.)	企図の過去形（田中・松平文法）
impersonnel(Fr)	非人称形（マルティネ・神山）
inceptive aorist	その状態を始める行為を表す（田中秀）
inchoative, inceptiva(L.)	開始動詞（高津・基礎）
indeclinabilia(L.)	不変化詞（高津・基礎）不変化詞（高津文法）
indefinite	不定（池田）
indefinite pronoun	不定代名詞（田中秀）
indicative, indicativus (modus) (L), ἰστικῆ	直説法（ロックウッド・永野）直説法（高津・基礎）直説法（水谷）直説法（池田）直説法（田中・松平入門）直説法（田中秀）直説法（田中利）直説法（高津文法）直説法（風間）直説法（高津印欧）直説法（古川）直説法（田中・松平文法）

indirect discourse	間接説話 (田中秀)
indirect reflexion	間接再帰 (高津・基礎) 間接再帰 (高津文法) 間接再帰 (高津文法)
indirect speech, indirect discourse	間接話法 (池田)
indéfini(Fr.)	不定詞 (ギロー・有田)
infinitif absolu(Fr.), infinitivus(L.) absolutus(L.)	独立不定形 (ギロー・有田) 文中の他の要素と関係を持たない構造で用いられる不定形 (高津文法) 不定法の独立的使用 (田中・松平文法)
infinitif historique(Fr.)	歴史的な不定形 (ギロー・有田)
infinitive, infinitivus(L), ἀπαρέμφοτος	不定詞 (ロックウッド・永野) 不定形 (高津・基礎) 不定形 (高津文法) 不定法 (池田) 不定法 (田中・松平入門) 不定法 (田中秀) 不定詞 (田中利) 動詞の不定形 (高津印欧) 不定形 (高津印欧) 不定法 (風間) 不定詞 (古川) 不定形 (高津・基礎) 不定法 (田中・松平文法) 不定法 (高津文法)
infinitivus cum nominativo(L.)	主動詞の主語と同一のとき (高津文法)
infinitivus imperativus(L.)	命令不定法 (田中・松平文法)
infinitivus limitativus(L.)	限定する不定法 (田中・松平文法)
infinitus(L.)	不定の (田中・松平文法)
infix(L.)	挿入 (高津・基礎)
infixed pronoun	語中に挿入される人称代名詞 (マルティネ・神山)
inflectional language	屈折言語 (池田)
inflexion	曲折 (高津・基礎) 曲折 (高津文法) 屈折 (風間) 屈折 (池田)
inflexional ending	曲折語尾 (高津印欧)
inner object	内的目的 (高津印欧)
instrumental dative	具格の与格 (池田)
instrumental, instrumental(Fr), instrumentalis(L)	具格 (マルティネ・神山) 具格 (ギロー・有田) 具格 (ギロー・有田) 具格 (ロックウッド・永野) 具格 (高津・基礎) 具格 (池田) 具格 (風間) 具格 (高津印欧) 具格 (古川) 具格 (高津文法) 具格 (田中・松平文法)
intensif(Fr.)	強意的 (ギロー・有田)
intensive pronoun	強意代名詞 (田中秀)
intensivum(L)	強意動詞
internal accusative	内的対格 (高津・基礎) 内的対格 (高津文法)
interpellation(Fr.)	呼びかけ (ギロー・有田)
interrogative pronoun	疑問代名詞 (田中秀)
intransitive	自動詞 (高津・基礎)
intransitivum(L)	自動 (高津印欧)
iota adscript, iota adscriptum(L.)	並記のイオータ (田中・松平入門) 並記のイオータ (田中・松平文法) 横に並べて表記されるイオータ (水谷) 並記イオータ (河底) 並べ書きのイオータ (古川) 横に書き加える (イオータ) (高津・基礎) 横に書き加える (イオータ) (高津文法) 横書きの ι (池田)
iota subscript, iota subscriptum(L.)	下に小さく書き添えられるイオータ (水谷) 下記イオータ (河底) 下書きのイオータ (古川) 下に書く (イオータ) (高津・基礎) 下に書く (イオータ) (高津文法) 下書きの ι (池田) 下書きのイオータ (田中・松平入門) 下書きのイオータ (田中・松平文法)
irrealis(L.)	非現実を示す条件文 (アモロス) 事実と反する, 非現実的な (田中・松平文法)
iter. (Fr)	反復相 (マルティネ・神山)
iterativus	繰り返される出来事の想定 (田中・松平文法)
juxtapositif(Fr.)	並置的 (ギロー・有田)
Kasus(G)	格 (高津印欧)
Kasusendungen(G)	格語尾 (高津印欧)
Kopulative Komposita(G)	並列合成語 (高津印欧)
labial, labiales(L)	唇音 (田中秀) 唇音 (高津印欧) 唇音 (アモロス) 唇音 (田中・松平文法) 唇音 (古川) 唇音 (池田)
labio-vélaire(Fr.), labio-velares(L)	唇軟口蓋音 (ギロー・有田) 唇・後口蓋音 (高津印欧)

language harmony	言語対観書（ロックウッド・永野）
langue commune(Fr)	共通基語, 祖語（高津印欧）
laryngales(Fr), laryngales(L)	喉音（マルティネ・神山）喉音（高津印欧）
latif(Fr.)	移動の方向と目標を示す対格（ギロー・有田）
Lautverschiebung(G)	音韻推移（高津印欧）
law of palatals	口蓋音の法則（ロックウッド・永野）
lengthened grade	延長階梯（ロックウッド・永野）延長階梯（高津印欧）
lengthening	延長（高津印欧）
less vivid future condition	実現の可能性の少ない未来の假定（水谷）
liquids, liquida, liquidae(L.)	流音（古川）流音（アモロス）流音（高津印欧）流音（田中・松平文法） 流音（池田）流音（田中秀）
litotes(L.)	間接肯定法（古川）否定によって否定された語と反対の意味を強調する（高津文法）
locatif(Fr)	所格（マルティネ・神山）所格、於格（ギロー・有田）
locative dative	地格の与格（池田）
locative, locativus(L)	位格, 地格（田中・松平文法）位置格（ロックウッド・永野）於格（高津・基礎）地格（池田）於格または処格（風間）於格（高津印欧）於格（古川）於格（高津文法）場所を表わす格（高津文法）
long by nature, φύσει μακρά	性質によって長い（池田）自然長音（河底）
long by position, θέσει μακρά	位置によって長い（池田）位置長音（河底）
lénition(Fr)	緩音化（マルティネ・神山）
l' indo-européen commun(Fr), proto-Indo-European	印欧祖語（マルティネ・神山）
masculine, masculinum(L.)	男性（水谷）男性（田中・松平入門）男性（田中秀）男性（田中利）男性（アモロス）男性（古川）男性（田中・松平文法）
media tantum(L.)	中間態にのみ用いられるもの（高津文法）
media, mediae(L.)	有声音（古川）有声音（アモロス）有声音（田中・松平文法）
medio-passivum(L)	中間受動態（高津印欧）
metathesis quantitatis(L.)	母音長短の置換（田中・松平文法）
metrum(L), metre, meter	韻律（風間）
middle deponent	中動型の能動態欠如動詞（池田）
middle deponent	中動型能相欠如動詞（田中・松平入門）
middle, moyen(Fr), medium(L), μεσότης	中間態（高津印欧）中間態（古川）中動相（田中・松平文法）中間（ロックウッド・永野）中間態（高津・基礎）中動相（水谷）中動相（田中利）中動態（池田）中動相（田中・松平入門）中相（田中秀）中動相（マルティネ・神山）
modalité(Fr.)	モダリテ（ギロー・有田）[◎「法性」「法範疇」「様相」などとしても何のことか分からない。「法」が定動詞の形態であるのに対して、「法」によって表現される言者の心的態度を指す語である。しかしいわゆる「心的態度」は動詞の法によってのみ表現されるわけではない。たとえばフランス語で「もうやめろ！」は Assez! 「もう十分」という副詞だけで表現することも出来るから、命令や要求を表すのに命令「法」という動詞の形態は必ずしも必要でない。◎法（定動詞の形態）によって表現されるモダリテを、具体的にどう区分し規定すべきかは面倒な問題で、たとえば、直説法が表わすのは現実そのものではなく、立言者の観点、態度である。「現実性の法」のような用語は以上を念頭において理解すべきであろう。]不定「法」（ギロー・有田）
mode infinitif(Fr.)	「人称」法（ギロー・有田）
mode peronnel(Fr.)	可能法（ギロー・有田）
mode potentiel(Fr.)	人称法（マルティネ・神山）
modes personnels(Fr)	直説法以外の法（高津・基礎）直説法以外の法（高津文法）
modi obliqui(L.)	可能法（ギロー・有田）
Möglichkeitsform(G)	

momentary	瞬時的な (池田)
mood, modes(Fr), modus, modi(L), ἐγκλισις	語法 (田中秀) 法 (田中・松平文法) 法 (高津印欧) 法 (風間) 法 (マルティネ・神山) 法 (水谷) 法 (池田) 法 (田中・松平入門) 法 (田中利) 法 (高津・基礎) 法 (高津文法)
mood-suffix	法接尾辞 (水谷) 法接尾辞 (田中・松平入門)
mora(L.)	単位 (高津文法)
more vivid future condition	実現可能な未来の仮定 (水谷)
morphology, morphologie(Fr)	形態論 (高津文法) 形態論 (高津・基礎) 形態論 (ギロー・有田)
mother tongue	母体言語 (ロックウッド・永野)
movable consonants	附加子音 (田中・松平文法)
multiplicativa(L)	倍数詞 (高津印欧) 倍数詞 (高津・基礎)
murmur	つぶやき声 (マルティネ・神山)
muta, mutae(L.)	閉鎖音 (古川) 黙音 (アモロス) 黙音 (田中・松平文法) 黙音 (田中秀)
mutated	転位した (高津・基礎) 転位した (高津文法)
nasales(L.)	鼻音 (アモロス) 鼻音 (田中・松平文法) 鼻音 (古川) 鼻音 (池田)
negatives	否定詞 (田中秀)
neuter, neutrum(L.)	中性 (水谷) 中性 (田中・松平入門) 中性 (田中秀) 中性 (田中利) 中性 (アモロス) 中性 (古川) 中性 (田中・松平文法)
nom d' action(Fr)	行為名詞 (マルティネ・神山)
nom d' auteur(Fr)	現出者名詞 (マルティネ・神山)
nom d' état(Fr)	状態名詞 (マルティネ・神山)
nomen actionis(L.)	動詞についてその動作を抽象名詞化するもの (高津・基礎) 動詞についてその動作を抽象名詞化するもの (高津文法)
nomen agentis(L.)	動詞についてその動作を行なう者をあらわすもの (高津・基礎) 動詞についてその動作を行なう者をあらわすもの (高津文法)
nomen appellativum(L)	普通名詞 (風間)
nomen proprium(L)	固有名詞 (風間)
nomina actionis(L.)	抽象名詞 (高津文法) 動作を示す名詞 (田中・松平文法)
nomina actionis(L), rei actae(L)	事柄 (高津印欧)
Nominalsatz(G)	名詞文 (高津印欧)
nominal sentence	名詞文 (高津文法)
nominal(Fr)	名詞類 (マルティネ・神山)
nominative, nominatif(Fr), nominativus(L), nominativus casus(L), ὀνομαστική	主格 (マルティネ・神山) 主格 (ロックウッド・永野) 主格 (高津・基礎) 主格 (水谷) 主格 (池田) 主格 (田中・松平入門) 主格 (田中秀) 主格 (田中利) 主格 (風間) 主格 (高津印欧) 主格 (アモロス) 主格 (古川) 主格 (田中・松平文法) 主格 (高津文法)
noms radicaux(Fr)	語根名詞 (高津印欧)
non verbal(Fr.)	無動詞型 (ギロー・有田)
normal grade	強または基礎階梯 (高津印欧)
normal grade	正常階梯 (ロックウッド・永野)
noun, nomen(L)	名詞 (高津印欧) 名詞 (風間)
number, numeri, Numerus(L), nombre(Fr)	数 (高津印欧) 数 (水谷) 数 (池田) 数 (田中・松平入門) 数 (田中利) 数 (田中秀) 数 (アモロス) 数 (田中・松平文法) 数 (風間) 数 (古川) 数 (田中・松平文法) 数 (高津文法)
numeral adverb	数副詞 (高津・基礎) 数副詞 (高津文法) 数副詞 (水谷) 数詞的副詞 (田中秀)
numerals, numeralis, numeralia(L.)	数詞 (田中・松平文法) 数詞 (古川) 数詞 (田中秀)
objective genitive	(田中秀)
oblique case, obliquus(L), obliquus casus(L)	斜格 (田中・松平入門) 斜格 (風間) 傾斜の格、傾斜格 (ギロー・有田)
opposition(Fr.)	対立 (ギロー・有田)
optatif oblique(Fr.)	従属文の希求法 (ギロー・有田)

optative, optatif(Fr), optativus(L), εὐκτική	願望法（田中秀）願望法または希求法（風間）希求法（マルティネ・神山）希求法（ギロー・有田）希求法（ロックウッド・永野）希求法（高津・基礎）希求法（水谷）希求法（池田）希求法（田中・松平入門）希求法（田中利）希求法（高津文法）希求法（高津印欧）希求法（古川）希求法（田中・松平文法）
optativus obliquus(L.)	間接話法の希求法（田中・松平文法）主文ではなくて、従属節において、主文の時称が第二次である場合に、接続法および直説法の動詞が希求法に変わる場合に使用される希求法（高津文法）
optativus potentialis(L.)	可能性を言い表す希求法（田中・松平文法）可能性の希求法（高津文法）
oratio obliqua(L.)	間接話法（古川）間接話文（高津・基礎）間接話法（高津文法）間接話法（田中・松平文法）
oratio recta(L.)	直接話法（古川）直接話文（高津・基礎）直接話法文（高津文法）直接話法（田中・松平文法）
ordinal, ordinalia(L.)	順序数詞（田中秀）序数詞（高津・基礎）序数詞（高津文法）序数詞（水谷）序数詞（高津印欧）序数詞（田中・松平文法）
oxytone, oxyton, oxytonon, oxyton(Fr.)	鋭調語（ギロー・有田）鋭調語（尾音節にアクセントがある語）（河底）ultimaに鋭アクセントをもつ語（水谷）鋭調語（池田）鋭調語（古川）鋭調語（田中利）
paenultima(L.), παραλύγουσα	最終音節の前の音節（古川）並音節（最後から二番目の音節）（河底）
palatal, palatal(Fr)	硬口蓋音（マルティネ・神山）顎音（田中秀）口蓋音（池田）
palatalization, palatalisation(Fr)	硬口蓋化（マルティネ・神山）口蓋化（高津印欧）
paratax, parataxe(Fr.), parataxis(L.)	並置構文（ギロー・有田）文を対等の関係において結合するもの（高津・基礎）文を対等の関係において結合するもの（高津文法）並立（田中・松平文法）並列（風間）
parent speech	共通基語, 祖語（高津印欧）
parent(Fr)	同系（高津印欧）
parfait(Fr)	完了（マルティネ・神山）
participium(L.)	分詞（古川）
paroxyton, paroxytonon, paroxytone	並調語（並音節にアクセントがある語）（河底）
participium absolutum(L.)	分詞の主格が主文の構造とは全く無関係に遊離しているもの（高津・基礎）主文の構造から遊離して、分詞の主語が主文の中の名詞や代名詞とまったく異なるもの（高津文法）分詞の独立的使用（田中・松平文法）
participium conjuntum(L.)	主語と性数格において一致する分詞（高津・基礎）分詞の非独立的使用（田中・松平文法）
participle, participia, participium(L)	分詞（風間）分詞（田中・松平文法）分詞（高津印欧）分詞（高津印欧）分詞（高津・基礎）分詞（高津・基礎）分詞（高津文法）分詞（池田）分詞（田中利）
particle, particula (orationis) (L.), particule(Fr)	小辞（水谷）助辞（田中秀）小辞（高津文法）小辞（高津印欧）小辞（古川）小辞（高津・基礎）小辞（高津文法）小辞（田中・松平文法）助詞（マルティネ・神山）小詞（ギロー・有田）
partitive genitive	部分の属格（池田）
passive deponent	受動型の能動態欠如動詞（池田）受動型能相欠如動詞（田中・松平入門）
passive, passivum(L)	受動相（水谷）受動相（田中・松平入門）受動相（田中利）所相（田中秀）受動態（ロックウッド・永野）受動態（高津・基礎）受動態（池田）受動（高津文法）受動態（高津印欧）受動態（古川）受動相（田中・松平文法）
past contrary-to-fact condition	過去の事実に反する仮定（水谷）
past general condition	過去の一般的な仮定（水谷）
patient(Fr)	受動主（マルティネ・神山）
patronymica(L.)	父称名詞（高津・基礎）父称名詞（高津文法）
penult	語末の前の音節（水谷）
perfect, perfectum(L)	完了（ロックウッド・永野）完了（高津・基礎）完了（高津文法）現在完了（池田）現在完了（田中・松平入門）完了過去（田中秀）現在完了（田中利）完了（風間）完了（高津印欧）完了（古川）現在完了（田中・松平文法）

perfectum intensivum(L.)	
perfectum secundum(L.)	第二完了 (田中・松平文法)
perispomenon(L.)	曲調語 (最後の音節に曲アクセントがある語) (河底),
persistent	保持する (水谷)
person, persona(L)	人称 (高津・基礎) 人称 (水谷) 人称 (池田) 人称 (田中・松平入門) 人称 (田中利) 人称 (風間) 人称 (古川) 人称 (高津文法) 人称 (田中・松平文法) 人称 (田中秀)
personal agent	行為者 (水谷)
personal ending	人称語尾 (池田) 人称語尾 (田中秀)
personal pronoun	人称代名詞 (田中秀)
personnel	人称代名詞 (マルティネ・神山)
philology	文献学 (マルティネ・神山)
phrase nominale(Fr)	名詞文 (高津印欧) 名詞文 (ギロー・有田)
phrase verbale(Fr)	動詞文 (高津印欧)
phrase verbale(Fr.)	動詞文 (ギロー・有田)
pluperfect, plus-que-parfait(Fr), plus-quam-perfectum(L), pluperfect または past perfect	過去完了 (ロックウッド・永野) 過去完了 (高津・基礎) 過去完了 (高津文法) 過去完了 (池田) 過去完了 (田中・松平入門) 過去完了 (風間) 過去完了 (田中・松平文法) 大過去 (マルティネ・神山) 全分過去 (田中秀) 過去完了 (田中利)
plural, pluralis(L)	複数 (古川) 複数 (アモロス) 複数 (池田) 複数 (田中・松平入門) 複数 (田中・松平文法) 複数 (田中秀) 複数 (田中利) 複数 (風間) 複数 (水谷) 集結点 (マルティネ・神山)
point d' incidence(Fr)	原級 (田中秀)
positive	所有代名詞 (マルティネ・神山)
possessif(Fr)	所有合成名詞 (高津・基礎) 所有合成名詞 (高津文法)
possessive compound	所有合成語 (高津印欧)
possessive compounds, Possessivkomposita(G)	
possessive pronoun	所有代名詞 (田中秀)
postpositive, postpositivum(L.)	後置詞 (田中利) 後置辞 (古川)
potential optative	可能性を示す希求法, 可能性の希求法 (田中・松平入門) 可能性の希求法 (池田) 可能願望法 (田中秀)
potentialis(L.)	仮定的 (可能的) な未来を示す条件文 (アモロス)
potentiel(Fr.)	可能 (法的) 的 (ギロー・有田)
praefixus(L.)	接頭辞 (古川)
praesens de conatu(L.)	企図の現在 (田中・松平文法)
praesens dramaticum(L.)	過去が目前のこゝのように語られる (田中・松平文法)
praesens historicum(L.)	歴史的現在 (田中・松平文法)
praesens pro futuro(L.)	未来を表わす現在 (高津文法)
praesens propheticum	予言として語られる場合の現在 (田中・松平文法)
praesens tabulare あるいは annalisticum(L.)	単に記録的に述べる (田中・松平文法)
praeverbum(L)	動詞の前に置かれる語 (高津印欧) 動詞の前につく前置詞 (高津文法)
predicate	述語 (池田)
predicate position	述語的位置 (池田)
predicative	従属的 (河底) 述語的、客語的 (高津・基礎) 述語的 (高津文法) 述語的 (水谷) 述語的 (田中・松平入門)
predicative position	客語の位置、客語的位置 (高津・基礎) 客語の位置 (高津文法)
prefix	接頭辞 (池田)
preposition, praepositio(L), πρόθεσις	前置詞 (高津印欧) 前置詞 (風間) 前置詞 (古川) 前置詞 (高津文法) 前置詞 (田中・松平文法) 前置詞 (池田) 前置詞 (田中秀)
present contrary-to-fact condition	現在の事実に対する仮定 (水谷)

present general condition	現在の一般的な仮定（水谷）
present stem	現在幹（田中・松平文法）
present, présent(Fr), praesens(L)	現在（古川）現在（田中・松平文法）現在（マルティネ・神山）現在（ロックウッド・永野）現在（高津・基礎）現在（高津文法）現在（池田）現在（田中・松平入門）現在（田中秀）現在（田中利）
prima persona(L.)	一人称（古川）
primary tense, primär(G)	本（または第一次）時称（河底）本時称（田中・松平入門）第一時称（田中秀）第一次時称（高津・基礎）本時制（池田）第一次語尾（ロックウッド・永野）人称語尾，第一次（高津印欧）
primitive language	共通基語，祖語（高津印欧）
principal parts	動詞の主要部分（田中・松平入門）（動詞の）主要部（田中秀）
proclisis(L.)	（高津・基礎）（高津文法）
proclitic, proclitica(L)	前倚辞（田中・松平入門）前倚辞（田中・松平文法）前倚辞（田中利）前倚辞（アモロス）後接辞（水谷）後接語（風間）後に続く語に依存するもの（高津・基礎）後接辞（古川）
procès(Fr.)	過程・事行・行為（ギロー・有田）（動詞の表すのは動作や行為に限らず、存在、現象、状態、その他すこぶる幅の広いものなので、これを一括してこの語で言い表している。）
prohibition	禁止（田中秀）
prohibitive subjunctive	禁止を表わす（水谷）
prohibitive, prohibitivus	禁止の接続法（高津文法）禁止的命令（田中・松平文法）
prolepsis(L.)	プロレプシス（田中・松平文法）
pronomén demonstrativum(L.)	指示代名詞（古川）指示代名詞（田中・松平文法）
pronomén indefinitum(L.)	不定代名詞（古川）不定代名詞（田中・松平文法）
pronomén intensitivum(L.)	強意代名詞（古川）強意代名詞（田中・松平文法）
pronomén interrogativum(L.)	疑問代名詞（古川）疑問代名詞（田中・松平文法）
pronomén personale(L.)	人称代名詞（古川）人称代名詞（田中・松平文法）
pronomén reflexivum(L.)	再帰代名詞（古川）再帰代名詞（田中・松平文法）
pronomén relativum(L.)	関係代名詞（古川）関係代名詞（田中・松平文法）
pronomina possessiva(L.)	所有代名詞（田中・松平文法）
pronomina reciproca(L.)	相互代名詞（田中・松平文法）
pronoun, pronomén, pronomina(L)	代名詞（風間）代名詞（高津文法）代名詞（田中・松平文法）
proparoxyton, proparoxytone, proparoxytonon(L.)	前調語（前音節にアクセントがある語），（河底）
proper noun	固有名詞（風間）
properispomenon(L.)	（高津文法）（水谷）（田中・松平文法）
proposition nominale(Fr)	名詞文（マルティネ・神山）
proposition(Fr)	文（マルティネ・神山）
prospective, anticipatory, eventual subjunctive	接続法，話者の主観的な期待を表わす（高津文法）
protasis(L.)	前提（文）（河底）条件を述べる部分（高津文法）前文（水谷）前文（田中・松平入門）条件（田中・松平文法）条件句（田中秀）
prothetic vowel	前置母音（高津印欧）
prédictat(Fr.)	述語、述部（ギロー・有田）
prédictatif(Fr.)	述語的（ギロー・有田）
prénasaliséeé(Fr)	前置鼻音化音（マルティネ・神山）
psilosis(L.)	spiritus asper が失われること（高津文法）
punctual	一点的な（池田）
qualitative ablaut	質的母音交替（ロックウッド・永野）
qualitative gradation	質的交替（高津文法）
qualitative vowel gradation	質的母音交替（高津印欧）
quantitative vowel gradation, Abstufung(G)	量的母音交替（高津印欧）量的交替（高津文法）

quantitative ablaut	量的母音交替 (ロックウッド・永野)
quantity, quantitas(L), ποσότης	音量 (河底) 音節の長短 (田中・松平文法) 音節の長短 (田中・松平入門) 音量 (田中秀)
question of appeal	自分のなすべきことを自らにあるいは他人に問う場合 (田中秀)
racine(Fr)	語根 (マルティネ・神山) 語根 (ギロー・有田) 語根 (ロックウッド・永野)
radical nu(Fr)	語根 (田中秀) 語根 (高津印欧) 語根 (高津印欧)
radical(Fr)	裸語基 (マルティネ・神山)
realis(L.)	語基 (マルティネ・神山) 語基 (ギロー・有田)
recessive	単純条件文 (アモロス) 事実的 (田中・松平文法)
reciprocal pronoun	後退的 (田中・松平入門) 後退的 (田中利)
rectus casus(L)	相互代名詞 (高津・基礎) 相互代名詞 (高津文法) 相互代名詞 (田中秀)
redondance(Fr)	真直の格 (風間)
redoublement attique(Fr.)	余剰性 (マルティネ・神山)
redoublement(Fr.)	アッティカ式加重音節 (ギロー・有田)
reduced grade	加重音節 (ギロー・有田)
Reduktionsstufe(G)	低減階梯 (高津印欧)
reduplicating syllable	低減階梯 (高津印欧)
reduplication, reduplicatio(L), ἀναδιπλασιασμός	重複音節 (ロックウッド・永野)
reflexive	音節重複 (ロックウッド・永野) 豊音 (古川) 豊音 (田中・松平文法) 重複 (高津・基礎) 名詞語頭音の重複 (高津印欧) 重複 (水谷) 重複 (水谷) 豊音 (池田) 豊音 (田中・松平入門) 重綴 (田中秀) 豊音 (田中利) 重複 (河底) 再帰的 (田中秀)
reflexive pronouns	再帰代名詞 (高津・基礎) 再帰代名詞 (田中秀)
Rektionskomposita(G)	限定合成語 (高津印欧) 限定合成語 (高津・基礎) 限定合成語 (高津文法)
related	同系 (高津印欧)
relative	関係詞 (池田)
relative pronoun	関係代名詞 (田中秀)
relative sentence	関係文 (池田)
representative	代表的 (高津文法)
resolution	長音を二つの短音へ変換すること (河底)
resultative perfect	動作の完了の結果を表わす完了 (高津文法)
rhotacism	r 音化 (ロックウッド・永野)
root	語根 (ロックウッド・永野) 語根 (田中秀) 語根 (高津印欧)
root nouns	語根名詞 (高津・基礎) 語根名詞 (高津印欧)
rough breathing	有気音 (アモロス) 有気記号 (古川) 有気音 (田中・松平文法)
rough breathing, δασεία	帯気 (河底)
récessivité(Fr.)	後退性 (ギロー・有田)
régulièrement(Fr)	規則的に (マルティネ・神山)
résultatif(Fr.)	結果相的 (ギロー・有田)
satellites grammaticaux(Fr)	文法的衛星 (マルティネ・神山)
schwa consonaticum(L)	喉音 (高津印欧)
second	二人称 (池田) 二人称 (田中秀)
second aorist	第二アオリスト (水谷)
second declensions, O-declensions	第二種転尾 (田中秀)
secondary tense	副 (または第2次) 時称 (河底) 副時称 (田中・松平入門) 第二時称 (田中秀) 第二次時称 (高津・基礎) 副時制 (池田) 第二次語尾 (ロックウッド・永野) 人称語尾, 第二次 (高津印欧)
secunda persona(L.)	二人称 (古川)
sekundär(G)	人称語尾, 第二次 (高津印欧)
semi-modal(Fr.)	半・法的な (ギロー・有田)

semivocales(L.)	有音（アモロス）
semivowels	半母音（田中秀）
sentence（池田）	文（池田）
sibilant, sibilans(L.)	シビラント（田中・松平文法）歯擦音（池田）
sifflante(Fr.)	スー音、歯擦音（マルティネ・神山）
sigmatic aorist	Sアオリスト, シグマつきのアオリスト（ロックウッド・永野）σ-アオリスト（高津文法）シグマ・アオリスト（水谷）第一アオリスト, シグマのアオリスト（田中・松平入門）
simple condition（present・past）	「現在・過去」に関する単純な条件（池田）
simplex(L.)	合成語でないもの（高津印欧）
singular, singularis(L.)	単数（田中・松平入門）単数（池田）単数（田中秀）単数（田中利）単数（風間）単数（アモロス）単数（古川）単数（田中・松平文法）単数（水谷）
smooth breathing, ψιλῆ	平息（河底）
sociatif(Fr.), sociativus(L.)	共格（ギロー・有田）《一緒に, 共に》を表わす用法（高津印欧）
sonant vocalique(Fr.)	母音 + sonant（例えば *ei）の弱階梯が母音的機能を有する（高津印欧）
sonant, sonante(Fr.)	成節的子音（ロックウッド・永野）
spirans(L.)	摩擦音（古川）
spirant, spirante(Fr.), spirantes(L.)	擦音（田中秀）
spiritus(L.)	氣息記号（古川）
spiritus asper(L.)	有気音（アモロス）有気記号（古川）有気音（田中・松平文法）
spiritus lenis(L.), smooth breathing	無気音（アモロス）無気音（田中・松平文法）無気記号（古川）（高津・基礎）（高津文法）
spurious diphthong	擬二重母音（高津・基礎）擬二重母音（高津文法）
Stammbildungssuffix(G)	語幹形成接尾辞（高津印欧）
Starkstufe(G)	強または基礎階梯（高津印欧）
stem vowel	語幹母音（ロックウッド・永野）幹母音（田中利）
stem, thème(Fr.)	語幹（高津・基礎）語幹（高津文法）語幹（田中秀）母音交替の幹（高津印欧）
stop verb	閉鎖音幹動詞（水谷）
stops, mutes	閉音（田中秀）黙音（池田）
strong aorist	強アオリスト（高津・基礎）第二あるいは強アオリスト（高津文法）
strong caesura	強切点（河底）
strong grade	強または基礎階梯（高津印欧）
Stufe(G)	母音交替の階梯（高津印欧）階梯（ロックウッド・永野）
subject, subjectum(L.)	主語（高津文法）主語（池田）
subjunctive, conjunctive, subjunctif(Fr.), subjunctivus(L.) または conjunctivus(L.), ὑποτακτική	接続法（水谷）接続法（田中・松平入門）接続法（田中秀）接続法（田中利）接続法（風間）接続法（池田）接続法（高津文法）接続法（高津印欧）
subjunctivus または conjunctivus (modus), subjunctif(Fr.)	接続（法）（ギロー・有田）
subjuntivus, conjuntivus(L.)	接続法（田中・松平文法）
substantive, substantif(Fr.), substantiva(L.)	実体詞（マルティネ・神山）実体詞（ギロー・有田）実体詞（高津印欧）名詞（田中・松平文法）名詞（ロックウッド・永野）実名詞（池田）実体詞（風間）名詞（高津文法）
substantivum, nomen(L.)	名詞（古川）
subtraction, ἀφαίρεσις	略音（後続母音の省略）（河底）
suffix	接尾辞（高津印欧）
superlative	優級（田中秀）
supplementary	意味を補完する, 補語としての（池田）
supplementary participle	補足的分詞（田中秀）
suppletion	或る文法の形態組織を他の語で補足すること（高津・基礎）補充（田中利）
suppléance, supplétivisme(Fr.)	補充法（ギロー・有田）

syllaba anceps	双音節 (河底)
syllabic augment	音節的オウグメント (河底) 音節的加音 (水谷) 音節的加音 (池田) 音節的加音 (田中・松平入門) 音節的加音 (田中利)
syllable	音節 (田中秀)
synchronique(Fr.)	共時的 (ギロー・有田)
syncopation, συγκοπή	切合 (河底) シンコペイション (子音の間にある弱母音が切除される現象) (河底)
syncretism, synchrétisme(Fr.), syncretismus(L)	混合 (高津・基礎) 混合 (高津文法) 機能併合 (ギロー・有田) 格の融合 (高津印欧)
synizesis, συνίζησις	連音 (河底) 繋音 (田中・松平文法) 二つの音節を形成している相接する母音と母音 (あるいは二重母音が) 一音節に発音されること (高津文法)
syntagme(Fr.)	統合、連辞 (ギロー・有田) (意味的にまとまりのある語群)
Syntax, syntaxis	語の用法と文の構成 (高津・基礎) 統語論 (風間) 文章法 (田中・松平文法)
synthetical language	総合的言語 (田中秀)
system, système(Fr.)	組織 (風間) 組織 (ギロー・有田)
tempora(L.)	時称 (田中・松平文法)
tempora primaria(L.)	本時称 (田中・松平文法)
tempora secundaria(L.)	副時称 (田中・松平文法)
temporal augment	時量的オウグメント (河底) 時量的加音 (水谷) 母音延長の加音 (池田) 時量的加音 (田中・松平入門) 時間的加音 (田中利)
temporal sentence	時間文 (池田)
tense stem	時制幹 (池田) 時称幹 (水谷)
tense suffix	時称接尾辞 (田中・松平入門) 時称接尾辞 (水谷)
tense, temps(Fr), tempus(L)	時制 (風間) 時制 (マルティネ・神山) 時称、時制、テンス (ギロー・有田) 時称 (高津文法) 時称 (水谷) 時制 (池田) 時称 (田中・松平入門) 時称 (田中利) 時称 (高津・基礎) 時称 (田中秀)
tenuis(L.)	無声音 (アモロス) 無声音 (田中・松平文法) 無声音 (古川)
tenuis aspirata(L.)	無声帯気音 (古川)
terminatif(Fr.)	終了相的 (ギロー・有田)
tertia persona(L.)	三人称 (古川)
tetrameter	4 双脚 (河底)
thematic aorist	ω- 活用アオリスト (高津文法)
thematic conjugation	ω- 活用 (高津・基礎)
thematic vowel	幹母音 (河底) 幹母音 (田中・松平文法) 語幹形成母音 (水谷)
thematic, thématique(Fr.)	母音語基 (マルティネ・神山) 語幹形成母音のある (ロックウッド・永野) 幹母音式 (ギロー・有田)
third	三人称 (池田) 三人称 (田中秀)
third declensions	第三種転尾 (田中秀)
thème(Fr)	語幹 (マルティネ・神山) 語幹 (ギロー・有田)
tmesis	(高津印欧) (高津文法) (池田)
ton(Fr.)	高低アクセント (ギロー・有田) 音調 (マルティネ・神山)
transitive, transitivum(L)	他動詞 (高津・基礎) 他動詞 (高津文法) 他動 (高津印欧)
transposition, μετάθεσις	位置交換 (河底)
trema	分離符 (古川)
trimeter	3 双脚 (河底)
ultima, λύγουσα	最終音節 (古川) 語末の音節 (水谷) 一語中の最後の音節 (田中・松平文法) 尾音節 (語の最後の音節) (河底)
universalis	普遍的または反復的想定を示す条件文 (アモロス)
Ursprache(G)	共通基語、祖語 (高津印欧)
valeur(Fr)	意味、価値 (マルティネ・神山)
verb stem, verb-stem	動詞幹 (田中・松平入門) 動詞幹 (田中・松平文法) 動詞幹 (田中利) 動詞幹 (池田) 動詞幹 (水谷)

verb, verbum(L)	動詞（風間）動詞（古川）動詞（高津文法）
verba affectus, verba affectuum	感情を示す動詞（田中・松平文法）感情の動詞（田中・松平文法）
verba contracta, impure	語幹が α, ε, o に終り約音するもの（田中・松平文法）
verba curandi	気遣い、はからう意味の動詞（田中・松平文法）
verba deponentia	能相欠如動詞（アモロス）
verba dicendi et sentiendi	“言う” “思う” の動詞（田中・松平文法）
verba liquida	流・鼻音動詞（高津・基礎）流・鼻音動詞（高津文法）流音幹（ μ, ν を含む）のもの（田中・松平文法）
verba muta	閉鎖子音動詞（高津・基礎）閉鎖子音動詞（高津文法）黙音幹のもの（田中・松平文法）
verba pura	語幹が i または u ($\alpha i, \varepsilon i, \alpha u, \varepsilon u, ou$) に終わるもの（田中・松平文法）
verba vocalia	母音動詞（高津・基礎）母音動詞（高津文法）
verbal	準動詞（池田）
verbal adjective, adjectif verbal(Fr.), adjectiva verbalia, adjectivum verbale	動詞的形容詞（田中・松平入門）動詞的形容詞（田中・松平文法）動形容詞（高津・基礎）動形容詞（高津文法）動形容詞（田中利）動形容詞（池田）動形容詞（河底）動形容詞（ギロー・有田）動形容詞（古川）
verbal nouns	動詞的名詞（田中・松平文法）
Verbalsatz(G)	動詞文（高津印欧）
verbe contracte(Fr.), verba contracta, verbum contractum	母音融合動詞（高津・基礎）融合動詞（高津文法）縮約動詞（ギロー・有田）融合動詞（古川）
verbe pronominal(Fr.)	代名動詞（ギロー・有田）
verbum compositum	複合動詞（古川）複合動詞（田中・松平文法）
verbum deponens	異態動詞（古川）
verbum finitum(L)	定動詞（高津印欧）定動詞（高津文法）定動詞（田中秀）
verbum infinitum(L)	人称や数の限定を持たない動詞の一形態（田中・松平文法）
verbum simplex(L)	単純な動詞（田中・松平文法）
vernaculaire(Fr)	地方語（マルティネ・神山）
verwandt(G)	同系（高津印欧）
vivid construction	引用文の中の法と時制は普通直接話法と同じ（池田）
vocalis(L)	母音（風間）単母音（古川）
vocative, vocatif(Fr), vocativus (L.) casus(L), προσαγορευτική	呼格（ロックウッド・永野）呼格（高津・基礎）呼格（水谷）呼格（池田）呼格（田中・松平入門）呼格（田中秀）呼格（田中利）呼格（風間）呼格（高津印欧）呼格（アモロス）呼格（古川）呼格（田中・松平文法）呼格（高津文法）
voice, voix(Fr.), διάθεσις	態（ロックウッド・永野）相（水谷）態（池田）相（田中・松平入門）相（田中利）態（高津・基礎）相（田中秀）態（高津文法）相あるいは態（マルティネ・神山）
voix pronominale(Fr.)	代名態（ギロー・有田）
volitive	意志を表す（高津・基礎）
voluntary subjunctive	接続法、話者の意志を表わす（高津文法）
voluntative	意志を表わす（高津文法）
vowel	母音（風間）
vowel declension	母音曲用（高津・基礎）母音曲用（高津文法）
vowel gradation, Ablaut(G), alternance vocalique(Fr), apophonie(Fr)	母音転換（田中秀）母音交替（古川）母音交替（高津印欧）母音交替（高津文法）母音交替（田中・松平文法）母音交替（田中・松平入門）母音交替（高津・基礎）母音交替（風間）
vowels	母音（田中秀）
voyelle protétique(Fr)	前置母音（高津印欧）
vue d l'esprit(Fr)	仮定（マルティネ・神山）
vélaire(Fr), velaris(L)	軟口蓋音（マルティネ・神山）
vélarisation(Fr)	軟口蓋化（マルティネ・神山）
weak caesura	弱切点（河底）

weak grade, Schwachstufe(G), Tiefstufe(G)	弱階梯 (高津印欧)
Wurzel(G)	語根 (ロックウッド・永野) 語根 (田中秀) 語根 (高津印欧)
Wurzeldeterminativa(G)	語根を拡大する要素 (高津印欧)
Wurzelnomina(G)	語根名詞 (高津印欧)
zero-grade, Schwundstufe(G), Nullstufe(G)	零階梯 (高津印欧) ゼロ階梯 (ロックウッド・永野)
ἄηχα	無声音 (河底)
ἀόριστος	非限定 (ギロー・有田)
ἀκατάληκτα	無尾語 (単数主格の語尾に (s) 音がない語) (河底)
ἀναδιπλασιασμόν	重複幹 (河底)
ἀντιμεταχώρησις	時量交換 (河底)
ἀπαρέμφατος	非明示的 (ギロー・有田)
ἀπαρέμφατον	不定詞の用法 (河底)
ἀποβολαὶ συμφώνων	子音消去 (河底)
ἀποκοπή	除音 (河底)
ἀριθμητικά	数詞 (河底)
ἀσθενές	弱語幹 (河底)
ἀφωλόληκτα	黙音幹 (河底)
ἡ γενικὴ πτώσις	属格 (河底)
γράμματα	文字 (河底)
γραμμάτων ἐν ξυλλαβαῖς	文字の束ね、言葉に (勇士の楯に刻まれた言葉) Aisch. Sept. 468 (風間)
δασεῖα (音が響かないので無声音 ἄηχα と呼ばれる) (χ, θ, φ)	粗音 (河底)
διγενῆ	二性 (河底)
δικατάληκτα	二性語尾 (河底)
διμέτρον	二音律 (河底)
διπλόθεμα	複語幹, 複音幹 (河底)
διποδία	双脚 (河底)
ἐγκλισις	後倚辞 (河底)
ἐγκλιτικά	後倚辞 (河底)
ἐνρινόληκτα	鼻音幹 (河底)
ἐπιροήματα	副詞 (河底)
ἑξαμέτρον	六音律 (河底)
ἤχηρά	有声音 (河底)
ἰσχυρόν	強語幹 (河底)
καταληκτικά	有尾語 (単数主格の語尾に (s) 音がある語) (河底)
κλίσις	(傾き) = <i>declinatio</i>
λόγος	文章 (田中・松平文法)
μέσα (音が響くので有声音 ἤχηράと呼 ばれる) (γ, δ, β)	中音 (河底)
μέση φωνή	中動態 (河底)
μέτρον	音律 (河底)
μεταβολὴ ποιοτική	音質転化 (河底)
μετοχή	分詞の用法 (河底)
μονόθεμα	単語幹, 単音幹 (河底)
μονομέτρον	単音律 (河底)
μορφή	形 (高津文法)
v euphonique(Fr.), v éphelcystique(Fr.)	音便の v (ギロー・有田)
v movable	可動の v (ギロー・有田)
v ἐφελκυστικόν, movable v	v の添加 (田中・松平文法)

πάθη συμφώνων	子音変容（河底）
παραθετικά ἐπιθέτων	形容詞の比較（河底）
πενταμέτρον	五音律（河底）
περιττοσύλλαβα	異数音節語（河底）
πνεύματα	氣息記号（河底）
πούς	脚（河底）
πρόκλις	前倚辞（河底）
προθέσεις	前置詞（河底）
πτῶσις	骰子の投下（高津文法）
ῥήμα	動詞（河底）
σιγμόληκτα	シグマ幹（河底）
στοιχείον φωνήεν(Gr)	母音（風間）
συγχώνευσις	母音融合（河底）
συλαβισμός	音節法（河底）
συλλαβή	音節（河底）
συναίρεσις, contraction	融音, ほかに約音, 収縮（河底）
σύνδεσμοι	接続詞（河底）
τετραμέτρον	四音律（河底）
τριγενή	三性（河底）
τρικατάληκτα	三性語尾（河底）
τριμέτρον	三音律（河底）
ύγρόληκτα	流音幹（河底）
φωνήεντα	母音（河底）

- 1) 古川 晴風, 『ギリシア語四週間』, 大学書林, 東京, 1958 (古川)
- 2) 高津 春繁, 『ギリシア語文法』, 岩波書店, 東京, 1960 (高津文法)
- 3) 田中 秀央, 『初等ギリシア語文典』, 研究社出版, 東京, 1955 (田中秀)
- 4) 田中 美知太郎, 松平 千秋, 『ギリシア語文法』, 岩波書店, 東京, 1968 (田中・松平文法)
- 5) 田中 美知太郎, 松平 千秋, 『ギリシア語入門』, 岩波書店, 東京, 1951 (田中入門)
- 6) 高津 春繁, 『基礎ギリシア語文法 文法篇・読本篇』, 北星堂書店, 東京, 1951(1992) (高津基礎)
- 7) M. アモロス, 『ギリシア語の学び方』, 南窓社, 東京, 1985 (アモロス)
- 8) 池田 黎太郎, 『古典ギリシア語入門』, 白水社, 東京, 1998 (池田)
- 9) 田中 利光, 『新ギリシア語入門』, 大修館書店, 東京, 1994 (田中利)
- 10) 水谷 智洋, 『古典ギリシア語初歩』, 岩波書店, 東京, 1990 (水谷)
- 11) 河底 尚吾, 『ギリシア語入門』, 泰流社, 東京, 1997 (河底)
- 12) シャルル・ギロー (著) 有田 潤 (訳), 『ギリシア文法 (改訳新版)』, 文庫クセジュ, 白水社, 東京, 2003 (ギロー・有田)
- 13) W.B. ロックウッド (著) 永野 芳郎訳 『比較言語学入門』, 大修館書店, 東京, 1976 (ロックウッド・永野)
- 14) A. マルティネ (著) 神山 孝夫 (訳) 『「印欧人」のことば誌—比較言語学概説—』, ひつじ書房, 東京, 2003 (マルティネ・神山)
- 15) 高津 春繁, 印欧語比較文法, 岩波書店, 東京, 2005 (高津印欧)

訳者後書きと謝辞

本訳出を本学研究推進部の「研究成果報告」という形で出すに当たって、訳出の経緯などについて申し述べておきたいと思います。何故なら、訳出作業の全体についてはその全体の責任を「国家論研究」チームのメンバーである私水崎が負っておりますから訳出の学問上の責任も一重にこの私が当然のことながら負ってはおりますが、原著の翻訳の労を先ずもって最初に取られたのは学外の塚本浩介氏であるという事情があるからです。氏は、私がほぼ二十年前に本学総合研究所（当時）の主催で行いましたギリシア古典に関する公開講座に御参加下さり、その後その時にその講座に御参加下さった方々に諮って私が組織をしました「福岡西洋古典愛好会」にそのままメンバーとして残って下さり、この二十年ほどプラトンの原書を読み続けて来られたのでした。私ども上記愛好会のメンバーはそのギリシア語学習の経験から原書の持つ味わいを深く味読するのに有益な中級の優れた実践的文法書の我が国における不足を全員憾みに思っておりましたので、塚本氏の翻訳を土台にしつつこの五・六年に渡って、全員で翻訳の日本語としての通りのよさ・文法用語のこなれや穏当に関して公刊を期し検討を重ねて来たのでした。私の本学における研究活動も彼のプラトンを始めとしてアリストテレス・ホメロス・ヘーシオドスや三大悲劇作家たちその他の原著の正確な熟読にこそ待つべきものを思う時、そうした学外の方々の積極的な古典ギリシア語文法書の翻訳は、真実、貧しい私に対する力添えともなってくれたのでした。些か我田引水になるかもしれませんが、私どもの場合のように総合研究所（当時）の公開講座が学外の方々の持つ学問上の関心と私ども学内でそれを生業とする者の研究活動との間で共同の実を上げさせた例は、他にはないのではないかと自負するところです。そうしたことで本訳出は学外の方々の御協力を得つつその共同作業の中で一つの成果を得たものであることを、ここに記しておきたいと思います。

なお原著がフランス語で書かれているところから、私はまた私の畏友であり九州大学文学部フランス文学の教授の職を最後に退官した末松壽君に重ねて私どもの翻訳については全体に目を通して戴き、その高い学問上の識見からしての貴重な多くの指摘を頂戴致しました。私および私ども一同心より深く感謝と御礼とを申し上げます。

最後に、本訳出は先にも述べましたように全体に渡って先ずは私水崎が目を通して監修を致しましたが、それも一重に「福岡西洋古典愛好会」の皆様全員による長期に渡ってのディスカッションの上に立ってのことでもありますから会員全員の皆様の御名前を付記することが礼儀かと思っておりますので、以下に記させて戴きます。

故布村広治氏（氏は70数歳の御高齢にも拘らず、広汎なギリシア語の動詞活用表を隈無く点検する労を取って下さったりもされました。ここに慎んで御冥福をお祈り申し上げます）、亀井良雄氏、高尾昌之氏、塚本浩介氏、吉良ゆかり氏、清水ひとみ氏、安藤啓子氏、川原篤平氏、浜本裕美氏以上の方々です。

平成22年2月21日 朝

人文学部教授 水崎博明